教育學書解說

菊版二千余頁
分册十二册合本
定價金五圓
郵税金四拾八錢

教科書として參考書として受驗用として自修用として如何に本會解說が世を利し學界を稗益せしかは今更敢て喋々せざる所殊に教育學書の如きは既に各地師範學校教科用參考用として採用せられ未だ期年ならずして數版を重ぬるに至る是れ其材料を精選せると其叙述の平易流暢なると其批評の適確妥當なるとに歸因せずんばあらず世の此任に當る人希くば一本を供へ以て講學の資とせられよ其要目左の如し

第一
大瀨甚太郎君解說
シユライエルマツヘル氏 教育學
定價金五十錢
郵税金四錢

第二
熊谷五郎君解說
ヰルマン氏 教化學
定價金五十錢
郵税金六錢

第七
東基吉君解說
フレーベル氏 教育論
定價金四十錢
郵税金四錢

第八
吉田熊次君解說
ベルゲマン氏 社會的教育學及進化的倫理學
定價金六十錢
郵税金六錢

杉山富槌君解說
第三
モルガン氏 比較心理學
定價金四十錢
郵稅金四錢

福來友吉君解說
第四
ゼームス氏 心理學
定價金五十錢
郵稅金六錢

塚原政次君解說
第五
ルボン氏 民族心理學
定價金三十五錢
郵稅金四錢

松本孝次郎君解說
第六
ヘーチン氏 生理的心理學
定價金四十五錢
郵稅金四錢

塚原政次君解說
第九
スタウト氏 心理學
定價金五十錢
郵稅金六錢

中島泰藏君解說
第十
ヴント氏 心理學
定價金四十五錢
郵稅金四錢

雀部顯宜君解說
第十一
ラッド氏 心理學
定價金五十錢
郵稅金六錢

松本孝次郎君解說
第十二
バルドヰン氏 精神發育之社會的及進化的說明
定價金四十五錢
郵稅金四錢

心理學書解說

兒童心理學あり教育適用心理學あり普通心理學あり比較心理學あり精神病理學あり生理的心理學あり經驗的心理學あり實驗的心理學あり個人的心理學あり社會的心理學あり實にあらゆる學說は皆此中に藏めてもらさず而して詳密なる傳記あり適確なる批評あり叙述親切にして明確材料豐富にして多趣教育者も經世家も學者も母親も看過すべからざるは此書也

菊版二千余頁
分册十二册合本
定價金五圓
郵稅金四拾八錢

第一 サレー氏 兒童心理學
黑田定治君解說
定價金五十錢
郵稅金六錢

第二 リボー氏 感情及注意之心理
市川源三君解說
定價金四十五錢
郵稅金四錢

第七 キュルペ氏 心理學
市川源三君解說
定價金四十五錢
郵稅金四錢

第八 ビチー氏 人格變換論
速水滉君解說
定價金四十錢
郵稅金四錢

倫理學書解說

菊版二千餘頁
分册十二册
定價金五圓
郵税金四拾八錢

凡ての研究中倫理學程困難なるはなし是れ問題の複雜多樣なると學派の見る所千狀萬態なるを以てなり本會こゝに見る處あり上は希臘より下は現代に至るまで必讀不可缺もの十有二を撰び斯學專門の名士に請ひて詳密懇切に解說をなし以て世の須要に應ぜんとす蓋し本書の特徵とする所は學說の奧妙精緻なるは勿論著書の傳記及其學說の批評をも加へ殊に言文一致体を以て平易に流暢に叙述しあれば初學者と雖も趣味津々たるの間に蘊奧を叩くを得べし是れ本書の名を擅にする所以也

第一
中島德藏君解說
デユーイ氏 倫理學綱要
定價金五十錢
郵税金六錢

第二
綱島榮一郞君解說
スチーブン氏 倫理學
定價金四十五錢
郵税金四錢

第七
中島泰藏君解說
ミユステルベルヒ氏 道德之起原
定價金三十五錢
郵税金四錢

第八
蟹江義丸君解說
カント氏 倫理學
定價金四十五錢
郵税金四錢

育成會發行圖書目錄

特別月賦販賣法の設あり
詳細は貳錢郵券を添へて照會あれ

文學博士井上哲次郎君
文學士蟹江義丸君 合編

二十世紀劈頭の大出版といふも憚らず。本書は久しく湮滅して世に知られざりし日本倫理書類を蒐集して全部紙數五千餘頁の大冊、而も千金を投ずるも到底手に入れ難き道德上教育上貴重の祕藏書、七十餘種二百有餘卷を網羅したるものなり。

日本倫理彙編

全部十卷
定價金拾四圓
郵稅金拾六錢宛

陽明學派
三卷

中江藤樹 熊澤蕃山 三重松菴 三輪執齋 中根東里 佐藤一齋 大鹽中齋

古學派
三卷

山鹿素行 伊藤絅齋 伊藤東涯 荻生徂徠 太宰春臺 山縣周南 盧草拙

朱子學派
二卷

藤原惺窩 林羅山 室鳩巢 雨森芳洲 名和魯堂 大高坂芝山 山崎闇齋 佐藤直方

三宅尚齋 淺見絅齋 山縣大貳 稻葉默齋 會津正志 貝原益軒 尾藤二洲 賴杏坪

折衷學派
獨立學派
合二卷

細井平山 片山兼洲 井上金蛾 太田錦城 三浦梅園 帆足愚亭

明治三十四年十二月廿五日印刷
明治三十四年十二月三十日發行

全部定價（上製金拾四圓　並製金拾貳圓五拾錢）
第五卷定價（上製金壹圓五拾錢　並製金壹圓參拾五錢）

編纂者　井上哲次郎
　　　　蟹江義丸

發行者　石川榮司
東京市本鄕區森川町一番地

印刷者　佐久間衡治
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

發行所　育成會
東京市本鄕區森川町一番地

印刷所　株式會社秀英舍第一工場
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

訓幼字義跋

古學先生嘗著ニ語孟字義一。廻ニ伊洛之狂瀾一。疏ニ洙泗之正派一。標レ字立レ條。以便ニ研究一。然學者舊染不レ除。與ニ講求不レ精。往々不レ免ニ疑團一。故紹述先生繼レ志述レ事。重著ニ斯書一。而字義益以啓明。其以ニ國字一者。蓋不ニ啻欲レ易レ解耳一。欲レ使ニ夫世之少壯不レ力老大徒悲者。朝聞夕死而可也一歟。扶ニ翼世教一。黼ニ黻聖經一。至矣盡矣。苟熟玩有レ得焉。於ニ二書一。思過レ半。勿下以ニ國字易一レ講。而忽上レ焉。戊寅夏公英寓ニ都下一。先生令嗣東所君將ニ上レ梓公レ世。校正始レ業。使ニ英紹終ニ其功一。吁。如レ英者。豈敢校訂云乎。但喜ニ斯書啓ニ廸學者一。謹督ニ剞劂之事ニ云爾。

寶曆九年秋八月

後生西周　樋口公英謹識

訓幼字義卷之八終

滅論をあらはして、形骸滅する時は神も滅ふといふこと、段々詳に論せり、先儒の説にも、形はほろふといへとも此理はほろひすと、又は人は天地の氣を受て人となり、形壞するときは、其元氣又元にかへると、張子のいはゆる、形潰反ㇾ原といふ説是なり、古今鬼神の説、大略かくの如し、然れとも聖人のことに、鬼神有無の説なし、しひて求むへきにあらさることとしるへし、

或曰、人の精神、死後には消滅してあとなきものならは、先祖をまつり宗廟を立るも無用の事にあらすや、何とそ寓在する所のしるしなくは、まつりてもかひなしと、曰しかなり、大抵學問に、受用あり、詮議あり、詮議して今日事行の利益になるは、すくに受用の學問なり、詮議をしおほせても、さして益のなきことあり、先鬼神といふことは、わか祖先父母一生の間孝行を盡して、其あまりを死後にをして、存生の時のごとくに相かはらす事ることなり、存生の內、他行をすれは其よしをつけ、歸れはかへるといふ、其心を以て、死後には、出必告反必面と、相かはらすつとむるなり、他事これに准してしるへし、然るによりて、論語に夫子祭祀の誠をしるして、祭如ㇾ在、祭ㇾ神如二神在一とあり、中庸に事ㇾ死如ㇾ事ㇾ生、事ㇾ亡如ㇾ事ㇾ存といへり、然れはたゝ其左右にいますかごとく其上に在かごとく、誠敬を盡して事へきのみ、もしふかく思惟工夫をめくらし、鬼神は知ことなきものときはまりたるときに、宗廟祭祀の禮をやめ、簠簋籩豆のかさりを祭るましきや、これ必無の事なり、然らは鬼神の有無を極めんとするは、畢竟詮議はかりの事にて、無益のことなり、聖賢の旨又明らかなり、然れは禮記祭義の篇等にいへるさまさまあやしきことは、聖人のこと葉にあらさる事しるへし、

三代の聖人、専ら鬼神をたふとみて、卜筮夢兆のこと、往々經典の中にあらはる、禮周に卜人筮人の職あり、詩經に大人占夢の名ありて、専ら其事をつかさとる、そのかみ崇仰の樣おもふへし、然れとも人事をかまはすして、ひとへに鬼神にまかするにあらす、書經洪範七稽疑に、卜筮の事をくわしくいへり、汝則從、龜從、筮從、卿士從、庶民從、是之謂二大同一と、君民上下同しく同心して、卜筮ともに吉にかなふは、十分の事なれは、是を大同といふ、其後に龜筮人事の異同品々を擧て、あとに龜筮共違二于人一、用レ靜吉、用レ作凶といへり、是にて聖人卜筮を用ひたまふの意しるへし、人とは君民卿士等をいふ、君民卿士等同心なきとは、龜筮ともに吉を告といへとも、一概に卜にまかするにあらす、靜なる事に用ひては吉、動に用ひてはあしゝと、出陣征役等のとは、人か同意せされは、卜筮の吉にしたかはさるとなり、これにて諸事をしるへし、大抵經書に鬼神と有ところ、卜筮に就ていふと多し、中庸に質二諸鬼神一而無レ疑知レ天也とあり、易の文言に、與二鬼神一同二其吉凶一とあり、其たゝすといひ吉凶を同しくすといふにてしるへし、

家語に、子貢問二夫子一曰、死者有レ知乎、將無レ知乎、子曰、吾欲レ言二死之有一レ知、將恐孝子順孫、妨レ生以送レ死、吾欲レ言二死之無一レ知、將恐不孝之子、棄二其親一而不レ葬、賜欲レ知二死者有レ知與一レ無レ知、非二今之急一、後自知レ之と、家語にあらはるゝ事は、こと〱くは信用しかたきとなり、然れとも此語にて、聖人の旨また明らかなり、人死して後精神魂魄はありやなしやといふと、人々疑難を生し工夫を費し、樣々に料簡をするとなり、然れとも竟に一決するとなく、古今未了のとなり、梁の范鎭神

子路問レ事ニ鬼神一の章にて、夫子鬼神に事の旨しるへし、先儒の説には、死生人鬼、一にして二、二にして一、もと一理なり、然れとも事をしるには、それ〳〵の次第ありて、等をこへてはしり得られす、子路の問は、もとより大切なる問なれとも、いまた人に事るの道をしらされは、鬼神に事るの道はしるへからす、いまた生するゆへんの理をしらされは、死するゆへんの理をしらすと、夫子の其わけをのたまはさるは、ふかく其大切なることを示したまふといへり、それゆへ本文を、未レ能レ事レ人、焉能事レ鬼、未レ知レ生、焉能知レ死と訓する事なり、此説甚あたらす、古義の意は左にあらす、子路のいらさる問をせらるゝとしりそけたまふとなり、鬼神に事りて感應ありやと問る、さしあたりて人に事る事さへ得つとめさるに、何として鬼神に事る事をよくすへきやと、然らは人死してはいかゝと問るゝに、今日人生の道さへしらぬに、何として死後の事をしるへきやとのたまふとなり、それゆへ本文を、未レ能レ事レ人、焉能事レ鬼、未レ知レ生、焉能知レ死と訓する事なり、生の字に、出生の生あり、生存の生あり、集註の意なれは、人の出生するの理をいふ、易の原レ始要レ終の意なり、古義の意なれは、人の存生の内のつとめをいふ、中庸にいはゆる、事レ死知レ事レ生といふの生のごとし、一生の内人々のつとむへき事をいふ、大抵聖人鬼神のことに於ては、たゝ今日當然の人事をよくつとめよとのたまひて、鬼神の有無感應のことは、少しも其説なし人々の當務に力をつくして茫昧不レ可レ知の境に心を費しまとはさるやうに示したまふこと、言辭の表に彷彿たり、又嘗て曰、丘之禱也久矣と、其意又しかり、

しへを示して、民の非義にまとはさるやうにをしへたまふ、樊遲子路等にこたへたまふ章にてしるへし、宰我の以レ予觀ニ於夫子一賢ニ於堯舜一遠矣といへる、是其一端なり、古より禮儀風俗世々に變革ありて、百年二百年の間、さま〴〵のかはりあり、況や堯舜より此かた、春秋の間に至るまて、二千年におよへり、其間治亂盛衰まとに一かたならす、洪範の一篇は、大禹以來傳り來りて、周の初に、箕子武王の爲にこれをさつけたまふ、三代の間、天下を治る大法式なり、然れとも論孟の敎とは同しからさる事多し、其差別ある事をしらすはあるへからす、

樊遲の知を問に、夫子是に答へて、務ニ民之義一、敬ニ鬼神一而遠レ之とのたまへり、民之義とは、人道の當然をいふ、今日人倫のつとむへき事に力をいれすして、猥に鬼神になれ瀆れて、惑ひをいたすへからすとなり、たとへは平生我身の養生をせすして、鬼神にいのりて長命ならんことをねかふともかなふへきや、是にて智といふとしるへし、然れとも少しもかろ〴〵しくすへきにあらす、故に敬而遠レ之とのたまへり、遠といふことを、いやなるものをさけのけるやうにおもふはあやまりなり、愚なるものは、天地神明をわか親類眷屬の生たる人に物をたのむかことく、わけもなき事をひたすらにいのり求む、かくせさるを遠といふなり、夫子之遠ニ其子一といふによりてしるへし、子には惑ひやすきによりて、是を遠といふ、いとひさくるにあらす、鬼神もなれやすきによりて遠といふ、さけすつるにあらす、唐人の詩に、漢の文帝賈誼に鬼神の事を問たまふことを賦して、可レ憐夜半虚前レ席、不レ問ニ蒼生一問ニ鬼神一といへり、此意なり、

もとるゝ物なしといふ事なり、もし然らは本文のこと葉、體ㇾ物而無ㇾ所ㇾ遺といふへくして、不ㇾ可ㇾ遺とはいふへからす、其故に古註に可ㇾ猶ㇾ所也と註せり、漢儒の註にも、所によりて遷就ありと見へたり、此二説ともにあたらす、先人中庸發揮云々、體ㇾ物といふは、物にかたとるこゝろにて、木に刻み書にかきて、そのかたちをうつす事なり、遺といふは、遺書遺物の遺のごとく、あとにのこしをくことなり、體ㇾ物不ㇾ可ㇾ遺といふは、上の二句と都合して、下の使㆘天下之人㆒齊明盛服以承㆗祭祀㆖、洋々乎如ㇾ在㆓其上㆒、如ㇾ在㆓其左右㆒といふに言つけて、其不思議なることをいへり、目に見へ耳に聞へ、其かたちをうつして、あとへものこさるゝものならは、人の畏敬奉承するもとはりなり、然るに目に見んとすれとも見へす、耳に聞んとすれともきこへす、物にうつして其形をつたへんとすれとも、のこすへきやうもなし、然るに天下の人、洋々として其上に在かごとく、其左右に在かごとくなるは、鬼神の德の盛なるにあらすやと、聲色形體なくして、人のうやまひ貴ふことをかくいへり、大學にいはゆる、視而不ㇾ見、聽而不ㇾ聞、食而不ㇾ知㆓其味㆒と、語勢同しきことなり、畢竟章句の意は、天下無㆓性外之物㆒と、一の理字を主張せられたるゆへに、鬼神といふも理のかへ名にて、陰陽の靈をいふとなり、其わけ前に詳にす、ましへ見るへし、

三代の時、風俗淳朴にして、天道を尊ひ鬼神をうやまひて、祭祀宗廟の禮はなはた繁重なり、わけて殷の世になりて、其風いよ〳〵盛んにて、弊多きことあり、故に殷人尙ㇾ鬼といへり、夫子にいたりて、天道をうやまひ鬼神を敬すること、三代聖王の道にことならすといへとも、專ら人道に就てを

の本體をさしていふ、朱子陰之靈陽之靈といふ說、陰陽をはなれす、もとより儒者の論なる事、語孟字義にこれをあらはせり、然とも是によりて風雨霜露の變を鬼神といふとは、あたらさることなり、

或曰、いにしへより、日月星辰をまつり、雨師風伯をまつり、寒をむかへ暑をむかふるに、皆祭祀の禮あり、然れは造化の迹陰陽の靈たること、もとよりうたかふへきにあらす、曰しかり、人といふものは、天地日月のめくみをかうふり、風雨寒暑の往來によりて、萬物を生々して、其やしなひをうく、其德をむくひて祭祀の禮あり、いはゆる禱㆓爾于上下神祇㆒と是なり、是のみならす、門戶中霤行竈を祀るも、日々に其やしなひをうくるによりて、其德を報んためにこれを祭る、今時の人、宮室器服の細まて、其用をうくる物は、歲のはしめに是を祭る、これまた人情なり、祭祀の禮のよりておこるところなり、門戶中霤等は一定の物にて、さのみ往來屈伸のわけは見へす、然れはいはゆる鬼神と云は、其德を報ひ是を祭り、如㆑在の誠をつくすのみ、

或曰、中庸に鬼神の德を稱して、體㆑物而不㆑可㆑遺といへり、然れは天地日月より門戶中霤にいたるまて、鬼神といふものこれか體たらすといふことなし、何そ往來屈伸のわけ見へすといはん、曰この章の旨甚說あり、古註鄭氏曰、體猶㆑生也、可猶㆑所也、不㆑有㆑所㆑遺、言㆓萬物無㆑不㆘以㆓鬼神之氣㆒生㆖也、これは萬物の生、皆鬼神の氣によりて生すといふ事にて、氣を以ていふ、章句云、是其爲㆓物之體㆒而物所㆑不㆑遺也と、是は理を以ていふ、其わけかはれとも、萬物の生皆鬼神によりて、一物

無レ迹矣と、造化の妙を、その往來する所にて見るといふとなり、張子曰、鬼神者二氣之良能也と、朱子曰、良能是說ニ往來屈伸一乃理之自然、非レ有ニ安排措置一、二氣則陰陽、良能自其靈處と、陰陽二氣の往來して不思議なる所をいふなり、朱子曰、以ニ二氣一言、則鬼者陰之靈也、神者陽之靈也と、是は程張の說によりて、其說を全備せられたるものなり、何れも中庸章句に詳なり、大全に朱公遷の說に云、自ニ造化一而言、是專言レ之也、主ニ乎祭祀一而言、是偏言レ之也と、仁に偏言專言の說あるによりて、鬼神の内にも、天地人物に通していふと、偏に祭祀の上に就ていふとのちかひあることをかくいへり、宋朝の儒先鬼神の說あらましかくのごとし、

程張の說、陰陽造化の靈を鬼神といへる事、容易には心得かたきことなり、予よつておもふに、是は佛者三世輪廻の說にあたりて、かくいへるなるへし、佛者は人の識といふものは、陰陽造化によらすして、各人所レ修の善惡によつて、或は物となり或は人となりて、三世十界の間に流轉すと說り、是を破らんかために、鬼神は陰陽造化のあとに見へたる所なりと、かく其說を立られたると見へたり、程子曰、佛氏不レ識ニ陰陽晝夜死生古今一、安得レ謂ニ形而上與ニ聖人一同上乎と、葉釆の註に、天命之流行、二氣之屈伸、釋氏推爲ニ輪廻一と、此外張子の說にも、所々此おもむき見へたり、然れは程張の說も、もはら祭祀の鬼神に就ていへり、日月晝夜の往來、草木の榮枯、人身の呼吸までを鬼神といふは、是も陰陽にはなることはなけれとも、聖賢の書に是を鬼神といふと見へす、季路問レ事ニ鬼神一、敬ニ鬼神一而遠レ之、中庸に鬼神之爲レ德其盛矣乎といふの類、何れも天神地祇人鬼祭祀に主たる所

周禮大宗伯の職に曰、掌レ建二邦之天神地示人鬼之禮一といへり、示は祇と同し、禮記の祭統の篇に、云、山林川谷丘陵、能出レ雲爲二風雨一見二怪物一皆曰レ神、又云、人死曰レ鬼と、鬼神のわけ是にてしるへし、又鬼歸也神伸也といふ説ありて、音をかりて義を取、陰陽屈伸の義に取り、鬼神ともに人の上に就ていふ、又祭法に、去レ壇爲レ鬼といふ説あり、曾祖より以上分限によつて、壇を作りて祭らさるを鬼といふと、然れは、壇を作りて祭は神といふとしるへし、又庶士庶人無レ廟、死曰レ鬼と、是は世數にかきらす、位いやしきゆへ、廟をたてさるによりて鬼といふと、然れは貴き人は神といふとしるへし、中庸發揮に、貴曰レ神賤曰レ鬼と、此等によつて註せり、又禮記に躰魄を鬼といふ、魂氣を神といふ説あり、これらのこと、何れも禮記に具なり、考ふへし、

論語に、非二其鬼一而祭レ之諂也といふ註に、鄭玄の説に、人神曰レ鬼といへり、祭レ神如二神在一といふに、孔安國の説に、謂レ祭二百神一といへり、これらの所は、必しも禮記の説にかゝはるへきにあらす、すへて文字は、本義をくはしく尋ぬれは、それ〳〵の差別あれとも、後には通用してわかたさること多し、又二字取あはせては、其わけかはれとも、別々にいふときは通用する事あり、古註疏に、分則異發則通といふ事あり、鬼神のわけも、此例にてをししるへし、

程子曰、鬼神者、天地之功用、而造化之迹也と、近思錄にこれをのす、又易傳には、造化之迹也とあり、こと葉に詳畧あれとも、そのおもむきは同しき事なり、朱子其説を述て曰、風雨霜露日月晝夜、此鬼神之迹也、又曰、造化之妙、不レ可二得而見一、於二其氣之往來屈伸者一足二以見一レ之、微二鬼神一則造化

政事風俗、道德學問の旨とは各別の事になりて、聖人の道は、纔に六經の間に殘れり、しかのみならす、漢の時に黄帝老子の道盛に行れ、魏晋以來佛法世にはひこりて、聖人の道彌蔽塞して明らかならす、世の儒者、訓詁を治る人あり、詞章を治る人ありて、聖人の道を唱へて世に傳ふる人は、董仲舒韓退之等數人にすきす、漢の時より人の性を定りて仁義禮智信とたて、又は性を甚貴ひて、嗜欲にくらまさゞるやうにすといへり、そののち宋朝になりて、周程張朱の諸大儒世におこりて、虛無寂滅の説をしりぞけ、訓詁詞章の陋をあらひ、六經を祖述して、聖人の道を發明せり、其功まことに大なり、然れとも仁義禮智の德を、人心未發の本體と見られたるによりて、理氣體用の説おこり、古の聖賢ことによりて敎をほとこすの旨、また明らかならす、くはしきことは、近比古今學變にあらはしをけり、事ながきことなれは、あらましを此所にしるしをくことかくのごとし、

鬼神　凡十三則

鬼神といふは、天地山川宗廟五祀の靈、其德を報て祭る所の主なり、天子は天地の主たるゆへに天地を祭る、諸侯は封内の山川を祭る、大夫は宗廟を祭る、士庶人は五祀を祭る、何もそれ〴〵の分限の祭るへきものなり、其內先祖の靈は、天子より士庶人まて、世數の品あれとも、通して是を祭る、これ恩のまさにまつるへきものなり、又古より聖帝明王賢人君子の世に功德ある人は、先祖にあらされとも是をまつる、何も是を正祀といふ、此たくひにあらさるは淫祀といふ、聖賢の所レ謂鬼神此となり、後世鬼神の説まち〳〵なり、

めしなり、氣質を變化するは、學問の專要たる事明らかなり、然れとも人の才量の同しからさる事たとへは草木のまち〳〵に別たるかとく、松は以て竹となるへからす、茄は以て瓜となるへからす、生付をためて、諸人たゝ一樣になるといふとは、理はきこへたれとも、事實に於て其しるしを見かたし、夫子の敎のこる事もあるましく、諸弟子の服膺おろかもあるましきに、游夏は游夏の材を成し、宰我子貢は宰我子貢の材をなして、同しく冉牛閔子顏淵のことくにはなりたまはす、然れは面々の才量氣質によりて、其うへに偏をため弊を補て、中道にすゝむへきなり、氣質の性を變して、本然の性に立かへるといふは、其說一方にきこへ侍るにや、

唐虞よりこのかた今日におよひて、四千餘年におよへり、其あいた、世々の政俗かはりあるによりて、學問の風義もまた一樣ならす、今時の人、たゝに後世の學問を、すくに唐虞三代の學とおもふはあやまりなり、まつ唐虞の時は、世淳に風厚く、聖人の德を以て天下の上に立たまふ、天を敬し民をあはれみ、禮樂敎化を先として、天下を撫安するを急務とす、周衰へ春秋戰國の世に及ふまて、王道すたれたえたりといへとも、上世の遺風は取失はす、夫子衰周に挺生して、堯舜禹湯文武周公の道をとなへて、人倫の大法萬世に明らかなり、孟子にいたりて、夫子の道を祖述して、これを後世に傳へ、堯舜周孔の大宗嫡派たり、周公よりかみつかたは、上にゐまして位にあり、周公より下つかたは、下にゐまして位を得すと、韓子すてにこれをいへり、時に治亂のたかひあり、世に盛衰のしなありといへとも、道德の旨はかわるとなし、秦漢このかた、先王の道たへすたれて、世間の

をすれは、それほとのよき人といふへし、或人おもへらく、何事にても、日來うたかはしきこと、ふと覺悟することあり、然れは修爲の上、一旦豁然といふことあるましきやと、まことにことはりなり、一旦豁然といふことを、それほとのことにおもへは、何のさまたけもなきことなり、いにしへ所レ謂先覺後覺といふ、もとより此わけなり、一旦豁然といふは、其樣のかるきことにあらす、これを夢覺關といひて、いまた此關をこへされは、凡人たることをのかれす、すてに此關をこゆれは、忽聖域にいたると、究竟の所なり、これは禪子投機契悟の旨に落て、所レ謂一超直入ニ如來地一といふものなり、尤聖人の旨にあらす。發レ憤忘レ食、樂以忘レ憂、不レ知ニ老之將一レ至云爾と、聖人なをいつをかきりともなく務めたまふ、凡人たるもの、いつを悟明の日と期すへきや、

又學問をして氣質を變化するといふ說あり、又は氣質は變化せられぬといふ說あり、これは何れもことはりありて、一概にいひかたきことなり、先人の生付は、剛柔緩急さま〲の品ありて、もとより一かたならさるものなり、學問は其生付の偏をなをして、緩なるものはこれをはけまし、急なるものはこれをゆるめて、中道にみちひくための學問なり、たゝ生付たるまゝに、成あひにせんとならは、學問せさるにしかす、然るによりて、子路の性は、人を兼てすゝみ過たる生付なれは、これを退け、冉求の性は、退て物とひかゆる生付なれは、これをすゝめたまふ、夫子人材を甄陶するの手段あきらかに論語にあらはる、これより下つかた、董安于は生付遲緩なるによりて、弓の絃を帶ひ、西門豹は生付偏急なるによりて、をしかわを帶と、これを合て韋弦といふ、今古の美談同した

わきまへ、人の人たる道をもしるときは、凡民にあらす、其上に又聖賢の言に通し、古今の事をも覺悟して、世の利益になるほとなれは、其しるしいよ〳〵廣大なり、これよりかみつかた、賢人君子の境にいたるといへとも、もはや是にて行つまりて、すゝむへき所なきにあらす、知レ之者不レ如二好レ之者一、好レ之者不レ如二樂レ之者一とのたまへり、よき上にも段々に其しなあることなり、大抵世間に、日來かつて學問せさる人、下地なけれは其益なしとおもひ、みつから我身を見すて、人も其志をはゝむものなり、左にはあらす、下地なきにも、すこし務れは、それほとの利益あり、故にのたまふ、譬如二平地一、雖レ覆二一簣一、進吾往也と、又は數十年學問を務たる人は、此上はつとめてもかはることなしとおもひ、人ももはやいらざるものとあざけることあり、左にはあらす、ますこしの所にて退屈してやむときは、それほとの不足なり、故にのたまふ、譬如レ爲レ山、未レ成一簣、止は吾止也と、常々にはけむことは、學如レ不レ及、猶恐レ失レ之といへり、又逝者如レ斯夫、不レ舍二晝夜一と、水のなかるゝやうにたえまなくつとむへしとなり、聖人人に學をすゝめたまふこと、まことにかきりなし、

後世の學問に、一旦豁然といふことあり、工夫積累の上、此境にいたれは、衆物の表裡精粗に通達して、聖人の地位にいたり、いまた其境にいたらされは、たとへ孝弟忠信の行ありて、いかほと見事なる節義ありといへとも、たとへは夢中に善言をいふかとく、畢竟凡人たることをのかれす、先儒の說に、漢唐の人醉生夢死といへる、これによりてなり、これを聖賢の言に考ふれは、上に論する通りにて、一生のあいた、いつ成熟して手をたつといふ日はなし、又一文不通の凡人にては、よきこと

杯水車薪の論、何もこれか爲なり、故云、仁亦在ニ乎熟一之而已矣と、恒といふ事は、何事にても、始終かはらす、いつもヿくに勤るヿをいふ、人のやまひは、一旦事をはけむといへとも、あとにはおこたりて廢却するヿあり、人にましはるにも、はしめにははしきりに出會て、後には疎遠になる、これを無レ恒といふ、易に六十四卦を立て、恒の德を一卦とす、夫子これを取て、不レ恒ニ其德一、或承ニ之羞一といへり、亡而爲レ有、虛而爲レ盈、約而爲レ泰、難乎有レ恒矣と、恒といふをしへかくのヿし、

忍といふヿは、何事にてもかんにんするヿをいふ、人たるものは、嗜欲にたへす、血氣にたへす、艱難にたへす、横逆にたへすして、事をあやまる事まち〳〵なり、動レ心忍レ性といふは、人欲にたへ忍ひて、ほしいまゝにせさる事なり、又人の我に無理をいひかけ、ふとゝき慮外をするに、それをたゞしとかむるもヿわりなれとも、一朝の忿に其身をわすれて其親におよふの惑ひたるヿをわきまへてかんにんす、故に書經君陳篇に、必有レ忍其乃有レ濟、有レ容德乃大といへり、又論語に、夫子云、小不レ忍亂ニ大謀一と、忍のをしへたる事かくのヿし、是等のヿは、さのみ學の字にあつかるヿにあらされとも、又わきて條目を立へきにもおよはされは、此ところに書あらはしをくヿしかり、

學問といふヿは、すこし務むれはすこしの驗あり、大に務れは大にしるしあり、一生のあいだ、いつをかきりとやむヿなきものなり、まづ一文不通のもの、文字をしりて消息をかくほどなれは、それほどの利益あり、其上に文字讀をして、三綱五常のわけをしれは、智識も出來て、事のすし道を

賢㆑々易㆑色より、君父につかへ朋友にましはりてこゝろを盡せは、學問をすると同事といへり、その外曾子の三省、又は夫子一貫の旨をのへて門弟子に對へたまふに、忠恕而已矣といへり、夫子顔子子路言㆑志の章、並に子貢のいはゆる我不㆑欲㆓人之加㆓諸我㆒也、吾亦欲㆑無㆑加㆓諸人㆒といへるの類、何も世に交り人につきあふ上にて、人に麁末をせす、人のためになることを專一にして、是を常々學問として、吾身をかへり見いましめらるゝこと分明なり、然る上は、上としては人をあはれみ、下として使やすく、子弟としては孝弟忠信のしるしあると決定なり、學者の常々に心を付へき事なり、

仁義禮智ならひに中庸等のこと、何も前にあらはしをく通り、再ひあくるにおよはす、此外また一といふ事あり、恒といふことあり、忍といふことあり、聖賢の書所々に其說あり、一といふとは、何事にても、ことを專一に勤て、心を多岐にわかたさる事をいふ、書經商書咸有一德の篇に、惟尹躬曁湯、咸有㆓一德㆒と、又云、德惟一、動罔㆑不㆑吉、德二三、動罔㆑不㆑凶、又云、終始惟一、時乃日新、又云、惟和惟一と、此篇は古文尙書なれとも、禮記の内にも引用てあり、もとよりうたかふへきにあらす、論語に夫子曾子子貢の爲に、吾道一以貫㆑之と示したまふ、又攻㆓乎異端㆒斯害也已とのたまふは、一貫の章と反對して、表裡の說なり、何事にても多岐におもむくをいましめたまふ、是を合せて君子多乎哉不㆑多也といへり、一といふをしへかくのことし、其上何ほとよき事にても、よほと積累して、專一になけれは、其しるしはなきものなり、孟子に所㆑謂一暴十寒のたとへ、一齊衆楚の戒、

非邪正もとより一决ならさることなり、この方に見識料簡なくてはよみかたし、一巻の書をあらはし、一篇の文章を作りて、後世にのこすに、其中にはそこはくことはりなる事のあるましきや、然れとも其大脉理のたかひありやなきやを辨へすして、みたりに信用するときは、道にたかひ事をあやまる事多し、人倫日用を目當とするときは、聖人の道の正道たることしるへく、聖人の言行を規矩とするときは、諸子百家の是非得失をわきまふへし、さなくて我一人の料簡にては、見識も立かたし、論語に君子學レ道則愛レ人、小人學レ道則易レ使也とあり、孟子に其君用レ之則安富尊榮、其子弟從レ之則孝弟忠信とあり、聖賢の書に、學問のしるしをのたまふことかくのことし、然れとも後世學問をする人それほとにしるしを見かたし、人によりては、博奕飲酒驕吝殘刻なること、一文不通の人におとり、又世上に固より學問せさる人に、平生の業作おさまりて、事のさはきよろしき人あり、學問をすれは、文字に通し古今をしるほとの利益はあれとも、それほとのしるしを見かたく、或は人からを損するとて、學問をきらふ人あり、これは最初より目あてたかひたるゆへなり、博奕飲酒して父母の養ひをかへり見さるは、世上無學の人不肖の子弟に、家なみ多きことなり、學問するに似合ぬとはいふへし、學問の罪にはあらす、たゝ學問をすれは、我身かちになりて、己をあげて人をさみし、善をそねみて惡をあばく、是よりさま〱のあしきこと出來りて、人におしくおもはる、これ又學ふものゝあやまちなり、學問の罪にあらす、いにしへ所レ謂學問といふを尋るに、夫子顏子好レ學の實を稱して、不レ遷レ怒不レ貳レ過とのたまへり、これ身をおさめ人を愛するのことなり、又子夏のこと葉を觀るに、

ず、學問に志す人、是を基として勤めすんばあるへからさるによりて、夫子の敎を括りて、かくしるしおけることなり、夫子に博文約禮の敎へあり、博文はもとより文なり、禮は人の身をおさむる規矩準繩にて、百行の法をとるものなり、孟子に知ㇾ言養ㇾ氣の說あり、知ㇾ言といふは、衆言の是非得失を辨へ知る、すなはち博文のことなり、我善養二吾浩然之氣一といふは、仁義のしるしおのつから愧おそるゝ事なきことなり、是又行也、然れば聖賢のをしへまち／＼なれども、學問と修爲とにつゝまりたること決焉たり、

いにしへ學問に經史の別なし、たゞ文を學と云、書を讀といふ、漢よりこのかた、いにしへ聖賢の言葉を經として、後世の記錄を史と名つけ、經史の名わかる、其のち老子莊子の類、子と稱する書多くあり、佛經をも通して諸子といふ、また諸儒の詩文著述あまたあり、是を集といふ、是をあはせて、經史子集といひて、唐の時四の文庫ををき、四庫の書と云是なり、經はもとより學問の本、史は古今の變をあらはし、禮儀文章の品、風俗の善惡、人物の賢否、悉そなはらすといふことなし、其大綱領大治亂、事の損益沿革をしらすはあるへからす、然れとも人々の好尙同しからす、又は最初入門のしこみによりて、經を專らにおさむるものは、史鑑を讀を無益の故事を覺ゆるやうにおもひ、史書を好むものは、經をきはむる事を固陋にもどかしくおもふ、其やうにては、一偏に落て學問の本末備らす、全才といふへからす、漢唐このかた、明經秀才と學者を二科にわかつ、古よりもあはせて得かたきにや、子集の中には、一通りの所存を述へ、面々の道とすることをあらはして、是

をうつすが如し、覺といふは、久しく手習ひをすれば、そのつから古人の筆意を合點するが如し、

古より聖人學ひすといふヿなし、然れども學といふ辭は、殷の時分よりはしめて書經にあらはる、說命云、念㆓終始㆒典㆓于學㆒と、又云吾小子舊學㆓于甘盤㆒とあり、孟子にも湯學㆓于伊尹㆒といへり、然れどもこれよりさき唐虞の世にも、學あらずといふヿなし、吾觀㆓古人之象㆒と云は堯なり、舍㆑己從㆑人といふは舜なり、拜㆓昌言㆒は禹なり、學といふ詞はなけれとも、何も學の事なり、大抵道德性命文章等の言葉、上世より誰人のいひ出すといふヿをしらず、世間通用してこれをいふ、聖人君子これを取て號令をほどこし敎法を示したまふ、後世よりは、其詞の經にはしめてあらはるゝを本とするなり、何もこれにて準ししるへし、

學問の綱要は、文行忠信の四つにあり、それゆへ、孔門の弟子夫子の敎をすへくゝりて、此四つのヿを要とす、文とはいにしへ聖賢の遺文、今の世にいはゆる書籍の事なり、古人の言行をあらはして、今日の法則となるゆへに、第一にこれを學ひすはあるへからず、秦漢このかた、詞章を文章といへども、いにしへこれを言語といふ、又は辭命と云、文とはいはず、堯の煥乎其有㆓文章㆒と云、夫子之文章可㆓得而聞㆒也、又は文質彬々といふの類は、何も禮樂をさしていふ、先儒にも、所によりて錯說あり、行といふは人の行事の實、いはゆる百行、一事にかぎらず、平生の行作をたしなむヿなり、忠は己が心を盡すヿ、信は言行のしるしありてたかはさるヿ、是も百行の內なれども、萬事これを本とせざればかなはざるによりて、わけて是を擧て、此四つのヿは人の賢愚貴賤をわかた

謂二之君一、卿大夫士謂二之子一と、是は後世の說なれども、此方よろし、古より人を稱して君と云子と云こと多くあり、是を合てたつとき人を君子と稱する事しるへし、語孟字義此註にしたがふ、人の學問をするは、君子の道にすゝみて、小人の域に落ざるやうにするにあり、故に論語に每々君子小人の行迹心事を並擧て、其相反して、うらはらなることをのたまへり、然るに今の人これを讀ても、君子といふを、すくれて善き人にて、面々のおよぶ事にあらずとおもひ、小人といふを又甚あしくおもひ、惡逆無道にして、面々のあつからさる事とす、是皆あやまりなり、君子といふは、其至極をいへば、もとより聖人のことをもいへども、今日底の人、面々の上に就て、少しにても心術明白にして、老成慈愛なるは、皆君子位中の人なり、又偏狹險薄外をつくろひ手立をめぐらし、自をほこり他を伐、人の善をそしり人のあしきを願ふの輩は、皆小人門中の人なり、何も遠き事にあらず、其是非邪正のわかれを考へて、自らかへり見すはあるへからす、

學　凡十則

學は人の行ふことを見ならふて合點する事なり、白虎通に云、學覺也、覺二悟所一レ不レ知也、論語集註に云、學之爲レ言效也と、白虎通にはさとる意はかりを註せり、集註にはならふ意はかりなり、然れども下文に、後覺者必效二先覺之所一レ爲といへり、是にてさとるといふ意をもちあはせたるものなり、とかく學の字は、ならふとさとるとの意をかねあはせて、字義そなはるゆへに、古義字義に、學者效也覺也、有レ所二效法一而覺悟也と註す、效といふは、手習をするものゝ、法帖を見ならふて、筆勢

いひかたし、前に段々論ずるわけにて、その旨しるべし、

君子小人　凡四則

君子小人といふは、もと位の貴賤に就ていふ、上に在て貴き人を君子と云、下に居ていやしき者を小人と云、本人がらのよしあしにはあつからず、論語に君子之徳風小人之徳草とあり、孟子に其君子實ニ玄黄于匪一以迎ニ其君子一其小人簞食壺漿以迎ニ其小人一といふの類、何も位の高下に就ていふ、是を處によりては、人のよしあしに就ていふ、論語に君子周而不レ比、小人比而不レ周といふの類あまたあり、何れも徳に就ていふ、故に先儒より、在位有徳の差別あり、其上後世より見れば、有徳の稱と見ゆる所多くは在位に就てのたまふとあり、是は論語なとのをしへは、多くはそのかみ諸侯大夫の爲に示したまふゆへに、在位に就て君子とのたまふと多し、

君子小人は、もと在位の名なり、然れとも下にあるの人にても、氣象老成にして、智惠分別もあり、人の手本ともなるべき人は、其位なしといへども、またこれを君子といふ、是は其徳を尊み稱したるものなり、又もの事にいつはりかたましく、鄙瑣褊急にして、下人の氣象あるものは、位にありといへとも、又これを小人といふ、其人となりをいやしみてなり、賢不肖、善人不善人といふとは同しからず、

君子といふとは、古註疏の中に、君ニ一方一而子ヲ臨万民一とあり、此説たしかならず、これにては、子の字たゞ虚字にて、後世の剪字の如し、古の名稱と見かたし、王荆公の君子齋記に云、天子諸侯

愼恐懼の深き、又衆人のおよぶことにあらざれとも、從容自得の境ひ、譴をまたさるか如し、是によりて生知安行と稱するなり、しかるを聖人は學をまたずといふはあやまりなり、堯舜性レ之也、湯武身レ之也と云も同しき事なり、堯舜は性のまゝにすといひても、學ぶ事をまたずといふにあらず、舜の舍レ己從レ人と云を見てしるべし、

先儒の云、聖人無二優劣一、有則非二聖人一也と、是又聖人を一團の天理と見られたるより出て、古人の意にあらず、聖人と稱するからは、一箇の同しき所はあるはづなり、大小偏全のかはりなく、たゞ一様なりといふ事はあるまじ、天地の化を見るに、毎年々々の寒暑氣候一様ならず、豊年もあり、凶年もあり、其外さま〴〵の不同は多きことなり、然れども造化發育の功に於ては替る事なし、聖人も亦人なり、群聖人に少々のかはりもあるへし、孟子に舜由二仁義一行非レ行二仁義一也といふ章の次に、禹惡二旨酒一といふより以下武王周公まて、各一徳を擧て稱せらる、是其盛なる所を述らるゝなり、又堯舜性レ之也湯武身レ之也といふも同しき事なり、聖人の中にも、優劣得手不得手はあると見へたり、然れども又同しき所あり、伯夷伊尹と孔子との事を擧て、有レ同與と問に、孟子の答に、得二百里之地一而君レ之、皆能以朝二諸侯一有二天下一、行二一不義一殺二一不辜一而得二天下一、皆不レ爲也、是則同とあり、然れば其ことなる所あることをしり、又其同しき事ある所をしりて、まことに聖人の徳をしるといふべし、程子はかたく定りて聖人を見られたるゆへに、上の如くに無二優劣一といへり、それゆへ伯夷柳下惠を聖人と稱するは、傳者のあやまりといへり、然れども孟子處々に其説あり、あやまりとも

之者也と、これらにて、聖人の學をつとめたまふ事のあつきを見るべし、又曰、七十而從二心所一レ欲不レ踰レ矩、又曾子終に臨て、戰々兢々、如レ臨二深淵一、如レ履二薄氷一、而今而後吾知レ免夫小子といへり、これらにて、聖人の事をつゝしみたまふ事のふかきを見るべし、然るに先儒の意にては、聖人のかくの如き言葉は、何も學者の爲に方便に說たまふて、聖人の實にあらずと、此わけは、聖人は生知安行にして、各別に生れ付たまふことなれば、もと學問修爲をまつことなし、然れども學者へ其通りをありやうに仰らるゝときは、聖人といふものは各別にて、面々の如きものは、何ほど學問してもおよばれぬ事とおもふ、それよりをのづから自棄退屈のおもひを生して、學をつとむるの志もたゆむ、聖人これをすゝめんがために、此方の德も、生れ付てかくの如きにあらず、學問修爲して、かくの如くに成就す、誰とても學をさへよくつとむるときは、聖人にいたるべしとすゝめたまふとなり、論語志レ學章に、程子云、孔子自言二其進レ德之序一如レ此者、聖人未二必然一、但爲二學者一立レ法云々、集註の說はやゝことなり、十室の章の註にも、夫子生知、而未二嘗不一レ好レ學、故言レ此以勉レ之とあり、此等の說、其意何も同しきことなり、何も聖人の意にあらず、然るに中庸に生知安行といふとあるは、是はわきより見たてたるものにて、實に學問をまたずして、德をなすといふことはなし、たとへば今日底の人も、物事器用なる生れ付は、稽古修煉する事は人と同しき事なれとも、工夫いらずにすゝむことわきより見れば、稽古をまたさるか如し、聖人を見たて生知安行といふも、此類なるべし、學をつとめらるゝ事は、衆人のおよぶことにあらざれども、聰明睿智の德、學をまたさるかことく、戒

禮記には、作者謂二之聖一、述者謂二之賢一といへり、大學章句序には、聰明睿知能盡二其性一といへり、宋朝の諸儒の意にては、畢竟盡二天理之極一而無二一毫人欲之私一之境界を聖人といふなり、此内にては仁且智といふを聖人の全德を稱すといふへし、孟子に知者無レ不レ知也仁者無レ不レ愛也とありて、其下に堯舜之知、堯舜之仁といへり、是にて其義いよ〳〵分明なり、大而化レ之といふは、たゞ聖德の廣く物におよぶを云、禮記に作者謂二之聖一といふは、禮樂を制作せらるゝ上よりいひて、もはら智の一偏につきていふ、聰明聖智といふも同しきことなり、盡二天理一而無二人欲一を聖人といふは、聖人の心を明鏡止水の如く一點のくもりなく、清淨虛明なるものとおもへり、聖人は一團天理といふも同しきことなり、何も佛老の說より本づき來りて、聖賢の旨にあらず、先儒は仁を無欲の境界と見られたるによりて、仁且智といふと同しき事に落るやうなれども、聖賢の所レ謂仁といふものは、專ら仁愛の德をさしてのたまふ、無欲といふとは甚わけちがひたり、此事詳なる事は、性理等の條に論せり、ましへ見るへし、

聖人を生知安行といふこと、人々の通して覺へたる事にて、聖人はたゞ學問といふこともなく、をのつから萬理に達し、つとめつゝしむこともなくして、自然にのりにかなふとおもふはあやまりなり、先儒の說も、大やうは其通りに見へたり、然れとも聖人ほど學をつとむる人はなく、聖人ほど事をつとめつゝしむ人はなし、孔子曰、十室之邑、必有二忠信如一レ丘者一焉、不レ如二丘之好一レ學也、又曰、默而識レ之、學而不レ厭、誨レ人不レ倦、何有二於我一哉といへり、又曰、我非二生而知一レ之者一、好レ古敏以求

にあらず、

伊川先生曰、有下欲レ爲二聖人一之志上、而後可二與共學一と、聖人は人倫の極なれば、聖人たらんとおもふはことはりなり、然れども古昔聖賢のをしへには、常に君子といひ君子の道といひて、聖人にいたるへしといふことは見へず、後世の學問には、物に目あてをして、工夫修爲して、のちには聖人の地位にいたるへしと思ふ、是は佛家の勤行修煉して、佛地にいたるといふと同しきことに落て、古のをしへにあらず、誰とても今日吾聖人の地位にいたるとおもふ人はあらじ、もしわれ聖人たりとおもはゞ、聖人にあらじ、また君子たらんと志すときは、日用常行の上、少にても物事おとなしく、老成重厚的の氣象あらば、誰とても君子といふべし、工夫純熟の後には、賢者と云聖人といふは、人のあたふる所の名なり、わが期するところにあらず、明道先生曰、人之爲レ學、忌三先立二標準一、若循々不レ已、自有レ所レ至矣、この言尤味あり、古書にもはら君子といひて聖人といはさるも、其わけなるへし、

後世は聖人賢者といふを、甚階級のあることのやうにおもふ、古の書には、必拘ることにあらす、孟子には伯夷を聖人と稱して、論語には古の賢人也といへり、孔子の聖を、宰我は堯舜より賢なりといへり、此事語孟字義に論せり、王充論衡の說も偶符合す、又韓文に、孟子雖二賢聖一不レ得レ位といへり、此類にて見るべし、

聖人の德を稱する事、論語には、仁且知夫子既聖といへり、孟子には、大而化レ之之謂レ聖といへり、

訓幼字義卷之八

聖賢　凡七則

聖といふは、もと德の名なり、後世にはたゞ人品の名とばかりおもふはあやまりなり、書經の洪範に五事を敍て、肅乂哲謀聖といふ、周禮に六德をあげて、和仁聖義忠和といふ、論語に若二聖與一レ仁則吾豈敢といへり、何も德をさして云、仁義忠和等と並へ稱せられて、人品の名にあらず、これを聖人といふは、仁はもと德の名なれとも、仁德ある人をさして、仁者仁人といふが如し、

論語に、聖人吾不二得而見一レ之矣、得レ見二君子者一斯可矣といへり、是にては聖人といふは、君子といふより一等高き人なり、孟子に伯夷伊尹柳下惠を古の聖人と稱して、また隘與二不恭一君子不レ由也といへり、是にては、君子といふは、聖人より高きやうにきこゆ、これ論孟の二書矛盾するにあらず、さす所同しからす、聖人といふは至極の稱、君子といふは中庸の名なり、一德の上にても、その至極をきはむるときは、たとひ少し偏なる所ありて、中庸にはづるゝといへども、聖人といふべし、君子といふは、其德至極を極めずといへども、物事中庸にて、いつもとくなるは、君子と稱すべし、故に孟子に、伯夷伊尹柳下惠を、聖之清聖之任、聖之和と稱せらるゝは、各其一德の至極をきはめたるものなり、然れども中庸より見れば、何も一偏におちて過る所あり、いゆへに隘與二不恭一君子不レ由也といへり、是にて君子と聖人とのちかひ見るべし、君子は聖人より一等高きといふ

らば、夜氣を主とせられたるやうにも見ゆれとも、夜氣にて仁義を存するといふこと明らかなり、然れども先儒の所謂仁といふもの、無欲の境を仁といふことなれば、此章の註も同し例におつ、全く取へきにあらず、

楚辭遠遊篇に云、一氣孔眞兮、於₂中夜₁存、虛以待ₗ之兮、無爲之先、庶類以成兮、此德之門と、朱子の註に云、神者當₂中夜虛靜之時₁自存₂於己₁而不₂相離₁矣、如ₗ此、則於₂應ₗ世之務₁皆虛以待₂之於無爲之先₁而庶類自成、萬化自由、蓋廣成子之告₂黃帝₁不ₗ過ₗ如ₗ此、實神仙之要訣也と、此言葉は本周の靈王の太子晋にさつかるの語とあり、李延平の說は、分明にこの語より出ると見へたり、尤孟子の意にそむけり、

訓幼字義卷之七　終

ば、これも仁義の心を存するためにて、いひ出されたるにて、たゞ夜氣といふことを、各別の工夫とするにあらず、正文に云、雖下存二乎人一者上、豈無二仁義之心一哉と、其下に云、旦晝之所レ爲、有レ梏二亡之一矣、梏レ之反覆、則其夜氣不レ足二以存一、夜氣不レ足二以存一、則其違二禽獸一不レ遠矣とあり、此意は、およそ人たるもの、仁義の心そなはらずといふことなし、然れとも一日の內に、さま〳〵のあしき事を見聞、あしきことをなすによつて、其良心をとり失ふてあしくなる、常には晝の內あしき事にまきれても、また夜の中にしつまりて、仁義の心を養ふことあれども、梏亡の段々に重りたる上は、夜の中にも、仁義を存することなくして、禽獸同然にいたるとなり、故に云、夜氣不レ足二以存一と、たとへば今日底の人、平生に麁末なるものは、弇囈の中にも、さま〳〵のみだりなる事をいひ出すの類なるべし、是は山の性は、草木を生々するものなれども、常々に木をきり、薪をこるによりて、草木もをろそかなり、日夜に雨露のめぐみによつて、萌蘖のめさしはあれとも、其上に牛羊の牧場となりて、くひつくすによりて、濯々たるはげ山となるが如し、故に孟子此章のはしめ、牛山の木を以てたとへとして、人は性善なるほどに、これを生長するやうにと、をしへ示さるゝことなり、其わけもつとも分明なり、畢竟仁義を主として、夜氣にて仁義を存するを云ふ、夜氣を存するにあらず、集註にも、夜氣之生、日以寢薄、而不レ足三以存二仁義之良心一とあり、其わけまた明かなり、然るに圈外に李延平の說を引て、夜氣愈淸とあり、又湛然虛明氣象自可レ見矣とあり、是はもはら夜氣といふものを主として、是に工夫を付たるものにて、集註の本說と同しからず、集註にも日以寢薄とあるか

氣とのわけしるべし、二ッながら力を用ひずんばあるへからさるヿ、又明らかなり、
氣躰之充也といふヿ、集註には、氣人之所㆔以充㆓滿於身㆒と註あり、これはたとへば袋の中に氣を吹入るゝが如く、人の一身の內に滿々てあるを氣といふとなり、是にては、たゞ字義のヿはりばかりのやうにきこゆ、其上躰に滿るヿを、躰之充とはいはれましくや、古義におもへらく、視聽動作、各是一事、而氣爲㆓之總要㆒、故曰躰之充也、此事人のにはかに領承せざるヿにて、予も亦數年講究して、やうやく此說のかへられさるヿをしる、躰といふは、もと人の形躰からだのヿなり、視聽動作は、躰のはたらきなり、然れども其はたらきをも、古は通して躰といふ、其證には、居移㆑氣、養移㆑體といふは、平生の身からにて、目つき音いろ迄もかはるといふヿ、孟子の末に見へたり、然れば形躰にかぎらず、視聽動作のはたらきをも躰といふと見へたり、然るに氣を躰の充といふは、目には物を見、耳には物を聞、四肢は動きはたらくヿを職とす、一一の上にては、其用別々なれとも、何も一氣のはたらきにてかくの如し、これひとつ〳〵をしろめて、充大したるものといふ意にてかくいへり、この外孟子に、充の字多くあり、充㆑類至㆓義之盡㆒也と云、充㆓仲子之操㆒と云の類、何も此例なり、畢竟氣は視聽動作のすへくゝりといふヿ、古義に總要と註す、このわけなり、又按するに、たとへば仁は惻隱の充といはんに、惻隱の心のをしひろめたるといふヿにて、惻隱に滿るとはこゝろへがたし、これはわけかはりたる事なれども、これにて準ししるべし、
又夜氣といふヿあり、これも孟子よりいでゝ、儒家にもはら講究するヿなり、孟子の本文を考ふれ

り、古義の意は、詖辭を聞て、これを政にほどこすときは蔽るゝことをしると、ゆくすへのよしあしを考ふるをいふ、經濟の上にてのしるしなり、もとより本文にも、害二於其政一害二於其事一といふことあり、或の云、本文に生二於其心一とあるからは、心の蔽をしるといふかたよろしかるべしと、曰、本文には知レ言の事なれども、生二於其心一害二於其政一とありて、言といふこと見へず、言は心より出ることなれば、其心より生ずといふ内に、言はをのづからこもりてあり、此一句は、たゞ心よりいでゝいふといふことにて、專ら言葉の事なり、然れば必是によりて心を主としていひかたし、

或曰、志と氣といかゞわかたん、曰、孟子の本文に云、志氣之帥也、氣體之充也と、これにてそのわけもつともあきらかなり、帥といふは、將帥之義にて、大將のことなり、志はたとへば大將の如く、氣はたとへば卒徒の如く、大將のさしづにつきてまはるものなり、氣といふものも其通りにして、志のむかひやうにしたがふものなり、其故に志氣之帥也といへり、然れば志をさへよく立る時は、氣はをのづからおさまるべき事なれば、志をたもつの工夫ばかりにて、氣はさのみ力をいれずしてもくるしかるまし、然れとも志といふと氣といふと、わけちがひたる事なれば、各其工夫をつけずんばあるべからず、たとへば大將も其身をはげみて、一分をよくおさめ、又士卒をも、さはがざるやうに號令をするが如し、故に云、持二其志一無レ暴二其氣一と、今日人事の上に就ていふときは、戰場にのぞむに、何にてもはげみすゝんで、功名をせんとおもふは志なり、然れとも、其期にいたりて、敵の軍勢を見、矢石の音を聞て、剛なる者あり、臆するものあり、是は氣の强弱なり、是にて志と

しと思ひ、許行は、與レ民並耕を以てよしとおもふ、言葉にあらはれては人にも示し、侯王若公にも此道をすゝめんとおもふ、大任にあたりて、この如きあまたの言葉を聞て、取捨せんとするに、手前に知レ言の定本なくては、何をよしとし何をあしゝとし、何の說にては後にしるしあるへし、何の說にては後に害あらんといふことをしらされば、とうわくしまよふて心を動かす、然れば知レ言は、大任に臨み第一の事なり、孟子は楊子が言葉を聞ては、其すゑ必無レ君にいたらんことをしり、墨子がをしへをきゝては、其すへ必無レ父にいたらん事をしり、告子が言葉を聞ては、其すへ必仁義を禍する事をしり、許行が言を聞ては、其ついへ必天下を率て道する事をしる、然るときは大任にあたりて、いかやうの言葉を聞といへども、まよふことあるべきや、故に我知レ言、我善養二吾浩然之氣一といへり、いにしへは、何にても事實にあらはして、經濟の爲にするを重しとす、それゆへに、知レ言と云養レ氣と云、皆其方角より出る工夫なり、たゞその理をしりてをくばかりにあらず、不レ動レ心といふも其通りなり、

公孫丑何謂レ知レ言といふに、詖淫邪遁のことをあげて答へ給ふ、先儒の說にては、其言の詖淫邪遁をきゝては、其心の蔽陷離窮することあるをしるといへり、これは生二於其心一害二於其政一といふより、かく解せられたる事と見へたり、然れども本文の意を玩見るに、左にはあらず、その言の詖淫邪遁をきゝて、その弊の必蔽陷離窮することをしるといふことなり、本文は兩義に通ずるやうに見ゆれども、それにては、詖辭を聞ては、其心の蔽るゝことをしると、その人の心術のよしあしをしるばかりな

て、心を動さゝるの根本なり、曾子のいはゆる、自反而不ㇾ縮、雖ㇾ褐寬博一吾不ㇾ惴焉、自反而縮、雖二千萬人一吾往矣といへるも、此至極なり、然れは心を動かさぬといふも、たゝ動かぬはかりを至極とするにあらす、常々身をおさめて、其しるしある事なれは、仁義の功用をいふにあらすや、聖賢の書に、浩然之氣と說かすして、其わけ同しき事あまたあり、論語に內省不ㇾ疚其何憂何懼とあり、中庸に內省不ㇾ疚無ㇾ惡二於志一とあり、何もと葉はかはれとも、手前にわたくしなきときは、うれへはつるとなしとのたまふと、曾子の子襄に告るの意と一般なり、然るに古義に、曾子の言は以ㇾ理勝之事にて、至極の事にあらずといへり、是は手前にまかつたる事さへなきときは、おそる事なしといふはかりにて、孟子の知ㇾ言浩然の氣を養ふて、心を動かさゞるの事備りたるほどにあらさればなり、聖人復作必從二吾言一矣といふ場には、此分にては叶ひがたきにや、

孟子に我知ㇾ言我善養二吾浩然之氣一といへり、浩然の氣を養ふといふと、段々前に論ずる通りにて、人々畧覺悟するとなり、知ㇾ言といふは、集註におもへらく、盡ㇾ心知ㇾ性て、天下の言の理をきはめ、是非得失の然るゆへんをしるとなり、然れどもたしかに心得がたし、これは後世は空言虛論無實の言葉多きによりて、一概に言葉をかろんして、言をしるのをしへをろそかなり、古は言葉は事の表なり、道に是非邪正あれとも、其言葉を用ひては、必事實にあらはすのしるしあり、それゆへ言を聞て、是非得失のしるしを知るを重んず、是知ㇾ言の事なり、たとへば楊子は爲我を以てよしとおもひ、墨子は兼愛を以てよしと思ひ、告子は、不ㇾ得二於心一、無ㇾ求二於氣一、不ㇾ得二於言一、無ㇾ求二於心一をよ

ふ事を至極の事とするにあらさると見るへし、孟子は言を知り浩然の氣をやしなふといふの本ありて動かさす、これまことの不レ動レ心といふものなり、

大抵不レ動レ心といふにも、其すし〱あり、其事になれて、しつけたるときは動かす、吾身を舍して、心に引さるゝ事なきときはうこかす、又天性剛強なるものは動かす、何れも孟子の所レ謂まことの不レ動レ心といふものにあらす、何そなれは、說二大人一則藐レ之せよと、いにしへよりも、高明貴顯の前へ出るときは、心をうこかすものなり、然れとも常々出つけたる人は、さまて知レ言養レ氣の道を講究する事なけれとも、其場へ出つけ其事をしなれたるゆへに、心を動かす事なし、唐の李愬は、雪夜に吳元濟をとりこにする大功を立たる勇將なり、朝廷に上りて、温御史に失儀を糾されて、膽落といへり、是は軍陳にはなれたれとも、朝儀に不案內なるゆへに心を動す、ならはさるゆへなり、又遊方行脚の僧、深山曠野の中をひとり往來して猛獸に逢、刧賊に出合ても、さのみさはくことなしといふ、是は眷屬のわつらひなく、平生に生死をかろくおもひたるによりてかくのことし、是は舍するかゆへなり、又刑官のはなしをきくに、重惡の死囚、法場に引出さるゝに、ものいひ笑ふこと平生にことならすと、是また何の心かけあるへきや、天性剛強なるによりてなり、これみなまことの心を不レ動といふものにあらす、たゝ訟なとをするに、理をまけてあらそひ、又理をもちても得いはさる事もあれとも、畢竟こゝろにまがりなきものは、詞にかさる事なく、わかこゝろもたしかに、手前にまかりあるものは、うろたへさはくこと多し、これまさに、是非得失のたしかにあらはるゝしるしに

問ふ、然るに天下古今の變をも覺悟せす、常々身をおさめて人を治るの根本たちさるときは、かならす迷ひさはきてとうわくすへし、常々修錬して、其覺悟あるときは、いかやうの事ありといへとも、こゝろを動すことなし然るによりて、我知ㇾ言我善養二吾浩然之氣一といへり、知ㇾ言といふは、上聖賢より下諸子百家の言に至るまて、各其是非得失のわけをしりて、これを事にほとこすときは、これにてはよく、これにてはよろしからすといふ事を、明らかに辨へ、さて常々に吾一身をよくおさめて、一毫もせまじきことをせされは、萬乘の君に對して、いかやうの事を尋らるゝといへとも、是非のわきまへにとうわくする事なく、天下の正位に立、天下の廣居に居、天下の大道を行ふからは、又何事をはちをそるゝことかあらん、これ學問の至極、修身の效驗にて、たゝ一箇のしかたありて、ものことに心をうこかさぬといふにあらす、

後世には、不ㇾ動ㇾ心といふ事を、修爲の上にて至極の事とおもふはあたらす、孟子に公孫丑か若ㇾ是則夫子過二孟賁一遠矣といへるに、曰是不ㇾ難とありて、告子北宮黝孟施舍等の事を擧て、さとし示さる、是は心を動かさゝるにも、しかたあつて、たゝ動かさゝるはかりは、至極の事にあらすといふことなり、告子は不ㇾ動ㇾ心は、もはら一心を制して、氣に求て心をなやます事をきらふ、それゆへいまた四十のよはひに及はすして、其しるしを得、北宮黝は、さきにかまはすして、必勝を以て主として、心を動かさす、孟施舍は、手前におそるゝことなきを以て主として、心を動かさす、是皆血氣の勇はかりにて、至極の事にあらされとも、相應に其しるしあり、然れはたゝ心をうこかさぬとい

先儒おもへらく、前聖未發のことをはしめていひ出したまふと、然れとも孟子は開卷第一義に、仁義の二字を拈出して、七篇の旨此外に出ることなし、養氣といふも、仁義の功用をあらはしたる物にて、仁義を外にして、別に浩然の氣といふことあらす、故曰、其爲㆑氣也配㆓義與㆒道、無㆑是餒矣と、又云、是集㆑義所㆑生者、非㆓義襲而取㆒之也と、これによりてかんかへしるへし、

養氣は、仁義の功用をいふといへとも、義のしるしを重しとす、それゆへに配㆓義與㆒道と云、集義所㆑生といひて、仁に及はす、大槪人の心を動かしておそれ恥る事は、不仁の事よりも、義にたかふよりうこく事多し、然るによりて、もはら義をのたまふと見へたり、

浩然の氣を養ふといふこと、人々通して覺へたる事なり、然るにたゝ何とかよろしきしかたありて、いかやうにおそるへきことにも、心を動かさゝるとありとおもふ、又孟子に難㆑言也とあるによりて、言語にものへられす、常底の人は手を付る事もならさる事とおもふはあやまりなり、畢竟學問の至極修身の効驗にして、たゝ心を動さすといふにあらす、其わけは、公孫丑孟子に問て不㆑動㆑心亦有㆑道乎といへるに、孟子曰有と答へ、其あとに我知㆑言我善養㆓吾浩然之氣㆒といへり、これにてしるべし、此とはもと公孫丑は、夫子加㆓齊之卿相㆒得㆑行㆑道焉、雖㆓由㆑此覇王㆒不㆑異矣、如㆑此則動㆑心否乎とあるに、曰否と仰られて、かく議論おこりたる事なり、齊の國の相位に備りては、覇王の業をも成就する事も成へき權ありて、まとに大任なり、さま〳〵萬事のむつかしきさはきもあるとなれは、心を動かしてとうわくもすへきとなり、孟子此任にあたりたまひては、こゝろを動さんや否と

別を考ふへし、

或云、語孟字義に、意者心之往來計較者をいふとあり、然るに今人の心のおくと見るときは、先見とことなりや、曰然らす、心之往來計較といふことも、心の中にて取つ置つ彼是とおもふことなれは、是も心の中にありて、外へあらはれさるものなり、これはかりにかきらす、物を推量して心にてつもる事、人を疑ふて心にあやふむこと、何も言葉にも色にもあらはれされとも、心の内にておもふことは皆意なり、それゆへに意といふ字を、又うたかふとも訓する所あり、おもふと訓する所あり、然れは往來計較も其内のことにて、異なることなし、此事十五六年前におもひよりて、先人存生の日質正せり、然れとも印可することもなく、よく玩索して成就せよといへり、又甚あたらさる事ともいはす、よりて其説を述ることとまへのことし、大學定本に、意思也と註せり、然れはまた甚たかふ事もなし、

氣　凡十三則

氣の字古よりくはしき註なし、然れとも其義分明なることなれは、語孟字義にもわけて是をあらはさす、天地に在ていへは陰陽寒暑の氣なり、人に在ていへはこゝろの勢なり、孟子に、志氣之帥也、氣躰之克也といへり、志は氣を引立るものにて、氣といふものは、耳目口鼻四躰のはたらきをつかさとる物なり、本文を玩てしるへし、

いにしへの書に、氣のこと見へす、孟子に、浩然之氣、夜氣、居移レ氣等の說あり、養レ氣のこと、

或云、然らは誠意のこと、畢竟聖人の旨にたかふことなしや、曰、誠意といふ事は、をしつめていへは、毋ニ自欺一也といふことなり、好レ善如レ好ニ好色一、惡レ惡如レ惡ニ惡臭一と、善を善とし惡を惡とする事を、心の底より誠にする事なり、論孟に誠レ意といふこと葉は見へされとも、未レ見下好レ德如レ好レ色者上也とのたまへは、好レ善如レ好ニ好色一といふと同しきことなり、見ニ不善一如レ探レ湯とのたまへは、惡レ惡如レ惡ニ惡臭一といふと同しきことなり、これまことに、聖人の旨にたかふことあらす、然れともこれらの事は、何も學問習熟の上にて、好惡の誠なる事をのたまへり、平生のをしへには、禮義を以てのりとして、常々にこれを守るやうにのたまふ、其純熟の後には、此しるしもあるへし、それゆへ顏子ほとの高弟に告たまふにも、非レ禮勿レ視云々とありて、もはら視聽言動の上に就て工夫を用て、意上に於て力を付る事なし、視聽言動は外にして末なり、意は本にして內なり、本の意を誠にする事をつとめすして、徒に視聽言動の上外樣に就て工夫を用ゐるは、後世よりいへはあらましなる事にあらすや、これによりて見れは、誠意は其しるしにて、最初よりこれをつとむることにあらす、然るに大學條目の第一にこれをあらはして、自修のはしめとする事はうたかはし、物別聖人の道は、もはら道とのたまひて、其本を推しては、或は身と云或は己と云て、心をのたまふこと甚まれなり、修レ己正レ己反レ身誠レ身の類あまたなり、孟子には、人性の善をさとさんかために、本心良心と說けとも、意といふこと見へす、大學には、治國平天下より段々をしつめて、身と說心と說て、又其本を意にをしきはむ、然るによりて、誠意を條目のはしめとしたるものなり、須其差

に委しく辯する通りなり、物別文字には、一字を加へて輕重なきことあり、又甚輕重にあつかる事あり、道德を稱して至德要道といふの類は、たゞ道德といふとさまてちかふとなし、稱美のこと葉を加へたる迄なり、意の字のごときは、善惡に通するゆへに、私の字甚重し、然れは私の字を略して、たゞ意とはかり云て、私意のことにはなりかたし、本文にも毋㆑私といひて、意なしとはあるまじく哉、意といふこと、さきに論する通りにて、一の私の字をいれすして、安排計較のわたくしたることしるへし、又問、意といふこと全くあしきことならは、聖人の意天地の意とはいはれまし、文字中意といふこと葉、こと〲くあしきこともいひかたし、曰まことに然り、意といふこと全くあしきことにあらす、必固我も其通りにて、事によりては、物をかならすとおもひ、思ひ入れてうつらさること、わか身かちにして言出したる事を、是非にし通さんとおもふのたくひ、賢人君子の上にもあることなり、然れとも高明疏通の事にあらす、夫子にはこの四つのくせなきによりてかくいへり、各其主意をわきまへてかんべんすべし、意も其通りなり、

或人云、大學非㆓孔氏之遺書㆒辯の中に、誠意の事を難して、論語の毋㆑意と一正一反したかひかたきよし論あり、大學定本にはさのみ其わけも見えす、兩所の異同ことなるわけもなきにや、曰、是は早年晩年の異同なり、はしめには、誠意といふことを、一向にとられさる事とおもふによりて、辨の通りにあらはせり、晩年の見には、孟子の思㆑誠といふこゝろに同しき事とおもへり、ゆへに定本にはさのみ難することなし、たゞ定本によりて其義を識得すへし、

かたきなるへし、曰然らす、文字の正義は、古來より世間に熟し用ひて、いひならはしたること、何のせんきもなく、自ら符合し、其義うつしかへかたし、有學無學の人をわかたす、平生のこと葉をのつから經書の訓義にもかなふ、日本にても學問ひらけてより此かた、漢土の文字世に廣まること、すてに千有餘年に及へり、それゆへ世間の學問せさる人のこと葉も、をのつから本義にかなふこと多し、今の人のそこ意おく意御内意なといふことは、中國の人の天意聖人の意といふと同しき事にて、人のこゝろねをいふこと證すへし、いはんや中國の文字の内には、猶以證據とすへきこと多し、然るに先儒にあやまり訓せらるゝ事あるは、字義にくらきにあらす、宋學のおもむき、專ら心をたふとみて、其上に躰用の說を立られたるによりて、心を重んして、躰用を兼といひて、此外意の字情の字なとを皆心の用とせられたるゆへに、經を註するに、心の發といふ註出來れり、然れとも古來よりの定りていひならはしたるわけたかへかたきゆへ、集註等わき／＼にいへる意といふ字は、皆予か臆見のことし、情の字のわけも又此通りなり、後世性情躰用の說あれとも、經史の中にいへる情といふ字は、何も情の條下に論する通りにて、人の生れ付のまゝなるこゝろをいふ、物別心情意は、皆已發の心の上にて、其ふりのかはりにて名を立たるものなり、躰用の差別にあらす、

或云、意の字心根といふ時は、よしあしに通していふ、然るに毋レ意といふときは、あしきかた一偏におつ、此わけ同しからす、一の私の字をいれて私意と註せすんは叶ふましきや、曰然らす、此わけさき

なれは、もつともよしあしに通して云へきことなれとも、先は心のありやうになく、かくしをく事ありて、わきよりもこゝろをかるゝとなり、聖人のこゝろは明白正大なるゆへに、内外かはりなく、表へ見へたる通りにして、内につゝみをく事なきことを毋レ意といふなり、今日底の人も、人のともに物いふに、獨り默してだまりゐ、或は稠人廣座の中にて、次第もなくふと立歸るなとの類、少し學問したるものは、あれは意ありてやといふ、此たくひにてをし知るへし、又孟子に、詩を讀ことを以レ意逆レ志といへり、是も其通りなり、詩人の志のあるところを、此方のそこ意にてをしはかることなり、易にも又云、言不レ盡レ意と、何も同しきことなり、

春秋を說もの、誅レ意の說あり、是は當時の亂臣賊子の所作に、表はよきやうにて心根のあしきことあり、これを貶絕するを誅レ意といふ、又詩人のこと葉に、雨雪のふりさうにありていまたふらさる模樣を、雨意雪意といふ、又其外古今文章の內、集註大全等に、天地の意聖人の意古人の意なとゝいふの類、何も此方よりおく意をたつね求ることなり、それゆへ字義通用して、推量する心あり、想像する意あり、往來計校する意あり、これより疑ふとよみおもふとよむ、何も此わけなり、又人邊にするときは、億度の億となり、立心邊にするときは、記憶の憶となり、肉月にするときは、胸臆の臆となる、文字かはれとも、何も胸中にたくはへて、おもひやり覺てをくことなり、是も心下にたくはふるのわけより通用す、彼是合せ考ふるに、底心下心の義見るへし、

或云、章句心之所レ發也といふ註を用ひられさるうへは、集註大全等にいふ所の意の字は、證據とし

ふるに、忿懥恐懼好樂憂患等のことは、皆心の用なり、用を先にしてあとに躰を正すとも云かたし、然れは意を心の發と云事は、かなはさることとしるへし、

然らは大學に、誠意を正心のあとに次第せらるゝことといかゝ、曰、心とは思慮運用する所をいふ、忿懥恐懼好樂憂患のたくひ、皆心のはたらきなり、大學にありていへは、忿懥恐懼好樂憂患する所なけれは、先外樣は宜きなり、然れとも其ふんにては、至極の事にあらす、外樣にあしきことなしといへとも、こゝろの内少しにても其通になけれは、まことゝいふものにあらす、誠意といふは、内外一致にして、善を好ことは好色をこのむかことく、惡をにくむことは惡臭をにくむかことく、心のそこにおもふことと、外とたかはさるをいふ、故に正心を先にして、誠意をあとにするなり、予故におもへらく、意とは心の内にたくはふるおもひなり、心の發をいふにあらすと、

論語孟子にをして見るに、論語に毋レ意とあり、是も上に論する通りの意とおほゆ、集註に無二私意一と解あり、然れともこの章は、もと聖人に此四ツのくせなきことをいへり、故に子絶レ四といふ、常底の人たとへ賢人君子にも、此やまひはあれとも、聖人にはかつてこれなしといふ、私意といふものはよほとあしきことなれは、聖人分上にはあるなきの沙汰に及さることなり、意必固我ともに聖人の事なれは、もとより惡き事になすみ滯るにあらす、たゝ萬事の上に、滯りたくはふることなきをかくいへり、然れは私の字を加て私意とはいひかたし、然らは論語に毋レ意といふはいかゝ、意といふものは、こゝろの底にたくはふるおもひなり、表むきに見へすして、内にたくはへつゝむこと

匹夫不レ可レ奪レ志也と云、志士仁人と云、又志氣志操と云、何もよき志なり、これにてしるへし、

意　凡十則

意とは、意志とつゞきて、心の内にたくわへおもふことなり、物ことゝりつをきつ思案をし、又おもひやりすいりやうする皆意なり、先儒心の發也と註せらるゝはあたらす、然れはこゝろはせと訓するも、字義に叶はさることとしるへし、

大學章句に云、意者心之所レ發也と、性理字義に、心以二全躰一言、意只是就二全躰上一發二起一念慮一處と、是皆心を躰として、意を心の用と定めたるものなり、然れとも是にては、所々窒礙すること多し、正義にあらさることとしるへし、何そなれは、大學の條目の次第を考ふるに、平天下を以て極功として、其本を段々をしつめて、天下の本を國にをし、國の本を家にをし、家の本を身にをし、身の本を心にをし、心の本を意にをして、誠意を用功のはしめとす、もし先儒の説のことく、意を心の發といふときは、心は躰にして本なり、意は用にして末なり、上の條目の例にていへは、用の誠意をさきにして、あとに躰の心を正すへからす、然れは欲レ誠二其意一者先正二其心一といふへくして、欲レ正二其心一者先誠二其意一とはあるましきなり、平二天下一より修レ身まては、段々末より本にかへりて、正レ心誠レ意の段にいたりて、此一條はかり末を先にして本を後にす、是矛盾する第一なり、朱子の門人にも、沈僴李閎祖の輩此疑ひあり、朱子の返答には、水の濁りをすますには、外の波風を静むるを先とするあり、これは心を躰として意を用とするのたとへなり、然れとも本文の意を考

といふは將帥の義にて、大將の事なり、志は氣を引まはすものなれは、大將の士卒を引まはすかことし、ゆへに氣の帥なりといへり、こゝろのあるしとなりて、氣を引たつるものなり、心之所レ之謂二之志一と說文の註なり、又詩經の大序にもあらはる、先儒定まつてこれを用ひらる、然れともこれ大略の註なり、此分にては意明瑩をかく、それゆへ語孟字義に此註をあらためて、心之所二存主一といへり、とかく志といふことは、何にても、一事よき事に志すをいふ、所によつて善惡に通していふことあれとも、聖賢のをしへに、志とのたまふは、かならすよきかたへ志す事なり、あしきかたへ心のむかふを志といふ事はなし、

北溪字義に云、才志二於利一、便入二小人路一と、語孟字義これを非としておもへらく、不善には志とはいはれましと、讀者多く疑をなして、しば〳〵問答に及ふ、これは文字に正用假用ある事をしらさるによりて、かく疑ふことなり、北溪のことは、もと學者に、志す所を宜かたへよせよとあることと成程ことはりなり、然れとも是によりて、志は善惡へ通していふとおもふはあしゝ、總別字に正用あり、假用あり、道と云德と云字は、もとよき字なり、これ正用なり、所によりかり用ゆるときは、邪道小道と云、昏德惡德といふの類あり、孔子曰、道二仁與二不仁一而已矣と、不仁をも又道といふへし、これ皆假用なり、これによりて、道德と云字は善惡に通して云とは云かたし、をし出して云ときは、必定よき道すしをいふ、あしきことをいはす、志といふも其通りにて、をし出して云は、必よきことにこゝろさすをいふ、今日底の人も、志ある人と云は、皆よき志ある人を云、論語に、

きことと、前に論する通りなり、又才といふと氣といふともと同しからす、是によりて程子を密なりとはいはれまし、總別氣質の性といふ事は横渠よりはしまる、程子は氣質の性といふことなし、程子の所レ謂才といふは、即張子の氣質なり、それゆへ才に善不善ありといへり、

才といふはもとよき名なり、然れとも人のしわさを才といふによりて、所によりて又あしきことにも通することあり、孟子に未ニ嘗有レ才と云、不レ能レ盡ニ其才一者也といふは、何も才をよきかたになしていへり、又富歳子弟多レ賴、凶歳子弟多レ暴、非ニ天之降レ才爾殊一也、其所三以陷二溺其心一者然也といへり、此所は才と云ものを善惡に通していへり、よると多きも才なり、暴多きも才なり、これを才ことなりといふ、然れとも天よりあたふるところ、各別此やうにことなるにはあらす、わかこゝろ陷溺するによりて、性はもと善なれとも、あしきことをなすとなり、たとへは才といふものは、人の手あるかことし、盜賊の刄を持て人をころすも此手なり、又筆をとりて物を書、書を披てよむも此手なり、然ればよきことをもなし、又あしきことをもなすなり、然れともそのもとを推していへは、心正しきときは善をなし、心あしきときは悪をなすにより、善惡は心のわさなり、才はこゝろにつかはるゝによりて、才のあしきにあらす、故に、又云若夫爲ニ不善一、非ニ才之罪一也といへり、

志　凡三則

志といふは、こゝろの存主する所にして、氣をひきゆるものなり、孟子に志氣之帥也といへり、帥

人々の身㒵知の本心備りてあり、是をみかくを致㆓㒵知㆒といふとなり、王氏の旨、繁文の弊をためて簡約にせらるゝこと、其意まことに親切なり、然れとも聖賢の本旨を考ふるに、大學に致知といふは、身心を本として家國天下にをし、物の先後本末をわきまへて、あとさきにならさるやうにする事なり、くはしき事は定本にあらはる、朱子の說本より本文に見へす、又㒵知の事は、先に論する通のことなれは、致㆓㒵知㆒といひて本心をみかく事とはこゝろへかたし、其上孟子には㒵知㒵能と、知能をならひあけて示さるゝに、王氏良能を捨て、ひとへに㒵知はかりを以て話頭とせらるゝ事又うたかふへし、

才　凡三則

才とは性の能なり、孟子集註に、才猶㆓材質㆒、人之能也、此註尤明らかなり、たとへは大木のよく棟梁の用にたゆるかことく、人の事をなすところのはたらきなり、故に才質才幹なと熟用す、又世の智ある人を才といふ、才難と云才不才といふも、皆才能といふより通用するなり、

孟子云、若夫爲㆓不善㆒、非㆓才之罪㆒也と、程子云、才稟㆓於氣㆒、氣有㆓清濁㆒、稟㆓其淸㆒爲㆑賢、稟㆓其濁㆒者爲㆑愚と、此二說同しからす、朱子云、以㆓事理㆒考㆑之、程子爲㆑密と、此意は、孟子はもつはら本然の性より出るものを以ていふ、故に才に不善なしといふ、程子は氣質にうくるものを以ていふ、故に才に善惡ありといふ、これは宋朝以來本然氣質の性をたてゝ、孟子の所㆑謂才といふものを直に氣質と見られたるによりて、程子の說を孟子より密なりといへり、然れともいにしへは性に本然の說な

人に提抱せらるゝによりて、是を孩提の童といふ、孟子かくのことくのたまふわけは、成長の人は、世間を見ならひ、むかしのことをきゝ、いろ〳〵の事をしるゆへに、そのなすところの善をあけて證據とするときは、それは修習の善、外よりのつけ燒刄にて、人の本性にあらすといふの疑ひあり、然るにかの孩提の童は、いまた世間の事をしらす、學問のわけもなき時分にはや親を愛し、少し人となれは兄を敬ふ性そなはる、是にて人の性の善なることをしるへし、かの仁義といふも別事にあらす、此良知良能を推しひろむるより外の事はなしと、世人の高遠成かたき樣に思ふを手近く引よせて示したまふなり、故此章の終りに、親レ親仁也、敬レ長義也、無レ他達二之天下一也と、其義尤明らかなり、然るに後世には、良知といふことを、各別の事とおもふて講究するは、孟子の意にあらす、

陽明王子致二良知一の説を倡ひ、專ら自己一心を明らむるを旨とせり、是又爲にすることありてかくのことき説出來れとも、畢竟明心見性の説に落て、孟子の意にかなはす、先良知といふことは孟子に出つ、致レ知といふことは大學にあらはる、此二ッを取合はせて、致二良知一といふ説おこれり、此わけは、朱子の學問は致知格物を先務として、凡天下の物に就てこと〳〵く其理を極め、天下の書をよみ、天下の事をわきまへ、一草一木にいたるまて、其理をしるを至極とす、これにては、もつはら外義にかゝはり、工夫繁多にして、受用に切ならす、王氏此説をためて、致知と云は左にあらす、自己の一心を明らかにするときは、自ら萬理に達す、事物の上に就て逐一に其理を極るにあらす、

良知良能　凡四則

良知良能といふこと、亦はしめて孟子にあらはる、良は易直といふ註にて、物ことすなをなるなり、何事にても、生付のまゝ水いらすの善を良といふ、孟子に又良貴と云良心といふ、論語に温良恭儉讓と云、何も同しき事なり、

良知といふは、生れなからしること、良能といふは、生れなから能すること、何も學問修爲をまたすして得ることをいふ、孟子に此說を發せらるゝは、是も性善と說四端と說と同しきことにて、たゝ其理を論せらるゝにあらす、人の道にすゝむのもと、我心に具りたることをしめしたまふなり、其故に良知良能を直に仁義とはいはす、これを親に親しみ長をうやまふ上にをして、天下に達するにあり、本文を見てしるへし、

凡人生のことわさ稽古分別なしによくしりよくなすことは、何事にても是を良知良能といふ、故孟子曰、人之所㆓不㆑學而能㆒者其良能也、所㆓不㆑慮而知㆒者其良知也と、此詞兼るところ甚廣し、只善心のみにあらす、小兒の二三歲の時、乳房に取付て自ら乳をのみ、少飢れは啼き、少さむけれはさけふ、これも良知良能也、たれをしゆるとなく、獨りてに是をしる、孟子是をかりて、仁義の道も外より來るものにあらす、其根本は、およそ人たるもの自ら生れ付てありと指しめし、人に仁義を行ふことをすゝめたまふなり、故に又曰、孩提之童、無㆑不㆑知㆓愛其親㆒、及㆓其長㆒也、無㆑不㆑知㆓敬其兄㆒といへり、孩は笑也と註して笑ふことなり、小兒の時、物をも得いはす、たゝ笑ふはかりにて、

學問の主意は、專ら擴充の一事にこもれり、其名目は孟子にはしまれとも、從レ古の聖賢のをしへ、皆此事にあらずといふことなし、その事を行ひつくすことは、まことにかぎりなき事なれども、其わけは志りがたき事にあらず、何ぞなれば、人の性は善なるゆへに、いかやうの人にても、善心あらずといふことなし、然れども一事ばかりはよけれども、他事にをしてみれば、よろしからざること多し、其まゝにさし置ときは、才德を成就し聖賢君子の域にすゝむことなし、擴充といふは、その一事よくなし行ふことを他の事にをし及し、次第に事々よろしくなるやうにするをいふ、たとへは齊王の一牛をころすに忍ひさるは、仁心のなす所にて、所レ謂不レ忍之心なり、然れども擴充せさるによりて、甲兵をおこし士臣を危し、數萬人の性命を害し、隣國の土地を爭ふて、何ともおもはれす、此所レ謂所レ忍也、擴充といふことは、一牛をころすに忍びざるの心を推して、人民の上に及し、不義の合戰をやめて、萬民の性命を救ふ、これ即仁なり、故云、人皆有レ所レ不レ忍、達二之於其所一レ忍仁也、又云、仁者以二其所一レ愛、及二其所一レ不レ愛、又云、古之所三以大過二人者無レ他焉、善推二其所一レ爲而已矣と、何も此わけなり、これを義禮智にをしても同しきことなり、何事にても、人の行事は此通にて、火を放ち人を掠よとすゝむるに、同心するものはなし、然れとも人をたをしてわか利德を得、人をそしりて吾身を揚るの類は、日々に多きことなり、人をそこなはさるのこゝろを推して、人をさまたくる事をもせされは、自ら仁に叶ふ、又百工技藝の事も其通にて、はしめは未熟なるが、次第に純熟し、後には妙手良工ともなる、何も擴充なり、本に立かへるのわけなし、

皆有ニ不レ忍レ人之心一者はと上におけて、次に孺子の事をいへり、此はしをたよりにしてをしひろめよといふにあらす、

發見に就て擴充すといふと、矛盾すること多し、何ろなれは、怵惕惻隱の心は、孺子の井にいらんとするを見ておこり、以レ羊易レ牛の心は、牛の觳觫たるを見ておこる、もしこの事なけれは、此心發見するたよりなし、然れとも物のふびんなる事は、偶あふ事にて、日々にあるへきことにあらす、然るに必發見を待てをし廣んとおもふときは、擴充の工夫間斷の日多し、語孟字義云、若レ此則不レ見下當ニ惻隱一之事上、則惻隱羞惡辭讓是非之心不ニ由而發一也明矣、然而當ニ惻隱一之事、日間無レ幾、動經ニ十數日一亦或無レ有、至ニ於羞惡辭讓是非之心一亦然、夫若レ此、則用レ功之日常少、而曠廢之日常多、雖レ欲レ用ニ擴充之功一、其何由而得乎、且又欲レ擴ニ充惻隱之一端一、猶將レ有ニ力不レ足之患一、況欲下於ニ四端上一遂一擴中充之上、則將レ有下左顧右盼應接無レ暇不レ堪ニ其煩一之患上、孟子之意、固不下若レ此之迂上と是なり、且又孟子に、君子遠ニ庖厨一とあり、是は仁人を養ふの法なり、もし發見をたよりに待とならは、庖厨の側に住居して、日々に屠門の殺聲をもきくへきはすなり、然るに庖厨を遠さくとあるは何そや、發見に就てをしひろむるにあらさるとしるべし、又云、充ニ無レ欲レ害レ人之心一、而仁不レ可ニ勝用一也と、人を害する事を欲せさるの心、猶以て日々に發することにあらす、然れは四端は、發見と否とをとはす、人に具りたる善心なれは、常々にこゝろへて、諸事をその通りにをし及せよとなり、

りてもとの一尺四方にかへすなり、充大と訓するときは、草木の成長し流水の通行するかごとく、次第〳〵にましつのりて、方量はなきことなり、然るに孟子を考ふるに、苟得二其養一無二物不一レ長とありて、とかく人は善にすゝむて、次第に増長する事にて、本にかへるの説なし、

充の字、孟子書中に多くあらはる、物を一つ〳〵をしつめて、至極する事なり、謂下非二其有一而取レ之者盜也上充レ類至二義之盡一也とあり此意は、取ましき物をとるを盜賊といふは、大小のわけかはれとも、わか有にあらさる類ををしつめていひたるものにて、直にこれを盜といはれすとなり、又云、充二仲子之操一、蚓而後可者也と、此意は、於陵の陳仲子、潔白なる事をこのみて、兄の室家の祿をさへけからはしくおもふ、此こゝろを一つ一つをしつめて行ふときは、人間のすまひはならす、たゝ土中の蚯蚓の求めなきかごとくならされはかなはすとの事なり、充の字の義是にてしるへし、四端の心を充るといふも右の通にして、仁心をこと〳〵にをして行ふことにて、物欲を拂ふの謂にあらす、

四端の事、宋儒の説には、善端發見のはしに就てをし廣むといふことなり、集註に云、四端在レ我、隨處發見、知下皆即レ此推廣而充中滿其本然之量上と云々、是も孟子の意に叶はす、先儒の意は、仁義の性は、中に具りたる理にて、外にあらはれされは、手をつくへきやうなし、四端に發するところをたよりにして、これよりをしひろむるといふ事なり、孟子の意は然らす、人々自性の善をしらさるによつて、善にすゝむとなし、わか性の善をしらしめんか爲に、性善良知良能の説おこれり、孺子入レ井一章も、人に此心のたしかに具りたる所を證據にわけて示したまふ、それゆへに、所三以謂二人

性なり、思慮運用にあらはるゝ處を用といふ、即惻隱羞惡辭讓是非の心、已發の情なり、わか性に具りたる、仁の理外にあらはれて惻隱の情となり、義の理外にあらはれて羞惡の情となり、これによつて、四端の端を訓して端緒といふ、仁義を未發の理といふときは、をのつから端緒と訓せされはかなはす、古人の學と進反生死の差別あり、辯せすんはあるへからす、

擴充といふこと、孟子より出る事なれとも、宋朝以來このわけ不レ同、先孟子の所レ謂擴充といふことは、或は及ほすと云、或は達すと云、或は推といふ、これより彼へうつし、小なるものを大にするとなり、たとへは小兒の書を習ふ、はしめにはいろはをならひ、次には消息こと葉をならひ、後には眞草行の諸躰を學ひ得るかことし、四端の心を物ことに推及し、次第〳〵に善にすゝむ、是を擴充といふ、後世の擴充といふは、物欲を拂ひさる所の日々に場の廣くなる事なり、たとへは明鏡のくもりをさるに、一分より一寸にし、一寸より一尺にして、一面の鏡をこと〳〵くみかくかことし、是は仁義禮智を性の理と見、人欲を鏡のくもりのごとくにおもへるゆへに、くもりを拂ふ分量の次第〳〵に廣くなるを擴充といふ、孟子集註に云、即レ此推廣、而充ニ滿其本然之量一、則其日新又新、將レ有下不レ能ニ自已一者上矣と是なり、初學の人、集註の擴充をも、たゝ古義字義に論する通りに、善心をひろむるとおもふは、朱子の意にあらす、

充の字の訓、集註に充は滿也とあり、古註には充大の意に註せり、是又差別あり、集註の意は、仁義禮智の理本來一定するゆへに、物欲を拂ふて本然の量を充滿し、一尺四方の鏡なれは、くもりをさ

の義にしたかふ、孟子も古註以來其意にて、仁義禮智の根本といふ意なり、たとへは雲に接る大木も、其二葉よりおこり、天をひたす洪水も、その源は涓滴より出るかことし、それゆへに孟子に、若ニ火之始然泉之始達一と仰られて、物の小なるもの丶、次第に洪大になることなり、はし口のあらはる丶義にあらす、

端の字を端緒と訓すれはしとよむ、端本と訓すれはもととよむ、是はた丶字義の取ちかへといふにあらす、古人の學問と後世の學問と、主意違へたるゆへに、仁義禮智の義も同しからす、端の字の訓も、これによりて相違することなり、まつ古人の所レ謂道といふものは、人の行事の上にあらはれたるものにて、天下の人貴賤上下の同しく行ふ所をいふ、故にこれを天下の達道といふ、仁義禮智是なり、先仁の一事に就ていふに、慈愛の心の人に及ふ、或は一人に及ひ、或は一家に及ひ、或は一國天下におよふ、大小久近のたかひありといへとも、人の利益を得恩德をかうふるを仁といふ、これを行ふものは何よりおこると尋るときは、我惻隱の心よりいつ、ゆへに惻隱の心は仁の根本といふなり、孟子に又曰、先王有ニ不レ忍レ人之心一、斯有ニ不レ忍レ人之政一と、不レ忍レ人の心は即惻隱のこ丶ろなり、不レ忍レ人の政は即仁なり、然れは天下をおほひつくすの仁も、わか惻隱の心のをしひろめたるものにて、惻隱の心は即仁の根本源頭なり、羞惡辭讓是非の心も同しき事なり、四端の端を端本の義にとるはこのゆへなり、

後世にこれを端緒と訓するは、後世は心に躰用の説をたて、寂然不動の處を仁の本躰とす、未發の

訓幼字義卷之七

四端之心　凡十則

四端といふことは、はしめて孟子にあらはる、人々に具りたる善心、惻隱、羞惡、辭讓、是非の四の心をいふ、即仁義禮智の根本なり、惻隱といふは、物を不便におもふこゝろ、羞惡といふは、わかあしき事をはぢ、人のあしき事をにくむ心、辭讓といふは、わか取ましき物は、辭退しゆつる心、是非どいふは、物ことのよしあしを、わきまふる心、此四のこゝろは、凡人たるもの、生れつかすといふことなし、故に孟子に曰、人之有二斯四端一也、猶三其有二四躰一也、又曰、惻隱之心、仁之端也、羞惡之心、義之端也、辭讓之心、禮之端也、是非之心、智之端也と、これを端といふは、端は根本といふこゝろなり、此四のこゝろをおしひろむるときは、仁義禮智の徳を成すといふ意にて、これを四端といふ、後世端を訓して緒とするは非なり、

宋朝已來、仁義禮智を人の性に具りたる未發の理と立られたるゆへに、四端の端を端緒と訓するは孟子の意にあらす、端緒といふは、物のはし口の事なり、仁の理外にあらはれて、惻隱の心となり、義の理外にあらはれて、羞惡の心となり、禮の理外にあらはれて、辭讓の心となり、智の理外にあらはれて、是非の心となる、たとへは物の中にありて、その小口の外へ見へたるかことし、集註云、猶下有レ物在レ中、而緒見中於外上也と是なり、尤端の字をかくのことく用ることもあれとも、多くは端本

かけにはあらされとも、こゝろのまことにはあらす、是を矯レ情鎮レ物といふ、史傳の內、かくのごとき事あまたあれとも、是等のこと葉にて、そのわけ別して明らかなるゆへこれを擧く、其餘も此例にてをすへし、

訓幼字義卷之六　終

大抵心と情と甚しき差別なし、事によりて、心といひても情といひても、通用してさまたけなきところあり、又事によりて、心とはいはれて、情といはれさるところあり、畢竟自然不自然の差別なり、たとへは父母の長命ならん事をおもひ、子孫の聰明ならん事を願ひ、人の仕合をきゝて悦ひ、人の難儀を見ては笑止におもふは情なり、又心といふてもくるしからす、或は父子公事をたくみ、兄弟財をあらそひ、人のあしきことを悦ひ、人のよきことをそねむの類は、是も心より出たることなれは、心にあらすとはいはれす、然れとも是を情とはいひかたし、皆損し弊りたるものにて、生付のまゝのこゝろにあらす、孟子に此豈人之情哉と云、後世のこと葉にも、非二人情一不レ近二人情一といふの類皆是なり、これにて情の善なることとしるへし、

漢晁錯か上書に云、人情莫レ不レ欲レ壽、三王生レ之而不レ傷、人情莫レ不レ欲レ富、三王厚レ之而不レ困、人情莫レ不レ欲レ安、三王扶レ之而不レ危、人情莫レ不レ欲レ逸、三王節二其力一而不レ盡、又程子遺書ニ云、以二富貴一爲二賢者不一レ欲、却反二人情一と云、これらのこと葉にて、情の字のわけ尤分明なり、たゝ心の發を情といふにあらさることとしるへし、又晋の謝安か、苻堅肥水の戰に、姪謝玄を遣してふせかしむるに、折ふし客と對して碁をうつ、其の時に敵をやふるの左右到來す、たゝ兒輩破レ敵といひてさはがざれとも、門を出るに屐齒を折といへり、此事晋史に矯レ情鎭レ物と云、これは心の中には、殊の外にうれしくをもへとも、あはてよろこぶ所を人に見せてはあしきとおもひて、わさとしつめて、人のさはかさるやうにすることとなり、國の宰臣として、人をしつめたることは、あしきこゝろ

不レ學而能、爲ニ七情一といふにて、自らしらるべし、已發未發の差別にあらず、情は人の眞實の心なり、善を好み惡を惡むは、人の眞實の心なるによりて、是を情といふ、又色を好み食を嗜のたぐひも、人のまことなれば、もとより情といふべし、それゆへに古人情欲情愛と云、多く男女父子の間のなさけをいふ、此こゝろはおほれやすきものなるゆへに、約レ情節レ情のをしへあり、然れども滅レ情といふは、佛老のをしへに落て、聖人の旨にあらず、又漢儒及說文等の註は、性陽情陰と、陰陽を以てこれを分つ、これはたゞ情愛情欲の情よりかく差別して、善をこのみ、惡をにくむも、人のまことなれは、又情といふへき事をしらす、

或曰、論語に云、苟得ニ其情一則哀矜而勿レ喜とあり、これは下たるものゝ上をあさむくの情なり、然れは情をもはら善といはれす、曰是よき疑ひなり、情はかならす善念にかきらす、何にても、人の好惡の眞實なる所をいふ、眞心本心といふも、人心の上に就て云、性善といふも、氣質の上に就て見るかことし、何そなれは、文字の中に、情眞情實と云、又公文に、下々のまことに願ふことを情願と云、これらの事、かならすよき事にかきらす、とかく人のこゝろの中におもふまことなるによりてかくいへり、然れは苟得ニ其情一といふは、あしきことなれとも、おもてむきにこと葉をかざりていふに對して、正躰のところを情といふ、孟子に情を善とのたまふも、心にはさまざまあれとも、正躰のまことはよきものといふ意にて、情を善といふなり、ことかはりたるやうなれとも、矛盾することなし、

善矣、乃所レ謂善也と、たとへば木をきりて器物をこしらゆるに、ぬりかざりたるは、見事なれども、本性にあらず、又さま〴〵にあしくきりくだきたるも、本性にあらず、立枝のまゝの皮付の木を、木の本性といふべし、書經に木曰二曲直一と是なり、情もその通りにて、よきことをしては、人にほめられたくおもひ、あしきことをしては、かくしつゝむ、これ人にならひ思慮安排するにあらず、自然と人に生れ付たるものなり、天下の人何も此通りなり、故に人の同情といふ、是にて人の本性の善なることしるべし、已發を以て未發をしるのわけにあらず、

先儒孟子の四端の心を以て情とし、又中庸の喜怒哀樂を以て情とす、此二說自ら相矛盾することあり、四端の心を情とすれば、情は專ら善なるものなり、喜怒哀樂のこゝろを情とすれば、情に善惡の二ツありて、善にもつはらならず、又先儒に滅情約情の語あり、是にては、情といふものはよろしからざるもののときこゆ、朱子語錄類要に此判斷あり、曰四端是理之發、七情是氣之發と、性理字義に云、孟子四端、是專就二善處一言レ之、中庸喜怒哀樂及七情等、是含二善惡一說と、又朝鮮の鄭士雲天命圖說に、其辨別詳にあらはせり、然れども何も模糊混同して、差別明らかならず、此違ひは、先儒仁義禮智を性として、四端の心を情と定め、又中庸喜怒哀樂未發の中を性とし、已發の和を情とせるによりて、此矛盾出來るなり、畢竟四端も喜怒哀樂も、皆心のはたらきなり、其内に思慮安排にわたらずして自然なる所は、情といふべし、こしらへかざりておこる心は、もはら思慮安排におつることとなれば、心とはいふべくして、情とはいふべからず、禮記禮運篇に、喜怒哀樂愛惡欲、七者

は水の流れて外へ出るがごとし、專ら心の働を情といふ、然れども古書を考ふるに、性情の分別は、動靜の謂にあらず、其上舊說にては、矛盾すること多し、舊說に未發を性とし、已發を情と云、然るに孟子情を以て性の善をしることは、たとへは梅の芽を見て、其根の梅たることをしるがごとし、已發の情本たゞ善をなすべくして、惡をなすべからざるによつて、其未發の性の理善なることをしるとなり、然れとも已發の上には、もつとも善をもなせども、又惡をもなすによつて、世間の人、孟子性善の說をうけがはず、公都子告子以來、荀楊韓等の諸儒さまの〳〵の疑ひあるも此わけなり、若公都子をして、已發の情には善あり惡あり、然れは性の本躰には、善惡の二ッ兼備はるやと問ときは、孟子の說、畢竟楊子善惡混の說に落て、性善の說たゝず、後世の說には、已發の上にある惡は、陷溺といふものにて、性の本躰にあらずといへども、是又已發已後の事なれば、情にあらずといふべからず、然れば孟子の情を以て性の善を見たまふこと、未發已發の差別にあらざることとしるべし、

或云、孟子情によつて性善をしると、未發已發の差別にあらずば、何を以て性の善をしるや、曰、情といふものは、人心の思慮安排にわたらずして、生れ付のまゝなるところなり、何にても物の本性は、生たちたる上にて見るべし、あしく損したるはいふに及はず、こしらへかざりたるも、本性にあらず、たゞかざりもなくそこなひもせぬところにて、本性しるべし、情といふものは、かざりもなくそんじもせぬところの心なれば、是にて人の本性をしるべし、故云、乃若ニ其情一則可ニ以爲ニ

さるものは、何ほど學問をしても、生れ付のすくれさるものは、何のあるしもなく、天道も冥々の事なれば、善をなすとても、たしかにたのまれずと思ふ、是信ずると信ぜざるとのわけなれば、小技曲藝を好む人にをしても同じき事なり、是はたゞ好むことのあつきよりのおもひなしにて、世上の人にをしては、まことに疑ひをまぬかれざるやうなれども、天下後世にをして見るときは、すこしもたがふ事なし、聰明正直、仁熟智至るのあるしといふは是なり、

情　凡九則

情といふは、人心の上に就て、思慮安排にわたらず、生れ付たるまゝにて、いつはりかざることなきところをいふ、世間の人、物をうぶといふがごとし、禮記禮運の篇に、何謂二七情一、喜怒哀樂愛惡欲、七者不レ學而能と、是にて其義もつとも明らかなり、先儒の說に、心之未發を性と云、已發を情と定めらるゝは、是も張子心統二性情一の說より出たる事にて、宋朝以來其說一定し、かたく此說を守れども、古人の意にあらず、大抵宋儒以來、事ごとに躰用理氣未發已發の分を立らるれども、聖人の言には、天道人事の上に、氣をいひて理をとかず、用をいひて躰をかたらず、已發の說ありて未發の說なし、

先儒の說におもへらく、心は動靜をすべて、動も靜るも皆心なり、性は躰情は用にて、心の靜なる所を性と云、動く所を情と云、朱子云、心譬水也、性則水之靜、情則水之動、理學類編にこれを取、又曰、性者心之理、情者心之用と、性理字義に是を取、たとへは性は水の器中にあるがごとく、情

論ずる通りなり、然れば夫子の性をのたまふの語、千言萬語ありとも、此外にすぎまじ、然るに世上の人にをしあて丶見る時は、何としても、人は性分かちやすきものにて、よしあしはたゞ生れ付によりて、をしへは見へがたきものなり、然るを夫子常々にかくのたまふによりて、「不レ可ニ得而聞一也といへるなり、性と天道とをのたまふといふは、只其事をかたるばかりにあらず、性の必善にす丶むべく、天道のかならず善に福する事をのたまふなり、これを聞といふも、たゞ其事を聞得るといふばかりにあらず、わが身の實に善にす丶むべく、天道のかならず善人に福することを得心する事なり、其ところ實に領掌せられざるによつて、不レ可ニ得而聞一也と云、

此事語孟字義に論しておもへらく、非ニ聰明正直仁熟智至者一不レ能レ識レ之と、これはたゞ智惠料簡を以てしるべきの事にあらず、道德純熟の上にあらざれば、誠にしり得べきにあらずと、天道の條下にをゐてこれを論ずれども、性もこれに準ずべし、何となれば、聖人は深く道を躰して、仁熟し智至るゆへに、天地の間を見るに、此善にあらずといふことなし、然るゆへに人の性は、をしへさへするときは善にす丶むべく、善をさへするときは、かならず天の福を蒙ると、たしかに見得したまふ、これ聖人のこ丶ろ、善をこのむことといたりてあつきゆへなり、然らざれば疑ひをまぬかれず、今の世の人にも、道を信ずることあつく、學問をふかく好む人は、學問ほど世の中に結構なることはなく、學問をさへすれば、家もさかへ身もたふとく、天道の冥加にもかなふとおもひ、志なきものをも引立て、誰にても學問をさへするときは、聖賢のさかいにも至るとおもふ、又學問をこのま

よりて、作用是性の說とちかしとあるは、本文にあたらず、

大抵聖賢のをしへは、皆人に就てをしへを立られたる事なれば、性と云理と云、何も人の上に就ていへり、中庸に盡ニ物之性一といふことあれども、これも聖人の世、天下太平にして、草木鳥獸までも、そのくく其生をとぐるといふことにて、是亦人事の内の事なり、後世窮理の說さかんなるによりて、人の性はいかゞ物の性はいかゞと、其わけをしり窮るを學問の至極とす、是によりて人物の性理氣異同の說おこりて、正通偏塞等の辯まちくくなり、それゆへ中庸の率レ性といふも、人と物とを兼て解せらるれども、子思の意は、もはら人の性にしたがふ事をのたまふ、物を兼ていはず、此等のわけ、古學指要に詳にあらはせり、あはせ見るべし、

或云、子貢曰、夫子之言ニ性與ニ天道一不レ可ニ得而聞一也と、性天の妙は、初學のにはかに通ずることにあらず、子貢晚年にいたりて、其奧旨を覺悟してかくいへりと、然れば性といふことも、至極のところは、にはかに通じがたし、たゞ人の生れ付を性といふほどのことは、誰とてもしり得べし、曰然らず、是は先儒の性天道の事を甚向上に心得られたるによりて、かくのごとき說あれども、左にはあらず、惣別人の言葉は、相通用してしるべし、聖人のこと葉もしかるべし、夫子の性をのたまふことをしらむとせば、論語にのする言葉に就て覺悟すべし、論語に性の說多く見へず、たゞ性相近也習相遠也の一語あるのみ、有レ敎無レ類といふこと、是も性といふことは見へざれども、性相近の語と一般、此二語ともに人の性は、よくすればかならずよくなるものとのたまふこと、前に段々

告子生之謂レ性と、集註に云、與ニ近世佛氏所レ謂作用是性者一略相似と、北溪字義云、佛氏把ニ作用是性一、便喚蠢動含靈皆有ニ佛性一、運レ水搬レ柴、無レ非ニ妙用一、不レ過下只認ニ得箇氣上、而不レ說ニ著那理一耳と、これより後の學者、通して此言に從て、儒者の性をいふと佛者とのたがひは、儒者は性に本然氣質のわかちありて、本然を理とたて、氣質を氣といふ、佛氏はたゞ氣を性とこゝろへて、理の性たる事をしらずといへり、然れども佛氏の說といふは、傳灯錄にのする、達磨の波斯匿王に答ふる言葉よりかくいへり、其言に云、如何是作用是性と、曰在レ胎爲レ身、處レ世名レ人、在レ眼曰レ見、在レ耳曰レ聞、在レ鼻辨レ香、在レ口談論、在レ手執捉、在レ足運奔、徧現俱該ニ沙界一、收攝在ニ一微塵一、識者知ニ是佛性一、不レ識者喚作ニ精魂一とあり、是によりて見れば、佛氏も氣をさして性とするにあらず、視聽言動の作用にあらはるゝ所は、皆佛性のはたらきといふことゝ見へたり、徧現すれは俱該ニ沙界一といふをみて見るべし、先儒はたゞ作用するところを性と名付たると心得られたるによりてかくあれども、左にはあらず、かへつて後世の所レ謂本然の性といふものにちかし、此外佛家に本性眞性等の言葉多くあり、何も作用をさして性といふ事と見へず、其上生之謂レ性といふこと、知覺運動と註せられたる事意得がたし、生の字には、生死の生あり、生稟の生あり、告子は人の生れ付たる所を性とばかりこゝろ得て、善惡の差別あることをしらず、孟子これをさとさんがために、白羽白雪等のたとへおこり、犬牛の性人にことなることをいへり、活動してうごきはたらくところを生といふにあらず、然れば生之謂レ性といふは、生稟の事にて、生活の生にあらず、先儒生活の事と見られたるに

佛老二而言也者、奚言而不ㇾ異といへり、當時李翺などの說世に行るゝによりて、かくいへると見へたり、其後宋朝におよびて、周濂溪の通書に、性焉安焉之謂ㇾ聖、復焉執焉之謂ㇾ賢といへり、これより後、復性のことをもはら儒家の極旨となりて、學問の目あてとす、此わけ上に論ずる通りにて、古聖賢の旨と天淵のちがひあり、李翺の說、宋朝の先儒も、禪旨にもとづくの譏あり、然れども大要ははなはだことなることはなし、

或云、論語に克己復禮といふことあり、孟子に湯武は反ㇾ之也と云事あり、復性と云語は見へざれども、初にかへるといふこと、多く聖賢の言にあらはる、何そこれを非とすべき、曰、復禮といふことは、反復して禮を行ふ事なり、反復といふは、物を打かへし行ふと、初にかへるの謂にあらず、其わけ仁の條下に詳にす、湯武は反ㇾ之といふ事も、又證據となしがたし、孟子に此言葉二ところにあり、一ッには湯武身ㇾ之也といへり、一ッには湯武反ㇾ之也といへり、反すと云ても、身にすといふても、同しき事にて、反求して身をおさむるの事をいふ、性のはしめにかへるのいひにあらす、又他書に證するに、中庸に、反二諸身一不ㇾ誠、不ㇾ順二乎親一矣とあり、易坎卦の大象に、君子以反ㇾ身修ㇾ德とあり、禮記樂記の篇に、不ㇾ能ㇾ反ㇾ躬、而天理滅矣とあり、孟子に曾子の言葉を引て、自反而縮、雖二千萬人一吾往矣といへり、彼是まじへ考ふるに、いにしへは、或は反と云、或は身にすといひ、或は反ㇾ身とおはせ稱し、通して反求して身をおさむるとをいふと見へたり、復性の證據とはなしがたし、

云て、かへるといふことなし、是を文武の道藝をならひ、又仁義にすゝむ上にをしても同しき事なり、一牛をころすに忍びざるの心ををして百姓に及し、愛レ親敬レ兄の心を推して天下に達するときは、仁義となる、何も其通りにして、性のはじめにかへるといふことなし、老佛の說また一端ならずといへども、畢竟本來の地に立かへるを至極とす、佛氏の說をきくに、本法流轉還滅といふことありて、最初には人々皆佛なり、是を本法と云、忽然として無明の迷によりて、三世十界を輪廻して凡夫となる、是を流轉と云、此欲をほろぼして、寂滅の眞躰に入るを還滅といふといへり、佛氏は人欲をいとふて、もはら人性を尊みたるゆへにかくいへり、是を聖人のをしへに引合せては甚たがひたる事なり、此わけ四端擴充の說とましへ見るべし、

儒家に復性といふこと、宋朝以來もつはら說いたされたる事にて、これより前の諸儒其說なし、唐の中葉に、李翺字習之と云人あり、官協律郎たるゆへに、協律子とも云、韓文公の門人なり、此人復性書三篇を著せり、文苑英華並に性理會通等の書に、全くこれをのす、其おもむきは、大抵情をほろぼして性にかへるといふことなり、其文に云、情者妄也邪也、邪與レ妄則無レ所レ因矣、妄情滅息、本性淸明、周ニ流六虛一、所以謂ニ之能復ニ其性一也と、儒者の復性といふこと、是よりはじまる、李翺は昌黎の門人なれども、禪學にかたむき、藥山の惟儼禪師に參して、契悟の時に、吾來問レ法無ニ餘說一、月在ニ靑天一水在レ瓶と云偈を作りたる人なれば、復性書の旨、もはら老佛の說を用ひたるものにて、聖人性をのたまふの意と大にことなり、韓文公の原性に、今之言レ性者、雜ニ佛老一而言也、雜ニ

る事見へず、今日人性の上に就て見るに、幼少の時は、無智蒙昧にして、是非の辨へもなく、義理の差別もなし、すこし長なれは、父母を見しり、兄弟を親しむのこゝろ生す、是を本として、物まなびつとむるときは、次第に増長して、聖賢君子の域へもすゝむべし、然れば人の生のはじめには、聖人たるべきの本備りてあれども、聖人と云ものにはあらず、たとへは二葉の松を見て、千尋の大木となるべしとはいふべし、すなはち千尋の大木とはいはれまじ、先儒の說の通りなれば、人々性のはじめは皆聖人と一躰なり、物欲におほはるゝによりて、凡人愚人たり、これをたち滅してはじめにかへるを復性といふ、然れば幼少なる人を見ても、皆聖人と云べし、二葉の松を見て即千尋の大木といふがごとし、是は其かたちは見へざれども、其理をさしていひたるものにして、聖賢のをしへ事實に就て示さるゝと大に同じからず、聖人のをしへは、道を以て目あてとす、故に進を以て功とす、後世の學は、性を以て目あてとす、故に復初を極とす、其わけを辯ぜずんばあるべからず、

今時幼少のもの書を習ふ、はじめには伊呂波をならひ、それより庭訓消息等のものを讀ならひ、志あるものは、四書五經をも素讀して、後には諸子百家のことにも通し、古今の變を辨へ志る、是人は萬物の靈にして、事をよく記憶する性備りたるゆへに、段々つとむるときは、次第に事を廣く覺悟するなり、人々有生のはじめに、諸事百家のことまでこと〳〵く胸中に備り、物欲のおほはれによりて取うしなひ、あとに物欲を拂て取出すにあらず、其ゆへいにしへより、學問は進と云、長と

なり、然れば吾性の善不善をしらずといへども、もとさまたぐることなし、今日のことをつとめず、吾身を見かぎりて、善にすゝむことあたはずとおもふによりて、是をすゝめんがために、性善の説おこれり、たとへば良田をあらして、耕作をもせさるによりて、是ほどのよき田地を、何としてたがやし耘らぬとすゝむるがごとし、耕作をさへ精出しつとむるときは、たとへ其田の實をしらずといへども、をのづから秋成の得ものあり、其ゆへに聖人のをしへは、常々進レ德修レ業の事を以て、人に告示されて、性の説甚まれなり、しからは聖人の教、性を先とせぬといふもことはりなり、孟子の性善といふも、たゞ性の理をあきらむるといふにあらず、性の善にして道にいたるべき事をしらざれば、行ひをつとめさるによりての事なり、故に盡二其心一者知二其性一也といへり、後世は性を見ること甚高して、萬事の道理性の中にこもると云へり、是皆佛家明心見性の説より出て、聖人の性をのたまふの意と甚差別あり、龜山の説のごときこれなり、

後世の説に、復性といふことあり、又復初ともいふ、是は人の性の理、本來純粹至善なるものなれども、物欲におほはさるゝによりて、其本躰の明をうしなふ、然るによりて、人欲をたちほろぼして、本性のはじめに立かへるとなり、是老佛の説におちて、聖人のをしへと天淵南北の違なり、此事所々にくはしく論辯する事なれば、重て詳にするに及ばず、大樣聖賢のをしへは、吾性の善を本として、段々に成長する樣に示したまふ、故に性に就ては養と云、工夫の上に擴充と云推と云達と云て、本にかへるといふことと見えず、たとへをとるにも、流水萌蘗に比して、明鏡止水にたとふ

說に及ばずといふべし、何ぞなれば先儒の說には、孟子は本然の善をさし出て、性善と說たまへども、氣質の不同あることをさし示さゞるによりて、荀楊韓等諸子の說おこれりといへり、然れば孟子は性を論して氣を論ぜず、不ㇾ備といふものにあらずや、また孔子性相近也とのたまふは、先儒これを氣質の性を說けりといへり、然れは孔子は氣を論して性を論ぜず、不ㇾ明といふものにあらずや、程朱の說ばかり明備にして、孔子孟子の說、ともに不明不備の失をまぬかれずといふことはあるまじきことなり、是皆後世の性の說、古聖賢の旨にかなはざるによりて、かくのごときの矛盾出來ることなり、朱子語類云、論ㇾ氣不ㇾ論ㇾ性、荀子言二性惡一、楊子言二善惡混一是也、論ㇾ性不ㇾ論ㇾ氣孟子言二性善一是也、又曰、孟子終是未ㇾ備、所以不ㇾ能ㇾ杜三絕荀楊之口一といへり、其意見るべし、又夫子性相近之言程子はもはら氣質の性を說たまふといへり、朱子の集註には、兼二氣質一而言といへり、是また不ㇾ得ㇾ已の說なり、此わけ前にくわしければ、かさねて詳にせず、

歐陽永叔云、聖人敎ㇾ人、性非ㇾ所ㇾ先と、李翺に答ふる書にあらはる、楊龜山これを非としておもへらく、孟子遇ㇾ人便道二性善一、歐陽永叔却言聖人敎ㇾ人、性非ㇾ所ㇾ先、可ㇾ謂ㇾ誤矣、人性上不ㇾ可ㇾ添二一物一、堯舜所三以爲二万世法一、亦是率ㇾ性而已、所ㇾ謂率ㇾ性循二天理一是也と、孟子序說にこれを取る、楊龜山はもはら性學をたふとばれたるゆへにかくあれども、歐陽子の說全く非とすべからず、何ぞなれば人たるもの、今日の上に就て、日用常行をよくつとむれば、賢人君子の域にも入り、何のいふべきことなし、是は人の性善なるゆへに、つとめさへするときは、をのづから道德にすゝむこと

家は世間の相を外にして、別にをしへを立るによりて、心性の說も世間の義と異なり、聖人の書何そかくのごとき事あらん、程子曰、人生而靜已上、不ㇾ容ㇾ說、方說ㇾ性時、不二是性一と、又李延平曰、動靜眞僞善惡、皆對而言ㇾ之、是世之所ㇾ謂動靜眞僞善惡、非二性之所ㇾ謂動靜眞僞善惡一也、惟求下善於未二始有ㇾ惡之先上、而性之善可ㇾ見矣と、世間の人いはゆる性といふものは、至極の性にあらずといふことなり、尤疑ふべし、予故曰、漢唐諸儒、不ㇾ知二性之善一、而性之義不ㇾ違ㇾ古、宋朝儒先、說二性之善一、而性之義乖ㇾ古、

畢竟荀楊韓の諸子は、人心の上に就て性を見たるものなり、心の上には善惡邪正さま〴〵ありて、一概に善とさだめがたし、それゆへに、或は惡と說、或は善惡混と說、或三品ありと說て、一定の說なし、孟子は情の上にて見たまふ、世間の人、生れ付たるまゝには、あしき事なし、たゞ善をなすべくして、惡をなすべからず、故曰、乃若二其情一、則可三以爲ㇾ善矣、乃所ㇾ謂善也と、情によつて善を見たるものなり、詳なる事は情の條下に著し、又古學指要にも是を辯す、

程子云、論ㇾ性不ㇾ論ㇾ氣不ㇾ備、論ㇾ氣不ㇾ論ㇾ性不ㇾ明、二ㇾ之則不ㇾ是と、此意は本然の性ばかりを說て、氣質の不同あることをいはざれば、本はよろしけれども、性の全躰備らず、又氣質の性ばかりをいつて、本然の善にもとづかざれば、性の本たる所をうしなふて、性の義明かならず、理と氣との二ッは、持合たるものなれば、引分て是を二ッにするも、又よろしからずとなり、然れどもかくのごとくいふときは、孔子孟子の性をのたまふも、畢竟不ㇾ明不ㇾ備の失を免かれずして、宋朝以來の

荀子の性惡といふは、もはら敎をたふとみて、人をしへさるときはよくならさるを見て、性惡といへり、性惡篇に、詳にをしへの事をあらはせり、たとへは莫劍も磨淬を加へされは利ならず、名馬も調習を加へされは、千里をいたす事あたはざるがごとし、これまことに敎の功なり、然れどもかの虎豹犀象の暴悍なる畜を敎てのらんとするに、何ほど志いれても、人の役に立ことなし、馬はのりいれて人の役にたつは、其性柔順なるゆへなり、人の性を善といふも其通りにて、學問修爲の工なき時は、もとよりよくならざれども、をしゆれはよくなるところの本、人の性に備りてあるにより、敎もよくうくれは、性の善なる志るし見るべし、揚雄善惡混の說は、孟荀の說をあはせてたてたるものにて、もとより二半なることなれば、詳に論ずるに及ばず、韓子の說もつとも聖人の旨に近し、今日人の上に就て見るにも、たしかに此通りの品々ある事なり、然れども畢竟を推しつめて見るときは、品々あるやうなれども、至極は善なるものなり、孟子に、惻隱之心人皆有レ之といへり、皆の字に就て見るに、天下の人を一同に見たるものなり、とかく三子の說の通りにては、人の善にすゝむ所の本なし、これ孟子の諸子にすぐれたるところなり、

荀楊韓の三子、性の見やうはあしけれども、性の名義は、聖賢の言葉にかはる事なし、其儘人の生付の上にてよしあしをいふ、宋朝以來の說は、性善といふことは、孟子を祖とせらるれども、性の名義古書の旨に相違して、理を性善といふ、大抵聖賢のをしへは、世間の人にひろく示したまふことなれば、性と云心といふもの、何も世の人の覺付たる言葉に就て、よしあしをのたまふなり、佛

と、段々氣の上に就てときたる物なれは、こゝにいたりて理の異同といひかたし、それゆへ朱子孟子要旨といふ書を撰れ、孟子中性を說諸章を擧らるゝに、此一章をとられす、戯謔の語不完のこと葉にて、此上に直指人心の說なきゆへにまとひを開といふこと、語類にあらはる、

告子以來、荀楊韓子の諸子、孟子の說に服せられさるも、畢竟孟子の說を拘りて心得、性善といふことを一概にかたく覺へたるゆへなり、今日底の人も、大かたは孟子の說を合點せすして、人の性は善といはれましとおもふ、何れも同しことなり、孟子の性善とのたまふは、たゝ水の性はひへ、火の性はあつしといふかごとく、大概に料簡したるものなり、物の不レ齊物之情なれは、天下の水に、たま〳〵は温泉もあり熱水もあれとも、是によりて水の性に品々ありとはいはれす、人の性を善といふも其通りにて、たま〳〵は生なからの惡人もあり、又あしくなりやすき物なれとも、それは人に不成人のあることく、又は物の腐敗しやすきかごとく、是を以て本性とはいはれす、孟子の性善とのたまふ、この通に心得へし、荀楊韓子なと、何れも孟子の性善を見て、天下の人に、一人も惡人なく、人の一身に、一念も惡念なき物といふと、かたく覺えたるものなり、然るに人はあしく成やすきを見て、荀子は性惡といふ、一人の生付の中に、よきこともあり、又あしき事もあるを見て、揚雄は性は善惡混といふ、天下の人の性、よしあしさま〳〵ありて、一樣ならさるを見て、韓退之は性有二三品一といふ、何も一通りは聞へたることなれとも、皆本をたゝさすして末を逐、人心の作用さま〳〵あるを見て、實情の本眞はたゝ善なることをしらさるかゆへなり、

孟子此章の集註云、孟子又言若果如レ此、則犬牛與レ人、皆有二知覺一、皆能運動、其性皆無二以異一矣、於レ是告子自知二其說之非一、而不レ能レ對也とあり、此註の通りにては、孟子の本文、てにはは違ひといふものにて、告子をくしくにたらす、其わけは、先儒の言のごとく、知覺運動の生、人と物とかはることならは、犬之性猶二牛之性一、牛之性猶二人之性一といふは、見在當然の事にて、動きはたらくことはもとより人も物もかはることなし、然則犬之性猶二牛之性一、牛之性猶二人之性一歟といふは、てにはちかひにあらすや、告子たるもの、成ほとその通りなりといはゝ、孟子のこと葉は、言かふりといふものなり、畢竟人の性と犬牛の性とは、各別かはりたるものなり、誰とても、是を一概に同しきことゝいはし、孟子これを以て告子をさとさんか爲に、其方のいふかごとく、一概に生れ付を性といふ時は、犬の性も牛の性も人の性も、同しといひて可ならんかと、うらをあけてなちらるゝなり、たとへは人の僻事をいふに、其方かいふ通りなれは、日は西より出るかといはんに、誰とても日は西より出るとは得こたへし、是にて先の說のあやまりたること、辨せすして自ら明かなり、下の章にも、然則嗜レ炙亦有レ外與と云、然則飮食亦有レ外與と云、何も同しき事にて、理のなき事をあけてなちらるゝなり、是にて孟子の性を善とのたまふは、犬牛の生付と違ひたる所にて見出したまふ、本然の性をいふにあらさることは決然たり、宋儒性を理と見、生を知覺運動と解せらるゝによりて、かくのごとく違却あり、生付の上にて善を見るときは、辯說をまたすして、をのつから明白なり、又犬牛の段を、理の性のちかひと見るときは、宋學の性說に符合する事なれとも、此一章最初より生之謂レ性

れさることをしらす、孟子是をさとさんか爲に、犬之性は牛の性のことく、牛之性は人の性のことく、何もちかふことはなきかといへり、是は理のなきことをあけてなちらるゝなり、告子何ほと執拗なりとも、犬牛も人も、其性一同たかひなしとはいはれす、是によつて、孟子人の性を善と見たまふこと、自然にしるへし、犬の性はかれかことく、牛の性はかれかことく、人の性はかくのことく、是非をわきまへ善惡を分ちて、道にすゝむへきは、皆氣質の異同なり、然らは氣質の中にて、只人の性のみ善なること明らかなり、孝經にいはゆる天地之性人爲ㇾ貴と是なり、かくのことく解すれは、孟子の意明白端的、少もたかふことなし、然るに先儒性善を本然の理とせらるゝによつて、此章の問答、畢竟不完の語になりて、かへつて後世の惑をひらく端となる、

先儒の説にしたかふときは、萬物の生、理一分殊にて、人物鳥獸の生、そのもとは皆一大極の分殊なり、氣のうけやう正通偏塞の異同あるによりて、人は仁義禮智の性を全して、物は無智蒙昧にて、義理のわきまへなしと、然れは物の性人と異なるところは、もはら氣にありて理にあらす、故に中庸或問云、人物之生、理同而氣異と、是宋學の定説なり、然るに孟子此章の集註に云、以ㇾ氣言ㇾ之、則知覺運動、人與ㇾ物若ㇾ不ㇾ異也、以ㇾ理言ㇾ之、則仁義禮智之稟、豈物之所㆓得而全㆒哉と、此意なれは、人物の異同は、もはら理にありて、氣は同しきことと見えたり、中庸註の意とうらはら矛盾す、胡雲峯なと品々分疏あれとも、その説明かならす、畢竟聖賢の書には、理氣の差別なし、後世の學、理といふものを立るによりて、かくのことく齟齬することを出來れり、

て、性の善にたとへられたる上は、孟子の性善といふと、氣質の上、已發の後によりて見たまふとおるへし、

水を以て性にたとふると、はしめて孟子にあらはる、宋朝の先儒にも、此たとへを取らるゝこと多し、其内たとへの取やう同しからす、孟子は專ら上下の上に就てたとへ、後世は專ら清濁に就てたとふ、是も性の見やうちかひたるゆへに、たとへの取やうも自ら相違するとなり、孟子は人を活物と見、善にすゝむとを、次第に成長すと見たまふによりて、水のなかれて下に就を以て人の性の善にたとへ、四海に至るを以て仁の極功とす、七篇のうち一句も清濁に就てたとへらるゝとなし、後世の諸儒は、性の善を理と見、人欲の蔽を水の濁のとくにおもへるゆへに、そのつから清濁に就てたとへをとる、性理大全に、性を水にたとふる說二十三條あり、とく〳〵く清濁の上に就て說をなして、上下のたとへなし、根本異るによりて、そのつからかくのとく相違するとなり、明の羅整庵困知記に此差別心付たりと見えたり、然れとも宋朝の性の說孟子の意にあらさると看破せさるによりて、二說を合て性の說はしめて備るといへり、是は調停兩可の說にて、兩方をあつかひたるものなり、辨別あきらかならす、

孟子又告子にこたへて、然則犬之性猶ニ牛之性ー、牛之性猶ニ人之性ー歟といへり、孟子のいはゆる性善は氣質に就ていふと決然たり、第一の明證なり、告子は只人の生付を性とおもひ、白羽白玉白雪の白、皆異なるとなしといへり、凡生ある物はみな性あれとも、それ〳〵に差別ありて、一概にいは

世性の說決定す、然れとも孟子も又たゝ理はかりを說て、氣質の上樣々あることを說たまはさるにより て、荀楊韓子の說おこりて、後世の人までも疑ふこと多しと、朱子曰、孟子說レ性善、但說二得本原處一、下面亦不下曾說二得氣質之性一上、所以亦費二分疏一、北溪陳氏曰、孟子道二性善一、是專就二大本上一說來、不三曾發二出氣稟一段一、所以啓二後世紛々之論一と是なり、然れとも孟子のいはゆる性善といふものも、其まゝ氣質の上に就て善を見たるものにて、理に就ていふにあらさる事、其證斑々たり、

先儒の說におもへらく、告子公都子の徒、たゝ氣を認て性として理をしらすと、然らは告子公都子さまゝゝの說を擧て、孟子性善の說を疑ふに、孟子の御返答に、汝らかいはゆる性は、皆氣質の性にて、性の本にあらす、吾いはゆる善は、本然の理をさしていふと、端的に一句を說破せられは、告子公都子も平伏して、萬世學者もしるしとするところあるへし、然るに其事はあけられすして、先より水無レ分二東西一かといへは、たゝ無レ分二上下一乎とこたへ、先より生之謂レ性といへは、たゝ犬之性猶二牛之性一、牛之性猶二人之性一與とはかりのたまひて、究竟のことに及はす、然れは孟子のいはゆる性、告子公都子等のいはゆる性、皆氣質の上に就て、其善不善を辨しられたるものにて、理氣の差別にあらさること又明らかなり、

孟子曰、人性之善也、猶二水之就一レ下也と、此語にて、孟子性善之說、氣質に就て見たまふこと尤明白なり、何そなれは、水といふものは、流出たる上にこそ、上へ流れ下へ流るゝの差別もあるへし、いまた源よりわき出さるさきには、上へ流るとも下へ流るゝともいひかたし、然るに水の下るを以

にす、

孟子以前性に善惡の說なし、孟子にいたりてはしめて性善といへり、宋朝以來是を本然の性といふ、孟子の意にあらす、孟子のいはゆる性善も、其まゝ氣質の上に就て善を見て、四端の心良智良能と說と同しき事にて、本然の性にあらす、大抵孔子のときは、周室衰微すといへとも、先王の遺風尙存して、人々道を行はんとおもふ志あり、それゆへ夫子は、平生人にをしゆる、たゝ仁に依り仁を好と云、其外禮義智勇ましへ擧て、をしへをしめしたまひ、心性の說甚まれなり、孟子のときにいたりては、又百餘年も過て、世上ます〳〵壞亂に及て、人々仁義を行はさるのみならす、自暴自棄の域におちいりて、自己一身を見かきり、善にすゝむことならさるものと思ふ、孟子これをすゝめん爲に、人々の性はもと善なるものにて、をしひろめさへすれは、其まゝ仁にいたるとをしへたまふ、故に曰、人々有$_{レ}$貴$_{ニ}$於己$_{一}$者、弗$_{レ}$思耳と、それゆへ齊宣王、若$_{ニ}$寡人$_{一}$者可$_{ニ}$以保$_{レ}$民乎哉と、自身にもこゝろもとなくおもはるゝに、胡齕かこ葉によつて、以$_{レ}$羊易$_{レ}$牛の事を擧て、是心足$_{ニ}$以王$_{一}$矣とのたまふ、天下に遍覆する仁も、此良心よりおこるといふこと、其わけ最分明なり、仁義禮智の理、性のはしめに全しといふにあらす、

先儒の說におもへらく、本然の性は一理なり、氣質の性は樣々なり、古今性をいふ人、荀子楊子韓退之のとき、何れも皆氣質の上に就てせんきしたるゆへに、或は惡と說き、或は善惡混すと說き、或は三品ありと說て、一定の說なし、孟子はもはら本然の上に就て、善と定めたまふによりて、萬

出するごとく、磨中にあるは未發なり、盤中へ落るは已發なり、磨中より出て、いまた下へ落さるを繼善といふ、まさに下へ落んとする處を成性といふ、委しきことは通書の註にあらはる、北溪陳淳の說には、孟子のいはゆる性善は、もと易の繼レ之者善也と云より出つ、その中易の語は、夫子造化源頭の處に就てこれをとく、孟子易の語をかりて、人分上に就て說といへり、然れとも孟子の說易より出るといふ事いふかし、とかく性と云は、人の生質の事なれは、造化上に就て是をいふこと、聖賢の旨にかなはす、

愚竊に按するに、易の此語は、上の一句は天道を說、下の數句は專人道のことを說て、造化のことにあらす、一陰一陽之謂レ道は天の道也、繼レ之者善也といふは人の道なり、立二天之道一曰二陰與一レ陽、立二人之道一曰二仁與一レ義と同しきこゝろなり、これを繼といふは、繼レ天立レ極の繼のごとく、天地の道を裁成補相して、天の工を繼は人道の善、即仁智の類なり、これを成といふは、成德成功の成のごとく、物を成就する事なり、此道を修爲して成就するは、人の性の善なるゆへに、天地の道をたすけて、仁智の德を成すといふ意なり、此次に云く、仁者見レ之謂二之仁一、知者見レ之謂二之知一、百姓日用而不レ知と云々、是は上の句を承て、いはゆる善といふもの、仁者は是を仁と云、智者は是を智と云、百姓は常々これを行へとも、蒙昧なるゆへに、其道たる事をしらすといふことなり、本造化流行の事とはこゝろへかたし、先人存在の日、此章のわけはくわしく傳へされは、易の本旨如何と覺束なし、玩レ易の次、參伍考究して、かくあるへしと漫に臆見を述ることかくのごとし、古今學變の內にこれを詳

わけちかひたり、桀紂陽虎かことき者は、をしまはしていへは愚なれとも、黠智なる惡人にて、下愚とは云かたし、大抵聖人のをしへは、もはら世間人物の上に就てこれをしめさる、世に一等愚昧なるものは、何ほとをしへてもよくならす、是を見て下愚不ㇾ移とのたまふ、もと何の疑ひもなきことなり、後世理氣の說よりいへは、いかやうの愚昧なるものも、堯舜一躰の理を具へたるうへは、移るへからさるの理なし、ゆへにさま〳〵の分疏出來たり、然らは聖賢の所ㇾ謂性とは、專ら氣質の上に就て大概に說て、一理をさして性とするにあらさること、尤分明なり、

孔子の性をのたまふこと論語にあらはるゝは、たゝ上にあくる一章のみ、易の說卦に、窮ㇾ理盡ㇾ性以至二於命一といへり、又繼ㇾ之者善也、成ㇾ之者性也といへり、易の十翼孔子の作たること、司馬遷以來言出したる事なれは、此語孔子のこと葉と定かたし、中庸に又率ㇾ性盡ㇾ性といふことあり、然れとも何れも人の生れ付をさして性といふ、理をさしていふにあらす、

繼善成性の事、程子以來其說まち〳〵にて、にはかに得心しかたし、程子の說に、人生而靜以上不ㇾ容ㇾ說、才說ㇾ性時、便已不二是性一也、凡人說ㇾ性、只是說二繼ㇾ之者善一也、孟子言二性善一是也と、此語にては、性の本躰未發のところは言語にわたらす、善と名付るは第二義のこと、易孟子も至極の說にあらすといふことなり、然れともまだ人の性の上にての噂なり、朱子にいたりて、未發已發の間に於て、二層に分て陰陽の象をとり、未發より已發にうつるところを、繼ㇾ之者善と云、まさに已發にならんとする所を、成ㇾ之者性と云、大極動靜の上に就て、これを說けり、たとへは磨礱の米穀を磨

下古今一定の理なり、聖人の爲にますこともなく、愚人の爲におとることもなし、然らは孔子何によつて、性は一なりといはすして、相近也とのたまふや、これを相近也と仰らるゝは、氣質の性は、智愚賢不肖相違あるやうなれとも、大様遠からぬものにて、たゝ習をつゝしむか、人の第一の事といふ意なり、夫子の性をのたまふ、氣質の上にていふこと分明なり、集註に此語を兼二氣質一而言也とあり、此は本然の性なれとも、氣質をも兼合てのたまふといふことなり、然れとも聖人の性をのたまふ、もはら氣質の性をわけていふ、これを兼てのたまふにあらす、

程子の曰、性即理也と、然れは天下古今の人、同一個の性なり、いかやうの下愚の人たりといふともうつるへからさるの理なし、然るに唯上智與二下愚一不レ移とのたまふは何そや、程子曰、下愚有レ二焉、自暴也、自棄也、然天下自棄自暴者、非三必皆昏愚二也、往々强戾而才力有レ過二人者一、商辛是也、聖人以二其自絕一於善一、謂二之下愚一、然考二其歸一則誠愚也、是は人の性は善なれは、うつらさる理はなきことなれとも、自暴自棄して、われとうつらさるによつて、畢竟愚人におつるといふ意にて、これを下愚といふ、故に其歸下愚也と說けり、又陽明曰、下愚不レ移、非レ不レ移也不二肯移一也、是同し意にて移らぬといふ理はなけれとも、自ら移らさるによりて下愚といふと、又朱子の門人王德脩の說には、此章は上章と一章にて、陽貨か爲に說たまふ、通してのたまふ事にあらすと、それにても同事なり、惣別愚といふは、おろかと訓する通にて、左傳漢書等の註にいはゆる白癡といふたくひ、一向無智蒙昧にて、寒暄の挨拶もならす、一行の文をよむことをも得せぬものをさしていふ、惡人といふとは

は、大抵世間の人、をしなへ料簡におもふは、人はたゝそれ〳〵の生付にて、聖人は聖人の生れ付あり、凡人愚人は凡人愚人の生れ付ありて、あしく生付たるものは、何ほとをしへてもよくならす、よく生れ付たるものは、すてをきてもあしくなることなしとおもふ、かくのことくおもへは、教は畢竟無益の事にて、人のよしあしはたゝ生付による、然れとも人をしへなければ、善にすゝむことなく、人の賢人君子となるも、皆をしへの功なり、これによりて、性相近也習相遠也とのたまふ、專ら教を主として、性を主とするにあらす、

性相近也とは、近きは不レ遠之謂、今の人のこと葉に九分十分と云、或は似たりよつたりといふかことく、大違なき事なり、人の生付は、差等あるやうなれとも、大かた似たりよつたりにて、大に相違する事はなし、たゝ平生の習のよしあしにて、大に相違する事なれは、人はたゝ習をつゝしみて、善にいれとのたまふことなり、然れとも世間の人に、又生れ付のよしあしといふことなきにあらす、上智の人は、何ほと惡人の中にをきてもあしくならす、下愚の人は、何ほと善人にしたしむといへともよくならす、然れともかくのことき人は、あまたの中に一人二人はあれとも、是を以てをしなへての證據とはしかたし、其外は皆習によつてをし移りて、よくすれはよくなり、あしくすれはあしくなるゆへに、唯上智與二下愚一不レ移といへり、是皆世間の人の上に就て、をしへをたてられたるものにて、性を尊てのたまふにあらす、

後世の學、もはら性を尊ふによりて、夫子の語に齟齬すること多し、後世の說の通りなれは、性は天

二句を擧て話頭として人に示したまはゝ、萬事をのつからおさまり、君につかへてはおのつから忠、父に事りておのつから孝、人に交りてはおのつから忠信に、是非前に交りてはおのつから辨へ、動容周旋おのつから則にかなひ、何の礙りもなきはすなり、然るに詩書六經以來樣々のをしへありて、孝弟忠信と說き、仁義禮智と說き、書を讀み師に隨ひ、其方まち〳〵なり、後世の學問よりいへは、本を捨て末におもむき、內を略して外をつとめ、簡易の捷法を示さすして、無益の勞擾をなすにあらすや、大抵聖人の人ををしゆるは、專ら事實の上に就て示したまふ、たとへは夏は葛を着冬は裘を着、うゆれは食を食し、渴すれは水を飮かことく、父あれは孝の道あり、子あれは慈は道あり、君あれは忠あり、臣あれは禮ありて、その事を習ひおさむるは、讀レ書理を考へて、其方をしらされはかなはさるによりてかくのことし、たゝ吾本心を淸淨にし、一毫の人欲を除きて、自聖人にいたるにあらさる事しるへし、後世專ら心性をたつとふによりて、吾心のおほはれをさりてはしめにかへるといふ、聖人人を敎るの法にあらす、

いにしへ性の說さたかならす、書經湯誥篇に、惟皇上帝、降二衷于下民一、若有二恒性一と、詩經大雅烝民篇に、天降二烝民一、有レ物有レ則、民之秉彝、好二是懿德一と、これ等の語、性の說のはしめなり、其內書經の文は、古文尙書の內なれは、成湯の本語とも定かたし、其後論語に夫子性をのたまふことは、たゝ性相近也習相遠也の一語あるのみ、此語の主意を考ふるに、後世の性の說とは各別相違にて、もはら人に習をつゝしみて敎を第一にせよとのたまふことにて、性をたつとふにあらす、其わけ

はたゝ一樣にて、氣質に樣々あり、これ先儒性說の大略なり、

然るゆへに、人の聖人に及はさるは、何ゆへそといふに、本然の性は、聖愚をわかつことなく本より一躰なり、然れとも氣質のうけやう樣々ありて同しからす、又物欲の蔽、耳目口鼻の欲、吾本然の天をくらましおほふによりて、聖人はかくのごとく高明正大なれとも、凡人はかくのごとく卑汙賤陋なり、それゆへ人の聖人たらんとおもふものは、氣質の偏をため、物欲の蔽をのそきて、本然の性にたちかへるやうにするときは、自己の眞性呈露して、性のはしめに復するなり、たとへは明鏡のくもりを拂ふて、本躰の明を得るかごとし、古歌に、濁り江の水のこゝろはすますとも、やとれる月の影はくもらしと、これは佛性を詠したる歌なり、本然の性にとりても又しかなり、程子曰、才稟ニ於氣ニ、氣有ニ清濁一、稟ニ其清一者爲レ賢、稟ニ其濁一者爲レ愚、學而知レ之、則氣無ニ清濁一、皆可下至ニ於善一而復中性之本上、これ氣稟に就ていふなり、朱子曰、渾然至善、未ニ嘗有一レ惡、人與ニ堯舜一初無ニ少異一、但衆人汨ニ於私欲一而失レ之、堯舜則無ニ私欲之蔽一、而能充ニ其性一耳と、これ物欲の蔽をさることをいへり、又大學章句、明ニ明德一を解して云、但爲ニ氣稟一所レ拘、人欲所レ蔽、則有レ時而昏、學者當下因ニ其所一レ發、而遂明上レ之以復中其初上也と、これ氣稟物欲を兼ていへり、然れともこれ皆佛老の說におちて、聖人の旨にかなはす、

宋朝諸儒の學術の通りなれは、人々の聖人に及さるは、只人欲のおほはれのみ、これをさへのそく時は、聖人の地位立ところにいたるへし、然らは聖賢の人ををしゆるは、平常たゝ無欲主靜等の一

訓幼字義卷之六

性　凡三十三則

性といふは、人の生れ付のことなり、董仲舒云、性者生之質也と是なり、聖賢書中にいはゆる性、皆人の生付をさしていふ、孔子のいはゆる性相近也、孟子のいはゆる性善、何れもその通りなり、宋朝以來の說に、性に本然氣質の二ッをわかつは、聖人の意にあらす、

本然氣質の性といふことは、もと橫渠張子より始る、正蒙云、形而後有二氣質之性一、善反レ之則天地之性存焉、故氣質之性、君子有レ不レ性者一焉、此說近思錄第二卷にのす、朱子に至て本然氣質の名あり、本然の性とは、人に具りたる理を云、天に在ては命と云、人に在ては性と云、物に在ては理と云、皆一大極の理なり、性に在ては分て是を仁義禮智といふ、目に見耳にきくへきものにあらす、人のかくのごとく生存しておるわけをいふ、堯舜の大聖より、匹夫匹婦のをろかなるものまて、凡有レ生者、これあらすといふことなく、又少しのちかひもなきことなり、たとへは天上の月は一ッにして、其影千海にうつるかごとし、聖人の爲にます事もなく、凡人の爲におとるにもあらす、只一樣の理なり、程子曰、性即理也、理則堯舜至二於塗人一一也、朱子曰、性者人生所レ稟之天理也と是なり、氣質の性とは、人の生付に樣々あるをいふ、智惠あるものあり、愚なるものあり、剛强なるものあり、柔弱なるものあり、其外品々のかはり、まことに千差万別なり、是を氣質の性といふ、畢竟本然の理

來今、孰無二此心一、心爲二形役一、乃獸乃禽と是なり、これにて古今敎法學同の異同を見つへし、予故におもへらく、心はたとへは火のごとし、飲食を烹とゝのへ、幽暗を照らすに、これなけれはかなはす、天下の人日々に其利益をかふむること、まことにかきりなし、世の中の物、これほと重寶なるものはなし、然れともときによりて、其あつかひやうあしけれは、居宅をやきほろほし、人物を燒ころし、其害又おひたゝし、これ故常々に、火燭小心にして、突(かまどくち)をまけ薪を徙し、其利をうけて、みたりならさるやうにするか、火を愼むの法なり、孟子に、本心と云眞心と云、先立二乎其大者一といふの類は、火の功用を稱して、よくすれは物をてらすの德あることをあらはすなり、孔子操存用捨をのたまふは、火の用心をしてつゝしむことをのたまへり、後世にもはら心をたつとみて、物欲におほはさるゝをいとひ、默座澄心するの類は、燒亡の害をおそれて、ふかく灰中にうつみをくかごとし、是皆佛氏のともから、人倫をいとひすてゝ、山林に屛居し、たゝ此心の孤明歷々たることをたつとみて得ところの見解なり、聖人の道とは水火の違あり、其說儒中に傳り、もはら本心をたつとみて、聖人のいはゆる仁義禮智といふもの、即此心なりとこゝろ得て、遂に仁は即心なりといふ說おこれり、先儒其差別をわかちて、有無感滅の說ありといへとも、畢竟粘骨着皮して分明ならす、只まさに語孟二書によりて、其わけを勘辨すへし、

訓幼字義卷之五　終

形あれは、明はほろふることなく、水火の質存するときは、寒熱の性たかふことなし、是を二ッにして、違と云存と云ことはいぶかし、畢竟聖人のをしへには、仁義を以て道として人ののりなり、然るによりて、心の此のりに違はさるを不ㇾ違ㇾ仁と云、此のりを以てこゝろをおさむるを以ㇾ仁存ㇾ心と云、先儒は仁を性と見られたるによりて、穀種にたとへ鏡にたとへて、心即仁といへり、それゆへ聖人のこと葉と矛盾することあり、其わけをかんかへすんはあるへからす、又仁の條下に論するわけとあはせ見るへし、

大抵心といふものは、よくすれはよくなり、あしくすれはあしくなる、善をなすもこれよりなし、惡をなすもこれよりなすことなれは、しゐてたつとふへきにあらす、又いやしむへきにあらす、堯舜の仁覆㆓天下㆒も、其もとは既竭㆓心思㆒より出ることなれは、心まことにたつとふへし、桀紂か天下を失ふも、本心にあらすと云なから、惡事をたくみ惡逆をなすも、樣々思慮計謀を運してなすことなれは、心のはたらきにあらすといふへからす、もし又道といふものは、是によれは人たり、よらされは人たるへからすして、たゝ一すしに善にいるへくして、惡におもむくへからす、それゆへ聖人は、道をたつとみて、心をのたまふことはまれなり、其得失のしるしをいふには、常に仁不仁をのたまふ、孟子曰、三代之得㆓天下㆒也以ㇾ仁、其失㆓天下㆒也以㆓不仁㆒、又曰天子不仁、不ㇾ保㆓四海㆒、諸侯不仁、不ㇾ保㆓社稷㆒、卿太夫不仁、不ㇾ保㆓宗廟㆒、士庶人不仁、不ㇾ保㆓四躰㆒と、仁といふは即道なり、後世には、其得失のしるしをいふに、かならす心をいふ、范浚心箴云、是身之微、太倉稊米、參爲㆓三才㆒、曰惟心耳、往古

ゝめていふときは、色をこのみ食を甘ふの念を欲の第一とす、故食色性也といへり、然れとも夫婦居レ室朝夕に食事をいとなむは、人道の常なり、然れは色をこのみ食を欲するのこゝろを、一概に形氣のわたくしにて道心にあらすといふへからす、其證據は、異端のをしへには、妻子をはなれ蔬菜一食して、食色の念をたつ、儒者より非道といふ第一の事なり、然れはこれを形氣のわたくしになるといひていやしむへきや、聖人の道は、人によりて敎を立て、敎を立て人をしゆるにあらす、故に率レ性之謂レ道といふ、然れとも人の性分さま〳〵にて、昏明剛柔、或は過或不レ及、聖人これをおさむるに、禮義中道を以てのりとして、これにたかはさるやうに示したまふ、人の性靈明なるによりて、よく其わけをこゝろ得て、法を恐れ道を重して、心に欲し願ふことをも、をさへつゝしむなり、故に良心と云仁義の心といふ、さきにいふ、道心は人心のうちにありて、わけていふへきにあらさること、是また證すへし、

聖賢の書に、仁と心と並べのたまふことあり、其心三月不レ違レ仁と云、以レ仁存レ心と云の類是なり、仁と心と一といはんか二といはんか、先儒程子其異同をわかちて曰、心譬如二穀種一、生之性便是仁、陽氣發處乃情也、是は仁を心の生理と見られたるゆへに、かくのことくいへり、余景思問二心之與一レ仁、朱子曰、仁字是虛、心字是實、如二水之必有一レ冷、冷字是虛、水字是實、心之于レ仁、亦猶二水之冷火之熱一、又曰、仁即是心、心如レ鏡相似、仁便是箇鏡之明と、これはたゝ仁を心に具る理と見られたるによりてかくいへり、此等の說によれは、人の生ある内に、仁にたかふといふことはあるまし、鏡の

なり、無欲寡欲の事、その通りにいへはきこへたるやうなれとも、先儒の本旨を尋る時は左にはあらす、無欲主靜といふことは、論語の古註にもあることなれとも、宋學の旨のごとく精しきことにあらす、本周濂溪の大極圖說、並に養心亭記と云文より出つ、記の文は、張宗範と云人の亭を養心と名付く、周子爲ニ之說一、性理大全にも是をのす、其文に云、孟子曰、養レ心莫レ善ニ於寡欲一、其爲レ人也寡欲、雖レ有ニ不レ存焉者一寡矣、予謂養レ心不レ止ニ於寡而存一爾、蓋寡焉以至ニ於無一、々則誠立明通と云々、朱子大極圖解に用レ之而云、敬則欲寡而理明、寡レ之又寡以至ニ於無一、則靜虛動直而聖可レ學矣といり、是によりて見れは、周子朱子のいはゆる無欲といふことは、孟子の寡欲といへるを不足におもひて、無欲といへると見えたり、もし又孟子のいはゆる寡欲といふものをあしき欲とするときは、これを寡ふすといふことあるましきことなり、それにては、あしきことをも少はなしてもくるしからしと、莊子に所レ謂、爲レ惡無レ近レ刑といふの說におちて、聖賢の旨にあらす、孟子の意決して左あるへからす、とかく欲といふものは、人のかならすあるへきことなれは、禮義を以てのりとして、これにたかはさるやうにし、大樣はすくなきやうにせよといふ聖賢の常訓、まことに萬世に推して弊なき事なり、然るにこれをかならす無にせんとおもふときは、何をのりとして道にいらんや、後世に人心人欲さま／＼の分疏あれとも、畢竟矛盾することをまぬかれす、須辨すへし、

人欲を惡といふはいふにおよはす、人心は形氣のわたくしに出て、道心の命をきくといふも、あたらすとおもふ、まつ欲といふは、聲色臭味居處衣服、四支の安樂ならんことを願ふの類にすきす、つ

其異同をあくることかくのことし、

天理人欲といふことは、後世宋朝以來もはら善惡のかへ名として、聖人のことを説ては、盡二天理之極一、而無二一毫人欲之私一といへり、此こともと禮記樂記の篇に出つ、人生而靜、天之性也、感二於物一而動、性之欲也と、其下に云く、人化レ物也者、滅二天理一而窮二人欲一者也と、陸象山是を非としておもへらく、天理人欲之言、亦自不二是至論一、若天是理人是欲、則是天人不レ同矣、此其原蓋出二於老子一、樂記曰、人生而靜、天之性也、感二於物一而動、性之欲也、物至知、知而後好惡形焉、不レ能レ反レ躬、天理滅矣、天理人欲之言、蓋出二於此一、樂記之言、亦根二於老氏一と、此意は禮記の意にては、天はもはら善にして、人はもはら惡なるといふ、聖人の旨にあらすと、其説まことにことはりなり、然れとも禮記の本文を熟讀するに、滅二天理一而窮二人欲一者也といへり、これをきはむといふからは、人欲といふものをはしめよりあしきものとするにあらす、それをほしゐまゝにして、重疊至極するときはあしきとなり、然れは天理人欲といふことは、禮記より出ることなれとも、後世のことく人欲といふものを惡のかへ名とするにあらす、いはんや孟子にも、寡欲といふことありて、無欲といふことは見えす、然れは後世一毫人欲のわたくしなしといふは、あたらさることあるへし、

或人の云、孟子に寡欲といふは、人心のあるへき欲を云、是を節にしてすきさるやうにすることとなり、人欲のわたくしといふは、人心のなかれて惡におちいるを云、是はすこしもあるましきものなり、故に先儒無欲主靜の説あり、何そ一概に論すへけん、曰人心人欲のことは、前に詳に論する通り

るもの、其こゝろ禽獸虫魚とことならすして、別に道の字をかりて道心といふて、はしめて義理の心あるへきや、人心といふ内にすくに善なることしるへし、夫子曰、人能弘レ道、非二道弘一レ人と、程子も又いへり、人外無レ道、道外無レ人と、道をはなれて人の立へきや、夫子又曰、人之生也直と、孟子又曰、人性之善也、猶二水之就一レ下也と、然れは人心を形氣にもとつくといふへきや、畢竟人の性を古來樣々にいへとも、天文を考へ地理を正し、上千百歲のむかしをしり、後千百年のすへを推し、億万の人上一人をいたゝきて、親をおくり子をそたてゝ、千万里の遠きところのことをもしる、天地も人なけれはたゝす、人性の靈にあらすんは然らんや、性の善惡誠に論するにおよはす、然れは人心道心の名目わかれたることうたかふへし、

人心道心の外に、又天理人欲といふことあり、朱子の說は、中庸の序に述らるゝ通りにて、人心道心の二ッは、上智下愚ともに、あらすといふことなし、これをおさむることをしらされは、天理の公つゐに人欲の私にかたすと、畢竟人心はあるへき物なり、人欲はあるましきものなり、此二ッ同しからす、程子の說又朱子とことなり、遺書に云、人心私欲也、道心正心也、又云、人心惟危人欲也、道心惟微天理也と、道心人心をすくに天理人欲と同しき事に見られたるなり、陽明は程子の說をとりて、おもへらく、人心之得二其正一者即道心、々々之失二其正一者即人心、非レ有二二心一也、程子語若二分析一、而意實得レ之と、傳習錄に詳なり、王子は合一をこのまれたるによりて、程子の說を是とせらるゝと見えたり、此ともと論語にあらはれさることなれは、強て討論におよふことにあらされとも、しはらく

人心道心といふこと、今日人々の上に就て見るに、まことにかくのごとく見ゆることなり、然れとも上代の風義は、もはら天を敬し民を愛するの上にてをしへをたてられて、心性等の微妙なることは曾て見えす、舜禹授受のときに、かやうの事はあるましくや、いはんや論語孟子によりて見るに、從ニ心所一欲不レ踰レ矩と云は人心に似たり、存ニ乎人一者豈無ニ仁義之心一哉といふは道心に似たり、然れとも孟子に仁義之心といふは、すくに人心の上に就て見たるものにして、人心をはなれて仁義の心といふものあるにあらす、それゆへに仁人心也とあり、然るに人心道心と二つに立わけたるところへかたし、其上先儒の說のごとく、形氣のわたくしになるを人心といひ、性命の正にもとつくを道心といふと、其よりて出る所をわかつこと尤疑はし、大抵天地の間に並生するもの性あらすといふことなし、飢飽寒暖のおぼへ、牝牡利害の念は、人と物とかはることなし、物はたゞ此こゝろはかりありて、是非をわきまへ義理をしることなし、人は此こゝろの內に、是非を辨まへ義理をしることあり、これを食にたとへんに、五穀はもとより食ふへし、糠覈も亦食ふへし、糠覈は食ふへしといへとも、人をやしなふの味なし、五穀は食ふへくして、またよく人を養ふ、人心もまたしかなり、これ萬物の靈として、天地の性人をたつとしとするゆゑんなり、然れは道心といふものは、人心の中にあることにて、わけていふへきにあらす愚又おもへらく、人心といふは食色の心なり、道心といふは義理の心なり、然れとも食色の心は、禽獸虫魚凡生あるものに、あらすといふことなし、人といふものは、頭圓に足方に、萬物の中にひとり靈なりとして、天地と並立て三才といふ、然るにすてに名付て人た

君子小人の差別もなく、いはんや舜のときに在て是を分化して、其地すてにおるへしとあるからはせむへきの君長もあるましきことなり、又瞽亦允若、至誠感ㇾ神、矧茲有苗といふとあり、これも心得かたし、瞽叟といふは現在舜の父なり、古人は質朴にして、物ことに遠慮することなしといへとも、禹の舜の命をうけて征伐したまふに、瞽叟を三苗にたとへて、矧茲有苗といふことは、あるましきことなり、是にては瞽叟は三苗よりあしきと聞ゆ、禹の時鯀のことをさへ遠慮していはすと、註者爲ㇾ親者諱也といへり、然れは瞽叟の事を引て三苗にたとふるは、附會のこと葉にて、孟子に載る逸書を取あはせて、つくろひたるものと見えたり、此等のことは、何れも人心道心のことにあつからさることなれとも、何れも附言のことたしかにしれたる上は、人心道心の說も同しき例にて、後世より取あはせたること葉にて、舜禹の本語にあらさることをあらはさんかために、これを論しおよほせり、

先人諸友と會して、荀子の書を讀て、解蔽篇に、道經曰、人心之危、道心之微、危微之幾、惟明君子而後能知ㇾ之と云ことを見出せり、今の古文尙書のこと葉は、此所より取きたりて、舜のこと葉に取合するなるへしといへり、荀子の本文、この前に舜の事あり、又精一の說なとも見えたり、かやうのことによりて、古文を僞撰するもの、允執ニ厥中一といふこと葉に附會すると見えたり、荀子の註に、今虞書有ニ此語一、而云ニ道經一、蓋有道之經也と、然れとも荀子の註は、唐の大理評事揚倞か作なれは、只今の書を見て、後世よりこれをいへり、本より證據とするにたらす、詳なることは中庸發揮の綱領にあらはせり、予亦大禹謨辨をあらはして、其意を述ふ、

たるゆへに、これを古文尙書といふ、其おりしも、武帝の子戾太子の事に付て禍ありて、世上擾動して、學問の沙汰におよはす、古文尙書を取あくる人もなし、これによりてその書すたれて行れす、其後四五百年を經て、南北朝の比より、古文尙書といふもの稍世に行れて、唐のときに註疏を作り、古文今文を合て五十八篇あり、今の蔡傳も其通なり、そのかみ孔壁より出る古文はまことに上代の眞書なるへし、然れとも漢の時にほろひて傳なし、後にいつか古文といふは、孔壁の書に名をよせたるものにて、眞書にあらす、大禹謨五子之歌等の篇是なり、先儒朱子吳臨川明の國子學正梅鷟歸震川郝京山の說には、何れも古文の疑はしきことをいへり、大禹謨の一篇も古文尙書の內なれは、危微精一のこと葉、舜禹授受の辭といふこと信用しかたし、漢武より後四五百年の間、後漢の鄭玄禮記の註、三國韋昭か國語の解、晋の杜預左傳の註にも、古文書にいへる辭を引たる書は、何れも逸書と註して篇をあらはさす、そのかみ漢魏兩晋の時には、古文尙書といふもの世間に行はれすと見えたり、其後年數はるかに過て世に出る事、誠にうたかふへし、

大禹謨の一篇に就ていふに、疑ふへきこと多し、三苗征伐のことのことき、堯典益稷及ひ呂刑に載る樣子を見れは、何れも舜攝政のときに事すみて、堯の代のことなり、然るに大禹謨には、舜の世にも又禹の征伐したまふこと見えたり、他の篇に載ることと符合せす、先儒さま〳〵分疏ありといへとも、何れもあきらかならす、又三苗をせめて曰、君子在レ野、小人在レ位とこれまた疑ふへし、君子在レ野小人在レ位といふは、夏の桀商の紂王なとをせめては相應なることなり、三苗の國は、人面獸心の國にて、

の上にも、過不及の差なし、故曰惟精惟一、允執二厥中一といへり、堯の舜にさつけたまふは、たゝ允執二其中一といふの一句はかりなり、禹の德舜におよはさるによりて、其行やうをさつけて、人心惟危以下の三句をのたまふといへり、其委細は、章句の序並に書經の蔡傳等を考ふへし、此こと古來言傳ふることなれとも、うたかふへきこと多し、堯の舜に授るに、允執二其中一といふこと、書經には見えされとも、論語堯曰の篇にたしかにあらはれ、まことに崇信すへきことなり、論語には、其あとに舜亦以レ命レ禹とはかりありて、別の子細なし、今の書經にのするごとく、此三言によりて彼一言も行はるゝといふほとの大切なることならは、論語にも其わけを少はのたまふへきことなり、成湯武王の事をさま〳〵あけらるゝ中に、民食喪祭等の事は、危微精一のこと葉にたくらふれはかるきことなり、是さへあけらるゝに、かの三言のこと曾て其さたなし、然れは古への書經には、此三言なきことしるへし、後世の附會に出ること明らかなり、

書經に今文古文の差別あり、今文といふは、秦の時の博士に、伏勝といふものありて、書經を全く記憶せり、漢の世になりて、景帝のとき、大常掌故晁錯をつかはされて、これを傳授せしむ、二十九篇あり、其より當代の文字にうつしかへて習ふによりて、今文尙書と云、今の堯典益稷等の篇これなり、その後武帝の時に、魯共王と云親王ありて、宮室を作ることをこのみ、孔子の舊宅をこほちやふる、其壁の中に、古記竹簡に書たる書經あり、是は秦の始皇の詩書をやきほろほす時、孔子の子孫古書のほろふるをなけきて、壁にぬりこめられたるなり、そのかみの古文字科斗の文にてかき

それゆへに心をいふには、人皆有二不レ忍レ人之心一、先王有二不レ忍レ人之心一、斯有二不レ忍レ人之政一と云、惻隱之心仁之端也と云て、慈愛の心を心の正躰とし、たとへをとるにも、流水にたとへ萌蘖にたとへ、火の始て然るにたとへて、次第に生長しすゝむをいへり、明鏡止水にたとへ、虛靈不昧を以て心の正躰とするとは、一句もなし、何そなれは、たとへをとるはそれ〳〵のすしあり、生物は生物にたとふへくして、死物をもつてたとふへからす、心は活物なり、明鏡止水は、物をてらすの妙用ありといへとも、無情にてうごくとなきものなれは、佛老の心をたとゆへくして、聖人仁愛のこゝろをいふへからす、詳なるとは字義童子問にあり、かさねて覼縷せす、

又人心道心といふことあり、是はもと書經の大禹謨の篇に出て、舜禹授受のときにのたまふといへり、人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執二厥中一とあり、先儒眞西山おもへらく、此十六字は、萬世聖學の根本淵源也と、此わけ朱子中庸章句の序に詳にいへり、人心とは、人の色をこのみ食を甘なふの心、道心といふは、義理をしり、辨ふるの心、心の虛靈知覺は一なれとも、人心といふものは形氣より生し、道心といふものは性命にもとつき來るゆへに、かくのとくに知覺すると同しからす、然るに人心はさかんになりて、惡になかれやすく、義理の心はかすかにして、取失ひやすきものなり、故に人心惟危道心惟微といふ、これを其まゝにさしをくときは、人欲さかんにして天理亡るによりて、人心道心のわかれをくはしくきんみして、まじはらさるやうにし、正しきところを守りて、純一にはなれさるやうにするときは、道心主となりて、人心ほしひまゝにならす、動靜言行

つとめとするゆへに、惡念のこゝろに着するはいふにおよはす、善念にても、心に滞るときはよろしからすとおもへり、白樂天惟寛禪師に問て云、垢即不レ可レ念、淨無レ念可乎とあるに、惟寛作レ偈答レ之云、如ニ人眼睛上ニ一物不レ可レ住、金屑雖ニ珍寶一在レ眼亦爲レ病と是也、この外かくのごとき説多し、儒家にも目下添レ火の説あり、何れも心を主としたるものにて、善惡をわかたす、心に一物をとゝむへからすとなり、先儒の説少々異同あれとも、畢竟此説におつ、須辨すへし、

先儒心を論せらるゝに、常に虚靈不昧と云、明鏡止水のごとしといふ、此こと大學定本語孟字義にこれを論しておもへらく、是皆佛老の説より出て、聖人の書には本より此語もなく、亦この道理もなしといへり、此ことは前に處々の條下にて、詳に論することなれは、互に通用して見るへし、わけて辯するにおよはす、虚靈不昧といふことは、はしめて大學章句に出、明鏡止水のことは、程子の説にはしめて見ゆ、聖人之心、如ニ明鏡一如ニ止水一と云類多くあり、これより以前の學者、又は聖賢のこと葉には、もとよりかくのごときことなし、虚靈不昧の四字は佛書にいつ、又は靈々不昧、了々常知なといふの類、多く禪佛の書にあらはる、明鏡止水のことは、莊子に運用してはみえされとも、鏡にたとへ止水にたとふること、所々に見えたり、神秀の偈に云く、身是菩提樹、心如ニ明鏡臺一、時々勤拂拭、莫レ遣レ染ニ塵埃一と佛書に心を鏡にたとふることおほきなり、具におくるにいとまあらす、何れも佛氏のをしへは、心を清淨無欲にするを至極とするゆへに、かくのごとくに譬喩をとる、其をしへの主意ちかひたるによりて、こと葉にあらはれても又かくのごとし、聖人のをしへは、人倫日用を重として、仁を至極とす、

ところのわけ同しからず、これも上に論ずる通りにて、常底の人は、何のわけもなく、我心にさかふときはいかり、したがふときは悦ぶ、聖人も其通りなれども、仁義より出るゆへに、人の善を見てよろこび、人の不善を見ていかる、四凶といふものは、惡逆無道にして、天下の害をなし、天下の人をそこなふて、仁政をさまたぐること甚し、然るによりて、舜のこれをにくみたまふこと、常の人よりもはなはだしく、すみやかにこれを放流して、すこしもゆるさず、大學曰、唯仁人放流之、迸諸四夷、荀子曰、仁者愛人、故惡其所以害之者と是なり、武王の怒も同しきことにて、一人の横行して天下の害をなすをいきどほりて、これを誅伐したまふ、故に孟子に之を大勇と云、聖人のいかりは、天下を太平にせらるゝによりて、時の諸侯にすゝめて、王請大之と說けり、怒の心に着せざるやうにせよとしめさるゝにあらず、怒はさきにありて己にあらずとは、尙以て說たまはず、仁義の道は人の標準なり、故に生付のよき人ほど、心のこれにたがふことすくなく、これをしたひ願ふの志ふかし、肉の味をしらず喜而不寐と云が如き、何も此しるしなり、故に聖賢の書には、このやうなる事をたつとみて、萬世にしるし置、後世の人にも、かくの如くにあれかしとしめさるゝなり、後世には心法を專らにせらるゝにより、かくの如きことと人心のやまひとなる、然るに聖賢の書に、此やうなること多きによりて、先儒の會通には、聖人は各別のこと、常の人にありては、心のやまひといふものにて、ほむることにあらずと、是皆老佛虛無空寂のをしへより出たるものにて、聖人の道と水火氷炭のちかひあり、佛氏は仁義禮樂をなみしほろほして、もつはら自己一心を淸淨にするを

迪なれば、喜怒哀樂ともに、留在してうつるときはよろしからず、然らば聖人の顏子を稱したまふに、何ゆへに不レ遷ニ喜怒一と言はずして、たゞ不レ遷レ怒とばかりのたまふや、喜怒ともに人心の用なれとも、其內いかりは逆德にて、すぐるときは人を害しそこなふ事あり、ゆへに喜怒をうつさすとはのたまはずして、たゞいかりをうつさずとのたまふなり、しかれば喜はたとへうつりても、ふかくとがむべからざる事をししるべし、たとへば人を招きて酒をくまんに、ふと招かざるの客來るとき、これに酒をすゝむともくるしからず、又一人のもの罪ありてこれを笞たんに、わきよりとりさゆる者を打擊せんは理なし、不レ遷レ怒もこの類にて、聖人は慈愛を本としたまふによりて、かく稱美し給ひ、後世は心を淸明にする事を主とせらるゝにより、喜怒ともにうつるをいましめとす、其差別を辨し考ふべし、

舜之誅ニ四凶一、怒在ニ四凶一、舜何與焉といふ事、わけてこゝろへがたし、喜べきの事怒べきの事はさきにあり、喜べきの事をみて喜び、怒べきの事に逢ていかるは、人心のはたらきなり、われにあり、これを哀樂の上にをしても同しき事なり、父母親戚の喪はかなしみの事なり、これをいたみかなしむは、わが心にさきを大切におもふがゆへに、悲哀愁傷してこれをかなしむ、凡人たるもの皆かくの如し、堯舜亦人耳、聖人とてもこれにかはる事なし、孝慈の心あつきゆへに、哀喪の心はかへつて常の人よりもあつかるべし、先儒聖人の心を淸淨虛明にして無心なるものと立られたるゆへに、舜のいかりは在レ彼不レ在レ己といふ、大にあやまれり、其內常人の喜怒と聖人の喜怒とは、よりて出る

らは、たとへ書を讀といへども、一字も胸中にとゞまることなし、やゝ謹厚なるものは、つとめて書をよみ義理をせんぎすといへども、しゐて講習討論することなし、これ又まことに學をこのむといふへからず、其厚く學問をすくものは、すでに其事を了すといへども、あとまでも尋したふてやまず、夢に見他の事をわするゝにいたるものはなり、正心の說を以ていふときは、是をも放心といひてとがめんや、梁の顧歡が黃雀の賦を作りて雀に禾を喙まれ、高鳳が書をよみて麥をたゝよはする如き、まことに記誦詞章のことなれども、學問に心をよせて他事を忘るゝこと、奇特なることなれば、これを正史にしるして、千歲の美談とす、又邵康節の易を好て夜不レ寐とあるも、同じきことなり、故に聖人の人をとるは、常々德をこのむ學をこのむなどと稱美し給ひて、こゝろの着することをいましむることはなし、周公孔子のことをしるすも、萬世學者に、かくの如くあつく道に志し、善をこのむやうにせよとの事なり、然るに其わけなしに、たゞに心の物に着するをいましむるは、聖人のをしへにあらず、常底の人にありていへば、放心といふものにて、聖人の上なれば、至誠の感といふはこゝろへがたきことなり、

先儒又顏子の不レ遷レ怒といふを正心の證據とせらる、程子曰、顏子之怒、在レ物不レ在レ己、故不レ遷、又曰、喜怒在レ事、則理之當二喜怒一者也、不レ在二血氣一則不レ遷、若三舜之誅二四凶一也、可レ怒在レ彼、己何與焉、如二鑑之照一レ物、妍媸在レ彼、隨レ物應レ之而已、何遷之有、朱子曰、事有二當レ怒當レ憂者一、但過了則休、不レ可三常留二在心一、顏子未二嘗不一レ怒、但不レ遷耳と、語類正心の條下にあり、先儒の說の

なり、

人心の物に感ずるは、各其このむとによりて感ず、其甚しきときは、心こゝにもはらにして、或は夢に見、或は他事を忘却するにいたる、只其事のよしあしを尋ぬべくして、一概にこれを心の動としていましむへからかず、其事善にさへあるならば、いましめとすべからざるのみならず、只まさに保ちまもりて、其心のうすろかさるやうにすべし、何ぞなれば、心の物に感ずる、是非邪正同しからず、常底の人は、心のおもむくと、聲色臭味の上にあり、ゆへに其感ずるも又聲色臭味の上に在て重しとす、楚の襄王の色に迷て神女を夢に見、般浩が官爵をむさぼりて空函を達するが如き、これまとに戒とすべくして、論ずるにたらず、聖人の善をこのむは、常人の聲色臭味をむさぼるがごとし、ゆへに善事を見善人に遇ては、心これに住着して、夢に見他事を忘るゝにいたり、孔子の周公を夢み、韶を聞て肉の味をしらざるが如きこれなり、舜は上聖の德を以て、至治の時にあたる、故に其樂善つくし美つくして、他の樂のをよぶべきにあらず、衆人もこれを聞ては、まとに悅ざるにはあらず、然れども好む心のあつからさるゆへに、きゝおはりて即やみ、心にとゞまるとなし、夫子は舜をしたふこゝろふかきゆへに、心醉神怡て、三月の後までも肉の味をしらざるなり、これ孔子の孔子たるところなり、夫肉を食ふときは食主たり、此ときに韶を聞の念いまた化せずして味をしらざるは、心不レ在焉といふにあらずや、これを今日學者の上にとりてもまた同しきとなり、怠惰無賴にして、學問をこのまざるものは、其生質のおとりて道に遠きものなり、かくのごときともが

ㇾ所、有ㇾ所者、不下從二心之虛靈一起上ㇾ念、而從二身之嗜欲一動ㇾ情也、又四書眼を引て云、有ㇾ所者偏也、偏起二于蔽一、偏蔽者、如何明二明德于天下一云々、是等皆本文を遷就したるものなり、有所と用ること、文字の中に多くあり、必着することをいふにあらず、近き言葉には、論語に如有ㇾ所ㇾ譽者其有ㇾ所ㇾ試矣、孟子に、人皆有ㇾ所ㇾ不ㇾ忍、達二之於其所一ㇾ忍仁也、人皆有ㇾ所ㇾ不ㇾ爲、達二之其所一ㇾ爲義也といへり、又將二大有ㇾ爲之君、必有二所ㇾ不ㇾ召之臣一といへり、有ㇾ所ㇾ不ㇾ忍、有ㇾ所ㇾ不ㇾ爲といふは、只其場ところをさして、しのひすせぬことあるといふまでのことなり、必しのびざるところに着し、せざる所にとゞこほるといふことにあらず、然れば忿懥する所ありといふも、執着有在するをさすにあらざることあるべし、然れば本文の意は、忿懥恐懼等の念の爲にこゝろを動されざるやうにすることゝ見へたり、

或人の云、大學に、心不ㇾ在焉、視而不ㇾ見、聽而不ㇾ聞、食而不ㇾ知二其味一といふは、放心のこと、孔子の忘ㇾ食肉の味を不ㇾ知とのたまふは、至誠のこと、是各別のわけ也、一概に論ずべからず、是を以て大學を難ずへからずと、これやむことを得ざるの說なり、正心の說によりていふときは、事の善惡をわかたず、たゞ吾心の着せざるやうにすることなり、然れば夫子の韶を聞て三月の後まで肉の味をしらざるは、留在といふものにあらずや、周公の坐以待ㇾ旦、孟子の喜而不ㇾ寐は、期待にあらずや、顏子の死をいたみて、慟するを覺たまはざるは、偏重にあらすや、これによりてしる、聖人のをしへは、もはら事の善不善を問て、こゝろの着すると着せさるとを以て受用とすることなきことあきらか

レ住而生ニ其心一の說に落て、聖人心をのたまふ旨にあらず、

先人大學定本をあらはして曰、發レ憤忘レ食、又曰、三月不レ知ニ肉味一、若以ニ大學一律レ之、則是雖ニ聖人一、又不レ免ニ放心一、豈可乎哉と、又語孟字義におもへらく、大學に仁禮を以て心を存する事を務とせずして、たゞに忿懥等の四ツのものなきことを欲るは、孔孟の血脈をしらざるが故なり、正心の字は、孟子にもあれども、正ニ人心一とあり、まさにこれを民のうへにほどこすべくして、己が身の上にほどこすべからず。畢竟仁義の眞を見ずして、剛ニ制其心一と欲ること、告子の見に類すといへり、然るに學者或は疑ひをいたして、兩方相通してさまたげ害することなしといへり、これは先儒の說をくはしく考へず、又聖人の主意を辨せさるゆへにかくいへり、其趣定本字義古義等にこれを詳にす、

或人の云、大學に正心の目を擧て、忿懥恐懼好樂憂患する所なしといふは、此こゝろなきやうにせよと戒るにあらず、此四ツのものは、人心のはたらきなれば、これをほろぼすべきにあらず、このこゝろありといへども、たゞ其ときにあたりて發動し、事すぐれば即やみ、着せぬやうにすることなり、有所の二字に氣を付べし、するところありといふは、忿懥にても恐懼にても、その一念心にとゞまりてはれざることなり、然るに字義に、忿懥恐懼することなきやうにいへるは誤りなりと難せらるゝは、本文の意にあたらず、曰有所二字のこと語類にもあらはる、曰四者只要下從ニ無處一發出上、不レ可三先有三在心下一、須レ看ニ有所二字一、又曰、有所是被ニ他爲ㇾ主ニ於內一、心反爲ニ他動一也、葛寅亮湖南講云、身有レ所者、從ニ身之氣質一用レ事、而著ニ於方所一之相也、黄大穉宜照解云、正ニ心之本躰空々洞々一、安得レ有

是四者、皆心之用、而人所レ不レ能レ無者、然一有レ之、而不レ能レ察、則欲動情勝、而其用之所レ行、或不レ能レ不レ失ニ其正一矣、此意は、忿懥恐懼等のこゝろは、人たるものゝかならずあることなり、然れども各其事にあたり、怒べくしていかり、喜べくしてよろこび、其こと過さるときは、この心其まゝ平にして、とゞこり着して化せざることなきやうにしてよろし、たとへば鏡の中に一物をつけざれば、よく萬物の影をうつし、秤の上に一物をおかざれば、よく萬物の輕重をはかるが如し、かりそめにも、此四ッの物心に執着して不レ化ときは、たとへば鏡の中に一物を有在するときは、あとより來りたるものをうつすことあたはず、秤上に一物を置くときは、物の重さをそふるが如し、是を心不レ正といふ、朱子の云く、好樂之類、是合レ有底、只是不レ可ニ留滯而不一レ消化、又曰、心不レ可レ有ニ一物、喜怒哀樂、固欲レ得ニ其正、然過後須ニ平了、又曰、事有レ當レ怒當レ憂者、但過了則休、不レ可ニ常留一レ在心、と是なり、語類に其目を三ッにわかつ、一には偏重と云、二ッには留在と云、三ッには期待と云、偏重と云は、かたへに一事に滯りて他事に心の付ざるを云、たとへば一人と對話して心もはらなれば、他の人の物いふことわが耳にいらさるか如き類なり、留在と云は、其事すぎさりてあとにこゝろのとゝまること、期待と云は、ことのいまだいたらざるに、先だちて待まふくることなり、此三ッのものを心不レ在と云、正心といふは、かくの如きのやまひなきやうにとのことなり、程子の定性書に、無ニ將迎一無ニ内外一といふことあり、將といふは、心におもひをくること、即留在なり、迎といふは、心にむかふること、即期待なり、何れも心の物に執着せざるやうにする工夫なり、畢竟佛氏のいはゆる、應無レ所

ることなり、書を讀道理を講求するも、おのづから其中にこもることなり、他なしと云而已矣といふ、其旨尤あきらかなり、其上陸象山の學、もはら本心を主として、讀レ書窮レ理ことをせんとせられず、集註に固非二一端一とあるも又これにあたりてのことなり、

先儒求二放心一のことを其高上に說なさる、然るによりて、これはかりにては禪見になるといふの遠慮あり、朱子の曰、人心纔覺時便在、孟子說レ求二放心一、求字早是遲了、又曰、只曰下知二其放一而求レ之斯不レ放矣上、而求之の三字亦自剩了と、是はわれ放心すとおもふところ即是求二放心一、別にこれを求るにあらず、しかるに而と云これをもとむるといふは、手ぬるきことにて、求るといふ言葉をいるゝにおよはすとなり、苦海無邊回レ頭是岸といへること、語類此所に引て、說得極好とあり、先儒の主意これらにて見るべし、もはら明心見性の說に出て、孟子の意と天淵のちかひあり、これはかりにては禪學とまぎるゝによりて、固非二一端一といへる、まことにことはりなり、然れども孟子の主意は、仁義の良心をもとむることなれば、もとより禪說にまがふの疑なし、

書經畢命の篇に、雖レ收二放心一、閑レ之惟艱といへり、これをふせぐといふときは、後世の放心の說にちかし、然れども畢命は古文尙書の內にて、南北朝よりこのかた世にあらはれ、後世の僞作なること、先儒よりも疑ひあり、然ればもとより證據としがたし、

大學に正心といふことあり、其章に云く、修レ身在レ正二其心一者、身有レ所二忿懥一、則不レ得二其正一、有レ所二恐懼一、則不レ得二其正一、有レ所二好樂一、則不レ得二其正一、有レ所二憂患一、則不レ得二其正一といへり、章句に云、蓋

ず、ふかく考へずんばあるべからず、
孟子に求二放心一といふことあり、これは仁義の良心をうしなひはなつをいふ、後世にいたりて、此心の散亂主なきことを放心といふはあやまりなり、此うちに動靜の二つを分て、昏昧放逸といふ、昏昧といふは、靜なるときの放心なり、こゝろのねいりたるやうにくらくなることを云、放逸といふは、動時の放心なり、心のちりて他事にひかさるゝことをいふ、かくの如く昏昧放逸ならざるやうにするを、先儒これを求二放心一といふ、何れも孟子の意にかなはず、前章にいはく、所三以放二其良心一者、亦猶二斧斤之於一レ木也と、又此章の首節に、仁人心也といふをうけて、下に有レ放レ心而不レ知レ求といへり、これにて、放心といふは仁義の良心を取うしなふことにて、たゞ昏昧放逸のこゝろをさすにあらざることしるべし、秦皇の儒士を坑にし、白起が降卒をころすが如き、是すなはち放心のけやけきものにて、これよりして下、不仁不義のことをして、何ともわきまへざるを放心といふ、これはすまじきこととおもひて、よきかたに心をよするを、是を放心を求といふ、本文をよく玩索し見るべし
孟子に曰、學問之道無レ他、求二其放心一而已矣と、これを無レ他と云而已矣といふは、此外又別義なきことしるべし、然るに集註に、學問の道固非二一端一とあり、これは求二放心一のことを坐禪觀法の如くにおもへるゆへに、これはかりにて書を讀み理をきはむる許多の工夫なければ、禪學に落るといふきらひありて、固非二一端一といへり、然れども孟子の一書は、仁義の二字より紬繹し來りたるものなれば、一の仁義の旨にあらざるはなし、然れば仁義の良心をうしなひたるを求るといふに事つく

語なれば、うたかふへきにあらず、是によりて、古聖人の所レ謂心といふもの、皆已發の上の心に就て説をなして、虚靈不昧の本躰をさすにあらざることと志るへし、

孟子より以前、心に善惡の説なし、論語に載る數語を考ふれば、何れも人心の上に就てときて、善と定たまふと見えず、孟子にいたりて、はしめて良心と説、本心と説、四端の心と説て、人心を善なるものといへり、これも性善良知良能の説と同しきことにて、自暴自棄のもの丶ために、道を行ふのもと已に具りたることを示したまふ、性即仁義、眞心本心即仁なりといふにあらず、漢唐の諸儒は、孟子性善の説に服せられざるによりて、眞心本心の説、世に倡ふ人なし、宋朝に至り、程朱より此かた、孟子を崇信せられて、性善の説聖門に功ありといへり、然れどもそのかみ心性の説さかんなるにより、孟子の所レ謂心といふものを理と見られたるゆへ、孟子をたつとぶといへとも、かへつて孟子の意をうしなへり、

孟子の所レ謂心といふもの、もはら已發の上に就ていへること、前に詳に論ずる通りなり、其上たゞ知覺のこゝろをたつとぶにあらず、かならず善心に就てこれを論ず、故に云、雖レ存ニ乎人一者、豈無ニ仁義之心一哉、又曰、人皆有ニ不レ忍レ人之心一、又云、惻隱之心、仁之端也云々と、又眞心と云本心と云、何れも其通りにして、物をふびんにおもひ、こゝろに義理を辨るをもとゝして、これによりて仁義にいたるやうにとのことなり、虚靈知覺の本躰に仁義の理そなはりて、其おほはれをさりてはしめに立かへるにあらず、其ゆへ孟子にも本心といひ、後世諸儒にも本心とあれども、さす所同じから

ことをのたまへり、夫眞金は、火に入りてやけず、土にうづもれてさびず、其性かたければなり、心といふもの、後世の說の如く、至貴至靈、眞金の不壞なるが如くなるものならば、あやうきことはあるまじ、よくすればよくなり、あしくすればあしくなりて、いたりてたのみかたきものなるゆへに、夫子も云々惟心之謂與とのたまふ、これにて聖人の所レ謂心といふもの、みな知覺の上にてのたまひて、虛靈不昧の本躰をさすにあらざること、はかりしるべし、

後世心學さかんなるにより、心の本躰に出入存亡といふことはあるまじきといふ疑あり、宋の時、范祖禹字淳夫といふ人あり、程子にしたがつて學び、唐鑑をあらはし、名高き人なり、其女子七歲の時に、孟子の此章をよみて、心には出入なきものなり、孟子は心をしらすといへり、伊川先生これをきゝて、此女孟子をしらずといへども、かへりて心をしるといへり、或人此事を擧て朱子に問て、これは伊川のゆるさるゝかそしらるゝかといへり、朱子の返答にいはく、此女必天資高、見此ニ心常湛然安定無ニ出入一、然衆人不レ能ニ皆如一レ此、若通ニ衆人一論之、心却是走作底物、孟子所レ引夫子之言、是通ニ聖人一論耳、又陽明の書にも、心に出入なし、出入は躰用の謂なりといへり、諸先生の說を通し見るに、畢竟こゝろの本躰には出入なしといふに極れり、大抵宋の一代は、前代より禪學さかんに行はるゝによりて、文武百官皆禪參をせざる人なし、幼少の女子までも、睿悟なる生付のものは、皆その訣を心得て、かく孟子をうたがへり、後世の說よりいへば、孟子にのする言葉は、もはら人心の上に就ていひて、まことにあらきことなり、然れどももとより孟子の語にもあらず、孔子の

するはあやまれり、先心といふものは、善きことをもおもひ、又あしきことをもおもひ、其好惡すること
さま〳〵にて、なりあひにさし置ときは、あしきこと多きものなり、それゆへ聖人のをしへは、仁義
禮智を以て、心をおさむるの規矩準繩として、人の心のこれにたがはざるやうに示し給ふ、論語にの
するところの言葉を考て知べし、何ぞなれば、心といふもの、後世の說の如く、虛靈不昧の眞躰なら
ば、心のまゝになし行ふて、自のりにかなひ、少もあしきことはあるましきなり、常人尙然り、況や
聖人は、天理の至極をつくして、一毫のよこしまなかるべし、然るに夫子七十の歳にいたりて、は
しめて從二心所一レ欲不レ踰レ矩とのたまふは何ぞや、こゝろのまゝにするときは、かならずのりにたが
ふこと多きゆへ、常々つゝしみたまひて、七十の境界にいたりて、心道と一致になりて、心のまゝに
ゆるしたまひても、をのづからのりにたがふことなきとなり、顏子の三月不レ違レ仁も同しとなり、道
は心をおさむるの物にて、心に理を具するにあらざること、これらの言葉にて推し知べし、
後世儒家の說におもへらく、心の嗜欲好惡樣々なるは、皆人心のしわざにて本心にあらず、本心と
いふものは、月の天上にあるが如く、淸淨虛明にして、一點のくもりもなし、人欲これをおほふに
よりて、のりにたかふこと多し、山谷晁無咎に贈る詩に、本心如二日月一利欲食レ之既と、是朱子明二明
德一の解の意にて、明鏡止水の說これによりておこれり、然れとも上段に所レ擧夫子の言葉を考ふれ
ば左にあらず、又孟子告子の篇に、孔子の詞を引ていはく、操則存、舍則亡、出入無レ時、莫レ知二其
鄕一、惟心之謂與と、これ人心のたのみかたく、よくすればよくなり、あしくすればあしくなりやすき

古の經書に、心を說ﾐと甚まれなり、詩經に中心藏レ之と云、書經に大哉王心といふが如きは、何れも泛然の言葉にて、工夫にわたるﾐにあらず、論語に心を說ﾐわつかに五處あり、七十從ニ心所一レ欲不レ踰レ矩と云、其心三月不レ違レ仁といふは、心の沙汰にあつかるﾐなれとも、其餘簡在ニ帝心一、無レ所レ用レ心、有レ心哉擊レ磬の類は、何れもひろく心を說たるものにて、善惡の沙汰におよはす、いにしへの聖人、專ら道を以て則として、心をたつとみさるﾐ、大略をしゐるべし、

古の書に心をいふﾐ、もつはら已發の上に就てこれをときて、未發の心をいふﾐなし、書經の洪範に五事を述て、貌言視聽思といふ、此處に心をいはされとも、人の五事を擧て、思ふといふは、心の思をさしていふ、孟子に、心之官則思、思則得、不レ思則不レ得也とあり、心の職は思慮するを以て職とするﾐとしるべし、又大學の正心の章にも、忿懥恐懼好樂憂患を以て其ﾐをあかす、これ皆已發以後のﾐなり、もし未發を以ていふときは、鐘皷のいまた聲を出さず、石火のいまだ光をあらはさゝるときの如く、此心寂然不動にして、一念もおこらざるときなり、わつかに思慮にわたれば、たしかに已發のときなり、いはんや忿懥恐懼等の儼然たる心をもつて、未發といふへからず、然るに古への書に、何れも思を心の職とし、忿懥恐懼等のﾐを以て、正心の條目とする時は、古人の心を說、もつはら已發の上にあつて未發の說なきﾐしゐるべし、

聖人の人をおさめ己をおさむるは、專ら道德仁義を以て目あてとして、一心を清淨にするﾐなし、後世は專ら一心を清淨にして、物欲を掃ふを至極とす、これによりて、仁義禮智を心に具るの理と

訓幼字義卷之五

心　凡三十三則

心といふは、人の思慮運用するところをいふ、もと別義なし、經書に所レ謂心といふもの皆此通りなり、後世に心に躰用をたて、一念未レ發の所を心の躰とし、思慮運用するところを心の用と云、宋朝以來の說にて、聖人の意にあらず、聖賢の所レ謂心は、皆已發に就てをしへをたてられたるものにて、詩書六經以來一句も未發の心をのたまふヿなし、

伊川程子云、心一也、有二指レ躰而言者一、自註寂然不動是也、有二指レ用而言者一、自註感而遂通二天下之故一是也、又云喜怒哀樂之未レ發謂二之中一、寂然不動者也、發而皆中レ節謂二之和一、感而遂通者也、此二章ともに近思錄にのす、これ先儒人心躰用の說なり、中庸系辭によりて此說出來れども、未發の中のヿは、中庸發揮に論する通り、本樂の德を稱したる物にて、心のヿにあらず、其わけ中の條下に論する通りなり、寂然不動のヿは、もと易之系辭に出つ、易無レ思也無レ爲也、寂然不動、感而遂通二天下之故一、非二天下之至神一、其孰能與二於此一といへり、此語もと蓍策の無心なるヿをいへり、曾て人心のヿにあつからず、本義云、易指二蓍卦一云々、人心之妙、其動靜亦如レ此と、本義にも此語は蓍のヿを說たるヿと註あり、程子以來、もはら心のヿに用ひらるゝによりて、本義に人心之妙亦如レ此と融通して註あり、然れども本文はとかく蓍策のヿなれば、人の本心未發の證據とはいひかたし、

下の君といふものにあらす、其最初を尋るに、桀か祖は禹なり、紂か祖は成湯なり、何れも世々の天子にあらす、仁愛の德ふかく、天下の人民あふきしたふによりて、天子となりて天下をたもちたまふ、然るときは、後世の子孫惡逆無道にして天下の害となり、万民におもひはなさるゝにいたりては、天下の君にあらす、獨夫といふものなり、故に孟子にいはく、聞レ誅二獨夫紂一矣、未レ聞レ弑レ君也といへるは是かためなり、孟子の言葉、湯武のためにしゐて君臣の名義をはつすにあらす、道自しかるへし、然れは湯武の放伐は、君臣の恩義たへるうへに、至仁を以て不仁をうつといふものなれは、道といふへくして、權といふへからす、其とまとに分明なり、これを權といふは、臣として君を伐を道といはれさるによりて、是を權といふ、又聖人にあらされは權を行ふへからすといふ、其說の通りなれは、君にてもあしきときは、時によつて聖人はうつてもくるしからすときこゆ、君といふ名ある上、何ほとあしきとても、うつてくるしからすといふことあるへきや、又吾聖人なれはうつへしとおもふ人もあるまし、是皆君臣の分上にて論せられたるゆへに、かくのことくにいへり、然るゆへに少しにても君たるへき行ひありて、君臣のよしみかゝりたるときは、これをうつといふことは甚道に害あり、もとより權ともいはれす、湯の桀を放ち武王の紂を伐も、過をあらたむるを願て樣々に待たまふこと久し、其罪貫きみちたる上、不レ得レ已してこれを伐、此ときには君臣のよしみたえたり、

訓幼字義卷之四　終

しきなり、然るゆへにその人をかたんして、未㆑可㆓與㆑權㆒とのたまふ、予故謂權非㆑不㆑可㆑行也、行㆑權是難、

湯武の放伐、伊尹の放㆓大甲㆒ことを、朱子これを權といへり、此說語孟字義に非しておもへらく、伊尹の大甲を放は權といふへし、湯武の放伐は道といふへし、權といふへからすと、讀者多く疑ひをなして、湯武の事を道といはれましといへり、是は湯武伊尹ともに、君臣分上にありて見るによりて、これを權道といふ、これまことにことはりなり、然れともかくのことく見るときは、かへつて道をあやまることあり、何そなれは、君といふものは、うやまひたつとみて、かりそめにもをろそかにせさるものなり、然るにこれを廢して遠きにうつしをくは、常々恭敬の禮にたかひたるによりて、これを權といふへし、心に如在もなくおもへとも、かくのことくせされは、たちまちに國天下をほろほさるゝによりて、いさめのためにしはらくうつしをく、伊尹のの大甲につかふまつる是なり、然るゆへに、居㆑桐三年、居㆑仁遷㆑義、あやまちを改めらるゝにをよひては、其まゝ迎へ奉りて、位にかへし國家を相續す、始終伊尹と大甲と、君臣のちなみたへすして放廢せるによりて、是を權といふ、湯武のことは、これとことなり、先君といふものは、民を安するを道とす、諸侯は一國を安んし天子は天下を安するを本とす、諸侯にて一國を安んせされは、天子よりこれを罰せらる、諸侯にあらす、天子にて天下を治ることあたはす、夏の桀殷の紂のことく、惡逆無道にして、賢人の肝をさき、孕婦の腹をさくかことくなる事をし、天下の人是日いつか亡と、のろひねかふかことくなるにいたりては、天

論語可二與立一未レ可二與權一といへり、これは人品の上に段々の次第ありて、可二與學一といふより、可二與適一レ道といふは得かたく、可二與適一レ道といふより、可二與立一といふはまた得かたく、可二與立一といふより、可二與權一といふは、いよ〳〵得かたきといふ事にて、器量ある人は世にすくなきとなり、これ權を用ることは、よほと才德器識ある人にあらされは行かたしといふ意にて、聖人にあらされは行ふ事なかれといふ事にあらす、先儒これによりて、己か德至極せすして權を行ふときはあやまり多しといへるは、一槩なる事なり、たとへは男女不二授受一は禮也、是人の通して行ふ事なり、もし嫂溺るに、吾聖人の德あらすといつて、立所に其溺死を見てすくはずんは、人道先ほろふ、これによりて、常禮を變して權を行ふてこれを救ふ、他事の上にをしても同しき事なり、聖人權を用るの意、是にて考へしるへし、

常禮を變して權を行ふは、たとへは常に往來しつけたる熟路にさはりあるとき、わき道へまはりて先へゆくか如し、熟路によりてさはりさへなくは、聖人何の爲にか、これをかへてわき道へよらんや、わき道へよらされは、先の志す所へいたらさるによりて、權を行ふなり、われ聖人にあらすといつてわきへよらすは、道にいたる事なし、然れともこれを行ふの場、輕重大小のわけをわきまふ事たやすからさるによつて、未レ可二與權一といふなり、たとへは三年の喪は天下の達禮也、然れとも軍旅之事は不レ辟と、いくさことには、喪をもかまはすいつる事なり、又小々の寇に、かならすいつへきとにもあらす、又小々の事とても、國家の大事に預ることとなれは又いつへし、かやうのわけむつか

孟子嫂溺の義を以てする時は、經と權と差別あるへしといへり、又程子權濟ニ經之所一ㇾ不ㇾ及といふ說あり、此等のこと、朱子語類にさまゝ議論あり、畢竟先儒は、經を權と對して、經權とならへいへり、孟子によれは、男女授受不ㇾ親禮也、嫂溺援ㇾ之以ㇾ手者權也とあり、然れは權はまさに禮を以て對すへくして、經を以て對すへからす、經之所ㇾ不ㇾ及とあるも、尤きこへたることなれとも、また經を以て對するの意あり、的當の說にあらす、

集註に洪慶善の說をあけて云、權者聖人之大用未ㇾ能ㇾ立而言ㇾ權、猶ㇾ人未ㇾ能ㇾ立而欲ㇾ行、鮮ㇾ不ㇾ仆矣、又朱子語類に云、經與ニ衆人一與ニ學者一皆能循ㇾ之、至ニ於權一則非ニ聖賢一不ㇾ能ㇾ行也、此意は權といふものは、聖人分上の事にて、賢者以下は行ふへからすとなり、然れとも聖人のこと葉を考ふるに、權を行ふことを大切にして、聊爾に行ふへからすといふことは見えたり、聖人にあらすは行はされといふことは見えす、先儒の意は、常底の人に權を行へとゆるすときは、常道を破りて權をこのみ、道をそこなふこと多きによりて、かくいへり、朱子曰、經是万世不易之道、權是不ㇾ得ㇾ已而用ㇾ之、如ニ湯放ㇾ桀武王伐ㇾ紂伊尹放ニ大甲一、此是權也、若日々時々用ㇾ之、則成ニ甚世界一了と是なり、然れとも常底の人とても、ときによりて、權を行はされはかなはさることあり、たとへは醫師のくすりを用るに、全く古方によりて、扁鵲倉公ことき名醫にあらすんは加減すへからすといつて可ならんや、孟子に執ㇾ中無ㇾ權猶ㇾ執ㇾ一也といへるは、泛く衆人に通してのをしへなり、聖人分上にあらすんは行ふことをゆるさすといふにあらす、

よき所へをくものなり、權然後知ニ輕重ーとこれなり、これによりて、定りたる禮法のつかへあるときにこれをかへて道にかなふやうにするを權道といふ、それゆへ孟子にも、權を以て禮と對してとけり、後世は物に作略計謀あるを權變權謀といふは、かり用ひたるものにて、正義にあらす、又權は反レ經合レ道といふ說あり、或は權は聖人にあらされは行ふへからすといふ、何れも古聖賢の意にあたらす、辯論なくんはあるへからす、

程子曰、漢儒以ニ反レ經合一レ道爲レ權、故有ニ權變權術之論一、皆非也、權只是經也、程子の漢儒を非とせらるゝとことはりなり、此事もと公羊傳に出て、魏の何晏、晋の韓康伯のともからこれを取れり、公羊傳莊公二十一年に、鄭人鄭の大夫祭仲を執へて、曰爲レ我出レ忽而納レ突と、祭仲其ことを葉に從はさるときは、君必死國必亡、是におゐて、忽を出して突を納る、公羊高おもへらく、古人の有レ權者、祭仲之權是也、權者何、權者反ニ於經一、然後有レ善者也と、反レ經の說はしめて爰にいつ、易の系辭に、巽以行レ權といへり、韓康伯か註に、權反レ經而合ニ於道一、必合ニ於巽順一、而後可ニ以行一レ權也、又論語子罕の篇に、唐棣之華、偏其反而、何晏註、華反而合、賦ニ此詩一者、以言ニ權道反而後至ニ於大順一といへり、程子の漢儒といへるは、此等の說をさす、論語古本は、唐棣の章、前章の未レ可ニ與權一といふと運て一章たるによりて、偏其反而といふの語によりてかくいへり、然れとも經は万世不易の常道なれは、經に反して道にかなふとはあるまし、程子の說尤信用すへし、

程子の說、まことにことはりなり、然れとも權は即經也といふときは、經權の差別なし、朱子集註に、

みて大切の用をつとめんに、にはかに父母の喪をきくかときは、何れを主とし何れをすつへきにあらす、かくのときのこと、先儒の説に、輕重をはかりて行ふといへり、然れとももとよりて、輕重を辨へて、取すつることもあるへきなれとも、心には其辨へもおほかたかるへし、又主一といふこと、大學の正心といふと、工夫矛盾することなり、主一といふときは、一事を主としてわきに心をちらさゝること、正心といふは、一事にとゝこほりて他事を知覺せさることをいましむるなり、此二つおなしからす、これ皆心を甚おもんして主とせられたるによりて、かくのときの違ひ出來ることなり、惣別心の物に應するは、目の物を見るかことし、一事を主として見れとも、大樣左右の近きあたりは見ゆるものなり、然れとももとをきところまては見えす、心も其通りにして、讀書には書を主として、食をくらうには食を主とすることなれとも、その内に、他のこと心にあつからさるにあらす、又前にふるゝこと、逐一に辨へしりてもらすましきにもあらす、正心の説の通りなれは、前に經るのこと、盡く辨へあるへしとなり、主一の説なれは、一事を主として、二用すへからすとなり、これは何れもなりかたきことにや、聖人のをしへは、たゝ善を目あてとし道をのりとして、心の其方にたよる樣に示したまふ、志ニ於道一依ニ於仁一といふの類、何れも其事なり、二用すへからすといふにもあらす、又ひろく万事に應すへきにもあらす、

權　凡七則

權といふは、稱錘也と註す、等子（ハカリ）のをもりのことなり、物の輕重にしたかつて、前へよせ後へよせて、

心收斂、便著ニ不レ得毫髮事一、非ニ主一一而何、此諸説少々不同あれとも、畢竟我一心を收斂して、くらからさるやうにするヿなり、勿齋陳氏敬のはしめ敬の成の説あり、西山眞氏內外交養の説あり、是等にて先儒持敬の旨の大略をしるへし、

持敬の説さま〳〵なれとも、畢竟わか心をおもんして、常々にくらからさるやうにするの工夫なり、佛家の明心見性の説に落て、聖人敬をのたまふの旨と大にヿなり、朱子曰、學問須ニ是警省一、且如下瑞巖和尚每日常自問ニ主人翁惺々否一、又自答曰中惺々上、今時學者、都不レ能レ如レ此、又或問、佛氏亦有ニ此語一、曰、其喚ニ醒此心一則同、其爲レ道則異、吾儒喚ニ醒此心一欲ニ他照ニ管許多道理一、佛氏則空喚醒在レ此、無レ所ニ作爲一、異處在レ此といへり、これにては、儒者の道も佛家の道も、心をおやとるの根はかはるヿなし、たゞ佛氏は心を取おさむるはかりにして事實をかまはす、儒家は心をおさめて、ことにほとこすのもとゝすといふヿなり、程子云、釋氏之學、於ニ敬以直一レ內、則有レ之矣、義以方レ外、則未ニ之有一也、朱子云、禪家則有レ具ニ衆理一、而無下應ニ万事一以下事上、王陽明の云古説レ明ニ明德一、而不レ説レ新レ民、便似ニ佛老一と、何れも雲峯胡氏の所レ謂有無感滅の説と同しきヿにて、儒佛のわかれはたゞ用の上にありて、心躰の工夫至極のところにいたりて、かはるヿなしときこゆ、これ皆宋以來、淨智妙圓の旨儒中にましはり入たるによりて、かくのときの分疏あり、聖人のをしへ、もとよりかくのときヿなし、

人心は二用すへからすといへとも、事によつてはまた一すしに定かたきヿあり、たとへは君命を含

をもとむるゆゑんの工夫なり、上にあぐるところ論孟のこと葉、これにて考へしるへし、然るに大學に仁敬孝慈信と並稱するは、各專にするところに就ていふ、これは孟子に仁義忠信とあはせのたまふかことく、本躰修爲ましへあけらるゝと、あやまりといふにあらず、古人はかくのごときこと大やうにして、後世のかゝはりたるかことくならず、其內大學には仁を專君德として、廣く衆人に就てをしへとすること見えず、これ又論あり、

先儒持敬の說に、主一無適といふ說あり、整齊嚴肅といふ說ありて、常惺々法といふ說あり、其心收斂不レ容二一物一といふ說あり、何れも大學或問に詳にあることなれは、くはしくいふにおよはず、主一無適といふは、程子の說にて、本は主一之謂レ敬、無適之謂レ一といへり、集註にこれをつゝめて、主一無適之謂と解せらるゝ、朱子此義を述しておもへらく主一只是心專一、不下以二他念一繫上之、無適只是不二走作一、如下讀レ書時只讀レ書、著レ衣時只著上衣、了二此一件一、又做二一件一、身在二這裡一、心亦在二這裡一と、何ことにても、此一事をするときに、よのことに心をちらさゝることなり、整齊嚴肅といふも、程子の說なり、そのことにいはく、只整齊嚴肅、則心便一、一則無二非僻之干一矣、外面事實の上に就て敬を持ことをいへり、常惺々法とは、程子門人上蔡謝氏の說なり、敬只是常惺々法といへり、惺々とは、こゝろのくらからさること、常々に心のれい〳〵たるやうにせよといふことなり、朱子曰、惺々の心不二昏昧一之謂、只此便是敬なりといへり、其心收斂といふは、尹和靖主一のことを說きたること葉なり、初寬問如何是主一といふに、尹氏曰、只收二斂身心一便是主一、且如下人到二神祠一致レ敬時、其

レ温、貌思レ恭、言思レ忠、事思レ敬、疑思レ問、忿思レ難、見レ得思レ義、又大學に文王の事を述て、爲ニ人君一止ニ於仁一、爲ニ人臣一止ニ於敬一、爲ニ人子一止ニ於孝一、爲ニ人父一止ニ於慈一、與ニ國人一交止ニ於信一といへり、これらによりて見るに、仁孝忠信聰明等のごとく同しく對偶して、一事のをしへなり、又夫子の樊遲の仁を問に、居處恭執レ事敬、與レ人忠とあり、孟子に四心をわけて、恭敬之心禮也と、惻隱羞惡是非の心と對配す、彼是ましへ考ふるに、聖學の始終萬事の根本といふこと見えす、千乘の章に、胡氏曰、凡此數者、又皆以レ敬爲レ主と、九思の章の註に、程子曰、九思各專ニ其一一、少註雲峯氏曰、事レ思敬、九思之一、九思各專ニ其一一、則皆主ニ乎敬一者也といへり、是皆後人敬を主とするの意にて、ゐるてかくあれとも、本文もとより此意なし、牽强といひつへし、畢竟上に論する通りにて、古へは事をつゝしみおかまゆることを敬といへは、もとより此一事にすむことにあらす、後世は心法を專として、心をゝ散亂せさるを敬といふによりて、萬事これにこもるといへり、辨すへし、

聖門の第一字は仁にあり、恭敬忠恕の類は、皆仁をもとむるための受用工夫なり、夫子の仲弓樊遲に答ふるのこと葉、並に孟子に强恕而行、求レ仁莫レ近焉といふの類にて見るへし、これは人に對して如在なく、人のこゝろをしはかりて、物ごと大事にかくれは、人其德をかふむるによりて、かくのたまへり、後世仁を性の理と見られたるゆへに、かくのごとくすれは心存而理得と解せらるゝはあたらす、此ことすてに仁の條下にあらはせり、大抵聖賢のをしへに、本躰あり、修爲あり、仁義禮智は人の身をおさむるの目あてなり、是を本躰といふ、忠信忠恕恭敬等の名は何れも修爲の名にて、仁にいたるこ

敬といふは、畏敬奉承の意にて、聖賢のこと葉に所レ謂敬は、皆事に就て大事にかけうやまふことなり、論語に、敬レ事而信と云、又敬二鬼神一而遠レ之とあり、孟子敬レ兄義也とあり、その外敬レ天と云、敬レ君と云、敬レ親と云、敬レ人と云、何れもさきに事ありて、それをあかまへつゝしむことなり、たゝ相手なしに、一心の散亂せぬことを敬といふは、後世持敬の說より出たるものにして、聖人敬をのたまふの旨にあらす、禮記哀公問の篇に、敬レ身といふことあり、持敬の說のやうにきこゆれとも、本文を考ふれは、君子無レ不レ敬也、敬レ身爲レ大、身也者親之枝也、敢不レ敬與とあり、是は身は父母の遺躰なるゆへに、父母を大切にするあまりに、吾身を麁末にせぬといふことなり、持敬の說にあらす、又論語の修レ己以敬、仲弓の居敬而行簡の二語、後世持敬主敬の說に似たり、然れとも夫子の言葉も、修レ己以敬とありて、其下に君子修レ己以安レ人と云、仲弓も居敬而行簡とありて、其下に以臨二其民一不二亦可一乎とあるからは、此二語も、民事を敬して麁末にせさるをのたまふ、たゝに敬をまもるといふことにあらす、古書に敬といふこと、何れも此例にてをすへし、

大學或問に云、敬之一字、聖學之所三以成レ始而成二終者也、又曰、敬者一身之主宰、萬事之根本と、これにては、聖人のをしへ全く敬の一字にこもる事なり、是は後世心法の說さかんなるによりてかくあれとも、聖賢のこと葉を考ふれは、敬は本より簡要のことなれとも、百行の一にして、忠信忠恕等の工夫と、をしならへて行はるゝ事にて、萬事の工夫此一字にこもるといふにあらす、論語に、道二千乘之國一、敬レ事而信、節レ用而愛レ人、使レ民以レ時といへり、又曰、君子有二九思一、視思レ明、聽思レ聰、色思

にも是をのす、此意は、禮といふは自然底の道理を云、禮儀禮式のことにあらす、敬しても、自然ならすして、つくろひためたる様なるを、恭而無レ禮といふと云ことなり、又曰、君子修レ己以敬、安ニ百姓一、篤恭而天下平、唯上下一ニ於恭敬一、則天地自位、萬物自育と云々、論語集註にこれをのす、これは天下太平の功も持敬より出るといふことにて、何れも恭敬の二つを、ともに後世持敬のことにとりなしたるものなり、聖賢の旨にあらす、畢竟恭敬の二つは、上に論する通りにて、同しきうちにて少差別あり、恭而無レ禮といふは、人に對していんきんなることはよきことなれとも、人にはそれ〳〵に貴賤上下の差別あり、吾より尊長へは、手をつき首をさけ、平交幼賤には、又相應の挨拶あり、これを禮といふ、もしひたものいんきんなるかよきこととおもひて、我より下輩幼賤なるものへも、首をさくるやうにするときは、苦勞してはつかしめをとり、それゆへに恭而無レ禮則勞といへり、恭近ニ於禮一遠ニ耻辱一也といふも同しきこゝろなり、又子夏のことに、與レ人恭而有レ禮四海之内皆兄弟也といへり、此詞にていよ〳〵分明なり、恭而無レ禮といふを不自然の敬といふときは、恭而有レ禮を自然の敬といふへきや、其通には見かたし、集註に接レ人以レ恭而有ニ節文一と解せり、此註もつとも明らかなり、然れは恭而無レ禮といふも、不自然の敬をいふにあらさることをしるへし、惣別後世には、敬を主一無適といひて、學問肝要の工夫とせらるゝによりて、恭も敬と同しきやうに心得、經書の內、書經なとにいへる欽寅莊肅等の字樣、皆持敬のことに解せらる、尤聖人の旨にかなはす、篤恭而天下平といふも、これにて準ししるへし、

をもちて、一貫の旨を發明せらる、亦あきらかならすや、

恭敬　凡九則

恭は集註に致ㇾ敬也とあり、又莊敬也とあり、又謙遜也とあり、此大略の註なり、畢竟人の言語容貌の上に就て、今の人のこと葉に云るんきんなるを恭といふ、敬は物を大事にかけて、あかまへおそるゝ意あり、故に畏敬崇敬なと熟し用ゆ、先儒主一無適を敬といふの說あれども、甚古義にあらす

恭敬二字の差別、先儒內外に就てこれをわかつ、陳北溪字義に、恭就ニ貌上一說、敬就ニ心上一說と、又二程遺書に云、發ニ於外一者謂ニ之恭一、有ニ諸中一者謂ニ之敬一、孟子告子の篇の集註には、恭者敬之發ニ於外一者也、敬者恭之主ニ於中一者也と、これは內外たかひに說けり、然れとも論語を考ふるに、君子九思、貌思ㇾ恭事思ㇾ敬とあり、司馬牛の仁を問に、君子敬而無ㇾ失、與ㇾ人恭而有ㇾ禮とあり、樊遲仁を問に、居處恭、執ㇾ事敬とあり、しかれは恭敬は、內外の差別にあらさるとしるへし、其上孟子に、恭敬之心禮之端也とあり、又恭敬者幣之未ㇾ將者也と、これも恭敬は、行事にあらはれたる上に就て、其もとををして恭敬の心といふ、もし一つは心にあり、一つは事にあるとならは、孟子に恭敬之心とはあるまし、恭敬の二事、各事によりて差別あるとしるへし、

程子は恭敬の二つを一つにして、恭の字もたゝ敬の事と說たる所多し、程子の語に云、今學者、敬而不ニ自得一、又不ㇾ安者、只是心生、亦是太以ㇾ敬來做ㇾ事得重、此恭而無ㇾ禮則勞也、恭者私爲ㇾ恭之恭也、禮者非禮之禮、是自然底道理也、只恭而不ㇾ爲ニ自然底道理一、故不ニ自在一也、須ニ是恭而安一、近思錄

へり、これによりて、孔子非也吾一以貫レ之とのたまふと、其内曾子に告たまふは行を以ていふ、子貢に告たまふは知を以ていふの違ありと、然れとも第四篇にのするわけと、其理はかはることあるまし、先儒知と行とを以てわけらるゝことは、曾子には、はしめに吾道とのたまひて、あとに一貫のことあり、子貢には、はしめに多學而識レ之與とのたまひて、跡に一貫のことを説あらはさる、これによりて知行の差別あること、小註等に是えたり、然れとも此ことあなかちにわかつへきにあらす、知は行はんか爲なれは、行は知のことにあらはるゝものなり、曾子子貢へ示したまふ、何れも知行に通していふとしるへし、畢竟一といふは多少對していふ、吾道一以貫レ之といふも、多學而識とするにあたりてのたまへり、然れは曾子へ告らるゝ一貫といふも、たゝ一すしにて專なることを示さるゝなり、妄意におもへらく、古より聖人のをしへに、一といふことあり、書經に惟尹躬曁湯咸有二一德一と、又曰、善無二常主一、協二于克一一、又曰、德惟一動罔レ不レ吉といふの類あまたなり、何にても、物ことを專一すしにして、わき路へよらす他事をましへさるなり、一以貫レ之といふも其通りにして、何をさして一とするにあらす、又嘗てのたまはく、攻二乎異端一、斯害也已と、これはさま〳〵のはしけの多きことをつとむれは害あるといふことなれは、一以貫レ之の反なり、すへて道藝のこと、人によりてさま〳〵のことに心を寄せて、あまたのことにさわたるものあり、其力わかれて、かならすしるしなし、然れは學をつとむるにも、たゝ一すしにもはらにするときは、其しるしあるへし、聖門の道は、人の爲にするを至極とするゆへに、仁を本とす、仁をもとむるには忠恕よりよろしきはなし、かるかゆへに、忠恕

と恕とは、生熟大小の別にして、恕よりして仁にいたるへきにあらすや、曰然らす、先儒の意は、仁恕の二つを只一物にして生熟あると見られたるなり、其ゆへうたかふへし、畢竟恕といふは、修爲にして、仁は本體の目あてなり、人をおしはかりて宥免するときは、さきも苦みなやむことを免れて利益をかふむる、こゝをさして仁といふ、恕はかりにかきらす、恭敬忠の類何れも其通りにて、仁を求るのおかたなり、孔子の門弟子に答へたまふの詞を見てしるへし、生熟のわけにあらす、或また云、子貢の我不レ欲三人之加二諸我一也吾亦欲レ無レ加二諸人一、とあるに、夫子の御返答に、賜也非二爾所一レ及也とあり、程子仁恕の說あり、集註におもへらく、無者自然而然、勿者禁止之謂、此所三以爲二仁恕之別一と、然れは聖門にも此わかちありと見えたり、何そうたかひをなさんと、曰これまた然らす、是はたゝ恕を行ふの自然不自然なり、己所レ不レ欲勿レ施二於人一とは、常々にこゝろにいましめて行ふことなれは、終身可レ行とをしへたまふ、然るに子貢は、いましむることなく自然にかくならんと願はるゝによりて、爾の及ところにあらすとしめしたまふなり、これを仁とするにあらす、もしまた先に及ふところの德をいふときは、力をいれて行ふといへとも又仁といふへし、然れは此章仁恕生熟のわけにあらさることしるへし、

一以貫之事、又衞靈公の篇孔子告二子貢一のこと葉に見えたり、先儒おもへらく、子貢の學問も曾子のごとく、積累の上悟入せらるゝと見えたるによりて、其名を呼て、賜也以レ吾爲下多學而識レ之者上與とのたまふ、子貢はしめには然りと答へられたれとも、積學の力にて其然らさることをしりて、非歟とい

ヿ遠からすとのたまへり、信近二於義一と云知レ所二先後一則近レ道矣といふと同しわけなり、

先儒一貫の説には、理一分殊のわけあり、仁恕生熟の別あり、理一分殊のわけよりいふときは、随レ事精察して、其躰の一をしらんとするときは、今日の上に就て、讀レ書窮レ理、あまねく萬物の理に達して、一理のところを覺悟して、聖域にいたるへし、仁恕生熟の別よりいふときは、今日の學者分上には、己をさして人に及し、漸く純熟して、以レ仁及レ人自然の地位にいたるへし、此二端同しからす、集註にも二筋に見えたり、先儒の意にしたかひをしまはしていふときは、居敬窮理もち合て、同しヿに落るヿなれとも、さしあたりて、仁恕は人をあはれむの道、窮理はヿをわきまふるの工夫なれは、其受用同しからす、これは先儒一貫を理一の事といひ、又恕の字も、恕宥恕察の義あるをもちて、引合て解せられたるヿと見えたり、本文はたゝ忠恕にて一筋をし通したるヿ、こゝろうるにおゐて別義なし、

先儒に仁恕生熟の辨あり、これは恕といふは學者分上の事にて、己をさして物に及すには力をいるゝ事なり、聖人の上にては、自然に物に及ひて、をすことをまたすと、程子曰以レ己及レ物仁也、推レ己及レ物恕也と、北溪曰、以レ己者是自然、推レ己者是著レ力、又曰、聖人之恕、便只是仁、更不レ待レ推といへり、畢竟自然不自然のわけなり、これにては、聖人の地位に至りては、恕といふヿはいらぬといふヿなり、此事語孟字義に辨して云、聖人豈其心自聖而謂二我自是聖無一レ所レ事レ用レ恕耶と、聖人分上にも、恕といふヿあるましきや、或云、孟子に强恕而行、求レ仁莫レ近焉といへり、然れは仁

語に夫子之道忠恕而已矣とあり、これによれは、忠恕をすくに道といふへし、此二端同しからす、程子此異同を判斷して、動以レ天爾といへり、これは中庸の忠恕といふは、學者の修爲工夫にわたることなれは、人作にて自然にあらす、夫子の忠恕といふは、自然のことなれは、もとより修爲人作にあつからす、故に動以レ天爾といふ、動以レ天といふことは、もと易の無妄の卦より出たることにて、自然のことをいへり、然れともこの說は、上に論する通りにて、學者忠恕の目をかりて理一分殊のことをあかさるゝといふ說より出て、もとより從かたし、中庸の忠恕と論語の忠恕と、もとよりかはることはあるまし、畢竟此わけは、道といふことば同しからさるによりて、かく異同あり、惣別道に道德の道あり、方法の道あり、天下の達道と云、由レ道と云、志二於道一といふの類は、道德の道をさしていふ、人ののりなり、忠恕違レ道不レ遠と云これなり、此のりにたかはさるをいふ、大學之道と云、學問之道といふかことときは、方法の道なり、物のしやうをさしていふ、夫子之道忠恕而已矣と云是なり、孔子のをしへのしやうはこれはかりといふことなり、夫子よりいへは吾道といふ、曾子よりいへは夫子之道と云、いつれもしかたをさして云、もし天下の達道をさしていふならは、夫子何そみつからわたくしして吾道とのたまひ、曾子これを夫子にあたへて夫子の道といはんや、然れは中庸論語のことは、異同あるやうなれとも、各其さし所ありて、もとより齟齬することなし、其上忠恕は修爲のことなれは、忠恕をつとむれは道に大ちかひはなきといふのことはりなり、古人道を見ること寛弘なるゆへに、詞も迫切ならす、忠恕をすれは必道にあたるといふやうに、きひしくいはす、大槩に道をさる

後世にいたりて、學問高上なるによりて、一箇の理といふものを主張し、理一分殊のことを忠恕にて說き示さるゝといふこと、尤こゝろへかたし、畢竟一以貫レ之とあることは、此方の道はたゞ一すしにてをし通したるとのたまふことにて、何をさして一と云、何をさして貫といふこともなし、聖賢の道の全体を合點したる人は、何となしにをのつから其わけを覺悟すへし、曾子の唯とのたまふにて知へし、其わけを覺悟せさる人は、何ことにて一すしをし通したることをわきまへされは、何謂也と問はるへきことなり、これをさして忠恕而已矣とあるからは、曾子の門人にかきらす、何程地位立てえたる人に答へたまふとても、其說二つはあるまし、然れは學者忠恕の目をかりて一貫の旨をさとすといふことは、曾子の意にあらす、いはんや經書にある忠と云、恕と云、其說二つはあるまし、學者の忠恕聖人の忠恕と、處によりて其義をことにすること尤うたかふへし、

子貢の一言にて終レ身まて行ふへきありやと問るゝに、其恕乎と答へたまふ、又仲弓の仁を問はるゝにも、己所レ不レ欲勿レ施ニ於人一と答へたまふ、これは恕といふこと葉は見えされとも、恕の行やうなれは、恕は仁を求るの工夫たること、愈明らかなり、然れは夫子の道は、忠恕にて一すしをし通りたるといふに疑ひあるまし、仲弓子貢は、聖門の高弟にて、顏子曾子につゝく人なり、然るに、身を終るまての一語を問ひ、仁を求る工夫を尋らるゝに、何れも恕をのたまふ、然れは曾子の門人は、器量及はさるによりて忠恕をしめさるゝとはいはれましきことなり、

中庸に忠恕違レ道不レ遠といふことあり、これによれは、忠恕といふものをすくに道とはいはれす、論

を持つて、これを貫ぬく索を持さるによりて、一條の錢さしをあたへてこれをつなかしむるかとし、曾子はたして其旨に默契して、すみやかに返答して唯とのたまふ、たとへは鷄の卵を破るに、啐啄同時と云て、母の卵をつゝくと雛の内よりわり出ると、ときをたかへさるかとし、然るに曾子の門人、何謂也と問るゝに、曾子は日比學問積累の功によりて、すみやかに領承せらるれとも、門人は其積累なければは、其わけを告るといへとも、器量に及さることなれは、さとるへきたよりなし、其故學者の常〻によく覺付たるこゝろへやすき名目をかりて、夫子の道は忠恕而已矣と答へたまふ、それゆへ此所に所レ謂忠恕といふは、わきにいへる忠恕とは同しからす、學者の忠恕あり、聖人の忠恕あり、天地の忠恕あり中庸に所レ謂忠恕のこときは、學者の忠恕にて、己ををして人に及すのことなり、夫子之道忠恕而已矣といへるは、聖人の忠恕にて、己ををすのことにあらす、忠は躰にして、聖人のこゝろ一理渾然たることをいふ、恕は用にして、汎應曲當することを云、天地に就ていへは、一理の萬古やまさるは忠なり、萬物の各其性命を正すは恕なりと、其詳なることは、集註語類等をかんかふへし、曾子の門人に答て忠恕而已矣とあること、もと別義なし、聖人の道は仁より大切なることなし、仁をもとむるには、又忠恕より手ちかきことなし、故に孟子に、强恕而行求レ仁莫レ近焉といへり、樊遲の仁を問はるゝに、夫子の答へに、居處恭與レ人忠あらはとのたまふ、曾子の夫子之道忠恕而已矣といへるも此わけなるへし、人たるもの、人に對して麁末なく、人をしはかりて宥免慈愛の德あらは、此うへあるましきことなり、然らは一以貫レ之の旨を述て、忠恕而已矣とあることはりなり、然るに

レ施二於人一といふ即是なり、しかれとも是は恕の行ひやうにて、恕字の訓にあらす、何そなれは、子貢の有下一言可二以終レ身行一レ之者上乎と問はるヽに、夫子の其恕乎と答へたまふ、其次に、己所レ不レ欲勿レ施二於人一といへり、もし恕の一字に推レ己及レ人の意あらは、夫子の答も、其恕乎といふにてことたるへし、すてに其恕乎とのたまひて、又己所レ不レ欲勿レ施二於人一とのたまふからは、己所レ不レ欲勿レ施二於人一といふは、恕を行ふの法にて、恕の字の義にあらさることしるへし、且又中庸に、忠恕違レ道不レ遠とあり、其下にも又施レ己而不レ願勿レ施二於人一といへり、然れは推レ己の義は、恕の字を説へきのみにあらす、又忠の字をもとくへし、彼此あはせ考ふるに、恕の字は、推レ己といふよりは、忖レ人と註するかたよろし、論語註疏刑昺の説には、恕謂二忖レ己度一レ物也とあり、禮記孔穎達の正義には、恕忖也、忖二度其義於人一とあり、此等の註大様あきらかなり、其内忖レ己といふことあらす、たヽ忖レ人とまてこヽろへてよろし、

忠恕一貫の事、學問の蘊奥聖人の妙旨にて、初學の容易に議することにあらさることといひ傳ふ、先儒の意におもへらく、聖人の心、其躰の一理渾然として、用にあらはるヽところ泛應曲當して各其のりにかなふ、たとへは天地の道、一理の妙至誠無レ息して、其用のあらはるヽ所、鳥獸草木にいたるまて、萬物各其所を得るかことし、然るに曾子は、學問積累して、用の上におゐては、事ことに精しく察しつとめ行て、かくることはなけれとも、その體の一に歸する所をしられさるによりて、夫子其將レ有レ所レ得ことをしりて、其名を呼て參乎といひて、これに告たまふ、たとへは一倉のみたれたる錢

擧て其功を成就す、たとへは、衣食住のそなへは、皆一身をたつるはかりとなれとも、寒暑晝夜内外貴賤の差別ありて、たゞ一つにてはすまさるかことし、聖賢のをしへもかくのことく、事實の應接さま〳〵なれは、たゝ一法を守り一事を修してすむことにあらす、そのしまつをいふときは、己をおさめ人をおさむるを至極の事とするゆへに、仁義を以て人道の本とす、終爲受用の上には、恭敬忠恕忠信等のをしへ、それ〳〵のことによりて同しからす、其内に忠信を第一とするゆへに、忠信を主とすとのたまふなり、後世は心理の學さかんなるによりて、百行の本を一心にかたつけて、一箇の手かゝりあり、聖賢のをしへには、かならすかくのことくにもとむへからす、たゝ此こゝろをおしひろむるを宗として、常〻修爲するときは、萬事おのつからこのうちに籠りて、其德を成就すへし、

忠恕　凡九則

忠といふは、人に對して麁末なく、心一はいに盡すことをいふ、恕といふは、人の心をおしはかりて宥免する事なり、先儒謝上蔡云、忠恕猶二形影一と、陳北溪云、忠恕只是一物、就レ中截作二兩片一、則爲二二物一、又云、忠是在レ己底、恕是及レ人底とあれとも、畢竟忠恕は各是一事にして、人に交る上に就ていふ、聖賢の言をかんかへてしるへし、

忠恕二字の解、伊川程子云、盡レ己之謂レ忠、推レ己之謂レ恕、盡レ己を忠といふこと、まことに間然することなし、推レ己を恕といふことは、不レ當ことなり、己をおすといふことは、わかこゝろを人におし及し、わかきらひにくむことは、人も定てきらふへしと推量して、人へ志かけさることなり、所レ謂己所レ不レ欲勿

得箇要確實、明道說得發越條暢といへり、此二說こと葉は少〻かはれとも、其義相近し、其內伊川の語尤分明なり、語孟字義これにしたかふ、二程全書を考ふれは、此二語ともに明道のこと葉にて、一つゝきのことなり、遺書第十一にのす、一義にてつきざるによりて、かさねていへるとみえたり、

或人の云、先儒の學、一家各一家の主意ありて、朱晦庵は居ㇾ敬究ㇾ理を旨とし、陸象山は先立二乎其大者一を旨とし、王陽明は致二良知一を以て主とせらる、其外の先儒にも、各學問に一箇の手かゝりの處あり、古學の通りにては、人倫日用を專とし、仁義忠信をつとむる第一とするは、まことにたふとふへきことなれとも、一箇の手かゝりといふこと見えすと、又或人の云、古學の主意をいふならは、主二忠信一といふこと一箇の手かゝりといふへしといへり、予おもふに、此こと何れも聞えたることなれとも、これも後世學問の習より出たる類にて、古聖賢のをしへを通して考ふるに、一箇の手かゝりを立てこれを守るといふこと見えす、主二忠信一といふことは、主に賓に對したること葉にて、萬事の上忠信を本とするといふことなれは、これを一箇の手かゝりとして、常にこれを守るといふこと、まことにしるへし、然れとも主二忠信一徙ㇾ義といふことあり、又十室之邑必有二忠信如ㇾ丘者一焉、不ㇾ如二丘之好一ㇾ學也とあれは、たゝ忠信はかりにて萬事を了すといふにあらす、惣別論孟の內に、只此一事にてすむと見ゆること多し、堯舜之道孝弟而已矣といへり、夫子之道忠恕而已矣といへり、學問之道無ㇾ他、求二其放心一而已矣といへり、君子去ㇾ仁惡乎成ㇾ名といへり、可二終ㇾ身行一ㇾ之者其恕乎といへり、これらのこと葉にては、何れにても、此一つにて終身の受用すむと見ゆれとも、通用していふときは、衆功兼

誠を眞實無妄といふとは、もと易より出つ、易に無妄と云卦あり、其大象に、天下雷行、物與二無妄一といへり、これらの義によつて、誠の字を無妄と訓す、程子の動以レ天といふも、これよりいつ、無妄の卦は、上は乾の卦下は震の卦なり、乾の象を天とし震の德を動とするによりて、動以レ天といつて、誠の義を發明せらるゝなり、語孟字義におもへらく、眞實無妄といふより、眞實無僞と解するかまされりと、これはもつともちかきことなれとも、妄といふは物のみたりに違のあることなり、僞は物のいつわりつくろひのあることなり、天道にも、夏霜冬雷日月薄蝕の類、常度にたかふことあれとも、安排作爲のわたくしなきことなれは、無僞といふかたよろし、字義にすてに詳にこれを論すれは、こゝに贅せす、

忠信　凡三則

忠信二字のわけ、上處々に解する通りに、心のまことをつくすを忠と云、物こと相違なきを信と云、各是一德なり、故に子以レ四敎、文行忠信と、然れとも忠恕なとゝいふとはちかひて、常に連綿してをしへらるゝこと多し、故に言忠信、主二忠信一といふの類、多く語孟の内にあらはる、をしまはしていへは、今の人のいはゆる律義といふかことく、朴實にかたきことをいふ、禮記に忠信之人可二以學レ禮と云、これも生付律義にしてかさりなき人を云、語孟字義に、忠信二字有下朴實不レ事二文飾一之意上と註せり、伊門云、盡レ己之謂レ忠、以レ實之謂レ信、論語三省の章の集註にこれを用ゆ、明道の云、發レ己自盡爲レ忠、循レ物無レ違爲レ信と、大學章句の末章にこれを用ゆ、北溪字義にこれを判斷して云く、伊川說

聖人の德も亦天之道也といへり、孟子の註にては、人々にそなはりたる天理をいふ、即性なり、天道聖人のことにあらす、それゆへに思レ誠を解して、此理之在レ我者皆實にしていつはりなからんことを欲すといへり、畢竟所謂無極大極の眞躰をさして、人々各具るの大極といふものなり、其說甚高上にすきて、子思孟子の本意にあたらす、惣別宋朝已來の學問の旨にては、聖賢の書にある許多の名目個條、皆一ッの理を標したるものにて、時によりことに隨て、名をかへ號をあらためたるものにて、もと別事にあらす、天と云、命と云、大虛と云、大極と云、道と云、理と云、躰といひ、元と云、中と云、誠と云、心と云、性と云、仁と云、明德と云、一貫の一、格物の物、こと葉かはれとも、皆一理の別名なり、聖賢の人をしふる、簡易明白にして、人のしりやすく從やすからんことを願ひたまふ、何ぞや同しきことに樣〻の名目を立かへてこと葉の費をなさん、人事の品一端ならさるによりて、世間の名目もさま〳〵あれは、これによつて又をしへを立られたるものなり、其故、自然に名目ひとつならす、後世理といふものを標して、萬物の源とするによりて、許多の名目を驅つて一理に歸し、遂にかくのごとく解せらるゝ、それゆへに仁を一といふてもよし、命といふてもよし、性を理といふてもよし、道といふてもよし、格レ物究レ理を、盡レ心知レ性といふてもよし、明レ善誠レ身を誠レ意正レ心といふてもよし、さま〳〵のこと混同わかつことなし、或は天人につゐてこれを分、或は動靜によつて差別せらるれとも、ついに辨別しかたし、其故を考へすんはあるへからす、

して誠といふはあたらす、これも無極の理をさしていひたるものにて、古聖賢の意にあらす、論語に誠の字なし、詩經を引て、誠不以富といふことあり、是はたゝ虛字にて、誠信のことにあらす、然れとも夫子の一言一行、誠にあらすといふことなし、たとへは堯舜の仁は天下にあまねけれとも、そのかみ仁を以てをしへとせらるることなきかことし、もとより言葉の有無にかゝはることなし、其のち中庸孟子に、屢誠をのたまふ、是又夫子のをしへを外にして別にいひあらはさるゝにあらす、夫子の意を述てのたまふものなり、

誠者天之道也、誠之者人之道也、此語中庸にいつれとも、本夫子哀公に答へたまふこと葉なり、然れとも孟子にもこの語ありて、孔子曰と標出せられす、とかく當時聖門傳誦のをしへと見えたり、誠者天之道也といふは、聖人の德自然にして作意なきことをいふ、誠之者人之道也とは、賢人の德學問修爲していたるをいふ、孟子に、思誠とあるも同しきことなり、それゆへ下の句に、誠者不勉而中不思而得、從容中道聖人也といへり、其わけ尤分明なり、これ人事の上に就て、自然なるを天道といふ、作意にわたるを人といふ、古書に此例多し、孟子に天爵人爵といふ、後世にも、韓文に不有人禍必有天刑といふ、何れも此わけなり、本文を玩味して、自志るへし、

章句に、誠者眞實無妄之謂、天理之本然也、聖人之德云々、亦天之道也、孟子集註に、誠者理之在我者、皆實而無僞、天道之本然也、思誠者、欲此理之在我者皆實而無僞、人道之當然也といへり、これは眞實無妄の天理をさして誠といふ、中庸の註にては、もつはら天の上に就て說ゆへに、

ふ證據多し、然れは此四十七字は樂の事を稱したるものにて、心のことにあつからさること分明なり、中庸にも此所はかりにて、あとに中和といふこと再いてす、是にてますくしるへし、其詳なることは、先人中庸發揮にこれを論せり、

唐虞の時は、もつはら中を以てをしへとして、孔孟のこと葉には、中にをよふこと甚少なり、其ゆへは唐虞の代には、聖人をもつて聖人のことを行ひたまふ、所レ謂由二仁義一行、非レ行二仁義一也と是なり、それゆへ中とはかりおほせられて、自則にかなひ、弊なきことなり、堯舜の允執二其中一、湯の執レ中のことくこれなり、常底の人、中とはかり心得ては、泛然としてとりしめかたきことあり、それゆへに孔子は、もつはら禮と義とを以てをしへとしたまふ、また孟子に、執レ中無レ權猶レ執レ一也とあり、何れも此わけなり、論孟の中、偶中とあるは、大かた人からの上に就てのたまふ中也、養二不中一といひ、不レ得二中行之士一といふのたくひにてしるへし、

誠　凡五則

誠といふは、もといつはりのなきこと、その反對をいふときは誠僞と云、聖人分上にあつていふときは、自然の實德をいふ、信の字と訓は同しきことなれとも、よほと差別あり、信は一德にして、言行の上に相違なきことなり、然るゆへに信はかりにては、時によりて弊あり、誠といふは、眞實無僞のことなれは、實德の表裏透徹して、すこしも作意なきことなり、信の字よりよほと立あかりたる場也、たゝいつはりをいはぬとはかりのことにあらす、後世に及て、天地萬物に備るの實理をさ

の罪におちいりて、道をそこなふことなり、兎角中といふも道なれは、自然と備りてあり、たとへは夫婦居ㇾ室人之大倫也と、是人倫の中道なり、古今のちかひなく、貴賤賢愚の差別もなし、これにおほるゝは、もとより中にあらす、これをいとふも中にあらす、これをやふるも中にあらす、然れは中といふものは、自然ののりにして、人心の法則たり、たゝ心の安するところを道といふにあらす、

未發已發といふこと中庸にあらはる、然れとも聖人の心をのたまふこと、何れも已發の上に就て未發の說なきこと、心の條下に詳にいふ通りなり、其上未發の中をたつるときは、さま〳〵さまたくることあり、禮記等の書を考ふれは、とかく此四十七字は、もと樂の德を賛美したるものにて、中の德をいふにあらす、何そなれは、樂といふことは、人心の喜怒哀樂をうつしたるものなり、其聲の淸濁高下のたかひなくよろしき所を中といふ、温和にして敗りそこなふことなきを和といふ、さて其しるしをいふときは、天地を動かし鬼神を感するの妙あり、右の四十七字此ことを述ていへり、禮記樂記篇を考ふるに、夫民有ニ血氣心知之性一而無ニ哀樂喜怒之常一、この下に樂の事をいへり、又云、樂者天地之命、中和之紀、人情之所ㇾ不ㇾ能ㇾ免也、又云、動ㇾ己而天地應焉、四時和焉、星辰理焉、萬物育焉、又云、大樂與ニ天地一同ㇾ和、又云、樂者天地之和也、といふのたくひあまたなり、周禮大司樂、以ニ樂德一敎ニ國子一、中和祇庸孝友といふ、漢書兒寛か傳にも、樂のことを稱美して、惟天子建ニ中和之極一と云々、又樂に中和樂といふ樂あり、かれこれあはせかんかふるに、樂のことを中和とい

不可者則謂ニ之不中一、雖ニ愚夫愚婦一皆能言レ之、又何有ニ傳授心法之秘一、此説ことはりなり、後世心理の學さかんなるにより、道德教法の名目を皆心に具るの理とたてたるゆへに、中も未發の心躰として、聖々相傳の法といふは、大に古義にそむけり、

人の心はさま〴〵なり、天性淡泊なる生付は、たゞとすくなることを好て、妻子眷屬をもいとひうとむこゝろあり、又强盛多欲なる生れつきは、廣く聲色をいとなみ、器物家宅等をも、わくことなくもとめむさほるものなり、これ皆過不及なり、各面々の生れ付の通おし行ふときは、淡泊なるものは淡泊をよしとおもひ、多欲なるものは多欲をよしとおもふ、これにては、天下の人面々さはきになりて、一同の道といふものにあらす、よきかけんの中道ありて、これを人々定木として、過たるものはひかへ、不レ及ものは行とゞきて、此かねにはつれぬやうにとをしへ示さる、中庸に云、道之不レ行也、我知レ之矣、知者過レ之、愚者不レ及也、道之不レ明也、我知レ之矣、賢者過レ之、不肖者不レ及也と、堯舜の允執ニ其中一とのたまひ、湯之執レ中、何れもこのわけと見へたり、

後世の説には、心の過不及あるところは用の上にて、心の本躰未發の中には過不及なしと、又心學を講すれは、こゝろの安する所を道とおもふ、然れとも上にいふ通りにて、賢愚智不肖のたかひ、只平生人の上に過不及あるのみならす、面々の道とおもひ心に安する所にも、さま〴〵の過不及ありて一同ならす、揚子は爲我を中道とおもひ、墨子は兼愛を中道とおもひ、心にもまことに安してこれを行へとも、聖人の道よりみれは、兩とも過不及にて、中にあらす、其おはりには、無レ君無レ父

訓幼字義卷之四

中幷中庸　凡六則

聖賢の書に、或は中と云、或は中庸と云、二ッのこと、同しき事の内にて少差別あり、中と云は、物の中ずみをさしていふ、過ることもなく不ㇾ及こともなき、よきかげんなるところをいふ、中庸といふは、尤過不及なきことなれとも、其内に、平易從容として、目をおとろかし耳にたつことなく、いつものごとくなるを中庸といふなり、各其所の文にしたかふてかんかへしるへし、後世に一理の名として、未發已發の說あれとも、古人の旨にあらす、

中といふとは、はしめて堯のこと葉にあらはる、堯の位を舜に禪りたまふに、允執二其中一といへり、其後舜の位を禹に禪り給ふにも又かくいへり、其事あきらかに論語にのれり、後世宋儒の說には、古より聖人の代々傳授したまふ心法道統の旨にて、子思子其傳をうしなはんことをうれへて中庸を作るといふかし、中と中庸との差別、上に論する通りなり、其上唐虞三代の時は、風俗淳厚にして、仁愛の德あまねしといへとも、敎法の條目は、後世周の世の時分のことく詳なることなし、それゆへそのかみは、仁義禮智の目さへたゝす、萬事たゝよきかけんに、過ることもなく不ㇾ及こともなきやうにせよとをしへ示さる、允執二其中一といふは此わけなり、元の王耕野讀書管見に云ゝ、所ㇾ謂中者、豈眞有二高遠難ㇾ行之事一、非二聖人一不ㇾ可二企及一邪、今恒言俗語、於下事當二其可一者上則謂二之中一、其

て衆人のことをすつるは智にあらす、

訓幼字義卷之三 終

ふことなきことしるへし、又論語に、好ㇾ知不ㇾ好ㇾ學、其蔽や蕩とあり、これ又證すへし、智をこのむといふも、好ㇾ仁好ㇾ禮といふと同しきことにて、其道すぢをすきこのむことなり、わか性に備りたる理なれは、このむとは云かたし、

世俗の人の大智とおもふは、天地の外古今の終始をも見通し、萬人にすくれて、ひとり其理をあきらむるを聖人とおもふ、これ愚俗の見異端の道なり、聖人の大智たるゆゑんは、廣く衆人の智をとり用るを以て大智とす、其つとむる所は、人倫日用にあつかる大切なることを先務とす、獨智を以て、天下古今萬物萬事の理をしりきはむるにあらす、故に中庸に云、舜其大知也與、舜好ㇾ問而好ㇾ察二邇言一、孟子にも又云、取ㇾ人以爲ㇾ善と云々、此等のこと葉廣く衆人の智をとり用ることをいへり、また云、堯舜之知、而不ㇾ偏ㇾ物、急二先務一也といへり、これその智といふこと、人倫日用の急務をつとむることをいへり、これらにて、聖人のいはゆる智といふことしるへし、

大抵世間のこと、一人の力のよくつくすことにあらす、ことによりては、いやしく愚なるものよくゑることに、聖賢君子の氣の付さることあり、然るゆへに、あまねく衆人の智を取用ひて、その善を擇てこれを行ふ、たとへは天子諸侯の身は、諸萬人の力をあはせて其力とするによりて富國强兵といふかことし、智は人より出ても、これをわか身に取てはわか智なり、衆人の智をあはせてわか智とするときは、其智大なり、故に學をこのみ諫をうけて、其智を大にす、古へより聖人あまたなれとも、舜はことに人の善を用ひたまふによりて、大智と稱す、これによりてしる、獨智をたのみ

復禮といふを、後世復性復初の本とすれとも、左にはあらす、復は反復の義なり、物ことを何へんもうちかへし〳〵行ふことなり、易の乾文言に、終日乾々、反㆓復道㆒也とあり、即此義なり、この事性の條下復性の段に、詳にあらはせり、あはせ見るへし、

智の義、忘れたることなれは、詳に辨するにおよはす、孟子に是非之心、智之端也、又曰、智之實、知㆓斯二者㆒而不㆑去是也、これらのこと葉によりて、その大較しるへし、先儒分㆓別是非㆒底理と註せり、これも性と見たる註なれとも、天下の道と見かへたる時は、此註にてもたかふことなし、仁義禮の三ッのものを天下の達道といふことは、人々會得すれとも、智は人の智惠才智のことたるゆへに、人にそなはりたることゝおもひ、天下の達道といはれましと疑ふこと多し、是も沿襲の見にて、智を道といふも、仁義を道といふと、もとちかふことなし、惣別道といふは人の行事にあらはるゝの名なり、今日貴賤上下の人、朝夕になし行ふこと皆道なり、これをわかちて仁義禮智といふ、故に易曰、仁者見㆑之謂㆓之仁㆒、知者見㆑之謂㆓之知㆒、百性日用而不㆑知、この意は、たとへは今日の人の上に就て見るに、かるき工商の族、朝夕にわか職業に骨ををりて、父母妻子をはこくみやしなふ、これ人の道なり、仁徳ある人これを見ては、かくのことくつとめはたらきて、家内のものをはこくむは仁とおもへり、智徳ある人これを見ては、かくのことくせされは、人はたたさることをしるは智とおもへり、然れとも其身は、わかつとむることを、仁とも智ともいふのわけもしらす、是を百姓日用而不㆑知といふ、然れは所㆑謂智といふものも、即人の行事にあらはるゝ所の名にて、仁義禮とちか

此こと仁の條下に詳に論することなれは、再これをわけす、然れは後世に仁義禮智の四ッを四時五行に配して、人の性の理とすることは、かなはさることと見るへし、

聖人のをしへは、禮と義とを以て、萬事の規矩準繩とす、其故禮義の兩ッをならへ擧てのたまふこと多し、孟子に、義路也、禮門也、君子由二此路一、而出二入斯門一とあり、又進以レ禮、退以レ義とあり、いかんとなれは、信と云恭と云直と云勇と云の類、何れもよきことなれとも、禮義にかなはされはよろしからす、故に有子曰、信近二於義一言可レ復也、恭近二於禮一遠二恥辱一也、因不レ失二其親一亦可レ宗也といへり、此わけは、信は人と約束して相違なきこと、恭は人に對していんぎんなること、何れもよきことなり、然れとも人と物ことを約束するも、理をかまはすして、みたりに約束をするときは、後には其通りにならさるによりて、後悔することあり、また人にいんきんなるも、分にすきていんきんなるは、かへつてはつかしめをとることあり、然るによつて、信も義に近きやうにし、恭も禮にちかきやうにするときは、其こと葉もふみ行はれ、はつかしめも取ことなし、是にては、先かたきよき人といふへし、そのうへに、和氣あつてしたしむへき人は、いよ／＼たつとふへきとなり、又夫子曰、恭而無レ禮則勞、愼而無レ禮則葸、勇而無レ禮則亂、直而無レ禮則絞、孟子曰、大人者言不二必信一、行不二必果一、唯義之所レ在といへり、これも同しきわけなり、然れは萬事の上、禮義を以てのりとして、これにたかはさるやうにせよといふことにて、仁義禮智は我性に備りたる理にて、無欲清淨にして本に立かへるにあらさること、をしゑるへし、

克」己復」禮を解して、勝二私欲一而復」禮則事皆天理云〻と註せらるゝは、大にあやまれり、四書六經の內、禮といふことは、何れも禮法禮儀のことをいふ、一句も理を禮といふことなし、先儒の意にても、克己復」禮の章なと一兩所はかりにて、他の章は何れも禮儀のことなり、然れは禮を解して理といふは、あたらさることと知へし、

聖人仁と禮とをあはせ擧てのたまふこと多し、克」己復」禮爲」仁といへり、以」仁存」心以」禮存」心といへり、人而不」仁如」禮何といへり、此わけは、仁は廣く物を愛し、禮はことの次第あることなり、廣く人を愛して、又其內に次第程等あるを、克」己復」禮といふ、前に論する通りなり、又外樣に禮儀はかりありて、仁愛の心なけれは、表向はかり形儀にして、まことなきゆへに、人而不」仁如」禮何とのたまふ、程子の所」謂、有二關雎麟趾之意一而後可」行二周官法度一といふの意も亦此わけなり、これにて聖人のをしへ、仁禮の兩つのもの、互に相維持してもちあひたることとしるへし、大抵微賤の人は、むつましき心はあれとも、禮儀をろそかなること多し、富貴の上には、禮儀格式きひしくして、倫理の間に、慈愛のこゝろたらさること多し、故に禮を行ふとも仁を本とすといふをしへなり、予故におもへらく、有」仁而無」禮、則泛愛而無」節、有」禮而無」仁、則儼格而不」親と、聖經の旨をかんかへてしるへし、

畢竟禮といふものは、仁義を節文したるものなり、人の仁義あるは、天の陰陽あるかことく、此兩ツの道を柱として、禮にて是を次第し、智にてこれをしる、中庸孟子に載ること葉にてしるへし、

いふはあたらす、何そなれは、告子食色性也、仁内也、非レ外也、義外也、非レ内也といへり、食色は性といひ仁は内といふときは、内と性と差別あることしるへし、然るときは、孟子の義外を非としたまへとも、仁義を性と見たまはさることあきらかなり、

大抵孟子仁義を内といへるは、仁義は天下の大徳にて、その元はわれよりこれを行ふによりて、これを内といふ、長者義乎、長レ之者義乎といひ、行二吾敬一故謂二之内一也といふの類にて見るへし、先儒の註解には、行二吾心之敬一以敬レ之とあり、これも内を直に心と見たるものにて、孟子の意にあらす、畢竟告子の意にては、義といふものはわか心にのらす、外さまにて世に應するまての道とおもへるによりて、孟子つとめてこれを辨せらる、後世には、義を性にあらすとするを義外といふはあたらす、且學問讀書を廢却することを義外といふは、いよ〳〵あはさることなり、

禮といふは、大にしては貴賤尊卑の別、居處衣服之制、小にしては言語動作之別、揖讓進退の度、其品〻の次第あるをさしていふ、周禮等六官は、文武周公天下を治るの禮なり、爲レ國以レ禮といふは、一國を治るの禮なり、克レ己復レ禮といふは、一身を治るの禮なり、經書に所謂禮といふもの皆此ことなり、後世理學さかんなるにより、禮を理と見て、仁義智に配して、人の性の理といふはあやまれり、

論語集註に、禮者天理之節文、人事之儀則也と註す、これは大畧きこへたる註なり、然れとも禮を人の性と見られたるゆへに、天理といふことを註せらるゝは、古人の意にあらす、これによつて、

の事の當然ならさるを見て、我にあればはぢ、人に在ときはにくむ、其事ことなりといへとも、其義は相通するなり、

告子義外の說あり、宋朝の諸儒、告子仁義の性たることをしらすして、外にあるのものとすといへるは、あやまりなり、先儒從來內外二字の義をあやまり說て、心を以て內とし、心にあらさることを外といへるより、仁內なりといふを直に性と說くはよろしからす、元來內といふはしたしむの言葉、外といふは疎遠にするの詞、大學に外レ本內レ末とあり、莊子に內聖外王とあり、古書にかくのごとく用ひ來る例多きとなり、仁內義外といふも其通りにて、仁は我につきてをこり、義は先につきてまはるといふことにて、心と事との差別にあらす、其證據は、孟子告子をなじりて、何以謂二仁內義外一也とあるに、告子が返答に、吾弟則愛レ之、秦人之弟則不レ愛也、是以レ我爲レ悅者也、故謂二之內一、長二楚人之長一、亦長二吾之長一、是以レ長爲レ悅者也、故謂二之外一也といへり、此意は、吾弟はわれにつきたるゆへに愛し、人之弟は吾身につかさる故に愛せす、然れは愛といふものは、我身につきたるものなれは、仁を內といふなり、長者をうやまふことは、わか兄伯叔にても、人の兄伯叔にても、吾より年たけさへすれはうやまふからは、長を長とするは吾身につかすして先にあるなり、これによりて義を外といふと、心と事とを以て內外をわかつにあらさること、この章にて尤分明なり、

告子內外の說、上に論する通りなり、然るに孟子、仁內といふは辨せられすして、義外といふを破せらるゝからは、仁は內といふことは、孟子も取たまふと見へたり、これによつて、仁を直に性と

義を事之宜也と解すること、本中庸の義者宜也といふよりいてたることなり、後代もつはら此註を用ることなれとも、此分にてもつきす、惣別古書に、同音の字をかりて其義訓を解する例多きことなり、何れも一通りの義を明したるものにて、全く其義をつくすにあらす、論語に政者正也、孟子征者正也、中庸誠自成也、而道自道也、又齊之爲レ言齊也、禮者履也といふの類、何れも同しきことなり、政は其身を正するか根本たりといふことを明さんために、政者正也とあれとも、政の字をすくに正しとはかりこゝろへては、盡さることあり、義を宜也といふも其通りなり、

仁ありて義なきときは、墨子兼愛の説に流る、義ありて仁なきときは、揚子爲我の説に陷り、故に聖人の道は、仁義の二ッのものもちあはせて、一偏の弊なし、今一事につゐていふに、子釣而不レ網、弋不レ射レ宿といふかことき、大あみをうち枝に宿する鳥を射ることは、まことに不仁なるゆへにしたまはされとも、釣と弋とをやめさるは義なり、これ一事の上にて小なることなれとも、大事にをしても同しきことなり、聖人の道仁義兼行れて、一偏にかたよらさることかくのことし、

聖賢の書に仁のことをのたまふは、中庸孟子常に親愛の心を以て本とす、義にいたつては樣々同しからす、中庸には尊レ賢爲レ大とあり、孟子には從レ兄是也、又敬レ兄義也と、又羞惡之心義也、又曰人皆有レ所レ不レ爲、達二之於其所一レ爲義也と、此あまたのこと、さす所同しからす、然れとも其至極のおもむきは、何れもことはかはれとも、其當レ爲ことをなして、なすへからさることをなさゝるを義といふよりいつることなり、賢を尊み兄を敬することとき、是當レ如レ此底の道理、羞惡のこゝろは、そ

べに、孟子に並あけてのたまひ、四端を以て其もとゝす、信といふことは、もつとも美德なれとも、恭と云寬と云のたくひにて、百行ののりと志かたし、言不必信、行不必果と云、信近於義言可復也といふのたくひにて、信はかりにては、事に弊多きことあるによりて、仁義禮智に配當しかたきなるへし、

孔子は常に仁智と稱せられ、又は智仁勇とのたまひて、仁義とあはせてをしへらるゝことなし、孟子中庸易の說卦に仁義といへり、老子莊子の書にも、仁義と連用ていへり、然れはたゝ當時に、誰ともなしに配當して、世間に通用していひふらしたると見へたり、孟子に仁義とあるも、したかふへくして、從たるものにて、はしめて料簡を以て言出したまふにあらす、其內に仁智とあるは、成德の上につゐていふ、仁者安仁、智者利仁といふかことこれなり、仁義とあるは、凡人たるものゝ、よらされはかなはさるの道、故曰、立人之道、曰仁與義、又曰、居仁由義、大人之事備矣と是なり、仁禮とあるは、人にましはる上に就ていふ、故曰以仁存心、以禮存心といふかことき是なり、其辨別をしらすんはあるへからす、

義といふは、進退取捨生死得失の上に就て、其可不可の差別を考てこれを行ふの道なり、孟子に人皆有所不爲、達之於其所爲義也、又曰羞惡之心、義之端也とあり、此等のことばによつて、其義を推知るへし、朱子曰、義者心之制、事之宜也と、是も義を人の性と見られたるにより、かくのごとく註せり、義は心を制するの道といふときはよろし、こゝろに備る制の理といふはよろしからす

信、信近二於義一の類、何れもとのはづにちかわさるを信といふ、四書六經の內、一句も仁義禮智の實理を信といふとなし、聖賢のをしへ、すでに仁義禮智とあれは、自實德たり、信を加へてはしめて實德たらんや、或は仁をなしてまことならさるは、假レ仁と云、色取レ仁と云、義をなしてまことならさるは、義襲と云、もとより信をかることをまたす、

漢儒已來周子に至るまては、仁義禮智信と並へ、稱せらるれとも、信の一字程子の說とことなり、漢儒は信を其まゝ忠信約信の信と見たるものなり、揚子法言に、仁宅也、義路也、禮服也、智燭也、信符也といへり、符といふは、わり符の事なれは、約信の信としるへし、周子の通書に、守曰レ信とあり、信をまもるといふときは、是また約信を守ることなり、何れも仁義禮智の實理とするにあらす、大抵初學の輩は、宋朝已來の註解義疏はかりを見て、何ことも三代よりこのかたかくのことしとおもひ、少々議論のたかひあれは、大におとろき、あさけりをなすこと多し、學問の次第條目も、古今の間さまざま變易ありて、三代已來漢唐宋におよふまて、世々の變革一ならすして、先儒の見所も人々同しからす、宋朝理學の諸儒の中にても、主意同しからす、周子程子朱子、何れも異同多きことなり、信を實理と見すして約信と見ることは、周子の說漢唐の諸儒と同しきことにして、程朱子とことなり、これ其一端なり、他事の異同をしるへし、

或人曰、聖人のをしへ、醫師の方を配することくさまざまならは、信を約信と見るときは、仁義禮智に配當すとも、くるしかるましくや、曰然り、しかれとも仁義禮智は、天下の人ののり手本たるゆ

擧け、其外品々の替りあり、仁義禮智といふも即其わけなり、武經には、智信勇仁嚴の五つを將の德とす、これも聖書になきことなれとも、武將の方には、かくのことくくみ合せたるかゆへなり、其內仁義禮智といふは、貴賤上下に通し、かへられさることなるゆへに、後世まてこれをまもり傳ふ、禮記喪服四制篇に、仁義禮智人道具矣といへる是なり、性に備りたる未發の理にあらす、

仁義禮智に信を加へて五常といふことは、上に擧る通りなり、前漢書董仲舒か傳にはしめてあらはる、揚子雲法言にもまたいへり、古註を考ふるに、天の五行に配當したるものなり、朱子の大極圖解に至て、健順五常之性とあり、これは陰陽五行に配當したるものなり、此わけ古昔聖賢のいはさること其辨已に上に詳にす、其內漢唐の儒者より宋の周子まては、もつはら德と見て、いまた性の名とするとなし、通書に、德愛曰レ仁宜曰レ義理曰レ禮通曰レ智守曰レ信といふもの是なり、韓退之の原性にこれを五性といへとも、氣質の性の上にてこれをわかちて、いまた本然の說なし、程子の好學論に五性と定られたるより以來、人に具る本然の理といふは大に聖人の旨に背けり、

程子曰、四端不レ言レ信者、既有ニ誠心一爲ニ四端一、則信在ニ其中一矣、朱子曰、四端之信、猶ニ五行之土一、而水火金木、無下不ニ待レ是以生一者上、此意は、仁義禮智も、まことになけれは空理なるによつて、此四つのものをまことにするを信といふ、五行の土によつて形をよせ、四時に土用のあるかことく、別に一物あつて仁義禮智と並稱するにあらすと、忠信約信の信とは、各別同しからす、性理字義に、五常之信、以ニ心之實理一而言、忠信之信、以ニ言之實一而言と是なり、然れとも古聖人のこと葉を考ふるに、言忠

に智仁勇とあり、大學に仁敬孝慈信とあり、孟子に又仁義忠信とあり、仁義禮智樂ともあり、易の系辭に、敬以直」內、義以方」外とあり、論語に、君子義以爲」質、禮以行」之、孫以出」之、信以成」之とあり、周禮に智仁聖義忠和とあり、此外仁義に配當して條目を立らるゝこと、あまた經書に見えたり、勇と云、敬と云、忠信と云、忠和といふの類、性の名にあらす、しかるに經書に樣〻に配當して、をしへを立らるゝからは、仁義禮智信の五つはかりを人に備る性とはいふへからさること分明なり、勇敬忠和等の目を又人の性ともしかたし、これ又矛盾にあらすや、

然らは聖賢の書に、仁義等の名目さま〲にて一定ならさることは、何の故そや、曰聖人のをしへをまふくるは、たとへは良醫の藥方を配合するかことし、人の病に、內外虛實の違ありて、其證同しからす、水土の變、古今の運、四時寒暑の氣候まことに一概に定かたし、又面々の料簡趣向も一同ならす、然るゆへに、古今さま〲の方劑ありて、各病をいやすのしるしあり、聖人のをしへもまたしかり、人事の應接一概ならすして、性分のうけやうも又さま〲なり、たゝ一字をまもり一言を得てすむことにあらす、人はひろく慈愛せされはかなはさるによつて仁と說く、生死取予の間には、其わけなくんはあるへからさるによつて義と說く、物には次第程等なくんはあるへからさるによつて禮と說く、事の上には、其是非善惡を差別せすんはあるへからさるによつて智と說、又仁義の美たることをしるといへとも、いさみすゝむことなけれはかなはさるによつて勇と說く、何れも彼是持合て名目か立られ、或は仁智と說き、或は智仁勇と說き、或は仁義禮と說き、或は仁義禮樂と兼

此五つを人に備る性の名と定らるゝは、聖人の意にそむけり、程子以前にも、鄭玄中庸の註、ならひに韓退之の原性に、これを性といへとも、これは氣質の上につゐて性といつて、宋儒のことく本然の性に備る理といふことゝなり、

先儒の說に以爲、天に元亨利貞の理ありて、四時に流行して五行の理となる、人此理をうけて、仁義禮智の性となる、是を本然の性といふ、大學章句序云、蓋自㆔天降㆓生民㆒、則既莫㆑不㆘與㆑之以㆗仁義禮智之性㆖矣、小學題辭云、元亨利貞、天道之常、仁義禮智、人性之綱と是なり、然れとも是を定て人に備る五性といふときは、經書の中に引合せて齟齬すること多し、何そなれは、此五つのものかならすさたまりて人に備りてあるものならは、一つをましてもあまり、一つをかきてもたらす、たとへは人に五臟六腑の備りてあるかことく、一つをますこともなく、一つをかくこともならさるものなり、然るに堯舜のときには、いまた仁義の目あらはれす、其後二千年を經て、孔子にいたりてはしめて仁智とならへのたまふ、中庸に仁義禮とあり、孟子にいたりて仁義禮智の目備れり、漢儒董仲舒揚雄に及て、信をそへてこれを五常と云、もし人の五臟のことく、かならす備りてあるものならは、上古より以來、堯舜孔子の聖、何を以てかこれをのたまはすして、漢儒董仲舒揚雄の輩にいたりて、これを見出さんや、人に定りある性の名といふは、こゝろへかたきことなり、

且又仁義禮智信の五つの物はかり人の性ならは、其他の事には配當しかたき事なり、然るに聖賢のこと葉、さま〳〵に配合して、詳畧多少まことに一概にあらす、是又うたかふへし、何そなれは、中庸

仁は人の心より行ふことなれとも、仁の德といふものは、天下萬世おし通りたる一箇の道理なり、仁政を行ふときは、天下の人をのつから其めくみをかふむる、是仁の見るへきものなり、此わけをこゝろうるときは、たとへを萬物にとりても、疑ふことあるまし、惣別たとへをとることは、大抵其一かたに似たる所をもちてたとゆることにて、一々に合ことにもあらす、かくわりて見るときは、たとへによりてかへつて迷をなすことあり、

仁の事、古今の說を通して見るに、論孟の內さま〳〵あれとも、畢竟天下の道と見て、或は其行やうをとき、或はこれを行ふの端本を說て、本別事なし、これを行ふことは、固にきはまりなきことなれとも、其名義は、當時の人上下に通して、よくしりたる事なり、周以前の人のみしかるにあらす、漢以來の人の說も、大樣はたかふことなし、畢竟今時の人の、仁義の道は結構なるものといふも、あたらさるにあらす、宋以來、人欲を絕滅して本性に立かへるを、學問の極とせられたるによりて、聖賢のいはゆる仁といふものも、即本性の靈明なるところをいふとあるより、さま〳〵の說出來れり、そのわけ聖賢のこと葉を玩索して知るへし、

仁義禮智　凡二十六則

仁義禮智の四つを並いふことは、孟子に始て見へたり、天下萬世の人、此四つのものによらされはかなはさるによつて、これを天下の達道達德といふ、孟子以來、漢唐の諸儒、宋朝の濂溪周子にいたるまて、これを道德の名とせり、程伊川の好學論に云、五性具焉、曰仁義禮智信と、これより以來、

示したるものにて、仁を人の心と訓解せらるゝにあらす、すへて經書に、政者正也義者宜也といふの屬、何れもこれによりてをしへを示されたるとにて、後世の字註のとく、其わけをのたまふはかりにあらす、仁を人心也といふも其通りなり、たとへは禮記禮運の篇に、人者天地之心といふかとき、これは人の靈なることをいへり、此語によりて、人をすぐに天地のこゝろといふへきや、曰去からは仁と心と差別いかゝ、曰此と處々に論する通りにて、仁といふものは心ののりなり、古義に心を薪にたとへ仁を火にたとふる説あり、是にて其わかちをしるへし、或は又難していはく、薪と火とは各是一物にて、外にあるものなり、心と仁とをかくの如くにたとふるときは、告子か義外の説と同しきとにて、聖人言仁の旨にあらす、曰しからす、孟子に物を以て道に比喩するとまち／＼なり、或は仁を安宅にたとへ、義を正路にたとへ、禮義を門戸にたとへ、理義を芻豢にたとふるの屬、あまた書中にあらはる、何れも外にあるのものなり、然るに孟子これを仁義にたとふるからは、薪と火とを以て、仁と心とにたとふとても、何そ義外の見におちんや、然れとも物は各其形ありて、たしかに見ゆるものなり、仁義は目に見耳にきくべきのものにあらされは、初學の人うたかひをなすともあるへし、いま且手近きとを以てこれをあかさん、音律の十二調子は、天地自然の音なり、竹肉の聲を出すは、人の聲なり、人の聲清濁高下さたまらさるによりて、修練稽古して、律にかなふやうにするを樂章といふ、然れは樂といふものは、人の聲のあらはれたるものなれとも、其調子は天地自然に備りてあり、人々の聲、かならす調子にかなふにあらす、仁と心とも亦かくのとし、

人々にこれあり、これを道に合せていへは、惻隱之心は仁なり、羞惡之心は義なりと仰られて、其あとに、仁義禮智非ニ由レ外鑠ニ我也、我固有レ之也、弗レ思耳矣とのたまふ、畢竟われに備る所の四つの心を、天下達道の仁義禮智に配當して、人の性の善なることを證せらるゝことなり、仁義の理あらはれて四つの心となるといふにあらす、又仁義をすくに四端といふにあらす、又かならすしも、擴充のわけによりてかくのたまふにもあらす、道の美たることは、人皆これをしれり、道を以て性にあはせて、其善をあらはしてこれを固有と云、故に下に又大雅蒸民の詩を引て、民之秉夷、好ニ是懿德一といへり、秉夷は性の善なり、懿德は則仁義禮智の大德なり、これにて其意もつともあきらかなり、然るに先儒は、學問に一通りの手すしあるによりて、仁義を性の理と見て、遂に固有を理の我に備るの名とす、所レ謂性分之所ニ固有一といへる是なり、今日の學者は、只固有といふ文字にかゝわりてまた疑ふこと多し、何も孟子の意にかなはす、これはたとへは、醫家に五臟を五行の象とす、五臟を五行に配當していへは、心は火なり肝は木なりといふかことし、これは配當したるものにて、五臟の中に五行の質實に備りてありといふへからす、其上固といふ字は、まことにと訓し、もとよりとも訓して、今の人のいかにもなるほとゝいふかことく、實に備りてありといふことは、わけちかひあり、古義を玩索すへし、

或人また曰、孟子に仁人心也といへり、然れは仁義は天下の道にして性にあらすといふへからす、曰是またしからす、これは人の仁を手遠きことゝおもふによりて、それをちかく引よせて、人心也と

云、又心に根さすとあるからは、人々の通して性とすることにあらす、また心に根さゝる仁義あるによりてのことなり、此章の意は、仁義禮智は天下通行の道にて、人々のともに行ふものなり、然れとも人の生付さま〲なるによりて、これを行ふといへとも、外樣はかり其事を行て、心のうちよりまことにおこらさることあり、君子の生付は、各別人にすきこゑたるによりて、仁義を行ふも、心のうちよりまことにをこりて、內外にかはることなし、故に云云々、たとへは君子の仁義は、草木の根ありて枝葉を生するかごとく、衆人の仁義は、根なしに枝葉のみさかへたるかごとし、心に根さすといふはこのわけにて、仁義を道德と見たるよりいてたることなり、初學の人、書をよむこと麁末なるにより、前後の文句に、性の字心の字あるによりて、其まゝかくうたかふて、かへつて仁義を性といはれさること、此章にて尤分明なることをしらす、

或人又云、孟子に、仁義禮智非ㇾ由ㇾ外鑠ㇾ我也、我固有ㇾ之也といへり、然れは仁義は人の性にあらすや、曰しからす、孟子を熟讀して、くはしく其主意をしらすんは、まことにうたかひあるへし、孟子の此章は、もと公都子か性善の說をうたかふよりをこりて、仁義の內外を論するにあらす、惣別古への人は、後世の見ところとおなしからす、仁義を天下の道といふことは、貴賤上下に通して、覺へ居たることなり、乃至聖人の道を信せさるものから、老莊告子のやからまても、これをいとひすてゝとらされとも、其わけはたかふことなし、公都子も何以仁義の道德たることはよくしれり、然れとも人々の性を善といはれましきとおもふによりて、孟子これをさとさんかために、惻隱羞惡之心は

或人の云、語孟字義に仁の事を辨して云、慈愛之德、遠近內外、充實通徹、無ㇾ所ㇾ不ㇾ至之謂ㇾ仁といへり、これにては、墨子のいはゆる兼愛といふと同しきことにて、聖人仁をのたまふの旨にことなりと、曰然らす、是又後世のうたかひなり、後世の人は、仁は仁禮は禮、此一句にてついゑなきやうにおもふによりて、かくうたかふことなり、古へは左にあらす、衆功兼合せてをしへをまつたくしたる事なれは、仁ほと大切なることはなけれとも、たゝ此一つにて事をすむ事なし、それゆへ好ㇾ仁不ㇾ好ㇾ學其蔽也愚とあり、いはんや聖人仁とのたまふときは、をのつから義禮ともちあひたることとなり、しかるによりて、仁といふ字の委曲をいふときは、義禮智ともちあひたるわけをもいふへきなれとも、をしいたしてたゝ一字正面の義訓をのふる時は、慈愛の德云々といはされはかなはさることなり、墨子は義をすて禮をいとひて、たゝ愛することをよしとおもふによりて、愛無ニ差等一と說き、兼愛の弊におちいる、あはせいふへからす、いはんや字義第六條に、仁義もち合たること水火のたとへある上は、尙以墨子に混することなし、

或人の云、孟子に君子取ㇾ性仁義禮智根ニ於心一といへり、しかれは仁義禮智は、人の性たること明らかなり、何そ性にあらすといはんと、曰しからす、此章は、仁義禮智を性といふの證據としかたきのみならす、かへつて性といはさるの證據とすへし、何そなれは、先儒の意のごとく、仁義禮智の性、人々に具りてあるものならは、君子のみにかきらす、誰とても皆性とすることなり、堯舜至ニ塗人一一也といへる通りなり、又心に根さすといふことをまたす、即心即仁義也、しかるに孟子に君子所ㇾ性と

く、たとへときにあたりて、療レ人のしるしなくとも、疾をなをすの覺ある人は、上手といふましきや、これにて聖人仁をのたまふわけしるへし、

聖賢の書に仁といふところ、後世より見れは、義といふへきところあり、誠といふへきところあり、論語に、志士仁人、舍レ生以成レ仁といへり、比干の諫て死するを、殷有二三仁一といへり、管仲の事も、後世の學者ならは、義にたかふの疑あるへきに、子路子貢何れも仁にそむくの問あり、又巧言令色の人も、後の世の人のこと葉ならは、誠すくなしといふへきに、鮮矣仁とのたまふ、剛毅木訥も、誠にちかしといふへきに、仁にちかしとのたまふの類多し、是は古への聖賢は、もつはら人を救ふを德の至極としたまふによりて、萬事のをしへ人に對してたてらる、主人のために一命をすつるも、主人を大切におもひ、慈愛のこゝろを以てすつるによりて、これを仁といふ、人をいつはらさるも、人に如在なき心よりあさむかされは、また仁といふなり、後世には、主人に對して背を見せ、命をかはふて、場をはつすは、我一分の義理たゝすとおもふによりて、義かたたぬ義かかくるといつてもつはら義を以てこれをさはく、人をあさむかさるも、これも我まことを立るといふより、もつはらまことをいふ、をしまはしていへは、同しきことにおゐて、舍レ生而取レ義といふこともあれは、さまてたかひたることにあらされとも、古聖賢の主意とちかひたるゆへにかくのことし、古へより國家の興廢に、命をすてゝ君の爲にする人、何ほともあり、義士義人とはいへとも、仁にたかふたかはぬといふこと、秦漢このかたの論に見へす、是また古今敎法の異同を見るへし、

は、仁の本躰を以て云、一毫無類の境界にいたらされは、ゆるしたまはさるなり、管仲は仁のしるしを以て事に就ていふと、集註に云、管仲雖レ未レ得レ爲ニ仁人一而其利澤及レ人、則有ニ仁之功一矣、又小註云、仲之仁是粗處、至ニ精處一則顔子三月之後或違レ之と、其意しるへし、是にては、仁といふに二樣ありときこゆ、新安陳氏曰、仁有下以ニ心術之精微一言者上、非ニ大賢以上之安レ仁、不レ足ニ以當レ之、有下以ニ事功之顯著一言者上と是なり、然れとも聖門のいはゆる仁といふものに、二樣ありといふと見えす、子路子貢の管仲を仁者にあらさるかと問るゝは、孟武伯か子路冉有を仁なりやと問と同しきとなり、然れは夫子の仁を答給ふにも、二樣はあるましくや、畢竟天下國家を太平にして、萬民其恩澤をかふむるは、仁の至極正面といふものなり、堯舜禹湯の德を稱して、仁覆ニ天下一といふは即是なり、管仲のこと、王道の正にあらされとも、桓公を補て、夷狄をはらひ、後の世まて左衽侏離の風俗を免るゝは、又仁といふものなり、然れは子糾の死後に桓公に事るも、世を救ふの志ありて、とらはれを請ひ、手に覺へのあることなれは、世の功名富貴をめかけて、主を背にしてあたに事るの徒にあらさるとしるへし、然れはこれを仁と許したまふとことはりなり、又顔子のときは不幸にして當時に用ひられされは、國天下におよふの仁は見へされとも、平生の德行によりて、何時にも世に用ゆるときは、伊尹周公の功業をなして、天下國家にめくみのあるわけ、たしかに見ゆることなり、然れは仁をゆるされましきや、平生に慈愛惻怛の心至極して、其才ある上は、世に用ひらるゝに、その志るしあるへきと必定なり、たとへは名醫の人を療して死を生すを、上手といふにいな

又博學而篤志、切問而近思、仁在二其中一矣といふも、上の通にして、此四つのことは、身をおさむる上に麁相にせぬことなり、これをすぐに仁とはいはれねとも、かくのごとくにすれは、仁といふもの自ら其中にこもるとなり、たとへは人に頼れて、書籍器物を買をくるに、方ゝをきんみし、念を入て宜をつかはすやうにするは、先を大切に思ふゆゑにして、先の人もまた宜しき物を得るの益あり、學をするに、博く古へをかんかへ人にたゝして、善道の殘りなきやうにするときは、仁といふほとにあらされとも、仁にたかはすとなり、故に仁在二其中一といふは、直に其事にあらされとも、おのつから其事にかなふをいふ、祿在二其中一直在二其中一といふの類、何れも其通りなり、あはせ見るへし、此二段に引ところの本文、集註のわけ、何れも仁を心の徳と見られたる意にて註あり、是また前に論する例にて心得へし、

孔子の門人に、子路冉有公西華のともから、孟武伯か仁なりやと問に、何れも其才を擧て稱せられ、不レ知二其仁一也と答へ、ひとり顏子には其心三月不レ違レ仁と稱したまふ、三子は顏子の徳行におよはされは、夫子の仁を許されさること、其意しるへし、又春秋の間、賢士太夫の內にて、楚の令尹子文齊の陳文子は、たゝ忠淸を許されて、未レ知焉得レ仁とのたまふ、これも一徳はあれとも、仁の境界にいたらされはなり、然るに管仲の事を、子路子貢の徒何れも其不仁をうたかはるゝに、夫子ふかくその仁を許して、如二其仁一如二其仁一とのたまふ、この事古來議論多きことなり、子路冉有にさへ許したまはさることを、管仲にゆるしたまふことうたかふへし、先儒の意にては、子路冉有に許されさる

はら敬のことなる、程子の此章のことを、此是徹上徹下語、聖人初無二二語一也といへるも、同しきことなり、これ皆宋朝の學持敬を主とせらるゝによりて、かくのことくにあれとも、聖人仁を求るの方にあらす、仲弓の章にも、敬恕兼擧てのたまふに、後世もつはら敬はかりを取も、例して推へし、

論語に仁をのたまふ諸章に、慈愛の德にあつからさるやうに見ゆること多し、巧言令色鮮矣仁と云、剛毅木訥近レ仁といふの類は、何れも仁愛のことにあつからさるやうにきこゆ、これは古人仁といふ字を、直に德の字にかへてのたまふこと多し、德ある人はかならす仁愛なるによりて、通用すと見えたり、然れとも愛にあつからさるやうなれとも、不レ忍の心より出さるはなし、何そなれは、巧言令色といふは、實に己か身をおさめすして、たゝ外樣にて言語顏色を尤らしくして、人によき人と思はるゝやうにする、是殘忍刻薄の事をなして、人をころし物を害するやうなる不仁にはあらされとも、たとへは僞物を賣り假銀を使うことく、人をあさむきて、何とも思はさるによりて、これを不仁といふなり、剛毅木訥の人は、是とはうらはらにして、物つよく木なりなる人は、かさりつくらふことなく、外向はよりそひもなきやうなれとも、心にまことなるところあり、仁者といふほとにはなけれとも、仁の德にちかしといへり、是にて聖人の意しるへし、又仁者は如レ射といふも同しきことにて、的を射てあたるとあたらさるは、面々の工拙なれは、誰をとかむへきにあらす、手ぬきのなきことなり、仁者の我身に反求して、かばひつくらふことなきをかくいへり、其義ます〱分明なり、

いへり、是も一心を收歛して、すこしの私意なきを仁といふ、上の章と同しき意にて、恕以及レ物の工夫あれとも、畢竟本心の理にかへることなり、夫子の旨にあらす

司馬牛の問に、仁者其言也訒とあり、訒とはかたしとよみて、物いふことをさしひかへていふことなり、身に覺もなきことを、手に取やうにこゝろやすくたしかにいふは、畢竟物を粗末にして、人を何ともおもはさるよりおこる、仁者といふものは、人を大切にして、何ことにても、いやしくもすることなければ、身に行ひてなしかたきを、口にてこゝろやすくいふことなしといへり、これは人をすくひ人をめくむのわさはみえされとも、人に對して僞りあさむく疎末なることなきを仁者といふ、巧言令色の章とあはせ見るへし、集註に云、仁者心存而不レ放、故其言若レ有レ所レ忍而不レ易レ發と、是も放心せさるところを仁といふ、上の章と同しわけなり、

樊遲仁智をあはせ問ること二章、其わけ明らかなることなり、仁を問の章は、たゝ一章あり、夫子の答には、居處恭、執レ事敬、與レ人忠、雖レ之ニ夷狄一不レ可レ棄也とのたまふ、これは人たるもの、常ゝいんきんにして、物ことを大切にかけ、人に對して如在なければは、仁にかなふといふことなり、このところ集註くはしき註なし、新安陳氏曰、此與下答ニ仲弓問一仁章上當ニ參看一、彼以ニ敬恕一言、此以ニ恭敬忠一言、蓋居處恭、靜時敬也、執レ事敬、動時敬也、忠即恕體、恕即忠用也、一而已矣、動靜恭敬、表裡忠恕、又能持守而無ニ間斷一、即私意何容、而仁豈外レ是哉と、これも私意たちさりて仁にいたること、上と同しきことなり、其内本文には、恭敬忠を並へ擧て答たまふに、小註の意にては、もつ

と、三月の久しきにいたる、これによりて、其心三月不レ違レ仁と稱美したまふなり、心の道にかなふをよると云、依ニ於仁一といふかことく、道にそむくをたかふと云、違レ仁といふかことし、是にて仁といふものは人の道にして、心のこれにそむかさるやうにすることあきらかなり、先儒の說の通りなれは、明鏡のくもりをさりて、本躰の光明にかへるかことし、集註に無ニ私欲一而有ニ其德一也と解せらるゝこれなり、此通りにては、孔子の顏子を稱したまふに、其心三月昏昧ならすといふへくして、仁にたかはすとはあるましきことなり、然るに其心不レ違レ仁といふは、いはゆる歇後語に類す、表よりいへは眞すくにはやくきこゆることを、うらより言まはして、まはり遠くのたまふに似たり、其外聖人の千言萬語、禮と說義と說中と說敎と說は、只一口に無欲主靜といふの簡約にしてまもりやすきにしかすや、これ仁を以て理と見たるの弊なり、

仲弓問レ仁に、出レ門如レ見ニ大賓一と答へたまふ、これ又顏子に答ふると同しきことにて、仁を守るの方をいふ、出レ門如レ見ニ大賓一といふは、もののこと大事にかくる事なり、己所レ不レ欲勿レ施ニ於人一といふは、人の心ををしはかりて、あしくあたらさることなり、かくのことくすれは、人に對して如在なく、人も惠みをかふむるによりて、仁といふへし、其しるしは、何かたにありても、人より我をうらむるものなしとなり、其旨もつともあきらかなり、其内顏子は大賢王佐の才なれは、天下に仁するの道をのたまふ、仲弓は顏子におよはされは、泛く仁をするの方をのたまひて、邦家無レ怨をしるしとしたまふ、是又分明なり、集註に、敬以持レ己、恕以及レ物、則私意無レ所レ容、而心能全矣と

るしあたふ、さてその條目をいふときは、非禮を視聽言動せされとなり、非禮といふは、己かわたくし、即人欲をいふと、是後世の學問の旨にて、聖賢の意にあらす、聖賢のこと葉に己といふは、何れも人に對して云、我身のことなり、人欲をさして己といふことなし、禮は禮樂禮儀の禮、天理をさして禮といふこと見へす、其上非禮を人欲といふは、きこへたることなれとも、これにては、非禮と連稱して私欲のことゝなる、本文はたゝ上文の復禮の禮をうけて、禮を目あてにして、禮にあらされは視聽することなかれとなり、中庸に、齊明盛服、非レ禮不レ動、所三以修二身也、易の履の大象に、君子以非レ禮弗レ履といふと同しきことなり、然るに非禮を人欲と訓するは、あたらさることしるへし、畢竟夫子の意は、仁を天下の道と見て、禮を以てこれを守るといふとなり、先儒は仁を人に備る理と見られたるによりて、私欲をさりて初に立かへるといふ、主意ちかひたるによりて、かくのことくたかひあり、

夫子顏子を稱して曰、回也其心三月不レ違レ仁云々と、集註に云、仁者心之德、心不レ違レ仁者、無二私欲一而有二其德一也、程子曰、不レ違レ仁只是無二纖毫私欲一、少有二私欲一、便是不仁と、これも克己復禮の章と同しわけなり、本文の意にあらす、仁といふものは、天下の達道にして、人のまさに行ふへきところのものなり、然とも天下の人生付一樣ならされは、たゝ其欲するまゝにして、をへしなきときは、かならす道にたかひやすし、故に聖人のをしへは、人の此道にたかはさらむことを示したまふ、然るに顏子は大賢亞聖の資なれは、其心道にもつはらにして、一毫殘忍の念、胸中にきさすことなき

の丶地盤たつことなり、然れとも我身は一ッにして、天下の人はかきりなし、天下の人を一同に大切にせんとすることは、人のなりかたきこと、其にては平等兼愛の説に流れて、道を通る人をも、我父子兄弟のことくにせんとすれは、わか君に忠を盡し、我父母に孝をつくすこともなりかたし、其ゆへ禮といふものありて、貴賤尊卑親疎遠近の差別、それ〳〵にたちわかれて、それ〳〵に應接するときは、仁といふものもち合てよく行はるゝなり、たとへは人の死をかなしむは仁なり、然れとも人ことに喪服をつとむることもなりかたし、父母には三年の喪を服し、祖父母には期の喪を服し、その餘旁親外戚には、九月五月三月の品ゝありて、をの〳〵其恩をむくひ、情をのふ、禮の仁をたすくるはこの類なり、總して禮といふものは、仁に條理次第を立たるものにて、廣き國郡に邑里鄕村を分ち、大なる園囿に門戸堂廳を別つかことし、其わりなけれは守りかたし、故に夫子、己にかつて禮をかへつさふするを仁と爲といへり、孟子に、禮之實節二文斯二者一是也、中庸に、仁者人也、親レ親爲レ大、義者宜也、尊レ賢爲レ大、親レ親之殺、尊レ賢之等、禮所レ生也とあり、これ又同しき意にて、あはせ證とすへし、さて其しるしをいふときは、一日克レ己復レ禮、天下歸レ仁と、天下の人仁に歸服すといへり、又其條目と尋らるゝ時は、云々視聽言動かならす、禮にかなふやうにといふこと、其旨尤明白なり、先儒の説におもへらく、己とは我私欲をいふ、禮は天理の節文をいふ、仁は心の全德なれとも、人欲におほはされて、これをうしなひ亡す、然るゆへに人欲にかちさりて、もとの天理に立かへるときは、本心の德又我に全し、一日もかくのことくするときは、天下の人仁者とゆ

古註をましへ考ふへし、

論語に、人而不ㇾ仁如ㇾ禮何、人而不ㇾ仁如ㇾ樂何とあり、仁といふは慈愛の德、禮は禮義、樂は音樂をいふ、人たるもの慈愛の德ありて、其上に禮樂を行ふときは、禮樂も能行はれて、其しるしあり、もし慈愛の德なくして、いたつらに外面にて禮樂をおこなふときは、禮樂も行はれすといふことなり、即ち禮云禮云玉帛云乎哉、樂云樂云鐘鼓云乎哉とのたまふと同しき意なり、王莽漢の天下を簒て、周禮の法を行へとも、つゐに其身をほろほすかこときこれなり、集註に三說あり、何れも少々同しからす、其內李氏の說尤分明なり、游氏の說は禮樂は其まゝ禮樂のことにせらるれとも、人而不ㇾ仁則人心亡矣とあるは、仁を人心の理と見たるものなり、程子は仁禮樂ともに、理と見られたるゆへに、仁者天下之正理、失ニ正理ー則無ㇾ序而不ㇾ和と註あり、この二說は甚遠きことなり、これは萬事其理をうしなへは、次第あしくおもひあはぬといふことなり、仁も慈愛の仁にあらす、禮樂も鐘鼓玉帛のことにあらす、正しき理を仁といふ、次第あるを禮と云、和するを樂と云、大に聖人の意趣にあらす、尤世間のことには、かくのごときことあれとも、本文の旨は左にあらす、たゝ仁は仁禮は禮樂は樂と心得て熟玩すへし、

顏子の仁を問たまふに、克ㇾ己復ㇾ禮爲ㇾ仁とあり、これ仁を行ふの工夫を說けり、己といふは、我身をさしていふ、凡人たるものゝ不仁なることは、皆我身からにして、人をかまはさるによりて、殘忍刻薄になり、然るによりて、人我のへたてなく、人を一枚に大切におもふときは、先仁といふも

るの根本なりといふことなり、仁といふものは天下の達德にして、其本は孝弟の心より行ふといふこと、孟子の四端擴充の說と符合してよくきこへ、其理尤分明なり、先儒の說はしからす、程子曰、爲ㇾ仁以二孝弟一爲ㇾ本、論ㇾ性則以ㇾ仁爲二孝弟之本一、又曰、孝弟是仁之一事、謂二之行ㇾ仁之本一則可、謂二是仁之本一則不可、蓋仁是性也、孝弟是用也、性中只有二個仁義禮智四者一而已、曷嘗有二孝弟一哉、然仁主二於愛一、々莫ㇾ大二於愛一ㇾ親、故曰、孝弟也者其爲ㇾ仁之本歟と、此意は、仁といふものは性にして、孝弟は性の用なり、故に性の上よりいふときは、仁は孝弟のもとなり、孝弟を仁の本といふへからす、仁を行ふうへよりいふときは、近き處の父兄に孝弟をつくして、其上にひろく人におよひ物におよふのめくみあり、これ孝弟は仁を行ふの手はしめなり、故に孝弟は爲ㇾ仁之本といふと、これは先儒の仁といふものは、聖賢の仁とのたまふとたかひたるによりて、かくのことく說まはされたるものにて、經の本旨にあらす、本と云こと葉に、根本の本あり、本始の本あり、有子はもとより仁を天下の達德とたてゝ仰かるゝゆへ、孝弟は仁の根本といふこと、上に論する通りなり、先儒は仁を性と見られたるゆへに、孝弟を仁の本といひかたし、これによつて、仁を行ふには孝弟をはしめとすと、本始の本に註せらる、然れとも最初に其爲ㇾ人也とあるは、學問修爲をまたす、天性孝弟なるものをいふ、行はしむるのことにあらす、さて君子務ㇾ本、本立而道生といひて、末に孝弟爲二仁之本一與といへるは、孝弟を以て仁之根本とすること、もつとも疑なし、いはんや爲二仁之本一與の一句、仁の本たるかとはよむへし、仁を行ふの本かとは、解しかたきことなり、此わけ古義に詳なり、又

ときは、此心を淸淨にして、一毫の人欲のわたくしなく、天理の至極をつくすを、仁を得るの境界とす、論孟の諸註を考へ見るへし、畢竟氣質を變し物欲を除て、明德の本躰に立かへる事なり、聖人のをしへを見るときは、聲色臭味の欲は、人のかならすあることなれは、此こゝろをたちほろほすへきにあらす、たゝ禮義を以て準として、此のりにはつれさるやうにすることなり、仁は人を愛するの道なれは、一人二人の上より惠みの及て利益あるを仁といふ、或は事を敬し、或は忠恕をつとめ、或は禮義をふみ行ふ、皆仁をもとむるの工夫なり、論語孟子にあらはるゝこと葉にてしるへし、畢竟仁は天下の大道にて、慈愛の德内外遠近いたらさることなきをいふ、後世是を以て性の理とせられたるによりて、さま／＼むつかしきこと出來りて、日用に遠きことゝなる、能〻其おもむきをかんかふへし、

有子曰、其爲レ人也孝弟、而好レ犯レ上者鮮矣、不レ好レ犯レ上、而好レ作レ亂者、未二之有一也、君子務レ本、本立而道生、孝弟也者、其爲二仁之本一與と、此は孝弟の德の至極大切なることを稱美して、仁にいたるへしとのたまふなり、此こゝろは、人の生付、親に孝行に兄にまつらふものは、先能生付て道にちかきものなり、かくのこときものは、上たる人ををかしないかしろにすることなし、まして道理にさかひ常を亂ることは、猶以することなしと、これ孝弟なるものゝよきことを言ひたてらるゝなり、さて君子たる人は、萬事に付て、末をとらすして、根本を第一につとめ行ふ、これは根本さへ立ときは、道德これより生〻してやまされはなり、然るときは、孝弟といふものは、仁にいた

用と、是にてしるへし、二句ともに躰に就て說て、其發する所を用といふなり、畢竟宋朝已來、仁に偏言の仁といふと、專言の仁といふことあり、これは程子の易傳に、四德之元、猶ニ五常之仁一、偏言則一事、專言則包ニ四者一といふよりいつ、偏言といふときは、仁はかりの事なり、專言といふときは、義禮智信の四をかねて其中にあり、それゆへ心の德といふは、專言の仁にて、人の生理をいふ、義禮智も其中にあり、愛の理といふは、偏言の仁にて、人を愛するの理そなはりたるをいふ、此二ッを兼て、心之德愛之理と註せらるゝ事なり、此意は、仁は人心の生理なるゆへに、常ゝ流行生々してやむことなし、此生理なきときは、心即死し終はる、これを心の德といふ、仁義禮智をすへあはせたるものなり、其內にて、物を愛するの理そなはりたるを愛の理といふと、先儒の說に、謝上蔡覺を以て仁を訓するを非とせらるれとも、滿腔子惻隱之心といふ理を見るときは、生理ありて物を知覺する上に愛することをかねて仁といふ、予故におもへらく、先儒以ニ能覺能愛之理一爲レ仁と、童子問の序中にこれをいへり、猶又大全集註を詳にすへし、

宋朝程子以來、仁の說さま〳〵なり、其內少々異同ありといへども、畢竟仁を理と見性と見たるものにて、聖人の所レ謂仁といふと大に異なり、辨せすんはあるへからす、朱子は程子の說を祖とせらるれとも、又少し異同あり、程子はもとより仁義禮智信を五性と定められたれとも、又仁者天下の公善之本也といふ說あり、然れはおほやけなる所を仁とせらると見へたり、朱子はもつはら心之德愛之理と註あれは、我一心に備るの理をさしていふ、これによりて、仁をもとむるの工夫をいふ

れとも、程子の語に又曰、心生道也、有ニ是心一斯具ニ是形一以生、惻隱之心、人之生道也、とあり、然れは滿腔子是惻隱之心といふも、朱子の意のことくなるへし、是又仁を人心の生理と見られたるゆへに、かくのことくなる說出來れり、是を聖賢の意にたゝすときは、仁は人を愛するの德、其本を尋ぬるときは、吾惻隱の心よりいつ、故に惻隱之心仁之端といへり、こゝろに知覺することには、もとより相あつからす、

程子遺書に又云、切レ脉可ニ以體一レ仁と、朱子語類に、揚道夫曰、脉是那血氣周流、切レ脉則便可ニ以見一レ仁、曰然、脉理貫ニ通乎一身一、仁之理亦是恁地とあり、程子又云、觀ニ鷄雛一此可レ觀レ仁と、朱子の云く、小小之物、生理悉具、又云、初與ニ嬭底一便是、又云當ニ是時一飲喙自如、未レ有ニ所一レ謂爭鬪侵凌之患一者只此便是仁也といへり、此三說少々同しからす、とかく鷄雛の小なる物にも生理備るを以て、仁をしるといふことなり、是も切レ脉のこと葉と同しきわけなるへし、畢竟仁を生理と見たる說よりいてたるものにて、聖賢仁をのたまふの旨にあらす、

論語集註云、仁者愛之理、心之德、孟子集註云、仁者心之德愛之理と、二の句前後の同しからさること、先儒よりも說々あり、畢竟論語は孝弟の章なるゆへ、先に愛の理と註し、孟子は仁の本躰を仰かるゝゆへ、心の德を先に擧らるゝと見へたり、何れも躰に就てこれを云、雲峯胡氏は、此二句躰用を分て、心之德爲レ躰、愛之理爲レ用、大全につふさなり、是は誤りなり、朱子の旨にあらす、語類に云、以ニ心之德一而專言レ之、則未發是躰、已發是用、以ニ愛之理一而偏言レ之、則仁便是躰、惻隱是

公則無レ情、仁則有レ愛とこれなり、されとも公の字を以て仁を訓することは、もとより虛遠にして、あたらさることなり、公而以レ人躰レ之爲レ仁といふも、慈愛の意ありといへとも、是又人之性と見たるものにて、古聖人のいはゆる仁と云とは異なり、

又人を以て訓するの說あり、程子これを非とせらるゝこと、旣に上にあらはす、然れとも孟子中庸にも、仁者人也とあり、古よりもかくのことく解せらるゝとあり、其中古人は、たゞ人の人たる道といふほとの事にて、是又同音の字をかりて、大樣に解せらる、義者宜也といふと同しき例なり、後世の說にては、人心の生理といふやうにこゝろへて、人の字を解せらるゝ、これ又高上なることなり、平岩の註に、以レ人爲レ躰と解あり、是はあやまりなり、又生の字を以て訓せんといふ說あり、是も同しきわけなり、語類にあり、近思錄註にもこれをひく、

程子曰、滿腔子是惻隱之心と、腔子とは、軀殼とも註し身裏とも註す、人の胴を云、人の一身にみちみちて皆惻隱の心といふことなり、此通りにては、甚ことなることもなきやうにきこゆ、朱子の說に曰く、滿腔子是惻隱之心、不ニ特是惻隱之心一、滿腔子是羞惡之心、滿腔子是辭遜之心、滿腔子是非之心、彌滿充塞、都無ニ空缺處一、又曰、如ニ刀割著亦痛針割著亦痛一、葉平岩曰、人之一身、惻隱之心、無レ所レ不レ至、故疾痛瘁痾、觸レ之則覺と、此意は、惻隱の心人の身うちに滿々てあるゆへに、身にふるゝ事心に徹し、あつければあつしと覺へ、さむければさむしと覺へ、うゆればうへをしり、渴すれば渴をしる、乃至身をきり損すればいたみをおほふと也、程子の語、朱子の意のことくには見へさ

得たる人とはいひかたしと、仁と淸との差別これにて明らかなり、詳なることは、童子問にこれをあらはせり、

張無垢、仁者覺也と說けり、又謝上蔡も、覺を以て仁を說かる、張無垢はもつはら禪學を崇信したる人なれは、仁も禪見に見なしたるものにて、まことに辨におよはす、上蔡は程門の高弟なれとも又禪理を用ひたること多し、所謂倍其師說而淫老佛といふの人なれは、子韶の說と甚異同なし、朱子の語類に、張子謝氏の說を辨せらるゝことつふさなり、大意おもへらく、覺はこれ智に屬す、仁者はまことによく覺すれとも、覺を以て仁といふへからすとなり、又云、仁離愛不得、上蔡諸公、不把愛做仁、又論語或問に謝氏の說を引て曰、蓋亦生於以覺爲仁、而謂愛非仁之說耳といへり、朱子の意見るへし、畢竟子韶上蔡の說、何も高遠にして、仁の義をさること甚遠し、愛は仁にあらすと、ことにおとろくへし、朱子辯難あれとも、集註仁の字の解には、又覺の義をましへり、

又公を以て仁を訓するの說あり、これは誰か說なることを詳にせす、程子の曰、公只是仁之理、不可將公便喚做仁、公而以人躰之故爲仁と、又朱子文集或人之書簡に、或以仁訓覺訓公者といへり、當時公を以て解する人ありと見えたり、程子のこれを非とせらるゝは、仁者は天地萬物を一躰とするゆへに、仁の理をいふときは、まことに公といふへし、然れともこの分にては仁を訓しかたし、かならすわか身を以て是を躰して、慈愛惻怛の心ありて、仁といふへしと、朱子の曰、

當レ理而無二私心一爲レ仁とは、是は李延平問答に出て、論語集註第三の卷にこれを取る、此わけは、人のなすことに、道理にあたれとも、或は私心あることあり、又わたくしの心はなけれとも、或は理にあたらさることあり、仁者といふものは、心にも私なく、事を處するにも、かならす理にあたりて、內外うち拔け、純天理にして、一毫のわたくしなし、然るゆへに楚の令尹子文、齊の陳文子の徒は、事理にあたらすして、心にも私をまぬかれさるによりて、たゝ忠淸はゆるされて、仁はしらすとのたまへりと、其詳なることは、集註大全等につふさなり、語孟字義にこれを難しておもへらく、これは誠の字の訓とすへし、仁を說へからす、もし當レ理而無二私心一を仁といふときは何れの語を以て誠の字を訓せんやと、畢竟宋朝の先儒は、何れも仁を理と見られたるゆへに、かくのことく解せらるれとも、聖人の旨にあらす、とかく仁といふものは、人の爲にする所ある大德なれは、子文文子か行跡のことときほとのことにては、よきことはよけれとも、たゝ忠淸とはかりはゆるされて、仁とはいはれすとのことなり、集註に又陳文子か事を論して云く、潔レ身去レ亂可レ謂レ淸矣、然未レ知其心果見二義理之當然一而能脫然無レ所レ累乎、抑不レ得レ已二於利害之私一而猶未レ免二於怨悔一也、故夫子特許二其淸一而不レ許二其仁一といへり、是は先儒の仁といはゆるもの、無欲を以て其本體とせらるゝゆへに、淸といふと仁と、混合して差別なし、それゆへにかくのことく論せらるれとも、しかれとも利害のわたくしに不レ得レ已して、怨悔をまぬかれさるときは、仁はいふにおよはす、淸ともいひかたし、本文はたゝ不義の國に居るをいとふて立さるは、淸淨なることなれとも、仁の大德を

後世仁の說さま〲あり、韓退之曰、博愛之謂ㇾ仁、程子曰、仁者天下之正理、又云、公而以ㇾ人體ㇾ之、故爲ㇾ仁、李延平曰、當ㇾ理而無二私心一仁也、又覺と訓し人と訓するの說あり、程子是を非として、孔孟仁を言處を合て、研究すること二三歲にても未ㇾ晚といへり、又公と訓し生と訓するの說あり、朱子にいたりて、心之德愛之理と註せられて、仁の字義定れり、韓退之の說、先儒用をしりて體をしらさるのそしりあり、畢竟程子以來の說、少く異同あれとも、何れも仁を人の性にそなはりたる理と見て、聖人の旨とことなり、

韓文公原道に、博愛之謂ㇾ仁といへり、伊川これを非としておもへらく、孟子曰、惻隱之心仁也、後人遂以ㇾ愛爲ㇾ仁、愛自是情、仁自是性、豈可三專以ㇾ愛爲二仁、孟子言二惻隱之心仁之端也一、既曰二仁之端一、則不ㇾ可三便謂二之仁一、退之言二博愛之謂一ㇾ仁非也、仁者固博愛、然便以二博愛一爲ㇾ仁、則不可と、此意は、畢竟仁の用を知て、たゝ愛とはかり心得、其體をしらすとなり、然れとも夫子樊遲問ㇾ仁に答て、愛ㇾ人とのたまへり、孟子にも、仁者無ㇾ不ㇾ愛也といふ、又以二其所一ㇾ不ㇾ忍、達二之於其所一ㇾ忍仁也とあり、しかれは博愛とするを以て仁を解すること、まことにあたらさるにあらす、然れとも韓子の說の通にては、人を慈愛することはよりは仁といはるれとも、巧言令色鮮矣仁と云、仁者如ㇾ射のこと葉通すへからす、慈愛のことにあつからされとも、不ㇾ忍の心よりあることは、聖賢のこと葉通して是を仁とのたまふこと、語孟の中にあまた見へたり、然れは韓子の說も、全く取るへきにあらす、志かれとも後世仁を理と見る說よりはまされり、

訓幼字義卷之三

仁　凡二十八則

仁といふは、慈悲憐愍の德ひろく物に及て、内外遠近行わたらすといふことなきをいふ、すなはち天下の達道萬善の惣括、人の須臾もはなるへからさるものなり、經書に仁といふことさま〴〵あれとも、畢竟人にしのひさるの德よりいてすといふことなし、孟子曰、人皆有ㇾ所ㇾ不ㇾ忍、達ニ之於其所ㇾ忍仁也、又曰、惻隱之心、仁之端也と、これらの語を以て、仁の字の本字正訓と心得へし、後世に及て、仁を人心にそなはるの理とし、無欲主靜を仁にいたるの工夫とするは、皆佛老の說に落て、聖賢仁をのたまふの旨にあらす、

聖賢の書に、仁をいふことまち〳〵なり、仁者人之安宅也といふかこときは、仁を稱美して、人々の行はされはかなはさるところの道、たとへはよき家に居て何の氣をもなきかことし、かるかゆへにこれを宅といふ、是仁の躰段を說く、克ㇾ己復ㇾ禮爲ㇾ仁、並に樊遲司馬牛の問に答ふるの類は、仁にいたるの工夫を說く、孟子擴充之說、及達ニ之於其所ㇾ忍仁也といふも亦しかなり、天下歸ㇾ仁、在ㇾ邦無ㇾ怨在ㇾ家無ㇾ怨の類は、皆仁の効驗を說く、惻隱之心仁之端也といふかこときは、仁を行ふのもとわか心に具るといふことにて、其根本を說く、しかれとも何れも仁を天下の德愛ㇾ人の道と見て、かくのたまへり、

又瓦礫煨燼は、もとより生〻するとなし、是ははしめより生氣なけれはなり、先儒の説の如くいふときは、大凡天地の間に形あるものは、此理あらすといふことなく、瓦礫煨燼までも、各其理を具へさるはなし、しからは是も又生々すへきはすなり、然るにかくのとくなるは、物の生〻するは、氣によりて理にあつからさること決然たり、これ易の乾元坤元を始として、此上面にをゐて、一層の理をいはさるゆえか、

訓幼字義卷之二終

云く、有ㇾ物先㆓天地㆒、無ㇾ形本寂寥、能爲㆓萬象主㆒、不㆘逐㆓四時㆒彫㆖と、これも同しきことにて、先儒のいはゆる無極太極の旨とことならす、

無聲無臭と云こと、本詩經文王の篇に出つ、上天之載、無ㇾ聲無ㇾ臭、儀㆓式文王㆒、萬邦作ㇾ孚といへり、此意は天の德に法り象らんとおもへとも、天道のことは、をともなく臭もなきものなれは、かたとるへきすしなし、文王の德は、天と一躰のことなれは、文王に法り象るときは、萬國の人をこりまことゝせんとなり、もと別義なきことなり、論語に天何言哉と云、孟子に天不ㇾ言とあること、其語意一般なり、無聲無臭の中に一箇の物ありとするにあらす、中庸にこれを引て、至矣といふ、詩經と少かはるやうなれとも、是又明德の形跡にわたらさることをいふ、一理をさしていふにあらす、此わけ中庸發揮の末に辯しをけり、詳にのへす、

先子云、天地一大活物、又云天地之間、一元氣而已矣と、此わけ天道の條下にくはしく論辯せり、又おもふに、萬物の生〻化〻するゆえは、もつはら氣にありて理にあらす、何そなれは、理といふものは、天地萬物の主宰なれは、凡形氣あるもの、理にもるゝものなし、草木鳥獸はいふに及はす、糟粕煨燼までも、一物ことに各其理を具へすといふことなし、故に先儒の說に云、天下無㆓性外之物㆒と、然るに今世間萬物の上に就てこれを見るに、鳥獸草木も、生氣ある内には、各其時節に隨ひて、或は花さき子を結ひて、次第に生殖し、或は胎をなし卵をわつて、それ〳〵に繁殖す、是は生氣具りてあれはなり、もし或は生氣盡きはてゝ枯死するときは、其形ありといへとも、また生育することなし、

極といはすして、太極本無極といへり、その無極の理よりして、太極の氣となるといふとしるへし、予これによりて按するに、宋の時國史に周子の本傳あり、其中に太極圖說を載らるゝには自ニ無極一而爲ニ太極一と、自爲の二字あり、今の宋史にはかくのごとくなし、朱子の時分迄の國史には其通りと見えたり、此言甚あやまりなるよし、朱子上書して、この文字を改むへきことを記しをかる、然れとも是は周子の舊本と見えたり、今の本に自爲の二字なしといへとも其義はことなることあるまし、理よりして氣にうつることを無極而太極とあること愈明白なり、是朱子の解周子の旨にことなるところなり、此外に又五性を仁義禮智信と云、中正仁義を仁義禮智に配せらるゝのたくひも、周子の旨にあはすと見ゆれとも、此處にしるして預ることにあらされはこれを除く、

畢竟理といふことは老子にもとつく、老子經に云、有レ物混成、先ニ天地一生、寂兮寥兮、獨立而不レ改、周行而不レ殆、可ニ以爲ニ天下母一、吾不レ知ニ其名一、故字レ之曰レ道、又云、惚兮、恍兮、其中有レ象、恍兮惚兮、其中有レ物、窈兮冥兮、其中有レ精、其精甚眞、其中有レ信、自レ古及レ今、其名不レ去、以閱ニ衆甫一、又云、谷神不レ死、是謂ニ玄牝一、玄牝之門、是謂ニ天地根一、又云、繩々兮不レ可レ名、復歸ニ於無物一、是謂ニ無狀之狀一、無象之象、是謂ニ恍惚一と、此等の言葉、何も一箇の聲もなく臭もなきものありて、天地萬物をつかさとるといふことなり、先儒のいはゆる、未レ有ニ天地一之先、畢竟有ニ斯理一と、其旨ことなることなし、先子いへらく、周子のいはゆる無極之眞、二五之精と云こと、分明に老子の其中有レ精其精甚神といふよりいつと、此外老子の全書を考へて、其旨を通しゑるへし、又梁の傅大士の偈に

動靜の上におゐて、一箇の無極といふものを立らるゝは、聖人の旨にあらず、其上天道人事の中におゐて、陰陽動靜は並行るゝことなれとも、聖人の主として尊むことは必陽にあり、故に易にも、陽を君子の象とし、陰を小人の象とし、陽を善とし、陰を惡とし、坤の初六におゐては、履霜の戒をのこし、復の初九には、積陰の下一陽來復するを説て、これを名付て復といふ、人事の上におゐても亦しかなり、專視聽言動の上に就て工を用ひらる、一念不生の所におゐて、もと其説なし、然るに周子の圖説に、無欲主靜と云て、もつはら靜を尊む、通書に在ても、元亨誠之通也、利貞誠之復也と、陰靜を復とせらる、是聖人の旨と齟齬するにあらずや、此等のこと予別に辯あり、こゝにはつらはしくのへす、

無極太極のこと、朱子の意なれは一物の異名なり、これを先子にきけり云、太極と云ことは、易以來漢儒までのおもむきは、もつはら一元氣のことなり、漢書の律歴志に云、太極元氣、函三爲一と云の類是なり、周子も其趣は漢儒とかはることなし、其上面に一箇の無極といふものを立られたる、是周子のはしむることにして、漢儒とことなり、其證據は、圖説の前後を通して考ふるに、太極動而生陽、靜而生陰といへり、又無極の眞、二五の精、妙合而凝といへり、動靜の所には太極と云、眞精の處には無極と云、然れは太極は氣をさし、無極は理をさしていふとあきらけし、又云、五行一陰陽也、陰陽一太極也、太極本無極とあり、五行を陰陽におしつめ、陰陽を太極におしつめ、太極を無極におしつめて、かく言葉を立られたるからは、無極と太極と差別あるへし、いはんや太極即無

と、最聖人の旨にかなはす

周濂溪の太極圖説に云、無極而太極と、圖解に是を註して云、上天之載、無レ聲無レ臭、而實造化之樞紐、品彙之根抵也とあり、畢竟無極太極といふは、こと葉はかはれとも、一理の名を標したるものなり、この理といふもの、目にも見えす耳にもきこえさるものなるによりて、是を無極と云、圖解の無聲無臭と云是をとけり、又萬物これによらされはたゝさるによりて、是を太極と云、圖解の樞紐根抵といふ是を説けり、□云無レ形而有レ理と云是なり、又北溪陳氏の云、太極者理之尊號と此宋朝太極の説のあらましなり、因レ之是を考ふるに、太極といふことは、易の繫辭に出る、無極といふことは、道書に多くいへり、六經の中に見へす、周子これを取あはせて、無極而大極といへり、然れとも周子の旨、聖人の意にたかふことあり、朱子の解、周子の意と齟齬することあり、先人讀近思錄鈔を著し、其辯を明せり、然れともいまた全書を成さす、委細のことまてはしるしをかす、今過庭の遺訓を拾ひて、其大較を下にあらはす、

聖人のをしへは、もつはら事實に就て人に示したまふ、故に孝を説ては色難と云、君に事つることを説ては勿レ欺とのたまふ、これより以上におゐて、一種の深甚微妙なることなし、中庸に云、鳶飛戾レ天、魚躍二于淵一言二上下察一也、論語に云、無三行而不レ與二二三子一者是丘也と、いつれも道の明白昭著おほはれかくるゝ事なきことをいへり、たゝに人事のみならす、天道の上に就てもまたしかなり、易に乾元坤元と云も、一元氣のところを天道のもととして、此上面に又一箇の物なし、然るに周子陰陽

らるゝによりて、かくの說あり、またかふへからす、

聖人の道は一以貫レ之といふといへとも、今日人事の上にさま〲あるによりて、其名目工夫また一端ならす、人は身をおさむるの手すしなくんはあるへからさるによりて、道と云理と云德と云仁義禮智と云、道を行ふのもとをしらすんはあるへからさるによりて、心と說性と說情と說良知良能と說四端の心と說、さて今日値ところの吉凶禍福、したかひ受すんはあるへからさるによりて、天道と說天命と說く、事を處するに、過不及なくよろしき加減にせされはかなはさるによりて中と說、眞實にしていつはりなきやうにせされはかなはさるによりて誠と說、いつものごとくにしてたへずれなくせされはかなはさるによりて恒と說、專一にしてまじりなく、工夫のわかれさるやうにせされはかなはさるによりて一と說、古人の言行を見ならひ師友の手引によりてその事をしらすんはあるへからさるによりて、學といひ敎といふ、すへて是をいへは聖人の道なり、これを載たるは六經なり、是はわさとかくのごとく繁多にしたまふにあらす、たとへは人生の間、器物調度それ〲に備りてあらされはかなはさると同し、後世性理の學盛なるによつて、聖賢の常にいはゆる許多の敎法名目をくゝりて、一理とせり、處によりて名はかはれとも、一箇の無極無體のものを主として、天に在りては命と云、人にありては性と云、物に在ては理といふと、こゝにをいて、中と云誠と云一と云等のごとも、たゝ一物に混同せり、先儒のごとに云、天下無二性外之物一、又曰性者萬物之一原と、是性を以て理にかへて說をなせり、聖人の性とのたまふは、もつはら人の生れ付をいふ、天地萬物の理をさして性といふ

之悦ニ我心一、猶ニ芻豢之悦ニ我口一也と即是なり、中庸に所レ謂文理密察、易に所レ謂窮レ理盡レ性、皆同しきことなり、しかるゆゑんの理をさしていふにあらす、

理といふは、義といふと甚相近し、故に彼物のすし〳〵のわかるゝ所の名をかりて、人道の上に就て、これを道理と云義理といふ、其内其すし道を理と云、そのすへてすましきわけを義と云、たとへは君父は同しきことなれとも、わか君父へは忠孝を盡し、人の君父へは忠孝を盡すへきすしなし、これを理といふ、この所には生へく、この所には死すへく、此物はとるへく、此物は取ましきと云、可否の間を義といふ、これは誰きゝても尤とおもふによりて、理義之悦ニ我心一、猶ニ芻豢之悦ニ我口一也といへり、且又孟子常には仁義を並擧られて、此所にはかり理義とのたまふは、仁愛慈悲なることも、人の尤も感することなれとも、理と義とのわけは、人の尤と感しよろこふこと別してつよきによりて、仁義とのたまはすして、理義とのたまふなり、

程子の說に、在レ物爲レ理、處レ物爲レ義といへり、此意は、物ことに具りたるを理といふ、此方より物をさはくを義といふ、たとへは冠は頭にいたたくの物、履は足にはくの物、是理なり、これを人の上にて、冠を取て首にいたゝき、履を取て足にはく、是義なりと、これはよく聞へたることにて、人のかくあるへしと思ふ說なり、然れともこれにては、一つはさきにあり、一つは己にありて、彼此の差別あり、孟子の理義と並稱せられて我心を悅しむるといふにあはす、畢竟理義の二つともに、天下の達道にて、人身ののり、何も我心の相手なり、故に孟子にしかいへり、程子は理を物理とせ

の意にあらす、畢竟老子の旨に落て、聖人の旨とあはせ見るへからす、語孟字義にくはしく是を論しをけり、

中庸章句の序に、彌近レ理而大亂レ眞といへり、このこと最あやしむへし、聖人の道は、人事をつとめて五倫を重す、佛老は人事を廢して五倫をすつ、畢竟聖人の道と佛老の差別は、たゝ此一著にあり、いかやうの精微窅妙の説ありといへとも、何を理にちかしといひ、何を眞をみたるといふへきものあらんや、宋朝より此かたは人事をつとめ五倫を重せらるゝとは、もとより聖人を祖とせらるゝといへとも、これを以て用として、この上面に一層の無聲無臭的のものありとして、これを名付けて無極大極と云、こゝにおゐて佛老の所レ謂とまかふもの出來りたり、彼よりは此を以て一致に落といひ、此よりは彼を有無寂感のわかちありといふ、或は躰は同しきことにて用かはるといひ、或は用は一にして躰ことなりと云、これ近レ理而亂レ眞の説出來るゆえなり、予故におもへらく、宋朝の學、不レ可レ無ニ此辨一也、聖人之道、不レ可レ有ニ此辨一矣、不レ可レ無ニ此辨一、此其學之所下以不レ純ニ乎聖人一而雜中乎佛老上也と、

或人の云、しからは則聖賢の書に屢々理といふことあり、これは何をさして理といふや、聖賢のいはゆる理と、後世のいはゆる理と、差別あるへからす、對曰不レ然、聖賢の書、もとより理をのたまふ、然れとも後世のいはゆる理といふと同しからす、聖賢のいはゆる理とは人道のすし〲を云、條理文理の事なり、孟子曰、心之所ニ同然一者何也、謂理也義也、聖人先得ニ我心之所ニ同然一、故謂理義

て縷々せす、童子問の中一條其語をあらましあけり、

先儒の通にいへは、人たるもの、悪さへなきときは則善なり、悪なき上に、別に善といふものなし、たとへは明鏡のくもりをさへ除くときは、則是本躰の光明あらはる、此外にすへきことなし、人心の上に、一毫人欲のわたくしさへなきときは、即是聖人の地位、この上に一事の添ふへきものなし、是皆理を主とせられたるゆへにかくいへり、聖人の旨はしからす、あしきことなき人は、もとよりよきとはよけれとも、これを至極の人とはいはす、許多の善行善状なければ、聖人賢者とはいはれす、親に對して不孝のことなきはかりを孝子とはいふへからす、人にすくれて孝道あらはれすんは、孝子とはいはれまし、夫子善人を見ることを願ふとのたまふ、然れとも天下の人を皆悪人とするにあらす、論語に見レ善如レ不レ及、見二不善一如レ探レ湯といへり、これは言葉はかはれとも、大學にいはゆる誠意のことにて先儒の人鬼の關とせらるゝ論なり、然れとも孔子これを品々したまふに、吾見二其人一矣と被レ仰て、是を至極とはしたまはす、隱居以求二其志一、行レ義以達二其道一、吾聞二其語一、未レ見二其人一也とのたまひてこれを至極とす、是は上の人にあはせては、許多の才德あらはるれはなり、聖賢の意趣しるへし、先儒仁義を理と見、性に全く具るとせられたるゆへに、かくのごとく矛盾することなり、道の條性の條下にも、處々に此わけ書あらはせり、合せ見るへし、博論の中善悪論にもこれを詳にす、

天理人欲のこと、本禮記樂記の篇にいつ、後世にはこれを善悪のかへ名とせり、心の字の條下におゐて略これを論す、これにては、天はもつはら善にして、人はもつはら悪といふものなり、天人一道

へる僧の華嚴經の跡にいづと、倘直編歸元直指等の書にこれをいへり、此類のことは佛書に多くあらはる、又程子のことはに、冲漠無朕、萬象森然已具、已應不㆓是後㆒未㆓是先㆒といへり、これも上の語と同しき道理なり、たとへは鐘を撞くときは、天地に響きわたるの聲をいたす、これは撞くときに始て此聲あるにあらす、いまたうたさるときに、此聲をいたすの理備りてあり、然れとも其時には、寂然不動にして、目に見へ耳にきくへきものなし、これを冲漠無朕萬象森然已具と云、うつ時にして聲あるにあらす、うたさる時に聲なきにあらす、故に又不㆓是先㆒不㆓是後㆒といへり、是皆躰用の說なり、其上冲漠無朕のこと、莊子にあらはれ、萬象森羅といふこと永嘉の證道歌にいづ、聖人の道をいふへからす、此こと古義字義等に詳に辨すれは、かさねて論することをまたす、

或人の云、老佛の徒も亦人なり、其ことはとるへきことあらは、取ましきにあらす、且又宋朝以來、禪者の徒、當時の俗語を以て人に曉し示すこと多し、何そ佛書禪錄に出るを以て取ましきや、活潑々地のごときはもと俗語なり、これを借用ひて道理をあかさんにおゐて、何のさまたけあらん、曰しかり、書冊の言葉にも、從て通用してさまたけなきことあり、佛書禪錄の中にても、かり用ひてよろしきことは、何そ是を取ましきや、たゝ其主意の違ひより出ることとは、辭のよしあしにあらす、聖賢の書にもとよりなきことなれは、たゝいましめてとらさるにあらす、もとより取用ひられさることなり、冲漠無朕、虛靈不昧等の言葉は、佛老の空無を主としたるより出る言葉なれは、これを以て聖賢の書をとくへからす、もと天淵南北の違ひあり、そのわけ處々にいひあらはしたることなれは、かさね

下躰一といふかことき、草木のかたちをいふなり、其餘これに例してしるへし、此外理をさして躰とすること、十三經の内一字も見へす、又用といふことは、易の彖の辭に多くあり、或は時用と云、或は義用と云、卦のはたらきをいふ、後世の躰用の謂と相似たり、然れとも其はたらきをさして用と云たるまてにて、理躰に對してこれをいふにあらす、後世にいたりて、もつはら躰用の二つを以て、道理をさはきて、寂然不動のところを躰とし、感而遂に通するところを用とす、これを萬物の上にをすときは、天の形の蒼々たるは天の躰にあらす、その萬古覆燾して不㆑已わけ天の躰なり、地の形の博厚なるは地の躰にあらす、其萬古持載して不㆑已わけ地の躰なり、人の身に就ていへは、四肢百骸の具りたるは躰にあらす、此心の寂然不動のところ人の躰なり、これを萬物の上に就て見るときは、器物の方圓大小は器物の躰にあらす、其物に具るところの理即躰なり、是皆無㆑聲無㆑臭のところをさして躰として、形躰の實にあらす、體の字の義に背くことに甚し、初學の人、或は物のかたちを躰とおもひ、其はたらきを用と云て、躰用といふこともあるへしとおもふ、是は日本にて、連歌なとする人の躰用といふはこの通りにて、山と云川と云を躰と云、流と云波と云の類を用と云、是も古の書に見へされとも、現在あることにて、字義にもたかはされは、左もあるへし、然れとも宋學に躰用といふは、其わけにあらす、上にいふ通りの未發已發のわけなれは、辨なくんはあるへからす、

程子の易傳序に、躰用一㆑源顯微無㆑間と云ことあり、是はもと佛語にて、唐の中比清凉國師澄觀とい

一生の間を夢の中に送るといふことなり、格物は夢覺關、誠意は人鬼關といへるも同しきことなり、然れとゝ聖人の人を評論したまふを見るに、左にはあらす、孔子の門に遊ふ人は、先儒よりいへは、まことに聖賢大學の旨を聞たる人なれは、一理をきはめらるへし、聖人のそれ〳〵に評論したまふもことわりなり、そのかみの士大夫、管仲子產蘧伯玉甯武子臧文仲孟莊子の徒は、聖賢大學の旨をきゝて格物の境にいたりたる人にあらす、然れとも論語にのすることを見るに、それ〳〵に評品ありて、或はその仁をゆるし、或は其智をゆるし、或は其孝を許し、或は其君子なることを許して、一概に醉生夢死の人としてこれをすてられす、然れは今日の人とても、身をおさめ學をつとめて、世間に利益ある人は、其才德の淺深大小にしたかふて、これを稱すへし、聖賢のおしへは、事實に就てのたまふによりて、今日の上におゐて、主人に對して忠をつくせは忠臣なり、親に對して孝をつくせは孝子なり、雖レ曰レ未レ學、吾必謂二之學一矣と、學問をせすとも、實行さへあらはるゝ上は、これをとるましきや、いはんや理をきはめすとも、何そ學問に頭腦なしといはん、

躰用の事、もと佛氏の書より出たることにて、古人聖人の書には、もとより其說なし、其詞のよりておこる所を尋るに、躰といふは、もと人の形躰のこと、耳目口鼻四肢百骸のかたちをさしていふ、易にいはゆる神無レ方而易無レ體と云、孟子に大躰小躰といふ、具レ躰而微と云、居移レ氣養移レ躰と云の類ひのことき、何れも形躰のことなり、これを萬物の上にかり用ひては、草木器物等にいたる迄、方圓大小のかたち、目に見るへく手に取るへきものは、またこれを躰といふ、詩經に采レ葑采レ菲無レ以二

至極とするは、大に聖人の旨にあらす、且萬物の理をあまねくきはめんとおもふときは、人倫日用のよにおゐて、かならすおろそかになる弊あり、其わけを辨へすんはあるへからす、

窮理の說におゐて第一にきはむへからさるとは、天地の窮際、古今の始終なり、天地のはてをいふときは、鄒衍は神州赤縣九州と云て、中國ほとなる物九つありといふ、邵康節の說には、天依レ形地依レ氣といへり、又古今のはてはしまりを十二萬九千六百年にて始終し、是を一元といふといへり、巨も揣量臆想の說にて、しるしとし信しかたきことなり、たとい其說のとくなるとも、又其外をおし、又其はてはしまりを尋るときは、料簡揣量にもいひかたきとなり、佛氏に三千大千世界の說ありて、此土は小世界の南邊と云、成住壞空といひて、今日は住刧の世といふ、これもさきの說にあはせていふときは、大なるとなれとも、すこし言ひろけたるまてにて、又其はてはしまりを尋るとは又說なし、これ第一のきはめて大なる所、先きはめられさるとなり、又萬物の上我一身の中につゐて見るに、いかやうの料簡にてもすまさること多し、然れは萬物の理を窮めて、一旦豁然の場にいたるといふとは、聖賢の智にてもならさるとなり、しかるにこれを以て目あてとして、一事の上を逐て、それ／＼の理をきはめんとおもふは、畢竟しるしなきとなり、

先儒の意におもへらく、人たるもの、何ほと身をおさめ、學問をつとめて、世にこへたる行ありても、此一箇の理といふことをさとり窮めされは、學問に頭腦なく、たとへは夢中によきと葉をいふかとくにして、とるにたらすとなり、其故漢以來の學者は、醉生夢死と云て、理をしらさるにより、

出來るなり、先儒のいはゆる、善は理にいて惡は氣より出るといふは後世理をたふとひたるより出たることにて、其齟齬することあるを免かれす、且其說の通りなれは、善といふものは理よりいつ、まことに根ありといふへし、惡はたゝ氣より出て理にもとつかされは、末はありて本なし、天下の物、何事にても、末ありてもとなきものあらす、これ又うたかふへし、

大學に致知格物といふことあり、易の系辭に窮レ理といふことあり、先儒是を以て學問の根本とす、其說におもへらく、天下のもの、をの〳〵其理あらすといふことなくして、其理こと〳〵くわかこゝろにそなはる、いやしくも理におゐてきはめさることあるときは、我心の躰におゐてかくることあり、此故に大にしては天地日月の理より、小にして一草一木の理まて、其ゆへをきはめ、今日一事にいたり、明日一事にいたりて、其至極をきはむるときは、我心の全躰大用、あきらかならすといふことなくして、万物の理、表裏精粗、いたらすといふことなしと、これ格物致知のしるしといへり、是聖人の意にあらす、何そなれは、天下のこと極りなくして、一人のしる所はかきりあり、いやしくも一人の力を以て、万物の理をきはめんとおもふときは、千万年を經盡すといへとも、其しるしを見かたし、故に聖人は、事の大小緩急をつまひらかにして、其人倫日用にあつかる大切なることをせんきして、其他の事は、あなかちにしりつくすことをつとめとせす、故に孟子に云、堯舜之知不レ偏レ物、急ニ先務一也といへり、其上天下の事に、きはむへき物あり、きはむへからさる物あり、極むへき物といへとも、きはめ得てせんなきことあり、然るに其わかちなく、一概にきはめつくすを學問の

惡あり、是は何より生すといふときは、善はもとより理にいつ、あしきことは皆氣よりいつといへり、惡の氣より出るはことはりなり、又そのもとをたして、氣のよりて出るところを、何よりおこるとたつぬるときは、理に歸せさることあたはす、然らはいはゆる理といふものには、善の生するゆへんと、惡の生するのゆへんと、二ッを兼そなへてありや、是一太極にあらすして、二太極といふものなり、これ矛盾するにあらずや、これを聖人のことはにたゝすときは、善惡の生するもとを尋ぬるといふこと、もとより其說なければ、後世の說と異同を辯すへきにあらす、竊に考ふるに、天人の間もと善ありて惡なし、天は陰陽を以て萬物を生育し、人は飲食動息して自養ひ人をやしなふ、是其道なり、然るによりて、今日人たるもの、食色衣服の上にをゐて各其のりにかなふは即これ善なり、此外別に善といふものなし、其或は過或は不ㇾ及ことあるによりて、これより惡といふもの出來るなり、たとへは不ㇾ受二嗟來食一、不下踰二東家牆一而摟中其處子上は人の本心にて、仁義といふも、これを事に廣く推及したるものなり、もし夫紾二兄之臂一而奪二之食一、鑽二穴隙一相窺のたくひは、食色をこのむの、のりにちかひたるものにて、こゝにおゐてはしめて惡といふへし、善惡の二ッの物、はしめより對待してあるにあらす、またはしめはたゝ善はかりにて、後に惡といふもののさし入にもあらす、もつはら事の過不及よりして、惡といふもの生るなり、これを天地の上におしても其通りにて、寒暑風雨のしるし、其とき〳〵にしたかへは、四時序にかなひて百穀成就す、或は陰かつときは洪水雨雹の災をなし、或は陽すくるときは震電大旱の變をなす、こゝにおゐて災異といふもの

也、其未ㇾ發則性也、大本者、天命之性、道之躰也、達道者、循ㇾ性之謂、道之用也と、これまた人の上に就て、未發の性を躰とし、已發の情を用とす、程子の寂然不動を心の躰とし感而遂應するを心の用とせらるゝも、同しきとなり、これを萬事にをしても、いまたはつせさるところを躰とし、已に發するところを用とするなり、理氣といふは差別あり、

聖人のをしへは、もはら事實の上に就て工夫を用ゐ、もと理氣躰用の説なし、しゐて其説をたつるときは、聖人の道にもとること多く、且其説自相矛盾して、合一せさることあり、何そなれは、太極によりていふときは、大極は理なり、動靜は氣なり、動にうごく理あり、しつかなるにしつかなる理あり、理はこれ動靜をすへつかさとりて、動靜をすくに理といふへからす、ゆへに大極動而生ㇾ陽、靜而生ㇾ陰といへり、又躰用の説によりていふときは、靜なるを躰とし、うごくを用とす、しかれは、理は動靜をつかさとるにあらすして、靜なるところすなはち理の躰なり、此二端ちなしからす、先儒すでに此うたかひありて、大極は陰靜に偏なるといふの説あり、まことにことはりなり、これ皆後世におこれること故に、詳に説あれとも、畢竟矛盾することをまぬかれす、

先儒の説におもへらく、理といふものは、純粋至善にして、一毫のよこしまなし、氣におちてより、善惡邪正さま〳〵にておなしからすと、これ其説又矛盾することあり、何そなれは、萬物統躰一太極にて、天地の中にあるもの、此理をそなへすといふことなく、又此理の外にいつるものなし、ゆへに天下無ㇾ性外之物ㇾといへり、性といふは即理なり、然るに天地の上に災異あり、人事の上に過

れを一ッともいはれす、これを二ッともいはれす、氣は理によりて立、理は氣によつてあらはる、朱子云、大極者、不下離二陰陽一而爲上レ言、亦不下雜二陰陽一而爲上レ言とこれなり、其意おもへらく、たとへは人の馬にのることとし、馬の一出一入にて、人もまたこれと一出一入す、大極は人のことし、陰陽は馬のことしと、畢竟理と氣ともちあひたるといふ事なり、羅整庵の困知記に、理氣合一の說議論ありて、朱子の說をうけかはさるやうに見ゆる、然れとも朱子も理氣を二物とわかたれたるにもあらす、其詳なることは圖說語類を見るへし、

天に理氣あり、人物にもまた理氣あり、中庸章句にいはく、天以二陰陽五行一化二生萬物一、氣以成レ形、而理亦賦焉、大極圖說に云、性爲二之主一、而陰陽五行爲二之經緯錯綜一、又各以レ類凝聚而成レ形焉、これ天理氣によつて人を生し、理は性をなし、氣はかたちをなす、これを萬物にをしても、皆しからすといふことなし、故に理は一なれとも、氣のうけやう同しからさるによつて、人と物と正通偏塞のわかれあり、聖人と衆人と賢愚智不肖のたかひあり、萬物に雌雄男女のことなるあり、これ人物理氣の說かくのことし、

躰用といふは、未發已發の謂なり、大極圖解に云、道一而已、隨レ事著見、故有二三才之別一、而於二其中一、又各有二躰用之分一焉、これは立二天之道一曰陰與レ陽、立二地之道一曰柔與レ剛、立二人之道一曰仁與レ義といふ本文に就て、陰と柔と義とを躰とし、陽と剛と仁とを用とするなり、又中庸に、喜怒哀樂之未レ發謂二之中一、發而皆中レ節謂二之和一、中也者天下之大本也、和也者天下之達道也と、章句に喜怒哀樂情

ふ、孟子に樂のことを、始ニ條理一終ニ條理一といふは、八音の音それ〳〵に立わかるゝをいふ、人道の上に、道理義理といふも同しきことにて、それ〳〵の條理のわかるる所を理といふ、然るゆゑんの理をさしていふは、後世のことなり、

後世にいはゆる理といふは、即大極のことなり、天地のかくのことく萬古覆載してやます、日月のかくのことく萬古照臨してやます、陰陽晝夜のかくのことく萬古往來消長してやます、人物草木のかくのことく萬古生々化々してやまさる、これ何によりてしかる、必かくのことくになるわけありて、いつまてもかくのことし、これを名付て理といふ、又大極といふ、これ目に見るへき物にあらす、耳にきくへきものにあらす、尤形象にわたる物にもあらすして、天地萬物これによらされはたゝす、周子の所レ謂無極而大極と云、圖説の註に、上天之載、無レ聲無レ臭、而實造化之樞紐、品彙之根抵也といへる、即この事なり、其形象の見るへきなきを以てこれを無極と云、其萬物の根本たるを以て大極と云、大極の外にまた無極と云ものあるにあらす、天地萬物をあはせていふときは、皆此一理なり、これを萬物統ニ躰一大極一と云、一物の上に就ていふときは、大にしては天地日月より、小にしては一微塵一蟻子にいたるまて、その〳〵この一理を具せすといふことなし、これを一物各具ニ一大極一と云、故に先儒の説に、大極者理之尊號といへり、これ先儒理の説の大略なり、

これによりて、後世には理氣躰用の差別あり、理といふは大極なり、氣といふは陰陽なり、朱子云、大極者、形而上之道也、陰陽者、形而下之器也、故に又これを道器ともいふ、此理氣の二ッの者、こ

て大德と云文章あるをさして文德といふ、何れも事に就てこれを稱美したるものにて、心のことにあらす、明德といふも其通りにして、聖人の德、天下に照りかゝやきて、かくれおほふことなきをさしていへり、易晋の卦の大象に、明出二地上一晋、君子以自昭二明德一とあり、晋の卦は火地の象あるによりて、明出二地上一といふ、大陽の地上にあらはるゝことなり、この象を見て、君子たるもの自其德をあきらかにすといふことなり、又中庸に詩經を引て、予懷二明德一不三大二聲與一色とあり、左傳に舜重レ之以二明德一とあり、此外詩書左傳の內に多くいへり、何れも同しきことなり、宋儒以來心のこととして、虛靈不昧、具二衆理一而應二萬事一者也といふ、尤聖賢の旨にそむけり、詳なることは大學定本にあらはせり、或はうたかふ、聖德のあきらかなるを明にすといふは、言葉かさなるやうにきこゆと、是ゝ章句の說をきゝならはしたるゆへなり、大學に明二明德一のことを述て、克明レ德といふ書を引けり、然れは德を明らかにすといふも、明德を明らかにすといふも、甚となる事なし、かならす明の字にふかくなつむへからす、

理　凡二十六則

理といふは、物のすしめの事なり、玉邊に里の字を書て、本玉の木めをいふ、說文云、理治レ玉也、从レ玉里聲とこれなり、是をかりて、何にてもすし道のあるを理といふ、易に天文地理とあり、天の文は、月日星辰のあやあるをいふ、地の理とは、山川道路のすし〳〵のわかれあるをいふ、五倫のことを倫理といふは、君臣父子のすし道をいふ、人身に脈理腠理といふは經絡血すしのわかるをい

驀々㆒矣といふのたくひ、皆をしゑるへし、

上に擧る一章は、夫子平生學者に示したまふ本末始終の條目なり、後世心理の學盛んなるによりて、此やうなること葉は、工夫繁多にして頭緒はなはたわかれ、まきらはしきやうにうたかふ、其上舊解の通にては、志㆓於道㆒といふことは、ひろく學者に通していふへきことなり、據㆓於德㆒依㆓於仁㆒の二ッは、有德仁者の地位にはなるへきことにて、學者分上には中々及ひかたきことなり、舊解に據㆑德を解して云、德則行㆑道而有㆑得㆓於心㆒者也、得㆓之於心㆒而守㆑之不㆑失、則始終惟一而有㆓日新之功㆒矣、依㆑仁を解して云、仁則私欲盡去而心德之全也、功夫至㆑此、而無㆓終㆑食之違㆒則存養之熟、無㆓適而非㆓天理之流行㆒矣、これにては德ありてのちに據り、無欲淸淨の仁者になりてのちに依るへし、未德を得さる人は、據るへきものなし、未仁ならさるときは、よるへきところなし、是皆德を必行㆑道而得ると訓し、仁を私欲淨盡の地位とさためられたるより、この矛盾いて來り、孔門學問の條目、つゐに無用の虛器となりて、世にたすけなし、只道德仁義は、人の身をおさむる規矩準繩とおもへは、此一章は學者終身の受用にして、生熟大小のかはりありといへとも、そのゝゝ其益あらすといふことなし、

詩經書經に、多く明德といふことあり、大學に又明㆓明德㆒といへり、何れも聖人君子の德の、あきらかにしてかくれなきことをいへり、後世に心の稱とするは、古の義にあらす、大抵經書に、德といふこと多し、大德至德文德懿德盛德令德俊德と稱するのたくひ、其言葉まちゝゝなり、廣大なるをさし

德を達道と並へ稱せらるゝ、其外經書に、據二於德一好レ德崇レ德知レ德の類、何れも此道理をさしていふ、故に據といひ好といふ。修爲して後あることなれは、よりこのむとはいはれましきことなり、然れは禮記の行レ道而得二於身一といふも、一通りの註にて、德の字を通して解したるものにあらす、心といふ字にかへては、猶以てかなはさる事と見へたり、

又所によりて、德ある人をさして德といふ事あり、中庸に賤レ貨而尊レ德所二以勸レ賢也、又苟不二至德一至道不レ凝焉とあり、論語に泰伯其可レ謂二至德一也已矣といふの類、何れも皆其身の德あるをさしていふ、道の字にたくらふれは、やゝ人に近ふしていふと見へたり、

道德の二字は、仁義禮智の惣名なり、然るに志二於道一據二於德一依二於仁一と、わかちてのたまふこと多し、これはわかちていふときは、仁は仁義は義と、其すし〳〵あり、あはせていふときは、道と云德といふ、志二於道一といふは、たとへは人の遠き所へおもむかんとするに、よき道すしへ出んとおもふかことし、己か身を修めて正道にたよらんと、最初に我こゝろさしを定むるなり、據二於德一とは、たとへはよき家を求めて、住所を定むるかことし、道德學問をわか任として、其場をふみしむることなり、依二於仁一といふは、依とは、たかはすしてよりしたしむ意、たとへは平常によろしき生業を手馴れてすてさるかとし、萬事を取行ふに、仁愛にたよりて、物こと慈悲なるやうにすることなり、遊二於藝一は、文武の藝能すてをかす、折ふしにこゝろをよすることなり、此ゆへに道德は物名なれとも、又仁をわかちてのたまふ孟子に其爲レ氣也配二義與レ道とあり、又尊レ德樂レ義、則可二以

聖人の道をのみ道といふへくして、其餘は道といふへからす、故に又道一而已矣とあり、是にて道の義大概しるへし、もし性の自然にしたかふを道と云ときは、道二仁與ニ不仁ニ而已矣といふへからす、不仁を道といふへしや、又性に仁不仁の兩ツの理具りてありといふてよろしからんや、是皆不レ通、

德　凡七則

德といふは、道といふと甚近し、孝經に至德要道とあるは、皆孝の事をさしていふ、其内道は行る上に就ていふ、德は物をなす上に就ていふの差別あり、中庸に五倫の道を天下の達道と云、智仁勇の三ツのものを天下の達德といふ、此等の文にてをしるへし、中庸に又曰、天地之道、可ニ一言而盡一也、易に天地之大德曰レ生と、道德の字、天地の上にをしても準しえるへし、禮記禮運篇に、德者行レ道而有レ得ニ於身一也と、これもうるの字の音をかり、大略に解したるものにて、義は宜也といふと同しきとなり、朱子にいたりて、身の字を心といふ字にかへて、有レ得ニ於心一也と解せらるゝは、古人の旨にあらす、大抵古への書には、道のもとををしては、己といひ身といひて、心と云事甚少し、後世心理の説さかんなるゆへに、此等の説も文字をかへて註せらるることなり、

上の說のことくいふときは、德といふものは、もつはら修爲して後に得ることとなり、然れとも德は畢竟仁義禮智の惣名にて、天下萬世不レ可ニ磨滅一の道理、修爲して後あるにあらす、故に中庸に、達

を見るによりて、すくに色を以て目とし、耳の聲をきくによりて、すくに聲を以て耳といふかことし、孟子に聲色嗜好の喩をわけて、理義之悦二我心一、猶三芻豢之悦二我口一也といへり、これにて其義いよ〳〵あきらかにして、道を以てすくに心性の理とすへからさる事しるへし、然れとも新學の士、多く舊説になずみて、道の寓する所なきことをうたかふ、去比或人の席にて、此事を論辯せり、予さきの事ともを告れとも、いまた首肯せす、よりておもふ、道といふもい全く人心に具るものならは、上古の聖人、あらかしめ萬世までの法をも全く立らるへし、然るに古へも、數千百年を經て、堯舜周孔のをしへにいたりて、萬世の道そなはれり、道は天地古今の間、一條さたまりてあることなれとも、聖賢の講明修爲によりてあらはるゝことしるへし、たとへは日月星辰の運行は、古今さたまりたることなれとも、いにしへは暦法といふこともなく、草木の榮枯を以て春秋をしるといへり、世々の人推歩考究して、堯舜此かた其法明白にして、萬世までたかひなきかことし、道も其通りにして、自然にさたまりたることを、人の靈を以てしり辨ふことなり、人心に全く具るの理にあらす、

畢竟道といふは、人ノ所レ作のすじ〳〵を云、技藝の上にても、筆道琴道といふの類あり、又所によりては、あしきことをも道と云ことあり、孟子に、道二仁與二不仁一而已矣といへり、論語に、道不レ同不二相爲謀一といへり、又雖二小道一必有二可レ觀者一焉といへり、大小邪正の違ありといへとも、大勢の人よりあつまりてすることは、何事にても道といふへし、然れともをし出して道といふ時は、

は、天地自然の道にして、人ありてはしめて出來るにあらす、たとへは樂といふものは、人の聲音より出ることなれとも、其清濁高下の律は、天地古今の間に、をのつから具つてあるかことし、道を行ふの本は、人の心より行ふといふとも、道を全く心に具るとはいふへからす、

道を天地の內をのつから具りてありといへは、其寓在する所なきことをうたかひ、又人身をはなれて、光明赫奕たる物ありと思ふは、これまたあやまりなり、道は自然に具りてありといへとも、何そや目に見耳にきくへきのものあるへきや、人のかくのことくにせされはかなはさるわけ、本自然の道理にて、いにしへも今もかはらさるによりて、充二塞天地一貫二徹古今一といふなり、孟子に浩然の氣を稱して、塞二乎天地之間一といへり、中庸に聖人の道を贊して、洋洋乎發二育萬物一峻極二于天一といへり、禮記に孝行のことを、推二之東海一而準、推二之西海一而準といへり、此等のことは、何れも其事を稱贊して、天地古今の間にかはる事なきをかくいへり、これを以て空理といひてよろしからむや、道を天下の達道といふもこの通なり、寓在するところなきことをうたかふへきにあらす、書經に、天敘二有典一五典五惇哉とあり、すへて天といふは、人力にあつからさる自然のことをいふ、書に禮樂彝倫の事を何れも天に歸して、天敘天秩といふ、これ又上の事とあはせ考ふへし、

孟子に大躰小躰の說あり、耳目口鼻を小躰といふ、心を大躰といふ、耳の職はきくを以て其職とす、きく所のものは聲なり、目の職は見るを以て其職とす、見る所の物は色なり、心の職は物をおもふことを職とす、おもふ所ののりは道にあり、もし道をすくに心の理とするときは、たとへは目の色

なりては、なを以て無道なる時節なり、上代といひなから、今日の風俗にあはせては、かたのことくわしき折節なり、然るに孔子孟子諸國に周流して、禮樂を正し王道仁義をすゝむるは、何の爲そや、然るときは後世とても、聖賢の道行るましきにあらす、人々氣みしかなるによつて、或はは やく世をいとひて草野にのかれ、長沮桀溺かことくになり、或は道を以て人にしたかひて、蘇張范蔡かしはさのことくになる、皆不仁のしはさなり、出處進退のわけ、治亂盛衰の上におゐて、斟酌料簡はあるへきことなり、一槪に後の世には聖人の道行るゝことなしといふはあやまりなり、もしそれ禮義風俗のちかひは、上世のこと異邦のわさのみならす、十年二十年のさきのこと、今日の風俗にあはさることあり、十里百里のあなたのこと、手前の風儀にちかふことあり、まして異國千年二千年さきのこと、今日の日本に全く用ゆへきにあらす、それゆへに孔子も魯に在しては褒掖の衣を服し、宋に往ては章甫の冠を用ひ、夏商周の禮儀を皆學得られたれとも、「吾從周」とのたまふにてしるへし、然るを其差別なしに、儒者の道といふは、異邦上世のことを全く用ることくおもふによりて、今日にはあふましとおもふの疑あり、これは禮と道とのわかちをしらされはなり、道といふものは、萬古不易のもの、世間通行のもの、何れの世何れの國もちかふことなし、禮といふものは、ときにより所によりて同しからす、しゐて同しうすへき理なし、又しゐて同しうすへきことにあらす、斟酌損益して、よろしき方につくへきなり、

道を全く心に具るといふときは、畢竟理に落て、聖人の旨にあらす、聖人のいはゆる道といふもの

てかはること有へからす、聖人の道といふものは、これに本つきて節文條目を立たるものなれは、即天地の間の道にて、聖人の所爲中國の風俗とおもふは、おろかなることなり、又曰、敎の入口はかはれとも、至極の所は一致におつるといふは、是は後世より言出したることにて、何をさして一致といふへきものなし、聖人のをしへは、日用彜倫をつとむるをせんとして、家に在ては家を治め、國に在ては國を治め、天下に在ては天下を治め、此外に一段のふかき道理なし、後世に、日用常行の上に、一の理といふことを立られたるによりて、佛老の說とまかひ爭ふことあり、彌近レ理而大亂レ眞といふ是かためなり、これによつて、老佛の二氏は、儒をひいてひとつにし、儒者のいはゆる無極の眞、老子のいはゆる谷神不レ死、佛家のいはゆる本來面目といふこと、名はかはれとも同しき事と云等の說おこれり、聖人の道は彜倫を重し、老佛の二氏は倫理をのかれやふる、もと水火の違ひあつて、各別のことなり、眞僞をたくらへあらそふへきことなし、又後世には聖人の道行るへからすといふは、自暴自棄の人の言出したることにて、俗士の通論なり、聖人の道といふも、今日のことに各別かはりたることゝおもふによりてなり、其上物は盛なるときには、わきよりたすくる事をまたす、衰たる時は、たゝし直すもいる事なり、たとへはやめる人には、藥を川ひておとろへをたすけ、さかんなる人には、藥を用ることをまたさるかことし、もし衰世には、聖賢の道行るましきことならは、春秋戰國のときはいかやうの時そや、二百四十四年の間に、諸侯の國に弑レ君者三十六人、ひとつの土地をかすめ、人の妻子をうはふのともから、幾人といふことをしらす、戰國の世に

聖人の道は、上古の事異國の風にして、今日日本の俗にはかなはすとおもふ人あり、また儒佛老のをしへ、入口はちかへとも、至極のところは一致におつるとおもふ人あり、又聖人の道はよきことなれとも、後世風俗のおとろへたる上は、おこなはるへからすとおもふ人有、何も道といふものを各別におもひ、古今水土の異にて變通のあることをしらすして、かくのことくおもひまとふことなり、道といふものは、本聖人の心思智惠を以て、こしらへ設られたるものにあらす、天地自然の道なり、何そなれは、あまたの人あつまりおる中には、をのつから夫婦あり、父子あり、兄弟あり、朋友ありて、その內に、理非を正し義をたのむ人なけれはかなはさるによりて、又をのつから君長の道あり、これにしたかふものは臣民なり、たかひにましはる上には、とも〳〵にあはれみて、又次第程等なけれはかなはさるによりて、仁義禮智の道おこれり、これは漢土九州の內はかりかくのことくなるにあらす、四方の國々、文字言語の相通せさるところも、たれはしむるともなしに、をのつから此道あらすといふことなし、今時西夷南蠻遠き海外の人とも、年々にわか國に來りあつまるをきくに、漢土の文字をもしらす、もとより堯舜周孔の名をもきくことなし、然るにその國々の酋長頭目の命令をうけて、同州のものとも互に和睦して、交易往來するからは、君臣朋友の道ありとみへたり、父子のしたしみ、夫婦のよしみ、兄弟のつゐてあること、亦をしてしるへし、たとへわか國に來ることなく、漢土に通路せさる國ありといへとも、そのわけはかはることあるまし、然れは天地の間にあふかしら圓に足方なるものは、いつれの世何れの國なりとも、この倫理にをい

よりいつ、規矩器より出るにあらす、道を性より出るといふときは、規矩は器より出るといふかことく、其理なきことなり、漢の淮南王安か淮南子に、循レ性而行之謂レ道といふことあり、これまたあやまれり、詳なることは中庸發揮にあり、

性といふは人々の上に就ていふ、道といふは天下の上に就ていふ、人々の上に就ていふときは、おしまはしていへは善なれとも、少々のちかひあるゆへに、夫子性相近也と云、孟子に天下之足相似也といへり、近と云相似と云、何れも大概の詞にて、只一個の理と云ふとはおなじからす、天下の上に就ていふときは、天下古今億萬人の行こと二すしの道なし、易に云、立ニ天之道一曰陰與レ陽、立ニ地之道一曰柔與レ剛、立ニ人之道一曰仁與レ義と、天はひとつなり、地もまた一ッなり、人といふは、わか身一人をさして人とするにあらす、凡天下の人をあはせてこれを人とす、其心のおもむく所さまさまありといへとも、此一すしの仁義にたよらされはかなはさるによりて、仁義を人の道と云なり、たとへは弓をいるに、上手下手はあれとも、的に二ッの目あてなきかことし、又三軍の士、勇怯ひとつならされとも、軍法は一律なるかことし、故に孟子曰、夫道一而已矣と、後世心性の學盛なるによつて、道も性もひとつになりて差別なし、おもんつる所もつはら性にあり、それゆへ聖賢の道とのたまふところを、多く性といふ字にかへて註せり、孟子の道一而已矣といふを、集註には古今聖愚本同一性とあり、堯舜之道孝弟而已矣といふを、陳氏の註には、堯舜人倫之至、亦率ニ是性一而已と、これらにて、古人のをしへと後世の學と相違あることとしるへし、

與なり、然るときはこれにしたかふものを正道としるを、ます〳〵分明なり、世の人、此章の最初に性をのたまふによつて、性をおもにして説たると思ふはあしく、此一節性道教ならひあけ、性をはしめにとくといへとも、本道を主として説たまふなり、それゆへ第二章にこれをうけて、道也者不レ可二須臾離一也、可レ離非レ道也と説けり、末にいたりても、道不レ遠レ人、人之爲レ道而遠レ人、不レ可二以爲一レ道といふのたくひあまたなり、後世禪學盛に行るゝにより、もはら心性の説を重し、儒者も其説になかれて、性の自然にしたかふを道といふといへり、これにては、道は末性は本、性は重して道はかろし、本末所をかへ、先後次第をうしなふ、聖人の道にあらす、すへからく辯すへし、

性道教の三つのものは、聖門學問の括例なり、心意才情のたくひ皆性の屬なり、仁義禮智のたくひは皆道なり、これをさし示すはをしへなり、性はたとへは良田のことく、道はたとへは嘉穀のことし、嘉穀をもちて良田にまきうふるは、をしへの功なり、それゆへ孔孟平生人にをしへたまふは、道を以て目あてとして、志二於道一と云適レ道と云、人々是にたかはさるやうにとのことなり、孟子のときにいたりて、自暴自棄の徒多く、我身を見かきりて、仁におり義によることあたはすとおもふによりて、性の善なることをさし示さる、皆をしへなり、詩書六經あまたのこと葉ありといへとももとの三つのうちにこもらすといふ事なし、先儒の説のことく、道を性の自然にしたかふといふときは、性道敎の三つのもの只一事なり、わかちいふへからす、いはんや道は往古來今自備りたるものなれは、性より出るとはいはれさることなり、器を造るには、規矩準繩を以てのりとす、これ器は規矩

の道の正道たることをしらす、何を以てかその是非をたゝして、天下のまとひを開かん、夫道といふものは、天下人々の行ふものなれは、人の性に相應したるか正道にして、相應せさるは正道にあらすとしるへし、今それ人たるものは、君臣父子夫婦の間、たかひに相和睦して、夏は葛を着冬は裘を着、うゆれは食し渇すれはのむか、人のこのむところにして、性のたのしむことしかなり、聖人の道といふものは、人倫日用を本として、その上に禮樂文章を加へたるものなり、もとより私意を以てこしらへはしむるにあらす、しかれは性にしたかふの道といふへし、もしそれ五倫のましはりをやめて、山林に屏居するか如きことは、あまたの人の中にては、このむものもあれとも、天下の人に、人ことに其やうにせよとすゝむとも、したかふへきや、これ性のこのむ所にあらされはなり、これを性にしたかふの道とはいはれまし、こゝにをいて、道の是非得失わきまへしるへくして、聖人の道の正道たること決然たり、そのかみ佛老のをしへいまたおこらされとも、長沮桀溺のともから、世間の交りをいとひて、獨その身をいさきよくし、これを道とおもひて、聖人の道を非とせり、世間の人も、其説にまよひて、何か正道何か邪道たることをしらす、子思子これをうれへて、其邪正をたゝさんかために、中庸の書をあらはし、これを性に證してかくのたまへり、これ道を目あてとして説出したるものにて、性の理を説にあらす、此上にもまた人の性といふもの宜からす、或は矯揉作爲に出るものならは、これに相應するを、かならす正道とはいはれす、こゝにをひて又一重ををしのほし、天命之謂ㇾ性といへり、性といふは、人の自然に生れつきたるものなれは、まことに天の賦

れとも器といふは、方圓大小の形もあり、其利用あらはれては、器ともいふへし、陰陽は寒熱溫凉のおほへはあるものなれとも、形狀のあるものにあらされは、これを器とはいひかたし、たとへは扇のことし、紙骨の類は器なり、扇はあふきてかせをとるものなるは道なり、扇よりいつる風を以て器とはいふへからす、いはんや風のいつるゆゑんの理をさしてこれを道といふことは、曾て以てあるましきとなり、然れは道器を以て理氣に配當することは、易の本旨にあらす、此事語孟字義に詳にこれを辯す、よつて易の本旨を考ふるに、易は蓍策の用をかりて、陰陽消長の變を以て、人事の得失を示すものなり、易の書の內にいはゆる道といふは、何も易道なり、目に見え耳にきくへきのものならされは、これを形而上の道といふ、此うちに一箇の主宰の理ありといふにあらす、天何言哉天不レ言といふのたくひなり、器といふは蓍策の類をさしていふ、方圓大小のかたち見るへければなり、然るゆへに形而上謂二之道一形而下謂二之器一といへり、もし陰陽卦爻の類をさして器といふときは、此章の次に、謂二之象一謂二之爻一等のことばあり、重複にあらすや、然れは形より上の理を道といふことは、聖人の旨にあらさることとしるへし、

中庸曰、天命之謂レ性、率レ性之謂レ道、修レ道之謂レ敎と、これによりて、人の性の自然にしたかふを道といふといへるはおやまりなり、章句云、人物各循二其性之自然一則其日用事物之間、莫レ不三各有二當行之路一、是則所レ謂道也とこれなり、これ子思の意にあらす、そのかみ子思の時分には、世間ます〳〵おとろへて、人々奇異隱僻の道をこのみ、或は山林草野にのかれ、或は門戶宗旨をたて、聖人

をふせく、これその道を以てせされは貧賤をさらさるなり、是にて古の聖賢は、道を以て萬事の法としたまふと見るへし、先儒の説にては、道を富貴を得貧賤を得るの道と解せらる、人爵おさまりて天爵いたるは、富貴を得るの道なり、博奕飲酒は、貧賤をうるの道なり、それ故句讀もかはり、てにをはも上下とにして、其道を以てせされはおらす、其道を以てせされともさらすとよむとなり、富貴はぎんみをして、道なれはおり、然らされはさる、貧賤はぎんみなしに、君子の上に得ましき筋にてもおると、集註に審㆓富貴㆒而安㆓貧賤㆒と、語類に富貴有㆓兩路㆒貧賤只一路といふこれなり、然れとも富貴を得るの道といふとはきこへたるとなり、貧賤を得るの道といふとはおるまし、博奕飲酒のたくひを、貧賤を得るの道といふといふかし、これはたゝ富貴に所し貧賤をさるの道、これを得るの道にあらす、その上舊説の通りにては、富貴の上にては、不㆑就といふへくして、おらすといひかたし、其詳なることは古義にあらはる、此義文義のたかひにて道の字古今異同の大義にあらされとも、古のをしへは、道を以て目あてとして示さるること、此章に明らかなるゆへ、次てにくはしく論し及ほせり、

易の系辭上篇言、形而上者謂㆓之道㆒、形而下者謂㆓之器㆒、後世これによりて、道を以て理の名とす、本義云、卦爻陰陽、皆形而下者、其理則道也、又大極圖說に云、大極形而上之道也、陰陽形而下之器也と、是宋朝以來理氣の定說なり、此意は、陰陽は氣なるゆへに、これを形より下の器といふ、その然るゆゑんは、目にも見えす、耳にもきこへさるものなるによりて、これを形より上の道といふ然

く、いはれましきことなり、然れは聖書にかくのことき をしへ多くあるはいかん、道は人をおさむるののりなり、人心のおもふところさま〴〵にて、或は過或不及、其ゆへに道を以てわか心の規矩準繩として、これにたかはさるやうにすることなり、然るゆへに由ㇾ道志二於道一と。これを目當にして、平生修爲せよといふことなり、

論語に、富與ㇾ貴是人之所ㇾ欲也、不ㇾ以二其道一得ㇾ之不ㇾ處也、貧與ㇾ賤是人之所ㇾ惡也、不ㇾ以二其道一得ㇾ之不ㇾ去也とあり、此章は、人たるもの平生の意得は、富貴貧賤の上より、万般のことに及まて、道をもつてのりとして、これにたかはさるやうにせよといふことなり、先富貴は人のすきこのむことにて貧賤は人のきらひにくむものなり、たゝこゝろのまゝに、富貴になりて貧賤をさるやうにするときは、何樣の惡事もなしかねす、君子は道を以てのりとして、万事これにたよりて行ふ故に、かりそめにも道にかなはされは、日比富貴の家に生れても、これを辭しさりておらす、貧賤の場におりても、これを甘なひて辭しさらす、故に不ㇾ以二其道一不ㇾ處也、不ㇾ以二其道一不ㇾ去也とのたまふなり、道といふは、いはゆる道義也、此章にありていへは仁なり、故に下の段にこれをうけて、君子去ㇾ仁、惡乎成ㇾ名、無二終ㇾ食之間違一ㇾ仁、造次必於ㇾ是、顚沛必於ㇾ是といへり、孟子に、非二其義一也非二其道一也、祿ㇾ之以二天下一弗ㇾ顧也とあるも即此意なり、古の聖賢の上に就ていへは、呉の太伯季子のことき、世々諸侯の家に生れても、位をつくことを心にかなはされは、他國にのかれさる、是其道を以てせされは富貴におらさるなり、顏子閔子のことき、簞瓢陋巷に居て、そのたのしみをかへす、季氏かまねき

万物の生々する、皆理これか主宰となりて、暫時もやむことなし、これにかたとれとのたまふといふは、大に聖人の旨にそむけり、是もと佛老の説よりいてたるものにて、理を以て万物の主宰とし、これを名付て道躰といふ、漢唐の諸儒、その説淺易なること多しといへとも、かへつてこの弊なし、朱子語類云、除ニ了孔孟一。猶是佛老見ニ得些ニ形象一、譬如レ畫レ人一般、佛老畫ニ得些ニ摸樣一、後來儒者、於レ此全無ニ相着一、如何敎下他兩箇不上レ做レ大といへり、此意は、道躰の妙といふもの、孔子孟子の外には、佛老の二氏畧其樣子を見得て、漢唐の儒者は曾て見得ずといふことなり、然れとも聖人の道は、人倫日用の外さらに一層の理なし、孟子に、徐辟か仲尼水を稱するの意を尋るに、孟子のこたへに、原泉混々不レ舍ニ晝夜一といへり、これ又證據とすへし、先儒の説にかなはさるによりて、孟子のこと葉は、徐辟か病によりてかくのたまふものにて、夫子稱レ水の本意にあらすといへり、また荀子にも此ことあり、朱子の料簡には。孟荀の語、或是傳聞之訛といへり、道躰といふこと、もとより聖人の旨にあらされは、かくのことく矛盾することあるへし、

論語曰、志ニ於道一、又曰、可ニ與適一レ道、又曰、何莫レ由ニ斯道一也と、其餘に據レ德知レ德居レ仁由レ義好レ禮等のをしへあまたなり、もし道の本躰我に備りて、氣禀物欲のゆへによりて聖人たることを得すんは、たヽ其おほはれをさりてすむことなり、然るに仁をこのみ道に志といふは、たとへは歇語をとくかことく、表より正すくに、無欲にせよとあれは、一言にてすむことを、道により道に志すといふは、まはり遠きことにあらすや、其上われに備りたる躰に志すといふは、目を以て目をみるといふかこと

は、天下にあまねくおしへを施さるゝことあたはさるによつて、家庭の間、ひそかに相講習して、是古聖人の道と、同志の人とこれを修し習ふ、孔子孟子のとき是なり、これを修レ道之謂レ教といふ、是にて道の大概しるへし、後世にいたりても、世々の法度あり、善悪邪正さま〳〵なれとも、當代の人のともに守ることなれは、是又其ときの道といふへし、しかれは道は天下公共のものにて、自己一人のわたくしするものにあらさることは明らかなり、

宋朝以來の先儒、道を見ること甚精微に過て、日用當然のことを、もとより專にせらるれとも、これは道の用にて、至極にあらすとおもひ、其上面に就て、然るゆゑんの故をもとめ、是を道の本躰とす、天に在ては命と云、人に在ては性と云、物に在ては理といふ、すへて是を名つけて道躰と云、また無極而大極といふ、目に見へ耳にきくへきものにあらすして、天地萬物是によらされはたゝす、故曰、道之本原出ニ於天ー、而其實躰備ニ于己ーといへり、これ皆佛老の説より淵源し來りて、聖人のをしへに齟齬すること甚し、聖人の道を論するは、人倫日用にいたりて極り、此外一句もなし、

論語に、子在ニ川上ー曰、逝者如レ斯夫、不レ舍ニ晝夜ーと、集註に、天地之化、往者過、來者續、無ニ一息之停ー、乃道躰之本然也と、程子曰、此道躰也云々、又曰、自レ漢以來儒者皆不レ識ニ此義ー云々と、此章はもと流水の日夜流行して、しはらくのたへまもなきを見たまひて、人もかくのごとくに、間斷なしにつとめよといふことなり、易乾卦の大象に、天道の運行健なるをのりとして、自强不レ息とあると同しこゝろなり、もと別義なし、後世の學問高遠なるによりて、天地日月の往來運行、水の流れ、

第をたかへさる、これを兄弟の序といふ、朋友の間はたかひに信をまもりて、言行に相違なきやうにする、これを朋友の信といふ、天下の人あまたあれとも、此五ッの中にこもらすといふことなし、祭儀には十倫とたつ、名目違たるはかりにて、五倫の外にいつることなし、故に中庸に、此五ッのものを天下の達道といふなり、

五倫の外に、又仁義禮智を道といふ、五倫は人の品によりて其すし道を分つ、仁義禮智は、ひろく衆人の上に通してこれをいふ、仁とは、人を愛し人の爲にするの道、義とは、とるへくとるましきを差別するの道、禮とは、大にしては貴賤長幼のたかひ、小にしては進退揖讓の節、其序をたかへさるの道、智とは、是非善惡を辨別するの道、これ皆人の行事にあらはるゝ上について、これをいふ、道は百行の惣名なれは、何事にても、人のなし行ふところの善は皆道なれとも、其中此四ッのものは、其大すしめなり、故に仁義禮智を天下の大道といふ、

道は別件の事にあらす、すなはち天下公共底の物にて、天下千万人のとも〳〵に行ところにて。われ一人のわたくしするものにあらす、日用常行の上にあらはれて、これによらされは人たるへからさるによりてこれを道といふ、むかし堯舜の授受のときには、たゝ允執㆓其中㆒とはかりのたまひ來、仁義の目未あらはれす、それより後聖々相うけて、孔子は專仁智勇とのたまひ、孟子は仁義禮智を兼擧られて、次第に詳明なり、聖人上にゐますときは、これをもちて天下のひとをおしへみちひき、これにたかはさるやうにおさめたまふ、堯舜禹湯文武の代是なり、世道衰微して、聖賢位を得され

訓幼字義巻之二

道　凡十七則

道といふは、本道路の事にて、人々の往來通行するものなり、唐の十五道、宋の二十三路、本朝の八道のことき、上は王公大人の貴きより、下は販夫馬卒のいやしきまて、賢愚老少をわかたす、同しく往來奔走する、これを大道といふ、人道を道といふも、この道路の義をかりて名つけたるものにて、彼の仁義禮智のことき、上一人より下万民にいたるまて、これにたよらされはかなはさるによりて、又道と名つくるなり、孟子曰、道若㆓大路㆒然と、中庸に五倫の交をあけて、天下之達道也とあり、道は人のよつて行ふものなること分明なり、後世に道躰といふことあり、又性の自然にしたかふを道といふと、何も道を高遠に見られたることにて、聖人のいはゆる道にあらす、

道の大すしめは五倫にあり、むかし堯のとき舜攝政し給ふ、其とき契を擧て、人倫の道をおしへ給ふ、其言曰、敬敷㆓五典㆒在㆑寛と、書經舜典にあらはる、又五典とは、典は常といふことにて、又五常五倫ともいふ、君臣父子夫婦兄弟朋友の五ッの交り、天下万世いつもかはらさるによつて、これを典と云常といふ、孟子に到て、その條目を詳にあらはして、親義別叙信といふ、君臣の間はたかひに義理を以て交る、これを君臣の義といふ、父子の間はたかひに相親愛する、これを父子の親といふ、夫婦の間は内外の差別ありて相雑亂せさる、これを夫婦の別といふ、兄弟の間は年の長幼の次

いふものなくても、害なし、是祿命前定の説におちて、聖人の意にあらす、とかく天命といふもの
は、あらかしめはかられさるによつて、常に己をつゝしむを、知〻命といひ立〻命と云、有生の初に
定るといふへからさるのわけ、これにてしるへし、

訓幼字義卷之一　終

ふも同しきことにて、常々に顧念表正して、天道の冥加にかなふやうに、身をつゝしみたまふことなり、先儒理を高上に見られたるゆへに、畏といひ顧といふを、皆我心性に目をつくることに解せらる、甚古意にそむけり、

論語死生有命の註に、命稟於有生之初、非今所能移とあり、此こと語孟字義に、これを離しておもへらく、この説の通りなれは、學問修爲も無益のことになり、聖賢のをしへも、いたつらに虚器たりといへり、人あるひはこれをうけかはす、これも命はあふところのときに就ていひたるものを、うくるときのはしめに就て解せらるゝによつてよろしからす、尤器物調度なとに、つよきものは久しくこたへ、よわきものははやくそんす、つくる所の數、大様は最初にも定るへし、人生の壽夭も強弱によつて大様は定るへし、然れとも吉凶禍福生死壽夭の到來るは、其ときにいたらされはしれかたし、一息いまたたへさるのときまては、いくつにて死するといふこと、聖人賢者といへともしりたまはす、それゆへ平生身をつゝしみ、欲を節にして、天命をうしなはさるやうにすることなり、故に孟子に曰、夭壽不貳、修身以俟之、所以立命也と、もし必有生の初に定るといふときは、横死の命に定りたるものは、何ほと用心をしても、かならす天年を終へす、考終命に定りたるものは、また何ほとあやうき所へ行、少の養生をせされとも、百歳の齢をたもつへし、また賢愚知不肖の上にとりても同しきことなり、あしく生れ付たる命をうけたるものは、何程學問修爲すといふとも、すこしもかはることはあるまし、しかれは常々ものことつゝしみはけむも、畢竟無益のことにて、をしへと

然れとも、悪風には舟をくつかへすの理あるをしりなからのりいたすは、みつから死をまねくといひつへし、然れは刑にあふを知りなから盗賊をするもまたしかなり、これを命といはむや、ゆゑんに、知ㇾ命者不ㇾ立ニ乎巖牆之下一といへり、多少分明ならすや、

知ㇾ命といふと、さきに詳にこれを論す、孟子に、知ㇾ命者、不ㇾ立ニ乎巖牆之下一といへり、この命をしるといふは、他處と少ことなり、常には、富貴貧賤のいたり來る上に、これ天命なりと心を安んして、一毫もうらみとかむる意なきを、知ㇾ命といふ、孟子の此所の意は、命といふものは、はかられさるものなるによりて、常〻用心をしてつゝしむを知ㇾ命といふ、たゝ其わけをしるにあらす、巖牆といふは、ついぢのかたふきて、巖のことくに見ゆるをいふ、くつれたをれて人をしころすの理あり、命をしるものは、常〻用心して、あやうきことをせさるによりて、かくのことき所にたゝすとなり、これにて聖人命をのたまふの意をしるへし、

論語に、君子有ニ三畏一と、其一つは畏ニ天命一なり、先儒の說に曰、天命者、天所ㇾ賦之正理也、知ニ其可一ㇾ畏、則其戒謹恐懼、自有ニ不ㇾ能ㇾ已者一、而付畀之重、可ニ以不一ㇾ失矣と、これにては、天命をおそるゝといふは、畢竟我性をおそるゝといふものなり、これは在ㇾ天爲ㇾ命在ㇾ人爲ㇾ性といふの說より出たるものにて、聖人天をのたまふの本意にあらす、本を推していふときは、天命を畏といふも、わか身をおさめつゝしむことなれとも、おそるゝものは天なり、たとへは仕ふるものは、身に仕損しをして主人の氣にちかはさるやうに、常〻役目を大切にするかことし、成湯の顧ニ諟天之明命一とい

ときは、まことに善不善皆人爲なれとも、行あたるところのよしあしは何も命なり、然れは罪ありて死する者を命ともいふへし、ゆゑんに孟子にもまた禍福無下不二自レ己求一レ之者上といへり、莫レ非レ命也といふはこのことなるへしと、曰しかり、然とも孔子伯牛の手を執て、亡レ之命矣夫、斯人也而有二斯疾一とのたまへり、これにてしるへし、伯牛なれはこそ命といふへし、伯牛のごとくならす、常ゝ麁末なるもの、かくのことき疾にあふときは人爲なり、命とはいはれましきわけ明らかなり、然れは何事も、人爲自然をわかたす、こと〳〵く命といふとは、あるましきことなり、通してこれを見るに、善人はよきことあしきこと皆命なり、舜と孔子と同しく聖人なり、舜は堯の世に生れ、天子の位を踐、孔子は棲々として一旅人に終、舜にもとむることあるにあらす、孔子にさくることあるにあらすして、窮達かくのごとく同しからす、是よしあしともに命といふへし、もしあしきものゝ刑罰にあふは、天命つきて天罰にあふといふものなり、書經にいへる、有夏多レ罪、天命殛レ之とこれなり、またあしきもの禍にあはす、或は榮花をかふむるは、幸といふものなり、論語にいはゆる、人之生也直、罔レ之而生幸而免と云たくひなり、其餘例推すへし、

或人又いはく、兩人盜をして人をころさんに、一人はふしきに見いたされて刑にあひ、一人はこゝかしこのかれて、竟に命をたすかる、これ二人ともに、あふところ皆命なり、何ぞあしきものに命をいふましきや、曰これまたさきのたとへのことく、悪風を見かけて舟をいたさんに、あまたの人の中には、たすかるものもあり、またおほれ死するものもあり、かならす盡く死するにもあらす、

をたてられたるにより、我道をつくすも、正理にかなへはすなはち命といへり、故に當レ死而不レ死、却是失二其正命一といへり、とかく義は義命は命と、わかちて意得へし、

孟子に、莫レ非レ命也、順受二其正一といへり、先儒の説に、人物之生、吉凶禍福、皆天所レ命、惟莫二之致一而至者乃爲二正命一といへり、これにては何事にても人のあふことは、よしあしともに皆天命といふへし、然れとも命といふことはのよりておこるをたつぬるに、世間のことに、一毫も人爲のあつからさることあるによりて、是を天に歸して命といふ、たとへは惡風を見かけて船にのり、忽刑罰にあふをしりなから、惡事をしてころさるゝは、人爲なり、命とはいふへからす、風をよくかんかへて船にのるに、ふと惡風になりて、覆溺の難にあひ、常〻用心ふかくして、おもひよらす身をうしなふのたくひ、是を命といふへし、然とも無事全して、天年を終て死するにあはせては、常にあらされは、命は命なれとも正命にあらす、其ゆへに孟子下の文に、盡二其道一而死者正命也、桎梏死者、非二正命一也といへり、人爲の外を命といふて、命といふ内に、亦正非正の別あるとしるへし、桎梏死するといふは、公冶長の縲絏にかゝるの類、其身に罪なくして、ふと卷そへにあひ、訴の聞あやまりにあふのたくひなり、罪ありて桎梏せらるゝにあらす、罪ありて死するものを命といふときは、何事にても命なり、命といふことのおこるわけせんなし、讀者たゝに莫レ非レ命也といふの一句を見て、何事も命とのたまふとおもふ、是は人爲をのけて、其餘につゐていへることなり、

或人のいはく、不善人の禍に逢は、善人の福に逢と同しきことなれは、なすところのもとをたつぬる

し、道といふも義にちかし、大抵命といふものはかれにあり、わか得る上に就ていふ、義といふものは我にあり、我處する所のことに就て云、差別尤あきらかなり、それゆへ人事の上に、義をいふ場あり、命をいふ場あり、義命あはせいふへき所あり、出處進退は我にあり、これには義をいふへし、故に見レ得思レ義といへり、存亡得失は天にあり、これには命をいふへし、故に居レ易以俟レ命といふ、あしきものにたよつて、しいてさいはいをのそむは、我にありては義にかなはす、彼にありては命にまかせさるなり、ゆへに無レ義無レ命也といへり、これにて其わかちをしるへし、先儒命をかろく見られたる故に、義の中にありといへるはあたらす、

孟子云、盡ニ其道一而死者正命也、桎梏死者非ニ正命一也と、或人殷の比干のことを擧て、亦是正命也やと問、朱子の返答に、固是正命といへり、又問、以レ理論レ之、則謂ニ之正命一以ニ死生一論レ之、則非ニ正命一如何と、又答ていはく、當レ死而不レ死却是失ニ其正命一此處須當ニ活看一これまた上に段々論すると同しきことにて、是にては義といふと命といふと、混合してわかちなし、比干のとき、成湯高宗の聖代に生れ逢たらは、忠言を用られ、志も世にひろまるへきに、罪惡貫き盈る紂辛か世に出合て、いさめを以てころさるゝ、これ比干の命のあしきなり、これあふところなり、比干の身よりいふときは、國家のくつかへりほろふるを見るにしのひす、身をすてゝいさめをいふは、仁といひつへし、義といひつへし。これ我にあるの道なり、孟子に、盡ニ其道一而死者正命也といへるは、平生身をつゝしみ生を接して、天年を終て死するをいふ、比干の事とは各別のわけなり、先儒理の命といふこと

まことに中人以下の人ともいふべし、然れども不レ知レ命無三以爲二君子一也といへり、君子居レ易以俟レ命といへり、死生有レ命、富貴在レ天といへり、其餘命をいふの章あまたなり、皆中人以下のためにとかんや、況や人不レ知而不レ慍、不二亦君子一乎と云、中庸に遯レ世不レ見レ知而不レ悔、唯聖者能レ之といふの類、命といふ言葉はなけれども、何も命を安んずるのさかひ、聖人の地位なり、中人以下のをよぶことにあらず、又彌子瑕がためにいふとあること、とりわけ意得がたし、孟子に、孔子得レ之不レ得曰レ有レ命、而主二癰疽與一侍人瘠環、是無レ義無レ命也といへり、これは或人孔子の癰疽侍人などの如きものを主とせらるゝことありといふによりて、孟子の御返答に、孔子の平生事を處し身をつゝしまるゝところの雅言をあげて證據として、左樣のわけもなきことはなきとくじかるゝなり、然れば夫子の常々に、吉凶禍福のうへにては、毎度命をのたまふといふこと分明なり、曾て彌子瑕がことにあつからず、孟子にも、吾之不レ遇二魯侯一天也とあり、孔孟常に天命を以て安んぜらるゝこと、これらの言葉にて見るべし、先儒理を見らるゝこと、甚高上に過たるゆへに、かくの如き說あり、齟齬すること多し、程子の說に、聖人則更不レ論二利害一、惟看二義當レ爲與一レ不レ當レ爲、便是命在二其中一也といへり、是も上の段に論ずると同しきわけなり、これにては、義といふもの、命と混合して差別なし、聖賢の言葉に、あきらかに義命の二つを引わけてのたまふこと多し、孟子に主二癰疽與一侍人瘠環、是無レ義無レ命也といへり、すでに義なしと云て、又命なしとあるからは、各是一事にして、義といふもの、命のうちにあらざることしるべし、盡心の篇にも、求レ之有レ道、得レ之有レ命とあり、これまたあはせ考ふへ

し

朱子の云、聖人不レ消レ言レ命、只爲ニ中人以下一説く、此説程子にはじまりて、尹和靖に成り、もつとも聖人の意にかなはず、程子曰、賢者惟知レ義而已、命在ニ其中一と、又云、用舍無レ預ニ於己一、安ニ於所レ遇者也、夫曰、安レ所レ遇者、命不レ足レ道也、君子知レ有レ命、故言必曰レ命云々と、尹氏曰、用舍無レ與ニ於己一、行藏安ニ於所一レ遇、命不レ足レ道也と是なり、朱子其説を述ておもへらく、聖人説レ命、只是爲ニ中人以下一説、聖人欲レ曉ニ子服景伯一、故以レ命言、如レ曰レ有レ命、是爲ニ彌子瑕一説、聖人用レ之則行、舍レ之則藏、未下嘗到中那無レ可ニ奈何一處上、何須レ説レ命、如一等人不レ知レ有レ命、又一等人知レ有レ命、猶自去計較、中人以上、便安ニ於命一、到ニ得聖人一、便不レ消ニ得言一レ命と、語類に詳なり、此意は、常底の人はもとより天命といふことをしらざれば、まことに論ずるにたらず、すこし智あるものは、命あることをしれども、さま〴〵に計謀を運して、命にまかせず、中人以上にいたりては、命ののかれさることをしりて、これをやすんず、聖人にいたりては、もつはら義に安して、命をいふことをまたずとの意なり、これは命に安んずるも、なすべきすじあれば、またもとめんとおもふこゝろあれども、手だてのつきたる上は、せんかたなきより、心をしづめたるものにて、至極にあらずといふこゝろにてかくいへり、然れども聖經をかんがふるに、命をのたまふことあまたなり、ことに命を安んずるを聖人君子の極功とす、中人以下のためにとくといへるはあやまりなり、

子服景伯彌子瑕がために命を説たまふ、皆中人以下のためにとくといふこと尤いふかし、子服景伯は

の吉凶禍福、自然といたり來りて、少も人力のうたがひなく、はなれ切たる所を天といふ、莫ニ之爲一而爲者天也といふこれなり、又事によりて、人力に出るやうなれども、まヿは人のまねきいたすヿにあらざるを命といふ、莫ニ之致一而至者命也といふこれなり、堯舜の子は不肖にして、舜禹は聖德あり、そのうへ久しく相位に居たまふゆへに、天下の人、堯舜の御子に歸せずして舜禹に歸服す、禹の時は、禹の御子啓德ありて、益の相位に居たまふヿ、年數久しからざれば、天下の人、益に歸せずして啓に歸す、かくのごとき年數の長短、たがいの賢否の行合、自然のヿにて、一毫も人爲にあづかるのうたがひなし、故に孟子にこれを天也といへり、また人のやまひといふものは、多くは自の不養生に出るヿにて、此方より招きいたすヿなり、伯牛の如き賢德ある人は、平生身をつゝしみ欲を節にして、无妄のやまひはあるまじきはずなり、然るにかゝらぬ惡疾にあふヿは、いたすヿなふしていたるの禍なれば、是を孔子の命矣夫とのたまふ、これにて天と命との辨別しるべし、論語に、死生有レ命、富貴在レ天といふも、是にてあはせ考ふべし、然れども富貴を論語には天に歸して、孟子には得レ之有レ命といふ、所によつて又通しいふと見へたり、又得やうのたがひもあるべし、

天といふは命のよつていづる所、命といふは天よりいづるものなり、それゆへ天には在と云命には有といふ、たとへば王法といふがごとし、其いづる所の本躰をさしていふときは王といふ、其いづるところのしをき法度をいふときは法といふなり、天と云命と云天命と連稱するもまたかくのごと

れをいふ、あしき事にあふを天命といふことなし、保佑命レ之、自レ天申レ之といふ、周雖ニ舊邦一、其命惟新といふの類、何もしあはせなることを天命といふ、書經の大命以傾と云、乃隕ニ厥命一といふの類は、何もあしきことを命をうしなふといふ、大學に康誥を引て、いはゆる惟命不レ于レ常、道善則得レ之、不善則失レ之といふにてしるべし、一つもあしきことに行あたるを命にあふといふことなし、論孟には、人力のおよばざることは、よしあしともに、これを命とのたまひて、とりわけあしきかたに就ていふこと多し、知レ命安レ命といふも、吉凶禍福をかぬるといひながら、別而窮約の塲の受用を多しとす、伯牛の疾を命を以てことはり、臧倉の讒を天に歸するのたぐひ、そのためし一ならず、此異同あるは、詩經書經には、多く天子諸侯の身の上、天下國家の存亡に就ていふ、天道のかへりみによりて天下を得、天のこゝろにかなはずして、天下を失ふといふ意にて、今の人の、しあはせは冥加にかなふといひ、不仕合は冥加がなひといふが如く、論孟此かたは、人事のまじはらざることは、よしあし共に是を天命といふ、是また賢者衰微して、福せらるべき人も貧賤なることおゝきゆへに、詩書にのするとたがふことあるなるへし、然ども自然をさして天と云命といふことは、もとより異同なし、たゞ詩經のうちに、寔命不レ同といふは、よしあしに通じていふ、是また婦人の仕ふるものゝことばなり、又孟子に、堯舜禹の子の賢不肖を天とのたまふは、是又後世よりをふて論せらるゝことなり、

天といふは、命といふと同しきことにて、すこしの異同あり、孟子に莫ニ之爲一而爲者天也、莫ニ之致一而至者命也といふにて、その差別をしるべし、爲といふは作爲のことは、致といふは招致の謂、人事

をくだすと、いやましにかさなり來りて、天下歸服し、子孫繁昌にして、いつつくるといふ事なきことを、於穆不レ已といふ、穆とは深源遠の意にて、はかりしられざる事なり、詩經の本文をかんがふるに、いはく於不レ顯文王之德之純、假以溢レ家、我其收レ之、駿惠ニ我文王一、曾孫篤レ之といへり、即假樂の詩にいはゆる、保右命レ之、自レ天申レ之の意にて、もと陰陽流行の事をいふにあらず、中庸に引用るも、福レ善禍レ淫のいつもやまざるを、天の天たるゆゑんといふ、各本書を熟讀すべし、

經書に天道といふと天命といふと、さすところ同しからず、天道といふは、さだまりたる道理をいふ、善人はかならず福あるべく、惡人は必ず禍あるべき、これさだまりたる道理なり、故に書に曰、天道福レ善禍レ淫と、これその常をとく、天命といふは人の上にあらはれて、たゞ今行あふところ、定りたるもまた變あるも、少の人力あつからざることなれば、皆天のさしづとして、これを天命といふ、それゆへ、舜禹の位を得、伊尹傅說の相位にあげらるゝが如きは、天道ともいふべし、また天命ともいふべし、孔孟の不遇、伯夷の餓、顏閔の窮、伯牛のやまひの如き、これを天命とはいふべし、天道とはいひがたし、故に孟子に云、聖人之於ニ天道一命也と、聖人の德は、天道の常をもちていふときは、必さいはいあるべきはずなり、然るに不幸にして貧賤約窮なるは、天道の常にあはす、これを命といふ、とかく天道は常を以ていふ、天命はうくる所に就ていふ、

詩經書經に天命をいふと、論孟などとは少をもむきのかわることあり、是は義の異なるにはあらず、時の勢の同しからされはなり、詩經書經にいはゆる天命といふものは、もつはらよき事の上にてこ

本文は、人の性の自然なることを天に歸して、是は天のあたふるものといふまでの意にて、命の字の意かろし、たゞ賦與のことなり、莊子にいはゆる大塊假ㇾ我以ㇾ形といふと、意相ちかし、これを知ㇾ命安ㇾ命の命と一樣には見がたし、惣別文字には、虛字あり實字あり、常に天命といふは實字なり、中庸は天のあたふるといふ意にて虛字なり、混じ見るべからず、

孟子の仁之於二父子一一章、先儒是を氣の命にて智愚賢不肖うけやうの不同あることをいふといへり、是またしからず、惣別聖賢の所謂命といふは、吉凶禍福、人々のあふ所よしあし同しからざるにつゐていふ、性分のさま〴〵あるは、たゞ性とのたまひて命といはず、孟子の此章も、父子君臣のうへ、行あふ所の幸不幸を命といふ、性分のことにあらず、此章性と命入ちがひて說けり、舊說に、理氣を性命の上にてたがひに說とあれども、本文は何も氣の上に就ていふ、よく〳〵本章を玩見るべし、

詩の周頌維天之命の篇にいはく、維天之命、於穆不ㇾ已と、中庸にこれを引て、天之所三以爲二天也といへり、程子曰、天道不ㇾ已、文王純二於天道一亦不ㇾ已、朱子太極圖解に云、太極之有二動靜一是天命之流行也と、程子の說もと詩經中庸よりいでて、於穆不ㇾ已といふを、陰陽の流行萬古やまざるをかくいへり、圖解の意も其通にして、天命の字を以て太極をとき、流行を以て動靜をとく、何も陰陽往來の理をさして天命といふ、詩の本意にあらず、六經に天命をいふ、何も吉凶禍福の上に就ていふ、陰陽のことを天命といふことなし、周頌の詩の意も其通にて、文王の盛德廣大なるによりて、天道の福

章句の補傳にいはゆる、衆物の表裏精粗いたらずといふヿなしといふ場なり、然ども經書に知ㇾ命といふヿ多し、論語に不ㇾ知ㇾ命無㆓以爲㆒㆓君子㆒也といへり、孟子に知ㇾ命者不ㇾ立㆓乎岩牆之下㆒といへり、何も先儒のいはゆる氣の命といふものなり、吉凶禍福の上、常底の人は、氣をなやましうれへふつくむに、聖賢君子は、よしあしともに到來のまゝにて、心をうごかさず、是を命を知といふ、先儒の説にても、是には異説なし、夫子のいはゆる知㆓天命㆒といふも、是と同しきヿにて、夫子五十のよはひになりては、道の興廢存亡、とかく人力にはかなはざる事をたしかに合點したまひ、泰然坦然として、氷とけけむりきゆる如く、胸中にすこしのとゞこほりなきヿをかくいへり、衆物の道理をしりきはむるヿにあらず、命と天とは、畢竟同しヿなり、命を知といへば氣の命になり、天命を知といへば理の命となるヿ、もつともこゝろへがたし、然れば此知㆓天命㆒といふも、氣の命の上にて、おの〱其境界を安んずるヿをいふ、理の命にあらず、況や万物の理をいつて命とするヿはいよ〱遠きヿなり、その上此一句、先儒の註解ありては、理をきはむるともきこゆれども、正文をよみては、誰とても安ㇾ命の事とおもふ、窮ㇾ理のヿとは聞かたし、本文あきらかなるヿなれば、まことにしるがたし、

中庸の首章に云、天命之謂ㇾ性と、先儒またこれを理の命といへり、章句に曰、天以㆓陰陽五行㆒化㆓生萬物㆒氣以成ㇾ形、而理亦賦焉、猶㆓命令㆒也と、これは一理を分ちて、天に在ては命と云、人に在ては性といふといふヿにて、たとへば人君の命令を、臣下のうけ取上は職分といふが如し、然ども

の命にして、理の命といふとなし、

先儒の説におもへらく、陰陽流行萬古やまざるに、かならずこれを主宰するの理あり、これ天命の流行して、物々に賦與するもの、人にありていへば、仁義禮智の性なり、これを理の命といふ、五十知二天命一といひ、天命之謂レ性とのたまふのたぐひ、何も理の命をさしていふ、もし氣に就ていふときは兩般あり、一般は、貧富貴賤壽夭禍福のしな、人々のうけやう同しからさる上に就ていふ、死生有レ命と云、莫レ非レ命也といふの類これなり、また一般は、人の智愚賢不肖、性のうけやう同しからさる上に就て云、仁之於二父子一云々命也といふの類これなり、これを氣の命といふ、是朱子の説に本づきて、北溪字義にも詳に論ぜり、宋儒理の命氣の命の説、大略かくの如し、

先儒理一分殊の説をたてらるゝにより、万物の上に就て、その然るゆゑんの故無レ聲無レ臭所を理と名付、目に見耳に聞ところのさま〲あるを氣といふ、理は一ッにして、氣にさま〲異同有、命に理の命氣の命と云、性に本然氣質の性といふ、皆このわけなり、然ども聖賢の書を考るに、何も氣を説て、理をいふとなし、それゆへ命に理氣の説をたつるときは、所々矛盾する事ありて、聖人の旨あきらかならず、

先儒のさして理の命といへるは、第一五十知二天命一の一句なり、集註に云、天命即天道之流行而賦二於物一者、乃事物所三以當二然之故也、知レ此則知極二其精一而不レ惑又不レ足レ言矣、と是命の字を解して物理とす、夫子五十の時、格物窮理の功熟し、萬物の理に通達して、其至極をきはむると、則大學

元亨利ㇾ貞の辭あり、其餘、或は元亨、或は大亨、或は利ㇾ貞とはかりもあり、乾は純陽の卦にて、六十四卦の首たる故に、彖の文各別に取なし、天道聖人の上に就てこれを說、大哉乾元といへり、天の一元氣の事に說なせり、たしかに四德にわかちたるにも見へず、文言に、元者善之長也、亨者嘉之言也、利者義之和也、貞者事之幹也と、はしめて四つに分て是を論ず、これはもつはら人事に就てこれを說たるものにて、曾て天道にあつからず、それゆへ下の段に、君子体ㇾ仁足ㇾ以長ㇾ人といへり、すゑにこれを結て云、君子行ニ此四德一者、故曰乾元亨利貞と、仁といふは即元なり、此四の德を君子身上に行ひて、仁を第一とすといふ事なり、大躰古人書をよむ事、後世の如くに甚拘る事なし、易の十翼も一手に出るにあらず、各所見を以て、經旨を發明せらるゝによりて、義理同しからず、文言卦辭を分て四德とし、專ら人事に就てこれを發明す、四時に配當するは見へず、王輔嗣古註以來、もつばら四時の德と定て、今にいたるまで是を守れとも、易の本旨にあらず、

天命　凡二十一則

天命といふは、命は號令命令の意なり、これを天命と云は、帝王の詔勅宣旨あるが如く、今日人事の上に就て、吉凶禍福さま〴〵ありて同しからず、一人は仕合をし、一人は不仕合なるところ、少しも人力のあつからざるを、をして是を天命といふ、天道のいひ付といふ事なり、經書に天命といふ、何も此通りなり、後世にいたりて、命に理の命氣の命の二端ありて、吉凶禍福逢ところの不同を氣の命と云て、人物うくる所の正理を理の命といふ、聖人の意にあらず、聖書に所ㇾ謂命は、皆氣

祥瑞ありといふにあらす、聖人天をしるすは、常に人事の上におゐて是をこゝろむ、先人常にいへり、天有二必然之理一、人有二自取之道一と、善にさいはひし淫に禍するは、天道必然之理、おともなくかもなきの理にあらす、然ともこれをこゝろむるは、かならす人の上におゐてこれを見る、書の太誓に云、天視自二我民一視、天聽自二我民一聽と、又云、民之所レ欲、天必從レ之と、即この意なり、また孟子に舜の事を稱して云、天與レ之と、萬章これを疑て、天與レ之者、諄々然命レ之乎ととへり、孟子のこたへに曰、否、天不レ言、以二行與レ事示レ之而已矣。又曰使二之主一レ祭、而百神受レ之、是天受レ之、使二之主一レ事而事治、百姓安レ之、是民受レ之也、天與レ之人與レ之と云々、聖賢の天をとくはもつはら人の上についてこれをためして、人をはなれてとくにあらさる事、これにてしるへし、天下の人同しくよろこひいたゞくは、即天心にかなふなり、天下の人うとみにくむは、即天心にさかふなり、孟子に、はしめには天與レ之とありて、あとに天與レ之人與レ之と、人をましゑていへること。天道の人事をはなれさるわけ、益明らかなり、

元亨利貞を四德として天道といひ、四時に配當すること、易より出たることなれども、詳に易の本旨をかんかふるに、本人事につきていひたることにて、天道におつからず、先乾の卦辭に元亨利貞とあるは、易は本占筮の書なれば、筮者此卦に取あたりたるときは、かく意得よといふことなり、亨は通する意、貞はたゞしき意、元は大也、利は宜なり、此二つは虛字なり、此ことさはりなくおもふやうになりゆく、其上にて物ごと正直にするがよろしきといふこゝろなり、乾の外、屯の卦隨の卦にも、

うち、たゝ何となしにおそるへきの道あるをしりて、常〳〵に身をつゝしみ法を守りて、天命にたかはさるやうにする、是を天を畏るといふ、これを天を敬すといふ、孟子に云、天壽不貳、修身以俟之、所以立命也と是なり。詩經にいはゆる對越上帝といふも亦この事なり、然れとも知惠分別を以て、しりきはむへきの事にあらす、聰明正直仁熟智至るの地位にあらされはしるへからす、子貢の不可得而聞也といへるこれかためなり、

漢儒災異の說に天道をいへるは、もつはら有心のものと見て、そのしるしを天地萬物のうへにもとむ、人に一事の善あるときは、一事の祥瑞をあたへ、一事のあくあるときは、一事の災異出來るといへり、春秋の註家、この說もつとも多し、然れともかくのことく天道をもとむるときは、或は合ひ或はあはす、人の惑をひらきて、かへつてあなとりゆるかせにするのこゝろを生す、何そなれば、いにしへ堯に九年の水あり、湯に七年の旱ありて、聖王の世にも災異をまぬかれす、後世漢の諸帝の代に、靈芝甘露麒麟鳳凰等の瑞物しは〳〵史策にあらはるれとも、聖代ともいひかたし、一人の上につきても其通にて、ふと天災に逢ものあれとも、天下極惡の人にあらす、又惡人にも不思議の奇瑞を蒙るあり、これらの事皆符同せさる事多し、それゆへ春秋に、災異をしるして、事應をとかす、論語に、子不語怪力亂神といへり、神といふは災異祥瑞のたくひなり、然るに夫子の鳳鳥不至河不出圖といふは何そや、是は鳳鳥河圖の類は、古より聖王と世を御するの瑞相と言つたへたるによつて、これをかりて、聖王の時におこらさることを歎息したまふ、聖王世にますときは、必

ことき悪人を用ゆ、是紂か天にさかふなり、天道の違あるにあらす、武王の世になり、飛廉悪來をころして、比干か墓を封し、商容か家に禮し、亂臣十人を擧もちゆ、これ武王のよく天道をうけ行ひたまふなり、このときにまた天道に疑ひありや、天道のたかふかことくなるは、何も人爲のあしき故なり、人事をはなれて、天道の賞罰の自行れんことをおもふは、理のなきことなり、

天道を有象のものと見るもあしく、又無心の理と見るもあしく、後世老子のをしへを奉するものは、天帝といふは、一個人君の象ありて、袞冕衣服をかふむり、百官儀衛、宮殿官府の類までもそなはりて、九天の上にいますといへり、これによりて、玉皇三清の説おこりて、人の善悪にしたかひて賞罰をくたす人ありといふ、老子經にもかくのことき見へす、老子に天をうやまふ事多くあるによりて、後世より附言するなるへし、是まことに誕妄論するにたらす、漢儒災異の説もこれにちかし、また天道といふは、形器にわたるものにあらす、たゝ理をさしていふと、程子のいはゆる天專言則謂二之理一、朱子集註にいはゆる天即理也と云の説これなり、北溪字義に、朱子に聞ところの説をあけて曰、上帝震怒、也只是其理如レ是と、是亦同しわけ也、これにては、天といふものは、畢竟一理の別名にして、無心なるものなり、獲二罪於天一といふも、罪を理に得るといふことなり、これは後世理を以て萬物の一源とせられたるゆへに、かくのことくに辨あり、其説甚虚遠にして、聖人天を宣ふの本旨にあらす、すへて聖人の天といふは、もとより有象の物とするにあらす、また無心の理とするにあらす、またしゐてたてものとして、我こゝろのまことをよするにもあらす、蒼々の

なり、

世の人の天道をいふは、人をはなれて天を見たるものなり、一事の善をなしては、天より財寶もふり降り、一事のあくをなすときは、夜の間に天刑に逢とおもふは、せはきことなり、天道といふもの、かくのことくなるものならは、天下國家に君上なく、邑里に守令なく、刑罰號令なくても、世の中をのつからおさまるへし、善を福し淫を禍するは、天道の常なれとも、諄々然としてたゝちに人に命あるものにあらす、これを行ふは人にあり、ゆへに古の聖王、天の道をうけ行ふて、善を賞しあくを罰して、天下を太平にす、故に刑を天討と云、賞を天命といふ、平生にのたまふこと、常に天をのりにする事多し、書經のうちに多く見へたり、且天下の事、千條萬端、上一人の身にして、ひとつおさむることにあらされは、五等の諸侯をたて、百官有司にそれ〳〵の役をわかちて、是をおさめしむ、これまた天道をうけ行ふなり。故に書經皐陶謨の篇にいへり、無レ曠ニ庶官一、天工人其代レ之と、百官のおさむること、皆天工にかはりておさむるといふことなり、堯舜の世には、能天道をうけ行ひたまふ、賞罰號令、天の道にたかふことなし。八元八凱を擧て四凶をさり、舜禹に位をゆつりたまふ。此ときにあたりて、善者かならす福を得、あしきもの必罰せられ、人天道をうたかふものなし、末世になりて、天道をうけ行ふの意すさみ私の喜怒をもつて賞罰をせらるゝによつて、よきもの禍に逢てあしきもの福を得る事多し、こゝにおゐて天道のたかふをうたかふ、これ人爲の天にさかふにて、天道のたかふにあらす、殷紂のときに在て、伯夷叔齊は首陽に餓て、崇侯鄂侯の

を考ふるに、善人の禍を得て不仕合に逢、或は刑罰にかゝるの類、あけて計ふへからす、又悪人の仕合をし、門戸をさかやかし子孫繁昌なるためし、また何ほとゝいふことをしらす、是によりて、天道是邪非邪といふのうたかひあり、司馬遷か伯夷の傳の主意、通篇皆このをもむきなり、是は天道をせはくおもひ、聖人のをしへを拘りて覺へたるによりて、此うたかひあり、其上人事をはなれて天道を論する故、事々にあはさる事多し、聖人は人事によりて天道を言、大眼目を以て廣くをしへを示されたるものなれは、福ㇾ善禍ㇾ淫のしるし萬古たかふ事なし、

天道の報應一人の上に就て見るときは、たかふやうなれとも千萬人のうへに通してこれを見れは、たかふ事なし、一時の間によりていへは、たかふやうなれとも、千萬世に通してこれを見れは、たかふことなし、天道はまことに大事なり、くと〳〵しく一時にかきり一人につゐて見るへからす、たとへは扛秤の物をはかるかことし、分厘のたかひを正すは、戥等のこまかなるにしかさるやうなれとも、千斤百斤の重さをかけてちかひなし、老子曰、天網恢恢疎而不ㇾ失と、老子は異端の書なれとも、此ことははことはりなり、天道は大まかなるやうなれともちかふ事なしといふことうたかひなし、然るに世の人、一人一事につゐて天道を見るによりて、ちかひあるやうにおほゆ、世中にあしき事をして禍にあはす、或は福を得るものもあれとも、是はたま〳〵の事にて、おしなへて左あらす、しはらくはよきやうなれとも、古今の間に通し、後々を見て、よろしき事なし、人々氣みしかく意得せはくおもふゆへに、うたかひ多し楚の申包胥かいへる人多勝ㇾ天、天定亦能勝ㇾ人と是又名言

るかことし、其はしめは、工人のたくみをもちてこれをつくる、年久しく用ひついやすときは、或はやふれ或は損して、其物消滅す、消滅するにいたつては、必人の力を待ことなく、天地の道もまたしかり、萬物の始終を見るときは、もとより生死の兩つありといへとも、天地の道には、有レ生而無レ死、主レ生而不レ主レ死、一ニ於生一故也、故に易にいはく、大哉乾元、萬物資生、又曰天地之大德曰生、又曰、生々之謂レ易と、其意あきらかならすや、

或のおもへらく、先儒の說も、陰陽の往來流行することをすくに道といひて、其外に然るゆゑんの理を立るにあらすと、此こと朱子の語類等を考るに、往來するを直に道とするの語、一二ヶ條見へたり、一陰又一陽、循環不レ已、乃道也、只說ニ一陰一陽一、便見ニ得陰陽往來循環不レ已之意一、此理卽道也と、かくの說あれとも、これはたゝ詞氣の間大略に說たる故に、すくに陰陽往來を道とせらるゝと見ゆれとも、定說にあらす、惣別語類は、早年晚年のちかひあり、又は門人記錄の手に出ることなれは、定說とたかふ事あり、とかく朱子の定說、理氣のことなとは、大極圖解、易の本義等を以て正義として、其上に諸類をましへ考ふへし、然れは朱子の所レ謂天道といふものは、もつはら理を主としていひたるものにて。往來する所をさすにあらさる事しるへし、

天道の善惡報應、人々のうたかふことなり、聖賢のをしへには、善をすれは福を得、惡をすれは禍に逢といへり、書に曰福レ善禍レ淫と、又言作レ善降ニ之百祥一作ニ不善一降ニ之百殃一、易云積善之家、必有ニ餘慶一、積不善之家、必有ニ餘殃一と、此たくひ經書のうちにあまた見へたり、然れとも古今のこと

はしめとして、陰氣を以て生す、人にとりていへは、父母の道也、先人語孟字義をあらはして、天地の間一元氣のみといふはこれかためなり、然るに宋朝以來、此上面につゐて、一ッの然るゆゑんの理をたつねて。これを天道といふ、是聖人ののたまはさること、たとへは畫レ蛇添レ足かことく、天地の道をいふゆゑんにあらす、大抵聖賢のをしへは、人倫日用を先務として、平生のをしへ、入而孝出而弟といふ、家國天下をおさむることをもつはらとして、萬物の生々するゆへ何を以てするといふこと、もと其沙汰なし、然れとも後世にいたりては、陰陽造化の理、學問の根本準則となつて、學者の常に講究することなれは、其是非得失を辯せすんはあるへからす、先人宋朝儒先の學問を服膺する事三十餘年、中歳より以來、恍然自得して、語孟の二書によつて、古聖賢の旨を會得す、苦心多年、條理分明、書をあらはし經を講して、其たかひを正すこと、つふさに成書にあらはる、胤不肖、其遺旨をうけ、參伍考究、かさねてそのをもむきを述ることかくのことし、

語孟字義に云、天地之道、有レ生而無レ死、有レ聚而無レ散と、此こと人多くうたかひをなし、無レ死無レ散といふことをうけかはす、是は先儒の說に生死聚散、皆理爲ニ之主宰一といふにあたつてかくいへり、これにては、生といふもの死とならひ立て、生するにも生する理ありて生し、死するにも死する理ありて死す、皆天理の主宰なりと、これ理をもつて萬物の主宰とせられたるゆへ也、とかく天地の道は、只管に萬物を生々する事をつかさとりて、人物の生、大小高下、皆此氣をうけて生長す、其うくるところの氣、久しき時は消散し盡く、こゝにおゐて死あり、たとへは人の器物をこしらゆ

といふかことく、古往今來、四時晝夜の間、或は陰となり或は陽となり、ひたすらに往來運行してやまさるを形容して、これを天道といふ、詳なることは、語孟字義に是をあらはせり、又吉凶禍福を天道といふは、往來することは見へされとも、善惡報應の理は自然の道なるによりて、又是を天道といふ、賞罰號令は人君の道といふかことし、又自然の道を天道といふことあり、中庸に、誠者天之道也、誠レ之者人之道也といふことときは、聖人の德生知安行にして作意によらさるを、名付て天道といふ、すへて天を以て人に對していふときは、自然なるを天といふ、作意にわたるを人といふこと多し、天爵人爵の類見るへし、このわけ誠の條下にあらはせり、

陰陽を天道といふは、陰陽をさして天道とするにあらす、其往來やまさる事、人の道を行かことくなるを以て、是を天道といふ、後世の學問、理を主張せらるゝによりて、陰陽の往來流行するわけをたつねもとめ、其然るゆゑんの理をさして、是を天道といふ、易系辭の本義にいはく、陰陽往來者氣也、其理則所レ謂道といへり、是聖人の意にあらす、今日天地の間を見るに、草木鳥獸萬物の生々する事、皆一陰一陽の功用にして、萬古のさきもかくのことく、萬古の後もかくのことく、いつはしまるといふ事もなく、いつをはるといふ事もなし、是を天道といふ、古六經の中、天道を論する事、易よりあきらかなるはなし、乾の彖にいはく、大哉乾元、萬物資始、乃統レ天、坤の彖にいはく至哉坤元、萬物資生、乃順承レ天と、此ことは尤證とすへし、乾元とは陽氣をいふ、天の道なり、坤元とは陰氣をいふ、地の道なり、乾元坤元をあはせていふときは、一元氣なり、萬物の生、陽氣を

訓幼字義卷之一

天道　凡十三則

古の經書に、天道といふに二樣あり、一ッは、人のうくる所の吉凶禍福、自然にして人力の及さるところを天道といふ、書經湯誥篇に所謂天道福善禍淫、易謙卦の彖に所謂天道虧盈而益謙といふの類これなり、一ッは、一陰一陽往來やまさる上に就て天道といふ、易説卦に、立天之道曰陰與陽、又言一陰一陽之謂道是なり、先儒より、禍福の上に就ていふを主宰の天道といふ、流行の上に就ていふを流行の天道といふ、然れとも天道の天道たるゆゑむは、もつはら主宰の上にあつて、流行は其中にあり、主宰の外また流行の天道あるにあらす、

天道に此二端あれとも、詩書語孟に説ところの天道は、多く主宰の上に就ていふ、陰陽流行のことを天道といふとなし、たゝ易はもつはら陰陽の事を説たる故に、十翼の中、陰陽流行を天道といふ、上にあくる通りなり、宋朝以來理學盛なるにより、陰陽消長の本を推して是を理といふ、吉凶禍福にあらはるゝを氣と名く、古義にあらす、須く辨すへし、

道といふは、本人の往來奔走する道路の名なり、これをかつて天道人道といふ、天の運行一陰一陽往來やまさる事、人の道を行て往來するかことくなるによつてなり、易の上系辭第五章に、一陰一陽之謂道とあり、其各一の字を陰陽字上にをくとは、一闔一闢謂之變と云、一張一弛文武之道也

目錄畢

訓幼字義目錄

伊藤氏學

訓幼字義序

學將以盡人之所以爲人之道也。人苟於日用彝倫之間。能盡其道。則雖曰未學。尙謂之已學矣。況玩聖人之遺言。通儒先之訓解。略了其大義。則亦可以已。何必章梳句爬。屑々焉較其異同離合於錙銖抄忽之間乎哉。然專讀聖賢之書。則當審其所謂仁是指何物。所謂義是言何事。而後不迷其所嚮方焉。往靈己徂。微言不明。先儒雖窮力講明。而因探索之甚密。而致矯枉之過直。所謂仁也而仁不同。所謂義也而義不同。此所以學有古今之變也。先君子服膺先儒之成說。二十餘年。初而信。中而疑。終而斷然以爲聖人之道。不過日用彝倫之間。不可向此上面別求一種道理。立言著書。誘進後生。胤不肖生三十六年。而先子見背。嗣守裘業。責在後人。管窺貂續。亦稍有書。然詞既欠明。議亦不弘。加之方語之不同。致鯫生之難曉。於是據語孟字義條欵。稍加隱括。演以國語。名之曰訓幼字義。若夫五經大義。則當別著。故概而弗及。起筆於丁酉之夏初。而脫藁於臘月之上澣。爲類凡二十六。爲條凡三百二十六。其增損改潤。尙竢佗日云爾。

時享保二年冬日

伊藤長胤撰

古今學變後序

道不レ易二萬世一。而學有二古今之異一矣。豈特係三氣運與二時世之好尚一云爾哉。教導之不レ古。若二且瞿曇氏之法一。漸漬以使二之然一也。漢唐有レ若二董馬揚韓一。代不レ乏レ賢。迨二夫宋儒輩出一。其闢レ異護レ世之功。固不レ在二孟子之下一。然其說根二夫禪莊一。遂使三聖人有用之學。以爲二談レ空澄レ心之流一。亦可レ痛焉。比三諸災異五行之說與二清談浮華之流一。所レ謂齊固失レ之。楚亦未レ爲レ得。與二聖旨一異者固一也。能言距レ之。亦衞レ正之一也矣。古學先生以二相距相後之如レ此藐一焉。一洗二千古之非一。悉闢二萬世之惑一。成書具存。聖猷再廓。及レ門之士蓋三千矣。天下一望靡然。近世學者雖下由二其言一。而稍知上レ厭二性理之論一。而亦或淪二詞賦文字之習一。黄口儒生動稱二古文辭一。語レ之以二道德仁義一。則不二啻聾瞽之聲色一也。我先師紹述先生。作二爲此書一。題曰二古今學變一。以授二小子輩一。誦レ之則千古學問之沿革。一見犂然。無二復可一レ疑矣。此書之成。享時侍二左右一。寔蒙二提命一。手自謄寫。於レ今餘二二十年一矣。吁先師平生於二此書一。改竄多年。則四方之士。所レ錄亦不レ能レ無二異同一也。辛酉之歲。小子請レ暇寓二于古義堂一。將レ謀下校讐上レ梓。既而限滿歸レ府。盟レ心曰。異日當レ遂レ志矣。而亦恐小子庸劣豈獨專レ之。今茲甲子又來レ于レ塾。與二蘭嵎先生一。校閱一過。命二諸剞劂氏一。以公レ于レ世。庶幾讀者。能知下學問之法與二世級一相升降上。而遵二夫古正大之道一。以優游衍饜乎哉。此爲レ序云。

時延享改元重陽後一日

門生　奥田士亨　拜撰

之義一。則八條之目。言レ心者居レ半。此不二亦可レ疑之甚一乎。大低聖賢之敎レ人。每曰レ道曰レ德。而推二天下國家之本一。則必曰レ己曰レ身。而及レ心者甚罕。然亦非二絶レ口而不一レ言也。第與二後世所レ言者一異耳。通而考レ之。夫子曰。操則存。舍則亡。出入無レ時。莫レ知二其鄕一。孟子曰。先立二乎其大者一。朱子曰虛靈不昧。具二衆理一而應二萬事一。王子曰。致二良知一。乃至下老曰レ抱レ一。佛曰中牧牛上。衣裏繫珠之喩。殿鈴風幡之話。主人翁惺惺著工夫。其言雖レ異。畢竟不レ過レ證二明一箇心一而已耳。而有二邪正純駁之不同一。要レ知二聖賢之敎一レ人。以レ道爲二人心之規矩準繩一。而欲二心之不一レ違レ此。故夫子曰。從二心所一レ欲不レ踰レ矩。又曰。其心三月不レ違レ仁。乃至二書所レ謂。以レ禮制レ心。孟子所レ謂。以レ仁存レ心。以レ禮存レ心等語一。亦皆爲レ是焉耳。而人之患。每在下自安二暴棄一。不中肯從上レ善。孟子爲レ之說二本心良心一。使三人知二行レ道之有一レ所レ本。乃曰。先立二乎其大者一。又曰。人皆有二不レ忍レ人之心一。達二之於其所一レ忍仁也。人皆有レ所レ不レ爲。達二之於其所一レ爲義也。非下徒貴二一心一。而爲中萬理盡中於此上也。若夫佛氏之徒。專凝二定一心一。要レ不二爲レ物點染一。不四復問三仁義禮智之爲二何物一。蓋心外無レ法。法外無レ心。但了二一心一。諸塵自會。故云三界無二別法一。唯是一心作。攝二凡百工夫一歸二于一箇心一。宋明儒先既服二膺聖賢仁義之訓一。而又以レ心爲レ則。故其設レ科雖レ有二繁簡之異。性學之辨一。而原二諸唐虞三代之學一。則不レ免レ有二不同一也。考古之士其知レ所レ擇焉。

古今學變卷之下　終

○論陽明王子之學

陽明王子曰。夫萬事萬物之理。不外於吾心。而必曰窮天下之理。是殆以吾心之良知爲未足。而必外求於天下之廣。以裨補增益之。是猶析心與理而爲二也。夫學問思辨篤行之功。雖其困勉至於人一己百。而擴充之極。至於盡性知天。亦不過致吾心之良知而已。良知之外。豈復有加於毫末乎。今必曰窮天下之理。而不知反求諸其心。則凡所謂善惡之機。眞妄之辨者。舍吾心之良知。亦將何所致其體察乎。

又曰。格物。如孟子大人格君心之非。是去其心之不正。以全其本體之正。但意念所在。卽要去其不正以全其正。卽無時無處不是存天理。卽是窮理。天理卽是明德。窮理卽是明明德。

問格物。先生曰。格者正也。正其不正。以歸於正也。

又曰。知者行之始。行者知之成。聖學只是一箇功夫。知行不可分作兩事。

胤按。至是始以致良知爲宗旨。而知行合一之說作。鵞湖之是非久矣。王子蓋厭新安之支離。而從青田之簡易。其言曰。致吾心之良知。卽是致知非就物窮理也。蓋因大學之致知。而參之孟子良知也。原孟子之意。則以達天下之仁義。而本之于吾心。而曰良知良能。與性善四端等說同。其旨趣。而推本行道之原於己心也。非言唯致良知卽是聖人也。且孟子良知良能。二者倂擧。而王子特言良知。而不及良能。則其立言既失乎一偏。大學條目正心居其一。而復訓格物爲正心之不正。則其工夫亦涉乎重復。夫正心誠意。本自說心。而亦訓格物致知以爲正心

之意如陸子所說。則當時語齊梁諸君。何以不特擧似一箇心字而發之耶。今卽其書。開卷第一義。便拈出仁義二字。與利對說。明其得失。及齊王自爲退託之言。曰若寡人者可以保民乎哉。然後始指示不忍觳觫之心。以請及之百姓。向使齊王無自棄之說。孟子亦未必說出本心。直以堯舜文武之道告之耳。是知所謂擴充者。以所不忍。及其所忍。以所不爲。及其所爲。漸漸充拓。無所不至之謂。而固非滅欲以充本然之量之謂也。亦非徒存此心而已也。在天下上而言。則擧斯心以及彼。設爲養生喪死之制。而使天下之人。仰事俯畜。無凍餒之患。所謂王道仁政。此其極功。而孟子告時君以仁義。乃其事也。

包敏道云。性才心情。如何分別。陸子曰。情性心才。都只是一般物事。言偶不同耳。聖賢急於敎人。故以情以性以心以才說與人。如何泥得。

胤按。從上聖賢之敎人。非別創一般名目以告人也。因世間通稱之語言以立說。如心性情才等字。猶風雨露雷之異名。耳目口鼻之殊稱。峙者呼之爲山。流者目之爲水。翔者爲禽。走者爲獸。植者爲木。偃者爲艸。各隨其物。以辨其異。如曰存心養性。曰盡心知性。皆就其運用。差別其義。當世之人。不問知愚賢否。呼謂相熟。以無所迷。本無須大儒君子明目張膽。攘臂爭辨。後世性理之學盛。而體用道器之辨立。分離剖析。甚傷細微。初學晩進。不唯受用之不逮。究其名義。亦甚費工。陸子爲之解其繫縛。乃曰。只是一般言偶不同。亦甚傷卒易。要不得古人立言之旨焉耳。

胤按。南渡之後。朱子註三述六經一。以レ倡三明斯道一爲レ任。當時有二南軒東萊二子一。雖三其說稍有二出入一而師友覃討。推爲二盟主一。唯有二象山陸子一。不三肯信服一。其言之見二於二子之書一者。陽而辨レ之。陰而毀レ之。互不二相假借一。大抵朱子之學。以レ窮二物理一爲レ要。而又以二居敬一爲レ工。陸子則專以レ立二吾心一爲レ主。而不下復以二讀レ書窮一レ理爲中先務上。朱子答二項平父一書曰。子思以來教レ人之法。惟以下尊二德性一道二問學一兩事上。爲二用レ力之要一。今子靜所レ說。專是尊二德性一事。而某平日所レ論。却是道二問學上一多了。自レ此而德性問學。岐爲二二途一。後之諸儒。或祖レ朱而排レ陸。或疑レ朱而信レ陸。如二趙東山程篁墩一。則倡二早異晚同之說一。馮柯陳建力而辨レ之。千古聚訟。不レ能レ歸レ一。呂涇野曰。晦庵象山。同法二堯舜一。同師二孔孟一。雖三入レ門路徑。微有二不同一。而究二竟本源一。其致一也。何害二其爲下同哉。學者不二肯力行一。而膠二於見聞一。只資二口耳一。竟于二身心一何益。此亦調停兩可之說耳。要レ之其立レ教之旨。雖レ曰レ不レ同而專用二工于此心此理一。則未三嘗有二大異一也。

陸子曰。近來論レ學者言。擴而充レ之。須下於二四端上一逐一充上。焉有二此理一。孟子當來。只是發三出人有二是四端一。以明下人性之善。不上可二自暴自棄一。苟此心之存。則此理自明。當二惻隱一處自惻隱。當二羞惡一處自羞惡。當二辭遜一處自辭遜。是非在レ前。自能辨レ之。

胤按。朱子曰。四端在レ我。隨處發見。知三皆即レ此推廣而充二滿其本然之量一。陸子所レ云。近來論レ學者。蓋斥二朱子一而言一。陸子之學。以三先立二乎其大者一爲レ主。故非二其說一。乃曰。苟此心之存。此理自明。其旨之異同。自可レ知也。先人謂陸子之說。甚亦過レ快。而要不レ得二孟子之意一。予謂使三孟子

可二概見一矣。夫子又嘗曰。道二仁與二不仁一而已矣。夫所レ謂不仁者。將指二何事一以爲二不仁一耶。是指二貪冒無レ厭以爲二不仁一耶。抑指二殘忍刻薄一以爲二不仁一耶。夫子之言。必指二殘忍刻薄一以爲二不仁一。而不下斥二貪冒無レ厭以爲中不仁上。夫人之所レ知也。不仁者仁之反也。其既指二殘忍刻薄一以爲二不仁一。而不下斥二貪冒無レ厭以爲中不仁上。則所レ謂仁也者之以二慈愛惻隱一爲レ仁。而不下以二無欲清淨一爲上仁也。亦可二推知一矣

○論二陸子之學一。

象山陸子曰。古聖賢之言。大抵若レ合二符節一。蓋心一心也。理一理也。至當歸一精義無二。此心此理。實不レ容レ有レ二。故夫子曰。吾道一以貫レ之。孟子曰。夫道一而已矣。又曰。道二仁與二不仁一而已矣。如レ是則爲レ仁。反レ是則爲二不仁一。仁卽此心也。此理也。求則得レ之。得二此理一也。先知者。知二此理一也。先覺者。覺二此理一也。愛二其親一者。此理也。敬二其兄一者。此理也。見二孺子將レ入レ井。而有二怵惕惻隱之心一者。此理也。可レ羞之事則羞レ之。可レ惡之事則惡レ之者。此理也。是知二其爲レ是。非知二其爲レ非者。此理也。宜レ辭而辭。宜レ遜而遜者。此理也。敬此理也。義亦此理也。內此理也。外亦此理也。故曰。直方大不レ習無レ不レ利。孟子曰。所二不レ慮而知一者。其良知也。所二不レ學而能一者。其良能也。此天之所レ與レ我者我固有レ之。非レ由レ外鑠レ我也。故曰。萬物皆備二於我一矣。反レ身而誠。樂莫レ大焉。此吾之本心也。所レ謂安宅正路者此也。所レ謂廣居正位大道者。此也。（與曾宅之書）

陸子曰。近有レ議レ吾者一云。除下了先立二乎其大者一一句上。全無二伎倆一。吾聞レ之曰誠然。

其理亡故也。謝上蔡以レ覺訓レ仁者。正爲レ是耳。然唯專主二此說一。而不レ言二惻隱之心一。亦根二乎此一。則全不二與レ愛相干涉一。故朱子曰云云。其曰二心之德一者。專言之仁。而包二義禮智一在二其中一。是說二解レ覺之理一。曰二愛之理一者。偏言之仁。而唯屬二仁一事一。是說二解レ愛之理一。皆體之謂也。而惻隱之發。是爲レ用。程子所レ謂滿腔子是惻隱之心。又曰。心譬如二穀種一。生之性便是仁。皆朱子之所三祖述以立二其說一者也。譬則炎炎之光未レ著而炎炎之理。具二乎未レ燒之薪一。般般之聲未レ發。而般般之理。涵二乎未レ撞之鐘一。故怵惕惻隱之心未レ萌。而怵惕惻隱之體。存下乎未レ見二孺子一之先上。不レ忍二觳觫一之念未レ作。而不レ忍二觳觫一之理。具下乎未レ見二一牛一之前上。刀割針劄之感。亦已具二于未レ割未レ劄之先一。正謂二之仁一。以二一理一而言。則沖漠無朕之時。萬象森然已具。而所レ謂虛靈不昧。具二衆理一而應二萬事一者。亦是物也所二以求テ仁方。只在下去二其蔽障一以得中本體之明上耳。故解二顏子問レ仁章一曰。爲レ仁者必有下以勝二私欲一。而復中於禮上。則事皆天理。而本體之德。復全二於我一矣。解二仲弓問レ仁章一曰。敬以持レ己。恕以及レ物。則私意無レ所レ害。而心之德全矣。審如二其說一。則夫子言レ仁諸章。只不レ過レ衍二一句無欲主靜話一而已耳。考二古者聖賢之言一則不レ然。君二天下一而有二其道一。則天下之民蒙二其澤一。君二一國一而善二其政一。則一國之民享二其利一。長二一家一而立二其業一。則一家之人被二其恩一。對二一人一而言。則不二徒慈愛怜愍之爲テ仁。而不二敢苟且以應テ之。不二敢欺慢以遇テ之。亦謂二之仁一。故求レ之之方。曰以二不レ忍レ人之心一。行二不レ忍レ人之政一。曰以二其所テ不レ忍。及二於其所テ忍。曰强恕而行焉。曰居處恭執レ事敬。與レ人忠。曰先レ難而後レ獲。而言二其極功一。則曰天下歸レ仁。則曰仁覆二天下一。聖人言レ仁之旨。於レ是乎亦

按。近思錄如字上有二心譬二字一。可。檢二朱子所一ㇾ引云。

雖ㇾ殫二一生之精力一。固有二勢之所ㇾ不ㇾ能。而至二其縱橫出入紛紜交錯之故一。雖ㇾ以二堯舜孔子之聖一。亦有下不ㇾ能ㇾ知者上。而欲ㇾ使下凡學者以ㇾ此爲二標的一。逐逐然竄二其理一。以期中豁然上者難矣哉。此陸王二氏之所三以不二服也（按。格物之義。先儒所ㇾ說不ㇾ一。先子則謂。格物者。正ㇾ事之謂。格者。正也。於二意心身家國天下六者一。審二其本末先後一。先二其本一而後二其末一。猶下安二頓器物一。各得中其所上。故謂二之格一ㇾ物。以提二六條目一。故下十章正心以下。二項相銜爲ㇾ說。而唯誠意一項。特提二起一事一。而不ㇾ帶二格物一。可ㇾ知誠意工夫。乃大學之始敎。而非下前二乎此一別有中格物致知一段節目上也。其說詳二于定本一。）

朱子曰。仁者心之德。愛之理。孟子註

又曰。仁者愛之理。心之德。論語註

又曰。仁者。心之德。程子所ㇾ謂如二穀種一。仁則其生之性是也。

又曰。仁者無二私心一而合二天理一之謂。

胤按。仁字古者無二明訓一。中庸及孟子。曰仁者人也者。因ㇾ音取ㇾ義。非二訓詁一也。韓文公有二博愛之說一。固未二周遍一。宋諸先生。其說亦不二一端一。周子曰。德愛曰ㇾ仁。程子曰。公而以ㇾ人體ㇾ之。李延平曰。當ㇾ理而無二私心一。或以ㇾ覺訓ㇾ之。或以ㇾ公訓ㇾ之。或云雞雛可二以見一ㇾ仁。或云切ㇾ脈可二以知一ㇾ仁。至二朱子一。參二周程之說一。乃解ㇾ之曰。心之德愛之理也。後世以ㇾ此爲二仁字正訓一。而其說始定矣。蓋人之所二以知覺一者。必有下所二以知覺一之理上。故飢焉而知ㇾ飢。寒焉而知ㇾ寒。明焉而知二其爲一ㇾ晝。暗焉而知二其爲一ㇾ夜。疾痛痾痒。有ㇾ感便覺。此人之所二以生一之本也。名ㇾ之爲ㇾ仁。一息纔絕則不ㇾ然。

謂二知之至一也。大學章句

又曰。人之所二以爲一レ學。心與レ理而已矣。心雖レ主二乎一身一。而其體之虛。實足三以管二乎天下之理一。理雖レ散二在萬物一。而其用之微妙。實不レ外二乎一人之心一。初不レ可下以二內外精粗一而論上也。然或不レ知二此心之靈一而無二以存一レ之則昏昧雜擾。而無三以窮二衆理之妙一。不レ知二衆理之妙一而無二以窮一レ之。則偏狹固滯。而無三以盡二此心之全一。

又曰。格物者。必物物而格レ之耶。將止格二一物一而萬理皆通耶。曰。一物格而萬理通。雖二顏子一亦未レ至レ此。惟今日而格二一物一焉。明日又格二一物一焉。積習既多。然後脫然有二貫通處一耳。

胤按。先儒以爲唯求二之于吾心一。而不レ讀レ書窮レ理則與二佛氏直指人心不立文字者一無レ異矣。程子曰釋氏唯務二上達一。而無二下學一。又曰。佛有二一箇覺之理一。可レ言二敬以直一レ內矣。然無二義以方一レ外。胡敬齋曰。與二儒道一相似。莫レ如二禪學一。後之學者。做二存心工夫一。不レ得二其眞一。多流二於禪一。此其所下以既曰二居敬一而又曰中窮理上也。蓋佛氏直指二人心一。以求二悟明一。儒者則窮二盡物理一。以期二豁然一。而當時諸儒。或以下擺二脫文字一。直求中己心上爲レ學。則固已淫二于老佛一矣。朱子之學。有レ矯二于此一。使下學者考二之事爲一。察二之念慮一。求二之講論文學之中一。推而究レ之。以各到中乎其極上。見二於章句或問一者悉矣。格物二字。大學只存二其目一。而不レ詳二其義一。至二朱子一始分二經傳一。取二程子之意一。以補二成傳文一。後世學者。傳誦以爲二學問之極功六經之括例一。而莫二之敢違一焉。夫天下之理。不レ可二勝窮一也。天下之書。不レ可二勝讀一也。而人以二眇然之身一。立二乎蓋壤之間一。以二百年之壽一。寄二乎古今之中一。欲三畢窮而周覽以造二其極一。

而能充其性。則其所以爲說者雖異。而求之于吾心。使清明昭著。無一毫之私累。如明鏡如止水者。其爲事亦一也。大抵宋諸老先生。踐履之篤。考索之密。固非漢唐諸儒之所及。而排異端。衛聖道。爲任。使後世學者知所嚮方。自是而前。崇信異端。加諸聖敎。自是而後。是非邪正。始有所辨。其志固苦而其功亦大矣。至朱子集群儒之大成。以引接後學。其學極高明而盡精微。蠶絲牛毛。海濶天空。後世學者。未能或之先也。然斥漢儒之傅會。而未脫其窠臼。排佛老之空寂。而還襲其緒餘。此所以不得已干辨也。

朱子曰。敬之一字。聖學之所以成始而成終者也。

又曰。敬者一心之主宰。而萬事之根本也。

胤按。持敬之說。本於程子。而其用力之方。嘗以主一無適言之矣。嘗以整齊嚴肅言之矣。其高第弟子則曰常惺惺法。則曰其心收斂。不容一物。朱子據其說。括其大旨而言之如此。原諸聖賢之言。夫子語治國之要。則五事兼擧。而敬事居其一。答樊遲問仁。則三事併擧。而執事敬居其一。君子有九思。則事思敬居其一。大學擧五事稱文王之德。則爲人君止於敬居其一。蓋古者之敎人。恭敬忠恕等目。彼此互擧以爲言、敬特其一事耳。先儒之學。專重乎心故以收斂整肅。不致昏昧爲敬。而曰聖學之終始。學問之根本。此其所以異也。

朱子曰。大學始敎。必使學者卽凡天下之物。莫不因其已知之理。而益窮之。以求至乎其極。至於用力之久。而一旦豁然貫通焉。則衆物表裏精粗無不到。而吾心之全體大用無不明矣。此

經所レ謂性皆就二氣質一而言。氣質之外。別無二性之可一レ言。至二所レ謂仁義禮智一。則以爲二天下之達德一。其說已詳二于前一矣。

朱子曰。明德者。人之所レ得二乎天一。而虛靈不昧。以具二衆理一應二萬事一者也。但爲二氣稟一所レ拘。人欲所レ蔽。則有レ時而昏。然其本體之明。則有下未二嘗息一者上。故學者當下因二其所一レ發。而遂明レ之以復中其初上也。

又曰。心之全德。莫レ非二天理一。而亦不レ能レ不レ壞二於人欲一。故爲レ仁者。必有下以勝二私欲一而復中於禮上。則事皆天理。而本心之德復全二於我一矣。

又曰。性者人所下稟二於天一以生上之理也。渾然至善。未二嘗有一レ惡。人與二堯舜一。初無二少異一。但衆人汩二於私欲一而失レ之。堯舜則無二私欲之蔽一。而能充二其性一爾。

胤按。變二氣質一除二物欲一以復二性之初一。其說詳二于此一。蓋宋朝之學。自有二一箇條貫一。凡人之性天降之初具二仁義禮智信之理一。自二堯舜一至二塗人一。無二些增減一。但因二氣梏物蔽一。而昏蝕不レ露。故學者之用工。專在下變二氣質一。除二物欲一。以復中性之初上。其博論詳喩。闡二明聖賢之言一。以啓三佑後人一。雖レ非二復一端一。要三其所二歸宿一。只不レ過レ敷三衍此一段事一耳。以レ此解二聖人之旨一。於レ是乎自レ古立レ言因レ事命レ名者。盡括而歸二之一路一。則曰天。曰命。曰太極。曰道。曰德。曰明德。曰仁義禮智。曰信。曰理。曰誠。曰中。曰一。曰物。曰心。曰性。盡是一理之別稱。其名雖レ異。而其爲レ物一也。釋レ明二明德一。則曰盡二夫天理之極一。而無二一毫人欲之私一。求レ仁則曰。無二私欲一而心之德全。擴而充レ之。則曰無二私欲一

各得宜。不相妨害。故於時爲秋。於人則爲義。而得其分之和。貞者生物之成。實理具備隨在各足。故於時爲冬。於人則爲智。而爲衆事之幹。幹木之身而枝葉所依以立者也。易本義

胤按。以元亨利貞。配仁義禮智。其說始詳于此矣。大抵元亨利貞。彖文言已來。諸家之說亦不同。唐孔氏及程子。直依文言。以貞爲貞。疏中一說。以貞爲信。已悉于上文矣。至朱子。牢以四者分配五行。遂以貞爲智。於是乎元亨利貞之理爲仁義禮智之性。殆天造地設。不可移動。薛文清曰。在天爲元亨利貞。在人爲仁義禮智。太極不外於此也。又曰。大道之要。不過元亨利貞之命。仁義禮智之性而已。是也。後世學者。幼學童習。耳染目擩。直以爲義文周孔之時。其說已然。而無意復容疑於其間。夫貞之與信。其事近似。猶可通用也。至智則其義夐別。殆難轉換。且曰貞固者知正之所在而固守之。所謂知而不去者也。故足以爲事之幹。蓋據孟子所謂智之實知斯二者弗去之語。貞與固是兩事。知與不去亦是兩事。故取以相證。疏家乃至旁引曲證。取龜蛇之象。兩腎之名。則殆乎鑿矣。通而考之。以五行配五常。始于班固鄭康成。而以元亨利貞。配仁義禮智。則見于唐孔氏。而成于朱子。其所由來者漸矣。

朱子曰。蓋自天降生民。則莫不與之以仁義禮智之性矣。然其氣質之稟。或不能齊。

又曰。性相近。是氣質之性。若本然之性。則一般無相近。

胤按。此因周張程子之旨。益詳其說。其意謂凡爲人者。同具仁義禮智之理。是謂本然之性。而其清濁昏明。稟得不齊者。是謂氣質之性。於是乎本然氣質之名立矣。而考諸古昔。則語孟五

紕繆殊甚。

○論朱子之學

朱子曰。天以陰陽五行化生萬物。氣以成形。而理亦賦焉。猶命令也。於是人物之生。因各得其所賦之理。以爲健順五常之德。所謂性也。（中庸章句）

胤按。至是始以健順加五常言性矣。眞西山曰。自昔言性者曰五常而已。朱子乃益之以健順。蓋漢氏以來。五常既配五行。故加健順二字。以象五行之本陰陽也。易乾象曰。天行健。坤彖曰。乃順承天。說卦曰。乾健也。坤順也。其取此乎。然在天而言。則陰陽五行皆屬氣。而在人則健順五常。皆爲本然之理。其說不免無疑矣。

朱子曰。人稟五行之秀以生。故其爲心也。未發則具仁義禮智信之性。以爲之體。已發則有惻隱羞惡恭敬是非誠實之情。以爲之用。蓋木神曰仁。則愛之理也。而其發爲惻隱。火神曰禮。則敬之理也。而其發爲恭敬。金神曰義。則宜之理也。而其發爲羞惡。水神曰智。則別之理也。而其發爲是非。土神曰信。則實有之理也。而其發爲忠信。是皆天理之固然。人心之所以爲妙也。（論語或問）

胤按。五行配性躰用之說。詳于此焉。本鄭氏之說。而智水信土。則依班固云。

朱子曰。元亨利貞。天道之常。仁義禮智。人性之綱。（小學題辭）

又曰。元者生物之始。天地之德。莫先於此。故於時爲春。於人則爲仁。而衆善之長也。亨者生物之通。物至於此。莫不嘉美。故於時爲夏。於人則爲禮。而衆美之會也。利者生物之遂。物

就テ下也。程子意蓋謂。人生而之靜。天之性也。此時著二善惡字一不レ得。纔涉二善惡一。則非二性之至者一也。孟子之言。亦尋常之見。而非二至論一也。必。如二樂記之言一。而後爲レ得然至。其曰三性即理也。理無二不善一。則取二孟子之說一。而就二理上一認レ善焉。程子之言。豈亦早晩之異レ趣耶。延平則曰云云。蓋祖二程說一而發二揮之一者也。至二朱子一則云。渾然至善。未二嘗有テ惡。則亦依二程李說一而明レ之。夫孝弟忠信世之所レ謂善也。未レ有二孝弟忠信一之先。將認二何物一以爲レ善哉。孟子言二性善一。以三人皆有二不レ忍レ人之心一也。以三人必有レ四二端於我一也。以二良知良能。與レ生俱有一也。皆世之所レ謂善也。非下外レ此而求中之于未レ有二善惡一之先上也。

李子曰。當レ理而無二私心一仁也。

胤按。此依二程子說一爲レ解。蓋言人之爲レ事。或雖レ當レ理而內有二私心一。或雖レ無二私心一而外不レ當レ理。皆非レ仁也。必也當レ理且無二私心一。而後可二以爲テ仁矣。子文文子之不レ得レ爲レ仁。朱子據レ此以爲レ說曰。其心果見二義理之當然。而能脫然無二所レ累乎。抑不レ得レ已二於利害之私一。而猶未レ免二於怨悔一也。先儒解レ仁爲二無欲之謂一。則與二所レ謂淸云者一。無二甚差異一。故其爲レ說如レ此。然如二其說一。則二子之爲レ人。不二唯不テ得レ爲レ仁。亦且不レ得レ爲二忠淸一。夫子之言。無二乃過許一乎。蓋二子之行。雖下能不レ私二其身一。潔レ己去テ亂。然非二慈愛之心及レ物。無レ所レ不レ至者一也。故夫子特許二其忠淸一。而不レ許二其仁一。是知聖人之所レ謂仁者。皆就レ愛爲レ言。而不レ可下以三當レ理無二私心一解テ之也。以三當レ理無二私心一言レ仁。則全不二與レ愛相干涉一。與下夫子所レ謂愛レ人。孟子所レ謂以二其所テ不レ忍達二其所テ忍仁也等語上。

至生之理謂之仁。則專指未發之躰。

程子曰。元亨利貞乾之四德。在人則元者衆善之首也。亨者嘉美之會也。利者和合於義也。貞者幹事之用也。易傳。

胤按。程子解四德。直依文言。以天道配之人事爲說。未嘗言人稟元亨利貞之命。以爲仁義禮智之性也。

程子曰。四德之元。猶五常之仁。偏言則一事。專言則包四者。

胤按。仁有偏言專言之別。始于此矣。蓋偏言則爲惻隱一事。猶元之爲元也。專言則包羞惡辭讓是非三者。皆在其中。猶元之統亨利貞三德也。朱子因此解仁。有心德愛理之說。然程子之言。亦依文言。唯就一事比況爲說。未嘗以元亨利貞四者。分配仁義禮智。已見于上矣。

延平李子曰。動靜眞僞善惡皆對而言之也。是世之所謂動靜眞僞善惡。非性之所謂動靜眞僞善惡也。惟求靜於未始有動之先。而性之靜可見矣。求眞於未始有僞之先。而性之眞可見矣。求善於未始有惡之先。而性之善可見矣。延平答問。

胤按。荀揚韓之不服孟子者。猶就氣認性。而疑乎其不可以爲善。宋諸老之祖孟子。則就理看性。而却乖孟子之旨。其間亦有不同。周子以剛柔善惡中五者爲性。而誠無爲爲聖人之本。則性善之說。恐非其所取也。程子則云。人生而靜以上。不容說。才說性時。便已是不性。凡人說性。只是說繼之者善也。孟子說性善是也。夫所謂繼之者善也者。猶水流而

曰。學者工夫。惟在居敬窮理。此二事互相發。能窮理則居敬工夫日益進。能居敬則窮理工夫日益進。

胤按。朱子之學。以居敬窮理爲宗旨。其源出於程子焉。薛文清曰。程子挈敬之一辭。示萬世爲學之要。蓋持敬以收斂己心。窮理以講究物理。大要不過此二端。以爲學者用工之則。稽諸六經之間。聖人固言居敬也。然曰執事敬。曰居敬而行簡。皆就接人執事上爲說。而未嘗以收斂此心爲言也。亦固言窮理也。然曰博學於文。曰多識前言往行。其要急知先務。而未嘗以窮萬物之理爲事也。須就聖賢之言。驗其異同焉。

程子曰。仁者天下之公。善之本也。易傳。

又曰。仁者天下之正理。失正理則無序而不和。

又曰。萬物之生意。最可觀。此元者善之長也。斯所謂仁也。

問仁與心何異。程子曰。心譬如穀種。生之性便是仁。陽氣發處乃情也。

又曰。義訓宜。禮訓別。智訓知。仁當何訓。說者謂訓覺訓人。皆非也。當合孔孟言仁處。大槩研窮之。二三歲得之未晚也。

又曰。仁之道。要之只消道一公字。公只是仁之理。不將公便喚做仁。公而以人體之。故爲仁。

胤按。程子言仁。其說不復一端。或曰。天下之正理。或曰生意。或曰公而以人體之。其意蓋以仁爲理之名。而亦不全以爲性之名也。其曰公者。物我無間之理。固近偏愛博濟之意。然

胤按。道躰之說。始見ニ於此一、蓋聖人之道。不レ過ニ人倫日用之間一、而於ニ其上面一、更無ニ一語一、故曰、堯舜之道。孝弟而已矣。又曰。道在レ邇而求ニ諸遠一、事在レ易而求ニ諸難一、人人親ニ其親一、長ニ其長一、而天下平。夫子在ニ川上一、曰逝者如レ斯夫。不レ舍ニ晝夜一、亦欲ニ夫人之躰レ此。進而不下已也。猶下易之大象。躰ニ天行之健一、以自强不レ息。躰ニ地勢之坤一、以厚德載上物。其事明白的實。復何容レ疑。及下孟子述ニ其事一告中之徐辟上、則曰原泉混混。不レ舍ニ晝夜一、盈レ科而後進。放ニ乎四海一、有レ本者如レ是。是之取爾。苟子亦敷ヨ衍其說一、取レ象多端。其言雖レ異。亦足ニ以相發明一、而程子乃曰。自レ漢已來。儒者皆不レ識ニ此義一、朱子曰。除ヨ了孔孟一、猶是佛老見ヨ得些ニ形象一、譬如レ畫レ人一般。佛老書ヨ得此模樣一、後來儒者。於レ此全無ニ相著一、鄒氏曰。孔子之稱レ水。其旨微矣。孟子獨取レ此者。自ニ徐子之所レ急者一而言レ之也。朱子曰。川上之嘆。恐是夫子本語。孟荀之言。或是傳聞之訛。此不ニ亦可レ疑之甚一乎。蓋彼佛老二氏之爲レ道。棲ニ心乎虛無沖澹之域一、而外ニ其倫理綱常一而不レ修。妄ヨ意乎萬象之昭布森列者一、必レ有下司契而默ニ成之一者上、於レ是乎乃曰。有レ物混成。先ニ天地一生。乃曰理無レ所レ存。偏ヨ在於事一。此理體之所ヨ以由立一也。漢唐諸儒。雖ニ見レ道未下的。而猶就ニ行事一爲レ說。未レ至レ推下其所ヨ以然一之故上、宋朝儒先。考索之甚苦。體驗之甚密。意ヨ想乎天地萬物之故一、必レ有下所ミ以主ニ宰之一者上、名レ之曰ニ道體一、乃曰下夫子川上之嘆。蓋假ニ一物一以明中此理之流行不上已也。則有レ疑ニ乎孟子之言一、非ニ極至之論一。故曰傳聞之訛。又曰有レ爲之言。皆坐レ是故耳。

程子曰。涵養須レ用レ敬。進學則在ニ致知一、朱子曰。主敬以主ニ其本一、窮理以進ニ其知一、二者不レ可ニ偏廢一、又

程子曰。至微者理也。至著者象也。體用一ㇾ源。顯微無ㇾ間。易傳序

又曰。心一也。有二指ㇾ體而言者一。寂然不動是也。有二指ㇾ用而言者一。感遂通二天下之故一也。惟觀二其所ㇾ見如何一耳。

胤按。體用之說。始見二於此一矣。三代之書。無ㇾ所二經見一。其源蓋出二於佛氏一。今考二其說一。耳目口鼻。人之體也。視聽言動。人之用也。驗二諸萬物一。莫ㇾ不二皆然一。以ㇾ此爲言。雖三古無二其稱一。亦豈不可。而後之所ㇾ謂體者。則異焉。不下以二耳目口鼻一爲ㇾ體。而指下其所三以視聽言動一者上以爲ㇾ體。推二之天地萬物一亦無ㇾ不ㇾ然。然考二古聖賢之書一。其言ㇾ天也。以二主宰一而言。則曰二福ㇾ善禍ㇾ淫而已耳。以二流行一而言。則曰二一陰一陽一而已耳。皆用也。未三嘗及二其體一。其言ㇾ人也。以二行事一而言。則曰二出則孝入則弟一而已耳。以ㇾ心而言。則曰二人皆有ㇾ所ㇾ不ㇾ忍。人皆有ㇾ所ㇾ不ㇾ爲而已耳。皆用也。亦未ㇾ嘗及二其體一。較二諸後世之學一。無下乃言二其粗一而遺二其精一。詳二其末一而略中其本上乎。且聖人言ㇾ仁則爲ㇾ仁。言ㇾ性則爲ㇾ性。言ㇾ命則爲ㇾ命。其事各有ㇾ所ㇾ專。而不ㇾ可二通用一。今以ㇾ體而言。則仁性命理。只是一箇物。仁亦可二以爲一理。理亦可二以爲一命。聖人言ㇾ仁則一箇仁。言ㇾ性則一箇性。言ㇾ命則一箇命。各是一事。不ㇾ可二分析一。今立二體用之說一。則仁有二體用之別一。性有二理氣之辨一。道也。命也。亦莫ㇾ不ㇾ然。此後世之學。所三以與ㇾ古異一也。

程子曰。此道體也。天運而不ㇾ已。日往則月來。寒往則暑來。水流而不ㇾ息。物生而不ㇾ窮。皆與ㇾ道爲ㇾ體。運二乎晝夜一。未三嘗已一也。是以君子法ㇾ之。自强不ㇾ息。及二其至一也。純亦不ㇾ已焉。

胤按。性謂本然之性。氣謂氣質之性。蓋謂論性而不論氣。則無以見其生質之不同。論氣而不論性。則無以見本然之一理。必也二者相須。性説始全。此後世儒家之所奉以爲準則者也。然如其説。則古今言性者。唯程張二氏爲獨備。而孔孟之言竟不免乎不明不備之失。夫生禀謂之性。人之恒言也。聖賢之言性。亦就此爲敎耳。後世之學。外此而別言本然之性。遂致一性而有二端。其可無辨乎。

程子曰。四端不言信者。既有誠心爲四端。則信在其中矣。

朱子曰。四端之信。猶五行之土。無定位。無成名。無專氣。而水火金木。無不得是以生者。故土於四行無不在。於四時則寄生焉。其理亦猶是也。

又曰。五者之中。所謂信者。是箇眞實無妄的道理。如仁義禮智。皆眞實而無妄者。(玉山講義)

又曰。蓋人之性。皆出於天。而天之氣化。必以五行爲用。故仁義禮智信之性。即水火木金土之理也。木仁金義火禮水智各有所主。獨土無位而爲四行之實。故信亦無位而爲四德之實也。仁義禮智。固具於性。而其體渾然莫得而見。至於感物而動。然後見其惻隱羞惡辭遜是非之用。而仁義禮智之端。於此形焉。乃所謂情。而程子以謂陽氣發處者。此也。(答方賓王書)

胤按。五常之目。雖本乎漢儒。而以信爲實理。則自程朱而始矣。蓋言非仁義禮智之外。別有信也。就仁義禮智而指其實理而言耳。然考經傳之間。所謂信云者。皆忠信約信之謂。而一無以實理言者。周子之時。尙以約信而言。亦未言理也。

能出于其圈套。可不知所由來乎。

程子曰。性即理也。理則堯舜至於塗人一也。才禀於氣。氣有清濁。禀其清者為賢。禀其濁者為愚。學而知之。則氣無清濁。皆可至於善。而復性之本。湯武身之。是也。孔子所言下愚不移者自暴自棄之人也

又曰。性即理也。天下之理。原其所自。未有不善。喜怒哀樂未發。何嘗不善。發而中節。則無往而不善。故凡言善惡。皆先善而後惡。言吉凶。皆先吉而後凶。言是非。皆先是而後非。

又曰。在天為命。在物為理。在人為性。主於身為心。其實一也。

胤按。以性為理。始見於此矣。聖賢之書。及漢唐諸儒所云性者。皆以氣禀而言。乃世之所謂性也。外此別無所謂性者。至宋則謂此世之所謂性。而非眞性也。所謂眞性者即理也。故程子謂性即理也。朱子曰。自孔子後。惟伊川說得盡。攧撲不破。薛文清曰。性即理也。千萬世論性之根基。朱子所以明程子之言也。蓋宋氏之學。主一理字。原夫天之所以為天。地之所以為地。萬物之所以為萬物者。其必有所以然之故。名之以為理。則既不墮方所。復不涉形體。冲漠無眹。而萬象森然已具。遂以說人之性。曰即理也。於是乎仁義禮智之理。寂然不動。存於性之未發。而不可復見矣。學者當按聖賢言性之旨。而辨其得失異同焉。

程子曰。論性不論氣不備。論氣不論性不明。二之則不是。

朱子曰。論性不論氣。孟子言性善是也。論氣不論性。荀子言性惡。楊子善惡混是也。

安排僞飾一者上而言。蓋人之實心也。故曰存レ心養レ性。曰盡レ心知レ性。而情則不三必用二工夫一。文字之異同。自可二辨知一。然則心統二性情一者。殆亦非二古之義一矣。

程子曰。學者當下以二論語孟子一爲上レ本。論語孟子既治。則六經可二不レ治而明一矣。

又曰。學者先讀二論語孟子一。如二尺度權衡一相似。以レ此去三度二量事物一。自然見二得短長輕重一。

又曰。讀二論語孟子一而不レ知レ道。所レ謂雖レ多亦奚以爲。

胤按。詩書之尊久矣。漢以來學者唯知レ崇二孝經易春秋一。而未レ重二論語一。奏疏議論之間。時稍引用。而未レ知三其爲二六經之權衡一。學問之蘊奧。唐詩云。小兒學問止二論語一。則其待レ之也亦藐矣。至二孟子一。則不二徒不一レ知レ尊レ之。或非レ之。或刺レ之。或疑レ之。或詆レ之。辯駁詰難不二一而足一。始而揚子雲尊レ之。後而韓文公知レ之。至二程子一則益崇信而表二章之一。以配二論語一。其見卓而其功大。固非二前儒之所一レ及也。而謂下古人爲レ學之次第。在二大學一而論孟次上レ之者何哉。

程子曰。天地儲レ精。得二五行之秀一者爲レ人。其本也眞而靜。其未レ發也。五性具焉。曰仁義禮智信焉。顏子所好何學論。

胤按。此說本二樂記禮運之說一。而兼取二之師說一。其以二仁義禮智信一。爲二未發之性一。則實始二乎此一矣。於レ是乎五者之於レ人。不下徒性具之目不上レ可二變移出入一。而其理之存二於未發之先一。猶下求二鐘聲於未レ撞之先一。尋中燧火於未レ鑽之初上。不レ可二得而聞視一。寂然不動。不レ復レ容レ著レ力。只於二其已發處一。約二其情一以使レ不レ至レ鑿レ情耳。自レ是而後。儒者之言レ道。雖レ不二復一端一。而大旨所レ在。同レ條共レ貫。竟不

其旨固不レ同。而於二孟子所レ謂形色天性也者一。爲レ近焉。然岐レ性以二レ之。而又曰二善反一レ之。則亦出二于復初之旨一。而與二擴充存養之方一異矣〇又按。黃老之敎。盛行二于漢一。佛氏之說。自二南北朝一而還。降及二唐宋一。浸淫滋蔓。洋二洋寰區一。雖レ經二韓歐之觝排一。而莫二之能遏一。世之名臣鉅儒。如二唐之裴休白居易柳宗元。宋之富弼趙抃張商英王安石蘇軾黃庭堅一。先後輩出。依信殊甚。及二濂洛關陝之說興一。世之誦二法孔子一者。一望彌然。皆能言三佛老之不レ可二以爲一レ道。先儒之功於レ是爲レ大。然其於二輪廻報應之說一則斥レ之。於二緇衣斷髮之俗一則鄙レ之。於下棄二君臣一絕二父子一廢中夫婦之道上則距レ之。而於二理地實際一。則曰二聖人之道亦有一レ之。而辨二其有無寂感之別一者何哉。豈嫌二於日用彝倫之無一レ所レ本。而必討下其所二以然一之故上以求レ勝レ之耶。孰知聖人之道。專在二躬行踐履之實一。而除レ是之外。無三復有二玄妙之可一レ言。但張子以二太虛一爲二道之本一。則其理不レ墮二于空寂一。亦與二濂洛之旨一有レ不レ同焉。

張子曰。心統二性情一者也。

胤按。張子此語。朱子之書。常稱二述之一。後世學者所三遵守以爲二正訓一者也。朱子解二其義一云。統是主宰。性者心之理。情者心之用。心者爲二性情之主一。又曰。心猶レ將也。性猶二在レ營之軍一。情猶二臨レ陣之軍一。皆將實統レ之。則心爲二性情之主一可レ見矣。蓋未發之體爲レ性。已發之用爲レ情。而心則通二未發已發一而言。故曰心統二性情一。今察二張子言レ性諸語一。則曰合二虛與一レ氣有二性之名一。又曰。天地之帥吾其性。此本出二孟子所レ云志者氣之帥也一。然則張子所レ謂性者。謂下人稟二天地之氣一以生者上。而不二就レ理說一也可レ知矣。大抵心者思慮運用之主。性者稟受之名。情者則就二心之運用一。指下其不レ涉二乎

韶按周子說誠。此條不引二說誠章一。不レ知二先意如何一也。

レ教。扶レ陽而抑レ陰。進二君子一而退二小人一。故於二復之一陽始生一。曰其見二天地之心一乎。而程子斥下王弼以レ靜見二天地之心一之說上。曰非レ知レ道者。孰能識レ之。則固得二易之本旨一者。而與二周子之意一。有レ不レ同矣。大抵周程張朱。雖三同爲二伊洛之淵源一。而其所レ立說各自不レ同。後世學者。回互調停。不三肯置二異同於其間一。而謂三代已來。相傳只是如レ此。則亦考究之未レ至焉耳。

張子曰。由二太虛一有二天之名一。由二氣化一有二道之名一。合二虛與一レ氣有二性之名一。合三性與二知覺一有二心之名一。正蒙

又曰。形而後有二氣質之性一。反レ之則天地之性存焉。故氣質之性。君子有レ弗レ性者焉。同上

又曰。氣坱ニ然太虛一。升降飛揚。未三嘗止息一。易所レ謂絪縕。莊生所レ謂物以レ息相二吹野馬一者歟。同上

胤按。於レ是氣質之名始立。而性岐而爲レ二。曰天地之性。曰氣質之性。朱子祖レ之。以立二本然氣質之名一。其言曰。天地之性。專指レ理而言。氣質之性。則以レ理雜レ氣而言。而又以二太虛一爲二太極一。此非二張子之意一矣。大抵周程張邵。其見レ道各自不レ同。周子主二太極一。程子主レ理。邵子主レ數。而張子之所レ道。則以二太虛一爲二萬化之本一。蓋指下一氣之渾淪磅礴。綱二紀天地一。羅二絡陰陽一者上。乃萬物之所二資以生一之本也。故曰由二太虛一有二天之名一。又曰氣坱ニ然太虛一。升降飛揚。未三嘗止息一。又曰。氣之聚二散於太虛一。猶三氷凝二釋於水一。其意自可レ見矣。故知所レ謂天地之性者。乃指二其資始乾元者一爲レ言。非三指レ理而言二也。西銘曰乾稱レ父。坤稱レ母。予茲藐焉。乃混然中處。故天地之塞吾其體。天地之帥吾其性。亦言得下其充二塞兩間一者上。以爲二吾形體一。得二其志一以爲二吾性一也。與二程子所レ謂性卽理也一。

陽一。爲ニ人之標準一。故末引レ易曰。立ニ天之道一。曰陰與レ陽。立ニ地之道一。曰柔與レ剛。立ニ人之道一。曰仁與レ義。其意自可ニ考知一也。

周子曰。聖人定レ之以ニ中正仁義一。而主レ靜。無欲故靜立ニ人極一。

亂按。於レ是乎始言ニ中正仁義一矣。始言ニ無欲主靜一矣。蓋人之生質。剛柔善惡。所レ稟不レ同。故聖人定レ之以ニ仁義中正一者也。何者仁義之德雖レ尊。而苟失ニ其中正一。則爲ニ煦煦之仁一。爲ニ孑孑之義一。故不ニ但言ニ仁義一。而必曰ニ中正仁義一。又恐人之認以爲ニ四件一。自註曰仁義中正而已矣。通書又曰。聖人之道。仁義中正而已矣。其旨不ニ亦晰一乎。周子之學祖レ易。易道尙ニ中正一。而大傳又以ニ仁義一爲ニ人之道一。則圖說所レ言。固有レ所ニ由本一矣。而圖解以ニ中正一做ニ禮智一。而先ニ之仁義一。則可レ疑也。從ニ孟子一以來。恒稱ニ仁義禮智一。未レ有下以ニ禮智一先ニ仁義一者上。而以レ中爲レ禮。以レ正爲レ智。亦未ニ前聞一。圖解蓋以ニ五常一爲ニ五性一。配ニ之五行一。故爲レ解如レ此。要非ニ周子之本意一矣。至下其以ニ無欲主靜一爲中人極上。則周子之旨。亦與ニ聖人之道一不レ同矣。何也。人之有レ欲也。與レ生俱生。縱而莫ニ之節一。則淫蕩不レ法。固無レ分ニ人道於禽獸一。故有ニ禮義之爲ニ之隄防一。而後人有ニ以立一。然欲下一念不レ動。一塵不レ染。如ニ槁木一。如中死灰上。亦非ニ夫人之所ニ能爲一也。假令有レ之。亦不レ過ニ徒爲ニ一箇恬靜廉介之人一焉耳。豈能得レ致下與ニ天地一合ニ其德一。日月合ニ其明一。四時合ニ其序一。鬼神合ニ其吉凶一之盛上哉。故夫子存ニ三戒一。孟子訓ニ寡欲一。而未下甞有中以ニ無欲一爲レ敎者上也。平居以ニ道德仁義一勸ニ誘人一。其功爲レ多。而今以ニ無欲主靜一。爲ニ用工之極一。則本下老子所レ云常無レ欲以觀ニ其妙一之說上。而亦且與ニ易之旨一異矣。易之爲

古今學變卷之下

伊藤長胤　著

〇論二宋周程張李之學一

周子曰。無極而太極。又曰。五行一陰陽也。陰陽一太極也。太極無極也。（太極圖說）

胤按。儒家之言二無極一。始二於此一矣。周子之意。蓋推二五行一而一二之陰陽一。推二陰陽一而一二之太極一。推二太極一而本二之無極一。太極者元氣也。動者爲レ陽。靜者爲レ陰。無極者理也。所三以動而陽。靜而陰一之故也。自レ理而爲レ氣。故曰。無極而太極。又曰。太極本無極也。宋史舊傳作下自二無極一而爲中太極上。其意自可レ見矣。今審二其言一。太極之名。見二於易系辭一。曰。易有二太極一。是生二兩儀一。即漢志所レ謂太極元氣。函レ三爲レ一者。而言二一元氣分爲二陰陽一也。無極之言。不レ見二於六經一。始出二於老子書一。曰。常德不レ忒。復二於無極一。說者謂。無極者無レ物也。即其所レ謂有生二於無一之始也。周子以二太極一名レ篇。冠レ之以二無極一。蓋其所二獨創一。自レ是而無極太極之說。爲二儒學之蘊奧一。圖解以二太極一爲二即無極一。則亦理之謂也。殆非二周子之意一。

周子曰。五性感動。而善惡分。萬事出矣。

胤按周子所レ謂五性者。指二剛柔善惡中五者一。就二氣質一爲レ說。通書中詳列二其目一。且觀三其曰二五性感動。善惡分。萬事出一可レ見矣。圖解則以二中正仁義一配二五行一。而謂二之五性一。然周子以二仁義一配二陰

於極一也。復二其性一者。賢人循レ之而不レ已者。不レ已則能歸二其源一矣。

亂按。儒者之言二復性一。自レ是而始矣。書有二三篇一。今擧二其大畧一。蓋老莊之學。專貴二心性一。惡下其爲二聲色一所二誘惑一以失中其本眞上。故以レ反レ性爲二極功一。莊子曰。繕二性於俗學一。以求レ復二其初一。謂二之蔽蒙之民一。又曰。民始惑亂。無下以反二其性情一。而復中其初上。淮南子曰。聖人之學也。欲下以反二性於初一。而游中心於虛上也。達人之學也。欲下以通二性於遼廓一。而覺中於寂漠上也。又曰。聖人體レ道反レ性。不レ化以待レ化。則幾二於免一矣。是也。翺學二於韓文公一。時稱二韓李一。然兼倘二禪理一。參二藥山惟儼一有レ契。用二其語一以作レ偈。所レ謂吾來問レ法無二餘說一。月在二青天一水在レ瓶。豈所レ謂倍二師說一而淫二老佛一者乎。書之所レ述。其旨蓋有レ所二由來一焉。以レ此語二聖人之道一。吾知二其天淵一矣。宋朝儒先雖レ斥二翺之言一。出二於禪理一。然平生敎レ人手段。一曰復性。二曰復初。以爲二學問之極功一。作レ聖之手段一者何哉。考二諸聖賢之書一。則曰養性。曰盡性。曰苟得二其養一無二物不下レ長。曰如二火始燃一。如二泉始達一。而未下嘗有中以レ復二性之初一爲レ言者上也。大抵聖賢之敎レ人。修爲之方。充養盛大。期二於進下レ德。猶下培二萌蘖之生一。而成二大木一。導二濫觴之流一。而爲中巨浸上。始二乎爲下レ士。終三乎爲二聖人一。皆是事也。佛老之倡レ宗豎レ義。屛二除塵累一。求二其淸淨一。猶下刷二垢膩一。而得二鏡之明一。汰二泥沙一而覓中水之澄上。其所レ爲レ道者旣不二相同一。故其著二於言一者。亦如レ是之異。何可下依二違調三停於其間一。强爲中分硫上也哉。

古今學變卷之中畢

有レ三。而其所二以爲一レ情者七。曰。何也。曰。性之品有二上中下三一。上焉者善焉而已矣。中焉者可二導而上下一也。下焉者惡焉而已矣。其所二以爲一レ性者五。曰仁。曰禮。曰信。曰義。曰智。上焉者之於レ五也。主二於一一而行二於四一。中焉者之於レ五也。一不二少有一焉則少反焉其於レ四也混。下焉者之於レ五也。反二於一一而悖二於四一。性之於レ情視二其品一。情之品有二上中下三一。其所二以爲一レ情者七。曰喜。曰怒。曰哀。曰懼。曰愛。曰惡。曰欲。上焉者之於レ七也。動而處二其中一。中焉者之於レ七也。有レ所レ甚。有レ所レ亡。然而求レ合二其中一者也。下焉者之於レ七也。亡與レ甚。直情而行者也。情之於レ性視二其品一。

胤按。古今言レ性者。孟子說レ善。荀子說レ惡。楊子說二善惡混一。韓子按二三家之旨一而剖二析之一。列爲二三品一。即公都子所レ擧。有二性善一有二性不善一之說。而較二諸荀揚之說一。則於二夫子之旨一爲二庶幾一焉。然就二各人上一見レ性。則善惡之相懸。豈止三品而已哉。其參差不レ等。固至二倍蓰而無一レ算。通二天下一而見レ之。則凡頭圓趾方。立二天地之間一者。皆無レ不レ可二以爲一レ善。卒不レ如三孟子所レ謂性善者之得二其本一也。然曰二性之品有一レ三。而又曰下其所二以爲一レ性者五上。而以二仁義禮智信一實レ之。則與二宋儒之說一異矣。且就二氣質一爲レ說。而未レ及レ理焉。其言曰。今之言レ性者。雜二佛老一而言也。雜二佛老一而言者。奚言而不レ異。蓋因三當時已有二說レ性過高者一云爾。

李翺復性書曰。人之所三以爲二聖人一者。性也。人之所三以惑二其性一者。情也。喜怒哀懼愛惡欲七者。皆情之所レ爲也。情既昏。性斯匿矣。非二性之過一也。七者循環而交來。故不レ能レ克也。

又曰。誠者聖人性レ之也。寂然不動。廣大清明。照二乎天地一感而遂通二天下之故一。行止語默。無レ不レ處二

韓子原道曰。博愛之謂レ仁。行而宜レ之之謂レ義。由レ是而之焉之謂レ道。足二乎己一無レ待二於外一之謂レ德。仁與レ義爲二定名一。道與レ德爲二虛位一。故道有二君子小人一。而德有レ吉有レ凶。

胤按。古者必稱二道德仁義一。而韓子以二仁義一先二道德一。先儒譏レ之固當。審二韓子之意一。以下佛老莊氏亦自道二其道一。德中其德上。故以二仁義一爲二定名一。道德爲二虛位一。而叙二言仁義道德一耳。不レ知人之所レ行。仁與二不仁一。雖下俱可上謂二之道一。而專謂二之道一。則唯仁可二以爲一レ道。而不仁不レ可二以爲一レ道。德亦然。故夫子曰。志二於道一。據二於德一。依二於仁一。蓋道德之爲レ名。所三以統二攝仁義一。而包二百行一在二其中一。至下於謂二之仁一謂中之義上。則各就二其事一。分而名レ之耳。然著二原道一而首提二此四者一爲レ說。則亦孟子之意也。至二於博愛謂レ仁之云一。先儒亦譏二其言レ用而不一レ及レ體。然古者仁無二體用之說一。聖賢所レ云仁。皆就二事實一爲レ言。則其說固不レ可二深非一也。但據二其說一。則慈愛恰懇。可レ謂二之仁一。而剛毅木訥。不レ可レ謂二之近一レ仁。殘忍刻薄。可レ謂二之不仁一。而巧言令色。不レ可レ謂二之鮮矣仁一。與二古者之言一レ仁。周遍無レ所レ不レ包者。爲レ不レ同焉耳〇又按。佛氏之入二中國一。在二後漢明帝之世一。三國之時。其說尚未二滋蔓一。逮レ晉稍行。南北隋唐之世。張皇殊甚。其徒之傑然。爲レ衆稱道者。迹相接也。王公卿士蒲伏納レ拜。文人鉅儒。亦從緣飾。如二范縝傅奕一。雖三或有二非レ之者一。而其說不レ詳。方二唐中葉一。獨昌黎氏倡二聖人之道一。以距二異端一。儒者之闢レ佛。於レ是乎始矣。障レ川廻レ瀾。旁搜而遠紹。摧陷廓清之功。豈止復二古文一而已哉。

原性曰。性也者與レ生俱生也。情也者接二於物一而生也。性之品有レ三。而其所二以爲一レ性者五。情之品

於世一。兩漢諸儒。信レ之最篤。多取二其說一。以解二六經一。五行生成之說。豈得レ無レ取二於此一乎。

○論二隋唐諸儒之學一

文中子薛收問レ仁。子曰。五常之始也。問レ性。子曰。五常之本也。問レ道。子曰。五常一也。賈瓊曰。子於レ道有レ不レ盡矣乎。子曰。通二於三才五常一有二不レ盡者一。神明殛也。或力不レ足者斯止矣。

胤按。王通字仲淹。門人諡曰二文中子一。著二中說三卷一。此其所レ載。終二乎隋世一。唐初名臣。如二房杜魏溫一。多出二其門一。蓋自レ漢至レ唐。殆向二千年一。其間稱二純儒一者。後世必稱二董楊王韓一。以三其以レ道自任。非二訓詁詞章之儒一也。今審二其言一。以二仁義禮智信一爲二五常一。則襲二漢儒之說一。而亦不二以爲一レ性。故曰性五常之本也。其說近二乎董仲舒一云。

易文言曰。元者善之長也。云云。唐孔穎達正義云。莊氏之意。以此四句明二天之德一也。而配二四時一。元是物始。於レ時配レ春。春爲二發生一。故下云體レ仁。仁則春也。亨是通二暢萬物一。於レ時配レ夏。故下云合レ禮。禮則夏也。利爲二和義一。於レ時配レ秋。秋既物成。各合二其宜一。貞爲二事幹一。於レ時配レ冬。冬既收藏。事皆幹了也。於二五行之氣一。唯少レ土也。土則分王二四季一。四氣之行。非レ土不レ載。故不レ言也。又曰。施二於五事一言レ之。元則仁也。亨則禮也。利則義也。貞則信也。不レ論レ智者。行二此四事一。並須レ資二於知一。且乾鑿度云。水土二行。兼二信與一レ知也。故略而不レ言也。

胤按。以二元亨利貞一。配二四時五行一。鄭康成王輔嗣。並無二其說一。至二唐孔氏一。據二莊氏之意一。配二之四時一。則其說亦甚晩矣。一說又配二五常一。以レ貞爲レ信而兼レ智。則本二鄭氏中庸解一而稍異矣。

以土爲信。蓋鄭氏以水爲信。土爲智。與班固之說爲互相異。亦依毛公京房之舊耳。而程朱說。則專從班固云。

漢書律歷志曰。天以一生水。地以二生火。天以三生木。地以四生金。天以五生土。五勝相乘以生小周。以乘乾坤之策而生大周。

月令疏。鄭註易系辭云。天一生水於北。地二生火於南。天三生木於東。地四生金於西。天五生土於中。陽無耦。陰無配。未得相成。地六成水於北。與天一幷。天七成火於南。與地二幷。地八成木於東。與天三幷。天九成金於西。與地四幷。地十成土於中。與天五幷也。大衍之數五十有五。五行各氣幷氣。幷而減五。惟有五十。以五十之數不可以爲七八九六卜筮之占以用之。故更減其一。故四十有九也。

胤按。天一生水地六成之之說。後世學者。謂上世已來。直是如此。而不知易系只說天一地二耳。未嘗曰生成五行也。其曰天一生水者。班固述劉歆之言。載之前志。而曰地六成之者。則具鄭氏之說。鄭氏易傳今不傳。纔見禮記孔疏所引。故宋王伯厚玉海。專擧正義。可見其說不載他書。而獨存于鄭氏註。要之五行之說。詳于洪範月令。而易只說兩儀四象三才八卦。而不言五行。劉歆班固等諸儒。彼此牽合。遂有此說。不可不知其所由來焉○又按。洪範。一曰水。二曰火。三曰木。四曰金。五曰土。孔安國傳曰。皆其生數。是知五行生成之數。其說已見於漢。而書孔傳。先儒亦疑其不似西京文字。則亦難必信據。大抵戰國已來。五行讖緯之說。盛行

説未レ立。道器精粗之辨未レ興。其解或不レ免ニ牽强膚淺之失一。或攙ニ入老莊虛玄之説一。然就ニ事實一爲レ解。要不レ失ニ古意一。不レ可レ不レ知ニ其得失一焉。

班固白虎通。情性篇曰。五常者何謂。仁義禮智信也。仁者不レ忍也。施レ生愛レ人也。義者宜也。斷決得レ中也。禮者履也。履レ道成レ文也。智者知也。獨見前聞。不レ惑ニ於事一見レ微者也。信者誠也。專一不レ移也。又曰。人本含ニ六律五行氣一而生。故內有ニ五藏六府一。此情性之所ニ由出入一也。又曰。五藏。肝仁。肺義。心禮。腎智。脾信也。肝所ニ以仁一者何。肝木之精也。仁者好レ生。東方者陽也。萬物始生。故肝象レ木色青。而有ニ枝葉一。肺所ニ以義一者何。肺者金之精。義者斷決。西方亦金成ニ萬物一也。故肺象レ金色白也。心所ニ以爲一レ禮何。心火之精也。南方尊陽在レ上。卑陰在レ下。禮有ニ尊卑一。故心象レ火色赤而銳也。腎所ニ以智一何。腎者水之精。智者進而止無レ所ニ疑惑一。水亦進而不レ惑。北方水。故腎色黑。水陰故腎雙竅。脾所ニ以信一何。脾者土之精也。土尙レ任ニ養萬物一爲ニ之象一。生レ物無レ所レ私。信之至也。故脾象レ土色黃也。

漢書刑法志曰。夫人宵ニ天地之貌一懷ニ五常之性一。聰明精粹。有生之最靈者也。

律歷志曰。協ニ之五行一。則角爲レ木。五常爲レ仁。五事爲レ貌。商爲レ金。爲レ義。爲レ言。徵爲レ火。爲レ禮。爲レ視。羽爲レ水。爲レ智。爲レ聽。宮爲レ土。爲レ信。爲レ思。

胤按。此以ニ五常一配ニ四方四時五音五色五藏五事一。其説益詳。葢班固氏之所レ傳。而後世儒家之所レ據也。大抵五行配ニ五常一。漢儒從有ニ二説一。隋蕭佶五行大義曰。鄭玄註中庸篇云云。毛公京房漢史皆

火。土無レ所レ不レ載。土所レ含レ義者多。知亦所レ含者衆。故云土神則知。

亂按。以二五行一配二五常四時一。其說到レ此始詳矣。蓋五行之說。春秋以來。漸推二庶物一。見二於左氏傳及月令一者可二考而知一。至二鄭氏一配二之人性一。則仁義禮智信之具二於人心一。其不レ可二增減移動一。猶下四體之具二於外一。五管之懸中乎中上也。一不レ可レ加。一不レ可レ闕。於レ是乎古之學一變。隨レ事設レ敎之方。轉而爲二在レ已一定之物一。其然則語孟及經傳之間。不三必皆併二擧仁義禮智信五者一。而或言二智仁勇一。或言二禮義信一。參伍錯綜。衆事相偶以立レ言者。得レ不レ爲二有餘不足之說一乎。吾知二其不下然也。此說一興。而傳至二後世一。千有餘歲之間。因循仍襲。習熟已久。雖レ有二卓見絕識之人一。不レ能レ改二其故轍一。其說益詳。而其理益鑿矣。然鄭氏所レ云性者。猶就二生稟一爲レ言。而亦未三以爲二性具之理一也○又按。周室既滅。接二乎戰國一。秦政之暴。燔二滅文章一。以愚二黔首一。遂失二其天下一。漢興改二秦之敗一。自下武帝立二五經博士一。開中弟子員上。設レ科射レ策。勸以二官祿一。自レ是而有二專門之儒一。或父子相傳。或師弟相授。以世二其業一。孔安國鄭玄馬融賈逵何晏王肅服虔等諸儒。爲二之訓詁一。歷二魏晉南北一。以逮二隋唐一。宋之中葉。凡世之治レ經者。皆循二守之一。以爲二軌則一。孔穎達邢昺孫奭等亦爲二之疏一。今十三經正義是也。唐書儒學傳。王邵曰。魏晉浮華。古道湮替。歷載三百。士大夫恥レ爲二章句一。唯草野生。專經自許。不レ能三博究擇二從其善一。徒欲下父二康成一兄中子愼上。寧道二孔聖誤一。諱レ言二鄭服非一。當時之所レ習可レ見矣。及二濂洛之說作一。義例工程。悉皆一新。漢註唐疏遂致二束閣一。蓋訓詁諸儒。其人皆經師也。而非二人師一。制度訓詁。考索雖レ詳。而體驗之工。殊欠二眞實一。此其所三以一廢而不二復省錄一也。然當時理氣體用之

韓文公解二揚子之言一以爲始也混。而今也善惡。亦非下知二揚子一者上也。

胤按。性善惡混之說。起二于揚子一。其意謂孟子說二性善一。而爲レ善者。未二必無一レ惡。荀子說二性惡一。而爲レ惡者。未二必無一レ善。人性中本有二善惡二端一。折二衷孟荀之說一。爲二此兩猶之言一。卽公都子所レ擧。性可二以爲一レ善。可三以爲二不善一之意耳。其說卒墮二於俗見一。而不レ足レ言レ性也。苟知二其說一。則人之行二仁義一。何所レ取以爲レ本耶。其見何敢望二董子一。况於二聖賢之旨一。相違殊甚。然其所レ謂性云者。猶就二氣禀一爲レ言。而未レ墮二于理一。以レ信配二仁義一。雖レ非レ古也。猶就二行事一爲レ言而亦未二以レ體言一。此宋儒之所下以爲中不レ足レ取。而漢儒之未レ失二古意一者。亦在二乎此一。學者其可レ不レ知レ所二取捨一耶。

又問道篇曰。夫道以導レ之。德以得レ之。仁以人レ之。義以宜レ之。禮以體レ之、天也。合則渾。離則散。一人而兼統二四體一者。其身全乎。

胤按。揚子到レ此。又列二擧道德仁義禮一。其義訓則皆依二戴記說一〇又按。三畧曰。道德仁義禮。五者一體也。道者人之所レ蹈。德者人之所レ得。仁者人之所レ親。義者人之所レ宜。不レ可レ無レ一焉。與二揚子之言一相出入焉。

鄭玄中庸註曰。天命謂下天所レ命二生人一者上也。是謂二性命一。木神則仁。金神則義。火神則禮。水神則信。土神則智。皇侃疏曰。木神則仁者。東方春。春主二施生一。仁亦主二施生一。云二金神則義一者。秋爲レ金。金主二嚴殺一。義亦果敢斷决也。云二火神則禮一者。夏爲レ火。火主レ照レ物而有二分別一。禮亦主二分別一。云二水神則信一者。冬主二閉藏一。充塞不レ虛。水有二內明一。不レ欺二於物一。信亦不二虛詐一也。云二土神則知一者。金木水

胤按。淮南子書。祖二老莊之旨一。而亦竊二聖賢之書一。夫子每言二仁智勇一。而孟子專倡二仁義一。今參取言二仁義智勇一。又言二仁勇信廉一。皆其所二創爲一也。

漢東平王宇傳。元帝詔書。又勅二傅相一曰。夫人之性。皆有二五常一。及二其少長一。耳目牽二於嗜欲一。故五常銷而邪心作。情亂二其性一。利勝二其義一。而不レ失二厥家一者。未二之有一也。

胤按。此當時儒者之所レ傳。代言者用二其意一述レ之也。後世所レ謂天理人欲之說。其漸二於此一矣。然其所レ謂五常者。猶就二生禀一而言。未三以爲二未發之理一也

揚雄法言修身篇。或問二仁義禮智信之用一。曰。仁宅也。義路也。禮服也。智燭也。信符也。處レ宅。由レ路。正レ服。明レ燭。執レ符。君子不レ動。動斯得矣。

胤按。此亦漢儒之所レ傳。猶二董仲舒之言一也。因二孟子安宅正路之言一。而各喩二諸物一。皆就二行事一而言。未三嘗以爲二性之名一也。性之說。下文詳レ之。

又曰。人之性也善惡混。修二其善一則爲二善人一。修二其惡一則爲二惡人一。氣者所レ適二善惡一之馬也歟○溫公性辨曰。孟子以爲人性善。其不善者外物誘也。荀子以爲人性善者聖人敎レ之也。是皆得二其一偏一。而遺二其本實一。夫性者人之所下受二於天一以生上者也。善與レ惡必兼二有之一。猶二陰之與一レ陽也。是故雖二聖人一不レ能レ無レ惡。雖二愚人一不レ能レ無レ善。其所レ受多少之間。則殊矣。揚子以爲人之性善惡混。混者善惡雜三處於心一之謂也。顧下人所二擇而修一之何如上耳。修二其善一則爲二善人一。修二其惡一則爲二惡人一。斯理也豈不二曉然明白一矣哉。如二孟子之言一。所レ謂長レ善者也。如二荀子之言一所レ謂去レ惡者也。揚子則兼レ之矣。

又曰。天之令之謂レ命。命非二聖人一不レ行。質樸之謂レ性。性非二敎化一不レ成。人欲之謂レ情。情非二制度一不レ節。是故王者上謹三於承二天意一以順レ命也。下務明二敎化民一以成レ性也。正二法度之宜一。別二上下之序一以防レ欲也。修二此三者一。而大本擧矣。人受二命於天一。固超然異二於群生一。入有二父子兄弟之親一。出有二君臣上下之誼一。會聚相遇。則有二耆老長幼之施一。粲然有レ文以相接。驩然有レ恩以相愛。此人之所二以貴一也。生二五穀一以食レ之。桑麻以衣レ之。六畜以養レ之。服レ牛乘レ馬圈レ豹檻レ虎。是其得二天之靈一貴二於物一也。故孔子曰。天地之性人爲レ貴。明二於天性一。知三自貴二於物一。知三自貴二於物一。然後知二仁誼一。知三仁誼一。然後重二禮節一。重二禮節一。然後安レ處レ善。安レ處レ善。然後樂レ循レ理。樂レ循レ理。然後謂二之君子一。故孔子曰。不レ知レ命亡三以爲二君子一。此之謂也。

胤按。董子謂二性生之質也一。其義可レ謂レ明矣。但其所レ謂質者。與二後世氣質之言一。稍爲レ不レ同。後之所レ謂質者。淸濁昏明之差。稟得不レ齊者。對レ理爲レ言。董子所レ謂質者。斥下生之所レ得未レ經二敎化一者上而言。故又云。質樸之謂レ性。此爲レ不レ同耳。而其論レ性也。曰下非二敎化一不レ成。則非下專貴二性之自然一。如中樂記鴻烈之謂上也。雖レ不二謂レ性爲一レ善。而曰三超然異二群生一。則知三人性之善可二以受下敎。非三說レ惡說レ混。如二孫卿子雲之說一也。先儒云。漢儒近似者三人。董仲舒大毛公楊雄。予謂仲舒其最純乎。五行災異之說。雖レ未レ免二當時之習一。而其說平易爾レ雅。似レ有レ得二乎孟子一。

淮南鴻烈解詮言訓曰。仁義智勇。聖人之所二備有一也。然皆立二一名一者。言二其大者一也。

兵畧訓曰。仁勇信廉。人之美行也。

胤按。仁義禮智信五者並言。始見二於此一矣。葢當時五行災異之說盛行。凡萬物之散殊。必取二象五行一。則固非二禹疇箕範之舊一矣。遂以レ信配二仁義禮智一。名曰二五常一以準二五行一。董子之學。專尙二五行一。亦襲二其說一耳。然考二策之言一。未レ有下配二五行一之說上。既曰王道所レ當二修飾一。或又配二之禮樂一。以爲二適レ治之具一。則猶孟子所レ謂王亦曰二仁義一而已矣之意。而以レ此爲二經世濟民之具一。而不三以爲二人之性一矣。其言レ性也。下文詳レ之。或曰。以レ信配二四者一。何以不可。曰古者百行錯擧。以爲二人之敎一。夫子亦以二禮義與一レ信幷言。則以レ信配二四者一。何爲不可。然道有二無レ準者一矣。有二有レ準者一矣。仁智固大矣。禮義人之大閑也。皆道之有レ準者。而百行之所レ取レ則也。若夫信者與二恭愼勇直等屬一。同爲二人之一德一。故唯專二於此一。而不レ有レ所レ準。則爲二足恭一。爲二必信一。其弊有下不レ可二勝言一者上。必有三禮義以爲二之準則一。而後可二行レ之無一レ弊。其言見二於語孟一者班班矣。孟子四端不レ言レ信。其以レ此乎。

又曰。道者。所三繇適二於治一之路也。仁義禮樂皆其具也。故聖王已沒。而子孫長久。安寧數百歲。此皆禮樂敎化之功也。

胤按。仁義禮樂。四者相叙爲レ言。雖レ不レ見二於六經一。而先王所三以經二綸天下一之道。括二其大者一。則實不レ外二乎是一。故自二戰國一以來諸儒。語二先王之道一。每必以レ此爲レ稱。而董子之言。爲二最明且簡一焉。葢言二天下之達德一。則固仁義禮智爲レ大。而經濟之具。則仁義禮樂爲レ要。各就二其所一レ專爲レ言耳。斯四者既不レ可二以爲一レ性。則仁義禮智之亦不レ可二以爲一レ性也。可レ知矣。

又曰。命者天下之令也。性者生之質也。情者人之欲也。

又曰。好惡無節於內。知誘於外。不能反躬。天理滅矣。

又曰。夫物之感人無窮。而人之好惡無節。則是物至人化物也。人化物也者。滅天理而窮人欲者也。孔穎達疏曰。自然謂之性。貪欲謂之情。

胤按。天理人欲之言。始見於此矣。蓋古者聖賢之敎人。仁義禮樂爲大。而君子爲標準之名。故其所以斷善惡之分者。每曰仁不仁。曰義利。曰君子小人。而未嘗以天理人欲判之也。但老莊之書。言涉天理人欲者多。蓋其所道者然也。先儒之學。克去私己。以復天理爲要。故其論道解經之間。遂以天理人欲爲善惡之別稱。其所云盡天理之極。而無一毫人欲之私者。可以解仁。可以狀聖人之德。其語蓋本於樂經之言。象山陸子辨之詳矣。大抵當漢之時。黃老之術。大行于世。如文景之爲君。張良曹參之爲臣。好之最篤。時之大儒君子。駕其遺說攙入聖經。樂記所載。豈其由此乎。然觀其曰窮人欲。則非全惡人欲而欲無之。如後世所謂寡之又寡。以至於無之類。亦可見也。

論漢儒學問之旨

漢書賈誼曰。孩提有識。三公三少固明孝仁禮義。以道習之。逐去邪人。不使見惡行。

胤按。孝仁禮義。併擧以爲保傅之敎。唯見于此。豈亦古之遺言乎。

漢武帝時。擧賢良文學之士。董仲舒對策曰。夫仁誼禮智信五常之道。王者所當修飾也。五者修飾。故受天之祐。而享鬼神之靈。德施於方外。延及群生也。

文子。姓辛。名研。葵丘濮上人。號曰計然。范蠡師事之。本受業於老子。錄其遺言。爲十二篇。

德者。故曰。乾元亨利貞。可見矣。文言蓋依傍卦辭。仁禮義貞。四者兼擧。以叙君子之行。古之說書假借其辭別自取義。不比後世疏家。貼文解說。而其立言也。各隨其意。彼此相配。因事立敎。亦可見其一端矣。至後世以元亨利貞。分屬四時。又配五常。其說一定。牢不可移。而不知原之卦辭。參之文言。其旨各自不同。不可強而一之也。好古君子其訂焉。

禮記樂記曰。是故先王本之情性。稽之度數。制之禮義。合生氣之和。道五常之行。

胤按。此論樂之事云然。五常之名始見於此。鄭玄曰。五常五行也。陳澔云。五常之行。仁義禮智信之德也。二說不同。未詳孰是。然上既曰禮義。則不可復並擧以爲五常。鄭說近是。可見漢時五常之名。亦無定說矣。

又曰。人生而靜。天之性也。感於物而動。性之欲也。

胤按。以靜言性。始見於此矣。蓋老莊之敎。槌提仁義。絕滅禮樂。專貴吾性。而欲使其清靜虛明。不爲物欲汨亂。其道尙靜。其言曰。致虛極。守靜篤。萬物並作。吾以觀其復。又曰。清靜爲天下正。又曰。我好靜民自正。淮南子曰。水之性眞靜而土汨之。人之性安靜而嗜欲亂之。又曰。清靜恬愉。人之性也。樂記之言。分明出于老子之旨。此語亦載文子。及淮南子。但性之欲也。倶作性之害也。文子學於老子。所謂辛研者也。其所淵源可知矣。考諸聖賢之言。則云天生蒸民。有物有則。民之秉夷。好是懿德。唯言其好善。而未嘗言其靜。此古昔聖經之言性者。而孟子之所取以爲性善之證也。其異同得失。固不可同日而言矣。

則誣矣。

國語魯語。展禽曰。及天之三辰。民所以瞻仰也。及地之五行。所以生殖也。及九州名山川澤。所以出財用也。非是不在祀典。韋昭曰。五行。五祀。金木水火土。

又左氏傳昭公三十二年。晋史墨對趙簡子曰。物生有兩。有三。有五。有陪貳。故天有三辰。地有五行。體有左右。各有妃耦。王有公。諸侯有卿。皆有貳也。天生季氏。以貳魯侯。爲日久矣。民之服焉。不亦宜乎。

胤按。展禽及史墨之言。皆在天曰三辰。地曰五行。與曰天以陰陽五行化生萬物者。其取義亦不同矣。

禮記禮運曰。故人者其天地之德。陰陽之交。鬼神之會。五行之秀氣也。

胤按。人受五行之氣以生。其說始見于此矣。然未言受五行之氣。以爲人之五性也。

易乾元亨利貞文言曰。元者善之長也。亨者嘉之會也。利者義之和也。貞者事之幹也。君子體仁。足以長人。嘉會足以合禮。利物足以和義。貞固足以幹事。君子行此四德者。故曰乾元亨利貞。

胤按。易本卜筮之書。系乾卦曰元亨利貞者。所以示筮得者其事當大通。而利在正固也。本義所解。固其本旨。彖推之天道曰。乾元資始者。言一元之氣萬物之所資以爲始耳。猶說詩者之斷章取義也。亦非錯會其義也。文言亦分爲四德。配之人事。觀其曰君子行此四

全長短之差一。而或擧二先訓一。或敍二自言一。皆足下以善二當世一而範中來者上。乃至孫武所レ謂知信勇仁嚴。商鞅所レ謂法信權者。雖レ非下誦二法聖人一者之所レ尙。而各隨二其道之所一レ便。以設二條目一。亦猶古之遺風也。然則百行之目。可二分而言一レ之。可二合而言一レ之。出入添減。無レ所二不可一。而唯鄒魯之書。曰智仁勇。曰仁義禮智。推二之天下萬世一。該括周遍。行レ之而無レ弊。所三以爲二群言之宗一也。

春秋左氏傳襄公二十七年。鄭子罕曰。天生二五材一。民並用レ之。廢レ一不可。誰能去レ兵。兵之設久矣。所下以威二不軌一而昭中文德上也。杜預曰。五材。金木水火土也。

胤按。淮南子本經訓曰。天地之生レ財也。本不レ過レ五。聖人節二五行一則治不レ荒。亦五材之謂也。

又昭公二十五年。鄭子產曰。夫禮天之經也。地之義也。民之行也。天地之經。而民實則レ之。則二天之明一。因二地之性一。生二其六氣一。用二其五行一。氣爲二五味一。發爲二五色一。章爲二五聲一。

又昭公二十九年。晉蔡墨曰。夫物。物有二其官一。官修二其方一。朝夕思レ之。一日失レ職。則死及レ之。故有二五行之官一。是謂二五官一。實列受二氏姓一。封爲二上公一。祀爲二貴神一。社稷五祀。是尊是奉。木正曰二勾芒一。火正曰二祝融一。金正曰二蓐收一。水正曰二玄冥一。土正曰二后土一。

胤按。子產論二五行一。而謂二之用一。子罕又謂二之五材一。則亦就二民用一而言。原二夫洪範五行之屬一。只言二五味一而已。子產始配二之五色五聲一。蔡墨謂二之五行之官一。而又別擧二五祀一。則五行之神也。蓋古者括二天下之民用一。列爲二五科一。立レ官設レ司。以修二飾其事一。故能擧二其職一者。生爲二達官一。死爲二神明一。列在二祀典一。則當時之制也。後世則謂下冥漠之間。有レ物斡二旋陰陽一。生二殺人物一者。各位二四方一。而遞行中四時上。

精忠禮信四者。言晉君臣之不免也。

國語周內史叔興曰。禮所以觀忠信仁義也。忠所以分也。仁所以行也。信所以守也。義所以節也。忠分則均。仁行則報。信守則固。義節則度分均無怨。行報無匱。守固不偸節度不攜。若民不怨而財不匱。令不偸。而動不攜。其何事不濟。中能應外。忠也。施三服義。仁也。守禮不淫。信也。行禮不疚。義也。

胤按。此周襄王使賜普文公命內史叔興告王。擧忠信仁義四者。言晉之不可不善也。

國語單襄公曰。夫仁禮勇。皆民之爲也。以義死用謂之勇。奉義順則謂之禮。畜義豐功謂之仁。

胤按。此普既克楚。使郤至告慶於周。單襄公擧仁禮勇三者。以言郤至之必及難也。

國語晉太子申生曰孝敬忠貞。君父之所安也。

胤按。此晉獻公將廢太子申生。申生擧所聞羊舌大夫之言。答其臣猛足也。

管子曰。禮義廉耻。國之四維。四維不張。國乃滅亡按管子牧氏篇云。四維張。則君令行。又曰。四維不張。國乃滅亡。又曰。國有四維。一維絕則傾。二維絕則危。三維絕則覆。四維絕則滅。傾可正也。危可安也。覆可起也。滅不可復錯也。何謂四維。一曰禮。二曰義。三曰廉。四曰耻。賈誼新書曰。管子曰。四維。一曰禮。二曰義。三曰廉。四曰耻。四維不張國乃滅亡。

胤按。此以禮義廉耻四者。爲人道之大綱。故名之曰四維。後世其稱尤著而併之孝弟忠信。謂之八德。〇又按。春秋之時。周室雖衰。而先王遺化尙存。當時學士大夫。皆能知所以立言。故凡其百行。比類配合。以爲立身之則。以爲論人之目。雖未必悉出於聖人之遺言。亦不可無偏

胤按。晋郤錡欲レ攻レ公。郤至擧二信智勇三者一。論三人道之所二以立一也。

又襄公十一年。晋魏絳曰。詩曰。樂只君子。殿二天子之邦一。樂只君子。福祿攸レ同。便蕃左右。亦是帥從。夫樂以安レ德。義以處レ之。禮以行レ之。信以守レ之。仁以厲レ之。而後可下以殿二邦國一。同二福祿一。來中遠人上。所レ謂樂也。

胤按。晋侯賜二魏絳一以二樂律一。辭レ之以二德義禮信仁五者一。論二樂之事一也。杜預曰。五德皆備乃爲レ樂。非二但金石一。

又昭公元年。晋趙孟稱二魯叔孫豹一曰。臨レ患不レ忘レ國。忠也。思レ難不レ越レ官。信也。圖レ國忘レ死。貞也。謀主二三者一義也。有二是四者一。又可レ戮乎。

胤按。魯季武子伐レ莒。取レ鄆。莒人告二於會一。楚告二於晋一請レ戮二魯使叔孫豹一。趙文子請レ免レ之。以二忠信貞三者一稱レ之也。

又昭公二十年。楚伍尙謂二其弟員一曰。奔レ喪免レ父。孝也。度レ功而行。仁也。擇レ任而往。智也。知レ死不レ辟。勇也。

胤按。此伍尙勸レ員適レ吳。勉レ之以二孝仁智勇四者一也。

國語周內史過曰。祓二除其心一。精也。考レ中度レ衷。忠也。昭二明物則一。禮也。制レ義庶孚。信也。然則長レ衆使レ民之道。非レ精不レ和。非レ忠不レ立。非レ禮不レ順。非レ信不レ行。

胤按。此周襄王使レ賜二晋惠公命一。呂甥郤芮相二晋侯一不レ敬。晋侯執レ玉卑不二稽首一。內史過告レ王。擧二

輕重相偶。以爲之科條耳。仁義智謂之德。而禮屬之藝。則蓋言威儀揖遜之節。皆著於人事者也。合而名之曰三物。則非性之理矣。猶古之意也。

大司樂。以樂德敎國子。中和祇庸孝友。

胤按。大司樂掌敎樂。有樂德。有樂語。有樂舞。樂語所以習其聲也。樂舞所以習其容也而樂德則以養其德。中謂淸濁之宜。和謂剛柔之適。祇敬也。庸有常也。善父母曰孝。善兄弟曰友。以此六者修其德。古者以禮樂爲修身之具。而中和者。聲音之無過不及者。而所以爲樂之本也。故敘六德首言之。先子以中庸所載中和一章。爲樂經脫簡。亦可併證也。

又按。上所擧諸文。雖未必出於聖人之言。而仁義禮智之目。參伍錯綜。或參之他事以爲言。當時立敎之意可見。而加之以信。而必配五行。其非古可知矣。

春秋左氏傳成公九年。普范文子曰。不背本仁也。不忘舊信也。無私忠也。尊君敏也。仁以接事。信以守之。忠以成之。敏以行之。

胤按。晉侯觀于軍府。見楚囚鍾儀與之琴操南音。范文子擧仁信忠敏四者稱其君子也。

又成公十六年。楚申叔時曰。德刑詳義禮信。戰之器也。德以施惠。刑以正邪。詳以事神。義以建利。禮以順時。信以守物。

胤按。楚子救鄭。申叔時爲司馬子反。列擧德刑詳義禮信六者言行師之道也。

又成公十七年。晉郤至曰。人所以立。信智勇也。信不叛君。知不害民。勇不作亂。

胤按。此以二人情一喩レ田。仁義禮樂。加レ之以レ學。以喩二耕種之法一也。

樂記曰。春作夏長。仁也。秋收冬藏。義也。仁近二於樂一。義近二於禮一。

胤按。此以二仁義禮樂四者一。更互兩分。以配二四時一。後世以二五行一分二配五常一。已漸二於此一矣。

祭統曰。發レ號出レ令而民說謂二之和一。上下相親謂二之仁一。民不レ求二其所一レ欲而得レ之謂二之信一。除二去天地之害一謂二之義一。義與レ信。和與レ仁。霸王之器也。有二治レ民之意一而無二其器一則不レ成。

胤按。此以二和仁義信四者一。爲二治平之具一。雖レ不レ見二於語孟一。而其意亦不二相悖一也。

大學曰。詩曰。穆穆文王。於緝熙敬止。爲二人君一止二於仁一。爲二人臣一止二於敬一。爲二人子一止二於孝一。爲二人父一止二於慈一。與二國人一交止二於信一。

胤按。此言下止二至善一之效上。稱二文王之德一。列二擧仁敬孝慈信五者一以實レ之。蓋此五者人之善行也。文王之德。皆極二其至一。故大學列擧以證二至善一。若必唯以二仁信一爲レ性。而其他百行非二性之所一レ有。則相敍爲レ言。豈非二不倫之甚一乎。

周禮。大司徒以二郷三物一敎二萬民一而賓二興之一。一曰。六德。智仁聖義忠和。二曰。六行。孝友睦婣任恤。三曰。六藝。禮樂射御書數。

胤按。此大司徒敎レ民之條目。而智仁義忠和之名始見二于此一矣。周禮爲二周公之作一。固不レ可レ信。然各隨二官司一。著二其職員一。則亦非下鑿空構成。新創二規模一者上也。而暨二之經傳一。或合或否。豈戰國先秦之間。綴二拾成周之遺制一以爲二一書一耶。然則所レ謂六德云者。或一時之制。或一方之敎。大小相從。

无不利。則不疑其所行也。

乩按。坤之六二曰。直方大。不習无不利。文言衍其義。敬義並擧。以與乾之九二相對。乾言仁而坤言義。猶所謂立人之道。曰仁與義之意。以配陰陽剛柔也。其曰敬以直內。則欲執事而無慢易之心也。義以方外。則欲制行而無非僻之失也。夫百行兼擧。本無定方。敬義相偶。以爲修身之方。亦文言之所取義。何爲不可。而先儒以此爲學問之極則可疑也。蓋先儒之學。持敬爲宗。故祖述此言。謂足盡聖學之全。然與夫子常稱知仁勇。孟子開口便言仁義者。其旨固不同。學者其可不知所從乎。

禮記曲禮曰。道德仁義。非禮不成。

乩按。道德仁義併稱始見於此。而要其本於禮也。稽之語孟。夫子則曰。人而不仁如禮何。孟子又曰。禮者節文斯二者也。仁之與禮。輕重可知矣。今曰道德仁義。非禮不成。則禮重於仁。其旨不同者何哉。蓋夫子之道。以仁爲宗。而孟子每稱仁義。故其言如彼。而記禮之貴禮。猶孝經之宗孝。易之主時。以禮爲人之紀綱。故其言亦如此。雖與孔孟之言不同。而彼此相偶以立敎。則猶古也。楊子雲則曰。神心惚恍。經緯萬方。事繫諸道德仁義禮。則祖襲禮記之言而平列五者也。

禮運曰。故人情者聖人之田也。修禮以耕之。陳義以種之。講學以耨之。本仁以聚之。播樂以安之。

不レ成。非ニ仁義一則人道不レ具。則相配以立レ言。固人道之綱紀也。先儒謂天以レ氣而言。地以レ質而言。人以レ理而言。殊不レ然也。天一而已。地亦一而已。人則非下指ニ一己之身一而人上之也。擧ニ盡天下之人一以爲レ人。而其所ニ其往來通行一者。名レ之曰レ道。猶下貴賤尊卑之必由ニ官道正路一以行上也。聖人標レ之。以使下レ人必由ニ此路脉一以行上。故曰立ニ人之道一。曰仁與レ義猶下書所レ謂皇建ニ其有極一之意上也。則道之爲レ道。亦可レ知矣。而後世學者。必就ニ一身上一求ニ所レ謂仁義者一以爲レ性。則其失ニ聖賢之意一甚矣。

系辭曰。易其至矣乎。夫易聖人所ニ以崇レ德而廣ニ業也。知崇禮卑。崇效レ天。卑法レ地。天地設レ位。而易行ニ乎其中一矣。

胤按。語孟中庸之間。或曰ニ仁知一。或曰ニ仁義一。或曰ニ仁禮一。而未レ有ニ智禮並言者一也。智禮並言。纔見ニ於此一。蓋取ニ象于天地一也。

乾九二文言曰。君子學以聚レ之。問以辨レ之。寬以居レ之。仁以行レ之。易曰。見龍在レ田。利レ見ニ大人一。君德也。

胤按。乾之九二曰。見龍在レ田。利レ見ニ大人一。文言衍ニ其義一。以ニ學問寬仁一言レ之。亦言下大人之所ニ以成上德者。由中務レ學與上行レ仁而已。蓋人不レ學。則無下以通ニ古今一明中法戒上。不仁則無下以安ニ衆庶一服中人心上。此其所ニ以取ニ義也。

坤六二文言曰。直其正也。方其義也。君子敬以直レ內。義以方レ外。敬義立。德不レ孤。直方大不レ習

其為レ仁耶。為レ智耶一。故曰仁者見レ之謂二之仁一。知者見レ之謂二之知一。百姓日用而不レ知。上提二起一道字一。而曰レ繼レ之曰レ成レ之曰レ見レ之。皆莫レ非レ道也。此章古今說者。其旨不レ一。韓康伯曰。道者何。無之稱也。陰陽雖レ殊。無一以待レ之。在レ陰為二無陰一。陰以レ之成。在レ陽為二無陽一。陽以レ之成。故曰二一陰一陽一也。正義云。一謂レ無也。其說怪詭。本二老莊虛無之旨一。而尤不レ足レ取也。朱子曰。陰陽氣也。其所二以然一者道也。蓋以レ道為下所二以然一之理上。則理氣體用之謂。而非二大傳之本旨一矣。今審二其意一。曰一陰一陽之謂レ道者。猶レ云三一闔一闢謂二之變一。專就二往來上一為レ言。非レ言下所二以然一之理上也。繼善成性之義。其說亦不レ同。正義云。道是生レ物開通。善是順レ理養レ物。故繼レ道之功者。唯善行也。能成二就此道一者。是人之本性。此說稍覺レ有レ理。程子曰。凡人說レ性。只說二繼レ之者善一也。則亦就二人性一為レ說。然不三以為二說レ性之至者一也。朱子則以二繼善一為二大極之動一。成性為二大極之靜一。通書註則曰。繼レ之者。氣之方出而未レ有レ所レ成之謂也。善即理之方行而未レ有レ所レ立之名也。陽之屬也。成則物之已成。性則理之已立者也。陰之屬也。蓋於二未發已發之間一為二兩截一分二屬陰陽一也。其說最不レ見レ所レ當。一陰一陽之說。先子辨レ之詳矣。繼善成性之義。侍奉之間。素無二異聞一。故今參二先儒之說一。漫述二臆說一云。

說卦曰。立二天之道一。曰陰與レ陽。立二地之道一。曰剛與レ柔。立二人之道一。曰仁與レ義。胤按。仁義並稱。亦見二於此一矣。十翼為二夫子之作一。其說始見二於史記一。而本無レ所レ據。則與二孟子之時一。孰為二先後一。固不レ可レ知也。然陰陽相濟。而天道成矣。仁義並行。而人道具矣。非二陰陽一則天道

古今學變卷之中

伊藤長胤　著

○論二易禮春秋傳敎學之旨一

易系辭曰。一陰一陽之謂レ道。繼レ之者善也。成レ之者性也。仁者見レ之謂二之仁一。知者見レ之謂二之知一。百姓日用而不レ知。故君子之道鮮矣。

胤按。仁智並言。亦見二於此一。其出二夫子之遺言一乎。蓋聖人之事レ天也。游衍出王。對越不レ違。而唯曰二天何言哉。四時行焉。百物生焉。天何言哉一而已。其所下以樞二紐造化一。根二柢品彙一。爲甲萬物之主宰上者。主レ理耶。主レ氣耶。未二嘗言及一也。唯易以道二陰陽一。故名二其一陰一陽往來不レ息者一以爲レ道。而自レ是以上。更無二其說一。則知就レ氣以爲レ言。而非二主レ理而言一也。是乃自然之氣機。萬化由レ是而生。品彙由レ是而生。天道之全體。盡二於此一矣。故曰一陰一陽之謂レ道。然上天之載。無レ聲無レ臭。必有二聖人者一出。財二成輔三相之一。而後萬物之生。飛潛動植。各有三以遂二其性一。則所レ謂善也。善者非レ佗。即指二人道一而言。以二人之道一而繼二天之道一。猶三子之繼二父之事一也。故曰繼レ之者善也。然人能弘レ道。非二道弘下人。非三民之秉夷。好二是懿德一。則何以得二行レ道而成下之。故曰成レ之者性也。而其爲レ道也。天下古今之人。所二其由而日用一。仰事二父母一。俯畜二妻子一。士農工賈。各服二其事一。以終二其身一。如レ斯而已矣。所レ謂仁智云者。亦不レ過下各因二其所上見命上名。而天下之人。則不三自知二

行而可三以爲二大人一矣。所謂仁義者正如レ是。其曰レ達曰レ及。皆擴充之事。而所三以行二斯二者一之方也。自レ古聖賢敎レ人。進レ德修レ業。能造二其極一。及人之習レ技講レ藝。漸以增長。亦皆莫レ非二此事一。而以二擴充一爲レ言。則實自二孟子一始矣。

古今學變卷之上畢

覺之心一也。故孟子既曰下求二放心一而已上矣。而繼レ之曰仁人心也。又曰。所三以放二其良心一者。亦猶二斧斤之於下木也。其意可レ見矣。如下齊宣之構二怨諸侯一。梁惠之糜中爛其民上。正是放心之事。求云者。自知三其爲二不仁一而省レ之也。自レ是以上。居レ仁由レ義。尚有三可レ進之地一。故孟子徒曰二學問之道一而已。而不三以レ此爲二王道之極致。聖人之能事一。若言二其至一。則曰仁亦在二乎熟下之而已矣。後之求二放心一之說。則謂下收二歛此心一。而不上レ使二之昏昧放逸一。乃禪家所謂。主人翁惺惺著手段。而非二孟子之旨一矣。

又曰。人皆有レ所レ不レ忍。達二之於其所下忍仁也。人皆有レ所レ不レ爲。達二之於其所下爲義也。

又曰。凡有レ四二端於我一者。知二皆擴而充下之矣。若二火之始然。泉之始達一。苟能充レ之。足三以保二四海一。苟不レ充レ之。不レ足三以事二父母一。

又曰。老二吾老一。以及二人之老一。幼二吾幼一。以及二人之幼一天下可レ運二於掌一。

又曰。推レ恩足三以保二四海一。不レ推レ恩無三以保二妻子一。古之人所三以大過下人者無レ他焉。善推二其所下爲而已矣。

胤按。孟子每提二出仁義二字一以告レ人。語二其受用工夫一。則必曰レ達。曰レ充。曰レ推。曰レ及。不レ唯述二功程一。而義趣亦盡二於此一矣。蓋人無レ不レ有レ所レ不レ忍也。然雖二能不下忍二於此一。而不レ免レ忍二於彼一。故恩足三以及二禽獸一。而功不レ至二於百姓一。亦無レ不レ有レ所レ不レ爲也。然雖三能不レ爲二於此一。而不レ免レ爲二於彼一。故簞食豆羹之微。能決二生死於危迫之間一。而萬鍾則不レ辨二禮義一而受。此不仁不義之由也。苟能以下其及二禽獸一之心上。而及二之百姓一。以下其不レ受二簞食豆羹一之心上。而及二之不レ可レ受之萬鍾一。則仁立義

以レ此明ニ性之善一也。非ニ陰陽體用之謂一也。

又曰。人之所ニ不レ學而能一者。其良能也。所ニ不レ慮而知一者。其良知也。孩提之童。無レ不レ知レ愛ニ其親一也。及ニ其長一也。無レ不レ知レ敬ニ其兄一也。親レ親仁也。敬レ長義也。無レ佗。達ニ之天下一也。

胤按。良知良能之說。亦始ニ于孟子一矣。與下論ニ四端一說中性善上。同一手段。明ニ仁義之本具ニ於有生之初一。而欲ニ人之進一レ道也。蓋人之於レ事。待レ學而能。待レ慮而知者。或疑ニ乎後來之漸有一。難ニ以爲ニ性之眞一。其或不レ待レ學而能。不レ待レ慮而知者。人性之所ニ生具一。而非ニ後來之添飾一。謂ニ之良知良能一。如ニ甘レ食嗜レ飲等類一皆是。若夫孩提之知レ愛ニ其親一。少長之知レ敬ニ其兄一。本非レ由ニ師傅之督責一。不レ待ニ思惟之工夫一。則亦是良知良能中事。人性善而可レ受レ敎者。乃在ニ于此一。而所レ謂仁義者。亦只不レ過下推ニ此心一而達中之天下上而已。在レ己而生具者。良知良能也。達ニ之天下一。則爲ニ仁義之德一。又嘗曰。人皆有レ所レ不レ忍。達ニ之於其所一レ忍仁也。人皆有レ所レ不レ爲。達ニ之於其所一レ爲義也。其旨一也。故知良知良能者。仁義之寸苗。可レ言ニ於有生之初一。而旣長之後。由レ學而能。由レ慮而知者。不レ可レ謂ニ之良知良能一也。

又曰。仁人心也。義人路也。舍ニ其路一而弗レ由。放ニ其心一而不レ知レ求哀哉。人有ニ雞犬放一。則知レ求レ之有レ放レ心。而不レ知レ求。學問之道。無レ佗求ニ其放心一而已矣。

胤按。求ニ放心一之說。亦始ニ於孟子一矣。蓋人雖ニ必有ニ良心一。而任ニ其斲喪一。不レ知ニ自省一。則無レ由レ進レ善。故欲レ明ニ進レ道之始一。以レ求ニ放心一言レ之。所レ謂放心者。謂レ放ニ失仁義之良心一也。非レ謂ニ知

趙岐註曰。端者首也。人皆有ニ仁義禮智之首一。可レ引ニ用之一。○孫奭疏曰。孟子言人有ニ惻隱之心一者。是仁之端本起ニ於此一也。有ニ羞惡之心一者。是義之端本。起ニ於此一也。有ニ辭讓是非之心一者。是禮智之端本起ニ於此一者也。此孟子所三以言ニ惻隱羞惡辭讓是非四一者。是爲ニ仁義禮智四者之端本一也。

胤按。四端之說。亦始ニ于孟子一。示三仁義之本具ニ於吾心一也。蓋見三孺子之將レ入ニ于井一。必有ニ怵惕惻隱之心一。凡爲レ人者。莫レ不ニ皆然一。苟推ニ此心一。而憫ニ鰥寡一。救ニ困窮一。使下含レ生之類。無レ不三各得ニ其所一。則仁莫レ大焉。猶下涓涓之泉。道レ之而可三以至ニ蕩蕩之盛一。星星之火。煽レ之而可中以至中炎炎之熾上。故謂ニ之端一。言ニ惻隱之心乃仁之端本一也。推ニ之義禮智一亦然。原ニ端字義一。有ニ端本之義一。有ニ端緒之義一。而四端之端。則取ニ端本之義一。趙岐孫奭解。固不レ失ニ古義一。後世解レ仁做ニ性之理一。故從三端緒之義一。曰猶三有レ物在レ中而緒見ニ於外一也。大失ニ輕重本末之叙一矣。不ニ徒字訓之得失一也。先子遺書屢屢辨レ之。故不ニ復贅及一云。

又曰。乃若ニ其情一。則可ニ以爲レ善矣。乃所レ謂善也。

胤按。性情之辨。漢時已有ニ其說一。白虎通云。性者陽之施。情者陰之化也。說文云。性者人之陽氣性善者。情者人之陰氣有レ欲者。當時五行之說盛行。故以ニ陽陰一言。此固非ニ古之義一矣。宋朝先儒。則謂心之未レ發爲レ性。已發爲レ情。而心則統ニ動靜一。此體用之謂也。夫情意志慮。皆人心之運用。孟子何以獨擧レ情以示ニ性之善一耶。蓋情者人心之不レ涉ニ乎思慮安排一者。而本無レ所ニ造作一。亦未ニ損壞一。故可三以卜ニ性之善否一。若夫聞レ譽而喜。聞レ毀而怒等項。亦是人心之不レ涉ニ乎思慮安排一者。故孟子

滕文公爲二世子一。將レ之レ楚。過レ宋而見二孟子一。孟子道二性善一。言必稱二堯舜一。

又曰。人性之善也。猶二水之就一レ下也。

亂按。聖賢之書。言二性善一者始二於此一矣。蓋孟子之時。去二孔子一百有餘年。周室亦益衰亂。不二徒禮樂廢墜不一レ可二復救一。而斯民生養之具。亦無レ所レ資。孟子爲レ之倡二先王之制。仁義之道一。以告二當時諸侯一。將下以救二天下之陷溺一。而措中諸衽席之安上也。而當時之人。自視甚劣。謂吾身不レ能レ居レ仁由レ義。至レ曰下如二寡人一者可二以保一レ民乎哉上。故告レ之曰。人皆有二不レ忍レ人之心一。先王有二不レ忍レ人之心一。斯有二不レ忍レ人之政一矣。以二不レ忍レ人之心一。行二不レ忍レ人之政一。治二天下一可レ運二之掌上一。是知性善之說。乃所三以行二仁義一之本。而安二天下一之大端也。夫子之時。周室雖レ衰。而人猶知下所二以修一レ道之方上。說レ仁說レ禮。說二孝弟忠信一。未三嘗言二人性之善否如何一。孟子之時則不レ然。譬猶下惰農之汗二萊其田一。不レ肯二稼穡一。有二老農者一憫レ之。告レ之以二其田之沃一。而勸二之菑畬一。以望中秋成上也。若使下其操二爾鋤耰一。勤動力作上。何必煩二告之一以二田之良一哉。孟子之言二心性一。是已。本不レ得レ已之說耳。未三嘗以レ此爲レ重。而加二之仁義禮樂之上一也。歐陽子曰。聖人之敎レ人。性非レ所レ先。固宜。世衰道微。異端競起。明心見性之說。傳二染儒家一。專貴二已性一。以爲二萬物之一原一。則與二孟子之說一異矣。不下復就二發用一爲上レ言。而求下其善于未レ有二善惡一之先上。則不三徒非二孟子之旨一。而詩書六經之所レ未二嘗言一。沿襲之久。遽難レ易レ轍。不二亦可一レ歎哉。

又曰。惻隱之心。仁之端也。羞惡之心。義之端也。辭讓之心。禮之端也。是非之心。智之端也。○

レ不二由レ此而行一。猶下脚之不レ可レ不中必由二官道正路一而走上。故名レ之曰レ道。本就二踐履上一立レ言。豈有二一物可ト認。而要レ問一其所二寓在一乎哉。聖人率二天下一以レ道者。將下以使中天下之人。舉皆脩二此事一以得上爲レ人也。非レ欲レ使下講二究其理一以知中其所上在也。故曰。道如二大路一然。豈難レ知哉。古之立レ言。稱二其大一曰峻極二于天一。贊二其明一曰察二乎上下一。亦皆此事也。故易曰仁者見レ之謂二之仁一。知者見レ之謂二之知一。百姓日用而不レ知。後世之學。不二此之出一。而枉二費工夫一。必欲レ究二其所レ寓一。或求二之于心一。或失二之于理一。而曰二道在一焉。則是淫二佛老莊氏之說一。而失二聖人立敎之旨一矣。

又曰。口之於レ味也有二同嗜一焉。耳之於レ聲也有二同聽一焉。目之於レ色也有二同美一焉。至二於心一獨無レ所二同然一乎。心之所二同然一者何也。謂理也。義也。聖人先得三我心之所二同然一耳。故理義之悅二我心一。猶三芻豢之悅二我口一。

胤按。孟子到レ此以二理與ト義併說。按說文曰。理從レ玉里聲。本言三玉石有二文理一也。曰地理。曰倫理。曰脈理。曰腠理。孟子說レ樂。亦曰下始二條理一終中條理上。言三八音之無レ相二奪倫一也。皆自レ此假借通用。推二之人事一。可否從違之間。各有二條脈一。井然不レ亂者。名レ之曰レ理。亦百行中之一事。與二義字一其意相近。故曰。理義之悅二我心一。猶三芻豢之悅二我口一。易所レ謂窮レ理盡レ性。中庸所謂文理密察。其義亦然。未乙嘗謂下天之所ヨ以爲ト天。人之所ヨ以爲下人之故上以爲甲レ理也。且孟子言レ理。纔見二此一章一而已。亦且與レ義併言。後世之書。括二五常百行一。而歸二之一理一。不レ言レ理則無二以爲ト學。亦可レ見二古今之變一矣。

也。且語聖人之治。必稱仁義禮樂。而荀卿董仲舒之書亦屢言之。則古所謂仁義之實可知矣。又曰。先儒以五行配五性。則此四者各是一事。其具於性也。猶木火金水之各異其質。今玩孟子之言。則雖五者兼擧。而首提仁義二者。而禮智與樂。所以維持之也。與五行各一其性者不同。其言樂而不言信。亦與後世之說異矣。

孟子曰。愛人不親反其仁。治人不治反其智。禮人不答反其敬。

胤按。孟子到是併言仁智敬。敬即禮也。而不言義。蓋此三者皆所以接人之道也。故特併擧以示人。可見聖賢之敎人。隨宜設方。不可以一律概也。

孟子曰。夫道若大路然。豈難知哉。人病不求耳。

又曰。道在邇而求諸遠。事在易而求諸難。人人親其親。長其長。而天下平。

胤按。道之爲名就行事上爲言。其實不過親親長長。而仁義二者乃其大綱紀也。此二章其旨尤明矣。而後世見道過高。遂以仁義禮智爲性之名。而曰道出於性。先子慘淡經營。百艱備嘗者。殆三十餘載。賴天之靈。恍有見乎其旨之非是。乃曰仁義禮智乃天下之達道。而非性之名也。或者疑於其無所寓在。動致紛紜。夫道者非佗。乃人事之當然耳。故孟子既曰道在邇。而又曰事在易。此可見矣。蓋百里之國必有君長。十家之聚。必有聯伍。必有父子。必有夫婦。必有兄弟朋友。人處乎其間。接之不可不以其道。此即是道。外此而別無可以爲道者。推諸天下。而天下之人。莫不皆然。通之古今。而古今之人。莫不皆同。凡爲人者身之不可

不レ足三以爲二萬世之達道一。蓋不レ然也。嘗レ諸有二天地一以來。斯有二陰陽二氣一。流二行萬古一。而無レ有二終始一。然名レ之者人。而其見二於書一則始見二於易一。仁義之爲レ道亦然。古雖レ無二其名一。而聖王之所三以御レ世理レ物。而億兆之相生養一者。非二此二者一則不レ能。而推二之萬世一亦無レ不レ然。則此自然之道也。不レ知三其誰所二併言一。而人間通稱。以爲二聖人之道一。故孟子從レ之以倡二導天下一焉耳。何以三古無二其月一。而難二於言一レ之耶。

孟子曰。惻隱之心仁也。羞惡之心義也。恭敬之心禮也。是非之心智也。

胤按。至レ是以レ智配二仁義禮一。而四德之名始具矣。其爲レ教雖レ出二夫子之意一。而四者併舉以爲二人道之綱一。則孟子之言。萬世不レ可二移易一也。此蓋因三公都子疑二於性善之說一。故以二四心一配二之仁義禮智一。而明二其爲一レ善。仁義禮智者。天下之達德也。所謂懿德也。四端之心者。在レ我之善心也。所レ謂秉夷也。我心之善。能行二天下之道一。故知二人性之爲一レ善也。引レ詩以明レ之。其旨尤彰彰矣。其佗或稱二仁義忠信一。或稱二孝弟忠信一。孝經載二夫子之言一。列二舉孝弟樂禮四者一。亦皆就二人之所一レ行。而彼此相偶以爲レ言耳。

孟子曰。仁之實事レ親是也。義之實從レ兄是也。智之實知二斯二者一弗レ去是也。禮之實節三文斯二者一是也。樂之實樂二斯二者一。樂則生矣。生則惡可レ已也。惡可レ已則。不レ知二乎足之蹈レ之。手之舞一レ之。

胤按。孟子至レ是亦以レ樂。配二仁義禮智一爲レ言。夫樂有二文采之可一レ見。有二節奏之可一レ聞。人事之最著焉者也。而配二之仁義一以爲レ言。則知所レ謂仁義。亦是儼然著二於人事一者。而非下具二於心一之理上。

胤按。六經不レ言レ誠。言レ誠始ニ於中庸一。然論語言ニ巧言令色鮮矣仁一。則言雖レ不レ及レ誠。而亦可ニ以爲レ誠矣。中庸引ド夫子對ニ哀公一之言上。言レ誠始詳。而與ニ孟子之言一。互相出入。今審ニ其言一。所レ謂誠者。專就ニ制行心術一立レ言。聖人之德。無レ所ニ造作一。謂ニ之天之道一。賢者已下。修爲以求レ至レ之。謂ニ之人之道一。猶ニ天爵人爵之謂一也。皆自ニ治レ民獲ニ乎上一。節節推究。以至ニ反レ身之誠一。則固人之要道也。先儒解ニ中庸一曰。誠者眞實無妄之謂。天理之本然也。解ニ孟子一曰。誠者理之在レ我者。皆實而無レ僞。天道之本然也。則通ニ天人一言ド其所ニ以然一之故上。亦大極之別稱也。於レ是乎誠亦爲レ理矣。與ニ反レ身而誠之謂一。大爲レ不レ同。

○論ニ孟子立敎之旨一

孟子告ニ梁惠王一曰。王亦曰ニ仁義一而已矣。何必曰レ利。

又曰。仁人之安宅也。義人之正路也。曠ニ安宅一而弗レ居。舍ニ正路一而不レ由哀哉。

王子墊問曰。士何事。孟子曰。尙レ志。曰何謂レ尙レ志。曰仁義而已矣。殺ニ一無罪一非レ仁也。非ニ其有一而取レ之非レ義也。居惡在仁是也。路惡在義是也。居レ仁由レ義 大人之事備矣。

胤按。夫子每言ニ仁知一。而仁義並稱。僅見ニ于中庸哀公問政章一耳。至ニ孟子一開卷。便言ニ仁義一。橫說豎說。莫ニ往而非ド敷ニ衍此旨一。蓋當時聖王不レ作。諸侯放恣。處士橫議。楊朱墨翟之言盈ニ天下一。是邪說誣レ民充ニ塞仁義一也。故倡ニ此二者一以爲ニ人綱人紀一。傳ニ之萬世一。而莫ニ之能違一焉。先儒推ニ尊其功一爲レ不レ在ニ禹下一者以レ此故耳。或曰。孟子每並ニ言仁義一。而自レ是而前。聖人不ニ必言一也。然則

子曰。仁者人也。親親爲大。義者宜也。尊賢爲大。親親之殺。尊賢之等。禮所生也。

胤按。至是始以禮配仁義而言之。中庸雖係子思所作。此言也固夫子答哀公之言矣。蓋以禮爲節文仁義之具。則猶克己復禮爲仁之意。而欲以仁義爲綱。而禮以維持之也。

子曰。天下之達道五。所以行之者三。曰君臣也。父子也。夫婦也。昆弟也。朋友之交也。五者天下之達道也。智仁勇三者天下之達德也。所以行之者一也。

又曰。好學近乎知。力行近乎仁。知恥近乎勇。知斯三者。則知所以修身。知所以修身。則知所以治人。知所以治人。則知所以治天下國家矣。

胤按。此子思引夫子之言。以明學問之大旨。讀者視以爲老生常談席上腐議。別求法捷。或趍他岐。而不知此三節百五十餘字。而人倫之道。學問之法。莫不總括管攝乎此中。而始終本末具見乎此。唯當墻壁之。宥坐之。以修其身。貢之萬乘。以敷告域中而不可忽焉者也。蓋五品之敎。契之所敬敷。而智仁勇三者。夫子之所以爲君子之道。天下之人莫不囿乎此中。而學以修之。則可以與聖同功。故先叙五品之道。而繼之以智仁勇三者。而及終乃曰及其成功一也。其皆豈不明且備矣乎。

子曰。誠者天之道也。誠之者人之道也。誠者不勉而中。不思而得。從容中道聖人也。誠之者。擇善而固執之者也。

孟子曰。誠者天之道也。思誠者人之道也。至誠而不動者。未之有也。不誠未有能動者也。

同群。此豈人性之所欲。而通天下之道也哉。故曰率性之謂道。此語道也。非語性也。所重在道不在性。記曰禮者因人之情而爲之節文。以爲民坊者也。其語意正相類。後世因此。乃曰循性之自然則是道。此其說出乎貴性。而與子思之旨有毫釐千里之差。所重在性不在道。火于秦。黄老于漢。佛于晉宋魏隋齊梁之間。鴻烈解祖乎老者也。其言曰。率性而行謂之道。得其天性謂之德。性失然後貴仁。道失然後貴義。復性書淫乎佛者也。其言曰。率性之謂道何謂也。循其源而反其性者道也。二書之旨。蓋欲援儒而從其所好。則其言之乖刺。固不足辨也。朱子閑先聖之道。而辨佛老之妄。攘斥觝排。不遺餘力。而解中庸乃曰。人物各循其性之自然。則其日用事物之間。莫不各有當行之路。是則所謂道也。則與劉安李翺之言。爲不甚異焉。且不唯就人說。而亦推之萬物。則益可疑也。夫君子之於天下也。親親而愛民。愛民而仁物。故教之所施。唯在於人。方長不折。方生不殺。固雖在一仁之中。而其暢茂也斬伐焉。其蕃息也驅逐焉。去害除患。以安息斯民。此聖人之政也。豈可謂之率物之性哉。其說蓋始以性爲萬物之一原。而遂通人物而言。學者不可不辨焉。又曰此章列舉性道教三者以爲言。性者己之生稟也。道者天下之標準也。教者所以以道治性之方也。聖賢之教人。其言非一。而莫不總括于此三言。曰心。曰情。曰才。曰意。等名。皆性之屬也。曰仁。曰義。曰德。曰禮。曰理。等名。皆道之屬也。言其方法。乃教之事也。若夫以道爲循性之自然。則三者混合無辨矣。

不レ違レ仁是也。其資之生知。而能造ニ其極一。則聲律身度。純亦不レ已。心之與レ道。吻合無レ間。夫子之從ニ心所ㇾ欲不レ踰レ矩是也。曰レ仁曰レ矩。皆道也。是知心非レ貴。亦非レ賤。唯道爲ニ獨尊一。此夫子立言之本旨也。大抵當ニ夫子之時一。心性無ニ善惡之說一。然曰ニ人之生也直一。又曰下斯民也三代之所ユ以直レ道而行一也上。則其把ニ人性一以爲レ善。固不下待ニ孟子一而知上矣。後世見レ心甚貴 疑ニ乎操舍存亡之言。非ニ貴レ心之說一。却曰。孟子不レ識レ心。心豈有ニ出入一。嗚呼。斯言也。雖レ載ニ於孟子一。而實夫子之所レ言。則豈可下以ニ夫子一爲上レ不レ識レ心哉。後世之學所ユ以與レ古背馳一者。職此之由。

○論ニ子思立敎之旨一

中庸曰。天命之謂レ性。率レ性之謂レ道。修レ道之謂レ敎。

胤按。子思之時。去レ聖已遠。道術爲ニ天下裂一。或駕ニ荒唐謬悠之說一。以招ニ天下一。多岐亡レ羊。無レ所ニ適從一。將何以知ニ其正一而從レ之耶。亦視下其率ニ人之性一與上レ否而已耳。於レ是子思作ニ中庸一。首揭ニ三言一曰。天命之謂レ性。率レ性之謂レ道。修レ道之謂レ敎。此語レ道也。非レ語レ性也。故其下繼レ之。乃曰道也者不レ可ニ須臾離一也。可レ離非レ道也。當時蓋有ニ以レ可レ離爲レ道者一。豈謂ニ可レ離非一道也哉。又曰道不レ遠レ人。人之爲レ道而遠レ人。不レ可ニ以爲一レ道。當時蓋有ニ遠レ人以爲レ道者一矣。若無ニ遠レ人以爲レ道者一。豈謂下遠レ人不上レ可ニ以爲一レ道哉。率レ性之謂レ道亦然。君臣之義。父子之親。人之天性也。飮食男女。人之大欲存焉。亦人之性也。聖人之道。則循レ是以爲ニ之節文條目一。猶三導レ水而行ニ其所一レ無レ事也。彼潔レ身亂ニ大倫一。自以爲レ是。而至下與ニ鳥獸一

則人之賢否專係二乎性一。而非三學之所二能遷一也。資質庸下者。雖二勉慕跂及一。不レ可二以有一レ進。故爲レ之明二其不一レ然。謂人性之智愚賢不肖。本不二甚相遠一。唯因二所レ習之善惡不一レ同。賢人君子之德。日造二其高明正大一。而衆人則終身汨二沒乎卑汚賤陋之中一。而不レ知二自反一。遂致二甚懸遠一。故言レ之如レ此。此非レ說レ性也。言下習之不レ可レ不レ愼。而敎之不上レ可二以已一也。亦學之事也。其曰二有レ敎無一レ類亦爾。後世見レ性甚高。以爲二萬物之一原一。而嫌二乎此章說レ性專就レ氣爲レ言而不一レ涉レ理。則謂此非レ說二性之本一。必如二易之所レ云繼善成性一。而後可三以爲二性之來歷根原一矣。又曰此兼二氣質一而言。皆不レ得レ已之說耳。十翼之作二於夫子一。既不レ可レ信。則欲レ稽二夫子言レ性之旨一者。唯當下以二此章一爲二根本準則一焉可上矣。

子曰。七十而從二心所一レ欲。不レ踰レ矩。

又曰。回也。其心三月不レ違レ仁。

又曰。操則存。舍則亡。出入無レ時。莫レ知二其鄕一。惟心之謂與。

胤按。心字見二於論語一者凡三。而夫子言二心之用一者。只二章而已。而孟子又載二一章一。蓋存亡出入。莫レ知二其鄕一者。泛通二天下之人心一而言。三月不レ違レ仁者。賢者之心也。所レ欲不レ踰レ矩者。聖人之心也。何者人之性雖レ善。而心之所二運用一。不レ免三乎有二是非邪正存亡出入之差一。必有レ道以爲二之準則一。而後吾心有レ所二持循一。而可二以進一レ德矣。權誠懸則不レ可三欺以二輕重一。度誠設則不レ可三欺以二長短一。道者人心之權度也。故其資之既美。而用レ工之亦至。則吾心之違レ此者寡矣。顏子之其心三月

之流行也。此非二聖賢之意一矣。大抵聖賢言レ命。常就レ氣而言。未三嘗以レ理而言二。常據二今日所一レ値爲レ言。而未下嘗原二當初稟受之時一而言上。學者或知二就レ氣說一レ命。而多溯二有生之初一以求レ之。而不レ知下只因二當日所一レ値而言上。故於二聖賢之言一。扞格支吾卒不レ免二乎致一レ疑。要不レ得二聖人言レ命之本旨一故耳。何者聖賢之敎レ人。千言萬語。無三一句而非二受用一。不レ成下只講二究其理一便了上也。人之在レ世也。同事二是君一。而或遇或不遇。同爲二是事一。而或得或不レ得。則遇而得者。固無レ所レ憾焉。其不レ遇而不レ得者。雖二中材以上之人一。不レ免レ有二無聊不平之念一。聖人爲レ是說三出命字一。夫已苟非レ有レ致。則所レ値之吉凶禍福。莫三往而非二天命一。雖二困窮鬱拂頓挫摧抑之甚一。亦何怨悔之有。故曰不レ知レ命無三以爲二君子一也。此其所下以レ使中人安二于所一レ遇。而不上以二富貴貧賤毀譽得失一有上レ動二於其心一。正是受用第一事。若夫泝二有生之初一。而究二其所一レ稟如何一。則雖二聖智者一亦有レ不レ能レ知矣。故平日戒愼恐懼。修身飾行。兢兢焉唯失二墜厥命一是懼。所以曰。知レ命者不レ立二巖牆之下一。及二其至一也。吉凶禍福。各安二其境一。坦然泰然。處レ之不レ疑。乃曰五十而知二天命一。是乃學問之極功。聖人之能事。非三學者之可二容易論一也。是知古之所レ謂命云者。專言レ氣而不レ言レ理。據レ所レ遇爲レ言。而不レ可二泝レ所レ受而求一也。

予曰。性相近。習相遠也。

胤按。性字見二於論語一者二。而其一出二於子貢之言一。則夫子之言レ性。只此一章而已。蓋聖賢之言。多有レ因而發。玩二此章之旨一。豈當時之人。有乙謂下聖賢之性與二衆人之性一懸遠不中相近上者甲乎。其然。

思。傳授心法。在一中字者則非矣。蓋敎之有中庸。猶處方者之有分兩也。雖仁義禮智之德。而唯專是一事。而不能相通。唯中庸也者。則不必有所指。而凡事不以此爲準。則賢者失之於過。愚不肖者失之不及。而遂使道之不行不明。此夫子之所以寄慨也。凡世之所以塗塞民之耳目。而榛蕪正路者。皆坐不知此道故耳。中庸之德。不其大乎。

子曰。不知命。無以爲君子也。

又曰。五十而知天命。

又曰。道之將行也與。命也。道之將廢也與。命也。

子夏曰。商聞之矣。死生有命。富貴在天。

孟子曰。莫之爲而爲者天也。莫之致而至者命也。

又曰。孔子進以禮。退以義。得之不得曰有命。而主癰疽與侍人瘠環。是無義無命也

又曰。知命者。不立乎巖牆之下

又曰。吾之不遇魯侯天也。臧氏之子。焉能使予不遇哉

胤按。詩書多言命。皆就福善而言。及禍淫則謂之墜天命。語孟以來。始通吉凶而言。豈時世之致然乎。蓋吉凶禍福自然而至。謂之天命。聖賢之告人。毎就此以爲敎。使人安於所値。而不動其心。宋儒以來。斥此以爲氣之命。而指本然之妙在天者。以爲理之命。猶性之有本然氣質之別也。其言曰。在天爲命。在人爲性。在物爲理。又曰。大極之有動靜。天命

故説恭。容貌詞氣之間。不可倨傲以取侮。故説恭。執事奉上之間。不可怠慢以致失。故説敬。處事不可有過不及之差。故説中。不可爲怪詭激昂之行。以取駭異。故説中庸。不可多岐以分其工夫。故説一。乃至曰剛。曰直。曰敏。曰遜。曰恒。曰忍。亦皆因事施敎。而有以相濟。總而名之。則爲道爲德爲行。見於事。則爲詩爲樂爲藝爲文。皆人之不可不從事焉者也。故夫子之敎人。或單而言之。或偶而言之。小大相待。偏全兼擧。參伍錯綜。以立之言。如上所載諸文也。蓋人之應務。固非一事。則其所以修之之方。亦不可不各因其事以設之敎。故彼此相濟。以全其功。豈可徒執一以廢百哉。堯舜以來。漸次詳明。而夫子之敎。爲最大且備。以至高第弟子之言。亦皆述其所聞。互相發明。猶眞醫之用方也。甘苦溫涼。相偶以立方。救療百疾。各奏其效。夫子之時。雖未嘗併言仁義禮智。而仁義禮智之敎。間見錯出。莫不備於二十篇中。至孟子祖述而羽翼之。演繹其義。無復餘蘊。若唯仁義禮智四者爲性之名。則聖賢之語配之他事而言者。豈非不倫之甚乎。是知仁義禮智四者。乃生民之大綱紀。見於行事之實。而非性具之定名也。

子曰。中庸其至矣乎。民鮮久矣。

又曰。君子依乎中庸。遯世不見知而不悔。唯聖者能之。

胤按。中庸之名。始見於此。原夫虞廷授受之間。每必言中。但言處事無過不及者耳。至於所謂中庸。則所指稍不同。乃謂平易從容。萬世不可易之道也。先儒謂堯舜已來。至於子

而不下以二禮義一爲上度。而徒執二其一一。則偏重而不レ免二於有一レ蔽。故信必要レ近レ義。恭必要レ近レ禮。信既近レ義矣。恭既近レ禮矣。則固無二其蔽一。然或失二乎方正儼恪一。而無レ有二和氣一。則未レ可也。故既因レ有二斯二者一。而亦能不レ失二其和一。則剛柔相濟。陰陽合レ德。無レ失二乎一偏之蔽一。豈不レ可二宗敬一乎。有子嘗以二孝弟一爲二仁之本一。至レ是亦併二言禮義一。則雖レ不二相比爲一レ言。仁義禮三者。爲二人道之綱紀一。亦可二槩見一矣。中庸孟子之言。豈互相祖述耶。

曾子曰。吾日三省二吾身一。爲レ人謀而不レ忠乎。與二朋友一交而不レ信乎。傳レ不レ習乎。

胤按。曾子日以二此三者一省二其身一。先レ之以二忠信一而又曰傳レ不レ習乎。蓋曾子常時齒德兼高。常爲レ人所二師資一。故自省妄傳下不二習熟一之事上以誤レ人耶。此專就二自己身上一爲レ戒。非三泛爲二世戒一也。讀者不レ達。或疑三其有二遺教一者何哉。且嘗爲二門人一約二夫子之道一云。忠恕而已矣。其事雖レ異。而其意相符。皆爲レ人之事。而求レ仁之方也。夫子答二樊遲問一レ仁。與レ人忠在二其一一。答二子張問一レ仁。信則人任在二其一一。亦可二併見一矣。然則此三言雖レ蔽二夫子之道一。亦豈不レ可哉○又按。夫子祖二述堯舜一。憲二章文武一。集二群聖一而大成。其言全備二于魯論一。而所三以教二人者。非二復一法一。蓋人之相與親愛保護。不レ可三毫有二殘忍刻薄苟且欺慢之心一。故說レ仁此道之宗而人之所三以爲二人也。是非取捨之間。不レ可レ不レ知レ所レ擇。故說レ智。貴賤親疎之等。進退辭受之際。不レ可レ無二節文一。故說レ禮。造道之方。不レ可レ無二進取之志一。故說レ勇。死生得失之間。不レ可レ不レ辨二其可否一。故說レ義。言行不レ可レ違二其所一期。故說レ信。己之於レ人。不レ可レ不レ盡二其心一。故說レ忠。人之好惡苦樂。體二之於己一。不レ可レ不レ察。

胤按。此夫子言百行之以禮爲則也。蓋恭愼勇直。人之善行也。然而無禮則必有其蔽。故夫子歷舉而詳言之如此。

子曰由也。汝聞六言六蔽矣乎。對曰未也。居吾語女。好仁不好學其蔽也愚。好知不好學其蔽也蕩。好信不好學其蔽也賊。好直不好學其蔽也絞。好勇不好學其蔽也亂。好剛不好學其蔽也狂。

胤按。此夫子併敘六德。言百行之不可不學以成也。蓋人好學則通古今明監戒。故智仁信直勇剛六者。雖行之美者。而唯好此一德。而不知好學。則必不免有其蔽。學之不可以已也尙矣。觀其曰女聞六言六蔽乎。則知斯言也蓋古之遺言。而夫子誦而傳之。非特爲子路而發也。且智仁勇三者。天下之達德也。而配之以剛信直。謂之六言。則聖賢之設敎。不必拘拘。而五常之性。非古者之言。亦可見其一端矣。

子張問仁於孔子。孔子曰能行五者於天下爲仁矣。請問之。曰恭寬信敏惠。恭則不侮。寬則得衆。信則人任焉。敏則有功。惠則足以使人

胤按。此夫子列舉恭寬信敏惠五者。以示行仁之方。蓋能行此五者於天下。則有慈愛恩惠之實。而無苟且欺慢之失。所以爲仁也

有子曰。信近於義。言可復也。恭近於禮。遠恥辱也。因不失其親亦可宗也。

胤按。此有子明人之制行以禮義爲則。而亦當剛柔相濟不失一偏也。蓋信恭者人之善行也。

順成之必以誠信。而後可以爲君子矣。禮也。遜也。信也。皆所以輔夫義也。

子曰。人而無信不知其可。大車無輗。小車無軏。其何以行之哉。

又曰。自古皆有死。民無信不立。

胤按。此夫子專擧信一事。以示人之要道。蓋人之言行。苟且率易。趣便目前。而不要其終。則假令爲善。卒不足賴也。故夫子比之輗軏。又重之於兵食。人之不可無信。有如此夫。

子曰。上好禮則民莫敢不敬。上好義則民莫敢不服。上好信則民莫敢不用情。夫如此則四方之民。繦負其子而至矣。

胤按。此夫子擧禮義信三者。以言化民之要。蓋民不從其所令。而從其所好。禮義信者。人之大閑也。上好之。則民之於上。敬服用情。各以其類應。明上之不可不愼好惡也。

子曰。知及之。仁不能守之。雖得之必失之。知及之。仁能守之。不莊以涖之。則民不敬。知及之。仁能守之。莊以涖之。動之不以禮未善也。

胤按。此夫子併叙知仁莊禮四者。言守位臨民之要也。蓋知及之矣。則審是非之分。明得失之機。可以臨民。然非仁守之。則愛之不周。無以保其位。仁能守之矣。則可以保其位。然不莊以涖之。則威儀不嚴。而民無所觀感。莊以涖之矣。而動之不以禮。則不能移風易俗使民有恥且格。亦非治之至者也。故四者先後相叙。本末兼擧以爲言也。

子曰。恭而無禮則勞。愼而無禮則葸。勇而無禮則亂。直而無禮則絞。

胤按。此列二道德仁藝四者一。以示二學者終身之業一。蓋人不レ可レ不レ知レ所レ向。故曰レ志二於道一。不レ可レ不レ知レ所レ任。故曰レ據二於德一。仁者身之不レ可レ不二依而行一焉者也。故曰レ依。藝者事之不レ可レ不二時而講一焉者也。故曰レ游。自レ大至レ小自レ重之レ輕。修レ身之敘備矣。大抵聖賢之敎レ人。大小相濟。偏全並擧。以示二之方法一。統而言レ之。則曰二道德一。分而言レ之。則仁義禮智之目別。故或曰二尊レ德樂一レ道。或曰二尊レ德樂一レ義。以使二人知一レ所レ趨。其言不レ一。而此章乃其最大且備者也。後世之學。專主二乎心理一。好レ管二歸一路一。故竟不レ釋二然於此章一。而疑二乎其旨之多端一。不レ知既謂二之道一。則有二道之可一レ言。既謂二之德一。則有二德之可一レ言。而至二仁與一レ藝。亦莫レ不レ然。則各不レ可レ無二其工程一。聖人蓋合而敘レ之。以示二學者一使レ知レ所二從事一焉耳。復何容レ疑。

子曰。興二於詩一。立二於禮一。成二於樂一。

胤按。此夫子列二詩禮樂三者一。以示二進德修業之敘一也。詩以道二人情一觀二世變一。讀レ之則可三以感二發人之志意一。故先レ之以レ興二於詩一。而禮者所三以檢二束威儀一。樂者所三以陶二寫性情一。故立二於禮一成二於樂一次レ之。古昔之言二禮樂一。猶二後之讀レ書講一レ理也。而夫子屢以二詩與一レ禮併言。此其所三以列二擧三者一乎。

子曰。君子義以爲レ質。禮以行レ之。孫以出レ之。信以成レ之。君子哉。

胤按。此夫子專擧二義一事一。輔レ之以二禮孫信一。以明二君子之道一。蓋人雖二或知一レ行レ義。而多傷二悖戾一。徒形二於外一。而少二誠實之心一。竟不レ能レ成二其事一。故既以レ義爲二質幹一。而行レ之必有二等差一。出レ之必以二遜

私一以反中天理上。則以レ禮爲レ理。夫聖人之言。因レ事設レ方。各有二條貫一。愛レ人之德謂二之仁一。節文之著謂二之禮一。要當下審二聖賢立言之本旨一。而辨中識其義上焉。

子曰。知者不レ惑。仁者不レ憂。勇者不レ懼。

又曰。君子道者三我無レ能焉。仁者不レ憂。知者不レ惑。勇者不レ懼。子貢曰。夫子自道也。

胤按。夫子每併二擧知仁勇三者一爲レ言。亦必就二其人一而言。以爲二君子之道一。蓋智者所二以知一レ之也。仁者所二以守一レ之也。而非レ勇則無二以進一レ之。故人不レ可レ無二智識一。不レ可レ不二慈愛一。亦不レ可レ不二剛徤一。此三德之所二以立一。而凡聖賢敎法名目。擧皆如レ此。譬二諸行一レ道。智猶二目之能視一也。仁猶二足之能行一也。而無二欲レ行之志一。則不レ能レ致レ遠。三者不レ可レ闕レ一。此其所二以併言一乎。或曰。智仁勇一也。中庸以爲二天下之達德一。而夫子則曰二君子之道一者何也。曰。道德二字。百行之統名也。就二衆人上一。以三其所二同行一而言。則謂二之道一。就二各人上一。以三其所二俱得一而言。則謂二之德一。五倫之交。貴賤尊卑之所二相與通行一。猶三衆人之奔二走大路一。故謂二之天下之達道一。智仁勇三者。則其所二自得而專有一者。猶下衆人之各服二其衣一。各居中其室上。故謂二之天下之達德一。各服二其衣一。各居二其居一。雖二一人之所一レ私。而推二之天下一。莫レ不二皆然一。故與レ道同得謂二之達德一也。蓋道卽是德。自二其當一レ行謂二之道一。自二其當一レ得謂二之德一。故智仁勇三者。中庸以爲二天下之達德一。而夫子則曰二君子之道一。各以二其所一レ專而言耳。中庸又曰。苟不二至德一。至道不レ凝焉。亦可レ見二其別一矣。

子曰。志二於道一。據二於德一。依二於仁一。游二於藝一。

則專爲除惡工夫。吾謂是長善工夫耳。觀夫子平素所以教人者。專以仁禮爲則。以脩其身。德於是乎進。業於是乎修。乃曰君子去仁惡乎成名。又曰恭而無禮則勞。愼而無禮則葸。勇而無禮則亂。直而無禮則絞。夫子之所以鑄顏者。豈亦外此而別有可言者哉。故曰夫子循循然善誘人。博我以文。約我以禮。然則此章所云克己復禮者亦是一禮事例。平日博文約禮中之最大者也。且其解非禮爲身之私欲。亦可疑也。姦聲亂色。是在外之物。戒以勿視聽。則可聞也。使非禮爲身之私欲。則是在己之物。何以得勿視聽。亦當曰勿視非禮。而不可曰非禮勿視。乃至聽言動三者亦然。蓋以禮爲準則。而欲視聽言動必於是也。此守仁之法也。

子曰。人而不仁如禮何。人而不仁如樂何。

孟子曰。以仁存心。以禮存心。

胤按。聖賢言仁禮。或二者相並以言。或二者相須以言。蓋人之所行。徒盡節文度數之詳。而無有慈愛之心以將之。則雖義文可觀。而其本則無。固不足取也。故曰人而不仁如禮何。此言禮之不可不本夫仁也。其或徒有博施濟衆之德。而無有親疎之等以辨之。則雖慈愛有餘。而泛濫無節。亦不可行也。故曰克己復禮爲仁。此言禮之節文夫仁也。彼此相待。交互以立言如此。若夫孟子所謂。以仁存心。以禮存心。則相並以爲言。明以愛敬存其心也。皆所以接人之方也。後世解曰失正理則無序而不和。則以仁爲理。又曰克去己

敏。請事斯語矣。

胤按。夫子至是以仁與禮併言。顏子王佐之才。故告之以仁天下之道也。蓋人之所患。唯知有己而不復知有人。遂彼此町畦。隔阻胡越。甚而至作鬪挐攫奪攘篡弑之慘。故欲行仁者。在於克去其有己之心。以汎愛衆人。然親天下之人。如己之父兄子弟。亦有勢之所不能。而已亦不得親其父兄子弟。故有禮以差其貴賤親疎之等。辨其輕重隆殺之宜。而後仁有以行矣。猶土地之廣。而分都鄙之章。宮室之宏。而設奧阼之位也。雖天下之大。以此臨之。亦莫難治者。而其機在我非由人也。故曰克己復禮。天下歸仁。爲仁由己而由人乎哉。是知仁者安人之道。而禮者所以守之也。及問其目。乃曰非禮勿視。非禮勿聽。非禮勿言。非禮勿動。蓋視聽言動者。己之自身者也。禮則其所取準。猶造器者之有規矩準繩。以制方圓平直也。中庸敍九經。其初一曰。齊明盛服。非禮不動。所以脩身也。、在易履之象曰。上天下澤履。君子以非禮不履。亦皆同意。而言行禮以爲修身之則也。顏子聞之。自知其力足能任。即對曰回雖不敏。請事斯語。聖聖相傳。以此告之。乃人治之大且至者也。先儒解克己復禮。謂克去己私。以復天理。而又曰非禮者身之私欲也。此不得其解。何也。人之所爲。不過善惡二端。故人之所以爲學者。亦不出於長善與除惡二途。後世則以存養省察分之。而替聖賢之所以教人者。專在長善。而除惡工夫。不及其半。後世之學。只管除惡。而善亦不待長。今審夫子之所以告顏子者。將以爲長善工夫耶。將以爲除惡工夫耶。據先儒說。

胤按。曾子以仁爲君子之任。亦猶夫子之意也。蓋仁者天下之大德。君子以此爲任。猶人之負荷重載。擔當大事。故曰仁以爲己任。不亦重乎。若使仁爲具於心之理耶。則如鏡之明。如劍之利。在我而不可違。何得以爲任哉。其他如曰好仁曰求仁。亦然。欲以此爲美而好而求之也。若不然。聖賢之語殆類歇後。不如直曰無欲主靜之爲省力也。

子曰。仁者安仁。知者利仁。

又曰。知者樂水。仁者樂山。知者動。仁者靜。知者樂。仁者壽。

又曰。里仁爲美。擇不處仁。焉得知。

子貢曰。學不厭知也。敎不倦仁也。仁且知。夫子既聖矣。

孟子曰。唯仁者。爲能以大事小。是故湯事葛。文王事昆夷。唯智者。爲能以小事大。故大王事獯鬻。勾踐事吳。

又曰。智者無不知也。當務之爲急。仁者無不愛也。急親賢之爲務。

胤按。夫子每對擧仁知二者。常就其人而言。皆成德之名也。故子貢語聖。則兼仁知二者而言。張子所謂仁智合一存乎聖是也。而其曰里仁爲美者。蓋智者所以知仁之不可不行。孟子所謂知斯二者而不去之意。而雞犬桐梓等喩。亦此意爾。

顏淵問仁。子曰。克己復禮爲仁。一日克己復禮。天下歸仁焉。爲仁由己。而由人乎哉。顏淵曰。請問其目。子曰。非禮勿視。非禮勿聽。非禮勿言。非禮勿動。顏淵曰。回雖不

言欲富貴而惡貧賤。人之常情也。然君子之於此也。不以爲常情而忽之。言動制行。必於道乎是揆焉。故苟不以其道。則雖身得富貴而不處。泰伯以之。三讓天下。逃竄荊蠻。必以其道而處。則爲周公。王室之親。躬位冢宰。雖身得貧賤而不去。顏閔以之。簞瓢陋巷。不改其樂。必以其道而去。則爲伊尹。崛起畎畝。爲商阿衡。道者何也。仁是也。故繼之曰。君子去仁惡乎成名。君子無終食之間違仁。造次必於是。顚沛必於是。可見不徒處富貴貧賤之間爲然。雖急遽苟且之頃。顚覆流離之際。莫不從事於此。則夫子以仁爲道之總腦。於是可見矣。後世論者。出處進退之間。常必以義斷之而不及仁。而夫子必言仁者。蓋古者之學。本乎爲人。後世之學。專於一己。故此章亦以仁言之。管仲之不死子糾之難。子路子貢不責其蔑義。而疑其不仁。其意亦然。聖人言仁之旨。思過半矣。

有子曰。其爲人也。孝弟而好犯上者鮮矣。不好犯上。而好作亂者未之有也。君子務本。本立而道生。孝弟也者。其爲仁之本與。

胤按。此有子贊孝弟之爲美德。以爲仁之本也。蓋其爲人孝弟者。資質之最美者也。故仁覆天下之盛。亦胚胎乎此矣。故曰。孝弟也者。其爲仁之本與。參之孟子之言。則保四海之化。本於四端之心。達天下之德。基於良知良能。其言雖異。而其旨一也。與後之所謂性中只有仁義禮智四者而已。何嘗有孝弟來者。大有進反之差。可不辨哉。

曾子曰。士不可以不弘毅。任重而道遠。仁以爲己任。不亦重乎。死而後已不亦遠乎。

子懼。然則獲麟一款。非二春秋起止之所一レ由也。公穀二家本偶脱二二年經一。范甯倡二臆料之言一。而後世諸儒。從而附和。其說已成。而牢不レ可レ解。要當下據二孟子一爲レ斷。面審中夫子筆削之意上云○又按。當二夫子之時一。周室衰亂。正道湮晦。先王之禮。廢而不レ講久矣。夫子爲レ之斥二僭亂一。正二名分一以救二當世之亂一。作二春秋一正爲レ是耳。時有二遺世絶俗之士一。高蹈遠引。獨善二其身一。而不レ可二一世一。託二迹乎荷蕢晨門之間一。或立レ言著レ書。鄙二堯舜一而薄二湯武一。潛レ心之至。妄下意乎萬有之森二羅霄壤之間一者。其本必根上無。遂以二虚無一爲レ言。老列之徒是已。其言曰。有レ物混成。先二天地一生。寂兮寥兮。獨立而不レ改。周行而不レ殆。可三以爲二天下母一。吾不レ知二其名一。字レ之曰レ道。蓋言三萬物之化育。必有二其故一也。然其說未三甚著二乎世一。而未レ至下廻二天下之視聽一。煩中大人君子之爭辨上。故夫子遇二遺世之士一。每惓惓引接。欲レ當二之中行一。而至二虚無幽玄之言一。則竟無二其說一。與下孟子之時闢二楊墨一者上。其勢有レ不レ同矣。

子曰。富與レ貴是人之所レ欲也。不レ以二其道一得レ之不レ處也。貧與レ賤是人之所レ惡也。不レ以二其道一得レ之不レ去也。君子去レ仁惡乎成レ名。君子無下終レ食之間違上レ仁。造次必於レ是。顚沛必於レ是。

胤按。此夫子言三君子之行。必以レ仁爲二準則一也。原夫經書言レ仁。始見二於尚書仲虺之誥篇一。稱二成湯之德一曰。克寬克仁。彰二信兆民一。元儒陳櫟以爲六經言レ仁始二于此一。遂開二萬世言レ仁之端一。然其言出二古文書一。固不レ足二憑信一。蓋自レ古聖賢之所三以立レ政設下教者。莫二徃而非上レ仁。而標レ此以爲二脩レ己治一レ人之本一。則實始二於夫子一矣。其言之見二於論語一者。班班可レ見。而最詳明者。莫レ如二此章一焉。

說二春秋者一。不レ取二信於孟子一。而曰二感レ麟而作一者。何哉。向使二麟不一レ出。春秋其將不レ作乎。甚矣其爲レ惑也。且其曰二天子之事一者。言二禮樂征伐。天子所レ行之政事一也。夫子以二匹夫一而記レ之。故有二知レ我罪レ我之言一。非レ謂下託二南面之權一以行中天子之事上也。此亦褒貶之說過レ之也。

孟子曰。王者之迹息而詩亡。詩亡而後春秋作。晉之乘。楚之檮杌。魯之春秋一也。其事則齊桓晉文。其文則史。孔子曰。其義則丘竊取レ之矣。

胤按。孟子歷言二舜禹湯文武周公之事一。以及二孔子一。推二其功一專言二春秋一。與三前言承二三聖者一同レ意。故三章相敘記レ之。以見二其意一。蓋殷周之盛。直道行二于天下一。而是非毀譽。無レ所二隱諱一。故作レ詩者。吐二露眞情一。著二諸諷詠一。此三代之所三以直レ道而行一也。及二其旣衰一也。風俗頹靡。世多二忌諱一。美刺之旨。不三復明二于天下一。善惡淑慝。與レ時俱滅而不レ傳。故曰王者之迹息而詩亡。時魯之史官。編年紀載。傳二諸國事一。名レ之曰二春秋一。自レ是之後。雖二復非一レ無レ詩。而其興亡與二春秋一相先後。故曰詩亡而春秋作。此言二不修春秋一耳。當時晉楚之國。亦各有レ史以記二善惡一。其趣與二春秋一同。故曰晉之乘。楚之檮杌。魯之春秋。一也。言二其事一。則當時霸主桓文之所レ行。而非二堯舜文武之道一。言二其文一。則當時史官南董之所レ筆。而非二皐夔稷契之謨一。固不レ足下以與二詩書一比倫上。然顧二其爲一レ書。其記二當時之事一。以遺二後世一。亦足三以爲二觀者之監戒一。故曰其事齊桓晉文。其文則史其義則丘竊取レ之。蓋夫子因二魯史舊文一。筆二其可一レ筆。削二其可一レ削。名例以明。是非以正。纔書不レ已。以傳二後世一。使下爲レ惡者有レ所二畏諱一。而不上レ敢レ肆二其志一。則儼然爲二一經一。以與二詩書一匹。故孟子又嘗曰。孔子成二春秋一而亂臣賊

代醉篇卷九。王原叔云。顔子讀書。鐵鏑三摧。不知所出。耕餘博覽。內稱孔子晚年喜易。韋編三絕。鐵鏑三摧。漆書三滅。下云。出莊子。然則鐵鏑事。蓋夫子讀易事。于氏課記以爲顔子耶。然云。出莊子。今莊子又無

先於夫子。或後於夫子。各抒所見。以演其義。今十翼是也。而今讐諸繫辭。則曰易之興也。其當殷之末世。周之盛德耶。又曰。易之興也。其於中古乎。則知當時卦爻之作。其起於何世而成於何人。既不可知。文王系彖。始見於荀卿之書。而周公作象。起於馬融陸績之說。至翼易之說。則其語始乎史遷。而他無所憑。皆臆度之說焉耳。且從先儒之說。則易盡精微之理。而爲聖人蘊奧之書。較諸春秋之道名分。其事爲重。而孟子願學夫子。而未有一語及之者。至成春秋。則崇重其功。敍爲一治。其所輕重者可知矣。夫子之言。亦不過曰可以無大過一言。而且曰加我數年。則其事亦似甚緩焉。所謂韋編三絕。鐵鏑三折者。其妄可知而十翼非夫子之作。固不待辨矣。然則萬世學者之當尊信者在詩書二經。而開物成務之方。易雖非所廢。而非所以求聖人蘊奧之書也。學者其知所從矣。

孟子曰。世衰道微邪說暴行有作。臣弑其君者有之。子弑其父者有之。孔子懼作春秋。春秋天子之事也。是故孔子曰。知我者其唯春秋乎。罪我者其唯春秋乎。

又曰。孔子成春秋。而亂臣賊子懼。

胤按。此孟子言夫子所以作春秋之由也。蓋姬轍既東。王靈不競。亂臣賊子。接踵當時。而莫之能遏。夫子因魯史以作春秋。正名分。明是非。使其迹暴白於天下後世。而無復所逃其罪。於是文史之道興。亂賊之徒。雖有欲肆其惡者。而恐記載有人。遣臭萬年。而不敢爲。故孟子以其功配禹之抑洪水。周公之兼夷狄驅猛獸。敍爲三聖。孟子之文。詳明如此而後之

感。而未嘗有懲創之說。然則詩以道人情。其言雖出莊子。而此一語亦足括三百篇之大旨。大抵詩之爲經。與語孟不同。語孟二書。爲諸侯大夫及門人弟子。甄別是非。明其趨舍。耳提面命。莫非敎也。詩則不然。欣愛悲歡。各抒由衷。施之聲音。風動四方。故曰詩言志。歌永言。聲依永。律和聲。是知詩本非敎人之書。而躰貼人情。以交人。此詩之所以爲敎也。先儒不察。必欲與語孟同科。存其法戒。故有感發懲創之說。此不得其解。說者又曰。古者詩三千餘篇。至孔子去其重。取可施於禮義三百五篇。其言始見於史記世家。而後世學者之所取信。然觀夫子之言。曰樂正雅頌各得其所而已。蓋謂當時淫哇盛行。雅頌失敍。故夫子自衞歸魯。參伍修定。以復其舊耳。未言刪三千而三百之也。且觀春秋內外傳所載。列國士大夫賦詩。率皆今三百篇詩。而闕爲逸詩者甚希。而夫子亦屢屢言三百篇。則知夫子以前詩之存者。亦不過此數者。假使夫子自刪。豈可執以爲稱也哉。此亦不可不知焉。

子曰。加我數年。五十以學易。可以無大過矣。

胤按。此夫子言學易之有益也。蓋易之爲書上世書契未作之時。因陰陽消長之變。畫爻重卦。以示人事之吉凶得失。後世系之辭。以明其象。本卜筮之書焉耳。當時典籍未廣。敎化未洽。觀者或以爲義理之書。故易之一經。從來有卜筮義理二端。系辭曰。君子居則觀其象而玩其辭。動則觀其變而玩其占。正以此爾。夫子曰。可以無大過者。蓋以義理斷之也。易雖本系筮書。然萬世學者永遵夫子之道以爲學。則當從夫子之言。以義理求之。而當時易家。其人或

胤按。古者載籍不詳。國有大事。則具始末而記之。貽諸後世。其體有典謨訓誥之別。名之曰書。宗廟朝廷有樂章。閭里之間有歌謠。采而輯之。以供風詠。其義有風賦比興雅頌之異。名之曰詩。書固四代聖王治天下之大經大法。萬世帝王臣民之所奉承而遵守者也。不讀此則不能以知人道之所本。達政治之所由出。詩則人之所思。陳之於言。風俗之盛衰。人情之險夷。以至節物氣候之變。鳥獸艸木之名。莫不具備。不讀此則不能處世接人。以與之言。故古之所謂博學於文者。不過治此二經。而夫子之所雅言者。亦在於此。乃斯文之權輿。道化之根本也。先儒乃曰。聖人蘊奧在易。詩書乃格言。何哉

子曰。小子何莫學夫詩。詩可以興。可以觀。可以羣。可以怨。邇之事父。遠之事君。多識於鳥獸艸木之名。

又曰。誦詩三百。授之以政不達。使於四方不能專對。雖多亦奚以爲。

又曰。詩三百。一言以蔽之。曰思無邪。

又曰。人而不爲周南召南。其猶正面墻而立也與。

又曰。不學詩。無以言。

胤按。自古詩書並稱。而夫子言詩之語最詳。載于魯論者凡五章。先儒說詩。有感發懲創之言。見其正者以爲法。邪者以爲戒也。今玩夫子說詩諸語。大抵言通人情諳世態以與人交。則可以事君。可以事父。可以授之以政。可以使於四方而專對。與觀群怨。各有所

子曰。學而時習レ之。不二亦說一乎。

又曰。學而不レ思則罔。思而不レ學則殆。

又曰。十室之邑。必有二忠信如レ丘者一焉。不レ如二丘之好下學也。

又曰。君子博學二於文一。約レ之以レ禮。亦可二以弗下畔矣夫。

又曰。學如レ不レ及。猶恐レ失レ之。

又曰。吾嘗終日不レ食。終夜不レ寢。以思無レ益。不レ如レ學也。

胤按。自レ古聖人無レ不レ學也。故舜好レ問。好察二邇言一。禹拜二昌言一。雖レ不レ言レ學。亦皆學之事也。商傅說告二高宗一曰。惟斆學半。念二終始一典二于學一。學之名始見二於此一矣。而夫子之好レ學。爲下超二群聖一而特盛上。故於二人之譽下己。每謙讓不レ當。而唯於二此一事一。則受而不レ辭。曰不レ如二丘之好下學也。又曰。默而識レ之。學而不レ厭。誨レ人不レ倦。何有二於我一哉。及三子路有二何必讀レ書然後爲レ學之言一。則痛斥レ之。至レ曰三是故惡二夫佞者一。其勸レ之也亦至矣。故編二論語一者。以二學而時習章一。冠二二十篇之首一。先子以爲二一部小論語一。謂夫子之所下以賢二於堯舜一而師中表萬世上者。其以レ此乎。然則所レ謂學者何也。考二諸古訓一。得二之見聞一。使下行事之間。有レ所二倣法覺悟一。而無中妄作之失上也。譬猶三寫レ字者之臨レ帖。製レ器者之依下式。用レ力省而所レ資者深。苟徒任二其性之所下得。而不下識二前言往行一以蓄中其德上。則固陋偏薄。不レ足下以當二大事一而建中大業上。此人之所三以不下可レ不レ學也

子所二雅言一。詩書執レ禮皆雅言也

乎。子曰其恕乎。則可見忠恕二者。爲聖門初要之訓。學者終身之工夫。不可復他求焉者也。夫子又嘗答樊遲問仁曰。與人忠。答仲弓問仁曰。己所不欲。勿施於人。孟子亦曰。强恕而行。求仁莫近焉。夫聖人之道。莫大於仁。而求仁之要。莫近於忠恕。則以此演夫子一貫之旨。不亦宜乎。然方夫子告曾子之間。夫子意中。未有忠恕二字。及曾子與門人言之。始說出忠恕二字。假使游夏子貢之徒。演夫子之旨。雖未必詭夫子之意。而亦未必皆以忠恕答之。唯曾子德行之篤。才識之明。實有得夫子之旨於言意之表者。故能敷衍其言。而夫子之道。昭斷萬世。無復所疑矣。蓋同歸而殊塗。一致而百慮。苟得其本。則左來右去。無往而不逢其原。此所以夫子之所不言。曾子演之而會其旨也。豈不大乎。先儒謂聖人之心。一理渾然。而泛應曲當。唯曾子之學。眞積力久。能達其旨。非學者所遽識也。故借忠恕之目以曉之。其意謂有天地之忠恕。有聖人之忠恕。有學者之忠恕。至誠無息。而萬物各得其所者。天地之忠恕也。盡己推己。學者之忠恕也。以忠訓一。以恕訓貫。體用之謂也。此蓋宋氏理性之學與。而高談性命。低看忠恕。遂以理一分殊之說。解一貫之旨。不得已於曾子以忠恕言之。乃謂借學者修身之目以曉之。與他所謂忠恕不同。夫聖人之道。專在應事接物。而素無高遠微妙之說。所謂吾道一以貫之者。亦在彝倫上而言。豈可外盡己忖人之事。而別求其解哉。讀此章者。爲被先儒說得甚高。後世學者。妄生穿鑿。殊不得正意。知之非難。行之惟難。通二十篇中。考索其義。豈不可知其旨哉。故今依先旨。叨述臆說云。

不レ知三近驗二諸事實一。而費二多少氣力一。要レ討二其所レ在於レ彼乎於レ此乎一。殆如下追二逃人一。認中失物上。懸空臆想。竟無レ所レ得。亦何弗レ思之甚也。

子曰。參乎。吾道一以貫レ之。曾子曰。唯。子出。門人問曰。何謂也。曾子曰。夫子之道。忠恕而已矣。

胤按。此夫子呼二曾子之名一。示レ之以三其道無二他岐一。而曾子述二其意一以告二門人一也。蓋聖人之道。大而能博。人疑二乎其事事而窮レ之。件件而修一レ之。子貢之穎悟。尚以爲多學而識レ之。夫子明二其不一レ然。而告二曾子一則曰。吾道一以貫レ之。一者多之反也。言下學問之道。仁義禮樂。雖レ如二其方多端一。而要三其所二歸宿一。則固一以貫中統之上。所レ謂一者。夫子雖レ不レ斥三言其爲二何物一。而曾子從學之久。領二解其旨一。乃對曰唯。曾子門人。識不レ及レ此。故必待二請問一。於レ是曉レ之。乃謂夫子之道。忠恕而已矣。自二夫子一而言則曰二吾道一。自二曾子一而言則曰二夫子之道一。豈有二二端一哉。亦皆言二修レ己治レ人之方法一焉耳。故夫子不レ謂二之吾心一而必曰二吾道一。曾子不レ謂二之夫子之理一。而必曰二夫子之道一。而以二忠恕一明二一貫之旨一者何哉。盡二己之心一謂二之忠一。忖二人之心一謂二之恕一。人之所レ患。做二己之事一則常詳。而做二人之事一則必苟。律二己之身一則常寬。而責二人之失一則必刻。所以物我相阻。每致二胡越一。此不仁之由也。苟務盡二己之心一。而做二人之事一。猶レ做二己之事一。則忠立矣。忖二人之心一。而體二人之身一。猶二己之身一。則恕行矣。忠立恕行。天下豈有二不仁者一哉。故曰夫子之道。忠恕而已矣。蓋忠恕所三以一二貫之一也。非下以二忠恕一訓中一貫上也。中庸曰。忠恕違レ道不レ遠。子貢問有下一言而可二以終身行一之者上

中人以下。不レ可ニ以語一レ上也。唯此四者。凡爲レ學者不レ可レ不レ從ニ事於此一焉。夫子以ニ此四者一爲レ敎。其以レ此歟。

子曰。誰能出不レ由レ戶。何無レ由ニ斯道一也。

又曰。士志ニ於道一。而耻ニ惡衣惡食一者。未レ足ニ與議一也。

又曰。人能弘レ道。非ニ道弘一レ人。

又曰。道之不レ行也。我知レ之矣。知者過レ之。愚者不レ及也。道之不レ明也。我知レ之矣。賢者過レ之。不肖者不レ及也。

胤按。三代聖人。專重ニ天道一。禮樂刑政之設。宮室器服之制。必取ニ象天地一。或法ニ日月星辰一。或準ニ四時五方一。觀下古者十二章服。明堂九宮。周禮六官。賞以ニ春夏一。刑以ニ秋冬一等事上。可レ見矣平生兢兢業業唯有ニ一毫不レ謹之心一。以墜ニ其命一是懼。蓋以レ道澁ニ天下一。而未レ聞三以レ道敷ニ告天下一也。至ニ夫子一祖述憲章。上律下襲。則考ニ諸二帝三王一。而莫ニ之違一也。而其以レ道詔ニ天下萬世一。則實自ニ夫子一始矣。載ニ于魯論一者可レ見也。所謂道者何也。·君臣父子夫婦兄弟朋友之交。凡人事之當然者皆道也。除レ此之外。別無ニ所レ謂道者一。聖人榜ニ標之一以示ニ天下之人一。使ニ天下之人。由レ此而行一レ之。豈可ニ目視而耳聽一之物哉。其曰レ志レ道者。心知ニ其所一レ嚮也。其曰レ弘レ道者。力能弘ニ通之一也。智者過レ之。愚者不レ及。而道爲レ之不レ行。賢者過レ之。不肖者不レ及。而道爲レ之。不レ明。苟有下能行レ之而成ニ其德一者上。則道積ニ于厥躬一。故曰。苟不ニ至德一。至道不レ凝焉。道之爲レ道。其可レ知已。後之欲レ求レ道者。

也。宰我子貢有若之言。其詞雖レ不レ同。而意實相足。與二子思之言一。互相表裏焉。至二孟子一。則每敘二伯夷伊尹柳下惠之事一。折二衷之一以二夫子之德一。則曰所レ願學二孔子一。則曰之謂二集大成一。蓋三子之道。清和任雖レ各極二其德之至一。而智之不レ至也。隘與二不恭一。不レ能レ無二其偏一。夫子則聖智兼全。巧力俱至。而得レ爲二聖之時一。此孟子之所三以願學一也。是知爲二天下萬世帝王臣民之師表一者。唯夫子一人爲レ然。而其微言大義。全備二于魯論一。修身齊家治國平天下。凡爲レ人之道。無レ不レ該載。而衆言淆亂。無レ所二適從一者。亦當下折二衷諸此一。以知中其是非得失之所上レ在焉。蓋三代聖人。以二民心一爲レ心。而不下以二聰明一先中天下上。故民信二鬼神一則崇二鬼神一。民尙二卜筮一則用二卜筮一。詩書洪範所レ載是也。夫子斬新開闢。一斷以二義理一。使下人不レ惑中於所上レ從。夫子之盛二於堯舜一。此亦可レ見二其一端一矣。此義也。詳二于先子遺書一。故不二敢縷述一云。

子以レ四敎。文行忠信。

胤按。夫子之敎。見二魯論一者其事非レ一。而門人弟子必括以二此四者一何哉。蓋孔門以レ此爲二進脩之定法一。畫一示レ之。猶二後世之學規鄕約一也。故特敘而列レ之。可レ知凡及二夫子之門一者。必受二此四者一。無レ不下以レ此爲二規矩一遵守而服膺上矣。先儒謂大學之三綱八目。三千之徒。莫レ不レ聞二其說一。其然則編二論語一者。何以不レ擧レ之。而必以二此四者一爲レ言耶。蓋文者先王之遺文。道之所レ寓也。行者踐履之謂。所三以體二夫道一也。爲レ人猶レ己謂二之忠一。不レ失レ所レ期謂二之信一。雖二亦百行之一一。而凡事不下以レ此爲上レ主。則無三以爲二之地一。猶三爲レ室而無二基址一也。故別而言レ之。中人已上可二以語一レ上也。

矣。

○論㆓夫子立敎之旨㆒

宰我曰。以㆑予觀㆓於夫子㆒。賢㆓於堯舜㆒遠矣。

子貢曰。見㆓其禮㆒而知㆓其政㆒。聞㆓其樂㆒而知㆓其德㆒。由㆔百世之後㆓等㆔百世之王㆓莫㆔之能違㆒也。自㆓生民㆒以來。未㆑有㆓夫子㆒也。

有若曰。豈惟民哉。麒麟之於㆓走獸㆒。鳳凰之於㆓飛鳥㆒。太山之於㆓丘垤㆒。河海之於㆓行潦㆒。類也。聖人之於㆑民。亦類也。出㆓於其類㆒。拔㆓乎其萃㆒。自㆓生民㆒以來。未㆑有㆑盛㆓於孔子㆒也。

孟子曰。伯夷聖之清者也。伊尹聖之任者也。柳下惠聖之和者也。孔子聖之時者也。孔子之謂㆓集大成㆒。集大成也者。金聲而玉振㆑之也。金聲也者。始㆓條理㆒也。玉振㆑之也。者終㆓條理㆒也。始㆓條理㆒者智之事也。終㆓條理㆒者聖之事也。智譬則巧也。聖譬則力也。由㆑射㆓於百步之外㆒也。其至爾力也。其中非㆓爾力㆒也。

公孫丑曰。伯夷伊尹何如。孟子曰。不㆑同㆑道。非㆓其君㆒不㆑事。非㆓其民㆒不㆑使。治則進。亂則退。伯夷也。何事非㆑君。何使非㆑民。治亦進。亂亦進。伊尹也。可㆓以仕㆒則仕。可㆓以止㆒則止。可㆓以久㆒則久。可㆓以速㆒則速。孔子也。皆古聖人也。吾未㆑能㆑有㆑行焉。乃所㆑願則學㆓孔子㆒也。

胤按。夫子之祖㆓述堯舜㆒。子思之言。既詳㆓于上㆒。矣至㆘見㆓其禮㆒知㆓其政㆒。聞㆓其樂㆒知㆗其德㆖。則非㆘出㆓於其類㆒拔㆗乎其萃㆖不㆑能㆔等㆑之而無㆓能違㆒也。此其所㆘以賢㆓於堯舜㆒。而爲㆗生民已來未㆑有之聖㆖

明德於天下㆒者。亦述㆓先王之德㆒。以告㆓當時㆒。蓋得㆓之詩書二經㆒。猶古昔之名稱也。至㆘章句解曰㆗虛靈不昧。具㆓衆理㆒以應㆗萬事㆖。則以爲㆓心之名㆒矣。

詩大雅烝民曰。天生㆓烝民㆒。有㆑物有㆑則。民之秉彝。好㆓是懿德㆒。

胤按。此詩雖㆘言不㆑及㆓性道㆒。而性道之蘊。固具㆓乎此㆒。而人之不㆑可㆑不㆓以㆑道爲㆘則。亦可㆑見矣。故夫子曰。爲㆓此詩㆒者其知㆑道乎。而孟子引以證㆓性之善㆒。性善之說。其權㆓輿於此㆒乎。蓋身之於㆑物。莫㆑不㆓各有㆘所㆑對。而亦莫㆑不㆓各有㆘所㆑取㆑則焉。口之於㆑味也。有㆓同嗜㆒焉。目之於㆑色也。有㆓同美㆒焉。耳之於㆑聲也。有㆓同聽㆒焉。至㆓於心㆒獨無㆓同然㆒乎。心之所㆓同然㆒者何也。謂理也。義也。此心之所㆓對而取㆘則者也。權然後知㆓輕重㆒。度然後知㆓長短㆒。物皆然。心豈無㆑所㆑取㆑則乎。心之所㆑取㆑則者何也。道也。故曰。有㆑物有㆑則。然使㆘人之性。頑冥不靈。性如㆓禽獸㆒。拳曲擁腫。材如㆗樗櫟㆖。則雖㆘以㆓聖賢之言㆒。日薰㆗聒乎其側㆖。豈能得㆓聽受㆒耶。惟其性之善。故能得㆑受㆑道。故曰。民之秉彝好㆓是懿德㆒。當時仁義之目未㆑具。性善之說未㆑著。而其言之不㆑異。如㆑合㆓符節㆒。秉彝即四端之良心也。懿德即仁義之道也。與㆓後世以㆑心爲㆘法。大有㆓不同㆒矣。夫規矩準繩器之所㆔以取㆘法也。不㆘就㆓規矩準繩㆒以制㆖器。而欲㆔就㆑器以制㆓規矩準繩㆒。天下其有㆓完器㆒乎。以㆑心爲㆑法。何以異㆑此。〇又按。古文書湯誥曰。惟皇上帝。降㆓衷下民㆒。若有㆓恒性㆒。克綏㆓厥猷㆒惟后。先儒謂六經言㆑性。始㆓於此㆒。予謂此後人假託不㆑足㆑證也。若其當時眞書。則明是言㆑性。孟子每引㆓詩書㆒。以明㆓事實㆒。何以不㆑引㆓湯誥㆒。而却引㆓蒸民詩㆒以爲㆓性善之證㆒耶。上世心性之說不㆑詳。於㆑是亦可㆑驗

又曰。維此王季。帝度ニ其心一。貊ニ其德音一。其德克明。〇晉成鱄曰。心能制レ義曰レ度。德能應レ和曰レ莫。昭ニ臨四方一曰レ明。左氏傳。昭公二十八年。貊左氏作レ莫。

詩曰。予懷ニ明德一。不レ大ニ聲以一レ色。

春秋左氏傳。襄公二十六年。齊國景子。使三晏平仲私ニ於叔向一曰。晉君宣ニ其明德於諸侯一。恤ニ其患一而補ニ其闕一。正ニ其違一而治ニ其煩一。所三以爲ニ盟主一也。

又昭公六年。劉定公曰。美哉禹功。明德遠矣。

又七年。魯孟僖子曰。聖人有ニ明德一者。若不レ當レ世。其後必有ニ達人一。今其將在ニ孔丘一乎。

又八年。晉史趙曰。自レ幕至ニ于瞽瞍一。無レ違レ命。舜重レ之以ニ明德一。

又定公四年。衛祝鮀曰。昔武王克レ商。成王定レ之。選ニ建明德一。以藩ニ屛周一。故周公相ニ王室一。以尹ニ天下一。〇又曰。是使三之職ニ事于魯一。以昭ニ周公之明德一。

易晉之大象曰。明在ニ地上一晉。君子以自昭ニ其明德一。

胤按。詩書六經言レ德者多矣。曰俊德。曰大德曰。至德。曰盛德。曰懿德。曰文德。皆就ニ其所レ專爲レ稱。明德亦其一也。大人之德。赫ニ赫宇宙一。無レ所ニ掩覆一。猶ニ大陽之中レ天。光輝發越。人皆仰レ之。故謂ニ之明德一。詩書易春秋之間。或以稱ニ舜禹文王周公之德一。或以贊ニ聖人君子之德一。乃曰照ニ臨四方一。謂ニ之明一。猶下易文言語ニ大人之德一。曰中與ニ日月一同中其明上之類。其義自可レ知矣。蓋係ニ他人之稱贊一。而非レ言ニ己心之靈明一也。名ニ聖德之光被一。而非レ言ニ本體之不昧一也。大學曰。古之欲レ明ニ明

莊子寓言篇。睢睢盱盱。而誰與居。

孟子曰。夏曰ㇾ校。殷曰ㇾ序。周曰ㇾ庠。學則三代共ㇾ之。皆所㆔以明㆓人倫㆒也。人倫明㆓於上㆒。小民親㆓於下㆒。

胤按。先王之所㆔以治㆓天下㆒者。在ㇾ厚㆓民之生㆒而已。然徒從㆓其飽煖㆒。而不ㇾ使ㇾ知㆘人之所㆓以爲㆒ㇾ人之道㆖。則睢睢盱盱。無㆔以異㆓於物㆒矣。猶㆘父母之於㆒ㇾ子。既有㆓以養㆒ㇾ之。而復敎以㆓義方㆒也。此夫子之所㆘以告㆓冉有㆒以ㇾ富ㇾ之。而繼ㇾ之以ㇾ敎也。故舜命ㇾ契敷ㇾ敎以來。三代相承。建ㇾ官設ㇾ師。置㆘所㆔以敎㆒ㇾ之之所㆖。以使㆘人倫之道明㆓於上㆒。小民各相㆓親於下㆖。庠序學校。雖㆓隨ㇾ時異㆒ㇾ名。而其所㆓以敎㆒ㇾ之者。則未㆔嘗有㆓ㇾ異也。故曰學則三代共ㇾ之。當時之爲ㇾ敎可ㇾ見矣。至㆓孟子之時㆒。雖㆓性善之說明且備㆒。而述㆓其事㆒。但曰㆓人之有ㇾ道也㆒而不ㇾ言ㇾ性。則三王之設ㇾ敎。專使㆘天下之人。各親㆓其親㆒長㆗其長㆖。而未㆘嘗告ㇾ之以㆗人之心如何。人之性如何㆖。亦可ㇾ知矣。而禹謨有㆓人心道心之目㆒。湯誥有㆘克綏㆓厥性㆒之語㆖。以至㆘畢命所ㇾ謂閑㆓欲心㆒之說㆖。後世以爲㆓學問之淵源㆒。而論㆓其世㆒。三代之時。風尙簡朴。所ㇾ未㆓嘗爲㆒ㇾ說。而其言皆見㆓於古文尙書㆒。蓋出㆓於晋隋六朝諸儒之假託㆒。而最不ㇾ可ㇾ信。

書堯典曰。克明㆓俊德㆒。以親㆓九族㆒。

召誥曰。予小臣敢以㆓王之讐民百君子越友民㆒。保㆓受王威命明德㆒。

君陳曰。黍稷非ㇾ馨。明德惟馨。

文公之命曰。丕顯文武。克愼㆓明德㆒。

詩大雅皇矣曰。帝遷㆓明德㆒。串夷載ㇾ路。

益知下其爲二經濟之分職一。而非中括二天地萬物之象一。而取上數於此五者上也。

洪範云。無レ偏無レ陂。遵二王之義一。無レ有レ作レ好。遵二王之道一。無レ有レ作レ惡。遵二王之路一。無レ偏無レ黨。王道蕩蕩。無レ黨無レ偏。王道平平。無レ反無レ側。王道正直。會二其有極一。歸二其有極一。

胤按。四代之書多言レ德。而言レ道者甚希。唯大禹謨曰。侮慢自賢。反レ道敗レ德。大甲曰。有レ言逆二于汝心一必求二諸道一。有レ言遜二于汝心一必求二諸非道一。兌命曰。允懷二于茲一。道積二于其躬一。寥寥三數言焉耳。然皆出二于古文一。則難レ信三其必爲二眞尙書語一。至二洪範一。則曰遵二王之義一。遵二王之道一。蓋擧二皇極之敷言一。欲下人之無二偏陂好惡之私一。同歸中于蕩平正直之域上也。以二道與一レ義對言。其始二於此一矣。

洪範曰。六三德。一曰正直。二曰剛克。三曰柔克。平康正直。彊弗レ友剛克。燮友柔克。沈潛剛克高明柔克。

胤按。此述下聖人之撫レ世御レ物。各因二其材一之方上也。蓋平康者。人性之中而無二過不及一者也。治レ之以レ中。是謂二之正直一。彊弗レ友者。强梗不レ順者也。治レ之以レ剛。是謂二之剛克一。燮友者。溫和柔順者也。治レ之以レ柔。是謂二之柔克一。此二者順而治レ之。沈潛者過レ陰者也。激而進レ之謂二之剛克一。高明者過レ陽者也。抑而退レ之謂二之柔克一。此二者逆而治レ之。夫人之性各自不レ同。而其所三以爲二德者不レ過レ三。故治レ之之方亦三。而所三以用二之者。交互錯綜。或順或逆。不レ過レ五レ之。古者聖王之所三以治而教二之之用既如レ此。而夫子之於二門人一。所三以激厲裁抑。使レ歸二之於中一者。亦不レ異レ此矣。未三嘗槩乎率二天下之人一。以下克二人欲一而復中天理上爲乙修身之方甲也。

三事允治。萬世永賴。時乃功。

胤按。五行之名。肇見二於廿誓一。前乎禹貢。既曰二六府孔修一。則固已包二五行一在二其中一矣。大禹謨雖レ係二古文書一。而春秋左氏傳。晉郤缺言二於趙宣子一。引レ之以爲下夏書曰。水火金木土穀謂中之六府上。則眞尙書之文也。當時所レ傳書未レ經二秦火一。其言固可レ信。

洪範曰。一五行。一曰水。二曰火。三曰木。四曰金。五曰土。水曰二潤下一。火曰二炎上一。木曰二曲直一。金曰二從革一。土爰稼穡。潤下作レ鹹。炎上作レ苦。曲直作レ酸。從革作レ辛。稼穡作レ甘。

胤按。武王之克レ商。首訪二箕子一。而箕子乃述二洪範九疇一授レ之。其言曰。天乃錫二禹洪範疇九一。則其事蓋本二於禹之規畫一。而世遵二守之一。夏商二代之間。所下以經二理天下治一而敎上レ之之金科玉條也。初一敘二五行一。以二水火金木土一實レ之。所三以濟二天下之生民一也。後世則謂陰陽兩儀。分爲二五行一。氣行二於天一。質具二於地一。散爲二萬殊一。人物各受二其理一以爲レ理。然考二禹之時一。則無二其說一。擧二其用一曰。潤下炎上曲直從革稼穡。言二其味一曰鹹苦酸辛甘。如レ斯而已矣。箕子敷二鯀之罪一曰。汨レ陳二五行一。夏啓聲二有扈氏之罪一曰。威二侮五行一。則知所下以裁二成輔三相天地之道一左中右有民上者。區二別其品一。括二之於五一。立レ官設レ職。各典二其事一。隨二其能不一。加二之賞罰一。故亦謂二之五官一。猶三後世之官。置二都水金部一也。克修二其職一。如三禹之告二成功一。則曰彝倫攸レ敘。廢二墜其官一。如三鯀之湮二洪水一。則曰彝倫攸レ斁。治失二其治一謂二之汨陳一。暴殄無レ節謂二之威侮一。其意自可レ見矣。及二其功之既成一。禹加レ之以レ穀。則曰水火金木土穀惟修。正レ德利レ用厚レ生惟和。帝兪二其言一曰。六府三事允治。萬世永賴。時乃功。則

務。而戒百官授衆職。則必曰欽哉。其所以化民成俗。甄陶天下之人者。以禮樂爲先務。故命伯夷典三禮。夔典樂。其戒敕之。爲特詳焉。方是時也。治與道一。政以德行。上之所以治之。乃其所以敎之也。上躬其德。以立於天下之上。而天下之民。視以傚之。傳諸後世。而後世之人莫之能違。此六籍之所以權與。而學之所由興也。此唐虞之道也。其政敎號令之敷于天下者。莫往而非仁智之極。而未聞有以仁智爲敎也。後世追稱其德。曰堯舜之仁。堯舜之智。人倫之極。其不在斯乎。

皐陶謨曰。都亦行有九德。禹曰何。皐陶曰。寬而栗。柔而立。愿而恭。亂而敬。擾而毅。直而溫。簡而廉。剛而塞。彊而義。

胤按。皐陶爲舜言取人之法。述九德。彊而義在其一焉。義之名始見於經焉。蓋人强忍者易犯義。强而能義。此其所以爲德也。唯言義而不及仁。與寬而栗柔而立等八事。相敘爲言。較諸仁義並言之義。則其事爲稍輕。然皆著於行事。而人之爲德者也。故曰亦行有九德。亦言其人有德。學者審焉。

禹貢曰。六府孔修。庶土交正。

甘誓曰。有扈氏。威侮五行。怠棄三正。

大禹謨曰。禹曰。於帝念哉。德惟善政。政在養民。水火金木土穀惟脩。正德利用厚生惟和。九功惟敘。九敘惟歌。戒之用休。董之用威。勸之以九歌。俾勿壞。帝曰兪。地平天成。六府

擧二此言一。則當時簡策具存。其所二雅言一也可レ知矣。舜之讓二位於禹一也。亦擧二其言一以告レ之。一遵二舊典一。無レ有二加損一。故夫子曰。舜亦以命レ禹。可レ見下二帝授受之言。乃止二於此一。而無中復有中他語上矣。而先儒之說曰。堯之授レ舜。唯曰三允執二其中一而已。舜之授レ禹。益レ之以二三言一。曰人心惟危。道心惟微。惟精惟一者。告下所三以守二夫堯之一言一之方上也。夫如レ是。則其言甚重。譏二權量一。審二法度一。修二廢官一。皆事爲之末也。夫子尙擧レ之而不レ遺焉。危微精一之訓。何以略而不レ述耶。蓋此語本古文尙書之語。或出二於後世之假託僞撰一。而其爲二舜禹授受之語一。本不レ可二憑信一。且所レ謂中云者。亦就二行事一爲レ言。欲三其無二過不及一也。後世則以二此心未發之體一爲レ中。而聖人之道荒矣。爰誓二三代之道一。專以二惇レ典庸レ禮爲レ務。而仁義之目尙未レ著。何況心性之說乎。心性之說尙未レ詳。何況認二未發之時一以爲レ中哉。非二古之言一也可レ知矣。耕野王氏曰。所レ謂中者。豈眞有二高遠難レ行之事一。非二聖人一不レ可二企及一耶。今恒言俗語。於下事當二其可一者上則謂二之中一。其不可者則謂二之不中一。雖二愚夫愚婦一。皆能言レ之。又何有二傳授心法之祕一。（元人。名充耘。著二讀書管見一。）其說得レ之矣。

書舜典曰。帝曰。咨二四岳一。有三能典二朕三禮一。僉曰伯夷。帝曰。兪。咨レ伯汝作二秩宗一。夙夜惟寅。直哉惟淸。伯拜稽首。讓二于夔龍一。帝曰。兪。往欽哉。

又曰。帝曰。夔命レ汝典レ樂。敎二冑子一。直而溫。寬而栗。剛而無レ虐。簡而無レ傲。詩言レ志歌永レ言。聲依レ永律和レ音。八音克諧。無レ相二奪倫一。神人以和。夔曰。於予擊レ石拊レ石。百獸率舞。

胤按。唐虞之時。治尙二簡朴一。敎法之方。未レ若二周之詳且悉一。專以下奉二天道一恤二庶民一擧中賢才上爲

○論唐虞三代之道

書舜典曰。帝曰。契百姓不親。五品不遜。汝作司徒。敬敷五敎。在寛。

皐陶謨曰。天敍有典。敕我五典。五惇哉。

孟子曰。人之有道也。飽食煖衣。逸居而無敎。則近於禽獸。聖人有憂之。使契爲司徒。敎以人倫。父子有親。君臣有義。夫婦有別。長幼有序。朋友有信。

胤按。堯舜聖之至也。唐虞治之極也。而其所以修己治人爲萬世法則者。不過明人倫之道。故虞書贊堯之德則曰。克明俊德。以親九族。稱舜之功則曰。愼徽五典。五典克從。其命九官。使禹治水土。稷播種。乃使契敷敎。蓋夫人生養之具既備。則不可不知爲人之道。爲人之道者何也。修彝倫是已。謂之五典。典常也。萬世之所常行。其名雖異。其事一也。孟子詳其目。以親義別敍信言之。其必有所受矣。聖人之道。不外此而別有可以爲道者也。亦不外此而別有可以爲言者也。光被四方。格于上下者。乃其全體極功。而夫子之所以祖述者。亦在乎是矣。實萬世道化之祖。人治之極則也。

論語堯曰。咨爾舜。天之曆數在爾躬。允執其中。四海困窮。天祿永終。舜亦以命禹。

胤按。堯將讓位於舜。命以此言。而中之名始著矣。蓋人之於事。或失之於過。或失之不及。故德不脩而業不成。所以堯之命舜。既告之以天位不可忽。而後言其行事之間。不可有過不及之失。戒之以民生之至重。天命之無常而終之。其言雖不具于二典。而夫子歷敍群聖。首

程子曰。孟子知言。正如人在堂上。方能辨堂下人曲直。

古今學變卷之上

伊藤長胤　著

○論萬世道化之所本

中庸曰。仲尼祖述堯舜。憲章文武。上律天時。下襲水土。

胤按。子思稱夫子之德。以此贊之。蓋道者在人倫日用之間。而非有高遠難窮之事。自古聖人衆矣。能盡其道而爲萬世人倫之極則者。唯堯舜爲然。能祖述其道而詔之萬世者。唯夫子爲然。故子思稱夫子之德。首以此爲言。而又曰憲章文武。蓋三代之禮。至周而備。布在方策。可擧而行之。故其所憲章必在文武。其祖述之者。自祖述之也。其憲章之者。自憲章之也。非有身居堂上辨堂下之曲直之智。何以得之。是知萬世生民之當祖而述之者乃在堯舜。自此以上。豈無聖帝明王之首出御世。不唯書契之無徵。而其道旁薄廣大。不切日用彜倫。竟不如堯舜之道。平正中庸。推之天下。行之萬世。而不可易也。所以夫子傳書。斷自唐虞。八索九丘。皆在所黜。語孟二書。歷選群聖。每必堯舜爲稱首。其證不亦彰彰矣乎。而後世學者。越堯舜而上及伏羲神農黃帝之世。立天皇地皇人皇之名。葛天無懷。屢屢稱述。吾知其非夫子之意。其唯實知道止於彜倫。而敎盡於仁義。而後可知堯舜之爲聖。而夫子之所以祖述之也。此義也。先子論之詳矣。故今畧敘其說。以託萬世道化之所由始云。

古今學變目錄

卷之上

卷之中

卷之下

瞿曇之教。扇動寰區。不唯譸張之爲幻。而識心見性之說。乘其高明。世之學士大夫。聞其說而樂道之。奔走服從之不暇。以爲軼堯舜而駕孔子。豈翅道與治岐而爲二哉。逮宋眞儒勃興。倡明聖道。以斥異術。其造詣之深。研覃之精。固非漢唐諸儒之所能跂及也。然以性爲未發之理。無欲爲作聖之方。則措諸事業者。雖未至斥以爲緒餘土苴。而要非其至者也。必求諸沖漠無朕之初。以爲性。則仁義禮智之不可得而聞覩。猶聲之在鐘中。火之在石中。徒有其名。而竟無其物。於是乎古之學再變矣。自是而後。循習之久。條貫之成。纏綿補葺。牢不可解。議論訓詁。雖間有出入。而竟不能出其圈櫃。唯知在宋明疏解之中。校其短長。爭其是非。而不肯上下二千餘年間。通覽源流之所自。直以今日之學。爲唐虞三代之學。而不知其離合沿革。不可復一言斷一事辨也。先君子復古之見。亦非一旦之頃。遽放私言矣。服被性理之說者有年。始而崇信體驗。中而辨論考證。因其一二可疑。而觸類引伸。曲暢旁通。卒有以知今日之學。非復唐虞三代之道。其遺言具存。手澤猶新。固無俟乎予之紹續。因敘自唐虞至宋明。學問教法之異同。以見其變之所由。非欲傳之達識。姑以示見曹。分爲三卷。題曰古今學變云。享保壬寅夏四月。

胤伊藤長胤序。

古今學變序

三代聖人之道。變爲今日之學。其所由來者漸矣。豈唯一朝一夕之故也哉。一變乎漢。再變乎宋。潛移默奪於千有餘歲之間。以至今日。而今日之學。不復與古之學同矣。蓋自唐虞而至周。治亂之迹。可考而知也。由周公而上。上而在位。制之禮樂兵刑。設之封井宗學。以使天下之人。薰陶乎敎化之中。治與道一。政以德行。上之所以修其身。乃其所以治天下也。由周公而下。下而不得位。與成德達材之士。私相講習于家庭之間。曰此先王之道也。百行萬善。兼擧錯施。敍之科條。詳其品目。以修其身。以告諸人。則雖與伊傅周召之事業不同。而其以日用彝倫爲當務。濟世安民爲極功。而欲使天下之人同由斯道。則未嘗有二致。而仁義禮智四者。蓋其最大且要者也。自是已上。更無一語。周衰接乎戰國。禮樂廢墜。干戈日尋。陵夷至于暴秦。燔經書。殺儒士。先王之道掃地盡矣。漢興詩書稍行。嚮川儒術。而當時自有當時法度。有當時政令。而先王之遺文。徒供之博士掌故之業。世之儒者。私傳授以專其門。則治之與道。岐爲二途。加之災異五行之說。盛行于世。凡命於兩間者。必取數于五。遂以信並仁義禮智。名曰五常。以配五行。或以爲性。則其不可加損出入。猶五管之懸乎內。四支之具乎外。古者因事設敎之方。遂爲在己一定之物。於是乎古之學始變矣。自斯而後。爲章句訓詁之學。爲詞章記聞之學。聖人之道。晦盲不明者。千有餘年。然當時議論雖膚。而距古未遠。道德性命之旨。猶古之遺也。既而

復性辨跋

羲農邈乎。靡得而詳焉。自軒轅始立制度、漏之人文、以至周之中葉、洋々美德、爲斯厚於後世、黼黻文章表其德、金輿錯行整其飾、人事經緯。無所不貫。極盛之運。不可以加矣。素王之謂集大成、其精神心術之美。道德文章之懿。爲天下萬世之師法者。日星昭乎中天。世入戰國、邪說暴行日盛。王迹帝道。掃地陵夷。至秦氏之刼、畧天下、重器大統、不仍舊貫、別開一天地、始立法律、新設制度、而漢祖之不學。直取是物不自知其入乎霸道、馬上得天下之不若王道、誰識烏之雌雄、故六經之爲弁髦、終不知其爲王者傳國之璽、積二千餘年之久、而不爲人君所用。徒爲小兒應對之具者。無乃戾聖道乎。故後儒之於學。亦唯欲取秦漢以後之制度、以規矩三代以前之懿德、王道之衰。職此之由。而復性復初之說亦尙矣。其意見乎老聃之言、其說成乎莊周之書、後之儒者固執珍襲。以爲說性之手段、唯其言是尙。恬而不顧也。舉世之人。貿々焉莫知其適從、可勝而嘆哉。乙巳之歲予負笈於平安、遂登古義堂、執謁東涯先生、因得其所著之復性辨、親承其說焉。其苦口丁寧。喩々不息也。嗚呼先生之德之行。坦然昭著。海內屬心矣。章將梓是書、光之罔極、先生所著之書。猶有若干部、亦將異日請登梨棗、嗟乎學問之道無他、苟欲讀王者之書、以知聖人之道者。須顧三代人情世態如何耳。予亦欲舍後儒之家言、而取則於古文辭之學於是乎書。

享保己酉季冬之日

東海 平 維章 跋

之所ニ以爲ト大而亦反覆行レ禮。則事有ニ其倫一。而不レ比ニ兼愛平等之茫乎無ト據。此克己復禮之旨也。先儒之說謂克ニ去私欲一以反ニ天理一。夫己者對レ人之稱。指ニ自己身一而言。如下曰ニ爲レ仁由レ己由レ人乎哉一。曰ニ己欲レ達而達ト人曰中古之學者爲レ己。今之學者爲上人。皆然。未レ有下以爲ニ己之私欲一者上也。禮者。大而貴賤尊卑之差。小而進退揖讓之節。凡聖賢之所レ云レ禮者。皆指レ此而言。亦未レ有下以爲ニ天理之名一者上也。先儒以レ仁爲レ理。遂致ニ此解一。此遷ニ就其義一焉耳。固不レ可三以爲ニ復性之證一也。若ニ夫孟子所レ謂湯武反レ之者一。則亦異焉。此言嘗二言レ之。一則曰ニ堯舜性レ之也。湯武身レ之也。五霸假レ之也一。一則曰ニ堯舜性者也。湯武反レ之也一。其一曰レ反レ之。一曰レ身レ之。蓋反ニ求於身一之謂耳。中庸曰。反ニ諸身一不レ誠。不レ順ニ乎親一矣。曾子曰。自反而縮。雖ニ千萬人一吾往矣。易坎之象曰。山上有レ水蹇。君子以反レ身修レ德。禮記曰。不レ能レ反レ躬。而天理滅矣。是知古者或曰レ反。或曰レ身。或併ニ稱反身一。皆通言ニ修身之義一。然則。孟子所レ云レ反レ之者。亦不レ可三以爲ニ復性之證一矣。

寶永五年戊子春三月　　平安　伊藤長胤

復性辨終

之即千尋之喬木一。可乎。四端之心萠蘖之生也。仁義之德千尋之喬木也。將下以二四端之心一爲二性之發一。而求中仁義於其初上。則何以異三於求二千尋之形於未一レ芽之先一哉。若謂下雖レ無二其形一。而其理全中於初上。則凡所レ謂恩愛德澤者仁之疎者。而無形無影之中。乃仁之實處。不三殆爲二虛無空寂之旨一者希矣。聖人之學實學也。聖人之語實語也。故聖人之說レ性。有二充養之方一。而無二復初之說一。

下篇

或曰。六經固無二復性之說一。然夫子曰。克レ己復レ禮爲レ仁。孟子又曰。堯舜性レ之也。湯武反レ之也。豈非二復性之事一乎。曰。此後世遷二就其義一。以爲二復性之證一耳。原二聖賢之意一。則殊不レ然。夫子所レ謂復禮者反復踐行之意。非二還レ初反一レ本之謂一也。蓋仁者天下之大德也。而禮者所三以守二夫仁一也。中庸曰。仁者人也。親レ親爲レ大。義者宜也。尊レ賢爲レ大。親レ親之等。禮所レ生也。孟子曰。仁之實事レ親是也。義之實從レ兄是也。智之實知二斯二者一而弗レ去是也。禮之實節二分斯二者一是也。譬猶二土宇之廣一也。不下分二之區域一封中之山川上。則土宇不レ可二得而守一也。園囿之宏也。不下設二之門戶一。幷中之奧阼上。則居處不レ可レ得而有一也。仁者固無レ不レ愛也。然欲下護二治凡行レ道之疲癃癈疾一。如上レ看二己之父兄子弟之病一。則不レ唯堯舜之所レ病諸。而汎濫無レ統。應接無レ方。己亦不レ得下孝二乎其父一。弟中乎其兄上。故禮以節二文之一。因二其親疎貴賤之等一。以爲二之品節一。老二吾老一以及二人之老一。幼二我幼一以及二人之幼一。親レ親而仁レ民。仁レ民而愛レ物。然後仁可二得而守一矣。故聖人之言レ仁。每必擧レ禮而言。大抵不仁之事。皆出二於徒知レ有レ己而不レ知レ有レ人。於レ是彼我偏頗殘忍克忌之心興。故克二去有レ己之心一以周愛レ人者。固仁

レ至ニ宋程朱氏一。專說ニ復性一。其意以爲。人性卽理。理本善。生來具足。不レ待ニ敎法一。而無レ所ニ虧欠一。自ニ堯舜一至ニ於塗人一。一也。但中間爲ニ氣稟一拘ニ於前一。物欲蔽ニ於後一。而原始所レ受之理。爲所ニ蔽蝕一。而至下與ニ聖人一大異上矣。故今日學問受用。專要下決ニ去其中間所レ蝕之物欲一。以反中其本初之禮上。猶下鑑之明也。爲ニ塵垢一所レ掩。而失ニ其明一。磨ニ其塵垢一。則仍レ舊瑩徹。月之光也。爲ニ雲霧一所レ掩。而失ニ其光一。掀ニ其雲霧一。則仍レ舊淸朗上。此復性之說所ニ以興一也。今審ニ其義一。凡言レ復者。物失ニ其本一而反レ初之謂。故日月之蝕。復レ明曰レ復。疾之愈亦曰レ復。若使下天下之人其初皆全ニ其聖人之德一。而後來始失上レ之。則固復ニ其性之初一可矣。然原ニ其出レ胎墮レ地之時一。呱々而啼。蠢々而動。不レ知ニ是非一。不レ辨ニ好惡一。及レ不レ識ニ父母兄長一。若欲レ復ニ其性之初一耶。則固無ニ惡之可一レ除。又無ニ善之可一レ長。惟其蠢々之中。可ニ以爲一レ善之本具焉。故其稍長也。分ニ是非一辨ニ好惡一。見ニ父母一則知レ親レ之。見ニ兄長一則知レ敬レ之。此人性之所四以爲レ善而非三物之所ニ能及一。可レ爲ニ聖賢一之本胚ニ胎於此一。所レ謂良知良能。是也。苟有ニ以養一レ之。則可三以成ニ仁義禮智一。不レ然。則雖レ有下可レ成ニ仁義禮智之德一之本上。而不レ能レ成ニ仁義禮智之德一。故聖人使下人就ニ其四端之本心一。擴而充レ之。以ニ其所一レ不レ忍推ニ之于其所一レ忍。以ニ其所一レ不レ爲推ニ之其所一レ爲。以得上レ成ニ其德一。孟子曰。人之所ニ不レ學而能一者。其良能也。所ニ不レ慮而知一者。其良知也。孩提之童無レ不レ知レ愛ニ其親一也。及ニ其長一也。無レ不レ知レ敬ニ其兄一也。親レ親仁也。敬レ長義也。無レ他達ニ之天下一也。是也。譬有ニ一顆松子一。方ニ發生之時一。蒔ニ之腴壤一。則不日而孚甲柝矣。莖葉抽矣。日月以烜レ之。雨露以潤レ之。則日長年茂。可三以爲ニ千尋之喬木一矣。今夫觀ニ萌蘖之生一。謂レ可レ爲ニ千尋之喬木一。則可矣。謂ニ

證其所謂本覺眞如者以到佛地。所以說還滅說歸眞。至後世儒者之所道。則居倫理綱常爲重。禮樂刑政爲大。固已斥彼二氏之不足以爲道矣。然其工夫欲去物欲變氣質以復其初。則其所道雖異。而其手段未嘗不同也。然凡天下有生之物。皆必有其本。而積小至大。充微至顯。未嘗有復其初以能成者也。唯一定之物。如明鏡如止水。則在去其蔽以復其初。故活物之漸長也。不唯流水萠蘖爲然。凡人之爲事。亦莫不然。不唯人之爲事爲然。人之進道爲然。聖人之德亦莫不然。夫子十有五志於學。至七十然後始曰。從心所欲不踰矩。聖人之資。固雖異於常人。而年愈高德愈邵。有人不及知而己獨知之者。若復其性之初。則七十不踰矩之盛。既全於嬉戲俎豆之時。生知安行之資。其將何有所拘蔽。而至七十然後始曰不踰矩耶。可見雖聖人之德。必漸積以極其盛也。從古偉人傑士。所以成德達材爲萬世稱道者。亦皆工夫積累以底其成。原其初生之辰。則其所蘊蓄。曾無許多事業。而試之天下之事。凡伎術藝業。其稱神稱妙。能造其極者。亦積累工夫。然後能得成其道。問其生之初。則亦無許多知識。故人之恆言亦曰學進。而未嘗有曰學復者也。此所謂驗之於事實而不然者。所以於宋學既成之後。尙不免有遺議也。

中篇

聖人之言性。有充養之方。而無復初之說。以復說性。自宋而下矣。漢唐諸儒其說雖不明。悉遵依古義。而不甚有失也。唐之中葉。李翺字習之。著復性書三篇。儒者之言復性。自此而始。及

復性辨

平安　伊藤長胤　著

上篇

古者道德一而風俗同。是其所是。非其所非。無奇行異說之接乎人之耳目。及其下衰也。學術渙散無所統盟。不唯邪說暴行之與聖人之道乖馳。同是堯舜。而所是不同。同非桀紂。而所非不同。彼以爲至言妙道。則我以爲邪說暴行。互相攻擊辯難不已。其故何哉。徒託之義理。而不驗之于事實故也。其苟驗之于事實。則是無二是。非無二非。夫何辯難之有。自漢而後。天下學者。華則模徐庾之辭藻。質則守鄭服之箋傳。董楊王韓蓋代專場。衛道雖切。猶未純正。及至宋氏諸賢輩出。互相倡明。踐履篤而講究精。天下靡然信周張程朱氏之爲大宗嫡派也。而尚有遺議者何也。聖人之敎人。其方固非一端。然皆莫非漸次積累以成其大也。故論語首章乃曰。學而時習之不亦說乎。有子亦曰。君子務本。本立而道生。曰習曰務。乃皆其事。而孟子括之而謂之擴充。蓋仁者人之安宅也。義者人之正路也。而其本乃具於人。故孟子曰。惻隱之心仁之端也。羞惡之心義之端也。又曰。仁人心也。義人路也。將以使人就其端。擴而充之。以成其德也。或曰崇德。曰徙義。曰積善。曰集義。其事雖異。其義一也。唯佛老氏之學。其說亦非一端。然莫不以反其初爲說焉。故老氏欲絕仁義廢禮樂。以反其無。佛氏欲絕欲息妄。超脫輪廻。

天之所由也。故孔子曰。富貴在天。而孟子則曰。得之有命。詩曰。昊天有成命。書曰。愼天之命。又曰。不有命在天。譬猶言王法。王者天也。法者命也。主而言曰王。猶單言天也。自事而言則曰法。猶單言命也。合而言。則曰王法。猶言天命也。故孟子於天曰莫之爲而爲。於命則曰莫之致而至。觀爲字至字。可見矣。

或曰。死生有命。集註云。命定於有生之初。非今之所能移。字義非之。竊不免疑。孔子曰。唯上智與下愚不移。且以堯爲君。而有象。以瞽瞍爲父。而有舜。以紂爲兄之子。且以爲君。而有微子啓王子比干。可見最初出胎之時。已是智愚賢不肖之分。一定不可移。且如文王九十七而崩。武王九十三而崩。此二聖人。本無一毫不盡事。而皆不能滿上壽百歲者。此亦自結胎之時。命分已極。何謂不定於有生之初。曰。如文武年壽。自其旣崩之後而見之。固如有命分之定。然未崩一日。其誰知之。故曰。天壽不貳。修身以俟之。所以立命也。可見不問定於有生之初與否。唯知修其身而已。不可以定言也。若夫至性分之善惡。聖賢此等處。只以性言。而未嘗以命言。自宋儒理學之說興。而此等處亦說命。如曰在天爲命。在人爲性。是也。語孟字義云々者。亦就其說難倒之。若使性分一定。則學問亦無益矣。

寶永三年丙戌冬十一月　　伊藤長胤

夫曰知命。則爲氣之命。而加一天字。則却爲理之命。豈有此理哉。然則。五十知天命云者。亦是氣之命。斷可知矣。大抵宋儒之學。專主理字。遂以命爲理之在天之名。然難奈聖人所說命處。皆就吉凶禍福而言。於是遂有理命氣命之說。然證之于經。則其不相合。乃有如此。

或云。然則。凡所謂天命者。皆以爲氣之命而可乎。曰。然。宋儒所云氣命者。有兩般。一是吉凶禍福。一是智愚賢不肖。然聖人所云命者。就氣之中。亦專就吉凶禍福上爲言。而未嘗就智愚賢不肖上說。何者。聖人所云命者。皆是就今日相値上立言。而未嘗溯最初稟受處而言之也。宋儒以理爲性之一源。故吉凶禍福。智愚賢不肖。亦自當初稟得時而言之。故曰。命定於有生之初。然智愚賢不肖之不齊。聖人直謂之性相近。而未嘗以此爲命之不齊也。然則。聖人之所云命者。專就吉凶禍福今日値遇上而言。亦不自天定之時而言之也。可知矣。孟子曰。智之於賢者也。命也。張子述之曰。晏嬰智矣。而不知仲尼。是非命邪。陳北溪等援之以爲氣命之說。賢不肖者。蓋以爲智不足以知聖人。是晏子所稟之命薄也。是倒說也。晏子雖有智。不能知孔子。是孔子所値之命不好也。以上文仁義禮及聖人之於天道也例之。皆是所値之幸不幸。而非所稟之厚薄也。何必以此爲證哉。

或人曰。然則。古書中。或曰天。或曰命。或連言天命。其義亦有所別乎。曰。在孟子曰。莫之爲而爲者。天也。莫之致而至者。命也。此天命二字之正訓。而詳述于語孟字義。無一毫人力之所與。謂之天。似出人力。而實非人力。謂之命。然亦無甚異別。天者命之所自出也。命者

曰。聖人言レ命。詩書六經所レ說。皆是氣命。皆就ニ吉凶禍福値遇上一言。而無下一言說ニ理命一者上矣。自ニ宋儒理學興一。而道有ニ體用一。性有ニ本然氣質一。而亦就ニ天命中一。分ニ理氣二件一。其所レ謂理之命者。指下天地之所ニ以爲ニ天地一。人之所ニ以爲中人。物之所ニ以爲上物。或曰ニ無極之眞一。或曰ニ本然之性一。隨レ處異レ名。皆理之命也。其所レ謂氣之命者。亦有ニ兩樣一。一樣是吉凶禍福。貧富壽夭。所レ値之不レ同者。一樣。是智愚賢不肖所レ稟之不レ同者。猶ニ性之有ニ本然氣質一也。然詩書六經中說レ命者。不レ知ニ其幾許一。然皆說ニ氣之命一。而其指以爲ニ理之命一者。纔不レ過下論語五十知ニ天命一。及中庸天命之謂レ性。孟子性也有レ命等。寥々三數語上而已耳。然中庸所レ言。其義不レ同。既辨ニ于上一矣。孟子言ニ性也有レ命者。亦是死生有レ命之命。就下貧富貴賤之不レ可ニ自致一者上而言。不レ可ニ執以爲ニ理之命一也。五十知ニ天命一者。亦是不レ知レ命無ニ以爲ニ君子一之意。夫知レ命者。於ニ貧富窮達之際一。處レ之泰然。一毫無ニ怨悔咎尤之意一者。遯レ世而不レ見レ知。而不レ悔。及人不レ知而不レ慍。及上不レ怨レ天。下不レ尤レ人之境界。孔子是時自知ニ其境之熟一。而後置レ詞如レ此。所レ謂安レ命者。是也。向所レ謂聖人不レ言レ命者之益不レ可レ從。而亦非ニ窮理之命之謂一。從可レ知矣。

或曰。然則。五十知ニ天命一者。亦是氣之命乎。曰。然。知レ之云者。不ニ唯通ニ知其理一。而中有ニ其德一。實信ニ得及ニ心平安レ之之境一。乃聖人之極功。中庸明曰。唯聖者能レ之。何以此謂レ非ニ聖人之至極一也哉。且論語所レ謂知レ命者。雖ニ宋儒一。亦以爲ニ氣之命一。而就ニ吉凶禍福上一而言。唯所レ謂知ニ天命一云者。推爲ニ理之命一。故集註云。天命即天道之流行。而賦レ於レ物者。乃事物所ニ以當レ然之故也。最所レ不レ悉。

常理測者。後世所云王者不死者。殆近是焉。非聰明正直者。不得而知也。性與天道。子貢偁曰不可得而聞。豈以口舌文字。容易曉解哉。要在知德者實知之焉耳。

或曰。程子曰。賢者惟知義而已。命在其中。又曰。聖人則更不論利害。惟看義當爲與不當爲。便是名在其中也。此語字義不取者。如何。曰。此說始於程子。而成於尹和靖。乃曰。命不足道也。朱子演其義。以爲聖人說命。只是爲中人以下說。聖人欲曉子服景伯。故以命言。如曰有命。是爲彌子瑕說。聖人用之則行。舍之則藏。未嘗到那無可奈何處。何須說命。如一等人。不知有命。又一等人。知有命。猶自去計較。中人以上。便安於命。到得聖人。便不消得言命。是也。然經書中。聖人言命處最多。如曰不知命無以爲君子也。又曰。死生有命。富貴在天。又曰。五十知天命。又曰。君子居易俟命。又曰。得之有道。求之有命。又曰。夭壽不貳。修身以俟。所以立命也。豈必皆爲中人以下而說之哉。且如孟子所云。孔子得之不得曰有命。朱子以爲彌子瑕說。最不可曉。得之不得曰有命。此孔子平日處己之雅言。動輒稱之。非其爲誰而說之也。孟子以此爲正。而明其在衞無主彌子之事。分明是聖人言命也。且如天字。亦是命也。聖人以天自安者。不可枚擧。如曰天生德於予。曰天之未喪斯文也。曰天未欲平治天下。曰吾之不遇魯侯天也者。亦多。豈聖人特言天。而不消言命耶。蓋知聖人不消言命者。不可信也。

或曰。五十知天命者。是理之命。而聖人不消言命者。是言氣之命。所指不同。何相證明。

張一理字。其天之有理氣也。猶性之有本然氣質也。盡本然之性者。即是正命。故其言人事盡處。便是天命。此義命二者。混合不判。尤非聖人之意。義是處己之道。命是在天之物。故凡事有言義處。有言命處。不可混而一之也。孔子不主侍人瘠環。而主陳侯。固是義。雖主侍人瘠環。而其得位與否。不可必。是命。故孟子終之曰。主癰疽與侍人瘠環。是無義無命也。既曰無義。而復曰無命。則是義與命。其爲二物。尤明白矣。孟子又嘗曰。得之有命。求之有道。道亦義也。此亦可證矣。如比干諫而死。此義也。紂之不仁暴虐无道。非納諫之人也。比干以至誠惻怛之心。唯知有其君。而不知有其身。遂諫死。此適所謂二者不可得而兼。舍生而取義者也。此處唯當言義。而不可以命斷之也。且如箕子微子。亦同朝而仕。然自靖自献。各行其志。未必皆諫而死。而死者比干一人而已。然則。其事雖仁。而其死者。乃有致而至者。何以得言命哉。孟子明說莫之致而至者命也。後世所謂命者。多與此說矛盾矣。

或曰。然則。使文王死于姜里。孔子死于陳蔡。亦是可謂非正命乎。曰。若使有此事。固可謂之命也。而特不可謂正命耳。然如文王孔子之聖。必無死于非命之理。所以曰。天生德於予。桓魋其如予何。又曰。天之未喪斯文也。匡人其奈予何。如舜之塗廩浚井。及湯之囚於夏臺。孟子之戒於薛。聖賢之遇厄難者。古今居多。然遂不死于非命。故先人常言。天有必然之理。人有自取之道。常引韓非子所云奔車之上無孔子。覆舟之下無伯夷爲證。若不然。則孔子所謂其如予何者。不殆於强爲不可知之語。恐嚇衆人也乎。此一種道理。而不可以

致之而至者。雖非正命。而亦皆可以謂之命也。然則。恣酒色。淫起居。而死者。亦謂之命。而走權勢。湜術數。而得富貴者。亦謂之命而可矣。莫之致而至者。命也。莫之爲而爲者。天也。孟子言。莫非命者。就莫致而至者之中。而分正非正耳。非凡吉凶禍福。可概而謂之命也。

或曰。孟子又曰。盡其道而死者。正命也。桎梏死者。非正命也。集註云。盡其道。則所値之吉凶。皆莫之致而至者矣。犯罪而死。與立岩墻之下者同。皆人所取。非天所爲也。集註豈以人爲便爲天命也哉。曰。集註只將正命字。直做命說。故說桎梏犯罪而死者。人爲而非命也。然與上節所註吉凶禍福。皆天所命。惟莫之致而至者。乃爲正命意大矛盾。則桎梏死者。雖非正命。亦可謂之命也。尤不然也。孟子不唯曰命。而必曰正命者。分明是對有非正者而言。若無非正者。孟子何必煩著正字。凡莫之致而至者。雖有正非正之別。皆謂之命也。平日修身愼疾。無一毫之不盡。終天年而死于牖下。此爲盡其道而死。正命也。書所謂考終命。是也。若夫身無可致之罪。而誤陷非罪而死者。則非正耳。如公冶長之陷於縲絏之中。非其罪也。若當時會長不幸。其冤不雪。而死于刑戮。則固可謂之命。而不可謂正命。故曰。桎梏死者非正命。如犯罪而死者。是己之所招。直非命耳。何須言非正命也。

或曰。比干諫而死。朱子以爲正命。又曰。當死而不死。却是失亡正命。又曰。使文王死於姜里。孔子死於桓魋。却是正命。然則。雖不終天年。而亦有可謂正命者乎。曰不然。宋學主

我曰。吉凶禍福。皆天之所レ命。而孟子曰。禍福無下不二自レ己求一之者上。此亦皆人之所レ招。而非レ由レ天也。如何。曰。福レ善殃レ淫之徵。雖二皆天道之常一。而考下其所二以致一之者上。則皆由二善惡之實一。有二以招一之也。所以孟子曰。無下不二自レ己求一之者上。然其命之或至或不レ至。非三人之所二能爲一也。所三以皆歸二之于レ天也。如二堯舜孔子之聖一。豈遠乎哉。以二天道一言レ之。皆宜レ得レ福之人也。然堯舜爲二天子一。壽皆百餘歲。孔子不レ有二天下一。壽亦不レ及二中壽一。謂三之非二天命一而可乎哉。故孟子曰。聖人之於二天道一。命也。若夫小人之爲二不善一。而遭二刑戮一。此國家憲章之常。必爲必刑。不レ可三以謂二之命一也。若以レ此爲レ命。則凡天下之事。豈有二非レ命者一哉。何者不レ可三以立一命乎哉。孔子於二伯牛一獨曰。命也。夫斯人也而有二斯疾一也。可レ見倘使下不レ爲二伯牛一者。而罹中斯病上。則孔子決不二亦曰一命也。明矣。或又有二小人而得レ福者一。此只是幸焉耳。亦不レ可レ謂レ命也。故中庸曰。小人行レ險以徼レ倖。其義最明白。

或曰。然則。命者唯爲二君子一言レ之。而小人。則所レ値之吉凶禍福。皆不レ足レ謂二之命一乎。曰然。君子平日修レ身飭レ行。戰々競々。以終二其身一。所レ遭之禍。非二自取レ之者一也。遭二時不造一。以殞二厥軀一。所レ得之福。亦非二僥倖希求而得レ之者一也。積善之應。天必佑レ之。所三以皆謂二之命一也。孔子得レ之不レ得曰レ有レ命。是也。小人則不レ然。冥行妄作。自取二禍敗一。固其所也。其得レ福也。亦援引干謁。百方求進。是豈足二以言一命哉。故曰。小人不レ知二天命一而不レ畏也。

或曰。孟子曰。莫レ非レ命也。順受二其正一。云云。集註云。人物之生。吉凶禍福。皆天所レ命。然惟莫二之致一而至者。乃爲二正命一。然則。小人亦不レ謂レ無レ命也。曰不レ然。若如二集註說一。則吉凶禍福之來。有

句云。明命即天之所以與我。而我之所以爲德者也。若如子之說。則明德。是屬人之物。明命是在天之名。以此相證。義不相協。曰不然。古人援引詩書。不如後人之拘々。唯引說明諸語以證明々德之義焉耳。下文釋新民。亦引詩之其命維新。此豈以命爲即民乎哉。然則。釋明明德。而引天之明命。亦何相妨。

或曰。中庸曰。維天之命。於穆不已。蓋曰。天之所以爲天也。據此。則似以陰陽造化之理爲天命。朱子所謂天命之流行者。亦不可非也。曰不然。聖人說天道天命。皆就吉凶禍福。人之所値而言。但易以言陰陽。故以一陰一陽。流行不已。謂之天道。至於天命。則詩書六經。皆就禍福爲言。如今人所云運一般。無一句以陰陽爲天命者。亦無以人之智愚賢不肖言天命者。至宋儒主張理字。遂以天命爲一理之別名。併陰陽之所以往來。智愚賢不肖人物稟受之所以不同。皆謂之命。而强分理氣之別。今曰維天之命。於穆不已。此亦吉凶禍福天之命人者。何者。觀詩之語。其下乃曰。何以溢我。我其收之。駿惠我文王。曾孫篤之。蓋言天之休命。沓臻不已之謂。中庸引之。似與詩意差異。援於穆不已之語。以發明至誠不息之義。故曰。天之所以爲天也。然未嘗以此爲一陰一陽。所以往來不已之妙也。後世因此。遂以天命爲陰陽流行之妙者。尤非也。大抵古人引詩。最是融活不拘。如曰綿蠻黃鳥。止於丘隅。本只因事賦物。無甚意義。大學衍其義云。可以人而不如鳥乎。作詩者何嘗有此意。中庸引雖天之命。亦猶如此。只斷章取義焉耳。何況由此而謂有陰陽流行之說乎。

事不善之招而到者。雖非好事。亦斷而歸之于命也。於是知命安命等語作矣。此等處。當隨其時世之變。而辨識其義矣。

或曰。程子云。在天爲命。在人爲性。朱子曰。太極有動靜。天命之流行也。如何。曰。宋儒之學專主理。故以性命天道等字。爲一理之別名。而隨處異名也。最不然也。聖賢立言。各自不同。皆有所指。以各明其旨。豈以可相通用之字。隨處換用。以爲無益之勞擾哉。立義各異。自不能不別用。若如宋儒之説。則如曰五十知天命。亦曰五十知天理。亦可也。如曰窮理盡性以至命。亦曰窮性盡理。亦可也。如曰格物致知。亦曰知性盡心。可矣。豈可乎哉。如命字。本天之命人。吉凶禍福。猶人君之有命令。以賞罰人。故謂之命也。詩書六經。未嘗以此爲陰陽造化之理。亦不以此爲在人之性也。程子以爲人性在天之名。朱子以太極爲理之命。皆失之矣。

或曰。中庸曰。天命之謂性。大甲曰。顧諟天之明命。據此。則程子之語。亦不可非。曰。中庸之意。蓋謂人之性。即天之所命。而未嘗以人之性。爲即天之命也。其曰天命之謂性。猶莊子曰大塊假我以形。此雖外書。語勢可證。若謂命爲即性。猶曰假即形也。豈可乎哉。此命字虛字。詳于字義。至曰顧諟天之明命。則益不然。蓋成湯雖尊爲聖人。常恐失天命。而自恐懼修省也。書經中此等語最多。如武成曰恭天成命。曰俟天休命。召誥曰惟不敬厥德。乃早墜厥命。皆就天之所命而言。未嘗爲人性在天之名也。或曰。大學釋明明德。乃引太甲之語。故章

天命或問

京兆　伊藤長胤　著

或云。聖人既言天道。又言天命。其義如何。曰。天道言其常。而天命就到來上爲言。觀經書所載凡所言天道者。如善人之必得福。不善人之必得禍。皆以天道而言之。如曰天道福善殃淫。是也。其曰天命者。非人力之所致而至者。皆命也。如善人之得福。固是命。而其遇不幸。亦是命也。故如伯牛之爲人。固可得壽考。而不幸罹疾。孔子以命斷之曰。亡之命矣夫。斯人也而有斯疾。蓋以天道之常而言。則大德者必當得祿位名譽之報。而間或不然。如孔孟之厄窮。顏子之夭。伯牛之疾。是聖人不能與天道一也。故孟子曰。聖人之於天道。命也。故古書中。未嘗有以聖賢之得禍。謂之天道者。天道天命之別。從可知矣。

或云。惟命不于常。道善則得之。不善則失之。據此。則所謂命者。似專就福而說。而言命通吉凶者。何哉。曰。凡詩書所云命者。與孔孟所云。立言稍異。詩書言命者。如曰天命文王。王斯大邦。曰周雖舊邦。其命惟新。曰天命未集。曰天命以傾。皆是好字樣　原命字義。蓋天之命令。猶人君之有敕詔也。今爲天子。以有四海。此天之所命。本是好事。及其君德不正。而失四海。則猶廢墜君命。而天命離之矣。康誥所謂善則得之。不善則失之者。是也。湯所謂顧諟天之明命者亦如此。凡詩書中所說天命者。皆爾。到孔孟之書。始通吉凶而言之。如無人

跋

道一而已矣。後世岐曰ニ體用一。而大義既乖。聖學幾レ熄矣。原下其所謂所ニ以然一之理云者上。可ニ以言一而無レ益ニ於行一也。夫猶ニ塵飯土羹一耶。可ニ以戯一而不レ資ニ枵腹一也。我紹述先生。夙承ニ先緒一。善ニ誘後進一。諄復不レ倦。然而村校社師。尚狃ニ舊聞一。疑團不レ釋。因爲著ニ此書一。命ニ士亨一校閲上レ梓。業已有レ緒。既而先生歿。人琹之影。曷勝ニ悵然一。嗚呼。此書最系ニ晩出一。寔不レ可レ忽諸。苟欲下得ニ其門一而入上者。不レ由ニ關鍵一而可乎哉。

元文丁巳歳上巳日　　門人　奥田士亨拜書

元文二年丁巳夏四月日　　京華書坊　瀨尾源兵衞發行

地に引合てみれば、天地もまた生生を道として萬物を化育する時は、これ又孝弟の道にたがはず、是を建二諸天地一而不レ悖と云、又これを鬼神にたゞして占ふ時は、鬼神も亦孝弟のことをおしゝとは告玉はず、是を質二諸鬼神一而無レ疑と云、又これを將來の世にこゝろむるに、却後千百年して、たとひ聖人ありて出現し玉ふといふとも、この孝弟の道をおしゝとせざると、決焉としてしるべし、是を百世以待二聖人一而不レ惑と云、これ中庸の道の正道たるゆへなりと云としかり、仁義と云も、この二三章の言を何となく諷誦して味ふ時は、強て議論穿鑿するともなく、道のわけしるべきとなり、因てその義を詳にして、篇の終りに著すと云レ爾、

享保十五年庚戌　　東涯誌

學問關鍵畢

これを道を行ふと云、人たるもの、かくなければかなはざることをしる、これを道を知ると云、その大なるを賛美して、これを天地に察かなりと云、たとへば國家の法度あるがごとし、通都大邑所在に制札を立て玉ひて、忠孝をはげまし、邪術を禁じ、その外、箇條しな〳〵ありて、天下の人、有智無智をわかたず、つゝしみ守りて違背することなし、これ人人の心に具りたることにも非ず、又人身をはなれてあるものにもあらず、人の業作かくなければ不叶わけを考へて定玉ふ、道と云もまたしかり、この義をわきまへずして、道と云ものはいづくにありやと尋求るは、まどひの甚きなり、中庸曰、率性之謂道、此等のことばにて、道の大畧しるべし、凡そ二時の食事をして、父母を養ひ、妻子をはごくむ、いづれも生付たる性なり、故云、食色性也、又云、父子之親天性也と、君子の道と云ものは、その生付たる性に相應して、父兄あれば孝弟の道ををしへ、妻子あれば慈愛の道ををしふ、これを率性の道と云、あるひは父母を棄、妻子を絶て、七日断食するやうにとをしゆる時は、人の性に應ぜざるゆへに、天下に通じては行はれざるなり、又曰、道不遠人、人之爲道而遠人、不可以爲道と、此も同じことにて、道と云ものゝわけ、彌明なり、又曰君子之道、本諸躬、徵諸庶民、考諸三王而不繆、建諸天地而不悖、質諸鬼神而無疑、百世以俟聖人而不惑と、この章亦同し意にて尤詳明なり、君子の道、孝弟ををしへ玉へば、その身も孝弟を行なひ、是を萬民の上に推ても萬民も亦從やすき、是を本諸躬徵諸庶民と云、又いにしへの聖人のをしへ、いかゞと尋れば、古の聖人も亦孝弟をよしとし玉ふ、是を考諸三王而不繆と云、又これを天

に具るの理にあらず、沖漠無朕、虚靈不昧等の説は、みな佛老の眞詮にして、聖人の道をかたるゆへんに非ず、聖賢のいはゆる性は、みな氣質の性にして本然の性なし、心はみな已發の心にして、未發の心なしといへり、その説つぶさに遺書にあらはる、予因て思ふ、四十年前先子門人弟子のために、性善の説を倡ふに、初學入門の徒は、にはかに領承せず、兎角人は生付あしきものにて、性善とはいはれまじと思へり、今に至るまで、世間一通りの人は、いづれもそのやうに思ふものなり、皆俗見なり、然どもこれは世上の人の模樣をみて、料簡を付たるものなり、荀子の性惡など云も、その類なり、書物をみ學問する人は、性善と云ことはよく合點すれども、仁義禮智は人の性に生付たるとおもへり、これは書物をみ、先儒の成説を習熟して、道理を以てかくおもへり、しかれども、仁義を只生付とばかり意得ては、もとより孔孟の意にも非ず、又宋學の旨にも非ず、漢唐諸儒鄭康成退韓之などの見になりて、半上落下のどちもつかざることなり、しかるに先子仁義禮智は道德の名にして、性にあらずと倡ひ、さま〴〵に比喩辨論詳明なれども、初學の士は、人身をはなれて何事もあるまじと思ふて、にはかに領解せず、畢竟道と云ものは、卽事卽道人人行事の上にありて、吾身をはなれて、一物のみるべきものあらんや、古も今もかはることなく、和漢のわかちなく、親あれば孝をつくし、君あれば忠をつくすこと、自然の道なり故にこれを天下の達道と云、古の聖人そのよき加減なるところを考合て、法を設け言を立て、萬世にのこし玉ふ、萬世の人、之を守りて、身をおさめて、たがはざるやうにするなり、これを道を守ると云、常にその通りにして、行ひもてゆく、

の持合て、人道立つことなり、故に孟子梁の惠王のために、王亦曰仁義而已矣との玉ひ、又ひろく衆人のために、仁者人之安宅也、義者人之正路也との玉ひ、易の說卦に立人之道曰仁與義といへり、さて又仁義ばかりにては、事の次第階級わかれざるゆへに、禮と云ものなければ守りがたし、智と云ものなければ仁義の大切なることをわきまへず、故に孟子に禮は仁義を節文することをの玉ひ、智はこれを守て弗去ことをの玉へり、これに因て仁義禮智を人道の要とす、しかるに人は萬物の靈にして、天性事のよしあしを、わきまへしるものなれども、たゞ生付のまゝにして學びざれば、草木に雨露の養ひ培養のたすけなきが如く、その生付を成就することなし、學問と云ことは、古聖賢君子のよき行ひ、よき言をみきゝ、又は世間の老成篤實なる人のしかたをみならひて、それをてほんにして、しならふことなり、しかるに因て、自ら人倫の交りをしりて、仁義の道にいたるなり、さて又人と云もの、欲心さかんにして制しがたきゆへ、禮義と云ものをのりとして、これにたがわぬやうにと思ふ時は、その身よくおさまりて、人欲におぼれて、身をうしなひ家をやぶることはなし、これ修身の大畧なり、これより上つかた、段段に長進して、聖人君子の域にいたることは、その人の志にあり、しかれば學問をして、天地萬物の理をきはめて、全體大用をあきらかにすると云は、その說高遠にて、人のなしがたきことなり、身を脩て一毫人欲のなきやうにするを目あてとするも同じことなり、先君子性理の學を講究することも數年、その甚だ高遠に馳することを厭ひて、語孟の二書によりて、專日用常行の上にありて、すこしも微妙なる理はなきことを覺悟せり、是に因て道は天下の達道にて、性

これを規矩準繩と云、人の心は活物にして、定りがたきものなり、界尺なくんばかなふまじ、心の界尺は何ぞや、仁禮の類これを界尺として心のこれにたがはざるやうに修爲し玉ふ、故夫子の聖といへども、なを七十の境界に及で、始て從ニ心所一レ欲不レ踰レ矩との玉へり、又詩經大雅蒸民の篇曰、天生ニ蒸民一、有レ物有レ則、民之秉彝、好ニ是懿德一と、人心の則なければ不レ叶と、この詩にて尤明白なり、好と云は、理義之悅ニ我心一と云、好レ仁好レ義と云の類にて、人たるもの、よく生付たるものゆへに、この懿德をすきこのむとなり、懿德と云は美德と云ふことにて、仁義禮智の屬をさして云、卽人心の則なり、もし仁義禮智を心の德とする時は、萬事萬物みなそれぞれの則ありて、心ばかりに則なし、自の德を則とするなり、その說のごとくなれば、道具をこしらゆるに規矩準繩をからずして、道具の上に規矩準繩を具るがごとし、これ理のあるまじきことなり、しかるに因てしる、道は天下の達道、人心の法則にて、仁義禮智は、その中の大すじめなり、人は萬物の靈にして、その性善なるゆへに、よく之を好て行ふなり、性分の中、全くこの理を具足するにあらず、

しかる時は今日人たるもの、何を界尺として身を修むべきなれば、畢竟仁義の二つにあり、人と云ものは、上としては下をおさめ、下としては上に事へ、親は子をはごくみ、子は親をいつくしみ、親戚鄕黨朋友は、たがひにもちあひたすけて世をわたる、天下にても一國にても、一家にてもかくのごとくありて、人間世を成就す、これを仁と云、又は物を人にあたへ人より物をもらひ、出處進退生死のわけ、それぞれのすじみちにたがはず、のりに叶ふやうにする、是を義と云、この二つのも

上に具にあぐるとをりなり、宋の世の諸先生、漢儒附會の陋を辨ぜらるゝこと、其功多といへども、五性のことはそのまゝ遵用られて、その說いよ〳〵詳に、その理いよ〳〵ふかし、又心性のこと、聖賢の書に其說ありといへども、兎角道と云ものを目當として心のこれにたがはぬやうに示し玉ひ、たゞ心性を尊ぶことにあらず、又佛老の說も、さま〴〵端おほしといへとも、畢竟至極のところは、わが心の妙を觀じて、專らわが心を尊で萬法唯一心、心外無別法と說く、先儒道を論ずるのあいだ、虛無寂滅の法を斥て、辨論尤嚴なりといへども、反て心理高妙の說を倡ふて、又一心を主として、聖人のいわゆる仁義禮智も、卽吾心の理なりといへり、是に因て性情體用の說おこれり、

人と云ものは、わが一身のはたらき、いづれも相手あるものなり、耳には物をきくを職として、相手は聲なり、目は物をみるを職として、相手は色なり、口の味を甘ひ、鼻の臭をかぐも、亦しかり、心と云ものは、思慮分別するを職とす、その相手は道なり、故孟子曰、口之於レ味也有二同嗜一焉、耳之於レ聲也有二同聽一焉、目之於レ色也有二同美一焉、至二於心一獨無レ所二同然一乎、心之所二同然一者何也、謂理也、義也、聖人先得二我心之所一レ同然耳、故理義之悅二我心一、猶二芻豢之悅一二我口一と、仁義禮智を心の德とする時は、耳目口鼻は皆相手ありて、心に相手なし、自の德を相手にするなり、孟子の言を考れば、心の義理をおもしろく思ふは、耳目口鼻の聲色臭味を悅ぶがごとし、これを今日人人の上に推當てみるに、亦この通りなり、然れば仁義禮智を心に具りたる理となしがたし、又何事にてもそれ〴〵の界尺と云ものあり、一の道具をこしらへ、一の衣服を製ゆるにも、みなそののりあり、

異の說盛なるに因て、萬事を五つにわりて、五行に配當す、此に因て四德に信を加へ、仁義禮智信とたて丶、之を五常と云、人に五常の性を具ると云ことは、漢書元帝の詔書に出で、その目を仁義禮智信と云ことは、はじめて董仲舒の傳にあり、楊子法言にも其說あり、禮記中庸篇天命之謂レ性の下、後漢鄭玄註に、木火土金水の神、仁義禮智信の性となること、詳にあらはせり、班固が白虎通にも、その理を詳にせり、その後唐の韓退之の原性にも、この五常を列ねて性と云へり、然ども原道には冒頭に仁義道德とあげて、凡吾所謂道德云者、合ニ仁與一レ義言レ之也、天下之公言也とあれば、全く性とも定められず、宋の周子に至りて、五常は德と名けて、人の性は剛善、剛惡、柔善、柔惡、不剛不柔而中とし、五の品を分けらる、通書に云德愛曰レ仁、宜曰レ義、理曰レ禮、通曰レ智、守曰レ信と、太極圖說に曰、五性感動、而善惡分、萬事出矣、聖人定レ之以ニ中正仁義一而主レ靜と、是なり、伊川程子に至りて、顏子好學論を述て曰、天地儲レ精、得ニ五行之秀一者爲レ人、其本也眞而靜、其未レ發也、五性具焉、曰仁義禮智信と、本然の性を云へり、これよりこのかた、凡儒學をずる人は皆この說を遵守りて、たがふことなし、秦漢已來の說、通じて之を考るに、周子已前はこの五つのものを性とも見、德とも見て、その說一決せず、その性と云も、專ら氣質の上、已發に就て云、程子已來定りて本然の性未發の體と云ものになりて、その說一定せり、所謂性卽理也と、卽この義なり、

古今の間、通じて之を考るに、仁義禮智信を五性と云て、五行に配することは、其漸漢儒に始れり、之を六經に考れば、みな道德の名にして、又一定の數あるに非ず、世に交り人に付合ふしかたの名、

ゝ思耳といへり、これ性善四端の説のおこるゆへんにして、仁義禮智を行ふの本、わが身にそなはれりと告るなり、それゆへ孔子の心性をの玉ふは、言善惡にわたらず、孟子の心性をの玉ふは、專ら善についての玉ふ、しかれども心はよくすればよくなり、あしくすればあしくなるものなれども、その正躰善なるものにあらざれば、道にすゝむとなし、孔孟の言、ことなるやうなれども、其至極は一致におつるなり、

四端の説孟子にはじまる、堯舜の時、天下太平人民豐樂にして、戸ざゝぬ御代と云は、仁の極功なり、その本は何より出ると尋る時は、上一人の身、一片の慈悲心よりおこる、これを惻隱之心仁之端也と云、端とは根本と云ことなり、たとへば仁は扇をひろげたるごとし、惻隱の心は扇據(かなめ)のところなり、孟子の中、此を物に比喩して若二火始然一若二泉始達一と云、又萠蘗(めだし)の生にたとふ、これは艸木のひこばえをそだてゝ大木になし、岩間のしみづを引て大河となるがごとく、いづれも生物に付て、その次第に生長することをいへり、先儒の説にては、仁と云は本心未發の躰にして、此心の理思慮意念の未たおこらざるところなり、意念のおこるところを、四端の心と云、根ある草木の地上に芽を出したるが如し、それゆへ端と云は、はしと訓みて、はし口のみゆることなり、德澤の物に及び、天下萬民に及ぶは、仁の施と云ものにて、躰用の外にあり、そのわけ先子の遺書につぶさなればこゝに贅(そ)へず、

仁義禮智の次第、上にあぐる通にて、孟子の時に至て、その目全そなはれり、其後秦漢以來、五行災

の問なし、たゞ性相近也習相遠也の一章、性のことをの玉ふ、然れどもこれを專敎を貴て善をならへとの玉ふことにて、性を貴ぶの說に非ず、心のこと少少あれとも從ニ心所一レ欲不レ踰レ矩、其心三月不レ違レ仁がごとき、いづれも道をのりとしての玉ふ、たゞ心を貴ぶの說にあらず、たしかに心の正躰をの玉ふは、孟子にのする夫子の語、操則存舍則亡、出入無レ時、莫レ知ニ其鄕一惟心之謂與との玉ふ一章のみ、是も心はよくすればよくなり、あしくすればあしくなるものにて、常に善を以て養はざれば叶はざることを示し玉ひて、專ら心を貴ぶの說にあらず、それゆへ後世の儒家には此章におひて疑多きことをまぬかれず、孟子の時に至て、本心と說き、良心と說、性善四端良知良能等の名おこりて、專ら人の心性をよきものと示し玉ふ、

孔子の時は春秋の末、衰亂の世といへども、先王の遺風尙のこりて、當時の人仁義の貴ぶべく、人の學て仁義を得べきことをしれり、ゆへに論語の中には、仁義を行ふの方法ばかりをの玉ひて、わけて仁義の結構なることをの玉はず、又人性の善なることをも示し玉はず、孟子の時に至て、世道いよいよ衰微に及て、世間の人たゞ功利計謀をつとめて、仁義の大切なることをしらず、所謂言非ニ禮義一謂ニ之自暴一ものなり、又仁義をよきことと思ふものあれども、わが一身を見かぎりて、仁義を得行ぬとおもへり、所謂吾身不レ能ニ居レ仁由レ義謂ニ之自棄一ものなり、しかるに因て、仁義の大切なることを拈出して、仁人之安宅也、義人之大路也、舍ニ安宅一而弗レ居、舍ニ正路一而不レ由、哀哉といへり、さきに惠王に對して曰ニ仁義一而已矣、何必曰レ利、又人の性の善なることを示して、人人有下貴ニ於己一者上弗

て、人たるもの平生の所作、慈悲怜憫することをすくを、仁を好と云、義理に叶ふことをすくを、義を好と云、儀式作法ごとをすくを、禮を好と云、所謂國君好レ仁天下無レ敵と云、上好レ義則民易レ使也と云、富而好レ禮貧而樂との玉ふ、みなこのわけなり、その餘居レ仁由レ義と云、履レ禮蹈レ仁と云等、いづれもこの通りなり、之を安宅正路にたとへ、理義を芻豢に喩ふるも、これにてしるべし、しかれば語孟五經中にあらゆる道德仁義等のことば、みなこのわけを意得て勘辨すべし、此經の大括(おほくくり)例なり、因ておもふに、道を行ふといふことは、道をゆくと云ことなり、行の字兩音あり、ゆくとよむ時は本音平聲なり、おこなひとよむ時は、胡孟反にて去聲なり、德行行義のごとき、皆去聲と點發す、字彙人之所レ行謂二之行一注あり、おこなふとよむ時も平聲にて、行レ仁行レ義のごとき、古來別に音注なし、然れば日本にて道路を歩ゆくを、ゆくとよみ、仁義をつとむるをおこなふとよみわけたるは、此邦のよみくせにて中國にてはこの差別なし、行レ仁行レ義と云は、仁をゆき、義をゆくとよむ意なり、平生の業作このすじにたよりて、つとめゆくことなり、たとへば仁を居宅に比して、居レ仁と云、禮を土地に比して履レ禮と云がごとし、道路をふみゆくを借て、仁をゆき義をゆくと云、これにてしる道德仁義は人人業作のすじにて、未發の性と云ふべからざること、そのわけいよ／＼判然なり

心性のこと、唐虞三代の書には、その沙汰なし、偶その說ありといへども、古文尙書の內に出て、當時の眞語にあらず、論語の內にも諸弟子仁を問ひ、孝を問、政を問の章はあまたあれども、心性

りあるならば、堯舜三代よりも、その沙汰あるべきことなり、しかるに堯舜の時、仁義の名さへ未あらはれず、孔子專ら仁をの玉ひ、仁智との玉ひて、中庸に仁義禮と合せ序て、孟子に至りて、仁義禮智の四の名はじめて具れり、これに信を加へて五性と云ことは、はじめて漢書董仲舒の傳にいづ、その事甚た晩し、且又仁義禮智を性とする時は、凡經傳の中、この四德に配んで、或は仁義禮樂と云、或は仁義忠信と云、或は仁敬孝慈信と云がごとき、亦みな以て性とすべきや、然れば仁義禮智の四のものは、敎法の名目にして、代代の聖賢、次第に詳明し、その目漸漸にそなはりて、性具の定數に非ること是にて知べし、大要古今の學者、所レ見まちまちなりといへとも、語孟五經を本經として、證をとらずと云ことなし、しかるに語孟より以上、仁義禮智信を五性とするの說なきこと、上にあぐる通なり、この外又うたがふべきこと左にあらわす、合せ考ふへし

又經書に好レ仁好レ義好レ禮等の訓あり、又仁を安宅にたとへ、義を正路にたとへ、禮を門にたとふる等のこと、數多見えたり、仁義禮智を性と云時は、好とはいはれまじきなり、又物にも比へがたきなり、躰用の說を以て言ても、躰とも用ともいはれまじきなり、畢竟道と云ものは、人身をはなれてみるべきものに非ず、又人心に具足して、目にもみえず、耳にもきこえざるの理にもあらず、今日人人の行事、平生人に付合ふしかたの名なり、道とは本道路の名、日本にては東山道東海道、都の中にては五條通り三條通のごとき、大路官道をさして云、貴賤智愚をわかたず、諸萬人のともどもに通行する所なり、世の人の仁義禮智を行ふも、また此のごとし、故にこれを道と云、しかるに因

とす、この四つの德は、道德中の最大なるものなり、しかれば古よりの聖賢君子、百行の中につい て、彼此取合せ、宣に隨てをしへをたつること、後世の憲法式目に、箇條畫一を立ること、世世によりて、多少損益一定ならざるがごとし、語孟並文言系辭周禮左傳禮記にさまざま取合せてをしへを立らるゝこと、その中に得失はあるべけれども、みな人ををしふるの條目なり、しかれば仁禮義貞と云てもよく、仁義忠信といふてもよく、知仁聖義忠和と云てもよく、敬以直ㇾ內義以方ㇾ外といふてもよし、いづれも人人修身の法則ならずと云ことなし、その內にては堯舜孔孟のをしへ親義別敍信と云、智仁勇と云、仁義禮智と云こと、これを天下に通じてたがふことなく、之を萬世に推して、いなと云ことなく、弊なきことなれば、その人を仰で聖人とし、その言を尊で聖訓として、つゝしみ守てこれをかゆることなし、三代以來、親義別敍信、知仁勇、仁義禮智の名の立、皆このわけなりもし先儒の說のごとく、凡人たるもの、仁義禮智信、五性の理を具ることならば、たとへば人身の五臟六腑あるがごとく、手足に二十の指あるがごとく、一つを加ふることもならず、一つをへらすこともならず、本より聖人の智慧料簡を以てすといへども、增損すべきものにあらず、又他の事に取合て云べきことにもあらず、しかるに經書の中を考るに、五性の中にて、仁一つ義一つをの玉ひ、或は仁智、或は仁禮など、二つを合ての玉ふ、或は禮義信、或は仁義禮など、三を擧ての玉ふ、又は仁智に勇を添て智仁勇との玉ひ、仁智信に勇剛直を添て六言との玉ひ、仁義禮智樂と云、仁義忠信と云ふ類あまたなり、五性を以ていへば、いづれも不都合なることなり、又この五つのもの、人の性に具

わゆる親レ親之殺尊レ賢之等、禮所レ生也と、いづれもこの意なり、此仁の禮を輔とせざれば、かなはざるわけをの玉へり、又義と勇とは、とりわけ同じやうなることなり、しかるに夫子曰見レ義不レ爲無レ勇也と、義理を辨へても、勇氣なければ義理を得をこなはぬとなり、又曰小人有レ勇而無レ義則爲レ盜との玉ふは、勇氣ばかりにて、義理を辨へざれば、あしきとなり、此勇と義と互に持合わけをの玉へり、又信近二於義一言可レ履也の玉ふは、信も義によらざればあしきとなり、又曰義以爲レ質と、その終りに云く、信以成レ之と、義も信なければ成就せずとなり、これ信と義と互に持合たることみるべし、聖人のをしへ一偏にかゝはらずして弊なきこと、いづれもかくのごとし

堯舜の時、人倫の道を天下の萬民に示して、君臣有レ義、父子有レ親、夫婦有レ別、長幼有レ序、朋友有レ信、と、この五つををしへとす、天下の人おほたありといへども、この五つの外にいづることなし、又五典と云、五品と云て、中庸にこれを天下の達道と云、さて人と云もの、智識なき時は、事の是非善惡を辨ふることなし、仁心なければ眞實にこれを守ることなし、その上に勇氣なければ、いさみ進て道を行ふことなし、故夫子常にこの三つの德を擧て人に示し、中庸にこれを天下之達德と云、五倫の道もこの三つの德なければ行はれざるに因て、中庸に五倫の道を列て、その後にこれを擧げ、所二以行一レ之といへり、しかれば五倫の道は天下に通じて、人々の品によりて之を分つ、三德は、一人の上に付て、これを三に分ての玉ふなり、いづれも天下億萬人のともどもに行ふことなるによりて、之を達道達德といふ、孟子の時に至て、專仁義の二つを並擧て、天下に倡(いざなひ)、又禮智を合せてをしへ

へば醫家の藥方を立つるに、一味を用ふるを單方と云、二味を用るを偶方と云、三味以上を複方と云がごとし、宜に隨て增損し、症をみて損益して、畢竟病を癒すの益を求む、聖人の敎、衆敎交擧て、一定の名なきこと、かくのごとし、しかれば、仁義禮智の四のものは、百行中の最大なるものにして、凡人事の法則たることしるべし

聖人のをしへ如ㇾ此の科あるわけは、何事にても只一事にかたよりて行ふときは、たとひよき事にてもその弊あることなり、故に孟子に曰惡ニ乎執ㇾ一者、爲ニ其賊ㇾ道也執ㇾ一而廢ㇾ百也と、たとへば仁ほどの大德はなけれども、只仁愛ばかりにて、義と云ものなければ、墨子が兼愛を道として、愛に差等なきがごとく、その弊父子の道なきにいたる、又義も仁にをし並ぶ大德なれども、義理ばかりにて、仁と云ものなければ、楊朱が爲我を道として、一毛を拔て人を利することをもせざるがごとく、その弊君臣の道なきに至る、梁武帝罪人を刑するに忍びられざるは、仁に似たれども、一向に義を失ふ、申韓刑名の學は義に似たれども一向に仁を失ふ、いづれもその害を免れず、故に聖人は仁義並行ひ、禮樂兼擧げて、一概なるをしへなし、仁義の道は陰陽剛柔の象にて、彼此持合せたること、ことはりなり、又同じやうのことにて、二事互に相濟すことあり、人而不ㇾ仁如ㇾ禮何と云は、人と云もの、仁愛の實なければ、禮を行ふといへども行れがたしとなり、これ禮の仁に本かずんはあるべからざるわけをの玉へり、しかるに又克ㇾ己復ㇾ禮爲ㇾ仁との玉は、仁を行ふといへども、禮と云ものありて、その次第等差を分たざれば、行はれがたしとなり、孟子にいわゆる禮之實節ニ文斯二者一と、中庸にい

敬窮理と云、此後世學問大綱領、作ㇾ聖の手段、成ㇾ德の工程、宋明已來の諸儒先達さま〴〵の說あれども、その大旨はこの外にいづるとなし、然ども之を聖人の辭にたゞし、今日人人の上に引當てみるときは、おなじからざるとあり

聖人の道は、專ら人倫日用應事接物の上にあり、人の所作一方ならず、付合人も又一にあらず、故に人によりて敎をまふけ、事に付て法を示し玉ふ、たとへば家居衣服器物調度のそなへ、大小精粗の品品あるがごとし、父に對しては孝の道あり、兄に對しては弟の道あり、子に對しては慈の道あり、朋友に對しては信の道あり、ひろく衆人に對しては仁の道あり、この外禮義智勇恭敬忠恕のたぐひ、その品まことに一端ならず、故に之を名けて百行と云、又萬善と云、これを總括りて道德と云、畢竟人に付合ふしかたの名なり、古よりこのかた、聖賢のをしへ、いづれもその身をおさめ、行を正して、このすじにたがはざらんやうにとのことなり

百行の中に、大小偏全の不同あり、聖賢の人を敎るは、その中に就て、或はその一を擧け、或はその二を擧げ、或はその三四を擧げ、或は衆事あはせ擧て、人に示し玉ふ、故に語孟の中に、仁一つを擧ての玉ふ所あり、君子去ㇾ仁惡乎成ㇾ名の章のごとき是なり、義一つを擧ての玉ふ所あり、義之與比章のごとき是なり、又は仁義と云、仁禮と云、仁智と云て、二事並擧ての玉ふ所あり、又は智仁勇と云、禮義信と云、仁智敬と云て、三事兼擧ての玉ふ所あり、又は仁義禮智と云、孝弟忠信と云、文行忠信と云て、四事兼合ての玉ふ所あり、これより以外、一一あぐるにいとまあらず、たと

學問關鍵

先儒の說におもへらく、天陰陽五行を以て萬物を化生す、人その理を受て仁義禮智信の五性となる、理は一般なるものにて、聖人より凡人に至るまですこしもかはるとなし、氣のうけやう同からざるに因り、聖人の德は淸明純粹にして、すこしのまじはりなく、愚不肖なるものは、昏濁遲鈍にして、その理あらはれがたし、これを氣質の偏と云、たとへば天上の月の光は一つなれども、うつる所の水、淸濁同からざるに因て、その影明暗の不同あるがごとし、又人たるもの、生出て形氣を具るときは、耳目口鼻の欲あり、耳は聲をこのみ、目は色をこのみ、口は味をこのみ、鼻は香をこのむ、その欲熾盛にして、本性をおほひくらますに因て、本來の天理を取失ふ、是を物欲の蔽と云、たとへば明鏡の本體は明なれども、塵埃におほはさるゝによりて、その光明あらはれざるがごとし、しかるに因て、今日學問する人は、氣質の偏をため、物欲の蔽はれをのぞきて、虛靈不昧の本體に立かへるときは、堯舜一體の地位にいたり、天理の極をつくして、一毫人欲の蔽れなく、この心の體、明鏡止水のごとくになりて、仁義禮智の理あらはれ、工夫成就するなり、所謂明ニ明德一幷ニ復レ性復レ初と云みなこの事なり、さて又天地萬物の道理、ことごとくわが方寸の中に具りてあり、これを窮ざれば、わが心の量をおしひらかざるに因て、書をよみ理を究めて、衆物の表裏精粗、のこるところなくあきらかにして、一旦豁然の所にいたる、所謂格物窮理と云みなこの事なり、これを合て居

學問關鍵弁言

立ニ人之道一。曰仁與レ義。故聖人開レ口便說。載在ニ方策一。如レ揭ニ日星一。世級日降。不ニ唯不一レ能レ行ニ仁義一耳。其解ニ仁義一。不ニ復遵ニ古義一。爲ニ四心全具ニ於性一。將下窒ニ其欲一。以復中其初上也。殊不レ知聖人之敎。有ニ克養之方一。而無ニ復初之說一。彰々甚明矣。我東涯先生。繼レ志述レ事。恢ニ宏先業一。欲レ使下レ人同學ニ古之道一。而以不上レ詭ニ聖賢立敎之本旨一。故爲ニ學者一諄々然。詳指ニ其源委一。闡ニ明其要指一。著レ書滿レ家。稍公ニ于世一。亦欲下初學者未レ諳ニ句讀一者。易レ曉中學問大旨上也。爲著ニ學問關鍵一書一。夫莫下爲ニ易々常談一。而不中講究上焉。言近而指遠。古道可ニ庶幾一。予侍ニ絳帳一日淺。東遊多年。歸レ家授レ官。執掌之暇。抱レ經就ニ其家一。先生不ニ我遐棄一。予也不敏。業文未レ有レ所レ就。去年忽見レ背矣。吁。天實爲レ之。謂ニ之何一耶。其存日嘗命レ梓ニ此書一。未レ成而沒。子弟門生輩。校讎告レ成。使ニ予不佞書ニ其卷端一。謹而題ニ數言一。此爲レ序云。

元文二年丁巳之春。拾遺　菅原家長　譔

有二黠慧一者。皆能言レ之。易彖曰。大哉乾元。萬物資始。乃統レ天繫辭曰。天地之大德曰レ生。此謂下天地有二一元之氣一而萬物資レ之以始上也。宋儒無中含レ有之說。亦臆度之言焉耳。佛氏所レ謂芥子納二須彌一之理也。

害二正道一者二。曰二穿鑿一。曰二附會一。不レ免二此兩者一。則正學不レ可二得而明一。穿鑿。若二漢儒易象五行災異之說一是已。附會。若下宋儒以二先天圖一。爲二伏羲之作一。以二大學一爲二孔子之言一。而曾子門人記上レ之。曁大學孝經。同分二經傳一。與中諸數學之說上皆是也。

學者當三常常從二事於一恕。

學者當下不レ擇二親疎遠邇一以レ恕爲上レ務。若見二人之不善一。則憤怒之心。不レ能レ不レ生。然以レ身體レ之。則必有二可レ宥者一。此恕之功。所二以大一也。

張子曰。心統二性情一。非也。心以レ有レ所二思慮一而言。性以レ有レ所レ存レ于レ己而言。故於レ心曰レ存。性曰レ養。是也。情亦屬レ于レ性者也。故稱二性情一。情則性之發也。

仁齋日札終

以性見心。則心動而性靜。以情見心。則心動而情又靜。情非不動物。然非如心之思慮計較往來而不止也。

易曰。立天之道。曰陰與陽。此語與一陰一陽之謂道。自不同。蓋一陰一陽之謂道。即流行之義。立天之道。曰陰與陽。明對待之理。蓋物有兩而後化。無兩則無以化。此天地自然之理。至萬物之生。莫不皆然。外此更無道理。故於陰陽字間。著一與字。意味可見。所謂太極生兩儀者。即分生之謂。非生出之義。

人與草木同生。亦當與草木同腐。奚爲貪戀。奚爲悲傷。惟夫保養不可失。修爲不可闕。大凡有資於生民。有補於天下後世者。皆當務爲。不可不努力焉。不可作無益之事。以求後世之名。生民以來。種種功名富貴。不知其幾計。從今見之。皆花謝水流。烟霏雲散。可附冷看。然悟得此意。亦勿爲幻解。皆實理之自然也。詩曰。悠哉悠哉。聊以卒歲。

柳仲郢曰。輦轂之下。彈壓爲先。郡邑之治。惠愛爲本。彈壓二子不好。當以禮法二字換之。

天下無理外之事。而不可以理盡焉。蓋天下之事。或有意想之所不到。智慮之所不及者。若欲一一以理盡焉。則必牽强臆說。言是而理反踈。論詳而實不中。若後世理學之說是也。唯君子之言。如泛然無緊要者。而實無所不包。爲其知要也。所以可尙也。

仁義禮智四字。是學問之全體。知仁勇三字。是進道之大關鍵。文行忠信四字。是孔門敎人之定法。

天下之言。有似乎至理。而實出俗見者。所謂有生於無者是也。世之雖未嘗爲學問人。少

至極一焉。則知下夫子祖二述堯舜一之意上。而佛老空虛之説。宋儒無聲無臭之論。皆捕レ風捉レ影。終不レ濟レ事。

觀二人之文章一。當レ併三見其至巧者。與二其至拙者一。不レ觀二其至巧者一。則不レ知二其力量之所一レ造。不レ觀二其至拙者一。則不レ知二其平生之力量一。若二韓之原道師説一。是其力量之所レ造也。順宗實錄。是平生之力量也。學レ爲レ文者。所レ當レ識也。

至高害レ仁。至靜害レ義。

横渠先生程子表弟也。而二程尊二信其所レ著訂頑書一。同二於聖經一。横渠亦在レ洛。坐二皐比一講レ易。二程適到。忽徹二皐比一。謂二諸生一曰。某説レ易皆亂道。二程在。諸公當レ就レ之而問レ焉。若二程張之心一。可レ謂眞儒學也。後之學者。皆當レ存二此心一。苟無二此心一。其説レ信説レ仁説レ義。皆虛談焉耳。

孟子不レ見二諸侯一。有二數義一。不レ爲レ臣不レ見。一也。以二不賢人之招一。則不二敢見一。二也。不レ待二其招一。而不二往見一。三也。不二枉レ尺而直一レ尋。四也。

朝鮮李滉編二朱子書節要一。於二楊子直姓名下一。題レ之曰二朱門之叛徒一。予竊漭焉。以爲往者當レ往。來者當レ來。距以レ叛目レ之。孟子曰。往者不レ追。來者不レ距。苟以二是心一至。斯受レ之而已矣。又曰。今之與二楊墨一辨者。如レ追二放豚一。既入二其苙一。又從而招レ之。聖賢之設レ心如レ此。而後世儒者。自占二門戶一。深防レ於レ人如レ此。鄙哉。

性猶二穀種一。心則萌芽之動也。

也。以行專爲外者非。
具于己而未動。謂之性。已動而未涉于思慮。謂之情。已涉于思慮。則謂之心。心之往來計較者。謂之意。

古人以喜怒哀樂愛惡欲爲七情。而大學以忿懥恐懼好樂憂患爲心。其別何哉。孟子於四端亦然。皆謂之心。而不謂之情。蓋情者以天下之所同然而言。故曰。天下之同情。又曰。古今之情。蓋父欲其子之賢。子欲其父之壽康。此所謂天下之同情。而古今之所同然也。凡人見當喜怒哀樂愛惡欲者。不能不喜怒哀樂愛惡欲。是天下之同情也。纔涉於思慮。則謂之心。

好學則雜慮不生。好德則外邪不入。古人惟知好學好德而已。故心廣躰胖。仁義之氣。油然自生於中矣。苟不用好學好德。而徒欲消遣邪慮。防閑外邪。猶無主之宅。倩人來防賊。防閑甚過。反不免煩擾。若後世省察之學是也。

古人以禮義兩者。爲家常茶飯。事無大小。悉無不以此爲準則。後人專知守心。不知以禮義爲則。蓋古人就天下之所同然而見道。故不能不以禮義爲重。後儒專就己之一身而求道。故又不得不以正心爲要。千里之差。實始於此。佛氏以心爲主亦然。

孟子曰。堯舜之道。孝悌而已矣。曾子曰。夫子之道。忠恕而已矣。蓋孝悌以人倫而言。忠恕以學問而言。其理則一也。所謂若合符節是也。夫道之至極。必至於萬世不易之常道而極。即君臣父子夫婦昆弟朋友之交。而以孝悌忠信爲本。苟知孝悌忠信。即萬世不易之常道。而實爲道之

曰。養而無害。則塞于天地之閒。蓋滿本然之量。即盡性之謂也。至於盡人物之性。而贊天地之化育焉。則敎之功也。是孔門所以貴乎學。而近世性學之所不及也。觀孟子不曰進至于海。而曰放于四海。可見矣。放字亦有放溢之意。

夫子之道。忠恕而已矣。堯舜之道。孝悌而已矣。皆一句說破。明其無多端也。先儒謂曾子借學者之忠恕。以明聖人之一貫。然則亦謂借衆人之孝悌。以明堯舜之德可乎。蓋宋儒高談性命。翫心虛靜。而不知堯舜孔子之道。全在平生日用之閒。而不出於人倫之外。故爾云云。大凡無益於人倫日用。無補於天下國家之治者。皆不可與入于堯舜孔子之道。實無益之剩物也。孟子謂之邪說暴行。爲其害道尤深也。學者深知此理。而後可以識曾子所謂忠恕而已矣之意。

讀書窮理。可以致知。未足以制行。修禮行義。可以制行。未足以成德。足以成德者。其惟仁歟。

文言曰。敬以直內。義以方外。足以制行。未足以成德也。

惟仁可以成德。惟義可以制行。惟儉可以保身。惟敬可以執事。

惟愛可以成仁。惟斷可以制義。

聖人就天下之所同然而見道。佛子就一人之心見道。就一人之心而見道。故佛者之道。爲一人之私說。就天下之所同然而見道。故聖人之道。爲大中至正之道。

蘊于內之謂德。形于外之謂行。蘊于內者。不能不發于外。形于外者。以存于中

歐陽子曰。聖人之教人。性非所先。蓋主仁義而言。宋儒深以爲誤。蓋宋儒之學。以性爲學問之全體。其言曰。人性上不可添一物。故名聖人之學爲性學。與名禪宗爲性宗奚異。所以深非歐說也。以予觀之。歐說也未可全非。蓋聖門之學。性與教而已矣。故中庸曰。天命之謂性。率性之謂道。脩道之謂教。蓋道以統性。而教之所由出。故次節特揭道字言之。以言道則性與教在其中也。又曰。自誠明謂之性。自明誠謂之教。又曰。尊德性。而道問學。問學即教也。論語專言教。而性在其中矣。孟子雖似乎專言性。然以仁義爲本。而專以性善明之。其意以爲性善。故能居仁由義。若使人如犬羊之性焉。則決不能居仁由義。其所說擴充存養之功即教也。宋儒見盡性二字。便以爲盡性之外。別無學問。殊不知盡己之性。固無出己之性外。及乎盡人之性。盡物之性。而贊天地之化育焉。則不可謂之盡己之性。性非學問之功何。論語專言教。而不言性。其旨豈不明乎。然則歐說雖不知尊性。然猶有彼善於此者。故不可全非之。

知性而不知教。則陷乎虛靜。佛老之道是也。知教而不知性。則泛濫無統。荀子之學是也。

仁者見人之善。而不見人之惡。不仁者反之。蓋仁者非不見人之惡。其心寬容慈憫。有惓惓引接不棄之意。其深惡而遽絕之者。亦不仁也。

擴充之充當訓大。不可訓滿。趙岐亦以充大釋之。蓋訓滿則見其滿本然之量而止焉。殊不知仁義之良。養而不害。則充而愈大。有不可遏止之勢。故曰。盈科而後進。放乎四海。又

觀一作照

所見二字一作是

簞食瓢飲一。亦不レ饒。近レ乎下飮食不レ給。屢至二空乏一者上也。葢美二其貧而能不レ改二其樂一也。舊說以二庶乎屢空一。爲二近レ道又能安一レ貧。尤不レ得二文勢一。或以二屢空一爲二虛中無我一。是老莊之旨。而非二聖門之學一。亦爲レ不レ知二血脉一也。而觀下不レ言二殖貨一而言中貨殖上。則知レ非二豊レ財之謂一。貨財自殖焉耳。觀二文勢一自可レ見矣。

積疑之下有二大悟一。大悟之下無二奇特一。夙興夜寐。夏葛冬裘。君君。臣臣。父父。子子。夫夫。婦婦。士農工商。各安二其業一。言忠信行篤敬。從レ此之外。更無二至理一。所レ謂大悟之下。無二奇特一者。正如レ此。

天道者以二常理一而言。天命者以二臨時一而言。

孟子所レ謂莫二之爲一而爲者天也。莫二之致一而至者命也。皆以二必然之理一而言。猶レ曰二水之就一レ下也。非二泛辭一也。

文章欲二簡而意盡一。不レ欲二冗而理闇一。

文章以レ理爲レ主。以レ氣爲レ輔。而飾レ之以レ詞。其要在レ於二平正穩當一。

漢之文質實。宋之文平正。明之文恠譎。

韓柳各自出二一家機軸一。在二漢之下宋之上一。而論二本色當行一。則班馬之後。當レ歸レ于二歐陽公一。

文章以二意深義高。平正通達一爲レ上。以二詞多理少。組織粉澤一爲レ劣。

明道范文正好レ仁。伊川晦翁惡二不仁一。學識議論。亦隨而異。各雖レ有レ所レ見。然學者當下以二明道范公一爲上レ準。

其材一者。此善用二其法一也。所レ謂神而明レ之。存レ乎二其人一。夫謂下舍レ法而有上所二能爲一者。亂レ道之尤也。

天下莫レ易レ於レ知二堯舜之道一。亦莫レ難レ於レ知二堯舜之道一。所レ謂堯舜之道。孝弟而已矣。此其所二以爲レ易レ知也。而其所二以難レ知者。蓋堯舜依二仁義之道一。執二中和之德一。至正至當。天下蔑二以加一焉。故知人雖下凡世之號二至言妙道一。稱二大聖大賢之言一。尊崇敬事之不レ暇者上。然無レ益レ於二人倫一。無レ資レ於二日用一者。皆爲地邪說天。而後可レ知三唯堯舜之道。至正至當。天下蔑二以加一焉。此其所二以難レ知也。然其易レ知與レ難レ知者。本非二二事一。

論語云。殷因レ於二夏禮一。所二損益一可レ知也。周因レ於二殷禮一。所二損益一可レ知也。馬氏註曰。所レ因謂二三綱五常一。所二損益一。謂二文質三統一。審二馬氏之意一。殷因レ於レ夏。周因レ於レ殷下。皆當二句絕一。而以二二禮字一屬二下句一。故不レ曰三禮謂二三綱五常一。而曰三所レ因謂二三綱五常一。三綱五常。豈可レ謂レ禮哉。意尤分曉。孔疏以來。於二二禮字下一句者。不レ得二其解一。然本文只當下於二夏禮殷禮下一句上。又漢書郊祀志。有二善爲巧發奇中之語一。按師古註。當下以二善爲一巧作二一句一。發奇中又作中一句上。近世諸大家文。皆作二巧發奇中一。便亦誤二讀師古之註一者也。

論レ道者。當下先論二其血脉一。而後中其意味上。讀レ書者。當下先觀二其文勢一。而後中其義理上。蓋意味無レ形。不レ知二其合否如レ何。義理亦然。但血脉與二文勢一。猶二一條路子一。不レ容二一毫差錯一。故合二血脉一。而後意味可レ知。得二文勢一。而後義理可レ辨。語曰。回也其庶乎屢空。賜不レ受レ命而貨殖焉。億則屢中。言顏子雖二

可レ知一作レ得レ正。
可レ辨一作レ得レ當。

太極。則下文又不可謂六極。傳寫之誤必矣。翫莊子之意。太極蓋指太虛而言。猶曰八極六極也。大傳所謂易有太極者亦若此。葢聖人之與老莊。其道雖異。然於當時事物之名稱。本不可有異。若天地日月草木禽獸之名是也。由是觀之。則易之太極。亦當指太虛言之。

不駭耳目。不咈世俗。從容和易。樂善不倦。學問之道。如斯而已矣。若夫好爲高論奇行。而無益於人倫。無資於日用者。皆不可與入于堯舜之道矣。孟子所謂邪說暴行。正謂此。

儉則禮興。奢則禮廢。必然之理也。何者物不可以終儉。必不得不爲之節文。此禮之所以興也。文勝則奢。奢則力不給。此禮之所以廢也。故儉者禮之本歟。後世制禮者。不知其本。必以備文爲事。漢唐以來。雖各有一代之禮。然皆爲虛器。不得若三代之禮。上自朝廷下至閭巷。爲人家日用常行之典者。實爲此也。

深信古人。是進學之極則。天下之至善也。所謂深信古人者。一毫不執己見。不雜己說。佩服潛玩。十分信得及。正謂之深信古人。若不然則不識其意之所在。不識其意之所在。則卒不能盡其理。反爲疎畧。爲差誤。或立己說以遷就。或加他說以補綴。若荀楊韓子之不識性善。宋儒之不免陷於禪學窠臼。皆不深信孔孟之言。而漫執其意故也。可不戒乎。

拘法而不知變化。與舍法而妄執己見。此二病也。天下學者。皆在於此二病中。夫道者非法之所能盡。而非法亦莫能造其妙。故知道者。心執乎法。而不以己之意雜於其閒焉。以法在乎善用之。而本不可廢也。夫子之以詩書禮樂敎人。是以法與人也。然顏曾賜商得各成

崇信尤篤。求レ道之志愈力。延寶辛酉春。聞三予講二古學一。從二參州一來。留至二半歲餘一。受二予之所レ著語孟古義草本一而歸。其後又與二夏目氏一俱來。戊辰冬。又携二近邑好レ學者一人一來。亦農夫也。其將レ歸。予寫二嘗所レ著堯舜既沒。邪說暴行又作論一篇一餞レ之。使二男長胤從レ旁讀而聽一レ之。讀レ之畢。菅谷氏乃言曰。凡害レ於二人倫一。遠レ於二日用一。無レ益レ於二天下國家之治一者。皆謂二之邪說一。皆謂二之暴行一。是一篇之警策。予愕然甚服二其聰悟一。此篇人多傳播。而能得二其主意所一レ在者。菅谷氏一人而已。彼蓋眞體實踐。故其所レ得レ於レ心迴別。今年正月。又使二其姪及一書生來一。迎二門下經生一人一而歸。島原之在二參州一最僻遠。其人皆服二田畝一。讀レ書者甚希。而近來傍近數許邑。翕然嚮レ學。家蓄二聖經一。人誦二孔孟一。亦一奇事也。夏目氏本土人。嘗在二備州一。講二王新建之學一。後好二朱學一。其與二菅谷氏一來。與レ予款語。懽甚。頓覺二舊說之非一。歸二參州一。悉棄二舊學一沛如也。時時擊レ手歎曰。某誤矣。某誤矣。殆若二狂人一。亦奇士也。今既沒。尤可レ惜也。初二人皆嚴毅淸苦。與レ人寡レ與。同邑老人將レ死。必勅二其子弟一曰。勿レ學二二人之爲一。其後二人之學。漸就二平實一。無二復舊日詭異之行一。故邑人皆服二其篤行一。又信二學問之益一レ人。夏目氏嘗謂レ予曰。備州一友。有レ疑二孟子性善之旨一。深思而不レ得。卒罹二瘵疾一而斃。若使レ聞二先生說一。必不レ至レ死。惜哉。（菅谷氏稱二太次兵衞一。夏目氏稱二七左衞門一。備州一友。稱二柴田善七一。）

莊子曰。道在二太極之先一。而不レ爲レ高。在二六極之下一。不レ爲レ深。予謂上一句意義不レ通。下句文字不レ順。當レ作下道在二太極之上一。而不レ爲レ高。在二太極之下一而不上レ爲レ深。先上二字。篆文相近。大六二字。形亦相似。蓋傳寫之誤耳。若謂レ在二太極之先一。則當レ謂レ不レ爲レ遠。不レ可レ謂レ不レ爲レ高。而上文既曰二

君子見レ用。則非二一人之福一。乃天下之慶也。君子見レ黜。則非二一人之不幸一。乃天下之不幸也。

天下有レ道。則學在レ於レ上。天下無レ道。則學在レ於レ下。天下有レ道則君子在レ位。小人見レ黜。故學在レ於レ上。天下無レ道。則小人在レ位。君子奉レ身而退。故學在レ於レ下。學在レ於レ上則治。學在レ於レ下則亂。

新安之學。有下堂堂乎張也。難二與並爲下仁矣之弊上。凡有レ志レ於レ學者。必有二此弊一。其不レ及者。亦潰墮不レ可レ拯焉。故依レ乎二中庸一爲レ至。

學者平生存二心忠信正直一。則非二惟於レ事無下害。雖レ臨二危難一。自無二悔吝之失一。倘不レ然。則雖下問二諸卜筮一。禱中於二鬼神一。不レ能レ無二悔吝一。可レ不レ謹哉。

鵞湖異同之辨。朱陸之門徒。互相詆譏。於レ今數百年未レ了之論。蓋二家之徒。各主二其師說一。或爲二調停兩可之說一。而不レ能レ折二諸聖一。故自二宋元一至レ明。竟無二一定之說一。若去二二先生之說一。直求二之於下經。則聖人之旨。明白分曉。無二復可下疑焉。中庸曰。苟不二至德一。至道不レ凝焉。故君子尊二德性一。而道二問學一。言雖レ知レ道二問學一。然不レ知レ尊二德性一。則問學不レ得三其爲二問學一。而於二道之實一。不レ得二眞知下之。故君子先以レ尊二德性一爲レ本。而以レ道二問學一爲レ功。此聖門眞正之學問。而非下世俗徒知レ道二問學一。而不レ知レ本二德性一之比上。此指所二以先戾下乎晦翁之意一。而於二象山一則不レ能レ免レ乎下得二其一一。而遺二其二一之病上矣。

參州島原邑。有二菅谷氏者一。農夫也。質直方正。持レ身甚謹。嘗從二旁邑夏目氏一。受二四書及朱子小學書一。

レ道之言一。若夫思量按排。組織成レ言者。道得是當。皆巧言焉耳。議論愈精。去レ道愈遠。義理玄微。蠶絲牛毛。總落二理解一。視二識レ道者之言一。實天淵矣。宋儒談レ經。字釋句訂。銖量寸校要レ無二一毫滲漏一。不レ知レ學者。悅以爲二精密一。爲二的確一。殊不レ知於二高明正大平易從容之地一。大有下所レ不二相合一者上。聖人之道。豈區區議論言說之所レ可二能盡一乎哉。

知レ道者學二天下之物一。所レ見莫レ非レ善。故每視二人之善一。而不レ視二人之不善一也。不レ知レ道者。又擧二天下之物一。所レ見莫レ非レ惡。故每視二人之惡一。而不レ視二人之善一。孟子道二性善一。言必稱二堯舜一。又曰。若夫爲二不善一。非二才之罪一也。又曰。人皆有二不レ忍レ人之心一。今人乍視二孺子將レ入レ于レ井。皆有二怵惕惻隱之心一。非レ所三以內二交於孺子之父母一也。非レ所三以要二譽於鄉黨朋友一也。非下惡二其聲一而然上也。又曰。嘑爾而與レ之。行レ道之人弗レ受。蹴爾而與レ之。乞人不レ屑也。又曰。雖レ存レ乎レ人者。豈無二仁義之心一。孟子言言句句。要莫レ非二斯理一。視二人之善一。而不レ視二人之不善一。非二惟孟子之學爲一レ然。堯舜孔子之心亦然。其於二人之不善一也。惟識三其陷溺之所レ致。而非二性本然一也。待レ之以レ恕。不三遽拒二絕之一。以三人必有二悔レ過之心一也。學者苟於レ是自得焉。則庶レ乎レ識二聖人之道一矣。若二夫小人之心一。先自暴自棄。况於レ人乎。其卒至レ於二凡天下之人一。皆以二惡人一待レ之。所レ謂視二人之不善一。而不レ視二人之善一者也。

稱二端人正士一者有レ三。爲二人所レ樂者上也。爲三人所二嚴憚一者次レ之。爲三人所二嫉惡一者下也。賈誼陸宣公有二儒者之才一。而無二儒者之學一。韓退之歐陽永叔有二儒者之學一。而無二儒者之志一。董仲舒文中子有二儒者之志一。而其學未レ充者也。

先自暴自棄。一作三先自以レ已爲二不善一

俗儒詩賦博物之學一是已。若下近世稱二理學一高二談大極性命一而遠中於二日用一者。亦其亞也。觀二孔孟所下說。自可レ見矣。豈有下後來所レ說。無聲無臭。鶩レ高憑レ虛。若二禪莊所一レ說者上邪。其是非可二不レ辯而知一焉。

一二道德一同二風俗一是二句是治二天下一大規摸。此語出二禮記一。

無レ禍即是福。不レ凶則爲レ吉。世人以二富貴貧賤一論二吉凶禍福一者非也。苟富貴而身多二患害一。子孫不肖者。不レ若二貧賤而身長無事。子孫聰明之爲一愈也。若下夫以二富貴貧賤一論二吉凶禍福一者上。實市道之見也。此論當レ破二千古之惑一。

孟子曰。惻隱之心。仁之端也。羞惡之心。義之端也。古註云。端本也。始也。又曰。人皆有レ所レ不レ忍。達三之於二其所一レ忍。仁也。人皆有レ所レ不レ爲。達三之於二其所一レ爲。義也。所レ謂所二不レ忍不一レ爲者。卽惻隱羞惡之心也。達三之於二其所レ忍所一レ爲者。卽擴充之謂也。此千古仁義二字正解。學者當三以レ此爲二準則一。

君子之視レ人。無二一不レ可者一。小人之視レ人。無二一可者一。君子認二天下一爲二己之類一。小人亦認二天下一爲二己之類一。故君子謂二之惡一。則其惡不レ可レ逃焉。小人謂二之惡一。則其惡不レ可レ不レ察焉。

君子之脩レ身也。不レ務二昭昭之行一。而積二冥冥之德一。其論レ人也。亦不レ取二昭昭之行一。而察二冥冥之德一。

人說二閑事一。直是閑談。我說二閑事一。總是學問。

詩家最忌レ落二議論關一。論レ學亦然。蓋學成德熟。胸中自有二成見一。而後言言句句。莫レ非二至理一。是謂二造

仁齋日札

平安　伊藤維楨原佐著

儒者之學。最忌二闇昧一。其論レ道解レ經。須三是明白端的一。若下在二十字街頭一。白日作上レ事。一毫瞞レ人不レ得方可。切不レ可二傅會一。不レ可二穿鑿一。不レ可二假借一。不レ可二遷就一。尤忌三回護以掩二其短一。又戒三粧點以使二人悅一。從前諸儒。動犯二此諸病一。非三惟有下害二於論レ道解上レ經。必大壞二人之心術一。不レ可レ不レ知也。又曰。要レ若下剝二大蒜子一。置中諸銀盤子內上。潔潔淨淨。渾身透明。不レ要レ若レ蓋二藏臭物一。器中他物。亦皆觸レ氣染レ類。悉就二臭腐一。不レ可レ用也。學問之不レ進。德義之不レ修。一皆坐レ此。此是儒門講レ學第一心法。學者須三以レ此爲二立命根基一。常常體取。不レ容二遺忘一。

仲尼吾師也。凡學者須レ要下皆以二聖人一自期待上。不レ可下從二後世儒者脚板一馳騁上。饒使二區區議論道得是當一。終不レ濟レ事。

學者不レ可下於二聖人言語上一增中一字上。又不レ可レ減二一字一。若二語孟二書一。實包三括天下古今道理一盡矣。所レ謂徹上徹下者是也。宋儒動引二佛老之語一。以明二聖人之學一。吾深識二其非一也。

仁者每視二人之是一。不仁者每視二人之非一。仁者必取二人之長一。不仁者必許二人之短一。

聖人學問第一字是仁。以レ義爲レ配。以レ知爲レ輔。以レ禮爲レ地。而進修之方。專在二忠信一。進焉而不レ可レ治二天下國家一。退焉而不レ可二修レ身齊一レ家者。皆不レ足二以爲一レ學也。若二異端虛無寂滅之敎。

先師古學先生。不レ由二師傳一。深造二鄒魯之閫奧一。平生所レ得。具有二成書一。其經旨之委。語孟古義字義二書詳レ之矣。至二平素所下講明上人倫日用之工夫一。則畢備二于此書一。予向既刊二字義書二卷一。廣傳二人間一。此書未レ遂二印流一。謄寫轉訛。學者憾焉。仍請二先生令嗣長胤一點校。遂鋟レ梓以公二于世一。三卷凡百八十九條。苟讀二此書一者。如下升二先生之堂一。而耳中先生之誨上。手澤所レ存。神明在レ人。勿下謂二其人已陳一而忽中其書上也。

寶永四年丁亥重陽日　　門人　林景范文進頓首拜書。

廣大無爲自化。而實有下不レ宜二人倫常道一者上。可レ知矣。吁。天下豈有下大二於常道一者上乎哉。其爲下出二於常道之上。而別有中大道上焉。則其道豈非下磅礴廣大。不レ宜二人倫日用。而有中與二堯舜之道一差異者上耶。磅礴廣大無爲自化之道。乃方外高達之士之所三必藉レ口以託二其說。而邪說暴行之所二由興一也。然則。夫子之不レ取也。其意可レ知矣。第五十二章

問。中庸以三聲名施及二蠻貊。爲二夫子盛德之驗。然而。佛老子之名亦然。不二獨孔子。至二於佛之稱號。益熾矣。此方固無二老子之宮。然在二漢土。道觀與二佛寺一相埒。則其盛可レ知矣。曰。好レ怪而不レ好レ常。喜レ奇而不レ喜レ正。天下古今之通患。人人皆然。道士多假二借禪說。又爲レ人醮祭祈禱。其陋可レ知矣。佛者務二莊嚴。好二誇大。專以二傳燈一爲レ要。蠱二惑愚民。誘二入賢智。周羅綢繆。無レ所レ不レ至。蓋懼二其法之或斷絕。而其敎之或有レ所レ不レ至也。此其聲名之所三以盛一也。若二夫子。則不レ然。子貢曰。夫子溫良恭儉讓以得レ之。蓋五者謙レ己下レ人不レ願二乎外一之事。與下佛老之務二莊嚴一好中誇大上異矣。蓋夫子之敎。天地自然之道理。根二乎人心。徹二乎風俗。無二時不レ然。無二處不レ在。故不レ務二莊嚴。不レ好二誇大。而其聲名赫赫。施及二蠻貊。此其所三以大一也。苟眞知下夫子之道之德之大。實賢二於堯舜。而生民以來。所レ未二嘗有一之盛上焉。則許レ汝眼空二宇宙。童子曰。大哉言乎。始得レ聞レ所レ未二嘗聞。何幸如レ之。歛レ衽而退。第五十三章

童子問卷之下 畢

而已矣。是其所以祖述之也。藉令非堯舜、若有能造中庸之極、足以師表萬世者、夫子亦必祖述之。何必堯舜而已哉。所謂憲章文武者。亦是也。憲章者。顯表章之也。亦祖述之謂。夫非其意、則不祖述之、非其意、則亦不憲章之、猶身在堂上、而指堂下人之直者而示之。故曰。其祖述之者。是自祖述之也。其憲章之者。是自憲章之也。其不取伏犧神農黄帝、又不列少昊顓頊高辛、獨祖述堯舜、是夫子之所獨。而雖堯舜、亦所不及也。故祖述堯舜者。是其所以賢於堯舜也。子曰。述而不作。又曰。信而好古。夫以夫子之大聖、而卒不自我作古、是孔子之本心。而學問之極則也。故論語子罕堯曰二篇、歴擧羣聖、皆始於堯舜、而終於文武、許行爲神農之言。則孟子亦折衷以堯舜之憂天下。所以中庸贊夫子之德、曰祖述堯舜憲章文武、其意可見矣。而宋諸大儒。或以天皇地皇人皇爲三皇、以庖犧神農黄帝堯舜爲五帝。或別以伏犧神農黄帝堯舜爲列。皆不知夫子祖述堯舜之意故也。第五十一章

問。伏犧神農黄帝少昊顓頊高辛。皆上古之聖神。夫子奚以不取。曰。夫子不明言其不取之之意、今不可得而詳焉。孟子曰。堯舜之道。孝弟而已矣。又曰。規矩方員之至也。聖人人倫之至也。欲爲君盡君道、欲爲臣盡臣道、二者皆法堯舜而已矣。又曰。舜明於庶物、察於人倫、由仁義行。非行仁義也。由是觀之。三皇三帝之道。豈其有不宜人倫日用之道者、而黜之歟。漢孔安國尚書序曰。伏羲神農黄帝之書。謂之三墳、言大道也。少昊顓頊高辛唐虞之書。謂之五典、言常道也。孔子討論墳典、斷自唐虞、以下訖于周、觀其曰言大道、則三皇之道。專尚磅礴

夫子時到今。既二千餘年。猶一日也。其子孫。亦相襲封爵。到今不絶。猗嗟盛哉。夫有人倫。則天地立。無人倫。則天地不立。大凡天下君臣父子夫婦昆弟朋友。雖不親讀夫子之書。服夫子之敎。然夫人善仁義。崇忠孝。不失君臣父子夫婦昆弟朋友之倫者。其誰之力哉。非夫子之道浹於肌膚。淪於骨髓。永自行於冥冥之中。豈能然耶。昔夫子稱管仲之仁曰。民到于今。受其賜。微管仲。吾其被髮左衽矣。若夫子之德之盛。視之管仲。奚翅萬萬。非止謂裁成輔相天地之道。仲尼卽天地也。故中庸贊之曰。聲名洋溢乎中國。施及蠻貊。舟車所至。人力所通。天之所覆。地之所載。日月所照。霜露所隊。凡有血氣者。莫不尊親。故曰配天。夫子所以賢於堯舜之實。略可知矣。故孔子爲最上至極宇宙第一聖人。論語爲最上至極宇宙第一書。所謂自生民以來。未有盛於孔子也。非知道者。孰能識之。難哉難哉。第五十章

問。夫子既賢於堯舜。則奚不自作之。而祖述之耶。曰。此非汝之所識也。其祖述之者。是自祖述之也。其憲章文武者。亦是自憲章之也。孟子敎人。又表章堯舜之道。而未嘗一言及堯舜以前之事。卽夫子祖述之意也。夫廁堂下稠人之中。則不能辨堂下人之曲直。身在堂上。乃能辨堂下人之曲直。夫子之祖述堯舜也。非夫子實有所不及於堯舜。而祖述之。蓋有高出於天下之上之明。而能燭天下之所不覩。能燭天下之所不覩。而能知天下之所至極。道也者。至中庸而極。不出於人倫日用之間。而天下萬世。所不可須臾離焉。夫子以高出於天下之上之明。而能燭天下之所不覩。洞照古今。歷選羣聖。其造中庸之極。而可爲萬世之標準者。唯堯舜

問。孟子曰。夫子賢㆓於堯舜㆒遠矣。程子曰。語㆑聖則不㆑異。事功則有㆑異。夫子賢㆓於堯舜㆒、語㆓事功㆒也。此說頗似㆓牽合㆒、如何。曰。聖人亦人焉耳。安得㆓人人皆同㆒、雖㆓天地之化㆒、有㆓豐年㆒、有㆓歉歲㆒、年年不㆑同。歲歲相異。雖㆑經㆓千歲之遠㆒、不㆑得㆓一歲同㆒焉。奚獨於㆓聖人㆒疑㆑之。程子專以㆓理字㆒懸斷。而不㆑知㆑視㆓其實㆒故也。予以謂。孟子之後識㆑道者。莫㆓程子若㆒、然猶有㆘悅㆓高遠㆒之意㆖、故於㆓孔孟之旨㆒、所㆓齟齬㆒者間多。孟子只曰㆑賢㆓於堯舜㆒、而不㆑曰㆘其所㆔以賢㆓於堯舜㆒者如何㆖、則未㆘必可㆘定爲㆗以㆓事功㆒言㆖之。王陽明以㆓萬鎰金㆒譬㆓堯舜㆒、以㆓九千鎰金㆒譬㆓孔子㆒、尤非也。可㆔以供㆓知㆑道者之大噱㆒、故實知㆓孟子之本指㆒、而後能知㆕孔子之所㆔以爲㆓孔子㆒、知㆕孔子之所㆔以爲㆓孔子㆒、而後眞知㆕其所㆔以賢㆓於堯舜㆒矣。第四十九章

問。然則。孔子之所㆔以賢㆓於堯舜㆒者。果何在。曰。此是古今未了大公案。學者之於㆑道。其知與㆑不㆑知。得與㆑不㆑得。總決㆓於此㆒、非㆔一言之所㆓能悉㆒也。學者眞能知㆘高遠廣大難㆑知難㆑行之說卽邪說暴行。而人倫日用平常可㆑行之道實爲㆗至極㆖、而後自知㆘其所㆔以賢㆓於堯舜㆒之實㆖也。今且以㆓事實㆒明㆑之。夫源愈深。則流愈遠矣。根愈大。則樹愈盛矣。故見㆓其敎之遠被㆒、則知㆓其道之本大㆒、見㆓其化之遠及㆒、則知㆓其德之甚廣㆒、堯舜天子也。宜㆓其聲敎之遠曁㆒。而餘澤之久流、然治績不㆑過㆓于九州㆒、子孫襲封。亦不㆑及㆓後世㆒、仲尼匹夫也。旅人也。然道德遠曁。不㆑可㆓限量㆒、以㆑地。則自㆓鄒魯之鄉㆒、不㆑問㆓海之內外㆒、至㆓四夷之遠㆒、凡有㆓文字㆒國。莫㆑不㆑尊㆓崇夫子之敎㆒、以㆑禮。則身被㆓天子服裳㆒、用㆓天子禮樂㆒、春秋二仲。天子親臨㆑雍。上自㆓大學㆒、下至㆓州縣學㆒、延及㆓夷服之地㆒、各修㆓釋奠禮㆒、惟謹。以㆑時。則自㆓

其不レ分二美惡一。不レ辨二好醜一。物來則寫無レ所二揀擇一乎。佛老尙二空虛一。聖人尙二實理一。故佛老之書。以レ鏡爲レ譬。不レ可二勝擧一。而浩浩六籍語孟。一無下及二於鏡一者上。爲三其有二生死之差一也。夫道也者。君臣父子夫婦昆弟朋友之交。而所三以能維二持此五者一。亦在二於恩義兩者一。孟子曰。父子之間不レ責レ善。責レ善則離。離則不祥莫レ大焉。孔子曰。兄弟怡怡。又曰。君子之事レ親孝。故忠可レ移二於君一。皆莫レ非レ所下以養二此心一。而全中恩義上也。若二佛老之敎一。專以二淸淨無欲一爲レ務。修行既熟。功夫既成。則本心瑩然如二明鏡之空一。如二止水之湛一。一塵不レ染。一疵不レ存。可レ謂レ難矣。然恩義之心。斷喪斬絕。掃レ地而盡。捨二父母一。絕二妻子一。如二綴旒一。如二土梗一。恬然無レ所レ用二其愛一。況君臣乎。況兄弟乎。到レ此。則與二聖人之道一。實天淵矣。皆明鏡止水之說之所レ致也。其深惡レ之。不二亦宜一乎。第四十七章

問二先生學問之家法一。曰。吾無二家法一。就二論語孟子正文一理會。是吾家法耳。近日札中一段。論二爲レ學法一。甚得二爲レ學肯綮一。又爲レ子誦レ之。曰。儒者之學。最忌二闇昧一。其論レ道解レ經。須二是明白端的一。若下白日在二十字街頭一作レ事。一毫瞞レ人不レ得方可。切不レ可二附會一。不レ可二牽合一。不レ可二假借一。不レ可二遷就一。尤嫌三回護以掩二其短一。又戒三糚點以取二媚悅一。從前諸儒。動犯二此諸病一。非二惟有レ害二於論レ道解レ經。必大壞二人之心術一。不レ可レ不レ知也。又要レ若下剝二大蒜子一。盛二于銀盤子內一。潔潔淨淨。渾身透明上。不レ要レ若下蓄二薉臭物一。藏二諸器中一。則佗物亦皆觸レ氣染レ類。悉就二臭腐一。不レ可レ用。學問之不レ進。德義之不レ修。一皆坐レ此。此是儒者講學第一要訣。學者須下以レ此爲二安身立命根基一。常常體取。不レ容二遺忘一。中庸曰。不レ明二乎善一。不レ誠二乎身一。又曰。自レ明誠。謂二之敎一。此一段。卽中庸所レ謂明字之謂。第四十八章

節一。是吾之所二自恃一也。子其諒焉。第四十五章

問。吾曹雅不二多讀一レ書。經解之中。雖三多用二禪莊之語一。不レ能二識別一。願一一拈出以告レ之。曰。近思錄四書集註等用二禪莊之語一者。不レ暇二悉擧一。今摘二出其尤者一。而告レ之。曰靜。曰忌。曰公。曰無欲。曰無情。曰無極。曰無二將迎一。曰冲漠無朕。曰明鏡止水。曰廓然太公。曰尸居龍見。皆老莊書中之要語。曰喚醒。曰常惺惺法。曰虛靈不昧。曰體用一源。顯微無レ間。此等語皆出二禪書一。及靜坐功夫。調息箴。亦專用二老佛之法一。語孟二書。本無二此語一。亦無二此理一。聖人雖二喑嚶之中一。自不レ作二此等語一。以二其本異一也。第四十六章

問。先生所三以深惡二明鏡止水等語一者。何哉。願詳見レ喩。曰。此語於二聖人一。不二啻氷炭一。實有二生死之差一。請以下其所二易レ見易一レ喩者上。而後詳論二其理一。凡聖賢之設レ譬。本甚精且嚴矣。蓋道也。性也。心也。皆生物。而非二死物一也。故可下以二生物一喩上。而不レ可下以二死物一比上也。若以二死物一比レ之。則非二翅引喩失一レ當。必以レ邪爲レ正。認レ西爲レ東。其不レ錯レ人者鮮矣。何者。流水有レ源。而流行。活物也。止水無レ源而停蓄。死物也。故孟子以レ水取レ譬。常就二流水一爲レ言。而未下嘗有中言以二止水一爲レ譬者上也。嘗曰。人性之善也。猶二水之就一レ下也。人無レ有二不善一。水無レ有レ不レ下。又曰。若二火之始然。泉之始達一。又曰。流水之爲レ物也。不レ盈レ科不レ進。其意不二亦明白一乎。鏡之爲レ物。亦然。姸媸大小。應レ物無レ遺。可レ謂レ靈矣。雖二能寫一レ影。而不レ能レ照レ物。徒以二其虛一故。能受二物影一耳。不レ能レ如二日月之放一レ光。燈燭之遠照一。其非二生物一故也。故舜之十二章。取二日月暨火之象一。而不レ取レ鏡者。亦豈非レ以下

殊レ塗。水火異レ氣。一毫不レ得ニ假借一。其非レ之者。亦眞知而眞非レ之者。甚鮮矣。大抵讀レ書者。本無ニ實見一。謂レ是亦得。謂ニ不是一亦得。茫乎無ニ定準一。皆謂レ不ニ相妨一之類也。譬レ諸。有下人來毆ニ其父一者上。又有ニ一人一來從レ旁拯レ之。爲ニ之子一者。謝下拯ニ其父一者上耶。將レ謝下毆ニ其父一者上耶。若下以ニ禪莊之理一說ニ孔孟之書一者上。是毆ニ其父一者也。辯ニ其非ニ孔孟之旨一者。是拯ニ其父一者也。今痛誚下辯レ非ニ孔孟之旨一者上。而回下護用ニ禪莊之理一者上。是不レ謝下拯ニ其父一者上。而反黨下毆ニ其父一者上也。凡在ニ爲レ子者一。則不レ待ニ佗人拯一レ之。當地自出ニ死力一。與下毆ニ其父一者上相鬪。而可天矣。豈容レ謝下毆ニ其父一者上乎。斯之謂レ不レ知ニ是非之類一。弗レ思甚也。第四十四章

問。先生常欲レ使下孔孟之旨復明中于天下上。建レ言著レ書。犯ニ千辛萬苦一。而敢爲。而今信レ之者有矣。不レ信者有矣。或有下甚譏ニ摘之一者上矣。奈何不レ能レ使ニ其盡信一。曰。學者當乙以下不レ恥ニ下問一舍レ己從上レ人爲甲レ志。苟有ニ如レ此之志一。則天下何善如レ之。予也第欲ニ孔孟之旨復明ニ于世一。而不レ較ニ其信不信一。況欲ニ其言之必行一乎。苟有下闡ニ明孔孟之直指一。明以告レ我者上。是吾之所ニ大欲一レ聞也。吾將ニ執レ鞭以從一レ之。豈尤ニ其譏一レ我乎。孔子曰。丘也幸。苟有レ過。人必知レ之。凡人之不ニ我信一。不ニ我服一。皆吾誠之未レ孚也。惟當ニ自修省一焉耳。苟有下人以ニ至當之說一告上レ之。吾守ニ我說一而拒レ之。是自絕ニ于善道一也。是自戕ニ害吾身一也。予雖レ愚。未レ至ニ如レ此人甚一。予雖ニ門人小子之說一。苟有レ可レ取者。皆從レ之。解ニ論語孟子一。皆然。乃與ニ門人商搉。衆議定。而後命ニ之於書一。若有下不レ合ニ於理一者上。卻レ之。是予之所レ識也。若夫以ニ私心一攻レ之。持ニ私說一難レ之。是吾之所レ不レ欲レ聞也。後世有ニ有道之人一出。必於ニ吾言一若レ合ニ符

東青一。産二于建酉一。海内不レ可レ得。好二韓歐古文一者既少。志二于伊洛之學一者益少。況志二于孔孟之正學一者。千萬人中之一人耳。其好二韓歐古文一者。擊二鶴稍小者一之類也。志二于伊洛之學一者。鷹搖者也。志二于孔孟之正學一者。建酉之海東青也。其好二雜學詞章記誦之類一者。亦小隼擊二麻雀鶉鷃之類一耳。不レ足レ貴焉。子其可レ不レ知レ所二自勵一乎。第四十二章

問。天下之善。如何爲レ最。曰。好レ學爲レ最。顯敏次レ之。材幹又次レ之。蓋好レ學之益。深焉而不レ可レ測。高焉而不レ可レ及。雖レ極二天下之材幹顯敏一。皆所レ不レ及。故好レ學優二於天下一矣。孔門之諸子。聰明莫二顏子若一。然夫子不レ稱二其聰明一。而特稱二其好レ學。中庸曰。舜好レ問。而好察二邇言一。孟子稱レ舜曰。自二耕稼陶漁一。以至レ爲レ帝。無下非レ取二於人一者上。又曰。及下聞二一善言一。見中一善行上。若三決江河沛然莫二之能禦一也。子思孟子皆不レ稱二其聖一。而一稱レ好レ問。一稱レ無下非レ取二於人一者上。可レ見好レ學優二于天下一矣。人皆知二聰明之可一レ貴。而不レ知下好レ學之功倍二聰明一實萬萬上也。與レ患二聰明不一レ知レ人。不レ如三自篤二其好レ學之志一也。第四十三章

問。先儒多用二佛老之語一。以解二聖人之書一。或以爲レ非。或以爲レ不二相妨一。或以爲三善補二聖言之所一レ不レ到。紛紛不レ定。不レ知孰説爲レ是。曰。其善下以二佛老之語一解中聖人之書上者。是其學本自二禪莊之理一來。故善レ之。謂レ不二相妨一者。是泛然無二愛憎一者之言。不レ足レ取也。其爲レ非者。似矣。然徒惡二禪莊之語一。而非レ之耳。吾恐非乙眞知下佛老之與二吾儒一。猶中薰蕕氷炭之不中相入上。而非甲レ之也。學脈自有二照應一。言語自有二由來一。言レ彼。則不レ得レ言レ此。言レ此。則不レ得レ言レ彼。富貴人猶二自不レ作二寒乞語一。矧邪正

皆法之所レ在。不レ可レ不ニ熟讀一。方正學王遵巖歸震川等。皆近世大家。正而有レ法。必可レ讀レ之。文以ニ詔奏論說一爲レ要。記序志傳次レ之。尺牘之類。不レ足レ爲レ文。賦騷及一切閒戲無益文字。皆不レ可レ作。甚害ニ於道一。葉水心曰。作レ文不レ關ニ世敎一。雖レ工無レ益。此作レ文之律。亦看レ文之繩尺也。第四十章

問。詩文編集甚多。孰爲レ得レ正。曰。三百篇之後。唯漢魏之際。遺響尚存。厥後唯杜少陵氏之作。爲ニ庶幾一矣。蓋古人之詩。皆發ニ於咨嗟詠歎之餘一。而一無下非ニ事實一者上。所レ謂本ニ於性情一。是已。非レ若ニ後人之無レ事而强作一也。其無レ所ニ感托一。徒流ニ連光景一。模ニ寫物象一者。雖下寫ニ難レ狀之景一。如ト在ニ目前一。畢竟徒作耳。風雲月露。山川草木。本天地自有之物。不レ須ミ詩人模ニ寫之一也。唯杜甫平生憂レ國愛レ民。忠憤感激。一皆寓ニ之於詩一。世稱ニ詩史一。故杜詩之妙。不レ在ニ於巧拙之間一。而在下於眞情盈溢。不レ可ニ歇止一。無レ意ニ托物比興一。而托物比興無ト所レ不レ在。後世或譏ニ其近ニ質野一。或誚ミ其間有ニ村陋句一。至ニ於明鄭善夫一。亦褒貶是非。不ニ少假借一。後世徒知下以ニ詩家蠅墨一糾上レ之。而不レ知ニ此反是其妙處一也。李白雖レ神ニ於詩一。其意易レ識。至ニ杜詩一。註者亡慮數十家。是李之所レ不レ及。以ニ人之所レ感自異一也。至ニ於文一。則蕭統文選爲レ本。然識見不レ正。銓擇不レ精。多載下淫麗蕪蔓。無レ益ニ于實用一者上。甚害ニ於學者一也。特東萊文鑒。西山正宗。爲レ得レ正。然正宗中猶載ニ退之畫記等一。則未レ可レ謂ニ純善一。吳訥辨體。愼蒙明文。則稍可矣。第四十一章

問。今時學者。何志ニ于聖學一者之少。而好ニ雜學一者之多邪。曰。豪傑者少。而庸材者多。古今皆然。予聞ニ養レ鷹者說一。鷹捷者。必先擊ニ鶴最大者一。其不レ捷者。必見ニ鶴小者一。而擊レ之。鷹最神俊者。號ニ海

レ人立レ傳者。其道德事業。節操行義。足レ師二表萬世一。而後可二以傳一レ之。不レ然則不レ可レ立也。蘇張之姦計詐謀。曠古之罪人也。史遷爲レ之立レ傳。何哉。如二司馬相如一。亦不レ足レ傳。貨殖日者龜策等傳。皆然。若欲三就レ此揭二示當時風俗人物一。須レ散二見之本紀世家之間一。不レ可二別立一レ傳。晉孫恩宋李全等盜賊耳。亦別立レ傳者。何也。蓋史遷作レ俑。而後之史臣無二卓識一。故不レ能レ改二其例一。可レ謂レ汚二鐵靑史一矣。班固五行志。亦然。其不レ可レ不レ記者。當レ附二之本紀一。其設レ志。不可也。先儒以三范曄著二方伎傳一。深爲レ非。甚是。唯歐陽公五代史。體製議論。實爲二古今之冠冕一。不レ可レ不レ讀。凡關二國家之治亂成敗風俗政體一。足レ爲二百代之鑑戒一者。而後可レ紀。其瑣瑣事跡。可レ入二小說稗官一者。不レ書爲レ是。是作レ史之法也。

第三十八章

問。學者好作レ詩。無レ害二干道一乎。否。曰。詩吟二詠性情一。作レ之固好。不レ作亦無レ害。古人以二六藝一敎レ人。甚有二意思一。人而無レ藝。必不レ能レ成レ材。其人亦可レ知矣。醫書云。五菓以爲レ輔。然多食必有レ害。詩雖二藝中之雅翫一。然甚嗜焉。則必有レ害。若夫山林隱士。遺世無レ營之徒。聊詠レ懷抒レ情。發二其幽鬱無聊之心一。固可矣。公卿將相。學士大夫。身有二職務一者。苟溺二心於詩一。則志荒業隳。可レ戒。

第三十九章

問。作レ文如何。曰。詩起二於三百篇一。文本二於尙書一。詩以言レ志。文以明レ道。其用不レ同。詩作レ之。固可。不レ作亦無レ害。若レ文。必不レ可レ不レ作。非レ言。無二以述一レ志。非レ文。無二以傳一レ道。學而無レ文。猶二有レ口而不一レ能レ言。然文之入レ律。亦難。以二司馬遷董仲舒劉向班固一爲レ正。韓柳歐曾二蘇之文。

爲一。醫藥之事。亦然。第三十五章

問。予平生專用二力於治一レ經。而於二史漢通鑑等書一。未三嘗一過二目其間一。或謂必須レ讀レ史。或謂既明レ經何必讀レ史。如何。曰。史者。治亂得失之林。不レ可レ不レ讀焉。詩書春秋。皆古聖人之史。故稱二經史一。苟不レ讀二史書一。則雖三畧得レ通二曉道理一。然其智局促寡陋。反欠二意思條暢一。譬則人生二長于遐陬僻壤一。而不下走二通都大邑一。周二旋賢士大夫之間一。觀中風俗之美人物之雅上者。鄕俗之習。終身不レ除。其智亦膚淺險陋。動失二措置一。故語孟詩書既通之後。必不レ可レ不レ讀レ史。勿レ貪レ多。勿レ事二强記一。但於二古今之大治亂大機會大成敗。及賢人君子讜論懿行一。須二歷歷記取一。第三十六章

問二讀レ史之法一。曰。經載レ道者也。史以レ道裁レ之者也。故非二知レ道者一。則無レ盡二史之用一也。大凡讀レ史。以二涑水通鑑朱子綱目一爲レ要。本末相貫。次第相承。古今治亂成敗。犂然畢見矣。可レ謂史家之權衡也。欲レ觀二一代之治亂得失典故人物一。須レ見二正史一。有二萬目擧。而紀綱不レ正者一。有下紀綱正。而不レ滿二人意一者上。有下併二紀綱萬目一。漫然無レ統者上。是看レ史之要也。此方學者。大類以レ史做二小說之流一看。可レ笑之甚。古今史臣。有二卓識一者寡矣。其所レ著論贊。膚淺冗雜。無二足レ觀者一。須下考二諸儒論評一。以爲上レ斷。但其間有二議論刻薄。反失レ實者一。不レ可レ不レ辨。讀レ史。須二以レ經爲一レ斷。勿下從二史中一作中功夫上。晦翁譏下老泉父子之學。皆從二史記戰國策中一作中功夫上。又以二東萊之博學純正一。猶譏二其全體史學一。皆腦門頂上之一針也。第三十七章

問。古今史記。亦有二巧拙一。曰。從レ昔以二司馬遷班固一稱二良史一。文章則有レ之矣。議論體製則未也。爲

問。讀書。以何爲要。曰。識見爲要。讀書無識見。猶不讀也。苟要得識見。當尋其所歸宿。勿徒涉獵。須如在外者之求歸家。不可如迷子之行道路。在外者之歸家也。不由迂途。不省外事。一步急一步。一行速一行。携凡囊橐資糧途中不可少之具。而一箇不齎無用之長物。讀書者。亦須如作歸計。先辨其有用無用。取其關學術政躰。脩己治人之切要者。而其泛然不切。無益實用者。闕之可矣。古人之書。或有議論可聞。而不可施之實用者。或有宜于古。而不宜于今者。或有宜于彼。而不宜于此者。要一一躰察。不可放過。如此用工夫。則讀一卷書。斯一卷便爲己之用。讀十卷書。斯十卷便爲己之用。乃至數百千卷。皆然。迷子之在途也。不識東西。不分南北。從面信脚。行行不已。茫然而立。偃然而憩。卒不知其家之在何處。今之讀書者。不辨有用無用。欲貪多闘靡。至僻書奇編祕記奥牒。索搜無遺。雖有數行俱下。積以數寸之捷。顧其所成。卒爲無識見之人。雖有數十卷著作。然無許大議論足以貽後世者。況於羽翼聖經。黼黻國家。則有萬里之阻。豈足稱讀書乎。今之讀書者。奚以異迷子之行道路也。噫。第三十四章

問。宋儒謂。天文地理律曆兵刑五運六氣及素問等書。皆當理會。此意如何。曰。大凡關學術政躰者。皆當講究。其他知亦好。不知亦無害。禮樂兵刑治天下之具。不可不講。然須要先講究其理如何。若其度數條目之詳。則臨時考之。亦可矣。律曆之法。伶官星翁之所職。以此爲儒者之業。則非也。故曰。籩豆之事。則有司存。蓋古者。有其才則爲之。非其才。又非其好。則不強

則何不二成レ德達一レ材之有。舜人也。我亦人也。雖二堯舜之事業。孔孟之學術一。亦豈遠乎哉。昔韓幹好レ畫レ馬。所レ見之馬。皆莫レ非二其師一。夫然後。能造二其鈔一。冠二絕古今一。古人之於二道藝一。皆然。後之學者。則不レ然。己之所レ期。父兄朋友之所レ責。不レ過二利名兩者一。有用之事不レ講。有用之書不レ讀。守二無益之章句一。騖二無益之空文一。記二無益之故事一。一切以狥二時好一。邀二名譽一。旁蹊多岐。用レ志不レ專。而於二大學問大事業一。則付二之度外一。藉令有二數十卷著述一。行二于世一。亦見戲耳。行將レ就二斷滅一。何益。其所レ求之名與レ利。亦皆供二兒女子之仰歎一耳。何所レ成二人材一邪。少有二智慮一者。其可レ不レ知レ所二取捨一哉。第三十一章

問。孔門有二博文博學之訓一。似下與二今所一レ說大異上。如何。曰。亦無レ異。夫子曰。賜也女以レ予爲二多學而識レ之者一與。對曰然。非與。曰非也。予一以貫レ之。一與二多學一對。貫與レ識對。一者。不二之稱。主レ道而不レ他。用レ志而不レ分。之謂レ一。所レ謂博文博學者。便一以貫レ之之謂。與二多學一相反。不二啻霄壤之殊而已一。第三十二章

問。尋常以爲。博學與二多學一一般。今謂二相反一。何諸。曰。一而之レ萬。謂二之博學一。萬而又萬。謂二之多學一。博學猶下有レ根之樹。自レ根而幹。而枝。而葉。而花實。雖二繁茂稠密不一レ可二算數一。然一氣流注。無レ所レ不レ底。彌長彌不レ已。多學猶下剪綵之花。雖二枝葉花實頭頭相排。爛熳繽紛可レ觀可一レ愛。然乾燥枯槁。不レ受二長養一。有レ限而無レ增。猶二生死之相反一。不レ可二概而一一レ之也。初學不レ察。以二世俗駁雜之學一爲二博學一者。誤矣。第三十三章

布在方策。其人存。則其政擧。其人亡。則其政息。又曰。君子之道。費而隱。夫婦之愚。可以與知焉。夫婦之不肖。可以能行焉。子貢曰。文武之道。未墜於地。在人。賢者識其大者。不賢者識其小者。莫不有文武之道。夫道之流行也。無時不然。無處不在。有隱顯。而無斷續。有可付囑之語。而無可付囑之物。謂祖祖的傳者。非也。韓子曰。堯以是傳之舜。舜以是傳之禹。禹以是傳之湯。湯以是傳之文武周公。文武周公傳之孔子。孔子傳之孟軻。軻之死。不得其傳焉。夫道之浩浩。極天罔墜。其曰軻之死而其傳泯者。誤矣。韓子蓋見孟子篇末歷敍堯舜禹湯文武周公孔子之事。而爲此言。謂必有所見。則非也。第二十九章

問。古今異端之敎。不知其幾多。孰爲深。孰爲淺。何爲大。何爲小。其間亦有稍近是者與。曰。自古著書立敎者。紛紛藉藉。不堪其衆。然不過三大歧。其不高不卑。平常不易。此爲一大歧。乃中庸之極。而聖人之宗旨也。高此一等。則爲虛無。老佛之學。是已。卑此一等。則爲功利。申韓商鞅之徒。是已。老佛以下。雖代異地殊。交出迭起。而不過此二端。假令百世之後。有異端者出。不因舊套。創倡新說。亦不能出於此二端。其他區區半上落下之徒。亦不足論。若趙孟靜林兆恩。乃近時小異端。然不過假三敎而爲名。故其學不至大謬。亦可笑也。第三十章

問。何古昔人材之多。而後世之尠耶。曰。一則達。多岐則迷。後世之不能成人材者。爲其多岐也。夫學也者。所以成德達材也。學者內無名利之膠。外無他事之擾。衣食於此。寢處於此。立則見其參於前。在輿則見其倚於衡。積而又積。不知老之將至。心心念念。專一於此焉。

上專就其一身生意見。為生死念重。愛根難絕。心猿意馬。不受羈束。乍出乍入。或眞或妄。變現起滅。無可奈何。乃屛居山林。謝絕世故。坐禪面壁。硬以澄清斯心為事。及乎其修行既久。功夫既成。忽見天地萬物悉皆幻妄。山川城郭總現空相。獨此心孤明歷歷。萬劫無盡。自謂超脫三界。遂廢人事而不修。蔑天下而不顧。抗顏揚首。肆然談道。殊不知其孤明歷歷。萬劫無盡者。乃虛見。而非實理。彼微塵天地。天地何曾微塵。夢幻人世。人世何曾夢幻。天是天。地是地。古是古。今是今。晝是晝。夜是夜。生是生。死是死。夢是夢。幻是幻。有者自有。無者自無。明明白白。無所復容疑。萬古之前如此。萬古之後亦如此。聖人有還其有。無還其無。亦不容一毫智慧於其間。本無可愕。亦無可讚。以予見之。二氏之敎。皆出其意想造作。而非自然之正道。夫人之所當修焉者。人倫而已矣。人之所當務焉者。人事而已矣。天下非仁不親。非義不行。故外人倫而無道。外仁義而無敎。萬世之遠。四海之廣。不得一日離。故居仁由義。則雖不坐禪不面壁。然身自修。家自齊。國自治。天下自平。無往而不可矣。苟不居仁由義。則設其心如明鏡。如止水。無一毫人欲之私。無益。此聖人之道。所以度越諸子百家。而宇宙之間為獨尊也。第二十八章

問。禪有宗派之圖。儒有道統之圖。然儒者之道統。不如禪林祖祖的傳。相付授之正。曰。道統圖。近世陋儒倣宗派圖而所作。非聖人之意也。若禪家的傳。是私天下之道。而為一家之物者也。夫道之在人。猶日月之繫天。有目皆能覩。豈得為己之物。而私相付授乎。中庸曰。文武之政。

爲矯人之具。宋儒以爲。至無之中。自有三百三千之理。特聖人爲之節文。以敎人。是其所以有分別也。然聖人之制禮也。考諸時世。揆諸人事。或循時俗之所用。而爲之節文。何必察至無之中有此理。而制之哉。畢竟飾詞焉耳。晦翁答袁樞詩云。若識無中含有象。許君親見包犧來。即芥子納須彌之說也。易曰。大哉乾元。萬物資始。乃統天。至哉坤元。萬物資生。乃順承天。是天道之極至。萬有之本原。猶人之有元陽也。所謂太極云者。亦便指此一元氣而言。則不可謂之無物也。亦不可向此上面。別求所謂無者也。諸子區區。辨有無二字者。皆不知大易之奧旨也。大抵有生於無之論。本出於俗見。雖世俗不識字之人。少有智慧者。皆能道有生於無。老子特造其妙焉耳。第二十六章

問。老氏之虛無。與釋氏之寂滅。亦有所異乎。曰。雖若有淺深。然其歸則一也。老氏以天地萬物皆爲虛無。釋氏以天地萬物總爲寂滅。後漢書云。其道以虛無爲宗。是已。其他說種種奇特神通。皆方便說耳。至老氏反無之。佛以慈悲濟度爲主。至於禪。則一向棄去。說理至高。必不得不到於此。其主慈悲濟度。似乎仁。然不知義。則一也。殊不知義者。天下之大路。不可一日離也。老氏亦然。第二十七章

問儒釋之所以分。曰。聖人欲與天下共同斯善。而不欲離乎天下而獨善其身。故曰。吾非斯人之徒與。而誰與。釋氏則不然。其言曰。天上天下。唯我獨尊。此其所以先與聖人異也。蓋釋氏欲離乎天下而獨善其身。故其始初用功夫處。不在通于天下。達于萬世。不可須臾離

若。戰戰兢兢。如レ臨二深淵一。如レ履二薄氷一。然其心。則綽綽然有二餘裕一矣。故聖人之言。如二泛然一。而意實到。見二活道理一故也。大學曰。知レ所二先後一。則近レ道矣。論語曰。信近二於義一。言可レ復也。恭近二於禮一。遠二恥辱一也。若使二後儒言一レ之。必曰。知レ所二先後一。則合レ道。必曰。信合二於義一。恭合二於禮一。而不レ可レ用二近字一。然聖賢皆言レ近者。何哉。中庸云。忠恕違レ道不レ遠。亦言レ近也。蓋道之廣大。何所執守。故唯要レ主二忠信一。而不レ要二强爲一。主二忠信一。則雖レ不レ中不レ遠。强爲。則外似而內實非。聖人之道。優優洋洋。不レ得二促迫一。不レ得二牽强一。顏子之亞聖。猶曰。三月不レ違二於仁一。曾子之篤行。亦至二疾革一。而初易レ簀。天地之化亦然。二十四節。七十二候。或進或退。寒熱温凉。不レ能三截然悉如二其數一。亦活物故也。語曰。禮與二其奢一也。寧儉。又曰。奢則不遜。儉則固。與二其不遜一也。寧固。寧者。庶幾之辭。亦近之謂也。聖人豈不レ欲二其一一得一レ中。而不レ可二必得一。故謂二之寧一。蓋敎レ入以下退二一步一而就中質實上也。註家不レ知二聖人微意之所一レ在。乃於二前章一解レ之曰。禮貴レ得レ中。奢則過。儉則不レ及。二者皆不レ合レ禮。又解二後章一曰。奢儉俱失レ中。不レ得レ已而救二時之弊一也。果若二其說一。則是聖人之言。皆半上落下。不レ足レ爲レ敎也。明道先生曰。道之浩浩。何處下レ手。惟立レ誠。纔有二可レ居之處一。又曰。惟進二誠心一。其文章雖レ不レ中。不レ遠矣。伊川先生曰。人道唯在二忠信一。皆確言。人不レ知二其意味之深長一。第二十五章

問。老子曰。有生二於無一。宋儒以爲。無中含レ有。異同如何。曰。兩說固當レ有二分別一。然言及二有無一。則所レ爭亦不レ多。老子以二虛無一爲レ本。以謂禮儀三百威儀三千。皆聖人以レ意創レ之。故以レ禮爲レ僞。

問。近世學問。專以レ求ニ放心一爲レ要。故程子曰。聖賢千言萬語。只是欲下人將ニ已放之心一。約レ之使中反復入レ身來上。與ニ今所レ說異同如何。曰。後世所レ謂求ニ放心一者。卽佛氏所レ謂定心之謂。而非ニ孟子之意一也。孟子所レ謂放心者。謂レ放ニ失仁義之良心一。蓋慈愛惻怛。人之本心也。日爲ニ不仁之事一。而莫ニ之省一。是放ニ其心一也。求レ之云者。謂丁自覺ニ其非一。而欲丙以ニ仁愛一存乙乎心甲也。非レ謂下攝ニ收精神一。排ニ遣思慮一。專守中此心上也。故曰。仁人心也。義人路也。舍ニ其路一而不レ由。放ニ其心一而不レ知レ求。又曰。雖下存ニ乎人一者上。豈無ニ仁義之心一哉。其所三以放ニ其良心一者。亦猶ニ斧斤之於レ木也。夫心者活物也。學者活法也。以ニ活法一治ニ活物一。宜下如レ養ニ草木一。務ニ灌漑培植一。而不上レ可四摧折屈撓。以斷ニ喪遏三絕其生氣一。故曰。苟得ニ其養一。無ニ物不レ長。苟失ニ其養一。無ニ物不レ消。近來所レ謂求ニ放心一者。出ニ於無欲主靜之說一。皆摧折屈撓之類已。書曰。一日二日萬幾。論語曰。君子有ニ九思一。在ニ天子之位一。則有ニ天子之職一。居ニ宰相百司之任一。則有ニ宰相百司之責一。左右應接不レ遑ニ啓處一。苟以四區區死定。束ニ縛羈三紲此心一爲レ事焉。則是悉廢ニ心之用一也。豈得レ爲下酬ニ酢萬變一之主上乎哉。與ニ孟子之意一。不ニ啻氷炭一。第二十四章

問。何謂下以ニ活法一治中活物上。曰。學問須レ要レ看ニ活道理一。不レ要レ守ニ著死道理一。枯艸陳根金石陶瓦之器。謂ニ之死物一。以ニ其一定無ニ增減一也。人則不レ然。不レ進則退。不レ退必進。無ニ一息之停一。不レ能下若ニ死物一然上。故君子不レ貴レ無レ過。而以ニ能改一爲レ貴焉。若ニ宋慶元諸老之學一。銖銖而量。寸寸而校。把捉矜持。欲ニ一毫無下容ニ人之指摘一。故其德緊急嚴厲。而不レ見ニ寬裕溫柔氣象一。此之謂下見ニ死道理一。而不上レ見ニ活道理一。惟南軒東萊二公。寬綽可レ樂。蓋氣質使レ然。至ニ於學問一。不ニ多爭一耳。君子終日乾乾。夕惕

不レ及。過密則過。二公之學。皆坐ニ講レ理過密一。是學者之深戒也。第二十一章

問。王陽明答ニ徐成之二一書自謂。天下是レ朱非レ陸。論定既久。一旦反レ之爲レ難。姑爲ニ調停兩可之說一。使レニ人自思得ト之。如何。曰。夫勇生ニ於斷一。斷生ニ於明一。明生ニ於智一。智以レ學而大。苟知レ之明。則是是非非。一刀兩斷。不レ得ニ少假借一。故孟子曰。予豈好レ辯哉。予不レ得レ已也。陽明爲レ入也。聰明絕倫。縱ニ於古今一。雖ニ二公一。不レ及遠甚。然學門空疎。磨勵之功甚少。而其學本得ニ于禪學一。而於ニ孔孟之宗旨一。實數塵矣。故其書含糊衡決。不レ得レ中ニ二公之肯綮一多。似下乎爲ニ朱門一廻護上。但書中所レ謂重レ眘レ朱。而不レ厭レ叛レ孔數句。實中ニ今學者之眞病一矣。第二十二章

問。承下朱陸之學皆非中天下古今所ニ同然一之道上。然則。古人不レ求三之於己之心與ニ事物之理一歟。曰。古人何嘗不レ求ニ于己之心一。亦何不レ講三明物理一。但與ニ宋諸老一。夐然自異。居レ仁由レ義。忠信以守レ之。敬恕以行レ之。此古人之所三以求ニ于己之心一也。後世學問。非レ不レ講ニ議聖賢之書一。然至三其所三以自爲ト學。則別立ニ一段名目一。以爲ニ學問之宗旨一。若下無欲主靜持敬致ニ良知一之說上。是已。若レ講ニ究物理一。古人亦不レ廢。但古人以ニ修レ己治ト人爲レ學。而至レ講ニ究物理一。自爲ニ其餘事一。而不三專用ニ力於此一。後世以ニ格物窮理一。爲ニ最初入門之功夫一。自ニ天文地理律曆兵刑農圃醫卜一。以至ニ於一艸一木之微一。莫レ不三鑽研講磨一。以求ニ其理一。其言曰。不レ讀ニ一書一。則闕ニ一書之理一。不レ窮ニ一事一。則闕ニ一事之理一。夫天下之書。不レ勝ニ其多一。天下之事。不レ堪ニ其繁一。如欲三一一通ニ曉其理一。則惟日不レ足。至ニ於修レ己治レ人之術一。自不レ能レ不レ置ニ之度外一矣。近世諸大儒。亦多以レ此糜ニ爛許多歲月一。可レ惜。第二十三章

自陷一。固不レ足レ怪。又有下一種心多ニ憂戚一。或世事違忤。强欲ニ排遣一。而不レ能。忽聞ニ禪莊之說一。悅ニ其廣大包容事事無一レ礙。不レ覺自陷ニ于其窠臼一者上。若平正通明。心下泰然者。雖下有ニ眞佛一出爲レ之說法上。亦不ニ爲動一。況有道之士乎。夫理之於ニ是非一。其猶ニ黑白之相反。東西之自定一。有レ目者皆能辨レ之。有レ知者皆能識レ之。至ニ於迷之甚一焉。則以レ黑爲レ白。認レ西爲レ東。顚倒錯亂。不レ可下以ニ言語一云喩上。非ニ徒愚者爲一レ然。至ニ於賢智者一。則益甚。自守甚確。自信甚深。雖下有ニ聖人者一。爲レ之抽レ鐵解上レ縛。卒不レ能ニ回レ首改一レ轍。吁夫迷之不レ遠者。或得レ還レ家。迷ニ於千里之外一者。終身不レ得レ歸。愚者之惑淺矣。猶ニ迷之不レ遠者一也。賢智者之迷深矣。猶下迷ニ於千里之外一者上也。吾不下爲ニ愚者一憂上。而深爲ニ賢智者一懼焉。第二十章

問ニ朱陸之異同一。曰。以ニ朱陸一辨ニ朱陸一。則不レ得ニ朱陸之是非一。以ニ孔孟一辯ニ朱陸一。則朱陸之是非判然矣。聖人明下天下古今所ニ同然一之道上。而尊下天下古今所ニ同然一之德上。使ニレ人由焉而行一。所レ謂仁義禮智。是已。忠信以爲レ地。篤敬以守レ之。恕以行レ之。皆所三以修ニ夫仁義一也。所レ謂立ニ人之道一。曰仁與レ義。是也。二公之學。雖レ有ニ煩簡頓漸之不同一。然自ニ聖門之學一而觀レ之。則其差レ道一也。何哉。聖人未ニ嘗特曰一レ心。又未ニ嘗特曰一レ理。其所レ謂心者。皆指ニ仁義之良心一而言。非ニ虛靈知覺之心一。其所レ謂理者。皆以下事之有ニ條理一者上而言。非ニ無レ聲無レ臭之理一。與ニ後來之所一レ稱夐別。晦翁之學雖レ博。然大要以爲。人之所三以爲一レ學者。心與レ理而已矣。象山曰。此心之靈。此理之明。可レ見二公皆不レ求レ由下天下所ニ同然一之道德上。而專求下之於己之心與中事物之理上。此其所三以不一レ能レ無レ詭ニ于孔孟一也。夫人之於ニ學問一。少疎則

宋三百年。禪之傑然者。莫二宗杲若一。然觀下其作事少二點檢一。喜怒不上レ中レ節。則實不レ及二韓范諸公百分之一一。其人亦可レ知矣。第十八章

問。佛法甚熾。而孔子之教寥寥者。何哉。曰。厭レ常而喜レ新。嫉レ正而好レ奇。古今之通病也。孔子曰。邦有レ道。貧且賤焉恥也。邦無レ道。富且貴焉恥也。儻使三儒教若二今之佛教之熾一焉。則卽是唐虞三代之盛耳。雖レ以三後漢明帝唐太宗之崇二文教一。奚敢足レ比二其萬一一。然而佛之教有レ所レ至。有レ所レ不レ至。用レ之則存。舍レ之則息。不レ如下聖人之道無二處不一レ在。無中時不上レ然。非二本然之道一故也。今不レ能レ使下度二天下之人一悉爲二僧尼一。毀二天下之屋宅一皆爲中蘭若上。則是其道有レ所レ至。有レ所レ不レ至也。且唐虞三代之盛時。不レ聞レ有二老莊之學一。後漢明帝以前。又未レ有二佛法一焉。則不レ可レ謂下之不レ可二須臾離一之道上。若二聖人之教一不レ然。雖二東夷西戎南蠻北狄。聲教之所レ不レ曁。言語之所レ不レ通。必當レ有二君臣父子夫婦朋友昆弟之倫一。又當下以二孝悌忠信一爲上レ善。大凡天下之不レ出レ家緇レ衣。在二於君臣父子夫婦昆弟朋友之閒一者。擧皆儒人也。執二四民之業一。而不レ至二不孝不弟不忠不信一者。亦皆儒人也。不レ繫二學與下不上レ學也。故子夏曰。雖レ曰レ未レ學。吾必謂二之學一矣。可レ見堯舜孔子之道。與二日月一同レ照。極レ天罔レ墜。猗嗟盛乎。故佛法如レ盛。而實微。孔子之道如レ微。而實盛。不レ可三與爲二比擬一也。第十九章

問。唐裴相國白樂天宋蘇東坡呂原明之儔。皆高明博學之士也。何故亦好レ禪乎。曰。高明易レ得。博學不レ可レ恃。唯得二中庸一爲レ難。故孔子稱二顏子一曰。回之爲レ人也。擇二乎中庸一焉。此顏子之所三以爲二大賢亞聖一也。高明而不レ中。不レ得レ不三自入二于異端一。博學而不レ正。亦不レ得レ不レ雜二異端一。皆其所三以

但欠一義字。後世儒者。奚爲獲其髣髴。第十五章

問。異端之語。亦有可取者歟。曰有。老子云。天道好旋。又曰。天網恢恢。疎而不失。至言哉。可入于詩書之中矣。第十六章

問。老莊之學。聖門指爲異端。然雖好之。似亦無甚害。曰。老莊之害。徵之於小。則固難見。徵之於大。而後其害章章矣。士庶人之輩好之。則必惡禮法厭拘撿。故至於墜業敗家而止。此其害之小者也。若夫大人好之。則其害及于家國天下。人心日偸。風俗日壞。亂亡尋至。可不懼乎。第十七章

問。佛氏謂。三代以前聖人生于儒中。三代以後聖人生于佛中。然乎。曰非也。視近而平正者。必惰而不敬。視遠而奇僻者。必驚以爲高。古今之通患也。況乎人之視以爲聖人者。自殊。故其所以稱之者。亦隨而異。儒者以仁智合一至誠無息者爲聖人。佛氏以淸淨無欲若明鏡止水者爲聖人。是其爲聖人者。所以大異也。其心如明鏡止水。本匪具形骸者之所及。藉令有如明鏡止水者。亦但不過發一長歎。而於天下國家之治。無分毫之補。奚足以爲貴。若達磨慧能臨濟雲門之徒。彼素屏居山林。謝絕人事。內無人倫之累。外無職務之紛。故其高風凜然。可仰可欽。若使其居人倫之間。執四民之業。其高風凜然者。必蕭索蕩盡。略無可觀者。且呵責妻孥。毆撃奴隷。閨門不和。家法壞亂。靡所不至。又使其居一官授一職。必顚倒錯亂。庶事曠廢。至自投劾而去。不若貞吏精練政事者遠甚。奚敢望房杜韓范之諸賢。佛氏所謂聖人者。豈足尙之乎。

問。夫子謂二南容一。邦無レ道免二於刑戮一。又曰。愚而好二自用一。賤而好二自專一。生二乎今之世一。反二古之道一。如レ此者。烖及二其身一者也。又遭二桓司馬之難一。微服過レ宋。夫子何畏レ難之甚耶。曰。以二一木一支二大厦之倒一。君子不レ爲。是故。以二甯武子之愚一。爲レ不レ可レ及。以二蘧伯玉之卷而懷一レ之。爲二君子一。是爲二實智一。是爲二實德一。非三淺見謏聞之所二能窺測一也。子夏曰。君子信而後諫。未レ信則以爲レ謗レ己也。亦是意也。至上表遭二憲宗之怒一。面發二韓侂胄之奸一。皆有レ損二於己一。而無レ益二於天下一。智者不二强爲一。有德者自不レ爲。至矣。後漢黨錮諸人。其禍最甚。皆由下知レ主二張學問一。而不上レ知二君子之大道一故也。宋儒謬解二中庸明哲保身之旨一。貽二害善類一甚大矣。方孝孺之在二永樂一。李東陽等之在二正德一。是已。可レ不レ謹乎。第十二章

問。曾子語二子襄一曰。自反而縮。雖二千萬人一吾往矣。夫子稱二史魚一曰。直哉。亦與二前所一レ論相反。如何。曰。是勇之爲。勇者義之發。義者聖人之大用。然好レ義者必犯レ命。言レ命者不レ盡レ義。義命合一。是爲二君子之全德一。非下有二大勇一有二大義一。韜晦含藏。不レ露二形跡一者上。則不レ足三與入二于君子之域一。是爲二學問之準的一。非三區區諸生之所二能識一也。故至三道竝行而不二相悖一。而爲二學問之極功一。難哉。第十三章

問二屈原一。曰。不レ知レ道。漁父辭曰。世人皆濁。我獨清。衆人皆醉。我獨醒。是屈子之所三以自取二其禍一。非三子蘭之讒懷王之不明所二能爲一也。禹曰。愚夫愚婦。一能勝レ予。孔子曰。斯民也。三代之所二以直レ道而行一也。豈可下以二天下一爲中皆濁皆醉上耶。中庸曰。居レ上不レ驕。爲レ下不レ倍。國有レ道。其言足二以興一。國無レ道。其默足二以容一。此學問之所成。道德之所レ熟。而非三屈子之所二能及一。第十四章

問。漁父辭云。聖人不レ凝二滯於物一。能與レ世推移。此語亦合二於聖人之旨一歟。曰。庶二幾於智者之言一。

問五經與論孟異同淺深。曰。論異同。而勿論淺深。雖其辭有艱澁平穩之異。然理則一也。人皆以謂。易春秋深奧難通。論語孟子平易易知。非也。五經猶天地萬物自有。而不知長養。論孟猶聖人裁成輔相天地之道。以左右民也。制禮作樂。立敎垂範。以建中正之極。以定人倫之法。使萬世君臣父子夫婦朋友昆弟各得其所。而不爲禽獸者。皆聖人之功也。雖有天地。然非得聖人爲之敎育焉。則天地亦不能爲天地。論孟之於五經。亦猶如是。吾故以論語爲宇宙第一書。而孟子亞論語者。爲此也。此論孟之所以與五經異也。第九章

問知命之說。曰。天有必然之理。人有自取之道。易曰。積善之家必有餘慶。積不善之家必有餘殃。是謂天有必然之理也。詩曰。永思配命。自求多福。是謂人有自取之道也。文王不死於羑里。孔子不害於陳蔡。此非天有必然之理乎。孔子曰。天之未喪斯文也。匡人其如予何。又曰。天生德於予。桓魋其如予何。此非人有自取之道乎。夫人自取。而後天命之。天之所命者。便人之所自取。可不愼乎。第十章

問。於知命之說。未能釋然。願發其奧旨。曰。蓬生麻中。不能不直。天道正直。四旁上下。渾渾淪淪。通徹無間。莫非斯理。近火則焦。近水則濡。豈得以不正不直須更置身於其間乎。孔子曰。君子畏天命。小人不知天命。而不畏也。其畏之者。以實可畏怖。而有不可慢之理也。蓋夫子五十知天命。以後初置語如此。不作一毫聰明。不挾一毫智見。至誠正直。內外表裏。打成一片。而後可以自得。非可以聰明智見而得之也。第十一章

耳。論語曰。先進於二禮樂一野人也。後進於二禮樂一君子也。若用レ之。則吾從二先進一。以レ此推レ之。禮記諸篇。大類皆繁文縟節。恐非二盛周之禮一。審擇レ之可矣。予欲下因二夫子之意一。斟酌裁定以爲中一書上。有レ志而未レ果。第六章

問二蔡氏書傳所レ載渾天儀之制一。曰。不レ知也。問二春秋春王正月之辨一。曰。不レ知也。童子云。聞先生自レ幼留二心經學一。今於二此二事一不レ知者。何哉。曰。學有レ本有レ末。有二必不レ可レ不レ知者一矣。有下在レ所レ不二必知一者上矣。若二學術政躰修レ己治レ人之術一。是本必不レ可レ不レ知焉。其他進而不レ足二以治一レ人。退而不レ足二以修一レ己者。雖レ不レ知レ之無レ害。渾天儀之制。是有司之所レ掌。春王正月之辨。亦無レ益二於學術一。故左氏亦不レ傳焉。大凡支干孤虛旺相律呂隔レ八相生之屬。皆然。附下之好二陰陽數學一者上可矣。非二儒者之先務一。今世之小子。不レ知レ爲レ學之法一。區區留二心此等細務一。甚不可也。第七章

問。先儒謂。戚儉俱失レ中而不レ及。聖人不レ得レ已而救二時之弊一。若二先儒之所レ謂。則非下雖二易論語一。亦有中不レ合二於道一者上乎。曰。是失二中字之義一。中謂二中間一。所レ謂執二其兩端一。用二其中於民一。是也。今以二一丈杖一求二其中間一。子必俟レ及レ至二五尺一。而後謂二之中一。纔不レ及一分。便指爲レ非レ中。甚泥矣。大凡自二四五尺一至二六七尺以內一。皆是中間。凡把レ杖執下中間近二欄柄一處上爲レ便。若欲地度下至二五尺一處上把天レ之。則必失二之過一。聖人教二人儉戚一。是將下近二欄柄一處上與レ人。不レ可レ謂レ失レ中。不レ可レ謂三不レ得レ已而救二時之弊一也。若レ謂二時中一。又別是一義。去二時字一。則依レ舊只是中間。易道總是退一步法。與二老子以レ弱爲レ强退爲レ進。負別。第八章

臣賊子之心一也。孔子秉レ筆而不レ止。直至二哀公十六年四月己丑孔丘卒之前一而止。左丘明又承二夫子之意一。引而至二哀公二十三年秋八月一而止。自レ是而後世史臣。各有二一代之史一。及荀悅習鑿齒宋子京司馬公朱考亭諸大儒。亦各有二著作一。皆自二孔子一發レ之。故春秋非三徒紀二二百四十四年之間一。實紀二二千年以來一。而萬世無レ絕。此聖人之旨也。讀二春秋一者。當三專據二左氏之傳一。義理明白。自與二孟子之意一合。公穀二傳。深刻過密。殆若レ解二隱語一。非二聖人之意一。故善得二夫子之意一者。莫二左氏若一也。胡氏謂。公穀說二義理一。左氏備二故事一。非也。左氏經。至二哀公十六年四月己丑孔丘卒一而止。公羊穀梁經至二十四年西狩獲レ麟而止。蓋公穀本脫二獲麟以下一。不レ知三後尚有二二年經一。因附二會孔子反レ袂而泣等語一。朱子語類說。公穀二傳。本姓姜人一手做。可レ謂二卓見一矣。左氏以二禮一字一。爲二春秋之權衡一。孟子以レ義爲二其要領一。然禮以レ義起。則其辭雖レ異。而理則一也。學者以レ此求レ之。自見二其大意一矣。若夫於二日月名字爵位之間一。褒貶予奪者。非二聖人之意一。四經之旨。大略如レ此。苟通二其理一。則見二野史稗說一。皆有二至理一。詞曲褻劇。亦通二玅道一。學者唯知下說二道理一之有中道理上。而不レ知下不レ說二道理一亦有中道理上。鄙哉。其詳。予將下竢二各經傳成一而明上之。今當レ參二閱語孟字義一。第五章

問二禮記一。曰。間多二格言一。然不レ足レ列二之於詩書易春秋一。蓋七十子喪。大義既乖。戰國以來。齊魯諸儒。知レ道者鮮矣。至二於論レ理。則皆專主二黃老之旨一。石梁王氏辨レ之。是也。然猶有下未二辨盡一者上矣。或王氏亦以爲二聖門之遺言一。而實自二黃老中一來者。間有レ之矣。若二樂記所レ載。人生而靜天之性也。感レ物而動性之欲也一。此語本老氏之語。淮南子亦有レ之。蓋禮記剽二竊之一。晦翁取レ之爲二詩傳序起頭一。不二深考一

老之學。是已。詩之不レ可レ不レ學。如レ此。且古書引レ詩者。多斷レ章取レ義。蓋古人用レ詩之通法也。此亦讀レ詩者之所レ當レ知也。書以道二政事一。皆古先聖人平二治天下一之大經大法。而萬世靡下能出二其上一者上。其道皆人倫日用通行之典。亦傳二之萬世一。而無レ弊者也。故孔子祖二述憲三章之一。而雖二三墳五典一。其磅礴廣大。不レ可レ爲二萬世之典一者。殫黜レ之。故今讀二尙書一者。雖レ非二二典及文武誓誥一。凡四代之書。孔子所レ定者。皆當下依二此意一求上レ之。世俗以二虛無恬澹無爲自化一爲二至極一。故反有下平二視尙書一之意上。不二亦誤之甚一乎。易以道二陰陽一。昔聖人畫二卦爻一。以盡二陰陽消長之變一。老則變。滿必損。故避二盈滿一。而處二退損一者。易之敎也。孔子曰。加二我數年一。五十以學レ易。可三以無二大過一矣。是也。六十四卦。三百八十四爻。其義雖レ多。然夫子可レ無二大過一之一言。足二以蔽一レ之矣。論語曰。禮與二其奢一也。寧儉。又曰。奢則不孫。儉則固。與二其不孫一。寧固。孝經曰。制レ節謹レ度。滿而不レ溢。高而不レ危。皆莫レ非二此意一。夫陰陽之消長。變遷無レ方。進退無レ恒。難二執レ一守一。故論語曰。可二與共立一。未レ可二與權一。孟子曰。執レ中無レ權。猶レ執レ一也。亦皆莫レ非二易之理一也。古者易學。自有二二家一。彖象二篇。儒家之易也。文言亦然。蓋專述二彖之義一。皆論二陰陽消長之理一。而推二之人事一。無下一及二卜筮一者上。繫辭說卦等篇。專主二卜筮一而言。歐陽子以爲筮師之書。是也。蓋義之與二卜筮一相反。言レ義則不レ須レ言二卜筮一。從二卜筮一則不レ能レ不レ捨レ義。故論孟二書。不レ言二卜筮一者。以レ此也。程傳雖レ從二繫辭一。其實與二彖象之理一相合。當レ從レ之。春秋以道二名分一。蓋春秋。聖人之史也。古者無二載籍之傳一レ世。善惡淑慝。與レ時俱滅。無レ暴二于天下後世一。故亂臣賊子。肆二其欲一。無レ所二忌憚一。故孔子因二魯史一。以紀二天下之善惡一。所三以制二亂

問二五經之理一。曰。五經是宛然天地萬物人情世變圖子耳。天下之書。靡レ非二論說一。唯六經不レ屬二論說一。而萬理畢具。變化無レ方。隨レ取隨在。順レ之則治。逆レ之則亂。從レ之則存。悖レ之則亡。皆使二人思而得一レ之。不レ可レ有。不レ比下論孟章章句句各有二其義一。而不上レ能レ兼二他義一也。故論語雖レ爲二宇宙第一書一。然猶可レ有。六經不レ可レ有。其故何也。倘世有二孔子一。自當レ有二論語書一。若二六經一。則非乙有下唐虞以來至二於周末一一世界上。而其間又有中極治極亂之時一許多人情世變備上。則不レ可レ有也。雖二孔子一。亦不レ能レ作。此六經之所三以不二可レ有也。然本無二甚異義一。求二異義一。則不レ是。詩民巷之歌謠。書先王之政事。易陰陽消長之變。春秋魯史簡牘之文。本何有二異義一。但其理自深遠耳。古來註二六經一者。皆作二議論一解レ之。淺矣。吾陶潛方二夏日一高二臥北牕之下一。自以爲羲皇上世之人。其見固高矣。然猶有レ待二北牕之涼一。論語曰。斯民也。三代之所三以直レ道而行一也。苟邃二於六經之理一焉。則今日即唐虞三代之時。斯身即唐虞三代之民。固無レ待二乎外一。余嘗有レ題二壁詩一云。天空海濶小茅堂。四序悠悠春色長。笑殺淵明無二卓識一。北牕何必慕二羲皇一。竊述二此意一。 第四章

問二各經之大意一。曰。韓子原道。以二詩書易春秋一爲レ列。不レ數二禮記一。其見卓矣。當下從二韓子一。以二詩書易春秋一爲中本經上。而聖門專以二詩書一爲レ敎者。蓋二經之旨平易近情。傳二之萬世一而無レ弊者也。詩以道二情性一。天下之人雖レ衆。古今之生雖レ無レ窮。而原下其所三以爲二情者上。則無下出二於三百篇之外一者上。順レ之則治。逆レ之則亂。故先王保レ之而無レ傷。愛レ之而勿レ斷。其所下以能保二數百年宗社一。而子孫猶賓中於王家上者。以レ此也。不レ知レ此。則莫三以治二天下國家一。申商之徒。是已。不レ由レ此。則莫二以立一レ敎。佛

問。宋明諸儒。一家各有一家宗旨、而指導人、孰是孰非。願聞其詳。曰、吾有讀書一法、今爲子發之。天下無全是之書、又無全非之書、蓋降聖人一等。必不能無一短一長、雖大儒先生、必有小疵、雖稗官小說、亦或有至言、不可不取。然其長處。必淡然無味。無跡可尋。而其可悅可好者。必其短處。故短處易得。而長處難得。若專主一家之學、則必先得其短處、日染月漬、卒爲終身之深害、永不可除。宜如披砂簡金。左沙右汰。悉棄去塵沙、斯得眞金、苟兼取周搜廣求並蓄諸家之書、捨其短而取其長、則是非相形。彼此相濟。翫索既久。而後有一至正至當之理、自在其中、非徒可免終身之害、而天下之書。皆靡非吾師矣。孔門貴乎博學者。蓋爲此也。今如講朱王氏之學者、其宗朱學者。專讀晦翁之書、而至象山陽明之書、一不過目。講王學者亦然。殊不知朱氏有朱子之短長、王氏有王氏之短長、知其長、又知其短、是爲能知其人也。苟熟讀翫味語孟二書、以此爲規矩繩墨、而校其是非、覈其得失、則眞是眞非、斤兩適均。無毫差爽、今不暇一一枚擧。第二章

問。先生以程子所謂論語孟子既治則六經可不治而明、爲名言、如何。曰。二書猶權衡尺度乎。豈翅六經不治而明而已哉。雖諸子百家祕冊奧牒、其是非得失。了了分明。自無所能遁其情。大抵學六經者。專以研究其名物度數訓詁異同爲事。雖博士之所掌亦然。非也。蓋六經之學。在得其大意、苟大意既明。則瑣瑣文義。固無補於道、置而勿論。學者苟熟讀二書、猶身坐堂上、辨堂下人曲直、其於天下之言、何不能辨折之有。第三章

四躰之有于其身。則性善者。即以四端之心言。而非本然之理也。下文又曰。無惻隱之心。非人也。無羞惡之心。非人也。無辭讓之心。非人也。無是非之心。非人也。則知孟子之意。以謂凡人必有耳目四躰。而後謂之人。四端之在于吾身也。猶四躰之有于其身。非天下之性皆善而無惡乎。然而。天下之衆。間或有生而無目者。或有耳不聞者。或有四躰不具者。其無有四端之心者。亦猶如此。如高陽氏不才子子越椒羊舌氏之類。是已。猶有人之形。而無耳目四躰者。然人而無耳目四躰者。億萬人中之一二耳。人而無四端者。亦億萬人中之一二耳。故曰天下之性皆善而無惡。當以意理會之。其下又繼之曰。凡有四端於我者。知皆擴而充之矣。若火之始然。泉之始達。言天下或亦有無四端者。則固無如之何。凡有四端者。苟能知所以擴充之。則其勢猶火之始然。泉之始達。漸次張皇。不能歇止。觀其不曰凡爲人者。而曰凡有四端於我者。則知其無四端者。所謂禽獸之心。不可以人理論者。而置而不論。其道性善者。皆就其有四端者而言之也。孟子之語。明白順妥。無復可疑。從來諸儒誤認孟子之意。以爲天下之性唯善一樣。而無一惡者。然見天下之人。剛柔善惡。氣稟不同。於是荀揚韓之説興矣。自理氣之説作。而又謂其善者理。而自堯舜至塗人不異。而其不同者。則氣之不齊也。若如其説。則無有下愚之不可移者。於是。乃以自暴自棄者充之。而曰。非不可移也。不肯移耳。是皆不得孟子之意故耳。此是先儒未了之公案。故不厭其詞之繁。豈不千載之一大快乎。童子曰唯。

第一章

童子問卷之下

洛陽　伊藤維楨　著

凡五十三章

問。向蒙二敎誨一。孟子性善之說。就二氣質之中一而言。非下離二氣質一而言上レ之。然諸儒之說。紛紛籍籍。不レ可二適從一。冀明辯極論。以發二其歸趣一。曰。孟子之說レ性。古今言レ性之準則也。諸儒所三以有二紛紛之說一者。皆不三善讀二孟子一之過也。荀子知二專主一レ敎。以爲人不レ敎則不レ善。故說二性惡一。不レ知三善受レ敎者以二性之善一。楊子疑二信兩端一。不レ能レ歸レ一。故把二善惡混一。韓子以爲孟子得二其上一。荀揚各得二其中下一。欲下調二停衆說一。目下中品題上。故曰三性有二三品一。此等皆俗見焉耳。至二程張二先生一。又立二本然氣質之論一。以爲孔子說二氣質之性一。孟子說二本然之性一。而蘇氏胡氏又以爲性本無二善惡之可一レ言。孟子謂二之善一者。讚歎之辭。此亦自二禪說一而來。凡此等說。皆非下徒不レ知二孟子之本旨一。實不上レ能レ理三會孟子文義一者也。可レ怪可レ怪。孟子之意。本非レ謂二天下之性皆善而無一レ惡也。就二氣質之中一。而指二其善一而言レ之。非下離二氣質一而論中其理上也。而其所レ謂善者。就二四端之心一而言。非レ謂三未發之時有二斯理一也。故曰。人性之善也。猶二水之就一レ下也。夫水之就レ下。在二流行之時一而可レ見焉。則人性之善。亦就二發動之時一而言レ之。可レ知矣。又曰。人之有二是四端一也。猶三其有二四躰一也。言四端之心。人人具足。不レ假二他求一。猶下四躰之有二于其身一。而相離不上レ得也。可レ見孟子之學。本無二未發已發之別一。而以二四端之心一。比二

退之取レ之。可レ爲ニ行レ恕之要一。第七十六章

問。以ニ先儒何語一最爲ニ至極一。曰。伊川復卦彖傳曰。一陽動ニ於下一。乃天地生物之心也。先儒皆以レ靜爲レ見ニ天地之心一。蓋不レ知ニ動之端乃天地之心一也。非ニ知レ道者一。孰能識レ之。又經說曰。動靜無レ端。陰陽無レ始。非ニ知レ道者一。孰能識レ之。二章總一意。實彖象以來之名言。在ニ道理一。當レ爲ニ古今極至之道理一。在ニ議論一。當レ爲ニ古今極至之議論一。至矣。後之論註者。皆失ニ其意一。其所レ謂非ニ知レ道者一。孰能識レ之者。斥ニ釋迦老子莊列之徒一而言。非下對ニ區區諸子諸儒一而辨上レ之。又賁卦彖傳云。一不ニ獨立一。二則有レ文。蓋言ニ一非レ一。而二中自有レ一也。與ニ周子所レ謂五行一陰陽。陰陽一太極者一。大異矣。又曰。非ニ知レ道者一。孰能識レ之。其自珍ニ重之一如レ此。雖下尊ニ信程子一者上。亦不ニ實知ニ其意之所一レ在。程子平生不レ說ニ太極一。而以ニ動靜無レ始。陰陽無レ端。爲ニ至極一。其見可レ謂卓越矣。但易傳序中。體用一源。顯微無レ間。及艮卦外物不レ接。內欲不レ萠等語。不レ能レ無レ疑。然猶ニ美玉之有レ瑕。雖レ應ニ以レ此減レ價。而不レ害ニ其爲ニ眞玉一。瑕不レ揜レ瑜。瑜不レ揜レ瑕。可ニ以爲ニ程子一也。第七十七章

童子問卷之中 畢

次レ道而貴者敎也。而盡レ道受レ敎者。性之德也。故性亦貴矣。然敎有レ功。而性無レ爲。故性學盛。則敎法衰。敎法衰。則天下之達道廢。聖人之所二深嫉一レ之也。所以論語一書。專言レ敎。而不レ言レ性。孟子一書。亦無下一非中從二仁義二字一紬繹出來上。其說二性善一者。亦爲二自暴自棄者一而發レ之。非三徒以レ性爲レ主而說一也。既看二破以レ理爲レ主之弊一甚難。而至レ知二以レ性爲レ主之非一。則實古今之難事。學者之牢關。非下具二足實知實德一者上。則不レ能。夫道也者。夏葛而冬裘。晨興而夜寐。雖レ無二吾說一。後來固當レ有二知レ之者一。此予之所二以自恃而自安一也。至二於性學之非一。則予死之後。千歲之遠。不レ知復有下實見二得之一者上乎否。予所二以呶呶然不一レ得レ已。正以レ此也。吁嗟誰爲二後來者一。當下與二此心一期上。第七十三章

問。程子曰。仁者以二天地萬物一爲二一體一。莫レ非レ己也。認得爲レ己。何所レ不レ至。此語如何。曰。有二此理一。然難レ施二之用一。有下博施二於民一。而能濟衆上。堯舜其猶病。諸則藉令認得爲レ己。豈得二能至一哉。故口可レ言。而身不レ可レ行者。君子不レ道。墨子以レ兼二愛天下一爲レ道。佛氏以二三界衆生一爲二己一子一。皆口可レ言。而身不レ可レ行者也。高論多說。皆無レ益二於道一。以レ不レ言爲レ是。第七十四章

問二張子西銘一。曰。此反欲レ施二之用一者也。民吾同胞一句。雖レ如二甚過高一。然下面大君者吾父母宗子以下。句句有二落著一。不レ比三程語甚大無二形影一。不レ可レ不二體認一。第七十五章

問。先生最愛二先儒何語一。曰。董子曰。仁人正二其誼一。不レ謀二其利一。明二其道一。不レ計二其功一。及張子曰。責レ己者。當レ知レ無二天下國家皆非之理一。故學至二於不一レ尤レ人。學之至也。此二語。孔孟以後之名言。最當二受用一。董子之語。可レ入二孟子一。張子之語。可レ入二論語一。晉王述曰。人非二堯舜一。何得二每事盡一レ善。韓

子雖ニ屢言一ㇾ心。亦皆指ニ仁義之良心一而言。所ㇾ謂本心恒心是也。蓋聖人從ニ天下上一見ㇾ道。佛者從ニ一身上一見ㇾ道。從ニ天下上一見ㇾ道。故見下天下所ニ同然一之理上。所ヨ以貴ㇾ德而不ㇾ貴ㇾ心也。從ニ一身上一見ㇾ道。所ヨ以知ㇾ心而不ㇾ知ㇾ德也。故其學自霄壤。而卒至ㇾ離ニ人倫一。可ㇾ不ㇾ察耶。第七十一章

問。何謂ニ本然之德一。曰。天下所ニ共通行一之謂ニ達道一。君臣父子夫婦昆弟朋友之倫。是已。天下所ニ共尊一之謂ニ達德一。仁義禮智。是已。此天下之所ニ同然一。而根ニ乎人心一。存ニ乎風俗一。萬世不ㇾ得ニ磨滅一。此之謂ニ本然之德一。佛氏之學。見ニ此心之妙一。出入變現無ㇾ可ニ奈何一。故專以ヨ默坐澄ㇾ心攝ヨ收精神一爲ㇾ事。要下超ヨ脫三界ニ不生不滅上。蓋用ㇾ智自私。專知ㇾ有ㇾ己。而不ㇾ知ニ天下萬世同然之道一故也。理學者流。亦見ヨ得心性一理萬物之一原一。卒以ニ人倫日用天下萬世通行之道一。爲ニ道之用一。而卻要下向ニ上面一求中其所ヨ以然ニ之體上。皆有ㇾ見ニ於心一。而無ㇾ見ニ於道一。故其學褊急險薄。不ㇾ見ニ聖人寬洪盛大之氣象一。唯聖人以ニ天下同然之道一。而治ニ天下同然之人一。不ニ以ㇾ己修ㇾ己。而與ニ天下一共由焉。不ニ立ㇾ異以違ㇾ人。不ニ好ㇾ高以怫ㇾ俗。故曰。吾非ニ斯人之徒與一。而誰與。所ヨ以爲ニ大中至正之道一也。第七十二章

問。楊龜山曰。人性上不ㇾ可ㇾ添ニ一物一。堯舜爲ニ萬世之法一。亦只循ㇾ性而已。而以ニ歐陽永叔所ㇾ謂聖人敎ㇾ人性非ㇾ所ㇾ先爲ㇾ非。如何。曰。歐陽子之言。亦不ㇾ可ニ深非一也。論語曰。性相近也。習相遠也。此見下聖人不ㇾ責ニ乎性一。而專責中乎習上也。又曰。有ㇾ敎無ㇾ類。此見ニ不ㇾ貴ㇾ性。而專貴ㇾ敎也。蓋有ㇾ敎。則性之美惡在ㇾ所ㇾ不ㇾ論。向嘗爲ㇾ子明ニ性道敎之分一。今又申明ㇾ之。夫道尊而無ㇾ對。至矣。然不ㇾ能下使ニ人爲ㇾ聖爲ㇾ賢。而開中天下之泰平上。其所下以使ニ人爲ㇾ聖爲ㇾ賢。而開中天下之泰平上者。敎之功也。故

流水之爲物也。亘晝夜而不舍。艸木之有生也。雖隆冬亦有花。皆爲有動而無靜也。有善而無惡。亦然。人之有是四端也。猶其身之有四體。天下皆然。然適有生而無耳目口鼻者。謂之不成人。以其不成人也。故曰。無惻隱羞惡辭讓是非之心者。非人也。所謂惡者善之變。非相對而並生。其理不亦彰然乎。故伏犧之目無死物。孟軻之目無不善之人。非知道者。孰能識之。　第六十九章

問。先生釋易乾卦亨字曰。有通而無塞。亦有生而無死。有動而無靜之意。曰然。天地之間。物各無不足之理。爲有通而無塞也。日煜乎晝。月煜乎夜。水流而不已。物生而不窮。若人之一身。有耳以受萬物之聲。目以辨萬物之色。鼻以嗅萬物之臭。口以知萬物之味。其於飲食。齒舌以噬嗑之。咽喉以呑嚥之。三焦以通之。膀胱以瀉之。非惟人爲然。物亦然。凡跂行喙息蜎飛蠕動之微。皆各有其用。用各相足。失於彼則得於此。失於此則得於彼。在物各無不足之患。造化之工。亦何巧哉。爲有通而無塞也。易曰。品物流形。是也。流卽流通之意。　第七十章

問。唯心學之名。似乎無害。不知以爲如何。曰。心學之稱。亦自禪學來。禪家自以其法名心宗。性學之號亦然。蓋理學者流。以其非記誦詞章之學。創建斯名。以標榜于世。然實非聖人之意也。禪者本不知本然之德。硬就己心上用功。後世儒者雖知由本然之德。而其工夫卻亦就一心上見道。遂以心學稱之。殊不知人具斯形。則必有斯心。自聖人至于愚夫愚婦。一也。本非貴。亦非賤。故聖人言德而不言心。其千言萬語。皆莫非所以使人由本然之德也。孟

乾元。萬物資始。乃統レ天。至哉坤元。萬物資生。乃順承レ天。聖人之論レ天。至レ此而極。從レ此以上。更不レ説二一層之理一。漢儒以二太極一爲二一元氣一。是也。此是千古不傳之祕。大易之露二洩天機一者也。欲二明言一レ之。則落二于義解一。欲レ不レ言。則亦可レ惜。子以レ意逆レ之。可矣。第六十七章

問。理字何故不レ足レ爲二生生化化之原一乎。曰。理本死字。在レ物而不レ能レ宰レ物。在二生物一有二生物之理一。死物有二死物之理一。人則有二人之理一。物則有二物之理一。然一元之氣爲二之本一。而理則在二于氣之後一。故理不レ足三以爲二萬化之樞紐一也。萬物本二乎五行一。五行本二乎陰陽一。再推而至三於陰陽之所二以然一。則不レ能レ不レ歸二之於理一。既歸二于理一。則自不レ能レ不レ陷二于虛無一。所レ謂萬法歸レ一。一歸二何所一。是也。此常識之所下以必至レ此。而與二聖人一自相違上也。惟聖人能識二天地之一大活物一。而不レ可下以二理字一盡上レ之。故彖贊レ之曰。大哉乾元。至哉坤元。至矣盡矣。若知二天地眞活物一。許レ汝即身即伏犧。第六十八章

問。先生謂二天地一大活物一。不レ可下以二理字一盡上レ之。即字義所レ謂有レ生而無レ死。有レ聚而無レ散。一二乎生一故也之理。曰然。凡天地間。皆一理耳。有レ動而無レ靜。有レ善而無レ惡。蓋靜者動之止。惡者善之變。善者生之類。惡者死之類。非二兩者相對而並生一。皆一二乎生一故也。凡生者不レ能レ不レ動。惟死者而後見二其眞靜一也。其生也晝動而夜靜。然雖二熟睡之中一。不レ能レ無レ夢。及鼻息之呼吸。無二晝夜之別一。手足頭面。不レ覺自動搖。是皆其動處。字義所レ謂死者生之終。散者聚之盡。是也。驗二之天地一。亦益信然。日月星辰。東升西沒。晝夜旋轉。無二一息停機一。日月相推。而明生焉。寒暑相推。而歲成焉。天地日月。皆莫レ不下乘二斯氣一而行上。若二走馬燈一然。兵卒與馬。隨二火氣一而往來驅逐。旋而不レ已也。

然斷決深刻。古今無二全人一。殆有二中韓刑名之氣象一。而無二聖人涵容之意味一。持レ己甚堅。責レ人甚深。浸二淫于肺腑一。透二浹于骨髓一。卒爲二刻薄之流一。專主二張理字一之弊。一至二於此一。悲哉。夫無レ裨二於世道一。無レ補二於生民一者。聖人不レ爲。今講二理學一者。或論至二六合之外一。曁近世講二天學一者。好説二無レ限道理一。雖二窮レ微極一レ妙。然皆無レ裨二於世道一。無レ補二于生民一。聖人之所レ不レ取也。孟子曰。楊墨之道不レ息。孔子之道不レ著。予所三以呶呶然如レ此其不二レ已者。實恐二孔子之道不一レ著也。非レ好レ辯也。君子諒諸。第六十五章

問。然則。理字未レ盡レ善歟。曰。言各有レ攸レ當。理字施二之於事物一則可。用二之於天地一則不可。孟子所レ謂始二條理一終二條理一。及理義之悅二我心一等語。皆以三事各得二其條理一而言。易曰。窮レ理盡レ性。以至二於命一。窮レ理就二事物一而言。盡レ性就レ人而言。至レ命就レ天而言。措レ詞之序。自可レ見矣。若以レ理爲二萬物之本原一焉。則自流二入于老佛之學一。與二聖人之旨一。實天淵矣。可レ不レ謹哉。第六十六章

問。以レ理爲二學問之本原一。則自流二入于異端一。其旨如何。曰。是非二爾所一レ知也。學問視二其所レ本者如何一耳。所レ本少差。邪正相反。聖人以二天地一爲二活物一。異端以二天地一爲二死物一。此處一差。千里之繆。蓋天之所三以爲二活物一者。以三其有二一元之氣一也。一元之氣。猶三人之有二元陽一。飲食言語。視聽動作。終レ身無レ息。正爲三其有二元陽一也。若元陽一絕。忽爲二異物一。與二木石一無レ異。唯天地一大活物。生レ物而不レ生二於物一。悠久無レ窮。不レ比三人物之有二生死一也。夫無二太虛一則已。有二太虛一。則不レ能レ無二斯氣一。斯氣也。既無レ所レ生。亦無レ所レ不レ生。萬古獨立。攧撲不レ破。豈容下以二虛無一目上レ之邪。故曰。大哉

命レ之。則氣象偏枯。視二之王道之盛大一。不二啻霄壤一。後世儒者以爲。心卽性。性卽理。一理字。可三以盡二聖學之全一。故公然以レ理名レ學。而心學性學等名興焉。殊不レ知一理字。可三以盡二聖學之全一。則孔孟當二先命一レ之。而詎竢二後世之名稱一。可レ知理學等目。皆以二後世學術一而所レ稱。非下稱二聖學之實一者上也。

第六十四章

問。理學之稱。信不レ稱二聖學之實一。然如二理字一。亦不レ可レ輕。曰然。孟子曰。理義之悅二我心一。猶三芻豢之悅二我口一。是也。孟子之意。謂三物之有二條理一。與二宋儒之意一頗異矣。宋儒以爲。一理字。可三以盡二乎天下之事一。殊不レ知天下雖レ無二理外之物一。然而。不レ可下以二一理字一斷中天下之事上也。學者據二一理字一。以斷二天下之事理一。議論可レ聞。而求二之於實一。則不レ得二其悉中一矣。夫古今之終始。不レ可二得而究一焉。四旁之窮際。不レ可二得而知一焉。近取二諸身一。遠取二諸物一。凡其形狀性情。所三以然二之故。皆不レ可二得而窮詰一也。佛者說二三千世界一。儒者以二十二萬九千六百年一爲二一元一。然推而到二其外一。則亦皆不レ可二得而知一也。理之不レ可レ窮也。可レ見矣。且刑二有レ罪者一。理之常也。亦奚足レ恤。然聖人三赦三宥。惟刑之恤者。豈非三過爲二姑息一哉。善レ善而惡レ惡。亦理之常也。然聖人善レ善每長。惡レ惡每短者。亦豈非二愛憎失一レ宜耶。然聖人皆不レ然者。足レ見レ不レ可下依二理字一以斷中天下之事上也。故凡事專依レ理斷決。則殘忍刻薄之心勝。而寬裕仁厚之心寡。上德非薄。而下必傷損。人亦不二心服一。須下有二長者氣象一方可上。隱レ惡而揚レ善。成二人之美一。而不レ成二人之惡一。躬自厚。而薄責レ人。是皆長者氣象。唯仁者能レ之。非三區區小儒之所二能及一也。予觀二通鑑纂要等書一。其評二隲人物一。善レ善惡レ惡。不二一毫假借一。可レ謂レ嚴矣。

欲レ知ニ其鹹淡一。既不レ可レ得。況欲レ求ニ鹹淡於鹽與レ水之外一。吾知其以爲レ鹹爲レ淡者。乃其虛見。而非ニ眞鹹淡一也。夫道至ニ仁義禮智一。而極矣。敎至ニ孝弟忠信一。而盡矣。而於ニ其上面一。更求ニ悟道一。奚以異ニ乎求ニ鹹淡於鹽與レ水之外一。宜乎。其有ニ頓悟豁然之說一也。第六十二章

問。吾聞ニ之朱子一。曰。於レ理有ド所ニ以然一。與レ所レ當レ然之異上。所ニ以然一者。即所レ當レ然之本。而所レ當レ然者。便所ニ以然一之發。故曰。陰陽自レ形而下之器也。太極自レ形而上之道也。今先生之所レ說。皆所レ當レ然之事。而於ド其所ニ以然一之本上。則未ニ之及一。有レ用而無レ體。恐得レ無ニ過淺近一乎。曰。所レ謂所ニ以然一之理者。非レ謂ド人之所ニ以爲一レ人。物之所ニ以爲一レ物。陰陽之所ニ以往來消長一之理上乎。夫陰陽固非レ道。一陰一陽往來不レ已者。即是道。陰陽往來。天道成矣。剛柔相濟。地道成矣。仁義相須。人道成矣。天之道。盡ニ乎陰陽一。地之道。盡ニ乎剛柔一。人之道。盡ニ乎仁義一。故易曰。一陰一陽。之謂レ道。又曰。大哉乾元。萬物資始。乃統レ天。至哉坤元。萬物資生。乃順承レ天。古先聖人所ニ以論ニ天道一者。至レ此而極。更不ド於ニ此上面一復加中一語上。所レ謂太極云者。亦斥ニ此一元氣一而言耳。若於ニ此上面一。求ド其所ニ以然一之理上。則是非下向所レ謂就ニ無物之地一求中物上邪。故後世所レ謂無極太極之理。畢竟天地本無之理。而聖人之所レ不レ言。祛レ之可矣。第六十三章

問。古昔未レ有ニ理學之稱一。近世或目ニ聖門之學一。爲ニ理學一。爲ニ心學一。爲ニ性學一。是乎否。曰。聖人之學。包ニ該宇宙一。統ニ攝道德一。堯舜禹湯文武周公治ニ天下一之大經大法。而孔孟之所ニ祖ニ述憲ニ章之一者也。本無ニ名稱之可一レ擬。若不レ得レ已。而强欲レ命レ之。當下以ニ王道一號上レ之。或直稱ニ儒學一。亦可。若以ニ理學一

闢啓鑰。等待促迫。謂之自我開發之。禪家所謂頓悟者。正如此。聰明强力。志氣超邁者。其卒必爲風癲佯狂之流。學之不可不謹。如此。予也固有與漢宋舊説異者。然皆積疑之至。融釋開明。自然得之。而一無思慮安排强探力索而得者也。嫌自我開發之也　第六十章

問。上達之時。畢竟如何。曰。中庸曰。素富貴行乎富貴。素貧賤行乎貧賤。素夷狄行乎夷狄。素患難行乎患難。君子無入而不自得焉。此是上達之功驗。蓋學者之進道。其初學問與日用扞格齟齬。不能相入。及乎眞積力久。自有所得。則向視之以爲遠者。今始得近。向視之以爲難者。今始得易。漸次近前。非學問不樂。非學問不言。及乎其愈熟。殆如布帛菽粟不可須臾離焉。至於子女臧獲之賤。米鹽柴薪之細。大凡接乎耳目。施乎日用者。總是莫非道。俗外無道。道外無俗。而雖一點俗氣。亦著不得。此是上達光景。第六十一章

問。禪家有頓悟之説。儒者有一旦豁然之論。於聖人之學。亦有之乎。曰。無之。聖人之學。以實語明實理。目覩而耳聞。心得而身有。故有踐履之可言。而無頓悟之可期。禪者以空言説空理。耳無所聞。目無所覩。故不得不用悟。蓋有實德。而後有實見。猶白日視物。歷歷分明。既無所疑。亦無所迷。根乎人心。存乎風俗。包括天地。而無餘。周羅古今。而無遺。仁者安仁。智者利仁。任重道遠。死而後已。何有頓悟之可期。宋儒以無聲無臭之妙。爲無極之眞。爲本心之體。而要格物致知以領會之。所以亦有一旦豁然之説也。猶於無物之地求物。雖眼中如有所見。而實無物。非空見而何。水吾知其淡。鹽吾知其鹹。然不服鹽與水。而

問。反求與忠恕亦有差別。曰。無差別。忠恕。是以爲己之心而爲人也。反求。是以責人之心而責己也。能反求於己。則必能忠恕於人。能忠恕於人。則必能反求於己。非有異也。故孔曾專曰忠恕。孟子專曰反求。其實一也。第五十七章

問。如何是儒者心法。曰。孔子曰。不怨天不尤人。下學而上達。此是儒者心法。言不遇於時。而不以怨天。不容於世。而不以尤人。不立異以干譽。不務高以取人。唯知自脩耳。故曰。知我者其天乎。是謂儒者本領。是謂學問實際。不可勉而能。不得强而到。但反求於己。是其要。孔子曰。飯疏食飲水。曲肱而枕之。樂亦在其中矣。惟不怨不尤者能焉。至矣。第五十八章

問下學上達之義。曰。下學謙辭。猶曰最下之學。指人倫平常之道而言。程子所謂下學人事。是已。自與求向上一路者正相反。上字當作上聲讀。上達者。漸次自進之義。非指高遠之理而言。所謂君子上達小人下達。是也。下學猶在平地上行。循循不止。則能到萬里之遠。其事甚近。而其功不可量焉。求向上一路者。猶欲去平地上騰空中。不墜而傷損者。未之有也。此異端之所以廢人倫捨日用蔑棄禮義。而不可爲萬世常行之道也。第五十九章

問上達功夫。曰。功夫欲其密。議論欲其正。至奇極玅不如一當。學者當竢悟門自開。而勿自我開發之。眞積力久。怡然理順。渙然氷釋。謂之悟門自開。永爲己之有。而終身不失。蓋實德之所到。而非專事智見者之所得而及。正謂之實智。吾所謂上達者如此。不竢悟門之開。强自抽

口。趙氏曰。爲レ士者。益多爲二衆口一所レ訕。若二常人一。固不レ足二輕重一。爲レ士者。必有レ志有レ義。其稍高者。又或有二識見一。特立獨行。不下隨二時輩一馳逐上。是所三以來二訕謗一也。其道愈大。譏レ之者愈衆。其德愈邵。寇レ之者愈深。憂心悄悄。慍二于群小一。孔子猶然。況其他乎。韓文公程伊川朱晦翁王新建之在二當時一也。擯排斥逐。不レ遺二餘力一。然而至二于後世一。其美名芳躅。彌遠彌彰。至下與二日月一爭上レ光。公論之在二天下一。不レ可レ掩如レ此。唯明主能察レ之。而暗主不レ能レ不レ眩二於衆言一。所以關張之譏不レ行二于孔明一。而孔文仲之誣行二于元祐一也。孟子曰。有二不レ虞之譽一。有二求レ全之毀一。說者曰。修レ己者。不レ可三以レ是遽爲二憂喜一。觀レ人者。不レ可三以レ是輕爲二進退一。士若聞レ譽而喜。聞レ毀而厭焉。則必至二狥レ時阿レ世。改レ節移レ操。不レ可レ不二自戒一焉。第五十四章

問三禍福之所二以然一。曰無レ禍便是福。不レ凶則爲レ吉。世人以二富貴貧賤一論二吉凶禍福一者。非也。苟富貴而身多二憂患一。子孫不肖者。不レ若下貧賤而身長無事。子孫聰明之爲レ愈遠甚上也。若夫以二富貴貧賤一論二吉凶禍福一者。實市道之見。鄙哉。第五十五章

問二學問之要一。曰。學問之要。唯在三反二求於己一。中庸曰。射有レ似二乎君子一。失二諸正鵠一。反二求諸其身一。孟子曰。仁者如レ射。射者正レ己而後發。發而不レ中。不レ怨二勝レ己者一。反二求諸己一而已矣。所レ謂終レ身用レ之。有レ不レ能レ盡者也。又曰。愛レ人不レ親。反二其仁一。治レ人不レ治。反二其智一。禮レ人不レ答。反二其敬一。行有レ不レ得者。皆反二求諸己一。其身正。而天下歸レ之。故曰。學問之要。唯在三反二求諸己一而已。聖人之不レ怨レ天不レ尤レ人之境。亦從レ此而馴致。實學者之本務。大矣哉。第五十六章

道一也。第四十九章

問ニ守レ身之法一。曰。節儉爲レ要。夫儉者萬善之本。奢者衆惡之基。非ニ惟其身成敗之所一レ分。其家儉則福慶流ニ於子孫一。奢則凶禍傳ニ於後嗣一。可レ不レ愼乎。第五十章

問ニ守レ儉之方一。曰。人家之奢。大抵生ニ於閨門一。閨門之奢。生三於丈夫軟弱。失ニ駕御之道一。丈夫能嚴。而有ニ節制一。則閨門自肅。而奢亦不レ生。是守レ儉之要也。然閨門之奢。不レ過ニ熬レ財靡一レ物。男子之奢。不レ至ニ亡レ國敗一レ家。則不レ已。男子氣質柔軟。少年之氣不レ除。則忘ニ拘檢一縱ニ貪慾一。不レ喜レ近ニ端愨方正之士一。墜レ志廢レ業。遊惰放縱。無レ所レ不レ至。乃衆惡之淵藪也。第五十一章

問レ修レ家。曰。中庸引レ詩曰。妻子好合。如レ鼓ニ瑟琴一。兄弟既翕。和樂且耽。宜ニ爾室家一。樂ニ爾妻帑一。子曰。父母其順矣乎。言三至極之理常存ニ乎至近之中一也。蓋妻子之好合。兄弟之和樂。家道之至近者也。然堯舜之光ヨ被ニ四表一。格ニ于上下一。其實以レ此爲レ本焉。則閨門之修。豈非ニ至極之道一乎。然和睦之幣。必有ニ狎レ恩之患一。而少ニ檢束之意一。又須レ有下節ニ制之一在上。易家人九三曰。婦子嘻嘻。終吝。故閨門之內。要レ有ニ肅然淸苦之氣象一。若終日嬉笑。不レ知レ節レ之。則必至レ敗レ家。可レ不レ戒乎。第五十二章

問ニ應レ世之道一。曰。莫レ如レ讓。讓者實德也。凡犯レ上好レ勝。與レ人爭奪。皆生ニ於忘一レ讓。故一讓立。而衆德蘘。非三徒不ニ與レ世乖戾一。於ニ應レ事接レ物之間一。最爲ニ要道一。人焉而無ニ禮讓之心一。則雖レ有ニ他美一。皆不レ足レ觀焉。故天下莫レ善ニ於讓一。莫レ不レ善ニ於不一レ知レ讓。第五十三章

問。毀譽之來。不レ能レ無ニ喜厭之心一。如何而可。曰。毀譽士之常。奚足三以爲ニ憂喜一。孟子曰。士增茲多

問。觀二夫世之學者一。見二與レ己議論不レ合者一。必謂二學術異一。而不二復與交通一。如何。曰。悅二與レ己議論同一。而不レ樂下與二己意見一異者上。學者之通患也。學問貴二乎切磋琢磨一。莫レ若地從下與二己意見一異者上。舍レ己平レ心。切劘講磨天。所レ謂樂レ取二于人一。是也。不レ有レ益二于己一。必有レ益二于彼一。謂二之兩益一。倘樂二與レ己議論同者一。每自講習。則終身無レ改二其舊見一。而無レ得二新益一。與二獨學一何異。無レ益二于己一。亦無レ益二于彼一。謂二之兩損一。昔者明道先生使三吳師禮達二于王介甫一曰。如有レ說願往復。此天下公理。無二彼我一。果能明辨。不レ有レ益二于介甫一。則必有レ益二于我一。柳子厚亦曰。子不レ有レ得焉。則我得矣。古人設レ心如レ此。故能成二其大一也。今之學者則不レ然。守レ己甚堅。服レ善甚淺。其學稍優二于人一焉。則以二師道一自居。不レ三復背問二于人一。其卒也。必自至二於喪一レ己。蓋其器識淺狹。不レ知レ好レ善故也。可レ不レ戒乎。第四十七章

問。世之學者各私二其師門一。互相詆譏。如何。曰。尊二師門之敎一可矣。私二師門一不可也。在レ宋初有二二程蘇之黨一。晚有二朱陸之派一。皆出二其門人一。而非二諸先生之意一。有宋之世。雖二道學甚盛一。然此等惡俗倘在。可レ惜。學者天下之公學。豈容レ私二其師門一乎。多見二其不レ知レ道也。予少時嘗讀二朝鮮李退溪輯朱子書札一。於二楊子直姓字下一註レ之曰。朱門之叛徒。予竊薄レ之曰。何見之陋乎。往者不レ追。來者不レ拒。古之道也。奚以レ叛名レ之爲。溷蓋私二朱門一云爾。第四十八章

問。人各私二其師門一。我亦不レ得二獨不一レ私。如何。曰。何言之過耶。人各爲二不善一。我亦可レ倣二其不善一乎。若三七十子之事二孔子一。聞二其崇二夫子之敎一。未レ聞レ私二孔氏之門一也。孟子曰。往者不レ追。來者不レ拒。苟以二是心一至。斯受レ之而已矣。道愈小。故設レ心愈隘。不レ得レ不レ立二町畦一。不レ可三與入二堯舜之

問二朋友之義一。曰。朋友有下輔レ仁責レ善之道一。有二通レ財許レ死之義一。古人或有下互爲二臣僕一者上。或有下養二其寡婦孤女一者上。居二五倫之一一。而與レ師並稱。其爲レ道甚大矣。然於二締レ交之初一。不レ可レ不レ審二其善否如何一。人誰不レ欲二其身之善而無一レ惡。然與二君子一倶居。則不レ欲レ善而自善。小人與處。則不レ欲レ惡而自惡。所二關係一尤重。不レ可レ不レ謹焉。杜子美貧交行曰。君不レ見管鮑貧時交。此道今人棄如レ土。孟郊審交詩曰。君子芳桂性。春濃秋更繁。小人槿花心。朝在夕不レ存。古人云。君子之交淡若レ水。小人之交甘若レ醴。有レ味哉。第四十四章

問。朋友有レ信。信者。謂下有爲レ有無爲レ無。多謂レ多寡謂レ寡。而不レ少二欺詐一之類上與。曰否。信實也。能踐二其言一而不レ失之謂。若約爲二兄弟一。則終身以二兄弟一待レ之。一旦有二朋友之義一。則守レ之如レ初。始終不レ變。正謂二之朋友有一レ信。非二但言二一言之有一レ實也。語曰。久要不レ忘二平生之言一。是也。若有二大故一。不レ得レ已而後絶レ之。雖二君子一所レ不レ免。苟尤二小過一逞二小忿一。因二一旦之怒一。而棄二平生之交一。假令有レ理。而非二忠厚之道一。君子不レ爲也。朋友之間。謙レ己相下。揚レ善隱レ惡。赦二小過一懲二小忿一。始終全レ交。斯可矣。第四十五章

問。子路問二夫子一曰。願聞二子之志一。子曰。老者安レ之。少者懷レ之。朋友信レ之。先生亦有レ願乎。曰。人各有レ願。我豈無レ願乎。吾願朋友之間。務相推讓。舍レ己從レ人。有レ善則揚レ之。有レ過則告レ之。各盡二一視同仁之心一。横渠之於二程子一。其表叔也。而二程以二西銘一與二大學書一同二其尊信一。又授二之其門人一。可レ爲二萬世學者之模範一也。第四十六章

也。故孔子曰。以レ孝事レ君。則忠。又曰。求二忠臣一者。於二孝子之門一。世俗多言忠孝不レ能二兩全一。爲二此言一者。蓋有レ意レ欲下勤二其一一。而緩中其一上。若非二不孝之子一。必是不忠之臣。不孝之子非レ人。不忠之臣亦非レ人。戒レ之戒レ之。歐陽子曰。在レ君則爲レ君。在レ親則爲レ親。此言得レ之。第四十章

問二師資之道一。曰。古者崇レ道。故尊レ師。後世不レ知レ崇レ道。故師輕。師者道之所レ在。崇レ師即所ヨ以崇ト道也。故師有二君臣之義一。有二父子之親一。師而喜二弟子之勝ト己者。眞師也。忌レ勝レ己者。惡師也。弟子亦視レ之猶レ父。而己之學雖レ超二于其師一。終身敬レ之而不レ衰爲レ道。若及ヨ少有二青藍之譽一。則有二入レ室操レ戈之意一者。眞小人哉。第四十一章

問二求レ師之道一。曰。治レ病須レ求二良醫一。不レ可レ委二于庸醫一。一誤二其治一。則雖レ有二百良醫一。而不レ能レ善二其後一。欲レ學レ道者。須下擇二天下第一等人一而師上レ之。勿レ師二半上落下之人一。學問之成否得失。非ヨ俗師村學之所二能識一也。始初爲二其所一レ誤。則爲二終身之大害一。習慣如二天性一。漸染難二磨淬一。後雖下遭二大賢君子一。而自知中其非上。卒不レ能レ改二其故步一。況乎自安二其陋一。而不レ知レ悔者。十居二八九一。可レ不レ謹哉。人家爲二子弟一延レ師。多厭二其禮遇一。憚二其嚴重一。必先擇二易レ狎易レ近者一而招レ之。可レ謂二大謬一矣。第四十二章

問二爲レ師之道一。曰。師之責甚重矣。爲レ師之道。在ヨ務長二育人材一。一師而君親之道備。可レ不レ謹哉。爲二人之君一。而不レ知レ養レ民。則爲二不仁一。爲二人之父一。而不レ知レ敎レ子。則爲二不慈一。師而不レ知レ長ヨ育人材一。則併二不仁不慈一而有レ之。其罪不二亦大一乎。前輩以下不レ導二道德一。而專誘二詩文一者上。比ヨ之誘入二歓博門中一。宜矣。第四十三章

問。何謂達孝。曰。達孝也者。謂通天下之孝。而非一人之小孝也。夫飮食供奉。左右就養者。人子之常職。而不足以爲孝。惟善繼人之志。善述人之事。立身行道。揚名於後世。以顯父母。而後足以稱孝也。孔子曰。孟莊子之孝也。其他可能也。其不改父之臣與父之政。是難能也。莊子父獻子。魯之賢大夫。顯名諸侯。其臣皆獻子之所擧。其政皆獻子之所建。人材紀綱。足以遺後嗣。莊子皆能用之。而不改。故夫子稱之。言莊子之孝。其難能者固多。然不如此二事之最爲難能也。由此觀之。斁其先業。墮其家聲者。雖有他美。不孝之甚也。孟懿子問孝。子曰。生事之以禮。死葬之以禮。祭之以禮。蓋懿子魯之上卿。民之所具瞻。而生事葬祭以禮。則非徒能治其家有法。亦足以善魯國。君以爲忠。民以爲歸。可以永孟氏之祀。故夫子以此告之。深哉。第三十八章

問忠。曰。古今稱忠臣者。其品不一。感激殺身者。有矣。若程嬰杵臼荊軻豫讓紀信之流。是也。知有其君。而不知有其身者。有矣。如令尹子文。是也。不避艱險。以濟其君者。有矣。如狄仁傑婁師德。是也。至誠愛君。以善勸之。以道輔之者。有矣。非伊尹周公之聖。不足以當之。奚感激殺身者之多。而以道事君者之寡耶。蓋感激殺身。出於一旦之義。故似難。而實易。以道事君者。非躬有其德。始終不失其道者。不能。故似易。而實難。第三十九章

問。忠與孝。孰重。曰。無輕重。君親躰均。恩義相倚。孝於其親者。必忠於其君。忠於其君者。必孝於其親。未有不孝於其親。而能忠於其君者也。又未有不忠於其君。而能孝於其親者

不ㇾ尊ㇾ賢。或娼ニ嫉之一。或狎ニ辱之一。甚而至ニ於蔽ニ害之一。悲哉。孟子曰。言無ニ實不祥一。不祥之實。蔽ㇾ賢者當ㇾ之。言聽ニ蔽ㇾ賢之言一。則國必敗。身必亡也。第三十四章

問。孟子之於ニ齊宣王一。其禮似ニ甚倨一。如何。曰。禮固稱矣。奚謂ニ甚倨一。古者道德隆。故尊ㇾ賢。後世道德衰。故簡ㇾ賢。尊ㇾ賢。故賢者之權重。簡ㇾ賢。故賢者之勢微。天下之治亂盛衰。其判ニ于此一歟。昔黃帝屈ニ天子之尊一。而問ニ道崆峒之山一。堯以ニ萬乘之位一。館ニ甥于貳室一。迭爲ニ賓主一。成湯之於ニ伊尹一。桓公之於ニ管仲一。其初皆師而尊ㇾ之。晉平公大國之君也。師ニ尊亥唐一。入云則入。坐云則坐。食云則食。雖ニ疏食菜羹一。未ニ嘗不ㇾ飽。孟子猶惜下其弗中與共ニ天位一。與治中天職上。戰國之時。雖ニ道湮學廢一。然先王之遺化尚在。人不下以ニ孟子一爲上簡ㇾ禮。此後世之所ㇾ不ㇾ及也。第三十五章

問ㇾ孝。曰。孝以ㇾ愛爲ㇾ本。愛則順矣。順則百行成矣。順者。不ㇾ逆ニ于父母之心一。是也。不ㇾ愛ニ其親一。而愛ニ他人一。謂ニ之悖德一。不ㇾ順ニ乎其親一。而順ニ乎他人一。謂ニ之逆德一。孟子曰。大孝終ㇾ身慕ニ父母一。五十而慕者。予於ニ大舜一見ㇾ之矣。慕者愛之發。大孝愛之至也。第三十六章

問。孝亦有ニ大小一乎。曰。使ニ父母無ㇾ憂者易。使ニ父母悅ㇾ之者難。何者。凡爲ニ人之子一者。平生褆ㇾ身勤ㇾ業。無ニ亡賴之友一。不三博奕好ニ飲酒一。不三好ㇾ勇鬭狠以危ニ其父母一。則足三以免ニ父母之憂一。然而未ㇾ足ㇾ悅ニ父母之心一。苟好ㇾ學志ㇾ善。立ㇾ身起ㇾ家。足下以張ニ其祖業一。耀中其門楣上。而後父母之心。怡然驩然。有下不ㇾ勝ニ其悅一者上。孝之至也。不ㇾ能ㇾ使ニ父母無ㇾ憂者。不ㇾ可ニ以爲ㇾ人。不ㇾ能ㇾ使ニ父母悅ㇾ之者。不ㇾ可ニ以爲ㇾ子。勉哉。第三十七章

然。仁義之效。豈不大乎。第三十章

問治道之要。曰。文勝其武。則國祚修。武勝其文。則國脈蹙。賞勝其罰。則刑罰淸。而民心安。罰勝其賞。則刑罰亂。而民心搖。第三十一章

問。何以得賞罰能當其功罪。曰。欲賞罰各當其功罪者。爲政者之心也。然欲賞罰各當其功罪。則罰必過。而賞必不及。罰過而賞不及。則人心睽。人心睽。則國危。故聖人過其賞。而減其罰。過其賞。而減其罰。則賞罰自得其當。書曰。罪疑惟輕。功疑惟重。與其殺不辜。寧失不經。是也。孔子曰。惟仁者。能好人。能惡人。蓋好人之善。每難及。而惡人之惡。必易過。惟仁人。愛人也深。故好惡能中其實。賞罰能當其功罪。亦然。第三十二章

問。觀夫好儉者。大柢皆吝嗇。何哉。曰。儉與嗇。其迹相似。而其心實相反。儉善之基。嗇欲之叢。儉而好施者。眞儉也。儉而不知施。亦嗇焉耳。古人務儉者。爲其施也。儉而不知施。不可謂儉。世之鄙夫。託儉而詆夫奢者。可附一噱。儉而好施者。爲誠大德之人。儉而不知施者。眞守錢虜耳。第三十三章

問。天下何善最貴。曰。莫貴乎好賢。上自王公。下至於庶人。未有不尊賢。而能修身存心。成其大業者也。大賢則有大益。小賢則有小益。所謂賢者。凡賢於己者。皆是也。不必知學明道。而後謂之賢。中庸九經。以修身爲首。而次之以尊賢。親親敬大臣等。皆在其後。可見尊賢一事甚重。爲萬事之本也。後世之所以不及乎古人者。職此之由。後世非徒

孟子曰。善政民畏レ之。善敎民愛レ之。又曰。以レ善服レ人者。未レ有ニ能服レ民者一也。以レ善養レ民。然後能服ニ天下一。天下不ニ心服一而王者。未ニ之有一也。此二言。乃篇中要言。學者爲ニ人君一說者。宜ニ以レ此勸レ之也。第二十九章

問。程子曰。修養之所ニ以引一レ年。國祚之所ニ以祈ニ天永命一。常人之所ニ以至ニ於聖人一。皆工夫到ニ這裏一。則有ニ此應一。夫修養之引レ年。資質之變化。皆可ニ勉而至一焉。至レ所ニ以祈ニ天永命一。則獨係ニ於天一。而非ニ人力之所ニ能致一。何術可ニ能致一レ之。曰。祈ニ天永命一。豈有レ他哉。亦曰。仁而已矣。夫天無レ心。以ニ民心一爲レ心。民心悅焉。則天心悅矣。民心厭焉。則天心厭矣。書曰。天視自ニ我民一視。天聽自ニ我民一聽。好ニ民之所一レ好。惡ニ民之所一レ惡。民心悅豫。則可ニ以祈ニ天永命一也。昔者文王之治レ岐也。耕者九一。仕者世レ祿。關市譏而不レ征。澤梁無レ禁。罪レ人不レ孥。鰥寡孤獨四者。天下之窮民。而無レ告者。文王發レ政施レ仁。必先ニ斯四者一。故周有ニ天下一。中間雖下有ニ幽厲之暴一。蹙中先王之國脈上。然猶能歷ニ八百餘年之久一矣。若好子孫相繼善維ニ持之一。則豈止曆過ニ其數一。永膺ニ天命一。奄有ニ九有一。不レ可ニ茹度一焉。詩曰。於戲前王不レ忘。若夫福慶流ニ於子孫一。奕世累葉有レ隆莫レ替者。鬼神所レ不レ能。人力所レ不レ及。唯非下得ニ民心一。而沒レ世不レ忘。則不レ得。故雖レ禱ニ爾百神一。而不レ若下得ニ民心一之必實上。而能遠大上也。若ニ秦始皇本朝羽柴氏一。雄武英畧過ニ絕古今一。戰勝攻取。風動艸靡。前無ニ勁敵一。其宜ニ子孫繁衍。保ニ數百年宗社一。而纔一再傳而亡。嚮氣焰赫赫者。何在哉。吁。不仁之禍。和漢一レ轍。漢高祖纔以ニ寬仁一濟ニ天下一。唐太宗從ニ魏徵之言一。用ニ仁義一。皆能身致ニ太平一。子孫繇繇。此鬼神所レ不レ能レ致ニ其靈一。唯得ニ民心一。而能

レ善。故民之從レ之也輕。蓋禮生二於節儉一。樂成二於有餘一。先王之世。家給財阜。民安俗醇。自レ晨至レ夕。自レ春至レ冬。民心和洽。猶下正月之吉。被レ服具レ儀。擧レ觶上レ壽。各祝二萬歲一。一家熙熙。頓忘中窮歲之勞上。禮樂安得レ不レ興乎。故孟子論二王道一。必以レ制二民之產一爲レ先。房杜不二是之求一。而漫生二望洋之心一。故有二媿色一。不レ知二孟子一故也。第二十六章

問。樂成二於有餘一。既得レ聞レ命矣。禮生二於節儉一。如何。曰。人情樂則勤。厭則荒。節儉之餘。必家富力給。故以レ文爲レ樂。此禮之所二以興一也。禮奢文勝。則財殫力勞。故厭心生焉。是禮之所三以廢一也。故論語曰。禮與二其奢一也。寧儉。又曰。先進於二禮樂一。野人也。後進於二禮樂一。君子也。如用レ之。則吾從二先進一。唐宋之定レ禮。必以二彌文一爲レ事。故唐開元禮。宋開寶政和等禮。皆爲二虛器一。不レ爲二時用一。蓋知二禮之末一。而不レ知二禮之本一故也。樂雖レ成二於有餘一。然由二節儉一。而致二有餘一。則雖レ樂。亦皆本二於節儉一。故欲レ行二王道一。則不レ得レ不レ儉。第二十七章

問二王霸之辨一。曰。王者以レ子養レ民。霸者以レ民治レ民。其設レ心不レ同。故民之應レ上。亦從而異。以レ子養レ民。故民亦視レ君如二其父母一。保護愛戴。效レ死而弗レ去也。以レ民治レ民。故民惟知二供レ役奉下法。而不レ知レ親二其上一。有レ難則去。此王霸之辨也。第二十八章

問。何謂二以レ子養下民。曰。先王視レ民。猶二其赤子一。惟恐二民之不下得二其所一。故制二民之產一。仰足三以事二父母一。俯足二以畜二妻子一。又設三爲庠序學校一。申レ之以二孝悌之義一。斯之謂二以レ子養下民也。何謂二以レ民治下民。曰。以レ威臨レ之。以レ法繩レ之。徒知中驅二逐使令之一。而無二哀恤惻憫之心一。斯之謂二以レ民治下民也。

問。聖賢所以深戒聚斂者。何哉。曰。所以取民之怨者。莫甚於聚斂。夫小人之事君也。聚斂掊克。唯知爲君。而不知爲民。殊不知爲民者。便所以爲君之實也。未有爲民。而不爲君者也。又未有不爲民。而能爲君者也。故少爲民。則少有效。大爲民。則大有效。昔馮驩爲孟嘗君焚薛債劵。後朞年孟嘗君免相。就國于薛。未至百里。民扶老攜幼以迎。夫焚劵細事也。然其得民心。尚如此。矧大於此者乎。苟上好聚斂。則民必怨。怨而不已。則怒。怒則離。離則叛。雖有鹿臺之財。郿塢之金。豈能得爲己之有乎。夫儉則有餘。有餘則足以施人。奢則不足。不足則不能不聚斂。此聖人之所以尙儉而戒聚斂也。第二十四章

問。國家承平日久。人皆安肆。互以奢侈相尙。及其久也。習以成風。人不知其爲奢靡。今遽欲以節儉治之。則恐人之難遽從。如何。曰。君子之德風也。小人之德艸也。艸尙之風。必偃。民不從其所令。而從其所好。顧在上之所好如何耳。孔子曰。上好禮。則民莫敢不敬。上好義。則民莫敢不服。上好信。則民莫敢不用情。皆在謹上之所好耳。上自好華靡。而欲下之節儉。雖嚴刑峻法以繩之。而不可得也。苟上自好儉。則不令而行。滕文公欲行古禮。父兄百官皆不欲。其卒也。至於四方風動。有路不拾遺之效。故欲令其下。則須要謹其所好。上實好節儉。則何憂下之不從。第二十五章

問。唐太宗言及禮樂。房杜有媿色者。何哉。曰。是知王道之難。而不知王道之易也。孟子曰。明君制民之產。必使仰足以事父母。俯足以畜妻子。樂歲終身飽。凶年免於死亡。然後驅而之

廉一。竊服二其忠厚一云。第二十一章

問。班固盛稱二文帝之儉一。古之王者。亦尙レ儉乎。曰。王道以レ儉爲レ本。蓋奢則不レ給。儉則有レ贏。可下以二我之有一レ餘。而拯中人之不上レ足。己苟不レ足。則安能補二人之不足一。傳稱。堯土階三尺。茅茨不レ剪。采椽不レ斲。雖二監門之食一不レ飽。雖レ未三必如二其言一。然由レ此可三以見二堯之儉德一。孔子曰。禹吾無二間然一矣。非二飮食一。而致二孝乎鬼神一。惡二衣服一。而致二美乎黻冕一。卑二宮室一。而盡二力乎溝洫一。古先聖王皆躬自務レ儉者。蓋植二養レ民之本一也。故王道以レ儉爲レ本。觀二文帝紀一。書レ賜二今年田租之半一者一。書レ除二田之租稅一者一。豈非下帝躬務二節儉一。不三輕用二天下之財一之驗上乎。於二斯時一。天下富庶。黎民乂安。延二長漢家四百年之國祚一。皆文帝務二節儉一之效也。第二十二章

問。文帝惜二百金之費一。不三敢作二露臺一。而文王則爲レ臺爲レ沼者。何哉。曰。先王築レ城造レ門。創二臺榭苑囿一之類。一以爲レ國。一以爲レ民。其爲レ國者。亦爲レ民而已。非下徒爲二遊觀一敢興作上也。魯人爲二長府一。閔子騫曰。仍二舊貫一如レ之何。何必改作。春秋一土木之興必書者。重二民力一也。夫廣堂大廈。起二於倉廩之積一。倉廩之積。出二於民之耒耜一。耒耜之微。積而爲二斗升之粟一。斗升之粟。積而充二于倉廩一。倉廩之積。溢爲二廣堂大廈一。人皆知三廣堂大廈之成。起二於倉廩一。而不レ知三本出二於耒耜之微一也。聶夷中詩曰。鋤レ禾日當レ午。汗滴禾下土。誰識盤中餐。粒粒皆辛苦。其非二爲レ國爲一レ民。而漫興作者。不レ知レ所三以固二邦本一也。若夫文王之爲二臺沼一者。與レ民同レ樂之至。庶民子來。不レ日成レ之。不レ可二槩而論一之也。第二十三章

既效矣。此近代之明效也。王道豈可レ行ニ于古一。而不レ可レ行ニ于今一耶。徵之學。未レ爲レ知ニ孟子一。然其言猶有ニ明效一如レ此。況不レ爲レ徵者乎。第十九章

問。濂溪先生曰。不レ復ニ古樂一。不レ變ニ今樂一。而欲レ至レ治者遠矣。然乎。曰。濂溪之言固也。然可レ用ニ之於王道既成之後一。而不レ可レ施下之於行ニ王道一之初上。蓋王者之於ニ天下一也。專在三與レ民同ニ憂樂一。而不下以レ辨ニ樂之今古一爲中先務上。苟與レ民同ニ憂樂一。則人心和平。風俗醇厚。而禮樂可レ興。於レ是作レ樂。以宣ニ八風之氣一。以平ニ天下之情一。蓋聖人但去ニ泰甚一。而其餘皆從レ時因レ俗。以爲レ治耳。不レ有レ意レ變レ之也。若欲三徒變ニ今之樂一。則禮樂未ニ必遽興一。而天下騷然矣。聖人豈爲レ之邪。第二十章

問。悔翁云。三代以前盡出ニ天理一。三代以後總是人欲。此語如何。曰。此非ニ仁人之言一也。仁者嫉レ俗之心少。故知ニ今之不レ遠ニ于古一。不仁者憤レ世之心勝。故知ニ今之不レ可ニ復古一。設レ心不レ同。趣向頓異。後世之不レ能レ無ニ君子一。猶ニ古之不レ能レ無ニ小人一也。豈可下獨以ニ三代以後一盡爲中人欲上乎。孔子曰。斯民也。三代之所ニ以直レ道而行一也。豈惟民哉。貴賤皆然。斑固贊ニ漢文帝一曰。即位三十年。宮室苑囿無レ所ニ增益一。有レ不レ便。輙弛以利レ民。嘗欲レ作ニ露臺一。召レ匠計レ之。直百金。上曰。百金中人十家之產也。吾奉ニ先帝宮室一。嘗恐レ羞レ之。何以レ臺爲。身衣ニ弋綈一。所レ幸愼夫人。衣不レ曳レ地。帷帳無ニ文繡一。以示ニ敦朴一。爲ニ天下先一。斑史紀ニ其仁政善行一者。不レ可ニ勝數一焉。豫可レ不レ謂ニ之王者一乎。凡人之行。其大者不レ詭ニ乎道一。則其瑣瑣者。置而勿レ論可矣。傳曰。孔子見ニ人一是一。忘ニ其百非一。儒者以三其好ニ黃老之言一。而不レ論ニ列之一。奚服レ善之淺。而責レ備之深邪。亦異ニ乎夫子之心一矣、吾雖レ未三必左ニ祖河汾永

中一。此伊尹之以二天職一爲二己之任一也。民至賤也。王至貴也。然以二民之父母一爲二王者之美稱一。何哉。夫子之於二父母一。後二其身一而先二其父母一。捨二其身一以保二其父母一。死生患難。惟其父母之愛護。王者樂二天下之樂一。憂二天下之憂一。以レ民爲二其赤子一。故民亦親二戴其上一。猶二其父母一。響應影從。唯其所レ欲。而天下無二可レ敵之憾一。四方無二可レ禦之寇一。東面征西夷怨。南面征北狄怨。書曰。徯二吾后一。后來其蘇。以二民之父母一爲二王者之美稱一。不二亦宜一乎。第十八章

問。後世恐難レ行二王道一。曰。子爲下不二井田一不二封建一。則不上可レ行二王道一乎。將爲下悉除二後世之法一。以復中三代之舊上乎。曰然。非邪。曰非也。王道豈在二法度上一乎。所レ謂王道者。以二不レ忍レ人之心一。行二不レ忍レ人之政一而已。何難之有。若使三聖人生二于今世一。亦必因二今之俗一。用二今之法一。而君子豹變。小人革レ面。天下自治矣。孟子當二戰國之擾擾一。勸二齊梁之庸主一。豈以二不レ可レ行之時一。勸二不レ可レ行之道一乎。苟有二其人一。則雖二戰國一。猶可レ行レ之。況不レ爲二戰國一之時乎。雖二齊宣梁惠一。猶可二能行一之。況不レ爲二齊宣梁惠一之君乎。唐太宗之初卽レ位也。嘗與二羣臣一語及二敎化一。上曰。今承二大亂之後一。恐斯民未レ易レ化也。魏徵對曰不レ然。久安之民驕逸。驕逸則難レ敎。經レ亂之民愁苦。愁苦則易レ化。譬猶二饑者易レ爲レ食。渇者易レ爲レ飮也。上深然レ之。封德彝非レ之曰。魏徵書生。未レ識二時務一。若信二其虛論一。必敗二國家一。徵曰。五帝三王。不レ易レ民而化。行二帝道一而帝。行二王道一而王。顧二所レ行如何一耳。上卒從二徵言一。貞觀元年關中饑。米斗直絹一疋。二年天下蝗。三年大水。上勤而撫レ之。是歲天下大稔。米斗不レ過二三四錢一。終歲斷二死刑一二十九人。外戶不レ閉。行旅不レ齎レ糧。帝謂二群臣一曰。此徵勸レ我行二仁義一。

則不レ然。民之所レ欲。與レ之聚レ之。所レ惡勿レ施。己欲レ立而立レ人。己欲レ達而達レ人。己好レ色則推二斯心一以及レ民。己好レ貨。則推二斯心一以及レ民。其心何等公平。何等寬仁。實天地之心。故先王置二媒氏一。以合二民之男女一。內無二怨女一。外無二曠夫一。又深嫉二聚斂之臣一。掊克在レ位。則有レ譏。故與レ民同二好惡一。則好レ色好レ貨。皆爲二王道一。亦奚疑。第十六章

問。宋孝宗召二朱熹一。或有下要二之於路一。以三正心誠意爲二上所一レ厭レ聞。戒以レ勿レ言者上。晦翁曰　吾平生學問。只在二正心誠意一。豈可三回互而欺二吾君一乎。如何。曰。愚謂其說固善。然在二學者一則可。非レ所三以告二于人君一也。如二學者一。固不レ可レ不三以レ此自修一。在二人君一。則當下以三與レ民同二好惡一爲上レ本。其徒知二正心誠意一。而不レ能三與レ民同二好惡一。於二治道一何益。苟側レ身勵レ行。起居動息。以三與レ民同二好惡一爲レ志。則民志奮起。士氣雄壯。雖二南宋之脆弱一。可三以撻二北韃之勁兵一。觀下孟子所レ說二齊梁諸君一者上。可レ見矣。且如二庸暗之主一。豈能受二誠意正心之說一。而得レ從二事之一哉。正所レ謂欲二其人一。而閉二之門一也。明太祖以二迂濶一目レ之。不レ可レ謂二過論一。第十七章

問。如何是王者之德。曰。王二天下一。則爲二天下之天道一。君二一國一。則爲二一國之天道一。爲二一家之主一。則爲二一家之天道一。夫天無二私覆一。地無二私載一。日月無二私照一。雖二窮谷深澗牆陰屋下之地一。太陽之氣靡レ所レ不レ至。一鱗介一萠芽之微。莫レ不下稟二其氣一以生上。故古昔王者。法二天道一以爲レ德。所レ謂裁二成輔三相天地之道一。以左二右民一。是也。故其位曰二天位一。其職曰二天職一。書曰。天工人其代レ之。明百官有司。亦當下以二王者之心一爲上レ心也。伊尹曰。天下之民。匹夫匹婦。有下不レ與三被二堯舜之澤一者上。若三己推而內二之溝

所謂要言不煩。是也。若馬氏通考。丘氏衍義補。馮氏類編。章氏圖書編。其書皆數百卷。此其適所以不識王道也。大學治國平天下章。中庸哀公問政章。其言皆不過數百字。而王道之旨包括無遺。得其要也。孟子一部。其論王道。横說竪說。千變萬化。皆從一仁字紬繹來。可謂約而盡矣。非實知堯舜孔子之道者。豈能然乎。苟讀孟子。而不識王道。所謂雖多亦奚以爲者也。

第十四章

問。孟子之論王道。何篇最詳而明。曰。篇篇詳矣。章章精矣。初學以梁惠王篇爲勸時君而發。故見之以爲尋常說話。以告子盡心二篇爲精蘊處。不然。惠王一篇。反是孟子一生事業備矣。不可不熟翫焉。予故謂。此篇必是孟子之自著。自公孫丑篇以下。至離婁上篇。無一句非說王道。爾後初及種種議論。葢七篇各是一部書。苟得一篇熟讀翫味有得焉。則何憂其不識王道也。昔黃石公授張良一卷書曰。讀此可以爲王者師。余亦以爲熟讀孟子梁惠王一篇。可以爲帝者之師也。

第十五章

問。齊宣王曰寡人好貨。孟子對曰王如好貨。與百姓同之。於王何有。又曰寡人好色。則曰。王如好色。與百姓同之。於王何有。先儒以爲巽與之言。又以爲救時之論。然乎。曰不然。此卽王道也。孟子固曰。樂民之樂者。民亦樂其樂。憂民之憂者。民亦憂其憂。樂以天下。憂以天下。然而不王者。未之有也。觀夫自古以來人君好色好貨者。不顧人之怨。不察人之怒。奪民之婦女。掠民之貨寶。專悅己之耳目。而不能與民同好惡。禍門以開。怨府以成。而王者之心

可レ不レ懼乎。孟子曰。養レ心。莫レ善二於寡欲一。此中庸之極也。濂溪曰。養レ心不レ止二於寡欲一。寡レ之又寡。以至二於無一。則誠立明通。較二之孟子之言一。則似二卻切緊一。然不レ免レ有二矯レ枉過レ直之病一。蓋古人以二禮義二者一。爲二萬事之規矩繩尺一。如二家常茶飯一然。以レ此飲食。以レ此被服。出入起居。不レ可二須臾離一也。書曰。以レ禮制レ心。以レ義制レ事。孔子曰。義以爲レ質。孟子曰。以レ禮存レ心。是也。夫苟以二禮義一制レ之。則曰情曰欲。卽是爲レ道。本非二可レ惡之物一。若不下以二禮義一制上レ之。而徒欲二功夫切緊一。則必不レ至二滅レ情無欲一。則不レ止。是近世理學諸家所二以不下能レ不上自流入二于禪莊一也。子以二王道一爲レ不二切緊一。亦俗見焉耳。第十二章

問。聖門之學。以二王道一爲レ本。其意如何。曰。子能識下聖人之學與二佛老之學一所二由而分一如何上。則自知レ之矣。聖人從二天下上一見レ道。佛老就二一身上一求レ道。就二一身上一求レ道。故不レ顧二天下之從否一。專要三清淨無欲。以成二就一己之安一。卒至下於棄二人倫一廢中禮樂上。此所三以爲二異端一也。聖人從二天下上一見レ道。故就三天下之所二同然一而見レ道。不レ欲下離二乎天下一。而獨善中其身上。故其學爲二經世一。其道爲二達道一。其敎爲二仁義忠信一。其言曰。吾非二斯人之徒與一。而誰與。天下有レ道。丘不二與易一也。其修レ己立レ德。將三以安二天下之人一。故不下以二天下之所一不レ能而强上レ人。亦不下以二天下之所一不レ從而爲上レ敎。所三以爲二王道一也。故讀二聖人之書一。必有二字眼一。天下二字。是聖人書中字眼。凡讀二孔孟之書一。遇下有二天下二字一處上。必須二著レ眼看一。勿二艸艸一。第十三章

問。近時諸儒。經濟之書。亦足三以發二明王道一歟。曰。知二其要一者。言必約。其言多者。必不レ知レ要。

問。然則。王道不レ戒レ欲歟。曰否。書曰。以レ禮制レ心。以レ義制レ事。孟子曰。君子以レ仁存レ心。以レ禮存レ心。苟有二禮義以裁一レ之。則情卽是道。欲卽是義。何惡之有。苟無二禮義以裁一レ之。而特欲三斷レ愛滅レ欲。則是矯レ枉過レ直。藹然至情一齊絶滅。將下亡二形骸一塞二耳目一而後止上。此非二人人之所一レ能爲一。而非二通天下之道一。故聖人不レ爲也。大凡無レ補二於天下國家之治一。無レ裨二於人倫日用之道一者。皆謂二之邪說暴行一。若二佛老之學。後世禪儒高遠隱微之說一。是已。第十章

問。王道之學。固大矣。而非二今日儒者之先務一。曰否。儒者之於二王道一。猶二孫吳之於レ兵。盧扁之於一レ醫。蓋專門之業也。學問以二王道一爲レ本。故中庸曰。仲尼祖二述堯舜一。憲二章文武一。蓋孔子之學。卽堯舜文武之道。孟子之說。卽孔子之學。皆堯舜文武治二天下一之道。外レ此而豈有二所レ謂學問者一邪。蓋非下以二王道一爲レ主而行上レ之。修レ己治レ人萬般功夫。皆由二王道一而出。故孔子曰。君子修レ己以安二百姓一。又曰。一日克レ己復レ禮。天下歸レ仁。凡存心養性。忠信篤敬。條目雖レ多。皆莫レ不下以二王道一爲上レ本。而乃以レ仁爲レ要。其獨善二其身一。豈聖人之本心也哉。後世儒者雖レ說二王道一。其實專以二心法一爲レ務。故不レ能レ不三流二入于異端一。子以二此意一觀二論孟一。頭頭相合。句句關湊。聖人微意之所レ在。註脚之所レ不レ能レ悉。了了分明。自無二遺漏一。第十一章

問。承聖門之學。以二王道一爲レ本。然於二受用功夫一。頗似レ不二切緊一。如何。曰。莫レ問二切緊與一レ不二切緊一。惟看二合レ道與一レ否如何。其功夫不二切緊一者。固不レ足レ云。然凡稱二切緊一者。必至レ矯レ枉過レ直。能免二此兩者一。乃學問難中之難也。然其不二切緊一者。其病卻淺。至二矯レ枉過一レ直。則沈痾痼疾。無二藥可一レ醫。

問。孟子以二仁義一爲二宗旨一。而又屢談二王道一者。何哉。曰。王道卽仁義。非三仁義之外復有二王道一也。孟子曰。以レ德行レ仁者王。又曰。仁者無レ敵。又曰。先王有二不レ忍レ人之心一。斯有二不レ忍レ人之政一矣。以二不レ忍レ人之心一。行二不レ忍レ人之政一。治二天下一可レ運二之掌上一。是也。王道雖二固不一レ出二仁義兩者一。然約而論レ之。則一仁字盡レ之矣。荀子所レ謂粹而王。駁而霸。及諸儒有下盡二天理之極一。而無二一毫人欲之私一等論上。皆議論可レ聞。而非下實知二王道一者上也。不三善讀二孟子一故也。第八章

問。先儒論二王道一。必曰盡二天理之極一。而無二一毫人欲之私一。此語甚善。無レ可二以加一焉。何故不下與二王道一相稱上。曰。聖人之治二天下一也。以二天下大同之道一。治二天下大同之人一。建二大中之道一。而不レ爲二過高之行一。故中庸曰。君子以レ人治レ人。改而止。蓋盡二天理之極一。非二人人之所一レ能。無二一毫人欲之私一。亦非下具二形骸一有二人情一者之所中能爲上。聖人不三以レ此自治一。亦不三以レ此强二人。由二仁義一行。非レ行二仁義一也。孟子曰。先王有二不レ忍レ人之心一。斯有二不レ忍レ人之政一。又曰。文王視レ民如レ傷。聖賢之論二王道一。如レ此。未レ聞丙以下盡二天理之極一。而無中一毫人欲之私上爲乙王通甲也。蓋無二一毫人欲之私一。卽所三以盡二天理之極一。而盡二天理之極一。便所三以無二一毫人欲之私一也。少林曹溪之徒可三以當二之。而若二吾聖人一。則不レ以レ此爲レ道。故不レ可三以レ此論二王道一也。宋儒之意必謂。達磨慧能所三以不レ免レ爲二異端一者。以三其棄二人倫一也。若使三彼不レ棄二人倫一。則於下盡二天理之極一。而無中一毫人欲之私上。殆無二餘功一也。吁使二達磨壽能能不レ棄二人倫一。亦惟是達磨慧能焉耳。與二聖人之心一。固天地懸隔。然則。盡二天理之極一。而無二一毫人欲之私一之所下以不中與二王道一相稱上者。可二從而知一矣。第九章

問。仁義爲孔孟學問之宗旨者。何哉。曰。孟子之書。述論語之旨者也。而仁義二字。是開卷第一義。七編之書。言言句句。莫非說仁義之功也。其言性善者。明仁義之實有於己也。言浩然之氣者。論仁義之功用也。千言萬語雖至多端。莫不總括於仁義二字。自親親充之。而至朋友鄕黨所識疎薄之人。慈愛之心。周遍浹洽。無所不底。而無一毫殘忍忮害之念者。謂之仁。自一取舍間充之。而辨別分明。苟非其義。則祿之以天下。而不顧者。謂之義。他卓行偉績。雖有可取。然少於仁有闕焉。則皆不足爲德。於義有欠。亦不足稱之。智者。知斯二者而不去。是也。禮者。節文斯二者。是也。皆仁之推也。仁義之所以爲孔孟學問之宗旨者。以此也。第六章

問。孟子何專主仁義。而於智或有惡之乎。曰。凡過高過深。好大喜難。索隱行怪。邪說暴行。不可與入堯舜之道者。皆過用智故也。莊子三十三篇。大藏五千函。其他諸子百家。舉皆爲一智字之所誤。豈非可畏之甚耶。孔子曰。知之爲知之。不知爲不知。是知也。又曰。君子於其所不知。蓋闕如也。孟子亦曰。堯舜之智。不徧物。急先務也。此所謂禹之行水也。行其所無事也。孟子嘗論伯夷伊尹柳下惠之所以與孔子不同曰。智譬則巧也。聖譬則力也。由射於百步之外也。其至爾力也。其中非爾力也。又曰。如智者亦行其所無事。則智亦大矣。孟子亦豈廢智乎。其所惡於智者。爲其鑿也。孔子亦曰。好知不好學。其蔽也蕩。然則。君子之用智。其所取捨。可知矣。第七章

萬世學問之規矩準繩。所レ謂至當歸レ一。精義無レ二者也。蓋唐虞之時。敎法未レ詳。其所レ行莫レ非二仁義一。而未レ有二仁義之目一。故曰。允執二其中一。及レ至二孔孟一。專以二仁義一爲レ敎。而以レ禮爲レ要。中猶二無星之秤一。禮猶二秤之量上レ物。中有二泛然難レ據之患一。而禮有二秩然可レ執之則一。禮雖下本由二仁義一而生上。又有下能存二仁義一之功上。所以夫子常以レ禮敎レ人。而不レ言レ中也。 第三章

問。程子以二中庸一爲二孔門傳授心法一。如何。曰。中庸之名肇見二於論語一。謂下無二過不及一而平常可レ行之道上耳。與二單言一レ中。其義自別。中庸之書。卽論語之衍義也。專爲二孔門心法一者。非也。曾子曰。夫子之道。忠恕而已矣。顏淵問レ仁。子曰。克レ己復レ禮爲レ仁。子貢曰。仁且智。夫子既聖。斯之謂二孔門傳授心法一。皆莫レ非二仁義之旨一。未レ聞三以レ中爲二傳授心法一也。 第四章

問。中庸章句序曰。堯舜以來聖聖相承。若二成湯文武之爲一レ君。皐陶伊傳周召之爲レ臣。皆以レ中而接二道統之傳一。如何。曰。考二之典謨訓誥一。羣聖人之言及二于中一者無レ幾。論語堯曰。咨汝舜。天之曆數在二爾躬一。允執二其中一。四海困窮。天祿永終。舜亦以命レ禹。據レ此。則堯之命レ舜。舜之命レ禹。擧二此二十二字一爲レ言。而非乙以下允執二其中一一句上命甲レ之。可レ知矣。曆數者。所三以紀二歲時氣節之序一。言代二天工一而平二治天下一。則舜即天道也。故曰在二爾躬一。此語反是要言甚重。且孟子歷二叙舜禹成湯文武周公之事一。唯於レ湯特曰レ執レ中。而不レ繫二之於數聖人一。雖二三代聖人一。夫子特祖二述堯舜一。而孟子於レ舜首曰下由二仁義一行。非上レ行二仁義一也。則仁義之旨。不レ待二孔子一。而既明矣。然則。非三以レ中爲二堯舜以來相傳之心法一。益明矣。 第五章

童子問卷之中

洛陽 伊藤維楨 著

凡七十七章

問。承レ喩。論語爲二宇宙第一書一。而仁爲二孔門第一字一。然若二大學一。以レ敬爲レ要。中庸以レ誠爲レ主。及詩之思無邪。書之中。易之時。一書各有二一書綱領一。如何。曰。人道之有二仁義一。猶三天道之有二陰陽一也。外二仁義一。豈復有レ道邪。而仁之包レ義。猶二陽之統一レ陰。故孔門以レ仁爲レ宗。而以レ義爲レ輔。敬者敬レ此也。誠者誠レ此也。詩之思無邪。書之中。易之時。皆然。道本無二多端一。故曰。吾道一以貫レ之。第一章

問。吾聞中也者。堯舜以來相傳心法。以レ此聖聖相承。今專主二張仁義一者。何哉。曰。仁義卽中也。兼愛爲我。失二之過一。非二仁義一。煦煦孑孑。失二之不及一。亦非二仁義一。所レ謂仁義者。乃言下其無二過不及一者上耳。故周子曰。仁義中正而已矣。其專以レ中爲二傳授心法一。而不下以二仁義一爲中孔孟之宗旨上者。蓋不二深考一耳。中之理虛。而仁義之德實。第二章

問。然則。仁義重二於中一歟。曰然。學問莫レ貴二於仁義一。而存二仁義一。莫レ要二於禮一。故論語言レ禮。而不レ言レ中。顏淵問レ仁。子曰。克レ己復レ禮爲レ仁。又曰。君子博學二於文一。約レ之以レ禮。亦可二以弗一レ畔矣夫。又曰。恭而無レ禮則勞。愼而無レ禮則葸。勇而無レ禮則亂。直而無レ禮則絞。是皆孔門敎レ人切要之言。

問。道者。仁義而已矣。曾子何以謂二夫子之道忠恕而已矣一乎。曰。仁義固道之全體。自不レ待レ論。夫子之道云者。謂二夫子之所一レ獨。猶レ曰二夫子之家法一也。子貢問。有下一言而可二以終レ身行上レ之者上乎。而夫子不レ曰レ仁不レ曰レ義。而特曰其恕乎。與二曾子之所一レ謂自同二其意一。蓋示二學者一以二其所レ易レ能之道一也。卽向所レ謂爲下所二强而能一之恕上則自得下不レ可二勉而爲一之仁上之謂也。忠者盡レ己之謂。其義易レ解。唯恕字義不二分曉一。字書曰。以レ己體レ人曰レ恕。體字甚好。深體二察人之心一。則自有二寛宥之意一生。不レ至二過爲一刻薄一。故恕又有二寛宥之義一。凡接レ人之間。深體二察之一。而有二寛宥之意一。則親疎遠近。貴賤大小。各得二其所一。而仁行義達。道莫レ不レ存矣。曾子以二忠恕一爲二夫子之道一。是也。若二良吏之斷一レ獄。其罪固當矣。然深體二察其心一。則猶有二多少可レ憐可レ宥之情一。況人之於レ過。其罪固有二可レ恕者一乎。故古人有二三赦三宥之法一。暗合二强恕之道一。或至二可レ怨可レ尤之事一。亦然。恕之不レ可レ不レ强。如レ此。第五十九章

童子問卷之上 畢

之昏昧放逸者一也。孟子又曰。充二無レ欲レ害レ人之心一。而仁不レ可二勝用一也。充下無二穿窬一之心上。而義不レ可二勝用一也。與丁宋儒知三專收二斂此心一。而不丙以二居レ仁由一レ義爲乙先務甲。實天淵矣。若專以レ收二斂此心一爲レ務焉。則清明寂靜。雖二或可一レ觀。然愛根斷喪。適足三以梏二仁義之良心一。是豈孔孟之旨乎哉。故以レ仁爲レ性。則論孟二書。總說二仁之用一。而一無二及レ體者一。與二退之之知レ情而不レ知レ性之病一。奚以異。不レ思甚也。第五十六章

問。南軒張子類二聚論語中言レ仁諸章一。爲二一編一。名曰二洙泗言仁錄一。當耶。曰不レ然。魯論二十篇。從レ頭至レ尾。無二一言之非一レ仁。南軒唯知二言レ仁處之爲一レ仁。而不レ知二不レ言レ仁處亦總是仁一。大傳固言。仁者見レ之謂二之仁一。智者見レ之謂二之智一。百姓日用而不レ知。故君子之道鮮矣。然仁者德之長。學至二於仁一。則衆德合湊。故子夏曰。博學而篤志。切問而近思。仁在二其中一矣。夫博學篤志。切問近思。皆學問之事。子夏何以言三仁在二其中一也。蓋仁者聖門學問之宗旨。而外レ仁無二所レ謂學問者一也。諸老先生皆依レ理解レ之。去二仁之義一益遠矣。第五十七章

問。孟子曰。强恕而行。求レ仁莫レ近焉。何謂。曰。所レ謂求云者。求二其所一レ無之謂。不レ可下作二至字一看上。仁不レ可二勉而爲一。恕可二强而能一レ之。仁者。非二有レ德者一不レ能。恕者。力行者能レ之。爲下其所二强而能一之恕上。則自得下不レ可二勉而爲一之仁上。爲二一件之恕一。則得二一件之仁一。爲二二件之恕一。則得二二件之仁一。顧在下其所二勉强一如何上耳。故曰。求レ仁莫レ近焉。仁自是仁。恕自是恕。不レ可三以レ恕作二至レ仁之功夫一。又不レ可レ爲レ有二生熟大小之辨一。第五十八章

梁上ニ書・天不レ生ニ孔子一萬古如ニ長夜一十大字上。終爲ニ千古之名言一。宜矣。第五十三章

問。有下雖レ不レ至レ成ニ仁之德一。亦可レ謂ニ之仁一者上乎。曰。雖ニ一事之微一。其愛出ニ於實心一。而利澤及ニ于人一。則亦可レ謂ニ之仁一也。非下徒可レ謂ニ之仁之功一而已上。第五十四章

問。韓子原道曰。博愛之謂レ仁。宋儒深非レ之。如何。曰。宋儒以レ仁爲レ性。愛爲レ情。故譏ニ韓子一謂。知レ情而不レ知レ性。夫博愛之未レ足レ爲レ仁者。正在ニ於生熟大小之間一。而非ニ性情之別一。若充レ之。而至ニ於熟且大一焉。則亦仁焉而已。韓子徒知ニ愛レ物之爲一レ仁。而不レ知ニ聖學之全體。萬善之總括。皆在ニ於仁一。然勝下於宋儒以レ仁爲レ性之徒爲ニ虛器一。而不レ能レ施ニ之於行事一。遠矣。第五十五章

問。以レ仁爲レ性。徒爲ニ虛器一。其意如何。曰。仁者。天下之美德。豈可下以ニ性情一分上之哉。若以ニ宋儒之說一論レ之。則性爲ニ未發一。情爲ニ已發一。性猶ニ水之在ニ地中一。情猶ニ發レ源之泉一。疏導澄治之功。渾可レ施ニ之於流出之後一。而於下其在ニ地中一之時上。則無レ可ニ奈レ之何一。以ニ仁義禮智一爲レ性。則猶下水之在ニ地中一。不上レ可レ施ニ疏導澄治之功一也。故後世學問。不ニ復要一レ存ニ養仁義一。而別立ニ一般宗旨一。曰ニ無欲主靜一。曰ニ明鏡止水一。專欲丙除下其蔽ニ仁義一之物上。以復乙其初甲。然則。仁義之德徒爲ニ虛器一。而不レ如ニ直曰レ滅レ欲之爲一レ愈也。孟子曰。仁人心也。義人路也。舍ニ其路一而弗レ由。放ニ其心一而不レ知レ求。學問之道無レ他。求ニ其放心一而已矣。集註曰。能求ニ放心一。則不レ違ニ於仁一。而義自在ニ其中一矣。其意以爲。仁之在レ心。猶ニ月之映一レ水。波定則影明。波搖則影亂。如レ此。則其功夫專在レ收ニ斂此心一。而居レ仁由レ義之功廢矣。猶ニ月之隱見。繫レ水而不一レ繫レ月也。孟子所レ謂放心者。則不レ然。蓋言レ放ニ失仁義之良心一。而非レ言ニ此心

問。令尹子文陳文子何以不許仁。曰。二子若有管仲之志與才。亦當稱其仁。子文不爲身謀。告人以忠。文子能潔其身而去。皆足可觀焉。然無利澤及物之功。此其所以止於忠與淸也。

第五十章

問。朱子以謂。子文文子之不得爲仁。是不能當理而無私心。如何。曰。不然。藉令二子行事當理而無私心。亦只是忠與淸耳。若管仲雖未見其事全當理。而心果無私。然夫子稱其仁者。蓋以民受其賜也。以當理而無私心解仁。是所謂不得其說。從而爲之辭者。而去仁之義益遠矣。若如其說。則不唯不得爲仁。而亦且不得爲忠淸矣。第五十一章

問。聖人之仁與管仲之仁。是同是不同。曰同。堯舜之仁。猶大海之水汪汪洋洋不可涯涘也。管仲之仁。猶數尺井泉雖不足觀。然遇旱歲則亦可以資灌漑之利。雖有大小之差。豈謂之非水而可乎。至於子文文子。則猶瓶罌之水。雖極力負擔。不過數斗之多。其用有限。不足謂之水也。第五十二章

問孔子之仁。曰。夫子稱管仲之仁曰。民到于今受其賜。微管仲。吾其被髮左衽矣。若夫子之仁。實與天地準。度越管仲。奚翅億萬。由夫子到于今。殆二千有餘歲。四海九州。人皆善善而惡惡。君臣父子夫婦昆弟朋友之交。各得敍其倫。而不爲左衽之俗者。悉夫子之賜也。人皆在於夫子之敎之中。而不知夫子之敎之大。猶人囿于天地之內。而不知天地之爲大也。微夫子。藉令人不皆化爲鬼爲蜮。而三綱淪九法斁。天下不得其爲天下。於戯大矣哉。宋人見於一古刹

レ此也。第四十六章

問。管仲覇者之臣也。故孟子譏二其不下知二王道一。而夫子許二其仁一者。何也。曰。仁之成德。其利澤恩惠。足三遠被二于天下後世一。而極矣。堯典曰。光二被四表一。格二于上下一。堯之仁也。詩曰。於戲前王不レ忘。文武之仁也。若二管仲之志之才一。甚大矣。其志不レ在下於區區修二政事一善二齊國一之間上。將下以振二頽綱一拯二生民一。而貽中利澤於後世上。其才亦稱レ之。故夫子曰。管仲相二桓公一覇二諸侯一。一匡二天下一。民到二于今一受二其賜一。微二管仲一。吾其被レ髮左レ衽矣。又曰。桓公九三合諸侯一。不レ以二兵車一。管仲之力也。如二其仁一。如二其仁一。集註謂。未レ爲二仁人一。而有二仁之功一。其意蓋不二以レ此爲下仁。而徒爲レ有二仁之功一。然子路曰。未レ仁乎。子貢曰。管仲非二仁者一與。夫子一答以下如二其仁一如中其仁上。一答以下民到二于今一受中其賜上。是直以レ仁許レ之也。子當二以レ意理會一。第四十七章

問。夫子何不三以レ仁許二子路冉有公西華一。曰。慈愛惻怛之心。頃刻不レ離。無二一毫殘忍刻薄之心一。正是仁。三子雖二高第弟子一。然難レ保二其始終不下變。此夫子所三以不下許レ仁也。第四十八章

問。管仲何以不レ得レ爲二王佐之才一。曰。有レ志有レ才有レ學。而後可三以行二王道一。無二其志一。則不レ能下以二天下一爲中己任上。無二其才一。則不レ能レ斡二旋大事一。無二其學一。則雖下有二其志一有中其才上。然在二區區功利之間一。而不レ能レ濟二大道一。此管仲之所三以止下爲二管仲一也。若使三管仲知二湯武之道一。便是伊呂之儔。予嘗序二魯齋先生心法一曰。有二實學一而後有二實德一。有二實德一則實材隨焉。是也。管仲雖レ有レ材。而不レ足レ爲二實材一者。爲二其無下學也。第四十九章

之一年成レ聚。二年成レ邑。三年成レ都。成湯東面而征西夷怨。南面而征北狄怨。是仁之効也。不仁者反レ之。殘忍忮害。衆叛親離。不レ至二死亡一。則不レ止。故仁者。道德之大本。學問之極致。天下之善。莫レ過二於此一。童子曰諾。第四十四章

問。仁畢竟止二於愛一歟。曰。畢竟止二於愛一。愛實德也。非レ愛則無三以見二其德一也。苟有二一毫殘忍刻薄忮害之心一。則不レ得レ爲レ仁。故學至二於仁一。便爲二實德一。種種善行。皆其推也。仁之德。其餘波溥哉。第四十五章

問。孔孟論レ仁。似レ有乙不下與二愛字一相干涉上者甲。如何。曰。一愛之所レ到。衆善自生。故曰。惻隱之心。仁之端也。猶下原泉之混混。雖二爲レ洄爲レ洑爲レ淵爲一レ湍。奇態萬千不レ可二名狀一。皆一水之流派上也。蓋仁者。以レ愛爲レ心。故其心自平。其心自平。故寬裕容レ物。寬裕容レ物。故從容不レ迫。從容不レ迫。故樂而不レ憂。樂而不レ憂。故泰然自安。泰然自安。則無二施不一レ可。無二行不一レ得。此仁道脈絡相因之序。不レ可下以二一德一名上レ之。不仁者反レ之。觀三夫子答二諸弟子一問レ孝便以二孝之道一答レ之。問レ智便以二智之方一答レ之。至三於論レ仁及答二問仁一。特擧二仁者模樣一而告レ之。所レ謂仁者己欲レ立而立レ人。及仁者先レ難而後レ獲。是已。蓋以二仁之成德一。不レ可下以二一德一盡上レ之也。孟子以二惻隱之心一爲二仁之端一。而又曰。人皆有レ所レ不レ忍。達二之於其所一レ忍。仁也。又曰。充二無レ欲レ害レ人之心一。而仁不レ可二勝用一也。此孟子論二仁之本旨一也。而仁者如レ射等語。雖レ如乙不下與二愛字一干涉上者甲。然推二究立言之本旨一。則皆莫レ不下以レ愛爲中本焉上。苟以二孔孟之語一參考併照。則可レ知矣。向謂レ不レ可下以二論語字面一解上レ之者。正爲

爲家常茶飯、而無敢疑其義者、故論語一書。皆言修仁之方、而無言仁之義者、諸子之所問。夫子之所答。皆是也。若欲明其義者。當自孟子入、孟子曰。惻隱之心。仁之端也、人之有是四端也。猶其有四躰也。知皆擴而充之矣。若火之始然。泉之始達、苟能充之。足以保四海、又曰。人皆有所不忍。達之於其所忍。仁也。子能熟讀此二章、當自理會其理、於孔孟所謂仁者、明白分曉。無復可疑。吾故曰、孟子之書、論語之義疏也。按古注疏曰。端本也始也。四端之心。生來具足。猶其有四躰、擴充云者。即達之之謂也。便擴充惻隱之心、而無所不至、正是仁。所謂足保四海者。即言擴充四端之心、以成仁義禮智之德、蓋以非仁義禮智之德、則不足以保四海也。 第四十二章

問。仁之成德。亦可得而聞之乎。曰可矣。慈愛之心。渾淪通徹、從內及外、無所不至。無所不達。而無一毫殘忍刻薄之心、正謂之仁、存於此、而不行於彼、非仁也。施於一人、而不及於十人、非仁也。存乎瞬息、通乎夢寐、心不離愛。愛全於心、打成一片、正是仁。故德莫大於愛人。莫不善於忮物。孔門以仁爲學問宗旨、蓋爲此也。 第四十三章

問。德莫大於愛人。故孔門以仁爲學問之宗旨、願終其說、曰。仁之爲德。豈可以言盡口悉乎。王天下、則及于天下、君一國、則及于一國、主一家、則及于一家、爲父則及于其子、爲夫則及于其妻、爲兄則及于其弟、爲弟則及于其兄、以此治身。則身修矣。以此處事。則事成矣。我能愛人。人亦愛我。相親相愛。如父母之親、如兄弟之睦、無行而不得。無事而不成。如舜

許以上レ仁。而求レ之不レ得。別生二意見一以レ仁爲二天理之公一。爲三當レ理而無二私心一之類。議論紛紛。不レ堪二其多一。而去レ仁彌遠矣。吾故曰。佛老之所下以與二吾儒一異上者。多在二於義一。而後儒之所下以與二聖人一殊上者。專在二於仁一。此仁之所二以難一レ識也。第四十章

問。竊聞學問以レ知爲レ先。而今謂窮理之說。於レ求レ仁頗有レ妨。豈無レ悖二於理一乎。曰。讀レ書窮レ理。自是孔門之常法。不レ可レ謂二不是一。但最初入門之初。先欲下讀二盡天下之書一。窮中盡天下之理上。非二聖人之學一也。何者。苟以二窮理一爲レ先。則雖レ不下以二德行一爲上レ後。然德行自不レ得レ不レ在レ後也。是所下以於二學問一有上レ害也。宋儒之說曰。天下無二性外之物一。又曰。性即理也。然不レ能下以二一理一斷中天下之事上。蓋物有二好惡一。事有二緩急一。紛紛藉藉。出入隱顯。不レ可二盡以レ理決一レ之。故曰。君子於二其所一レ不レ知。蓋闕如也。苟以二德行一爲レ本。則智至道明。而事之是非得失。了了分明。不レ待二思索一。自能中二其肯綮一。若不レ如レ此。而欲二專以レ理斷一レ之。則其說愈長。而去レ實愈遠矣。若三程朱論二天道一。專以レ理斷レ之。可レ謂殺二郤天道一也。其於レ仁。亦然。故其理甚微。而去レ仁愈遠。曰。觀二雞雛一。此可レ觀レ仁。又曰。切レ脈最可レ躰レ仁。或曰。將二聖賢言レ仁處一。類聚觀レ之。是也。夫仁者實德也。非レ可二以レ理得一レ之。孔子曰。仁者愛レ人。孟子曰。人皆有レ所レ不レ忍。達二之於其所一レ忍仁也。孔孟之說。豈不二甚近且易一レ知乎。苟以レ理求レ仁。愈遠而愈難レ知也。第四十一章

問。孔孟所レ謂仁者。其旨果如何。曰。仁者。人道之大本。衆善之總要。人道之有二仁義一。猶三天道之有二陰陽一也。故曰。仁人之安宅也。義人之正路也。兩者不二相離一。而以レ仁爲レ要。故孔門諸子。以レ仁

捨不失。義之功也。忠信者。萬事之根本。義者。學問之大用。故學者當以忠信爲基。而義以制之也。故曰。主忠信。從義崇德也。夫子亦嘗曰。十室之邑。必有忠信如丘者焉。不如丘之好學也。言忠信固爲美德。然不學以成之。則不足爲善。此亦學者之所當殫慮也。第三十八章

問。仁爲聖門第一字者。其旨如何。曰。仁之爲德。大矣。然一言以蔽之。曰愛而已矣。在君臣謂之義。父子謂之親。夫婦謂之別。兄弟謂之叙。朋友謂之信。皆自愛而出。蓋愛出於實心。故此五者自愛而出。則爲實。不自愛而出。則僞而已。故君子莫大於慈愛之德。莫戚於殘忍刻薄之心。孔門以仁爲德之長。蓋爲此也。此仁之所以爲聖門第一字也。苟非知德者。不能識之。亦不能信之。必視以爲泛然無緊要。而不知珍重信受。每從別路去。或高談性命。或耽樂虛靜。或以仁爲理爲性爲知覺。而不知施之於日用。故夫子罕言仁者。蓋以驟告不知德者。即不惟不知其理。必有弊也。不可不慮焉。子惟務主忠信。熟讀論孟。以求實德爲心。久之自當理會。謹勿蹈故轍。第三十九章

問。仁之所以難識者。何也。曰。得仁固難。於識仁之理。則何難之有。但以學者失其方。自難識焉耳。蓋古人之學。專以德行爲本。後人之學。先以窮理爲主。是仁之所以難識也。夫仁主愛。而德莫大於愛人。若先以窮理爲主。則唯理是求。翫心高遠。殫力精微。遂以愛爲仁之用。爲柔弱。爲淺近。爲日用之常行。而有輕賤之之意。以爲向上一路。不在於此。持論太高。求道甚遠。且見夫子雖高第弟子仲由冉有公西華及當時賢士大夫令尹子文陳文子之流。皆不

對。言學者不可不專以忠信爲主也。苟主忠信。則其言動制行。雖平淡無味。然內實有可取焉。專持敬者。特事矜持。外面齊整。故見之。則儼然儒者矣。然察於其內。則誠意或不給。守己甚堅。責人甚深。種種病痛故在。其弊有不可勝言者焉。故不如主忠信之功夫爲切實也。第三十六章

問。主忠信。則不要用敬乎。曰否。夫子曰。言忠信行篤敬。又曰。居處恭。執事敬。與人忠。敬者亦聖學用功之一事。具有成訓。那可廢乎。蓋聖人之敎人。其工夫條目。固非一端。衆功兼擧。而後得能成其德。猶醫之療疾。藥有君臣佐使。方有七方十劑。衆藥兼該。而後可以差病也。故或曰。知仁勇。或曰。忠信篤敬。或曰。恭寬信敏惠。或曰。主忠信。徒義。因事設敎。對人示方。豈可徒守一事。而得成德乎哉。然其於忠信。猶藥中之有甘艸。不可得而闕焉。雖有許多功夫。然不可不以此爲之主焉耳。宋儒所謂持敬云者。與古人就事致敬者。其意既異。而亦不要以忠信爲主。而卻徒欲以一敬字該學問之始終。猶欲以單方治百病。其不誤人者。未之有也。第三十七章

問。忠信固爲美德。然好信不好學。其蔽也賊。則又未必無蔽。曰然。語曰。信近於義。言可復也。孟子曰。大人者。言不必信。行不必果。唯義所在。蓋徒好信。而不合於義。必害於道。然十分通徹。必忠必信。而後可以爲此言。若內不盡忠信。有少疎漏。則先併義而失之。何學問之有。蓋接物之間。不欺不詐。十分眞實。堅執不囘。忠信之謂也。千變萬化。臨機制宜。取

者。皆拯壞證之權劑。而非治病之的方。直考諸古人之正方。可也。第三十二章

童子曰。敢問古人之正方。曰。吾向云。子欲知予之意。讀論孟二書。足矣。非徒治病之的方。保養調理之術。亦悉備矣。今非止知得者少。記取者亦鮮矣。子苟熟讀諷味。當忻然有會于心。則猶無物之地。忽然有物。昨日所旣讀。今日又如始讀。言言新矣。句句新矣。與初所見者。其意味深淺。敻然自別。勉哉。第三十三章

問。平生雖熟讀論孟。然未得其要領。願詳見敎。曰。可矣。聖門學問第一字。是仁。義以爲配。禮以爲輔。忠信以爲之地。仁之與義。猶陰之與陽也。故曰。義以爲配。言相離不得也。禮者。防閑之所在。故曰。禮以爲輔。言非禮。則無以存仁也。盡己之謂忠。以實之謂信。乃學問之基本。故曰。忠信以爲之地。猶造屋之有基址也。是其總要也。皆所以成夫仁之德也。第三十四章

問。先生旣以仁爲聖門第一字。而又以忠信爲行仁之地。何哉。曰。有子曰。孝弟也者。其爲仁之本與。孔子曰。主忠信。夫孝弟者順德。忠信者實心。人若不忠信。則名雖爲孝。實非孝。名雖爲忠。實非忠。雖禮儀三百威儀三千。節文度數粲然可觀。皆虛文末節。要不足觀焉。如觀剪勝華樹。雖足悅目。本非眞。奚足以爲貴。故曰。不誠無物。忠信爲行仁之地。不亦宜乎。第三十五章

問。宋儒以敬爲主。今以忠信爲主。何哉。曰。學問全在誠實。故曰。主忠信。主字與賓字

問。子夏曰。雖レ曰レ未レ學。吾必謂二之學一矣。吳氏曰。詞氣之間。抑揚太過。其流之弊。將三或至二於廢一レ學。先生所レ說。亦與二子夏一同二其弊一。豈非三矯レ枉過レ直者一耶。曰。子何輕二子夏一之甚耶。夫子夏孔門之高第。親二炙聖人一久矣。固當三深得二夫子之意一。而編二論語一者。亦非下眞知二孔門之學脈一者上。則不レ能。今其載二之於首篇第七章一。則豈徒然乎哉。蓋有二深意在一。且以二諸弟子之語一。與二夫子之言一同載。則其尊レ之。蓋亦亞二夫子一矣。今輕議レ之。則與レ侮二聖人之言一同レ罪。可レ不レ懼乎。自二宋人理性之學起一。諸儒自居太高。雖二孔門弟子子夏子張有若樊遲之徒一。皆有二蔑視之意一。從下晦翁取二吳說一入中之集註上。其論愈堅。其說愈定。卒爲二後來學者之深害一。矧文學易レ過。而德行難レ及。古今學者之通病。今又不レ勸二勉難レ及之德行一。而反欲レ增二益易レ過之文學一。詎異二乎以レ火添レ火。以レ泥和レ泥。詩曰。勿レ敎二猱升レ木。如二塗塗附一。第三十章

問。伊川先生云。聖人未二嘗言レ易以驕レ人。亦未三嘗言レ難以阻二人之進一。此語如何。曰。聖人之言語。皆循二其自然一。而未二嘗粃點一。亦未二嘗作弄一。若曰下未二嘗言一レ易。亦未中嘗言上レ難。則是聖人以二言語一簸二弄道一也。語曰。誰能出不レ由レ戶。何莫レ由二斯道一也。又曰。仁遠乎哉。我欲レ仁。斯仁至矣。又曰。未二之思一也。夫何遠之有。孟子曰。道在レ邇。而求二諸遠一。事在レ易。而求二諸難一。皆言二其近而易一也。學者苦二其難一レ入者。皆由レ不レ知二道之實處一也。第三十一章

問。先生說二論語之道理一。於二道不レ遠レ人之旨一。委曲詳悉。無二復餘蘊一。此外亦有二何所說一。曰。子觀二夫醫人之療レ病乎。前醫誤治。變爲二壞證一者。必先用二平劑一。而後審二其病因一。而施レ藥。今予之所三以告二子

而不惑。言聖人之道。求之於己。察之於人。考之於往古。推之於來世。徵之於天地鬼神。皆無所不合。至於山川艸木禽獸蟲魚蚑行喙息之微。無微而不合。無推而不通。天下之達道故也。若夫隱微之說高妙之理。視之而無所見。聽之而無所聞。求之於人倫風俗皆悖焉。可見天地間本來無此理。其實是實非斷而可知也。第二十八章

問。先生屢屢明道之易知易行。然今業儒者。者皆苦其難入者。何哉。曰。人之於學問。視之以爲一種至貴至高。出於流俗。遠於人情。甚高難行之事。此其所以苦難人也。夫聖人之設敎也。因人以立敎。而不立敎以驅人。無所造作。無所添飾。出於人心之所同然。而非有所强也。若夫孝弟忠信之人。天下皆以爲善。皆以爲美。而無敢譏者。此即是學。外此更無所謂學問者也。村畝野夫商販奴隸之賤。或有孝友廉直出於天性。士人之所不及者。或不由學問。而信義遜讓澹泊自治。慷慨赴義者。亦往往有之。此反是學問之基本。所謂學問者。充此而已矣。但其生質之美。雖曰可觀。然微而未著。小而未充。故聖人立敎設學。以敎人讀書學文。以著其微者。充其小者爾。然出於天下之所同然。而一毫無所增加于其間。故中庸曰。修道之謂敎。蓋生質之美雖善。然非擴而充之。則不足以成德。故曰。十室之邑。必有忠信如丘者焉。不如丘之好學也。道雖聖人。固有所不知不能。然其本。則夫婦之愚不肖所與知能行。而無難知難行者也。學者眞能識得此理。而後可以爲學也。可知向所謂至貴至高。出於流俗。遠於人情。甚高難行者之非道也。第二十九章

曰。語レ人而難レ知者。非ニ善敎一。導レ人而難レ從者。非ニ善道一。聖人之道。在ニ於君臣父子夫婦昆弟朋友之間一。而德不レ出ニ於仁義忠信之外一。通ニ于古今一。而無レ所レ變。準ニ乎四海一。而無レ所レ違。根ニ於人心一。徹ニ于風俗一。天子不レ能レ廢焉。聖人不レ能レ改焉。夫婦之愚不肖。皆可ニ能知一。皆可ニ能行一。故謂ニ之天下之達道德一。若ニ禪莊之理宋儒理性之學一。其理隱微而難レ知。其道高妙而難レ行。遠ニ於人事一。戾ニ於風俗一。推ニ之於人倫日用一。皆無レ所レ用。豈得レ謂ニ之天下之達道德一乎。大抵騖ニ于高遠一。而無レ益ニ于人倫一。無レ資ニ于日用一。無レ補ニ于天下國家之治一者。便孟子所謂邪說暴行。是已。其是非從而可レ知矣。第二十七章

問。先生說易レ知易レ行者是。而難レ知難レ行者非。安知難レ知難レ行者之眞是。而易レ知易レ行者之非レ是乞申論究。曰。中庸曰。道也者。不レ可ニ須臾離一也。可レ離非レ道也。道之眞是眞非。實判ニ於此一。不レ可ニ須臾離一者。堯舜孔子之道是已。若ニ佛老之道一。有レ之而無レ益ニ于天下一。無レ之而無レ損ニ于天下一。皆可ニ得而離一焉。豈足レ謂ニ之道一邪。老莊之說。盛ニ于戰國秦漢之際一。浮屠之法。後漢永平八年始來ニ于漢土一。唐虞三代之時皆無レ之。然天下泰平。黎民壽考。治皆及ニ數百年一。時不下以レ無ニ二氏一。而害中其治上也。秦皇漢武唐玄宗宋徽宗最信ニ道敎一。然政治日壞。國俗日瘵。佛法盛ニ于晉宋齊梁陳隋一。延及ニ唐宋一。六朝之間亂亡相尋。時不下以レ有ニ二氏一。而救中其亂上也。唐宋雖ニ頗小康一。本非レ關ニ佛法一。亦不レ足レ爲ニ太平一。則豈非下有レ之而無レ益ニ于天下一。無レ之而無上レ損ニ于天下一乎。若ニ堯舜孔子之道一。一日離レ之。則天下君臣父子夫婦昆弟朋友皆失ニ其所一。豈非下不レ可ニ須臾離一之道上乎。其眞是眞非亦判然矣。中庸曰。君子之道。本ニ諸身一。徵ニ諸庶民一。考ニ諸三王一而不レ謬。建ニ諸天地一而不レ悖。質ニ諸鬼神一而無レ疑。百世以俟ニ聖人一

所レ謂高遠者。非二世之所レ謂高遠一也。事之卑近。不レ過下親二其親一長二其長一。妻子好合兄弟旣翕之間上。而莫レ高二遠於天下平一矣。故愈卑近。則愈光明。猶下泰山之高。遠見二千里之外一。本起中於一撮土之積上也。故曰。博厚則高明。顏子得二一善一。則拳拳服膺。而弗レ失レ之。蓋一善甚微矣。然積而又積。積累不レ止。則足三以成二大德一。但衆人之心以爲。一善之微不レ足三以成二大德一。每忽焉而不レ務。惟顏子至聰明。故拳二拳於此一。而不レ失。此顏子所三以能至二於亞聖之地一也。猶丙世之起レ家累二巨萬一者。其初爭二錐刀之利一。直以二一錢一當二性命一。至二於其所レ息之多一。則雖レ以二天下之巧一。莫乙能布甲レ算。卑近之不レ可レ忽如レ此。知者鮮矣哉。第二十五章

問。顏子喟然歎曰。仰レ之彌高。鑽レ之彌堅。瞻レ之在レ前。忽焉在レ後。以レ此觀レ之。則夫子之道。亦甚高玅。不レ可レ謂二卑近一。曰。此說者之謬見。非二魯論之本旨一。顏子之歎。非レ歎二其高堅前後一也。及レ受二夫子之鑪錘一。悟二前日之非一。喜而歎レ之也。蓋顏子至聰明。其始見レ道甚高。徒見二其恍惚變幻不一レ可レ爲レ象。而未レ見二其實處一。故曰。彌高彌堅。在レ前在レ後。是可レ觀下其無レ所二模擬一。而欄柄未ダ入レ手。曁レ聞二博文約禮之敎一。而始知二夫子之善誘一レ入。學初就二平實一。得レ至二欲レ罷不レ能之地一。故喜而歎レ之。故首發二高堅前後之言一。次言二夫子循循然善誘一レ人。終言二欲レ從レ之末レ由也已一。其次第自可レ見矣。蓋博文約禮。即下學之事。亦非二卑近一而何。故知二實德一。而後能知二卑近之可一レ尙。知二卑近之可一レ尙。而後自識二論語之玅一。難矣哉艱矣哉。第二十六章

問。禪莊宋儒之談レ道。以二遠者大者一爲レ極。今說道在二於近一。而不レ在レ遠。願明三其是非之所三以然一。

遠ニ日用一而廢中人倫上。甚不可也。今夫飲食衣服非ニ外物一乎。然不レ服ニ飲食一。不レ御ニ衣服一。枵腹裸體而居。不ニ五日十日一而必隕ニ軀命一。且藥物如ニ人參黃芪之類一。多產ニ于外國一。若以ニ其外物一。而不レ用レ之。死亡立至。外物之不レ可レ惡也如レ此。儒者或以下錙ニ銖軒冕一塵中芥富貴上爲レ高。世間亦以ニ超然遐擧蔑ニ視人事一爲レ至。皆不レ知レ道之甚也。若夫不レ辨ニ禮義一。而徒有下惡ニ外物一之心上。必爲ニ異端一。外物二字本出ニ莊子一。非ニ儒者之所一レ合レ用也。第二十三章

問。先生之談レ道固善矣。然得レ非ニ甚過卑一乎。曰。卑則自實。高則必虛。故學問無レ厭ニ卑近一。忽ニ卑近一者。非ニ識レ道者一也。道其如ニ大地一乎。天下莫レ卑ニ於地一。然人之所レ蹈。莫レ非レ地。無ニ離レ地而能立一。況載ニ華嶽一而不レ重。振ニ河海一而不レ洩。萬物載焉。則豈容下以ニ其居一レ卑而賤中之乎。惟天亦然。人惟知ニ蒼蒼之天一。而不レ知ニ目前皆是天一。天包ニ地外一。地在ニ天內一。地以上皆天也。左右前後亦皆天也。人囿ニ於兩間一而居。豈可レ謂レ遠乎。故知凡事皆當レ求ニ諸邇一。而不レ可レ求ニ于遠一。求ニ于遠一則不レ中矣。學者必自恥ニ其道之卑近一。敢爲ニ高論奇行一。以高レ世。或至ニ窮レ異以爲一レ神。援レ天以爲レ高。諸子百家異端之徒特甚。皆不レ知ニ實德一故也。苟不レ羞レ道ニ卑近二字一。則道可レ進學可レ明。而不レ至ニ於違レ道之遠一也。第二十四章

問。承ニ忽ニ卑近一者。非ニ識レ道者一。意思如何。曰。孟子曰。道在レ邇。而求ニ諸遠一。事在レ易。而求ニ諸難一。人人親ニ其親一長ニ其長一。而天下平。又曰。君子之言也。不レ下レ帶而道存。君子之守。修ニ其身一而天下平。中庸曰。君子之道辟。如ニ行レ遠必自一レ邇。辟如ニ登レ高必自一レ卑。言卑近之中。自有ニ高遠之理一也。而

レ限之物。其曰レ塞ニ于天地之間一者。亦謂三其養成之極。無ニ處而不一レ到。皆擴充之謂也。舊解以爲滿ニ本然之量一。非也。以ニ一升之水一入ニ一升之器一。以ニ一斗之水一入ニ一斗之器一。謂三之滿ニ本然之量一。孟子所レ謂擴充云者。謂ニ推廣充大之勢不一レ可ニ遏止一。非下滿ニ本然之量一之謂上也。舊解徒以レ理斷レ之。而不レ知ニ孟子之本旨一故也。第二十一章

問。學問果在ニ性之內一。在ニ性之外一。曰。內外一致。內以資レ外。外以養レ內。不レ可ニ相無一。譬猶ニ人之一體一。心思知慮內也。視聽動作外也。專貴ニ心思知慮一。而盡廢ニ視聽動作一。可乎。且若ニ生養之具一。自ニ飲食藥餌一。以至ニ於宮室衣服平生合レ用凡百器具一。皆靡レ不レ資ニ之於外一。豈獨至ニ學問一。而疑レ之乎。樹非レ土則不レ生。魚非レ水則不レ活。然由ニ樹與レ魚而見レ之。則土與レ水皆外也。然不レ得ニ須臾離一也。人之學問。生養之具。何物不レ資ニ之於外一。設若以ニ其外一而棄レ之。猶ニ樹之離レ土。魚之去レ水。不レ得ニ一日生一焉。其不可也必矣。人之於ニ五倫一。雖ニ父子之親兄弟之睦一。既異ニ其體一。況君臣夫婦朋友皆以レ義合。豈謂ニ之外一而可乎哉。凡內外二字。古人之所レ稱。與ニ後世之所レ謂。其義逈別。所レ謂內者親レ之之辭。外者疎レ之之辭。若下大學曰ニ外レ本內レ末。莊周曰中內聖外王上。是也。非下以レ性爲レ內。而以ニ非レ性者一爲レ外。而棄上レ之也。告子之外レ義。亦謂ニ以レ義爲レ外而行レ之。非ニ棄而不レ用之謂一。聖賢初無ニ內外之辨一。其立ニ內外之分一。後儒之陋說也。第二十二章

問。吾聞富貴爵祿皆外物也。爲レ其所レ誘而可乎。曰。富貴爵祿皆人事之所レ不レ可レ無者。只當レ辨ニ禮義一。豈可下徒以爲ニ外物一而厭上レ之也哉。子猶泥ニ于舊見一。不三嚴洗ニ滌此意一。後來必至下於厭ニ人事一樂ニ枯寂一

童子曰。甚哉學問之大乎。願聞二其詳一。曰。宋明儒先皆以レ盡レ性爲二極則一。而不レ知二學問之功益大一矣。殊不レ知己之性有レ限。而天下之道無レ窮。以二有レ限之性一。而欲レ盡二無レ窮之道一。則非二學問之功一。不レ可レ得也。此孔門所二以專貴一レ敎也。中庸曰。唯天下至誠。爲三能盡二其性一。能盡二其性一。則能盡二人之性一。能盡二人之性一。則能盡二物之性一。能盡二物之性一。則可三以贊二天地之化育一。可三以贊二天地之化育一。則可下以與二天地一參上矣。所レ謂能盡二其性一者。就二吾性之分内一而言。至下於其盡二人物之性一。而贊中天地之化育一。則雖下亦盡二我性一之推上。豈徒盡二我性一而已哉。夫人之與レ我。異レ體殊レ氣。其疾痛痾癢。皆不二相關一。況人之與レ物。異レ類殊レ形。何相干涉。謂下財三成輔三相天地之道一。使中萬物各遂中其性上。則可矣。謂三之盡二我性一。而可乎哉。然則。唯盡二我性一。而非レ由二學問之功一。不レ可レ得也明矣。譬二諸以レ薪炊一レ飯。一把薪可三以炊二一升米一。而不レ能三以炊二一斗米一。十把薪可三以炊二一斗米一。而不レ能三以炊二一石米一。至二於一石米一。則非レ用二一車薪一。則不レ可レ得レ炊也。一把薪能炊二一升米一。十把薪能炊二一斗米一。一車薪能炊二一石米一。盡二其性分一者也。一把薪不レ能レ炊二一斗米一。十把薪不レ能レ炊二一石米一。以レ非二性分之所一レ及也。苟向レ風吹レ火。添レ薪助レ之。則一片火寸可二以爇一レ宮。一點野火可二以燎一レ原。其勢爀爀烈烈。遷延回轉。不レ可二撲滅一。是豈一把薪之力乎哉。人若立レ志不レ回。力學不レ倦。則可二以爲一レ聖。可二以爲一レ賢。而可下以盡二人物之性一。而贊中天地之化育上。敎之可レ貴也如レ此。孟子所レ謂擴充者。卽謂レ此也。故曰。原泉混混不レ舍二晝夜一。盈レ科而進。放二于四海一。凡天下之水東注。則入二于東海一。西注則入二于西海一。今其曰レ放二于四海一者。何哉。又言二其擴充之積一。流行無レ窮也。又論二浩然之氣一曰。以レ直養而無レ害。則塞二于天地之間一。吾氣亦有

以專以レ敎爲レ主。而孟子發中擴充之說上也。第十八章

問。於二性道敎之分一。既得レ聞二其詳一矣。願詳見レ諭二敎之條目一。曰。子以レ四敎。文行忠信。此孔門學問之定法。而初學入レ道之規矩。萬世學者不レ得レ違焉。文者。詩書六藝是已。行者。孝悌禮讓是已。盡レ己之謂レ忠。與レ人有レ實之謂レ信。學レ文則其智不レ偏。力行則其學不レ虛。忠則道足二以行一。信則德有二以立一。不レ學レ文則其智必偏。佛老之學是也。不二力行一則其學自虛。俗儒之學是也。不二忠信一則人道不レ立。市井之小人是也。此四者雖レ有二次序一。而非レ有二階級一。蓋學者終身之業也。苟以レ此爲レ法。則安宅可レ居。大路可レ由。而爲レ學之道備矣。第十九章

問。先生曰。不レ學レ文則其智必偏。然佛氏說二不立文字一。近世王氏之學。亦以三讀レ書講二義理一爲レ非。彼皆非耶。曰。規矩方圓之至也。至當道之極也。雖下能知二天下之所一レ難レ知。能行中天下之所上レ難レ行。然纔失二至當一。則全體皆非。鈔智易レ得。卓行易レ爲。唯得二至當一爲レ難。其悟彌高。其偏彌甚。故君子讀レ書窮レ理。多蓄二前言往行一者。非二徒欲下窮二盡天下之道理一。蓋欲下得二天下之至當一而止上也。苟從二事於學問一。則高者俯。卑者企。軒者低。輊者昂。皆得二其平一而後止。豈騖二空虛一任二意好一而恣二其獨智一者之所二能及一哉。故孔子曰。好レ仁不レ好レ學。其蔽也愚。好レ知不レ好レ學。其蔽也蕩。好レ信不レ好レ學。其蔽也賊。好レ直不レ好レ學。其蔽也絞。好レ勇不レ好レ學。其蔽也亂。好レ剛不レ好レ學。其蔽也狂。夫仁之德大矣。智之道深矣。然不二學以照一レ之。則猶有二其蔽一。故天下莫レ大二於學問之功一。亦莫レ貴二於學問之道一也。第二十章

義爲己之固有。而其實爲自暴自棄者發之也。第十五章

問。然則。敎貴於性歟。曰。奚其然。雖有善敎。然而。使人之性不善。若犬馬之與我不同類。則與道扞格不相入。惟其善。故見善則悅。見不善則嫉。見君子則貴之。見小人則賤之。雖盜賊之至不仁。亦莫不然。是敎之所以由而入也。雖蠻貊無敎之邦。叔季絕學之世。人不皆化爲鬼爲魊者。性之善故也。性之善。豈可不貴耶。第十六章

問。然則。性貴於敎歟。曰不然。人皆有性。性皆善。然學以充之。則爲君子矣。不能充之。則衆人而已耳。性之不可恃也如此。故云。苟不充之。不足以事父母。孔子亦曰。性相近也。習相遠也。蓋君子小人之分。不由性而由敎。故夫子不責性。而專責習。其意可見矣。又曰。人能弘道。非道弘人。亦此意也。吾夫子以生民以來未嘗有之至聖。旁觀古今。洞視天人。猶爲生民建大敎法。曰學而已矣。故曰。學而時習之。不亦說乎。又曰。吾嘗終日不食。終夜不寢。以思。無益。不如學也。蓋言天下之至益莫如學問。而夫懸空臆想者實無所獲。勉旃。

第十七章

問。性與敎果無優劣耶。曰。性善而無爲。敎有爲而難入。能受難入之敎者。性之善也。充性之善者。敎之功也。兩者猶車之有兩輪。相須而不可相無。然性本相近。而敎之功爲大矣。南山之竹。不揉自植。性之善也。括而羽之。鏃而礪之。則其入之深者。敎之功也。若不羽不鏃。則一片竹條耳。何所成用。其百發百中。善射隼於高墉之上者。皆羽而鏃之之功也。此論語之所

而不二相離一。非レ若下諸子百家之自私用レ智。而遠二人倫日用一以爲中道上也。故曰。率レ性之謂レ道。又曰。可レ離非レ道也。夫性者。天之賦二予於我一。而人人所二固有一。若不レ論二循レ性與上レ否。則無三以見二道之邪正一。故中庸先擧レ性而爲レ言耳。非下以レ性爲上レ貴二於道一也。道者何。在二父子一謂二之親一。君臣謂二之義一。夫婦謂二之別一。昆弟謂二之序一。朋友謂二之信一。天下古今之所二同然一也。諸子百家各以二其道一爲レ道。而不レ論下循レ性與上レ否。所三以爲二異端一也。苟循二人之性一。而不レ可レ得而離一。則爲レ道。否則非レ道。故聖人之道。非二離レ性而獨立一。亦非レ謂二自レ性出一也。晦菴謂。人物各循二其性之自然一。則日用之間。莫レ不三各有二當行之路一。是倒說也。蓋性者。以レ有二於己一而言。道者。以レ達二於天下一而言。易曰。立二人之道一。曰仁與レ義。是也。故有レ人則有レ性。無レ人則無レ性。道者。不レ待レ有レ人與レ無レ人。本來自有之物。滿二于天地一。徹二于人倫一。無二時不一レ然。無二處不一レ在。豈容レ謂下待三人物各循二其性之自然一。而後有上レ之耶。若二晦菴所一レ說。則是性本而道末。性先而道後。豈非二倒說一乎。第十四章

問。論語專言レ敎。而道在二其中一。既獲レ聞レ命矣。孟子專言レ道。而敎在二其中一。不審。如何。曰。道者何。仁義是也。孟子之書。以二仁義一爲二其首腦一。七篇之中。無乙一字不下自二此二字一紬繹出來上者甲。其倡二性善之說一者。亦非三徒發二明其理一。欲レ使下人知二其性之善一。而擴中充之上也。故曰。盡二其心一者。知二其性一也。又曰。苟不レ充レ之。不レ足三以事二父母一。又曰。苟得二其養一。無二物不一レ長。苟失二其養一。無二物不一レ消。此皆言二性之善不一レ可レ恃焉。而擴充之功不レ可レ懈也。故曰。孟子專言レ道。而敎在二其中一矣。人雖レ號二稱レ好レ學。然其持レ志力レ學。勇往直前。不二自暴自棄一者。千百之一二焉耳。故性善之說。雖レ明三仁

爲レ主。於二性善之說一則未二嘗有一レ所二發明一。豈非二一大欠事一耶。曰。從前諸儒多於レ此欠二按欵一。不レ容二於不一レ辨。夫性道敎三者。實學問之綱領。凡聖人千言萬語。雖レ不レ堪二其多一。然莫レ不レ總二括於此一。請極レ言レ之。論語專言レ敎。而道在二其中一矣。孟子專言レ道。而敎在二其中一矣。其所レ謂性善云者。本爲二自暴自棄者一發レ之。亦敎也。論語專以レ敎爲レ主。故性之美惡在レ所レ不レ論。故曰。性相近也。習相遠也。又曰。有レ敎無レ類。言自二堯舜一至二于塗人一。其間相去奚翅千萬。然論二其性一。則亦不二甚相遠一。但其所二以相懸絶如一レ此者。皆由レ習而然。苟學以明レ之。養以充レ之。則皆可二以變レ惡而爲一レ善。故性之善惡置而不レ論。此論語之所二以專言一レ敎。而不一レ道レ性也。孟子雖レ道二性善一。不三徒論二其理一。必曰二擴充一。必曰二存養一。所レ謂擴充存養云者。卽非レ敎而何。此孟子之所下以雖レ道二性善一。而實莫上レ非レ敎也。吾故曰。論孟二書。猶下一幅布有二表裏一。而無中精粗上也。第十二章

問。性道敎之分。其詳可二得而聞一乎。曰。道至矣大矣。固不レ待レ論。然不レ能レ使二人爲レ聖爲一レ賢。所レ謂非二道弘一レ人。是也。其所下以使二人爲レ聖爲一レ賢。開二來學一而致中太平上者。皆敎之功也。所レ謂人能弘レ道。是也。故道爲レ上。敎次レ之。然而。使下人之性頑然無智如二雞犬一然上。則雖レ有二百聖賢一。不レ能レ使二其敎而之一レ善。惟其善。故其曉レ道受レ敎。不三啻若二地道之敏一レ樹。故性亦不レ可レ不レ貴。此性道敎之別也。漢宋儒先。多於レ此顚倒錯說。甚害二於道一。子其審諸。第十三章

問。中庸以二性道敎一爲レ序。今以レ道爲レ上。敎次レ之。而以レ性爲二盡レ道受レ敎之地一。其措レ詞次第。若レ有レ不レ同者。何哉。曰。本與二中庸之理一無レ異。但註家錯說耳。中庸言。聖人之道本循二人性之自然一。

臣父子夫婦之倫一。而循ニ仁義禮智之道上。故曰。由レ人而顯。無レ人則無ニ以見レ道。謹聽ニ此說一。勿下爲ニ異說一所上惑焉。第九章

又問。後世學問日趨ニ高遠一。而與ニ論語之旨一相背馳者。何故而然乎。曰。居レ高者視レ卑。故其言不レ得レ不レ卑。居レ卑者視レ高。故其言不レ得レ不レ高。自然之符也。是故。道德盛則議論卑。道德衰則議論高。猶下權衡之量レ物。隨ニ其輕重一互相低昂上。道德一分衰。則議論一分高。道德二分衰。則議論二分高。道德愈衰。則議論愈高。及ニ乎議論愈高一也。道德蔑如矣。佛老之廢ニ人倫一。宋儒之失ニ中行一。是已。人皆知レ悅ニ議論之高一。而不レ知ニ其實道德下衰故一也。孔門之學。直由ニ道德一而行。不レ爲ニ無益之論一。猶ニ白日中レ天。不レ待レ秉レ燭。故只言ニ孝弟忠信一。足矣。孔子曰。主ニ忠信一。曾子曰。吾日三省ニ吾身一。是也。學者當下識ニ得此意一。而後讀中論語上。後世諸儒敢爲ニ高論一。至下與ニ論語一相背馳上者。皆道德下衰故也。第十章

問。旣聞聖人之道易レ知易レ行。何人之能レ之者鮮耶。豈亦有下所ニ甚難一者上與。曰有。依ニ乎中庸一爲レ難。中庸本非ニ難事一。依ニ乎中庸一之難。亦在ニ乎立レ誠之難一也。古之人豈亦得ニ人人皆善。事事皆中一邪。但民朴俗淳。誠實敦龐。無ニ邪回之行一。無ニ名利之求一。故所レ行自莫レ非ニ中庸一也。故曰。中庸之爲レ德也。至矣乎。民鮮久矣。至ニ後世一。則風氣日漓。人心不レ古。愚者固不レ足レ論。其少有レ智者。必以ニ利名一爲レ先。厭レ常而好レ新。捨レ邇而求レ遠。是中庸之所ニ以難一也。故曰。天下國家可レ均也。爵祿可レ辭也。白刃可レ踏也。中庸不レ可レ能也。是論語之極致也。第十一章

童子曰。獲レ蒙ニ敎誨一。始識ニ論語一書實爲ニ宇宙第一書一。至幸至惠。然孟子道ニ性善一。而論語偏以ニ學問一

垂諭。曰。人外無レ道。道外無レ人。以レ人行二人之道一。何難レ知難レ行之有。夫雖レ以二人之靈一。然不レ能レ若二羽者之翔。鱗者之潛一者。其性異也。於下服二堯之服一。行二堯之行一。誦中堯之言上。則無二復甚難一者。其道同也。故孟子曰。夫道一而已矣。若夫欲下外二人倫一。而求上レ道者。猶二捕レ風捉一レ影。必不レ可レ得也。故知レ道者。必求二之於邇一。其以レ道爲レ高。爲レ遠。爲レ不レ可二企及一者。皆非二道之本然一。自惑之所レ致也。故孔子曰。中庸之爲レ德也。其至矣乎。民鮮久矣。至矣。子必想。外三耳目之所二見聞一。而更有二至貴至高光明閃爍。可レ驚可レ樂之理一。非矣。天地之間。唯一實理而已矣。更無二奇特一。自レ有二生民一以來。有二君臣一。有二父子一。有二夫婦一。有二昆弟一。有二朋友一。相親相愛。相從相聚。善者以爲レ善。惡者以爲レ惡。是者以爲レ是。非者以爲レ非。萬古之前如レ此。萬古之後亦如レ此。子能孝弟忠信。修レ身勤レ業。夙夜匪レ懈。則自合二於天道一。宜二於人倫一。不レ至レ失レ所二以爲一レ人也。詩曰。永思配レ命。自求二多福一。或有下人以二至貴至高光明閃爍。可レ驚可レ樂之理一。說二與汝一者上。若非二野狐山鬼魅一レ汝。必是邪說之魁也。謹勿レ聽。

第八章

問何謂二人外無一レ道。曰。人者何。君臣也。父子也。夫婦也。昆弟也。朋友也。夫道者一而已。在二君臣一謂二之義一。父子謂二之親一。夫婦謂二之別一。昆弟謂二之敍一。朋友謂二之信一。皆由レ人而顯。無レ人則無下以見道。故曰。人外無レ道。何謂二道外無一レ人。曰。道者何。仁也。義也。禮也。智也。人囿二于其中一。而不レ得二須臾離一焉。離焉則非レ人也。故曰。道外無レ人。凡說二天地之外古今之遠一。而無レ資二于人倫一。無レ益二于天下國家之治一焉者。皆邪說之魁也。設令宇宙之外復有二宇宙一。苟有レ人生二於其間一。必當下有二君

不レ云乎。論孟既明。則六經不レ治而明矣。蓋六經之道。平正通達。萬世人倫之道備矣。然通二論孟一。而後六經之學有レ益。不レ然。則六經徒爲二虚器一。而不レ爲二今日之用一。猶下三代之彝器。可レ寘二之几上一。而不上レ可レ施二之日用一也。後世儒者之解二易春秋一。其說奇古艱深。不レ近二於人倫日用一者。蓋以レ此也。詩書二經亦然。獨程子易傳。所下以負出二諸儒之上一。而爲中三代以來好書上者。以下其自二論孟之理一來上也。是論語所三以高出二於六經之上一也。第六章

問。先生既以二孟子一爲二論語之義疏一。然則學者專讀二論語一。而至二於孟子一。則雖レ不二必讀一無レ害歟。曰不レ然。註者所三以求下通二夫經一也。學者不レ熟二讀孟子一。必不レ能レ達二於論語之義一。蓋論語之津筏也。論語專說下修二仁義禮智一之方上。而未三嘗發二明其義一。孟子時。聖遠道湮。大義既乖。故孟子爲二學者一。諄諄然剖二別其義一。闡二明其理一。丁寧詳悉。無二復餘蘊一。故通二七篇之義一。而後論語之理。始可レ明矣。孟子曰。惻隱之心。仁之端也。羞惡之心。義之端也。恭敬之心。禮之端也。是非之心。智之端也。又曰。人皆有レ所レ不レ忍。達二之於其所一レ忍。仁也。人皆有レ所レ不レ爲。達二之於其所一レ爲。義也。是仁義禮智四字之解也。學者當三據レ此體認熟讀。而後推二之於論語一。則其義始較然矣。設欲下去二孟子一。而特據二論語字面一解上レ之。則不レ惟不レ得二其義一。必至二於大錯一レ道。從前註解。不レ愜二仁義禮智之義一者。正以レ此也。所以孟子之書。非二徒有レ功二于論語一。實有レ功二于萬世學者一也。其得下與二論語一並稱上者。良有レ以夫。第七章

問。易レ知易レ行。萬世不易之理。實爲二至極一。既得レ聞レ命矣。然心中猶未レ能二釋然一。願以二易レ曉之語一。申

之上一。程子曰。論語孟子既治。則六經可ニ不レ治而明一矣。此論實古今之名言也。大抵詞直理明。易レ知易レ記者。必正理也。詞艱理遠。難レ知難レ記者。必邪說也。子以レ此求レ之。於ニ天下之書一。百不レ失レ一。第四章

問。從來皆以ニ論語一。徒爲ニ平易近情意味親切一。而未レ知ニ其廣大甚深。如レ此難レ知也。冀申垂ニ審喩一。曰。論語之書。聖人以ニ大中至正之心一。說ニ大中至正之道一。故唯大中至正之人能知レ之。子必以ニ難レ知難レ行高遠不レ可レ及者一爲ニ至道一。而不レ知ニ易レ知易レ行平正親切者。卻是萬世不易天下極至之理一。蓋難レ知難レ行高遠不レ可レ及之說。乃異端邪說。而易レ知易レ行平正親切者。便是堯舜之道。而孔子立敎之本原。論語之宗旨也。昔在孔子旁觀ニ古今一。歷ニ選羣聖一。特祖ニ述堯舜一。憲ニ章文武一。盡黜下夫難レ知難レ行。磅礴廣大不レ可ニ窺測一之說上。而立ニ其易レ知易レ行。萬世不易之道一。以爲ニ生民之極一。傳ニ之門人一。詔ニ之後世一。故論語一書。實爲ニ最上至極宇宙第一書一。而孔子之聖。所下以爲中生民以來未ニ嘗有一。而賢ニ於堯舜一遠上者。以レ此也。而孟子之書。又亞ニ論語一。而發ニ明孔子之旨一者也。其言曰。堯舜之道。孝弟而已矣。又斥ニ其難レ知難レ行。高遠不レ可レ及之說一。以爲ニ邪說一爲ニ暴行一。痛拒ニ絕之一。而專唱ニ仁義之旨一。蓋論語之義疏也。故學者實知ニ得斯理一。而後當レ讀ニ論孟二書一。不レ然。則雖下字解句釋。精若ニ蠶絲一。密若中牛毛上。實侮ニ論孟一者也。豈可レ謂レ尊ニ信之一乎。從前學者。皆以ニ論語一。徒爲ニ孔門一時問答之語一。而不レ知ニ其高出ニ于六經之上一矣。道之所下以不レ明ニ不上レ行ニ于天下後世一者。職此之由。學者不レ可レ不レ審ニ諸。第五章

問論語平易。而易レ知。六經深奧。而難レ讀。今說ニ論語之理高出ニ于六經之上一。不審。如何。曰。程子

典。至親切也。然竊思。外此別有箇徑直截自詣至道者。非耶。曰非也。學欲其正。功欲其熟。不可好奇特。不可求捷徑。水到船浮。華謝子結。遵正路而未到者。有矣。未有由邪蹊而能到者也。自苗而秀而實。自有其時。任其自悟。勿自我求悟。讀論孟者。若初學。固不能去註脚。而能曉本文。苟集註章句既通之後。悉棄去註脚。特就正文。熟讀詳味。優游佩服。則其於孔孟之本旨。猶大寐之頓寤。自瞭然于心目之間矣。今子所以不免致疑者。皆爲註脚之所累耳。天下之理。到語孟二書。而盡矣。無可復加焉。勿疑。第二章

請益。曰。子識夫五穀乎。論天下之至味。則至五穀而極矣。雖八珍美膳醍醐上味。不若五穀之可常食。而不厭。況非此。則莫以存軀命矣。若夫美味。雖姑可於口。然嗜之不止。則必害於人。前輩所謂嗜異味者。必有異疾。是也。若論語之於道。乃食中之嘉穀也。施之四海而有準。傳之萬世而無弊。所患在人之不知焉耳。第三章

問。吾於宋明諸儒及禪莊諸書。議論高遠難遽通者。固疑其爲至言玅道。若論語。則甚平淡。殊覺無意味。如何。曰。艱澁奇僻難遽通者。反可通。惟論語不可知也。至言如泛然。邪說易動人。若泛然。故不可得而知也。易動人。故不覺自陷于其窠臼。非溫厚和平從容正大者。必不能通于論語之玅。非氣質偏勝耽奇驚高者之所得知也。今子欲外語孟。而徑詣至道。此乃陷于邪僻之漸。其後不復可救。愼勿踏近世學者之故轍。昔漢置五經博士。而不知置論語博士。宜矣若論語。其語平淡。而意味深長。故雖漢人。亦不知其理到道到。廣大周徧。高出于六經

童子問卷之上

洛陽　伊藤維楨　著

予往年過爲二諸友一所レ推。自開二門戸一以待二學者一。從レ此四方之士。從遊日衆。問レ道不レ已。予雖下時叩二兩端一以竭上。然學者多狃二於舊聞一。牽二於意見一。卒無三以得二孔孟之正宗一。不レ高則不レ樂。不レ奇則不レ悅。厭レ常而喜レ新。舍レ邇而取レ遠。予深憫焉。乃綴二輯鄙言一。以爲二答レ問之資一。且以明二鄒魯之正傳一。亦不レ得レ已之心也。宋歐陽子及輔漢卿氏。有二易詩童子問一。予亦命レ之以二童子問一。要明レ非レ所三以告二于大方一也。元祿六年癸酉冬十月既望。洛陽伊藤維楨原佐謹識。

凡五十九章

有二一童行一。問曰。伏聞先生闡二明孔孟之正指一。以敎二導學者一。然入レ門日淺。賦性亦魯。加レ之先入之言爲レ主。而不レ免下於二孔孟之直指一。反驚且怪上。冀賜二開示一。予應レ之曰。孔孟之直指。見二於論孟二書一者。炳如二丹青一。包二含天下之理一。而無レ缺。會二萃百家之典一。而不レ遺。出二於此一。則旁徑也。他岐也。子欲レ識二予之意一。則觀二語孟二書一足矣。今雖下爲レ子傾レ囷倒レ廩。以盡告上レ之。亦莫下能出二於二書之外一者上矣。子能熟讀翫味有レ得焉。則雖二與レ予生相睽違。阻レ地隔レ世。猶下相二聚一堂一。終日論議上。心心相照。若レ合二符節一。自莫二相違一。勉旃。勿レ怠。惟恐子徒以爲二聖門平正親切之書一。而不レ知二深意所一レ在。第一章

童子曰。固如二尊喩一。若二二書一。則予平生所二熟讀一。於二集註大全及諸家註解一。亦嘗探討。二書固日用之要

修爲一。而擴充之方。遂轉爲二滅レ欲之訓一矣。殊不レ知聖人之敎。有二充養之方一。而無二復初之說一。人之所三以至二聖人一者。豈徒復二其性一而止哉。故謂二仁義禮智之道。基二於性之善一則可矣。而謂レ全二於性之初一則不可也。昔吾先君子。夙耽二宋學一。研二味性理一。既而直泝二鄒魯之旨一。沈潛多年。會二其眞詮一。時有二問者一。常用レ法應レ之。錄爲二童子問三卷一。向者不幸遭二大故一。百事忽忽。今茲服闋。因爲校討。分レ章折レ句。登二諸梨棗一。以償二負薪之志一云

寶永四年丁亥夏五月壬子朔子　長胤謹識

刋童子問序

道之在二天下一也。無二處不一レ到。無二時不一レ然。不下爲二聖人一而存上。不下爲二小人一而亡上。亘二古今一而不レ變。放二四海一而有レ準。行二乎日用彝倫之間一。而非二無レ聲無一レ臭之理一。其目有レ四。曰仁義禮智。故曰天下有レ道。丘不二與易一也。而循二其本一。則凡爲レ人者。莫レ不三各有二斯四端之心一。猶三其有二四體一也。惻隱之心。仁之端也。差惡之心。義之端也。恭敬之心。禮之端也。是非之心。智之端也。此人性之所三以爲レ善而異二於萬物一也。苟有下以充上之焉。則皆可三以成二仁義禮智之德一矣。然唯其所レ生而莫二之有一レ養。則小而不レ大。微而不レ著。或牿亡之甚。則併下其所二固有一者上而失レ之矣。聖人有レ憂レ之。立二之敎法一。將下以使中人因二其固有者一。擴而充上レ之。自二其所レ不レ忍。而達二之於其所一レ忍。自二其所レ不レ爲。而達二之於其所一レ爲。漸漸循循。遷レ善遠レ非。以得レ成二其德一也。曰推曰及。卽皆其事。而忠信敬恕。亦皆所三以維二持之一也。譬レ諸水之至也。疏レ之濬レ之。導而不レ已。則濫觴之微。可三以爲二稽天之巨浸一。木之漸也。培レ之壅レ之。養而不レ害。則蘗栽之穉。可三以成二合抱之偉材一。不二唯道爲一レ然。驗二之人事一。伎巧藝術。亦皆莫レ不下以因二其所一レ本者。而漸次積累。自レ粗至レ精。自レ生至レ熟也。故曰孝弟其爲二仁之本一與。又曰苟得二其養一。無二物不一レ長。所以孔孟之示レ人。千言萬語。其說雖レ多。而稽二其要歸一。莫レ非二此事一。降及二後世一。敎導之法。不三復遵二古義一。以爲仁義禮智。全具二乎性一。但爲二氣牿物蔽一。而靈明不レ露。務欲下豁二其蔀一。掀二其瞖一。以復二其初一。如三鑑之剔レ垢而復瑩一。如中水之澄レ濁而還湛上。於レ是乎仁義之德。不三復待二

右語孟字義二卷。古學先生伊藤君之所レ著也。先生平日著述。逐旋修改。未ニ嘗停一レ手。故門人傳錄之本。條款或異。文字不レ一。今玆三月先生易レ簀。景范恐ニ其遺ニ疑誤於後世一。速就ニ定本一。手自校讎。壽ニ諸文梓一。以貽ニ同好一。凡四方之本。皆當ニ就レ此取一レ正云。

寶永二年乙酉冬至日

門人林景范文進頓首拜書

庶民興。斯無㆓邪慝㆒矣。昔者孔子成㆓春秋㆒。而亂臣賊子懼。蓋謂。春秋成而後君臣父子夫婦昆弟朋友之倫明。故亂臣賊子自知㆓其無㆘所㆑逃㆑罪。故懼焉。非㆑謂㆘讀㆓春秋書㆒。而亂臣賊子乃懼㆖。是亦學㆓春秋㆒者所㆑當㆑識也。故遏㆓邪說㆒之術。脩㆓吾道德㆒爲㆓上策㆒。以㆓倫理㆒攻㆑之爲㆓中策㆒。辨㆓理之有無寂感㆒爲㆓下策㆒。韓歐出㆓中策㆒。程朱出㆓下策㆒。其得㆓上策㆒者。孔孟以後未㆓之或聞㆒也。惜哉。

語孟字義卷之下畢

哉。赫々皇天。篤生二孔子一。旁觀二古今一。歴二選群聖一。祖三述其當二祖述一。憲三章其當二憲章一。雖二三皇五帝之書一。猶在レ所レ黜焉。而獨斷下自二唐虞一以下上。祖二述憲三章之一。而後天下萬世。君臣父子夫婦兄弟朋友之倫明。而無レ所二迷惑一。邪說暴行。猶三烏葛之於二嘉穀一。自不レ得下與二正道一相混上焉。則孔子之德之學之大。其爲二如何一哉。非レ有乙若下身坐二堂上一。能辨中堂下人之曲直上之智甲。則不レ能。故孟子曰。賢二於堯舜一遠矣。又曰。聖人之於レ民。亦類也。出二於其類一。拔二乎其萃一。自レ有二生民一以來。未レ有レ盛二於孔子一也。嗚呼與二天地一同二其大一。與二日月一同二其照一。超二於三皇一跨二於五帝一。獨爲二天下萬世帝王臣民之師表一者。其惟孔子一人爲レ然。非二知レ道者一。孰能識レ之。猗與盛哉。人以爲邪說暴行。皆戰國以來有レ之。上世無レ有。不レ然。唐虞以前邪說暴行者。方二堯舜氏起一。而退聽畏縮。不二敢出一レ頭。孔子以前邪說暴行者。又及二孔子出一。烟飛霧散。不二復存一レ跡。猶二大陽中一レ天。鬼魅狐惑。自伏匿而屏息。故後世所五以不四復知三上世自有二邪說暴行一者。蓋爲二此故一也。唯黃老之說。遺孼猶在。至レ漢再熾。瞿曇之學。自レ外入寇。浸爾跳梁。至二隋唐一始盛。迨レ宋大躁。鉅儒輩出。雖下爲レ之痛排深辨。不上レ遺二餘力一。然愈撲愈熾。愈廢愈興。其所三以卒不二息者。爲下徒託二之空言一。而無中堯舜孔子之德上也。夫道德盛。則議論卑。道德衰。則議論高。議論愈高。則離二乎道德一愈益遠矣。故議論之高。衰世之極也。而其最高者。至レ禪而極。故離二乎人倫一。遠二於日用一。無レ益二乎天下國家之治一焉者。亦莫レ禪爲レ甚。儒者以爲。當下以二議論一勝上レ之。過矣。苟使二吾道德盛一焉。則彼自退聽。將レ服從之不レ暇。若不二是之務一焉。而徒欲下以二口舌一與二彼角衡上。猶二赤手與レ人鬪。相傷俱止。可レ謂レ陋矣。故孟子曰。君子反レ經而已矣。經正則庶民興。

位焉。則天下一家。道德一。而風俗同。君君臣臣父父子子夫夫婦婦兄兄弟弟。忠信和睦之風隆。詭行異論之徒熄。蕩々平々。無偏無黨。家自齊國自治。而天下自平矣。虛無恬澹之說自無所與。無爲自化之敎自無所倡。是爲中庸之至。是爲王道之極。聖人旣沒。世衰道微。異端蠭起。邪說並興。敢肆私說。無所顧諱。以常道爲卑。而不足爲。以綱常爲近。而不加勤。家家異道。人人殊說。先王之道術。於是瓦解瓜裂。不復統一矣。不識道者。爲其所眩瞀蔽錮。驚以爲至言。爲妙道。匍匐而從之。以爲遠勝於堯舜之道。而非周孔之所及。悲哉。道二。邪與正而已矣。天下豈有大於常道者乎哉。若謂外常道而別有大道焉。則其所謂大道者。必是邪說也。故人倫之外無道。仁義之外無學。人之所當務力者。人倫而已矣。人之所當竭力者。仁義而已矣。夫天運於上。地載於下。日月代明。四時錯行。人不能爲力於其間。在君惟當盡君之道。在臣惟當盡臣之道。在父惟當盡父之道。在子惟當盡子之道。人人盡己之道。而天下平矣。學雖闡天人之秘。智雖洞象數之原。然無益於人倫。無裨於世道者。聖人不取焉。故孟子曰。堯舜之道。孝悌而已矣。又曰。堯舜之知。而不偏物。急先務也。堯舜之仁。不偏愛人。急親賢也。向所謂害於人倫。遠於日用。無益乎天下國家之治焉者。皆謂之邪說。皆謂之暴行者。以其不可與入于堯舜之道也。譬諸珍羞異味。人多貪饞。至於五穀常膳。則不知嗜焉。然而。舍五穀常膳。則無可以食也。大凡世之所崇信奉承。致恭盡敬。而藉々乎時焉者。皆珍羞異味之類。而堯舜孔子之道。則五穀常膳也。人雖固不知尊之。然亦不能一日舍此而不由焉。大矣

行。且併及孔子之聖。於是爲最大。而生民以來未嘗有之實。曰。按周禮外史掌三皇五帝之書。春秋左氏傳楚左史倚相能讀三墳五典八索九丘。說者謂。即上世帝王遺書也。而漢孔安國曰。伏犧神農黃帝之書。謂之三墳。言大道也。少昊顓頊高辛唐虞之書。謂之五典。言常道也。可見孔子時。三皇五帝之書尙在。而三墳言大道。五典言常道焉。則夫子皆當祖述之。而特斷自唐虞以下。三皇三帝之書。皆在所黜焉者。何哉。夫聖人之道。萬世通行之典也。故其道謂之常道。其書謂之經典。言其當萬世通行也。豈常道之外。別有所謂大道者乎哉。外常道。而別有大道焉。則可知大道云者。便非萬世通行之典矣。竊以謂。彼所謂大道者。則必是虛無恬澹無爲自化之說。而非堯舜孔子之所取焉。想虛無恬澹無爲自化之說。匪柱下漆園搬倡其說。蓋自上世已有之。世所傳黃帝內經者。恐非悉七國時書。又屈子所述周靈王太子晉之語。及周廟金人銘。孔父鼎銘。亦往往與其意相符焉。則虛無恬澹無爲自化之說。自上世已有之。彰彰然明矣。而漆園鄭圃之書。屢屢稱黃帝之名。孟子時楚許行者爲神農之言。有與民並耕之說矣。則知自上世別有非堯舜之道。而號神農黃帝之道。相稱述於世者焉。其爲孔子之所黜。宜矣。由是推之。則知雖宓犧之學。亦不得爲全與堯舜之道相同。太史公曰。余登箕山。其上蓋有許由冢云。乃實其有是人也。凡廣成子卞隨務光之流。蓋皆古隱君子有奇行者。曠代相傳稱焉。則未必無其人也。孟子所謂堯舜孔子以前邪說暴行者。是已。蓋邪說者。暴行之本。暴行者邪說之發。有則俱有。非有二也。大凡害於人倫。遠於日用。無益乎天下國家之治焉者。皆謂之邪說。皆謂之暴行。惟堯舜之君在

識レ之不レ徹。貪レ多務レ得。不レ知三其害レ道之甚至二于此一。大學本在二禮記一。則爲二一篇書一。而不レ詳レ出二於誰人之手一。至二於朱考亭氏一。始分爲二經一章傳十章一。經以爲二夫子之言一。傳以爲二曾子之意。而門人記一レ之。蓋出三於其意之所二好尙一。而非下有レ所二考證一而言上。後學不レ知二自辨一。直以爲。孔子之言。而曾子傳レ之。可レ謂二害レ道之尤者一也。愚之至無レ似。何敢望二考亭一。德行之勤也。學問之博也。文章之富也。其相懸絕。不二翅萬分之一一。其不レ可二跂及一。固不レ待レ言レ之矣。然竊自思於レ識二孔孟之血脉一。則不二敢自讓一焉。於レ是竊不二自揣一。漫述二孔孟之血脉一。以附二之兒曹一。實恐孔孟之旨。不三大明二于後世一也。孟子曰。予豈好レ辨哉。予不レ得レ已也。憂レ道之君子。其諒レ諸。

附論二堯舜既沒邪說暴行又作一

予頃私策二問諸友一曰。世所レ傳諸子百家異端邪說。皆聖遠經殘之所レ致。實戰國以來有レ之。上世無レ有。然孟子嘗曰。堯舜既沒。聖人之道衰。邪說暴行又作。而於二文武周公之後一。又曰。世衰道微。邪說暴行有作。臣弑二其君一者有レ之。子弑二其父一者有レ之。孔子懼作二春秋一。竊思。孟子所レ謂邪說者。必有レ所レ指。若二揚墨之徒一是也。而以二又作二字一觀レ之。則邪說之害。非二啻戰國以來有ヿ之。實孔子以前既有レ之。非二啻孔子以前既有ヿ之。亦似二乎堯舜以前實有ヿ之。吾不レ知二其如何說一。豈許行所レ爲神農之言。漢世所レ尙黃老之術者。本非三戰國之間所二僞撰一焉。而上世實有レ之歟。抑上世所レ謂邪說者。非二後世諸子百家之類一。而別有下所レ可レ斥二名之一者上歟云云。而及レ閱二諸友所ヿ對。多揣量模寫。依三傍名理一。而未レ有下明據二事實一。足三以取二信於後世一者上。故又自代二諸友一。爲レ之擬對焉。究三論堯舜以前實有二邪說暴

孟之學以仁爲宗。而凡學者莫不從事於此。今大學獨屬之於人君。而無爲學者道之者。是亦與孔孟之旨異矣。又曰。欲正其心者。先誠其意。夫意一也。論語說毋。大學說誠。一正一反。必不可無是非。而中庸曰誠身。而不曰誠意。則誠字當施之於身。而不可施之於意。明矣。又曰。楚書曰。楚國無以爲寶。夫楚南蠻鴂舌之俗。中國之所不齒。而陳良楚之產。乃不學於其國。而北學於周公仲尼之道於中國。今大學不引文武周公之訓。而遠用楚人之言。最不可解焉。又曰。生財有大道。夫財者。生民之所資以生者。固不可不爲之立禁設厲。量入爲出。預講度支之方。然均無貧。和無寡。安無傾。君子詎求生財之道乎。況禮義信三者。猶不謂之大道。其於生財有大道。何哉。非孔氏之徒之言。可知矣。又曰。此謂國不以利爲利。以義爲利也。是亦以利心言之者也。孟子曰。王何必曰利。亦有仁義而已矣。夫君子之行道也。惟義是尙。而不知利之爲利也。苟有以義爲利之心焉。則其卒也。莫不捨義而取利也。蓋戰國之間。陷溺之久。人皆悅利。而自王公大人。以至於庶人。惟利之欲聞。故雖被服儒者。每憂其術之不售。必以利啗人。所謂生財有大道。又曰。以義爲利。蓋用此術也。大學非孔氏之遺書。彰々然明矣。大凡愚所著十證者。雖不悉繫乎血脉之合否。然其一二命意措詞之差。本皆因不識血脉。然則今亦不得不爲之辨。世衰道微。邪說暴行又作。孟子旣言之。今觀杜下書遠遊篇。邪說之行固已尙矣。況乎戰國之際。去聖旣遠。經殘言闕。世之學士大夫。自以爲至寶。而不知實爲邪說之所誤也。今不全爲左袵之俗者。幸孔孟之遺敎尙存故也。漢儒擇之不精。

凡人有ニ斯形一。則有ニ斯心一。有ニ斯心一。則不レ能レ無ニ忿懥恐懼好樂憂患一。苟以レ仁存レ心。以レ禮存レ心。則此四者。即仁禮之著。而天下之達道也。何惡之有。大學乃不ニ此之識一。而徒欲レ無ニ忿懥恐懼好樂憂患一。此即不レ識ニ孔孟之血脉一故也。又曰。心不レ在焉。視而不レ見。聽而不レ聞。食而不レ知ニ其味一。可レ謂ニ害レ道尤太甚一矣。非ニ惟不レ識ニ孔孟之血脉一。蓋不レ信ニ孔子一。而自欲下以ニ己之學一號中於世上者也。語曰。子在レ齊聞レ韶。三月不レ知ニ肉味一。又曰。發レ憤忘レ食。又曰。顏淵死。子哭レ之慟。從者曰。子慟矣。曰有レ慟乎。非ニ夫人之爲慟一。而誰爲。若以ニ大學一觀レ之。則可レ謂ニ孔子亦不レ免ニ放心一也。夫撰ニ大學一者。本非ニ疎漏而然一。亦非下有ニ意義一相通上。其學本不レ見ニ仁義之良一。而欲ニ剛制ニ其心一。蓋告子之流耳。又曰。正心二字。又見ニ於孟子一。然尙有ニ當レ議レ之者一。孟子曰。我亦欲下正ニ人心一。息ニ邪説一。距ニ詖行一。放ニ淫辭一。以承中三聖者上。所レ謂正ニ人心一者。謂下禁ニ民之非心一。而俾中之無中邪説暴行之甚上。與ニ大學之意一自異矣。若ニ孟子之意一。正心二字。當レ施ニ之於民一。而不レ可レ施ニ之於己一。故平生誨レ人。或曰レ存レ心。或曰レ養レ心。而未ニ嘗言一レ正レ心。其意可レ見矣已。存レ心云者。欲ニ其不下亡也。養レ心云者。欲ニ其長一也。而大學以爲。人之制レ心。當下若レ造ニ器物一。其形方正端直。一定不上レ可レ變焉。此豈識レ心者乎哉。大學曰。大學之道。在レ明ニ明德一。按明德之名。屢見ニ於三代之書一。然三代之書。本記ニ聖人之所レ行。或以レ此美ニ聖人之德一。或曰ニ明德一。或曰ニ峻德一。或曰ニ昭德一。其意一也。故雖ニ數々見ニ於典謨誓誥之間一。然非ニ學者之所ニ能當一。故至ニ於孔孟一。每曰レ仁曰レ義曰レ禮。而未下嘗有中一言及ニ於明德一者上矣。作ニ大學一者。不レ知ニ其意在一。見ニ詩書多有ニ明德之言一。而漫述レ之耳。豈非レ不レ識ニ孔孟之意一乎。又曰。爲ニ人君一止ニ於仁一。夫孔

曰。古之欲レ明二明德於天下一者。先治二其國一。欲レ治二其國一者。先齊二其家一。欲レ齊二其家一者。先修二其身一。欲レ脩二其身一者。先正二其心一。欲レ正二其心一者。先誠二其意一。欲レ誠二其意一者。先致二其知一。致レ知在レ格レ物。程子以レ此爲二古人爲レ學次第一。然而愚謂。孔孟言二爲レ學之條目一者固多。未レ聞下以二此八事一相列若レ此密上語曰。子以レ四敎。文行忠信。明夫子敎レ人之條目在二此四者一。而無二他法一也。又曰。知者不レ惑。仁者不レ憂。勇者不レ懼。明此三者天下之達德。而進レ學之敍無下出二於此一者上也。曾子曰。夫子之道忠恕而已矣。明忠恕終レ身可二以行下之。而夫子道莫下過二於是一者上也。中庸曰。爲レ政在レ人。取レ人以レ身。修レ身以レ道。修レ道以レ仁。此亦言二爲レ學次第一如レ此。何其簡而易レ從邪。大學以爲下人之進レ道若レ登二九層臺一。歷二一階一又歷二一階一。而後進至中于臺上上邪。夫道非レ他。即人之道也。以レ人脩二人之道一。何遠之有。孔子曰。仁遠乎哉。我欲レ仁。斯仁至矣。孟子曰。道在レ邇。而求二諸遠一。皆言二道之甚近一也。豈有レ如レ登二九層臺一乎。宋人嘗譏二韓子一。以下其引二大學一不中及下於格物致知上。亦不二深考一耳。孟子曰。人有二恒言一。皆曰天下國家。天下之本在レ國。國之本在レ家。家之本在レ身。非三但不レ及二於格物致知一。纔止二於家之本在一レ身。而不レ及二於正心誠意一。則又譏二孟子一以レ不レ知二大學一可乎。故知八條之目。非二孔孟之意一明矣。大學曰。修レ身在レ正二其心一者。身有レ所二忿懥一。則不レ得二其正一。有レ所二恐懼一。則不レ得二其正一。有レ所二好樂一。則不レ得二其正一。有レ所二憂患一。則不レ得二其正一。夫存レ心之道。莫レ要下於無レ所二忿懥恐懼好樂憂患一者上邪。書曰。以レ禮制レ心。孟子曰。君子以レ仁存レ心。以レ禮存レ心。又曰。居レ仁由レ義。大人之事備矣。大學乃不三以レ此爲二要。而徒欲レ無レ所二忿懥恐懼好樂憂患一。何哉。夫此四者。心之用也。

附　大學非孔氏之遺書辨

欲為孔孟之學者。不可以不讀孔孟之書。欲讀孔孟之書者。不可以不識孔孟之血脈。讀孔孟之書。而不識孔孟之血脈者。猶船之無柁。夜行之無燭。瞽者之失杖。而莫識其所嚮方也。其可乎。苟讀孔孟之書。而識孔孟之血脈。天下何書不可讀。何理不可辨。試以異端之言。雜諸聖人之書。以聖人之言。置諸異端之書。其見之如視黑白。分之如辨菽麥。隨手而取。入耳則知。不爽毫釐。不差秒忽。夫然後謂之能識孔孟之血脈也。將何以得能識孔孟之血脈。而不惑乎。夫孔子之聖。賢於堯舜遠甚。而自有生民以來。未有比其盛者矣。而孟子願學孔子。而得其宗者也。若使孔孟復生於今世。其所說所行。不可過語孟二書。則舍語孟二書。而其何以能之。誠以論語一書。其詞平正。其理深穩。增一字則有剩。減一字則不足。天下之言。於是乎極矣。天下之理。於是乎盡矣。實宇宙第一書也。孟子之書。亦羽翼論語。而其詞明白。其理純粹。非若禮記諸篇出於秦人坑燔之餘。而成於漢儒附會之手。故次論語而其言無詭者。其惟孟子乎。學者苟取此二書。沈潛反復。優游饜飫。口之而不絕。手之而不釋。立則見其參於前。在輿則見其倚於衡。如承其謦欬。如視其肺腑。不知手之舞之足之蹈之。夫然後得能識孔孟之血脈。而不為衆言淆亂之所惑也。大學一書。本在戴記之中。不詳譔人姓名。蓋齊魯諸儒熟詩書二經。而未知孔孟之血脈者所撰也。其齊家傳以下。言孝弟慈。論絜矩之道者。吾有取焉。固能得詩書之意者也。至乎其列八條目。及其所說學問之法。則不能無疑。大學

櫛章梳。逐一解說可ㇾ通。蓋人情盡二乎詩一、政事盡二乎書一、事變盡二乎易一、世變盡二乎春秋一、不ㇾ讀ㇾ詩。則不ㇾ能二以立ㇾ敎。不ㇾ讀ㇾ書。則不ㇾ能二以善ㇾ政。不ㇾ讀ㇾ易。則無三以識二事變一、不ㇾ讀二春秋一、則無三以馭二世變一、此其大義也。六經之學其邃哉。而夫子雅言獨在二詩書一者。何哉。夫人情。無二古今一無二華夷一、一也。苟從二人情一則行。違二人情一則廢。苟不ㇾ從二人情一、則猶ㇾ使三人當ㇾ夏而裘、方ㇾ冬而葛一、雖二一旦從ㇾ之。然後必廢焉。故立ㇾ敎施ㇾ政者。必不ㇾ可ㇾ不ㇾ讀二詩書一也。而聖人之爲ㇾ政也。本二於人倫一、切二於人情一、而無二虛無活澹之行一、無二功利刑名之雜一、四代之書。皆盡二君臣之道一、究二人倫之極一、而與二夫黃老無爲自化之說一、不三啻霄壤一、故詩書二經。尤平易近ㇾ情。使下人易ㇾ從易上ㇾ行。達二乎萬世一、而無ㇾ弊者也。故自二詩書一入者。其意平。而無二詭異邪僻之行一、若夫好二邪說暴行高遠不ㇾ可ㇾ及之術一者。必不ㇾ知下自二詩書一入上者也。若二佛老禪儒之說一、是也。是夫子之所下以雅二言詩書一、而諄々然爲中之敎誨上也。讀二六經一與ㇾ讀二論孟一、其法自別。論語孟子說二義理一者也。詩書易春秋不ㇾ說二義理一、而義理自有者也。說二義理一者。可二學而知一之也。義理自有者。須二思而得一之也。可二學而知一之者。顯而示ㇾ之也。須二思而得一之者。含蓄不ㇾ露者也。四經猶下天生之物不ㇾ煩二彫琢一、自然可上觀焉。語孟猶下設二權衡尺度一以待中天下之輕重長短上也。六經猶ㇾ畫也。語孟猶二畫法一也。知二畫法一而後可ㇾ通二畫理一、不ㇾ知二畫法一而能曉二畫理一者。未二之有一也。六經猶下直描二畫天地萬物之態一、纖悉不ㇾ遺。語孟猶下指二點天地萬物之理一而示中之人上、故通二語孟二書一、而後可三以讀二六經一、否則雖ㇾ讀二六經一、茫無二津涯一、瑣々訓詁。不ㇾ足三以發二明六經一也。程子曰。論語孟子既治。則六經不ㇾ治而自明矣。此言亦讀二六經一者所ㇾ當二先識一也。

蓋史官之筆。雖襲用周公之舊法。然不能無詭於聖人。故夫子削其違于義者。而筆其合于義者。故曰。其義丘竊取之矣。其取之云者。我取之於彼之辭。非夫子親爲之褒貶也。蓋當時世朴事簡。無載籍之行于世。善惡淑慝。皆與時共沒。無著于後世。故亂臣賊子肆其欲。而莫之顧於是。　夫子就魯春秋筆削之。以爲百世不刊之典。故亂臣賊子懼。

知春秋者。莫若孟子。而左氏傳獨與孟子之意相合。故讀春秋者。當以孟子語爲正。而以左氏說參之。孟子曰。世衰道微。邪說暴行有作。臣弑其君者有之。子弑其父者有之。孔子懼作春秋。春秋天子之事也。是故孔子曰。知我者。其惟春秋乎。罪我者。其惟春秋乎。蓋夫子以亂臣賊子接踵於當世。莫之能禁而作之也。是春秋之大義也。其紀日月爵位者。固書法之所在。然謂之春秋之大義。則不可。蓋聖人之脩經也。在於禁亂臣賊子之欲。而使人觀其善惡之跡。故左氏之著傳。亦備載其事之本末。而使人審覈其善惡之實。此左氏之所以知聖人之意。而與孟子之意相合也。後人惟知解義理之爲傳註。而不知記事實之爲傳註。左氏之意荒矣。所謂天子之事者。指禮樂征伐言。論語曰。天下有道則禮樂征伐自天子出。天下無道。則禮樂征伐自諸侯出。是也。而禮樂征伐。非庶人之所敢議。然以當時上無以明道者。故孔子不得已。而作之。故曰。知我罪我者。其惟春秋乎。以天子之事。爲託二百四十二年南面之權者。尤非也。

總論四經 凡二條

六經之學。當先得其大義。苟得其大義。則猶順流而下。循途而行。無甚難解者。不比他書句

歐陽子趙南塘。共深辨十翼非孔子之所作。愚謂。古之經書。莫明於魯論。亦莫正於魯論。不比詩書義理難曉。紛亂甚多。故天下之書。皆當以魯論爲正。爲之折衷。大傳曰。原始反終。故知死生之說。又曰。精氣爲物。遊魂爲變。是故知鬼神之情狀。今以論語證之。非夫子之語。彰々矣。而從卜筮。則害義。從義。則不必用卜筮。故語孟二書。未嘗言卜筮。今繫辭說卦。專爲卜筮作之。則歐陽子以爲筮人之占書。而非孔子之所作。宜矣。又以大傳何謂子曰者。爲講師之言。皆非易家之所及。歐公有易童子問。趙著易說三卷。歐說學者不可不讀。

古者易學。自有二家。彖象及文言。儒家之易也。繫辭說卦。筮家之易也。儒家之易。專明陰陽消長之變。而無一涉于卜筮者也。莊周所謂易以道陰陽。是也。彖本謂卦下之辭。今所云彖曰者。以釋卦下之辭。故亦通謂之彖。象即晉韓宣子聘魯所觀。今象曰是也。朱子從疏家一說。以爲彖象傳者。非也。二書之作。皆在夫子之前。彖以釋卦辭。象以釋爻辭。而象不及卦下之辭者。蓋存于彖也。以此觀之。則彖又在象之前。可知矣。繫辭本乎儒家之易。而以卜筮爲主。歐陽子爲筮師之作。是也。說卦專說卜筮。皆筮家之易也。程傳雖從繫辭。實與彖象之旨合。深知易者。自識之矣。

春秋 凡二條

春秋者。魯史記之名也。蓋魯史官因周公之舊法典禮。而著善惡之跡。故謂之魯春秋。晉韓宣子之所觀。是也。周道既衰。邪說暴行有作。臣弑其君者有之。子弑其父者有之。故孔子懼而作春秋。

乎戰國㆒。秦遂焚㆑書。先王之道中絕。漢興久㆑之。詩書稍出。而不㆑完。當㆓王道中絕之際㆒。奇書異說。方充斥而盛行。其言往々反自託㆓於孔子之徒㆒。以取㆓信於時㆒。學者既不㆔備見㆓詩書之詳㆒。而習㆓傳盛行之異說㆒。世無㆓聖人以爲㆒㆑質。而不㆕自知㆔其取㆓捨眞僞㆒。至㆑有㆘博學好㆑奇之士。務㆓多聞㆒以爲㆑勝者㆖。於㆑是。其盛盡集㆓諸說㆒。而論次。初無㆑所㆑擇。而惟恐㆑遺㆑之也。嗚呼。堯舜禹湯文武之道。百王之取㆑法也。其盛德大業見㆓於行事㆒。而後世所㆑欲㆑知者。孔子皆已論㆓著之㆒矣。其久遠難㆑明之事。後世不㆓必知㆒。不㆑知不㆑害㆑爲㆓君子㆒者。孔子皆不㆑道也。夫孔子所㆔以爲㆓聖人㆒者。其智知㆑所㆓取捨㆒。皆如㆑此。歐陽子此論。最有㆑補㆓于世敎㆒。雖㆓閩洛諸君子㆒。猶有㆓所㆑不㆑及者㆒也。凡爲㆓三皇五帝之論㆒者。皆出㆓於戰國讖緯雜家之說㆒。而非㆓孔子之旨㆒。若㆓歐陽子㆒者。可㆑謂㆔能得㆓聖人之旨㆒也。予故表而出㆑之。

易　凡三條

凡學㆓孔子之道㆒者。當㆑從㆓孔子之言㆒也。欲㆑學㆓孔子之道㆒。而不㆑從㆓孔子之言㆒者。是叛㆓孔子㆒者也。語曰。加㆓我數年㆒。五十以學㆑易。可㆔以無㆓大過㆒矣。愚謂。六十四卦。三百八十四爻。一言以藏㆑之。曰。可㆔以無㆓大過㆒矣。夫日中則昃。月盈則虧。故避㆓盈滿㆒。而處㆓退損㆒。易之敎也。昔者聖人。深究㆓陰陽消長之變㆒。而明著㆓進退存亡之道㆒。六十四卦。三百八十四爻。總莫㆑非㆑發㆓明此理㆒。故可㆔以無㆓大過㆒矣之一言。實足㆓以藏㆒㆑之矣。大凡區區象數卜筮之學。皆非㆓夫子之意㆒也。而程子從㆓孔子㆒。而以㆓義理㆒解㆑之。朱子從㆓文王周公㆒。而以㆓卜筮㆒爲㆑主。愚謂。易之爲㆑書也。夫子以前。固爲㆓卜筮之書㆒。然六經永爲㆓孔氏之書㆒。則易書固當㆘以㆓程子㆖爲㆑是。

引二舜典一。而稱二堯典一。則古二篇合而爲二一篇一。明矣。三苗之征。泰誓之年數。其理不レ得二明暢一者。皆因三過信二古文一也。孟子曰。讀二其書一。不レ知二其人一。可乎。唐虞三代之間。其議論皆在三於脩レ政知レ人之間一。而未三嘗有二心性之論一。古文尙書多說レ心說レ性。最非二唐虞三代之口氣一。其害二于道一。甚多矣。讀レ書者。須丙先明下夫子祖二述堯舜一之意上。而後始讀乙四代之書甲。不レ然。則必眩二於無爲自化荒唐繆妄之說一。而看二聖人之書一。必有二不レ滿之意一。故不レ能レ得二其理一。孔安國曰。伏犧神農黃帝之書。謂二之三墳一。言二大道一也。少昊顓頊高辛唐虞之書。謂二之五典一。言二常道一也。所レ謂大道者。蓋言三甚廣大。而非二常道之所一レ及也。然而。觀下夫子特取二唐虞二典一。而三皇三帝之書皆黜上レ之。則知其所レ謂大道者。必是磅礴廣大。不レ切二於人倫一。不レ近二於日用一。無レ益二於天下國家之治一者也。惟堯舜之道。爲三能究二人道之極一。而萬世不易中庸之至。而夏商周之道。亦皆準二堯舜之法一。而一無下爲二無爲自化之說一者上。藉令百世之後。有二聖人者一出。然蔑三能出二於唐虞三代之上一。而老莊氏所レ謂無爲自化之說。皆繆妄不經。不レ可レ爲レ訓矣。學者知二此理一。而後正得二夫子定レ書之意一。而於二四代之書一。深知三其造下至極上而不二復可一レ加焉。

歐陽子曰。堯舜禹湯文武。此六君子者。可レ謂二顯人一矣。而後世猶失二其傳一者。豈非レ以二其遠一也哉。是故。君子之學。不レ窮レ遠以爲一レ能。而闕二其不一レ知。愼レ所二傳以惑一レ世也。方二孔子時一。周衰學廢。先王之道不レ明。而異端之說並起。孔子患レ之。乃修二正詩書史記一。以止二紛亂之說一。而欲二其傳之信一也。故畧二其遠一。而詳二其近一。於レ書斷二自下唐虞上以來一。著下其大事可三以爲二世法一者上而已。至二於三皇五帝君臣世次一。皆未二嘗道一者。以二其世遠一。而愼レ所レ不レ知也。孔子既沒。異端之說復興。周室亦益衰亂。接二

廢小序。而悉據經文。則事多有害于義者。桑中詩曰。云誰之思。美孟姜矣。二章曰。云誰之思。美孟弋矣。三章曰。云誰之思。美孟庸矣。如朱子之所說。則是一人。而相期約於三人乎。三人各有所期約乎。丘中有麻詩曰。丘中有麻。彼留子嗟。又曰。丘中有麥。彼留子國。山有扶蘇曰。不見子都。乃見狂且。又曰。不見子充。乃見狡童。是一人而私二人乎。二人各有所私乎。若謂二人各有所私。則此一首詩。而出於二人之手也。若謂一人而私二人。則一幽僻地。不可同留二人也。羞惡之心。人皆有之。雖淫奔者。不可自發其奸。其不相通也。如此。故悉廢小序。而直據經文。則國風諸篇。類皆爲淫奔者之所自作。而美刺之旨不明矣。故曰。事多有害於義者。正爲此也。

書　凡三條

六經。莫古於書。而散亡僞撰。亦莫甚於書。然而。堯舜禹湯文武之書。尙多在。學者當因其存。而察其亡。信其當信。而疑其當疑。則聖人之大經大法。畧足觀焉。而其散亡僞撰之甚。亦不足以爲害也。尙書有今文古文之別。今文二十九篇。出於秦博士伏勝之口授。寫以漢世文字。故名今文尙書。古文五十八篇。武帝時。魯恭王壞孔子宅。得竹簡書。皆科斗文字。故號古文尙書。遇巫蠱之禍。而不行。遂廢矣。歷四百餘年。東晉以來。稍行於世。至於隋開皇中。始全。故今今文古文並行。然朱子吳臨川梅鷟之徒。皆疑古文之非眞。其言鑿々乎有據。凡古人作一篇文字。必有起結。若堯典。其終只曰。釐降二女於嬀汭。嬪于虞。帝曰。欽哉。此豈足結一篇之終乎。且孟子

詩之情也。是讀詩之法也。若鄭箋朱傳。徒著作詩之來由。而不知本之於古人讀詩之法。惜哉。

詩有六義。曰風賦比興雅頌。是也。鄭箋朱傳。皆以國風二雅三頌爲三經。賦比興爲三緯。諸家終不能改其說。愚竊謂。國風雅頌。是詩之體。非義。如鄭箋朱傳之說。則是詩只有三義。而無六義。又只當以風雅頌賦比興爲叙。而不可言風賦比興雅頌爲叙。則三經三緯之說。最可疑焉。予故謂。詩六義。亦當不在作者之意。而在讀者之所用如何。蓋風賦是一類。比興是一類。雅頌是一類。風賦在尋常之所用。比興在臨時而寓意。雅頌取於音聲。何以言之。觀左氏傳。列國士大夫。以詩贈答。皆曰賦某詩。或曰賦某詩第幾章。如此。則三百篇皆可以爲賦。論語曰。可以興。則三百篇。亦可以爲興。周禮有豳雅豳頌之稱。而豳風一詩。或以爲雅。或以爲頌。則三百篇。亦可以爲雅爲頌。故一詩各具六義。而六義通於三百篇之中。古人用詩之法。豈不大且廣乎。而於風賦比興雅頌之叙。其義又自分明矣。又按。周禮大師。以六義敎王之子弟。若鄭箋朱傳所謂。則鯫生小子皆可能通其義。奚待大師之敎乎。

詩有美刺。蓋詩之作。有有作者者。有無作者者。大抵當時不知誰人所作。或作詩以諷人之淫。或本無此事。而託詞以見其情。朝野流傳。以相詠歌耳。非專有意美某人刺某人也。後之錄詩者。或國史。或採詩官。撮其大意。爲某詩美某人。某詩刺某人。今之小序。是也。而朱子悉廢小序。而直據經文。以著其義。然後之諸儒多言。小序不可廢焉。其說皆有明據。愚又謂。若

學問未レ闢。直至二孔子一。而始斬新開闢。猶下日月之麗二于天一。而萬古不上レ墜。故三代以前之書。當下以二三代以前之說一求上レ之。而孔孟之書。當下以二孔孟之旨一解上レ之。各識二其理之所一レ在可矣。

夫人所三以信二卜筮一者。神二明之一也。卜筮果神明邪。其事吉。則吉兆應。其事凶。則凶兆應。而後可。南蒯將レ叛。筮レ之得二黃裳元吉之兆一。蒯吉レ之。叛而敗。蒯叛人也。而以二吉兆一告。神明何益。卜筮果神明邪。其事吉。則卜筮并吉。其事凶。則卜筮共凶。而後可。晉獻公欲下以二驪姬一爲中夫人上。卜レ之不吉。筮レ之吉。同占二此事一。一吉一凶。無レ所二適從一。神明豈若レ此乎。故卜筮之說。雖三多載二于三代之書一。然至二于語孟二書一。無下一言及二于此一者上。蓋聖人以レ義爲レ斷。而使三人不レ惑二於不レ可レ知之途一。此吾夫子之所下以度二越乎三代聖人一。而永爲中萬世之宗師上也。

詩 凡三條

讀レ詩之法。善者可三以感二發人之善心一。惡者亦可三以懲二創人之逸志一。固也。然而詩之用。本不レ在二作者之本意一。而在二讀者之所一レ感如何。蓋詩之情千彙萬態。愈出愈無レ窮。高者見レ之。則爲レ之高。卑者見レ之。則爲レ之卑。爲レ圓爲レ方。隨二其所一レ遇。或大或小。從二其所一レ見。棠棣之詩。淫奔之辭也。夫子取レ之。以明二道之甚邇一。旱麓之詩。詠二歌文王之德一也。子思引レ之。以明三道之無二所レ不レ在。憂心悄々。慍二于群小一。衛莊姜之怨レ不レ獲二於其君一也。孟子引レ之。以爲三孔子之事。他人有レ心。予忖二度之一。大夫傷二於讒一。而訴二於天一也。齊宣王引レ之。以嘉二孟子之能察二己之心一也。學者觀レ此。可三以悟二讀レ詩之法一矣。夫子特許二子貢子夏一。以下始可二與言一レ詩已矣上者。蓋以下非二二子之穎悟文學一。不レ足三以盡二

所一レ好。信ニ民之所一レ信。以ニ天下之心一爲レ心。而未下嘗以ニ聰明一先中于天下上。故民崇ニ鬼神一則崇レ之。民信ニ卜筮一則信レ之。惟取ニ其直レ道而行一焉已。故其卒也。又不レ能レ無レ弊。及レ至ニ于夫子一。則專以ニ敎法一爲レ主。而明ニ其道一。曉ニ其義一。使ニ民不一レ惑ニ于所一レ從也。孟子所レ謂賢ニ於堯舜一遠矣。正謂レ此耳。樊遲問レ知。子曰。務ニ民之義一。敬ニ鬼神一而遠レ之。可レ謂レ知矣。又曰。子不レ語ニ怪力亂神一。子路問レ事ニ鬼神一。子曰。未レ能レ事レ人。焉能事レ鬼。此皆見乙聖人深恐下人之不レ務ニ力於人道一。而或惑中於鬼神之不上レ可レ知。而言甲レ之也。然祭如レ在。祭レ神如ニ神在一。鄉人儺。朝服而立ニ於阼階一。則又觀三其於レ所レ當レ敬。則未ニ嘗不一レ盡レ敬。此吾夫子之所下以明ニ其道一曉ニ其義一。使ニ人不一レ惑ニ於所一レ從。而與ニ三代之聖人一有上レ不レ同也。由レ是觀レ之。則凡記禮等書。稱ニ子曰一。或稱ニ孔子曰一。諸論ニ鬼神一之言。皆出ニ於漢儒之假託僞撰一。而非ニ夫子之言一。彰々明矣。

卜筮之說。世俗之所ニ多悅一。而甚害ニ於義理一。故語孟二書。未下嘗有中言ニ卜筮一者上。何者。從レ義。則不三必用ニ卜筮一。從ニ卜筮一。則不レ得レ不レ捨レ義。義當レ去矣。而卜筮不レ利レ去。則將從レ義乎。從ニ卜筮一乎。義當レ就矣。而卜筮不レ利レ就。則將從レ義乎。從ニ卜筮一乎。義不レ可レ進矣。而卜筮利レ進。則將從レ義乎。從ニ卜筮一乎。義不レ可レ退矣。而卜筮利レ退。則將從レ義乎。從ニ卜筮一乎。義當レ生則生。義當レ死則死。在レ己而已。何待ニ卜筮一而決レ之也。君子去就進退用捨行藏。惟義之所レ在。奚問ニ利不利一爲。是孔孟之所四以未三嘗言ニ卜筮一也。論語不レ恒ニ其德一。或承ニ之羞一。子曰。不レ占而已矣。蓋言不レ恒之羞。不レ待ニ占決一。而知ニ其凶一也。由レ是觀レ之。則夫子之不レ用ニ卜筮一。益明矣。故愚嘗謂。三代之時。敎法未レ立。

者非ニ心服一也。力不レ贍也。以レ德服レ人者。中心悅。而誠服也。此王霸之辨也。荀子曰。粹而王。駁而霸。其言雖ニ近似一。然而推度之見。非下知ニ王道一者之言上也。蓋王者之治レ民也。以レ子養レ之。霸者之治レ民也。以レ民治レ之。以レ子養レ之。故民亦視レ上如ニ父母一。以レ民治レ之。故民亦視レ上如ニ法吏一。如ニ重將一。雖下奔走服役從ニ其命一之不上レ暇。然實非ニ心服一。有レ禍則避。臨レ難則逃。不下與レ君同ニ患難一。其設レ心之異。在ニ毫釐之間一。而民之所ニ以應一レ上者。有ニ霄壤之隔一。非ニ徒粹駁之異而已一。

王者。以レ德爲レ本而未ニ嘗無一レ法。然法者。其所ニ以敷一レ德。而非ニ其所一レ恃也。霸者。以レ法爲レ本。而假レ德以行レ之。然而不レ能ニ實有ニ其德一。及ニ乎五霸既沒。時世益衰。而專任ニ法術一。不ニ復知一レ假レ德。於レ是有ニ刑名之學一。王不レ待レ雜レ霸。霸不レ待レ任ニ法術一。而任ニ法術一者。不レ能レ當レ霸。霸不レ得レ當レ王。蓋大能制レ小。小不レ能レ敵レ大也。

鬼神　附卜筮凡四條

鬼神者。凡天地山川宗廟五祀之神。及一切有ニ神靈一能爲ニ人禍福一者。皆謂ニ之鬼神一也。朱子曰。鬼者陰之靈。神者陽之靈。其意蓋以謂。雖レ有ニ鬼神之名一。然天地之間。不レ能下外ニ陰陽一而有中所レ謂鬼神者上。故曰云云。可レ謂ニ固儒者之論一也。然今之學者因ニ其說一。徒以ニ風雨霜露日月晝夜屈伸往來一爲ニ鬼神一者。誤矣。

鬼神之說。當下以ニ論語所レ載夫子之語一爲上レ正。而不レ可下以ニ其他禮記等議論一雜上レ之也。按。夫子論ニ鬼神一之說。載ニ魯論一者纔數章而止。至ニ於孟子一。無下一論ニ鬼神一者上。蓋三代聖王之治ニ天下一也。好ニ民之

大不レ同。

人之所三以爲二學者一。在下自進二君子之道一。而不上レ爲二小人之歸一。然不レ明二乎君子小人之辨一。則於二君子之心一。不レ知二其如何一。而不レ覺レ流二乎小人之趣一矣。故夫子每々對二擧君子小人一。而深究下其所三以相反二之狀上。其所三以爲二學者一之意。甚爲二深切一。不レ可レ不レ察焉。伊川先生曰。有下欲レ爲二聖人一之心上。而後可二與共學一。可レ謂二確言一。固漢唐諸儒之所レ不レ及。然其眞實有レ志。超然卓犖。度三越流俗一者。固可。若二中人之資一。以レ此爲レ志。必有下躐レ等凌レ節。自立二標準一之病上。不レ如下以二君子一自期待之無上レ弊。聖門所レ稱君子之道者。亦與レ稱二聖人之道一。自夐別矣。蓋君子之道。謂下平易從容。無二過不及一。而萬世不易之常法上。若下子產有二君子之道四一。又曰。君子之道四。丘未レ能二一焉。又曰。君子之道。造二端乎夫婦一。又曰。君子之道。淡而不レ厭。簡而文等語上。是也。唯費而隱之語。與二論語中庸諸章一。大不レ同。蓋註家不レ知二聖人之旨一。而錯三解之一耳。中庸曰。君子之道。闇然而日章。隱字當下作二闇字意一解上レ之。

王霸　凡三條

王者。有二天下一之稱。霸者。諸侯之長。當初未レ有二王霸之辨一。文武之後。王綱解レ紐。號令不レ行二於天下一。桓文互興。約二與國一。務二會盟一。而不レ能三以レ德服二天下一。於レ是。王霸之辨興。非二必以レ霸爲一レ非也。觀三文王之爲二西伯一。可レ見矣。後世又有二皇帝王霸之論一。儒者誦レ之。然孔子之所レ不レ言。孟子之所レ不レ論。蓋戰國縱橫雜家之說。闕レ之可矣。

王霸之辨。儒者之急務。不レ可レ不二明辨一焉。孟子曰。以レ力假レ仁者霸。以レ德行レ仁者王。以レ力服レ人

說一。宋儒有下權非二聖人一不レ能レ行之論上。其他非二議孟子之說一者。皆不レ知三道爲二天下公共之物一。而漫爲二臆說一耳。噫。

聖賢 一條

聖字。古昔或以名二其德一。或以命二其人一。不レ如三後世所レ稱截然有二階級一也。周禮以レ聖居二六德之一一。孔門或以レ仁連稱。或以レ智併論。又或爲下兼二仁智一之稱上。未レ有二明訓之可一レ據。竊以謂。聖字或知或行。各造二其極一。不レ可二測識一之稱。洪範曰。思曰レ睿。睿作レ聖。中庸又稱二聰明聖知一。此謂三智之造二其極一也。孟子以二伯夷伊尹柳下惠一。皆爲二聖人一。而以レ智譬二射之巧一。聖譬二射之力一。而三子之所三以不レ及二乎孔子一者便在二於智之不一レ足焉。則聖者。又行造二其極一之稱也。而自二可レ欲之善一。而充レ之。至三於大而化レ之爲二聖人一。似下亦行造二甚極一之稱上。賢字亦非レ若三後世所レ號必有二階級一也。觀下孔子以二伯夷叔齊一爲古之賢人一。而孟子以二伯夷一爲二聖人一。宰我論二孔子一。則亦爲レ賢二於堯舜一。後世論二孟子一。或以二賢聖二字一連中稱之上。則知古人所レ云聖賢之稱。不レ如二後人之甚泥一也。

君子小人 凡三條

君子小人之稱。雖レ有下以レ位言。與二以レ德言一之別上。然本主レ位而言。蓋天子諸侯。謂二之君一。卿大夫。謂二之子一。而郊野細民。謂二之小人一。君子小人之稱。蓋取二於此一。夫爲二人之上一者。其人宜レ氣象老成。智識遠大。足三以爲二天下之儀表一。故有二其德一者。雖レ無二其位一。又謂二之君子一。尊二其德一也。其人猥瑣卑微。僞詐褊愉。有二細民之氣象一者。雖レ在レ位。又謂二之小人一。鄙二其人一也。此與二賢不肖善人不善人之稱一。

漢儒以二反レ經合一レ道爲レ權。程子非レ之。最是。經即是道。既是反レ經。焉能合レ道。蓋漢儒見下孟子所レ謂男女授受不レ親禮也。嫂溺援レ之以レ手者權也上。遂以爲。權者反レ經合レ道。今詳二孟子之意一。權字當下以二禮字一對上。不レ可下以二經字一對上。蓋禮可二因レ時而損益一。經歷二萬古一而不レ易。故孟子以二權與一レ禮相對。而未下嘗以二經字一相對上。正爲レ此也。又謂。權者濟二經之所一レ不レ及。亦未レ盡。權即是經。經即是權。權每在二經之中一。不二與レ經相離一矣。唯當レ謂二權以濟一レ經。若謂レ濟二經之所一レ不レ及。則猶有下以二經字一對之意在上。

論語曰。可二與立一。未レ可二與權一。蓋難二其人一也。非レ謂レ不レ可レ用レ權也。難二其人一。益見二其不一レ可レ不レ用也。蓋示二學問之至要一。而學者之不レ可レ不レ勉也。先儒以謂。權須是理明義精。方可レ用レ權。若然。則未レ到二理明義精之極一。便將置而不レ用歟。何以異下夫謂中醫非二盧扁倉公一。唯全因二古方一。不上レ容二加減一。奚以貴二學問一爲。

先儒又謂。如三湯武放伐。伊尹放二太甲一。是權。此亦不二深考一耳。若三伊尹之放二太甲一。固是權。如二湯武之放伐一。可レ謂二之道一。不レ可レ謂二之權一。何哉。權者。一人之所レ能。而非二天下之公共一。道者。天下之公共。而非二一人之私情一。故爲二天下一除レ殘。謂二之仁一。爲二天下一去レ賊。謂二之義一。當時籍令二湯武不一レ放二伐桀紂一。然其惡未レ悛焉。則必又有下若二湯武一者上誅レ之。不レ在レ上。則必在レ下。一人不レ能レ之。則天下能レ之。子嬰被レ殺二於咸陽一。隋煬受二戮於江都一。非三項氏宇文所二能爲一也。蓋以レ合二於天下之所一レ同欲也。唯湯武不レ狥二己之私情一。而能從二天下之所一レ同然。故謂二之道一。漢儒不レ知二此理一。故有二反レ經合レ道之

作之者。我無是也。多聞擇其善者而從之。多見而識之。知之次也。又曰。多聞闕疑。愼言其餘。則寡尤。多見闕殆。愼行其餘。則寡悔。言寡尤。行寡悔。祿在其中矣。可見以見聞爲用。而非若今人之專以靠書冊講義理爲學問之類也。孟子所謂存養擴充之類。皆即是學。先儒云。學兼知行而言。得之矣。

學問之法。予岐而爲二。曰血脉。曰意味。血脉者。謂聖賢道統之旨。若孟子所謂仁義之說。是也。意味者。即聖賢書中意味。是也。蓋意味。本自血脉中來。故學者當先理會血脉。若不理會血脉。則猶杠之無柁。宵之無燭。茫乎不知其所底止。然論先後。則血脉爲先。論難易。則意味爲難。何者。血脉猶一條路。既得其路程。則千萬里之遠。亦可從此而至矣。若意味。則廣大周偏。平易從容。自非具眼者。不得識焉。予嘗謂。讀語孟二書。其法自不同。讀孟子者。當先知血脉。而意味自在其中矣。讀論語者。當先知其意味。而血脉自在其中矣。

權　凡四條

程子曰。權稱鍾也。所以稱物而知輕重者也。夫稱鍾之爲物。所以隨衡之斤兩。或前或却。定其輕重者也。故權字取稱鍾之義。學問之不可無權。以此也。夫時有古今。地有都鄙。家有貧富。人有貴賤。事之千條萬緒。物之大小多寡。紛々藉々。不可名狀。無權以制之。何以能得其當。而合于道。猶臨敵之將。因勢制勝。隨地排陣。以奇爲正。以正爲奇。出入變化。不可拘以一律。故曰。執中無權。猶執一也。言權之不可不用也。

仁勇三者。天下之達德也。明レ之。斯爲二有道之人一。得レ之。斯爲二有德之人一。蓋人之性有レ限。而天下之德無レ窮。欲下以二有レ限之性一。而盡中無レ窮之德上。苟不レ由二學問一。則雖レ以二天下之聰明一。不レ能。故天下莫レ貴二乎學問之功一。又莫レ大二於學問之益一。而非中但可三以盡二我性一。又可三以盡二人之性一。可三以盡二物之性一。可三以贊二天地之化育一。可下以與二天地一並立而參上矣。若欲下廢二學問一。而專循中我性上焉。則不三翅不レ能下盡二人物之性一。而贊中天地之化育上。必也雖二我性一。亦不レ能レ盡矣。故孟子曰。人之有二是四端一也。猶三其有二四躰一也。凡有二四端於我一者。知二皆擴而充一レ之矣。若二火之始然。泉之始達一。苟能充レ之足三以保二四海一。苟不レ充レ之。不レ足三以事二父母一。所レ謂足三以保二四海一者。指二仁義禮智之效驗一而言。夫四端之在二於我一。猶二涓々之泉。星々之火。萠蘗之生一。苟擴二充之一。而成二仁義禮智之德一。則猶下涓々之水。可二以放一レ海。星々之火。可二以燎一レ原。萠蘗之生。可中以參上レ雲。故曰。苟得二其養一。無二物不一レ長。苟失二其養一。無二物不一レ消。所レ謂充。所レ謂養。即以二學問一而言。人性雖レ善。然不レ充レ之。不レ足三以事二父母一。則性之善。不レ可レ恃焉。而學問之功。最不レ可レ廢焉。吾故曰。人之性有レ限。而天下之德無レ窮。欲下以二有レ限之性一。盡中無レ窮之德上。非レ由二學問一。其能レ之乎。然非二性之善一。則雖二學問之功一。亦無レ所レ施。故性之善可レ貴焉。學問之功大矣。是孔子所三以不二以レ率レ性爲一レ言。專以二學問一敎レ人。而孟子所三以屢道二性善一。而以二擴充之功一爲中其要上也。此聖門立レ敎之本旨也。

學問以二道德一爲レ本。以二見聞一爲レ用。孔子曰。有二顏回者一。好レ學。不レ遷レ怒。不レ貳レ過。可レ見聖人以レ修二道德一爲二學問一。而非下若二今人之以二道德一爲二道德一。以二學問一爲中學問上也。又曰。蓋有二不レ知而

以ニ此二字一容易看過。不ニ深留ヲ意。故今表而出レ之。蓋聖人示レ人切要之語也。

學 凡四條

學者效也覺也。有レ所ニ效法一而覺悟也。按。古學字。即今效字。故朱子集註曰。學之爲レ言。效也。白虎通曰。學覺也。覺ニ悟所ㇾ不ㇾ知也。學字之訓。兼ニ此二義一。而後其義始全矣。所レ謂效者。猶レ學レ書者。初只得丙臨ニ摹法帖一。效乙其筆意點畫甲。所レ謂覺者。猶下學レ書既久。而後自覺中悟古人用レ筆之妙上。非ニ一義之所ニ能盡一也。集註曰。後覺者。必效ニ先覺之所ㇾ爲。又含ニ覺字之意一在。學者多不レ察。

學問當レ識ニ聖人立レ教之本旨如何一。於レ是一差。必入ニ于異端一。可レ怕。佛氏專貴レ性而不レ知ニ道德之爲ニ最尊一矣。聖人專尊ニ道德一。而存レ心養レ性。皆以ニ道德一爲ニ之主一。夫有下充ニ滿天地一。貫ニ徹古今一。自不ニ磨滅一之至理上。此爲ニ仁義禮智之道一。又此爲ニ仁義禮智之德一。所レ謂道德之爲ニ最尊一者。是已。孔子曰。道二。仁與ニ不仁一而已矣。孟子曰。仁人之安宅也。義人之正路也。又曰。居ニ天下之廣居一。立ニ天下之正位一。行ニ天下之大道一。蓋溫和慈愛含弘容レ物。之謂レ仁。反レ之。則爲ニ殘忍刻薄之人一。辨別取舍截然不レ紊。之謂レ義。反レ之。則爲ニ貪冒無耻之人一。尊卑貴賤品節有レ等。之謂レ禮。反レ之。則爲ニ僭差暴慢之人一。是非分明善惡無レ惑。之謂レ智。反レ之則爲ニ冥然無レ覺之人一。推ニ仁之極一。則堯之光ヨ被ニ四表一格ニ于上下一。是也。推ニ義之極一。則祿レ之以ニ天下一弗レ顧。是也。推ニ禮之極一。則天高地下萬物散殊。是也。推ニ智之極一。則百世以俟ニ聖人一而不レ惑。是也。偏ニ於人心一。準ニ於四海一。由レ此則爲レ人。不レ由レ此則禽獸。故聖人立ニ此四者一。以爲ニ人道之極一。而敎ニ人由レ此焉而行ヲ之。故易曰。立ニ人之道一。曰仁與レ義。中庸曰。知

レ己以安ト人。仲弓曰ニ居敬而行簡一。而下又續レ之曰中以臨ニ其民一不ニ亦可一乎上。則此二語。亦以レ敬ニ民事一而言。非下徒守ニ敬字一之謂上。

大學或問曰。敬之一字。聖學之所ニ以成レ始而成ト終者也。朱子又曰。敬者。一心之主宰。萬事之根本。愚謂。不レ然。聖門之學。以ニ仁義一爲レ宗。而忠信爲レ主。孔子曰。一言而可ニ以終レ身行ト之者。其恕乎。曾子曰。夫子之道。忠恕而已矣。未下嘗以レ敬爲中聖學之成ニ終始一。而萬事之根本上。設若果如ニ宋儒之所ト說。則唯聖人言レ敬諸章。乃爲ニ學問緊要之功一。而其他聖人千言萬語。舉皆爲ニ無用之長物一。豈可乎哉。孔子曰。言忠信行篤敬。雖ニ蠻貊之邦一行矣。敬固爲ニ學者之切務一。然忠信篤敬四者。廢レ一則不可。徒謂下守ニ一敬字一乃可上。則大非ニ聖人之意一。譬則醫之處レ方。有ニ君藥一。有ニ臣藥一。有ニ佐使藥一。衆藥兼用。而後成レ方。若謂ミ一敬字能該ニ盡聖學之始終一。則猶レ言丁用ニ一味橘皮一乃可丙。不丙必用乙補中益氣全湯甲。其雖レ用ニ參茋之類一。猶レ不レ得レ奏ニ全方之效一。況一橘皮乎。語曰。好レ仁不レ好レ學。其蔽也愚。好レ知不レ好レ學。其蔽也蕩。可レ見雖ニ仁智之達德一。徒專好レ之。而不ニ學以照ト之。則猶不レ免ニ於有ト蔽況於ニ一敬一乎。其與ニ孔門之學一同乎。不レ同。不レ辨而明矣。

和直　一條

和直二字。意義明白。無ニ難レ解者一。然論語一部。言及ニ於此二字一者。不レ知ニ其幾一。殆與ニ敬字一相稱。然人知レ主レ敬。而不レ知ミ此二字最爲ニ聖門緊要之語一。蓋和不ニ暴厲一。直不ニ邪曲一。和者自寬。直者自正。和者無ニ圭角之露一。直者無ニ智計之巧一。入レ德之體。立レ心之要。學者必不レ可レ不ニ注レ心受用一。後世儒者。

來。春生了便夏長。秋殺了便冬藏。萬古常如レ此。是眞實無妄之謂也。然春當レ温。而反寒。夏當レ熱。而反冷。秋當レ涼。而反熱。冬當レ寒。而反暖。夏霜冬雷。冬桃李華。五星逆行。日月失レ度之類。固爲レ不レ少焉。豈謂二之天不一レ誠。可乎。蘇子曰。人無レ所レ不レ至。惟天不レ容レ僞。此言得レ之矣。所レ謂誠レ之。與レ主二忠信一。意甚相近。然功夫自不レ同。主二忠信一。只是盡二己之心一。朴實行去。誠レ之者。擇二當レ理與一レ否。而取二其當レ理者一。固執レ之之謂。

誠者。道之全體。故聖人之學。必以レ誠爲レ宗。而其千言萬語。皆莫レ非レ所レ以使三人盡二夫誠一也。所レ謂仁義禮智。所レ謂孝弟忠信。皆以レ誠爲二之本一。而不レ誠。則仁非レ仁。義非レ義。禮非レ禮。智非レ智。孝弟忠信。亦不レ得レ爲二孝弟忠信一。故曰。不レ誠無レ物。是故。誠之一字。實聖學之頭腦。學者之標的。至矣大哉。聖人之道。誠而已矣。猶二佛氏曰レ空。老氏曰一レ虛。言聖人之道。莫レ非二實理一也。而實與レ虛。猶二水火南北一。一彼一此。懸隔離絕。不二相入一矣。然今之學者。以二虛靈虛靜虛中等理一。爲二學之本源一。而不レ知下其本自二老子一來上。或以レ虛命二其名一。或以レ虛扁二其齋一。何哉。根本既差。枝葉從繆。不レ可二縷擧一。學者不レ可レ不三句々著レ意。辨究推察。以歸二之于一是之地一也。

敬 凡二條

敬者。尊崇奉持之謂。按。古經書或說レ敬レ天。或說敬二鬼神一。或說レ敬レ君。或說レ敬レ親。或說レ敬レ兄。或說レ敬レ人。或說レ敬レ事。皆尊崇奉持之意。無下一謂三無レ事徒守二敬字一者上。惟夫子曰。修レ己以敬。仲弓所レ謂居敬而行簡二語。似二乎今之所レ謂持敬主敬之功一。然觀下夫子曰二修レ己以敬一。而下又曰二君子修

終身行之者。其恕乎者。何哉。曰。聖人之道。專以待人接物爲務。而不居然以守心持敬爲事。仁義固道之本體。雖忠恕之功。亦不能不以仁義爲本。然至於待人接物。必以忠恕爲要。蓋存養在仁義。待人在忠恕。苟忠立恕行。則心弘道行。可以至於仁。故曰。强恕而行。求仁莫近焉。曾子所謂忠恕而已矣。夫子曰。可以終身行之。蓋爲此也。後世學者。知獨善其身。而其功不遑及於人。故視忠恕。泛然若非緊要焉者。此後世之所以不及於古人也。後世學問所以大差聖人之意者。專由以持敬致知爲要。而不知以忠恕爲務也。蓋道本無分人己。故學亦無分人己。苟非忠以盡己。恕以忖人。則不能合人己而一之也。故欲行道成德。則莫切於忠恕。又莫大於忠恕。苟以忠恕爲心。則萬般功夫。總有與物共之之意。而不至獨善其身而止。故持敬致知。皆爲我成德之地。否。則所謂喫木饅頭者。而與異端專務清淨。踈外人事者。相去不甚遠矣。若使晦翁聞之。必謂。功夫顚倒。不作次第。殊不知聖門之學。通於天下。達於人倫。非若異端之徒蔑視人事。彼自彼此自此。支離隔斷。不相濟用也。故曰。終身可以行之也。若曰致知功夫既熟。而後從事於忠恕。則是終身無用恕之日。可弗思乎哉。

誠　凡四條

誠實也。無一毫虛假。無一毫僞飾。正是誠。朱子曰。眞實無妄。之謂誠。其說當矣。然凡文字。必有反對。得其對。則意義自明矣。誠字與僞字對。不若以眞實無僞解之之最爲省力。北溪曰。誠字本就天道論。只是一箇誠。天道流行。自古及今。無一毫之妄。暑往則寒來。日往則月

至以刻薄待之。趨人之急。拯人之艱。自不能已。其德之大。有不可限量者也。孔子曰。可以終身行之矣。不亦宜乎。

程子曰。推己之謂恕。愚以謂。推己非恕。乃用恕之要。蓋恕以後之事也。程子所謂推己者。即己所不欲勿施於人之意。蓋因夫子子貢問答云爾。然使恕字有推己之義。則及乎子貢問曰有一言而可以終身行之者。而夫子唯曰其恕乎可也。而不可復曰己所不欲勿施於人也。既曰其恕乎。而又曰己所不欲勿施於人。則其意既重復。故知恕字之義。本非推己之意。夫子答仲弓問仁曰。己所不欲。勿施於人。子貢曰。我不欲人之加諸我也。吾亦欲無加諸人。若使恕字有推己之義。則夫子子貢直可以恕字命之。而不可敷衍其詞若此甚繁也。觀夫子答子貢。曰其恕乎。而於其下。曰己所不欲勿施於人。則知推己即行恕之要。而本非恕字之義也。且中庸曰。忠恕違道不遠。而其下續之曰。施諸己而不願。亦勿施於人。則見推己之道。非徒可施之於恕。亦可施之於忠。不可獨以推己訓恕字。益明矣。

宋儒以仁爲聖人分上之事。以恕爲學者分上之事。晦庵以爲。仁恕只是一物。有生熟難易之不同耳。殊不知仁自是仁。恕自是恕。惟仁者而能用恕。惟恕而後能至於仁。非有生熟難易之別。故曰。可以終身行之也。曾子曰。夫子之道。忠恕而已矣。聖人豈其心自聖。而謂我自是聖。無所事用恕邪。不可以恕專爲學者之事。明矣。

聖人之道。莫大於仁。莫要於義。而曾子特曰。夫子之道。忠恕而已矣。而夫子亦曰。一言可以

德也。故學雖至於聖人。亦不外忠信。視其貌。則儼然儒者矣。而察其內。則好勝務外之心。不知不覺常伏于胸中。是徒知持敬。而不以忠信爲要故也。學者不容不深辨。

忠自是忠。信自是信。故有專言忠者。有專言信者。而夫子之四敎。以文行忠信並言。則忠與信本是兩事。益明矣。而先儒以謂。忠與信若形影然。又曰。忠信只是一事。而相爲內外本末終始。蓋未深致焉耳。

學有本體。有修爲。本體者。仁義禮智是也。修爲者。忠信敬恕之類是也。蓋仁義禮智天下之達德。故謂之本體。聖人敎學者由此而行之。非待修爲而後有也。忠信敬恕力行之要。就人用功夫上立名。非本然之德。故謂之修爲。

忠恕 凡五條

竭盡己之心爲忠。忖度人之心爲恕。按。集註引程子盡己之謂忠。當矣。但恕字之訓覺未當。註疏作忖己忖人之義。不如以忖字訓之之爲得。言待人必忖度其心思苦樂如何也。忖己二字未穩。故改之曰忖度人之心也。夫人知己之所好惡甚明。而於人之好惡。泛然不知察焉。故人與我每隔阻胡越。或甚過惡之。或應之無節。見親戚知舊之艱苦。猶秦人視越人之肥瘠。茫乎不知憐焉。其不至於不仁不義之甚者。幾希。苟待人。忖度其所好惡如何。其所處所爲如何。以其心爲己心。以其身爲己身。委曲體察。思之量之。則知人之過。每出於其所不得已。或生於其所不能堪。而有不可深疾惡之者。油然藹然。每事必務寬宥。不

語孟字義卷之下

忠信 凡五條

程子曰。盡レ己之謂レ忠。以レ實之謂レ信。皆就二接レ人上一言。夫做二人之事一。如レ做二己之事一。謀二人之事一。如レ謀二己之事一。無二一毫不一レ盡。方是忠。凡與レ人說。有便曰レ有。無便曰レ無。多以爲レ多。寡以爲レ寡。不二一分增減一。方是信。又忠信二字。有下朴實不レ事二文飾一之意上。所レ謂忠信之人。可二以學一レ禮。是也。又信字。有下與レ人期約。而踐二其實一之意上。論語集註曰。信約信也。古人有下信如二四時一。信賞必罰等語上。皆此意。

忠信學之根本。成レ始成レ終。皆在二於此一。何者。學問以レ誠爲レ本。不レ誠無レ物。苟無二忠信一。則禮文雖レ中。儀刑雖レ可レ觀。皆僞貌飾情。適足二以滋レ奸添一レ邪。論語曰。主二忠信一。主與レ賓對。言學問必不レ可レ不二以二忠信一爲一レ主。又曰。子以レ四教。文行忠信。程子曰。四者。以二忠信一爲レ本。是知主二忠信一。乃孔子之家法。而萬世學者。皆當二守レ之。而不一レ可レ換二其訓一。而後世或以二持敬一爲二宗旨一。或以レ致二良知一爲二宗旨一。而未レ有下以二忠信一爲上レ主。亦異二夫孔門之學一矣。故雖二學問可一レ觀。然其德卒不レ及二于古人一者。實以レ此也。

宋儒之意以爲。主二忠信一甚易事。無二難レ行者一。故別撰二一般宗旨一。爲二之標榜一。以指二導人一。殊不レ知道本無二難レ知者一。只是盡レ誠爲レ難。苟知二誠之難一レ盡。則必不レ能レ不下以二忠信一爲上レ主。易曰。忠信所二以進一レ

專務レ致ニ良知一。而遺レ盡ニ良能一。蓋以下連ニ知愛二字一爲ニ良知一。而不上レ知下兩知字指ニ良知一。愛敬兩者指中良能上也。豈非レ失ニ之一偏一乎。孟子所ニ以發ニ良知良能之論一者。本朋三仁義之爲ニ固有一。今徒務レ致ニ良知一。而不レ知レ本ニ之於仁義一者。何哉。王氏之學。蓋自ニ淨智妙圓宗旨一來。故爲ニ此一偏之敎一。而不レ知ニ良知良能。本我心之本然。不レ可ニ須臾離一焉。而與ニ孟子之旨一。幾霄壤矣。不レ容レ不レ辨。

語孟字義卷之上 畢

意 凡二條

意者。指心之往來計較者言。論語所謂毋意者。蓋言聖人盛德之至。理明心定。自無往來計較之心也。若作毋私意。則多一私字。尤非所以論聖人也。

意字。亦是不必用功夫字。按。語孟中庸。皆不說於意上用功夫。故孔子說主忠信。中庸說誠身。而孟子專說存心養性。皆未嘗有誠意之說。何者。學脉自有照應。言此。則不須言彼。言彼。則不須言此。且觀子絕四毋意。則不於意上用功夫。益彰々矣。中庸曰。誠身有道。不明乎善。不誠乎身矣。與欲誠其意。先致其知。甚相似。然身字與意字。所指甚別。一則氣象盛大。一則功夫急促。學者不容不辨。

良知良能 凡二條

良善也。良知良能者。謂本然之善。卽四端之心也。孟子曰。孩提之童。無不知愛其親也。及其長也。無不知敬其兄也。兩知字。指良知。愛敬兩者。卽指良能也。猶曰今人乍見孺子將入於井。皆有怵惕惻隱之心也。亦所以證夫性之善也。而孟子所以發良知良能之論者。蓋欲使學者擴充之。以成仁義禮智之德也。非徒論良知良能之說。故曰。親親仁也。敬兄義也。無他。達之天下也。達者。卽擴充之謂也。當與人皆有所不忍。達之於其所忍仁也。人皆有所不爲。達之於其所爲。義也參看。孟子之意自分曉。

近世陽明王氏專講致良知之旨。然而。徒知致良知。而不知本之於仁義。亦盭乎孟子之旨。而

凡心性情才志意等字。有下必用二功夫一字上。有下不レ必用二功夫一字上。於レ心則曰レ存曰レ盡。於レ性則曰レ養曰レ忍。志則曰レ持曰レ尙。皆是用二功夫一之字。若二情字才字一。皆不レ必用二功夫一。何者。以下養二其性一。則情自正。存二其心一。則才自長上也。先儒有二約レ情之語一。蓋不レ理二會此意一耳。學者審焉。

才 一條

才者。性之能也。猶二手之持足之行一。可二以爲一レ善。亦可三以爲二不善一。譬二諸以レ手持一レ物。攬レ筆書レ字手也。把レ刀殺レ人亦手也。故曰。可二以爲一レ善。亦可三以爲二不善一也。然其書レ字殺レ人。皆在二於手一。而所三以書レ字殺二之者。則在二於心一。故孟子曰。若夫爲二不善一。非二才之罪一。又曰。非二天之降レ才爾殊一也。其所三以陷二溺其心一者然也。明其爲二不善一者。雖レ在二於才一。然其所三以爲二之者。在二於心一也。凡人皆有レ手。則皆能可二以攬レ筆書一レ字。若勤而不レ怠。則皆可二以善一レ書。其或間有二不レ能レ書レ字者一。不レ用二其才一也。故又曰。或相倍蓰。而無レ算者。不レ能レ盡二其才一者也。多少分明。

志 凡二條

心之所レ之。謂二之志一。此說文之訓也。愚又謂。志者。心之所二存主一也。孟子曰。夫志氣之帥也。又曰。志壹則動レ氣。是也。若作二心之所一レ之。則意欠二明瑩一。論語曰。匹夫不レ可レ奪レ志也。禮記曰。淸明在レ躬。氣志如レ神。皆謂二心之有一レ所二存主一也。

凡謂二之志一。則皆以レ志二於善一而言。若於二不善一。不レ可レ謂二之志一也。若下父在觀二其志一。及士尙レ志等語上。皆以レ志二於善一言。北溪曰。才志二於利一。便入二小人路一。何哉。

皆此之意。目之於レ色。耳之於レ聲。口之於レ味。四支之於二安逸一。是性。目之欲レ視二美色一。耳之欲レ聽二好音一。口之欲レ食二美味一。四支之欲レ得二安逸一。是情。父子之親。性也。父必欲二其子之善一。子必欲二其父之壽考一。情也。又曰。好レ善惡レ惡。天下之同情也。大凡推二此之類一見レ之。情字之義自分曉。孟子曰。物之不レ齊。物之情也。言或大或小。或緩或急。物各有レ所レ好。故謂二之情一也。易所レ謂萬物之情。又是此意。孟子又曰。人見二其禽獸一也。而以爲未二嘗有一レ才焉者。是豈人之情也哉。言爲レ人所レ榮。天下之所二同好一。爲レ人所レ辱。天下之所二同惡一。人指レ我以爲二禽獸一。非二人之所一レ欲。故曰。是豈人之情也哉。又所レ謂乃若二其情一。則可二以爲一レ善矣。即是此意。

晦庵以二四端一爲レ情。尤無レ謂。孟子明曰二四端之心一。而未三嘗曰二四端之情一。可レ見四端是心。非レ情。又註二大學一。指二忿懥恐懼好樂憂患一爲レ情。然大學亦曰レ正レ心。而不レ曰レ正レ情。可レ見忿懥等四者。是心非レ情。晦庵以爲心統二性情一。而以レ性爲二心之體一。情爲二心之用一。故有二此說一。殊不レ知心是心。性是性。各有下用二功夫一處上。情只是性之動。而屬レ欲者。纔涉二乎思慮一。則謂二之心一。若二四端及忿懥等四者一。皆心之所二思慮一者。不レ可レ謂二之情一也。而惻隱羞惡辭讓是非之心。乃顯然有レ形者。非レ心而何。若不レ謂二之心一。而謂二之情一。則將指二何者一爲レ心。乃悉廢二心字一。而獨用二情字一。可也。而古人以二喜怒哀樂愛惡欲一爲二七情一。蓋言情之品有二此七者一。謂二喜怒哀樂愛惡欲一即爲レ情。則不可也。凡無レ所二思慮一而動。之謂情。纔涉二乎思慮一。則謂二之心一。若二喜怒哀樂愛惡欲七者一。設無レ所二思慮一而動。則固可レ謂二之情一。纔涉二乎思慮一。則不レ可レ謂二之情一。分限甚明。學者當二以レ意理會一。

惡辭讓是非之心。不由而發也明矣。然而。當惻隱之事。日間無幾。動經十數日。亦或無有。至於羞惡辭讓是非之心。亦然。夫若此。則用功之日常少。而曠廢之日常多。雖欲用擴充之功。其何由而得乎。且又欲擴充惻隱之一端。猶將有力不足之患。況欲於四端上逐一擴充之。則將有左顧右盼。應接無暇。不堪其煩之患。孟子之意。固不若此之迂。夫四端之在我。猶手足之具于吾身。不言而喩。不思而到。奚竢發見。亦何逐一著意登識之。其不理會孟子之意。特甚矣。象山曰。近來論學者言。擴而充之。須於四端上逐一充焉。豈有此理。孟子當來只是發出人有四端。以明人性之善不可自暴自棄。苟此心之存。則此理自明。當惻隱處自惻隱。當羞惡處自羞惡。當辭遜處自辭遜。是非在前。自能辨之。其說亦甚過快。而不得孟子之意。則侔矣。孟子曰。人皆有所不忍。達之於其所忍。仁也。人皆有所不爲。達之於其所爲。義也。所謂所不忍。所不爲者。即惻隱羞惡之心也。達云者。即擴充之謂。蓋謂。使惻隱羞惡之心。無所不至無所不通也。孟子之意。豈非甚明白的當。其用功亦甚親切易簡哉。蓋朱陸二先生。雖皆能尊信孟子。然晦庵專以持敬爲主。象山以先立乎其大者爲要。而於擴充之功。皆未嘗實用其力。宜乎。差失若此之甚。

情 凡三條

情者。性之欲也。以有所動而言。故以性情並稱。樂記曰。感物而動者。性之欲也。是也。先儒以謂。情者性之動。未備。更欲見得欲字之意分曉。人常言人情。言情欲。或言天下之同情。

以復性。此復性復初等語所由而起也。儒者之學則不然。人之有四端也。猶其有四體。苟有養之。則猶火燃泉達不能自已。足以成仁義禮智之德。而保四海。故曰。苟得其養。無物不長。苟失其養。無物不消。初無滅欲以復性之說。老莊之學。與儒者之學。固有生死水火之別。其源實判於此。伊川好學論中說性。亦主樂記之理。學者不容於不辨。

四端之心　凡二條

四端之端。古註疏曰。端本也。謂仁義禮智之端本起於此也。按。字書又訓始訓緒。總皆一意。而考亭特用端緒之義。謂。猶物在于中而緒見於外也。然訓字之例。雖有數義。俱歸于一意。緒字亦當與本始字同其義。想繭之有緒。繅治不止焉。則爲絹爲帛。至端兩丈疋之長。即有引而伸之之意。若考亭之所謂。則與本始之義相反。非字訓之例。孟子之意以爲。人之有四端也。猶其身之有四軆。人人具足。不假外求。苟知擴充之。則猶火燃泉達。竟成仁義禮智之德。故以四端之心。爲仁義禮智之端本。此孟子之本旨。而漢儒之所相傳授也。又曰。中庸曰。君子之道。造端乎夫婦。左氏傳曰。履端於始。暨釁端禍端開端發端等語。古人皆依本始之義用之。於是益知古註之不可不從。

孟子集註曰。四端在我。隨處發見。知皆即此推廣。而充滿其本然之量。則其日新又新。將有不能自已者矣。其所謂發見云者。謂見當惻隱者便惻隱。見當羞惡者便羞惡。見當辭讓者便辭讓。見當是非者便是非也。若此。則不見當惻隱羞惡辭讓是非者焉。則惻隱羞

故雖レ曰二渾然至善一。然實空名而已矣。延平曰。動靜眞僞善惡。皆對而言レ之。是世之所レ謂動靜眞僞善惡。非二性之所レ謂動靜眞僞善惡一也。惟求下善於未二始有一レ惡之先上。而性之善可レ見矣。此言最可レ疑。豈外二世之所レ謂動靜眞僞善惡一。別有二動靜眞僞善惡者一乎哉。若果謂レ有レ之。則必非二虛見一。則妄見耳。而謂下性之善在中於未三始有二善惡一之先上。則是求二吾身於父母未レ生之前一也。最非二儒者之理一。凡謂レ善。則必對レ惡言レ之。然有レ善有レ惡者其常。而推至二於其極一焉。則必歸二于善一而止。何也。人之性有二剛柔善惡之不一レ同。夫人能識レ之。不下待二賢者一而後知上焉。若下揚之善惡混。韓之有二三品一之説上。是也。然非二究而論一レ之者一。雖二盜賊之至不善一。然乍見二孺子之將一レ入二于井一。必有二怵惕惻隱之心一。人有二嗜慾一。可三以受二嘑爾之食一。可三以摟二東家之處子一。然必有二羞惡之心一。爲二之阻隔一。不三敢縱二其貪心一。非二性之善一。豈能然乎。是孟子論二性善一之本原也。非下有二大聖賢者一出。而指二其迷途一。解中其紛亂上。孰能定レ之。故性即理也之説。畢竟落下于無レ善無二不善一之説上。其謬皆出乙於强分二體用一。而不甲レ知下孔孟之敎。皆就二人心發動之上一論レ之。而本無中未發已發之別上。詳見二于中庸發揮一。

樂記曰。人生而靜。天之性也。感レ物而動。性之欲也。晦庵取レ之。以爲二詩傳序起頭一。以爲眞合二于聖人之理一。而不レ知本出二於老子之書一。而與二聖人之道一。實天淵南北矣。按。此語本出二於文子之書一。文子老子弟子。以二虛無因應一爲レ道。但文子性之欲也作二性之害也一。蓋樂記剽二竊之一也。又見二於淮南子書一。劉安亦專宗二道家者流之説一。即文子之意爾。而先儒用二復性復初等語一。亦皆出二於莊子一。蓋老子之意。以謂萬物皆生二於無一。故人之性也。其初眞而靜。形既生矣。而欲動情勝。衆惡交攻。故其道專主二滅レ欲

レ之則悅。毀レ之則怒。知二善レ善而惡一レ惡。則足二與爲一レ善。是乃吾所レ謂善者也。非レ謂二天下之性盡一一。而無レ惡也。以レ此觀レ之。則孟子所レ謂性善者。即與二夫子性相近之旨一無レ異。益彰々矣。

或曰。孟子性善之旨。皆就二氣質一而論。其旨明矣。猶亦有二證左一乎。曰。孟子嘗曰。犬之性。猶二牛之性一。牛之性。猶二人之性一與。又曰。如使三口之於レ味也。其性與レ人殊若二犬馬之與一レ我不レ同レ類也。則天下何者皆從二易牙之於一レ味也。可レ見孟子性善之說。本就二氣質一論レ之。而非下離二乎氣質一而言上レ之也。其他若下曰二動レ心忍一レ性。曰二形色天性也一。曰中口之於レ味也。目之於レ色也。耳之於レ聲也。鼻之於レ臭也。四支之於二安佚一。也性也上。皆以二氣質一論レ之。益分曉矣。而孟子之說。必歸二于一一而止。不レ可レ有二二三一。論二氣質之性一。則本然之說不レ行矣。既立二本然之說一。則不レ可三復雜二氣質之說一也。其欲レ明二聖門仁義之旨於天下萬世一。而必不レ可下爲二若レ此含糊不一レ決之論一。以誣中罔後世學者上也。故曰。孟子性善之說。就二氣質一而論レ之。非下離二乎氣質一而言レ之者上也。

宋儒所レ謂性善云者。畢竟落下于無レ善無二不善一之說上。伊川曰。性即理也。而以二孟子所レ謂性善一當レ之。然而。孟子所レ謂性善者。本以二惻隱羞惡辭讓是非之心一言レ之。故曰。人之有二是四端一也。猶三其有二四體一也。又曰。人性之善也。猶二水之就一レ下也。人無レ有二不善一。水無レ有レ不レ下。又曰。乃若二其情一。則可二以爲一レ善矣。乃所レ謂善也。皆就二人心發動之上一明レ之。非二宋儒所レ謂本然之云一。晦庵集註曰。性者。人所下稟二於天一以生上之理也。渾然至善。未二嘗有一レ惡。即性即理也之謂也。夫有二跡之可一レ見。而後謂二之善一。若未レ有二跡之可一レ見焉。則將指二何者一爲レ善。既不レ有二惡之可一レ見。則又無二善之可一レ見。

性　凡五條

性生也。人其所レ生。而無二加損一也。董子曰。性者生之質也。周子以二剛善剛惡柔善柔惡不レ剛不レ柔而中焉者一爲二五性一。是也。猶レ言二梅子性酸。柿子性甜。某藥性溫。某藥性寒一也。而孟子又謂二之善一者。蓋以下人之生質雖レ有二萬不一レ同。然其善レ善惡レ惡。則無二古今一無二聖愚一一上也。非下離二於氣質一而言上レ之也。

孔子曰。性相近也。習相遠也。此萬世論レ性之根本準則也。而孟子宗二孔子一。而願レ學レ之。其旨豈有レ二也乎哉。孟子固言。物之不レ齊。物之情也。可レ知其所レ謂性善也者。即述二孔子之言一者也。然後儒以二孔子之言一。爲レ論二氣質之性一。孟子之言。爲レ論二本然之性一。信如二其言一。則是非下孔子不レ知レ有二本然之性一。孟子不レ知レ有二氣質之性一者上乎。非四惟使三一性而有二二名一。且使下孔孟同一血脈之學。殆若二涇渭之相合。薰蕕之相混一。一淸一濁。不上レ可二適從一。其言支離決裂。殆不二相入一。若レ此。夫天下之性。參差不レ齊。剛柔相錯。所レ謂性相近。是也。而孟子以爲。人之氣禀。雖二剛柔不レ同。然其趨二于善一。則一也。猶下水雖レ有二淸濁甘苦之殊一。然其就レ下。則一上也。蓋就二相近之中一。而擧二其善一。而示レ之也。非下離二乎氣質一而言上。故曰。人性之善也。猶二水之就レ下也。蓋孟子之學。本無二未發已發之說一。今若從二宋儒之說一。分二未發已發一而言レ之。則性既屬二未發一。而無二善惡之可レ言。猶下水之在二於地中一。則無中上下之可上レ言。今觀レ謂二之猶レ就レ下也。則其就二氣質一而言レ之。明矣。又曰。乃若二其情一。則可二以爲レ善矣。乃所レ謂善也。其意以爲。鷄犬之無知。固不レ可レ告レ之以レ善。若二人之情一。雖レ若二盜賊之至不仁一。然譬

性。所レ指各殊。若以レ心爲レ統ニ性情一。則單言レ心而可。旣言レ存レ心。而又言レ養レ性。則其言豈非レ贅乎。而偏言レ養レ性。而遺ニ情字一。則其言亦偏矣。蓋養レ性則情自正。不ニ別用ニ脩レ情功夫一也。論レ心者。當下以ニ惻隱羞惡辭讓是非之心一爲上レ本。夫人之有ニ是心一也。猶ニ有レ源之水。有レ根之草木一。生稟具足。隨レ觸而動。愈出愈不レ竭。愈用愈不レ盡。是則心之本體。豈有下實ニ於此一者上乎。今乃以レ心爲レ虛者。皆佛老之緒餘。而與ニ聖人之道一。不ニ止ニ薰蕕一。學之不レ講。一至ニ於此一。可レ懼也夫。

明鏡止水四字。本出ニ於莊子一。於ニ聖人之書一。本無ニ此語一。亦無ニ此理一。先儒以レ此喩ニ聖人之心一。吾觀ニ其益天淵一矣。周公思下兼ニ三王一。以施上四事上。其有ニ不レ合者一。仰而思レ之。夜以繼レ日。幸而得レ之。坐以待レ旦。孔子食ニ於有レ喪者之側一。未ニ嘗飽一也。子於ニ是日一哭。則不レ歌。何所レ見ニ其爲ニ明鏡止水一乎。夫聖人之道。以ニ彝倫一爲レ本。而以ニ恩義一爲レ結。千言萬語。皆莫レ不ニ以レ此爲一レ敎。今夫佛老之爲レ敎也。以ニ清淨一爲レ本。無欲爲レ道。曁ニ乎功夫旣熟一。則其心若ニ明鏡之空一。若ニ止水之湛一。一疵不レ存。心地潔淨。於レ此恩義先絕。而彝倫盡滅。視ニ君臣父子夫婦兄弟朋友之交一。猶ニ弁髦綴旒一然。與ニ聖人之道一相反。猶ニ水火之不一レ可ニ相入一。夫草木生物也。流水活物也。雖ニ寸苗之微一。然養レ之而不レ害。則可ニ以參レ雲。雖ニ源泉之小一。然進而不レ已。則可ニ以放ニ乎四海一。人心亦然。養而不レ害。則可下以與ニ天地一並立而參上矣。故孟子之論レ心。每以ニ流水萌蘗一物レ比。而未下嘗以ニ明鏡止水一爲上譬。何者。可下以ニ生物一比中生物上。而不レ可下以ニ死物一喩中生物下也。虛靈不昧四字。亦出ニ於禪書一。即明鏡止水之理。學者不レ可レ不ニ明辨極論一。以洞ニ知其是非得失之所一レ究也。

始之一也。佛老之所下以與二吾儒一異上者。專在二於義一。而後儒之所下以與二聖人一相差上者。專在二於仁一。其故何哉。佛氏以二慈悲一爲レ心。平等爲レ道。故以レ義爲二小道一。而慢二棄之一。殊不レ知義者。天下之大路。苟舍レ義。則猶下棄二正路一。而由中荊棘上。其不レ可レ行也必矣。若二後儒者一。其德量淺狹。差別甚過。而無二包容含弘之氣象一。故視レ仁泛然。若下無二緊要一者上。而不レ知三其自陷二於刻薄之流一。是所下以與二聖人一相差上也。孔孟以後。能識レ仁者鮮矣。蓋非二知見之不一レ及。特無二其德一也。漢唐儒者。議論雖レ淺。猶未レ失二古意一。去レ仁未二甚遠一。爲二其不一レ用二意見一也。至二於宋一。專以レ仁爲レ理。於レ是。離二仁之德一益遠矣。甚而至下於以二無欲一爲二仁之體一。虛靜爲中仁之本上。非二止不一レ識二仁之德一。其害二於孔孟之旨一。實甚矣。伊川論。心譬如二穀種一。生之性。即是仁。是所レ謂以レ仁爲レ理者也。延平云。當レ理而無二私心一。仁也。是可三以訓二誠字一。而不レ可三以訓二仁字一。若以三當レ理而無二私心一訓レ仁。將以二何語一訓二誠字一乎。不二深考一焉耳。

心　凡四條

心者。人之所二思慮運用一。本非レ貴。亦非レ賤。凡有レ情之類。皆有レ之。故聖人貴レ德。而不レ貴レ心。論語中說レ心者。纔有下其心三月不レ違二於仁一。及從二心所一レ欲不レ踰レ矩。及簡在二帝心一三言上而已。然皆不三以レ心爲二緊要一。至二於孟子一。多說レ心。然亦皆指二仁義之良心一而言。不二特說一レ心。曰本心。曰存心。是也。大凡佛氏及諸子盛言レ心者。本不レ知二德之爲一レ可レ貴。而妄意杜撰耳。與二孔孟之旨一。實霄壤矣。

橫渠曰。心統二性情一。非也。孟子曰。存レ心養レ性。又曰。動レ心忍レ性。以レ此觀レ之。心自是心。性自是

德得也誠成也一。但取二其音同者一。發二明其義一耳。非二直訓一也。學者當乙照下孟子羞惡之心義之端也。暨人皆有レ所レ不レ爲。達二之於其所レ爲義也等語上。求二其意義一。自可甲二分明一。設專以二宜字一解レ之。則處々窒礙。失二聖賢之意一者甚多矣。

禮字。義本分明。然於二禮之理一。甚多二曲折一。非二學明識達者一。不レ能レ識焉。蓋禮之難レ知。不レ在二於節文度數繁縟難一レ識。而專在二於斟酌損益時措之宜一。何則古禮多不レ宜二於今一。而俗禮亦不レ可二全用一。漢禮多不レ通二於本國一。而俗禮本無二意義一。若欲下準レ古酌レ今。隨二於土地一。合二於人情一。上自二朝廷一。下至二於閭巷一。使中人循守。而樂行上レ之。則非二明達君子一。不レ能レ作焉。故聖人之所レ謂知レ禮者。不レ在レ識二名物度數之詳一。而在下知二禮之理一。而能損中益之上也。

聖人所レ謂知者。與二後儒所レ謂知者一。亦復然不レ同。所レ謂知也者。自レ脩レ己。而及二乎治一レ人。自レ齊レ家。而及三于平二天下一。皆有用之實學。而非下泛然從二事於事物之末一者上也。觀下大學所レ謂格物致知之法。起二於誠意一。而至二平天下一而止上焉。則其所レ謂格物致知者。亦不レ出二於誠意以下六條之外一。而不レ在二一草一木之察一。

孔子並二言仁智一。而孟子以二仁義一連二稱之一。何哉。蓋孔子主レ進レ學而言。智以知レ之。仁以守レ之。乃進レ學之要。故爲二學者一而言レ之也。孟子主二道之本體一言。人道之有二仁義一。猶下天道之有二陰陽一。地道之有中剛柔上。蓋懼下後世之學問陷二于一偏一。而爲中楊墨之流上也。或以爲孟子始以二仁義一並稱。非也。易中庸及莊子等書。亦皆以二仁義一連二稱之一。則孟子特從二當時之名稱一也。蓋可レ從而從レ之。非三以レ意創二

之旨一。爲二之準則一而可上。

仁與レ義。猶二陰陽之相濟一。而不レ可二相勝一。水勝レ火。則不レ濟レ用。火勝レ水。則熬而竭。仁義之不レ可二偏勝一。亦如レ此。仁而無レ義。則非レ仁。墨子之仁是也。義而無レ仁。則非レ義。楊子之義是也。故聖人曰レ仁。則有二義在一。曰レ義。則有二仁在一。

孔門學者。以レ仁爲二其宗旨一。若二家常茶飯一然。出入起居。莫レ不レ從二事於此一。而觀三夫子答二門人問一レ仁。多擧二道德之旨一。而與二愛字一不二相干涉一。何也。蓋仁者之心。以レ愛爲レ躰。故其心寬而不レ偏。樂而不レ憂。衆德自備。故夫子每必擧二仁者之心一。而答レ之曰。仁者其言也訒。仁者不レ憂。仁者先レ難而後レ獲。仁者如レ射。是也。皆自二一愛一流出。而自成二衆德一故也。學者須レ理二會孔孟之奧旨一。不レ可下以二字義一求上レ之也。

宋儒以レ仁爲レ性。予深以爲レ害二于道一者。若從二宋儒之旨一論レ之。則性爲二未發一。情爲二已發一。仁之存二於未發之中一。猶三水之在二于地中一。仁之不レ能レ下レ手。猶下水在二於地中一。則不上レ可レ施二澄治之功一。其用二功夫一。纔在二發用上一。而於二其本體一。則無二奈レ之何一。故別立二守敬主靜等說一。以補レ之。謂。如レ此則不レ違二於仁一。而義自在二其中一矣。其功夫可レ謂二甚踈一矣。是以。仁義禮智之德。終爲二虛器一。而無下復用二力於仁一者上矣。且孔孟說レ仁之言。皆爲下纔言二其用一。而無中一及二于體一者上。則孔孟之言。豈非下失二之一偏一。而其理不レ備者上哉。與二孔門之敎法一。同乎不レ同。學者默而識レ之。可也。

義訓レ宜。漢儒以來。因二襲其說一。而不レ知二意有一レ所レ不レ通。中庸謂二義宜也一者。猶レ言二仁人也禮履也

海之廣。自有易保焉者矣。蓋人之性不善。則欲成仁義禮智之德。而不得。唯其善。故得能成仁義禮智之德。故謂仁義即吾性。可也。謂吾性即仁義。亦可也。但以仁義爲性中之名。則不可也。所謂固有者意。蓋如此。其理甚微。所謂毫釐千里之差。實在於此。學者不可不反復躰察焉。而其所謂根於心者。本對覇而言。夫覇者之行仁義也。皆假之。以濟己之欲。而非己之眞有也。王者之行政也。非惟外由仁義而行。實根柢於中心。而無往而不在仁義禮智。故曰。根於心。其義豈不明哉。

聖賢論仁義禮智之德。有自本躰而言者。有自修爲而言者。其自本躰而言者。若書曰。以義制事。以禮制心。及論語曰。我欲仁斯仁至矣。孟子所謂仁人之安宅也。義人之大路也。及居仁由義。大人之事備矣。及君子以仁存心。以禮存心等語。皆是也。其自修爲而言者。若四端之章。及人皆有所不忍。達之於其所忍仁也等語。是也。本躰云者。即德之本然。謂天下古今之達德也。修爲云者。乃指人能修仁義禮智之德。而有於其身而言。

仁義二者。實道德之大端。萬善之總腦。智禮二者。皆從此而出。猶天道之有陰陽。地道之有剛柔。二者相須相濟。而後人道得全。故中庸曰。仁者人也。親親爲大。義者宜也。尊賢爲大。親親之殺。尊賢之等。禮所生也。孟子亦曰。仁之實。事親是也。義之實。從兄是也。智之實。知斯二者弗去是也。禮之實。節文斯二者是也。其理尤分明矣。而宋儒專謂。仁一事。實兼義禮智三者。其言終爲定說。而學者莫能識其說之謬孔孟也。自今以往。學者只當按孟子及易中庸

大之一。則能成二仁義禮智之德一。猶下火之始燃。自至二於燎レ原之熾一。泉之始達。必至二於襄レ陵之蕩一。漸々循々。其勢自不レ能レ已焉。至二於後一章一。其義尤分明。無二復可一レ疑。所レ謂人皆有レ所レ不レ忍。有レ所レ不レ爲者。即惻隱羞惡之二端也。而謂下達二之於其所レ忍所上レ爲。而後能爲レ仁爲レ義。則見四端之心。是我生之所レ有。而仁義禮智。即其所二擴充而成一也。

仁義禮智四者。皆道德之名。而非二性之名一。道德者。以三徧達二於天下一而言。非二一人之所一レ有也。性者。以三專有二於己一而言。非二天下之所一レ該也。此性與二道德一之辨也。易曰。立二人之道一。曰仁與レ義。中庸曰。知仁勇三者。天下之達德也。孟子曰。既飽以レ德。言レ飽二乎仁義一也。仁義爲二道德之名一。彰々矣。自二漢唐諸儒一。至二於宋濂溪先生一。皆以二仁義禮智一爲レ德。而未三嘗有二異議一。至二於伊川一。始以二仁義禮智一。爲二性之名一。而以レ性爲レ理。自レ此而學者。皆以二仁義禮智一爲レ理爲レ性。而徒理二會其義一。不三復用二力於仁義禮智之德一。至二於其功夫受用一。則別立二持敬主靜致二良知一等條目一。而不三復狥二孔氏之法一。此予之所下以深辯痛論。繁詞累言。聊罄二愚衷一。以不レ能二自已一者。實爲レ此也。非レ好レ辯也。或曰。伊川何以謂二仁義禮智一爲レ性耶。蓋觀下孟子仁義禮智非二由レ外鑠一レ我也。我固有レ之也。及仁義禮智根二於心一之語上。以爲仁義禮智是性。而不三再推二到孟子之意所一レ在。殊不レ知。其所謂固有云者。固與レ謂二之性一。自不レ同。蓋孟子之意以爲。人必有二惻隱羞惡辭讓是非之心一。是四者。人之性。而善者也。而仁義禮智。天下之德。而善之至極者也。苟以二性之善一。而行二天下之德一焉。則其易也。猶三以レ地隨レ樹。以レ薪燃レ火。自無レ所二窒礙一。故擴二充惻隱羞惡辭讓是非之心一。則能成二仁義禮智之德一。而雖二四

重。而一生功夫。總歸之於此。所以學問枯燥。無復聖人從容盛大之氣象。蓋坐此故也。

仁義禮智 凡十四條

慈愛之德。遠近內外。充實通徹。無所不至。之謂仁。爲其所當爲。而不爲其所不當爲。之謂義。尊卑上下。等威分明。不少踰越。之謂禮。天下之理。曉然洞徹。無所疑惑。之謂智。天下之善雖衆。天下之理雖多。然仁義禮智。爲之綱領。而萬善莫不自總括於其中。故聖人以是四者。爲道德之本體。而欲學者由此而脩之也。

仁義禮智之理。學者當以孟子之論作本字註脚看。蓋孔門學者。以仁義禮智。爲家常茶飯。不復有疑於其間。故門人弟子。惟問其所以爲之之方。夫子亦以其所以爲之之方告之。而未嘗論仁義禮智之義。故今不能據其詞。而推其理。至孟子時。則聖遠道湮。學者非惟不得脩仁義禮智之方。亦併仁義禮智之義。而不知之。故孟子爲學者。諄々然明論其理。指其源委。委曲詳悉。無復滲漏。故學者當原之於孟子。察其義理。而後會之於論語。求其全體。則玆無餘蘊矣。程朱諸家。所以不免於仁義禮智之理有差者。蓋爲不知原之孟子。而徒就論語言詞上。理會仁義禮智之理焉耳。孟子曰。惻隱之心。仁之端也。羞惡之心。義之端也、辭讓之心。禮之端也。是非之心。智之端也。人之有是四端也。猶其有四體也。又曰。人皆有所不爲。達之於其所爲。義也。學者就此二章求之。則於仁義禮智之理。自釋然矣。其意以爲。人之有是四端。即性之所有。人人具足。不待外求。猶四體之具於其身。苟擴而充

有跡之可見。故經書多言德。而又言仁。蓋爲此也。德字。及仁義禮智等字。古註疏皆無明訓。蓋非不能訓之。以本不可訓也。何者、學者之所常識。而非字訓之所能盡也。晦庵曰。德者得也。行道而有得於心也。此語本出於禮記。但禮記作有得於身。晦庵改身字。而作心字。然禮記所謂德者得也者。猶言仁人也義宜也。天顚也地示也。皆假音近者。以發其義。本非正訓也。若以德爲得之義。則德是待脩爲而後有。豈足盡本然之德哉。語曰。據於德。中庸曰。知微之顯。可與入德矣。是等德字。皆有道字之意。便指仁義禮智之德而言。觀其據字入字。可見矣。又曰。由。知德者鮮矣。又曰。吾未見好德如好色者也。夫有一物。而後謂之知。又謂之好。若宋儒之所謂。則知好二字。意義不通。

道德二字。亦甚相近。道以流行言。德以所存言。道有所自導。德有所濟物。中庸以君臣父子夫婦昆弟朋友之交爲達道。以知仁勇爲達德。是也。若推而言之。則一陰一陽。天之道也。覆而無外。天之德也。剛柔相濟。地之道也。生物不測。地之德也。或補或瀉。藥之道也、能療病活命藥之德也。或炎或燒。火之道也。能調和飮食。火之德也。由是觀之。道德二字之義。自當分明。

聖人言德。而不言心。後儒言心。而不言德。蓋德也者。天下之至美。萬善之總括。故聖人使學者由焉而行之。若心。本淸濁相雜。但在以仁禮存之耳。孔子曰。其心三月不違仁、又曰。從心所欲。不踰矩。孟子曰。有恒產。則有恒心。無恒產。因無恒心。曰仁。曰矩、曰恒。是德。心則在處之如何耳。是聖人之所以言德。而不言心也。而後儒見心。而不見德。故以心爲

字寂字。纔見二於此一耳。然咸卦所レ謂虛云者。謂三中無二私心一。繫辭所レ謂寂云者。贊二蓍之德一云レ爾。非レ謂二理之躰一也。且若二寂字一。程子亦只假レ之以論レ心。初學者不レ知二易之本旨一。以爲聖人之旨本如レ此。可レ謂レ謬矣。大抵宋之一代。禪學大行二于天下一。文武百官。男女老少。凡識レ字者。皆莫レ不レ學レ禪。故儒者習二聞其說一。而不レ覺。自以二其理一。解二吾聖人之書一。後學亦只以爲。吾聖人之學眞如レ此。恬不レ知レ怪。可レ憫也哉。

程子曰。沖漠無朕。萬象森然已具。未レ應不二是先一。既應不二是後一。沖漠無朕四字。出二於莊子一。萬象森羅四字。多見二佛書一。蓋即維摩所レ謂芥子納二須彌一之理也。維摩之室設二三萬二千獅子座一。亦即此理。譬猶レ懸二鏡室中一。人畜器用。皆歷々可レ見。其數有レ限。不レ增不レ減。而後可也。然而。建二諸天地一。則皆悖。蓋天地之化。生生無レ窮。有則愈有。無則愈無。當二其有之盛一。則愈相倍蓰。雖レ極二天下之巧一。不レ能レ算焉。儻至二於無之極一。則滅而又滅。泯然斷盡。無二跡之可上尋。此天地之妙也。故聖人之道。所三以爲二眞實正當之教一。而老莊所レ謂沖漠無朕。芥子納二須彌一等說。實出二於世俗陋見一。飾以二硬語一耳。本甚淺近。易レ到。程傳則謂。動靜無レ端。陰陽無レ始。非二知レ道者一。孰能識レ之。蓋指二佛老一而言。可レ謂二至言一矣。

德　凡四條

德者。仁義禮智之總名。中庸曰。知仁勇三者。天下之達德也。韓子亦曰。吾所レ謂道德云者。合二仁與上義言。是也。然謂二之德一。則仁義禮智之理備。而其用未レ著。既謂二之仁義禮智一。則各見二於事一。而

處レ物爲レ義。其說固也。然未レ盡。若レ此。則理是在レ物。義是在レ己。以下孟子理義之悅二我心一猶下芻豢之悅中我口上之言上觀レ之。則見理義兩者。本自天下之至理。而以二吾心即仁義之良心一。故理也義也。皆與二吾心一相適。故曰。猶三芻豢之悅二我口一也。豈一以屬レ物。一以屬レ己。而可乎哉。

中庸序曰。愈近レ理而大亂レ眞。胡雲峰曰。此之虛。虛而有。彼之虛。虛而無。此之寂。寂而感。彼之寂。寂而滅。學者狃二聞其說一。皆以謂。吾儒與レ佛者異處。唯在二於用上一。而至二其理之躰一。則本甚相近。可レ謂二亂レ道之甚一也。夫有二斯本一。則必有二斯末一。有二斯末一。則必不レ可レ無二其本一。非下徒於二其用處一相反上。其躰之相異。猶二水火黑白之相反。生死人鬼之相隔一。邈乎不レ可二相入一。若謂二愈近下理。則所レ謂同浴而笑二人之裸躰一者。而儒之與レ佛。何相反之有。若謂二吾寂寂而感。彼寂寂而滅一。則諺所レ謂改レ頰爲レ面者。而亦何相異之有。豈非二亂レ道之甚一也耶。大凡躰用之說。本起二於近世一。聖人之書無レ之。唐清涼國師華嚴經疏曰。躰用一レ源。顯微無レ間。從下伊川用二此二句一。入中于易傳序中上。儒者視以爲二至珍至寶一。而不レ知下其說本自二禪學一來上。夫佛者以二寂滅一爲二吾眞躰一。而不レ能三悉滅二人事一。故說二眞諦一說二假諦一。自不レ能レ不レ立二躰用之說一。殊不レ知。一陰一陽。天道之全躰。仁義相行。人道之全躰。外レ此無二所レ謂躰一。亦無二所レ謂用一。不レ可下以二躰用一說中聖人之學上。如レ此。若立二躰用一。則理爲レ躰事爲レ用。躰本。而用末。躰重而用輕。近思錄論二道躰存養一諸卷。都爲二學問之本根一。而論孟等書。反爲下無二緊要一之書上。主靜無欲等說獨爲二其躰一。而孝弟忠信總爲二之用一。其害レ道特甚。而若二虛字寂字一。本皆佛老之常言。而於二吾聖人之書一。皆無レ之。但易咸大象曰。君子以虛受レ人。繫辭曰。寂然不レ動。感而遂通二天下之故一。虛

天與ト人。而以ニ理字一屬ニ之事物一乎。曰。道字本活字。所ミ以形ニ容其生々化々之妙一也。若ニ理字一。本死字。從レ玉里聲。謂ニ玉石之文理一。可ミ以形ニ容事物之條理一。而不レ足ミ以形ニ容天地生々化々之妙一也。蓋聖人以ニ天地一爲ニ活物一。故易曰。復其見ニ天地之心一乎。老氏以ニ虛無一爲レ道。視ニ天地一。若ニ死物一然。故聖人曰ニ天道一。老子曰ニ天理一。言各有レ攸レ當。此吾道之所下以與ニ老佛一自異不上レ可ニ混而一一之也。按。天理二字。屢見ニ於莊子一。而於ニ吾聖人之書一。無レ之。樂記雖レ有ニ天理人欲之言一。然本出ニ於老子一。而非ニ聖人之言一。象山陸氏辨レ之明矣。象山陸氏曰。天理人欲之言。亦自不ニ是至論一。若天是理。人是欲。則是天人不レ同矣。此其原。蓋出ニ於老子一。樂記曰。人生而靜。天之性也。感ニ於物一而動。性之欲也。物至知知。而後好惡形焉。不レ能レ反レ躬。天理滅矣。天理人欲之言。蓋出ニ於此一。樂記之言。亦根ニ於老氏一。

聖人每以ニ道字一爲レ言。而及ニ于理字一者。甚罕矣。若ニ後世儒者一。偏捨ニ理字一。則無下可ニ以言一者上矣。其所下以與ニ聖人一相齟齬上者。何哉。曰。後世儒者。專以ニ議論一爲レ主。而不下以ニ德行一爲上レ本。其勢自不レ能レ不レ然。且以レ理爲レ主。則必歸ニ于禪莊一。蓋道以レ所レ行言。活字也。理以レ所レ存言。死字也。聖人見レ道也實。故其說レ理也活。老氏見レ道也虛。故其說レ理也死。聖人每曰ニ天道一曰ニ天命一。而未ニ嘗曰ニ天理一曰ニ人道一曰ニ人性一。而未ニ嘗曰ニ人理一。唯莊子屢言ニ理字一。不レ勝ニ其多一。彼蓋以ニ虛無一爲ニ其道一。故也。所以措レ詞自不レ能レ不レ如レ此。吾故曰。後世儒者以レ理爲レ主者。爲下其本從ニ老氏一來上也。

理義二字。亦相近。理是有レ條而不レ紊之謂。義是有レ宜而相適之謂。河流派別。各有ニ條理一。之謂レ理。水可レ舟。陸可レ車。之謂レ義。不レ修ニ其身一。而求ニ禱鬼神一。萬無ニ感應一者。理也。宗廟五祀可レ禱。而牛鬼蛇神一切淫祀之類。不レ可レ禱者。義也。推ニ若レ此之類一。可ニ以識ニ其別一矣。程子曰。在レ物爲レ理。

指レ氣而爲レ器乎。

佛氏以レ空爲レ道。老子以レ虛爲レ道。佛氏以爲。山川大地盡是幻妄。老子以爲。萬物皆生ニ於無一。然而。天地萬古常覆載。日月萬古常照臨。四時萬古常推遷。山川萬古常峙流。羽者毛者。鱗者裸者。植者蔓者。萬古常若レ此。以レ形化者。萬古常以レ形化。以レ氣化者。萬古常以レ氣化。相傳相蒸。生々無レ窮。何所レ見ニ夫所レ謂空虛者一邪。彼蓋出下於用レ智廢レ學。屛ニ居山林一。默坐澄心。所レ得一種見解上。而非ニ天地之內。天地之外。實有ニ斯理一。凡父子之相親。夫婦之相愛。儕輩之相隨。非ニ惟人有一レ之。物亦有レ之。非ニ惟有情之物有一レ之。雖ニ竹木無智之物一。亦有ニ雌雄牝牡子母之別一。況於下四端之心。良知良能。固ニ有於己一者上乎。非ニ惟君子能存一レ之。雖ニ行道之乞人一。亦皆有レ之。聖人品ニ節之一。以爲レ敎耳。非レ有レ强レ之。故中庸曰。君子之道。本ニ諸身一。徵ニ諸庶民一。考ニ諸三王一。而不レ謬。建ニ諸天地一。而不レ悖。質ニ諸鬼神一。而無レ疑。百世以俟ニ聖人一。而不レ惑。故若ニ聖人之道一。則非下徒徵ニ諸庶民一。考ニ諸三王一。建ニ諸天地一。質ニ諸鬼神一。無上レ所ニ悖戾一。大凡至ニ於草木蟲魚沙礫糟粕一。皆無レ所レ不レ合。若ニ佛者之說一。求ニ之天地日月山川草木民物諸彙一。皆無レ所レ驗。可レ知天地之間。畢竟是無ニ此理一。

理凡五條

理字與ニ道字一相近。道以ニ往來一言。理以ニ條理一言。故聖人曰ニ天道一曰ニ人道一。而未下嘗以ニ理字一命上レ之。易曰。窮レ理盡レ性。以至ニ于命一。蓋窮レ理以レ物言。盡レ性以レ人言。至レ命以レ天言。自レ物而人。而天。其措レ詞。自有ニ次第一。可レ見以ニ理字一屬ニ之事物一。而不レ係ニ之天與一レ人。或謂。聖人何故以ニ道字一屬ニ之

不下以レ無二二氏一爲上患。自二佛老始盛一以還。人主崇二奉之一者。不レ爲レ不レ多。然而。大崇二奉之一則大亂。小崇二奉之一則小亂。非レ若二吾聖人之道。不下能レ使二天下一日無一焉。故曰。有焉而不レ爲レ用。無焉而不レ爲レ損。

孟子曰。道若二大路一然。豈難レ知哉。所謂大路者。貴賤尊卑之所二通行一。猶二本國五畿七道。洎唐十道。宋二十三路一。上自二王公大人一。下至二於販夫馬卒跛奚瞽者一。皆莫レ不二由レ此而行一。唯王公大人得レ行。而匹夫匹婦不レ得レ行。則非レ道。賢知者得レ行。而愚不肖者不レ得レ行。則非レ道。故曰。若二大路一然。只在二於安焉與レ勉焉之別一而已。若二佛老之教。及近世禪儒之說一。高唱二空虛難レ憑之理一。好爲二高遠不レ可レ及之說一。非レ不二奇而可一レ喜。非レ不二高而可一レ驚。然奈下其非中通二乎天下一。達二乎萬世一。而不レ可二須臾離一之道上何。故欲レ辯下吾儒與二異端一之眞僞是非上。本不レ待レ費二多言一。只察下於其可二得而離一。與上不レ可二得而離一。可矣。

道體二子不二經見一。自二宋儒一發レ之。伊川以二陰陽無レ端動靜無一レ始爲二道體一。晦庵以下無レ聲無レ臭所二以然一之理上爲二道體一。而就二二家之說一論レ之。伊川之說。自庶二幾於一陰一陽之謂レ道之旨一。但不レ可レ立二道體之名一焉耳。然易以レ氣言。伊川以レ理言。則其說雖二甚似一。然意則異矣。若二晦庵之說一。於二聖人之書一。本無二斯理一。蓋淵二源老莊虛無之說一來。或曰。朱說本出下於易形而上者謂二之道一。形而下者謂二之器一之說上曰。此狃二聞朱說一。而誤二會其義一耳。譬二諸扇一。其生レ風。是扇之道。紙骨之類。是器。猶レ言二炎上是火之道。潤下是水之道一也。朱子之意以爲。扇之生レ風是器。其所二以生一レ風之理是道。非也。豈可二

道一。皆取二往來之義一也。又曰。道猶レ途也。由レ此則得レ行。不レ由レ此則不レ得レ行。所レ謂何莫レ由二斯道一也。及道也者不レ可二須臾離一也。是也。蓋取二於由レ此則得レ行之義一。惟以三其足二以往來一。故不レ得レ不三由レ此而行二矣。雖レ有二二義一。實一理也。又有下以二人之所一レ行而言者上。若二堯舜之道及三子者不レ同レ道等一。是也。又有下以二方法一言者上。若下大學之道。及生二乎今之世一而反中古之道上。是也。然皆因二通行之義一而假二借之一。故有二天道一。有二地道一。有二人道一。及異端小道百藝之末。皆得三以レ道言二之也。北溪曰。易說。一陰一陽之謂レ道。孔子此處。是就二造化根原上一論。大凡聖賢與レ人說レ道。多是就二人事上一說。惟此一句。乃是贊レ易時。說二來歷根原一。愚謂不レ然。謂二天人一道一。則可。爲二道字來歷根原一。則不可。易語是說二天道一。如下率レ性之謂レ道。及志二於道一。可二與適一レ道。道在レ邇等類上。是說二人道一。說卦明說。立二天之道一。曰陰與レ陽。立二地之道一。曰柔與レ剛。立二人之道一。曰仁與レ義。不レ可二混而一一レ之。其不レ可下以二陰陽一爲中人之道上。猶レ不レ可下以二仁義一爲中天之道上也。倘以二此道字一爲二來歷根原一。則是以二陰陽一爲二人之道一也。凡聖人所謂道者。皆以二人道一而言レ之。至二於天道一。則夫子之所二罕言一。而子貢之所三以爲一レ不レ可二得而聞一也。其不可也必矣。

道者。人倫日用當レ行之路。非二待レ敎而後有一。亦非二矯揉而能然一。皆自然而然。至二於四方八隅。遐陬之陋。蠻貊之蠢一。莫レ不三自有二君臣父子夫婦昆弟朋友之倫一。亦莫レ不レ有二親義別敍信之道一。萬世之上若レ此。萬世之下亦若レ此。故曰。道也者。不レ可二須臾離一也。是也。若二佛老之敎一。則不レ然。崇レ之則存。廢レ之則滅。有焉而不レ爲レ用。無焉而不レ爲レ損。古昔堯舜禹湯文武之時。世咸太平。民皆壽考。

論語集註引尹氏曰。用舍無レ與二於己一。行藏安二於所一レ遇。命不レ足レ道也。其意以爲。學問當レ言レ義。而命不レ足レ道。此不二深考一耳。蓋有二當レ言レ義處一。有二當レ言レ命處一。何者。出處進退在二於己一。言レ義可矣。若夫國之存亡。道之興癈。專繫二於天一。雖二聖人一。亦不レ得レ如二己之所一レ欲。故曰。道之將レ行也與命也。道之將レ廢也與命也。孟子曰。孔子得レ之不レ得曰レ有レ命。聖人亦固言レ命也。故或可レ言レ義。或可レ言レ命。其專言二命不一レ足レ道者非也。夫無二天爵一而人爵至。非レ義。不レ可レ受レ之也。有二天爵一而人爵從レ之。義也。當レ受レ之也。有二天爵一而人爵不レ至。命也。安レ之而已矣。此義命之辨也。伊川曰。賢者惟知レ義而已。命在二其中一。朱子曰。人事盡處。便是命。義命混合。頗欠二分曉一。蓋有レ義而無レ命者有矣。有レ命而不レ消レ言レ義者有矣。其曰三命在二義中一者非也。

集註又有下命稟二於有生之初一。非三今所二能移一之說上。夫所レ貴二乎學一者。以下其致レ知崇レ德。而能變中氣質上也。倘果若二其說一。則智愚賢不肖。貧富夭壽。皆一二定於受レ生之初一。而學問脩爲。皆無レ益二於己一。聖人之敎。亦徒爲二虛設一。弗レ思之甚也。書曰。惟命不レ于レ常。詩曰。保佑命レ之。自レ天申レ之。孟子曰。莫二之致一而至者命也。皆據二今日之所一レ受而言。非二一定而不レ移之謂一。孔子曰。畏二天命一。孟子曰。不レ立二乎巖牆之下一。若使丁命果爲二一定之數一。非丙今日之所乙能移甲。則奚足レ畏。亦奚不レ立二乎巖牆之下一。其說之不レ通如レ此。

道凡五條

道猶レ路也。人之所二以往來一也。故陰陽交運。謂二之天道一。剛柔相須。謂二之地道一。仁義相行。謂二之人

特甚矣。陳北溪字義曰。命一字有二二義一。有二以レ理言者一。有二以レ氣言者一。其說出二於考亭一。杜撰特甚。觀二其所レ謂理之命者一。即聖人所レ謂天道者。而獨於二聖人所レ謂命者一。推爲二氣之命一。故天道天命。混而爲レ一。而聖人所レ謂命者。反爲二命之偏者一。可乎。聖人既曰二天道一。又曰二天命一。則可レ知天道與二天命一自有レ別。北溪又謂。有二理之命一。又有二氣之命一。而氣之命中。又有二兩般一。嗚呼。聖人之言。奚支離多端。使二人難レ曉。若レ此邪。

何謂レ知レ命。安而已矣。何謂レ安。不レ疑而已矣。本非レ有二聲邑臭味之可一レ言。蓋無二一毫之不一レ實。無二一毫之不一レ盡。處レ之泰然。履レ之坦然。不レ貳不レ惑。當レ謂二之安一。當レ謂二之知一。孔子曰。丘之禱也久矣。亦此意。不レ可下以二見聞之知一而言上。伊川云。知レ命者。知レ有レ命而信レ之也。此看二命字一甚淺。所レ謂知レ命云者。處二乎死生存亡窮通榮辱之際一。泰然坦然。烟銷氷釋。無二一毫動レ心處一。而謂二之知一レ命也。知レ有レ命而信レ之。是不下待二君子一而後知上レ之也。

考亭又以謂。聖人不レ消レ言レ命。只爲二中人以下一說。非也。孔子說レ命處甚多。豈皆爲二中人以下一說レ之乎。孟子曰。孔子得レ之不レ得曰レ有レ命。而主二癰疽與二侍人瘠環一。是無レ義無レ命也。何以爲二孔子一。孔子亦曰。不レ知レ命。無三以爲二君子一也。孟子以レ此論二孔子一。孔子以レ此論二君子一。皆非下爲二中人以下一說上。其他聖賢自言レ命者。不レ可二枚擧一。宋儒皆委曲遷就。不レ知二其說之有一レ所レ不レ通。語曰。人不レ知而不レ慍不二亦君子一乎。中庸曰。遯レ世不レ見レ知。而不レ悔。惟聖者能レ之。是知レ命之境界。蓋學問之極功。君子之本分。非二中人以下之所一レ能及一也。謂二聖人不一レ消レ言レ命者。實非二聖人之旨一。

況以二虛字一爲二實字一。其誤大矣。所レ謂求二其說一而不レ得。從而爲二之辭一者也。

孔氏疏曰。命猶レ令也。令即使令敎令之意。蓋吉凶禍福。貧富夭壽。皆天之所レ命。而非三人力之所二能及一。故謂二之命一也。何謂二天之所レ命。以下其非二人力之所一レ致而自至上。故總歸二之于天一。而又謂二之命一。蓋以二天道至誠不レ容二一毫僞妄一也。

凡聖人所レ謂命云者。皆就二吉凶禍福死生存亡相形上一立レ言。蓋或吉或凶。或禍或福。或死或生。或存或亡。其所レ遇之幸不幸。皆自然而至。無レ可レ奈レ之何一。故謂二之命一。既謂二之命一。則有下不レ可レ不レ順二受之一之意上。又有下既定而不レ可レ逃之意上。故曰。畏二天命一。亦曰。愼二天命一。蓋爲レ此也。但盡二其道一而後至者。是命。倘一毫有レ所レ不二自盡一焉。則人爲爾。不レ可レ謂二之命一也。

晦庵太極圖解云。太極之有二動靜一。是天命之流行也。蓋依二周頌維天之命之詩一而言レ之。程子亦曰。天道不レ已。文王純二於天道一。亦不レ已。皆指二一陰一陽往來不レ已者一而言。尤非也。所レ謂命者。乃謂下上天監二臨人之善惡淑慝一。而降中之吉凶禍福上。詩曰。維天之命。於穆不レ已。其意蓋謂。天命二文王一。王二斯大邦一。延及二子孫一。永篤保レ之。故其下繼レ之曰。於乎不レ顯。文王之德之純。假以溢レ我。我其收レ之。駿惠二我文王一。曾孫篤レ之。可レ見詩意。總言二保佑命レ之自レ天申レ之之意一。本無二陰陽流行之意一。太甚分曉。

聖人既曰二天道一。又曰二天命一。所レ指各殊。學者當三就二其言一。各理二會聖人立レ言之本旨一。蓋一陰一陽往來不レ已。之謂二天道一。吉凶禍福不レ招自至。之謂レ命。理自分曉。宋儒不レ察。混而一レ之。盭二于聖經一

而知矣。雖若有二端。其實一理也。

天命凡十條

孟子曰。莫之爲而爲者天也。莫之致而至者命也。是天命二字正訓也。學者當以孟子之語爲準。而理會凡經書所說天命二字之義。自不至於失聖人之旨之遠矣。蓋天者。專出於自然。而非人力之所能爲也。命者。似出於人力。而實非人力之所能及也。天猶君主。命猶其命令。天者命之所由出。命者天之所出。故命比於天稍輕。故孟子以舜之相堯。禹之相舜。歷年多。施澤於民久遠。暨堯舜之子皆不肖。推歸之於天。以其專出於自然。而非人力之所能爲也。夫子以伯牛之疾爲命。蓋人之疾也。多皆己之所自致。唯若伯牛之疾。非其不能謹疾而有以致之。故曰。似出於人力。而實非人力之所能及也。此孟子之成說。當謹守之。不可復用後世紛々之說。

經書所連用天命二字。有以天與命並言者。有以天之所命言者。其以天與命並言之命。即性命之命。意重。若所謂五十知天命。及死生有命。孟子曰莫之致而至者命也之類。是也。其以天之所命言者。即與字之意。猶孟子所謂此天之所予我者之予字。意輕。中庸所謂天命之謂性。是也。猶曰天與之謂性。若以此命字作性命之命看。則意義不通。蓋文字本有實字。有虛字。性命之命是實字。天之所命之命是虛字。先儒謬以虛字作實字看。故有理命氣命之別。又有在天爲命。在人爲性之說。皆不知中庸之命字本虛字非實字故也。夫一命而立二義。甚無謂。

之間。四方上下。渾々淪々。充塞通徹。無內無外。莫非斯善。故善則順。惡則逆。苟以不善在於天地之間者。猶以山草植之于水澤之中。以水族留之于山岡之上。則不能一日得遂其性也必矣。夫人不能一日有以不善立于天地之間。亦猶如是。故善之至。無往而不善。惡之極。亦無往而不惡。善之又善。天下之善聚之。惡之又惡。天下之惡歸之。其禍不可測焉。天道之可畏可愼如此。而所謂善者。豈有形狀之可言乎。孔子曰。人之生也直。罔之生也。幸而免。善者非他。即直而已。蓋直則善。不直則惡。非有二也。宋儒謂。天專言。則謂之理。又曰。天即理也。其說落乎虛無。而非聖人所以論天道之本旨。蓋以有心見天。則流于災異。若漢儒災異之學是也。以無心見天。則陷于虛無。若宋儒天即理也之說是也。學者苟恐懼脩省。以直道自盡。無有一毫邪曲。而後當自識之。非可言語喩也。

或曰。一陰一陽往來不已之理。或可得而知焉。至於維天之命於穆不已之理。則不可得而聞也。一天道。而有此二端者。何哉。曰。非有二端。一陰一陽往來不已者。以流行言。維天之命於穆不已者。以主宰言。流行猶人之有動作威儀。主宰猶人之有心思智慮。其實一理也。然論天道之所以爲天道。則專以主宰而言。書經易象孔子所謂天道者是也。故中庸引維天之命之詩。而釋之曰。蓋曰天之所以爲天也。可見雖若有二端。然至論天道之所以爲天道。則專在於主宰也。夫易之爲道。陽爲善爲淑爲君子。陰爲惡爲慝爲小人。君子觀陰陽消長之變。以審進退存亡之理。則得合於天心。倘否。則不免逆于天心。即天之所以爲主宰者。亦可從

極而太極。適聖人未說到一陰一陽往來不已上面焉耳。曰。此想像之見耳矣。夫天地之前。天地之始。誰見而誰傳之邪。若世有人。生於天地未闢之前。得壽數百億萬歲。目擊親視。傳之後人。互相傳誦。以到于今。則誠眞矣。然而。世無生於天地未闢之前之人。又無得壽數百億萬歲之人。則大凡諸言天地開闢之說者。皆不經之甚也。所謂淸者升爲天。濁者降爲地。邵康節以十二萬九千六百年爲一元。及天開於子。地闢於丑。人生於寅等說。皆漢儒以來。狃聞戰國雜家讖緯諸書。迂怪不經之故說。互相附會耳。均之佛氏所謂無始。老氏所謂無極之前。亦皆妄誕而已矣。夫四方上下曰宇。古往今來曰宙。知六合之無窮。則知古今之無窮。今日之天地。即萬古之天地。萬古之天地。即今日之天地。何有始終。何有開闢。此論可以破千古之惑。但可與達者道。不可與癡人道。或謂。既不可謂天地有始終開闢焉。則又不可謂無始終開闢。曰。既不可謂天地有始終開闢。則固不可謂無始終開闢。然於其窮際。則雖聖人不能知之。況學者乎。故存而不議之爲妙矣。

一陰一陽往來不已。之謂天道。其義甚明矣。子貢何以謂不可得而聞乎。蓋於一陰一陽往來不已之理。則學者或可得而聞也。至於維天之命於穆不已之理。則非聰明正直仁熟智至者。則不能識之。所謂維天之命於穆不已。即書曰。惟天無親。克敬惟親。又曰。天道福善殃淫。易曰。天道虧盈而益謙之意。孔子曰。天生德於予。桓魋其如予何。又曰。獲罪於天。無所禱也。亦是也。是子貢所謂不可得而聞也者。蓋若此。夫善者。天之道。故易曰。元者善之長也。蓋天地

天道有ニ流行一。有ニ對待一。易曰。一陰一陽之謂レ道。此以ニ流行一言。立ニ天之道一。曰陰與レ陽。此以ニ對待一言。其實一也。流行者。一陰一陽往來不レ已之謂。對待者。自ニ天地日月山川水火一。以至ニ於晝夜之明闇寒暑之往來一。皆無レ不レ有レ對。是爲ニ對待一。然對待者。自在ニ流行之中一。非ニ流行之外又有ト對待也。

何以謂ニ天地之間一元氣而已一耶。此不レ可下以ニ空言一曉上。請以ニ譬喩一明レ之。今若以ニ版六片一相合作レ匣。密以レ蓋加ニ其上一。則自有レ氣盈ニ于其內一。有レ氣盈ニ于其內一。則自生レ白醭。既生ニ白醭一。則又自生ニ蛀蟫一。此自然之理也。蓋天地一大匣也。陰陽匣中之氣也。萬物白醭蛀蟫也。是氣也。無レ所ニ從而生一。亦無レ所ニ從而來一。有レ匣則有レ氣。無レ匣則無レ氣。故知天地之間。只是此一元氣而已矣。可レ見非ミ有レ理而後生ニ斯氣一。所レ謂理者。反是氣中之條理而已。夫萬物本ニ乎五行一。五行本ニ乎陰陽一。而再求下夫所ミ以爲ニ陰陽一之本上焉。則不レ能レ不ミ必歸ニ之於理一。此常識之所下以必至ニ於此一不上能レ不レ生ニ意見一。而宋儒之所ミ以有ニ無極太極之論一也。苟以ニ前譬喩一見レ之。則其理彰然明甚矣。大凡宋儒所レ謂有レ理而後有レ氣。及未レ有ニ天地一之先畢竟先有ニ此理一等說。皆臆度之見。而畫レ蛇添レ足。頭上安レ頭。非ニ實見得者一也。

易曰。天地之大德曰レ生。言生生不レ已。即天地之道也。故天地之道。有レ生而無レ死。有レ聚而無レ散。死即生之終。散即聚之盡。天地之道一ニ於生一故也。父祖身雖レ沒。然其精神則傳ニ之子孫一。子孫又傳ニ之其子孫一。生生不レ斷。至ニ于無窮一。則謂ニ之不ト死而可。萬物皆然。豈非ニ天地之道有レ生而無ト死耶。故謂ニ生者必死。聚者必散一。則可。謂ニ有レ生必有レ死。有レ聚必有ト散。則不可。生與レ死對故也。

或以爲自ニ天地既闢之後一觀レ之。固一元氣而已。若自ニ天地未レ闢之前一觀レ之。只是理而已。故曰。無

語孟字義卷之上

予嘗敎二學者一。以下熟二讀精三思語孟二書一。使三聖人之意思語脉。能瞭二然于心目間一焉。則非三惟能識二孔孟之意味血脉一。又能理二會其字義一。而不上レ至二于大謬一焉。夫字義之於二學問一。固小矣。然而。一失二其義一。則爲レ害不レ細。只當下一一本二之於語孟一。能合二其意思語脉一。而後方可上。不レ可三妄意遷就。以雜二己之私見一。所レ謂方枘圓鑿。北レ轅適レ越者。固不レ虛矣。故著二語孟字義一篇一。以附二諸二書古義之後一。其詳有二古義在一。今茲不レ贅。天和三年歲在レ癸亥五月。洛陽伊藤維楨謹識。

天道凡七條

道猶レ路也。人之所二以往來通行一也。故凡物之所二以通行一者。皆名レ之曰レ道。其謂二之天道一者。以二一陰一陽往來不下己。故名レ之曰二天道一。易曰。一陰一陽之謂レ道。其各加二一字於陰陽字上一者。蓋所三以形二容夫一陰而一陽。一陽而又一陰。往來消長。運而不レ己之意一也。蓋天地之間。一元氣而己。或爲レ陰。或爲レ陽。兩者只管盈二虛消三長往四來感五應於兩間一。未二嘗止息一。此即是天道之全體。自然之氣機。萬化從レ此而出。品彙由レ此而生。聖人之所二以論下天者。至レ此而極矣。可レ知自レ此以上更無二道理一。更無二去處一。考亭以謂陰陽非レ道。所二以陰陽一者是道。非也。陰陽固非レ道。一陰一陽往來不レ已者。便是道。考亭本以二太極一爲二極至一。而以二一陰一陽一爲二太極之動靜一。所下以與二繫辭之旨一相戾太甚上也。

目錄

語孟字義目錄

卷之上

卷之下

古今學變は古今學問の變遷を論ぜるものにして、奥田士亨が蘭嵎と共に相謀りて校刻する所なり。卷末に「寛延三庚午新刊」とあり。首めに東涯の序あり。云く、

三代聖人の道、變じて今日の學となる。其由來する所のもの漸なり。豈に唯々一朝一夕の故ならんや。漢に一變し、宋に再變し、千有餘歳の間に潜移默奪して、以て今日に至る。而して今日の學、復た古の學と同じからず。云々。

是れ亦東涯が家學の歷史的位置を明かにせんが爲めに著はす所にして、享保七年を以て脱稿せり。訓幼字義は國字の書にして、東涯が享保二年を以て作爲する所に係る。首めに自序あり。云く、

筆を丁酉の夏初に起して、稿を臘月の上澣に脱す。類を爲すこと凡そ三百三十六。云々。

卷末に樋口公英の跋あり。始めて此書を刊行せしは寶暦九年なり。

東涯著述極めて多く、貝原益軒、新井白石等と伯仲の間にあり。其子東所の古義堂遺書總目敍釋によるに、實に五十三部二百四十一卷あり。其經學に關するものを擧ぐれば、辨疑錄四卷、古學指要二卷、學問關鍵一卷、天命或問一卷(寫本)、復性辨一卷、古今學變三卷、經史論苑一卷、經學文衡三卷、經史博論四卷、訓幼字義八卷、閒居筆錄三卷(寫本)、周易經翼通解十八卷、紹述先生詩文集三十卷、鄒魯大旨二卷等となす。今學問關鍵、天命或問、復性辨、古今學變、訓幼字義の五部を收む。

學問關鍵は、國字を以て家學の大意を敍述せるものにして、東涯の歿せる翌年即ち元文二年を以て發行せり。首めに菅原家長の序あり。云く、

其存日嘗て此書を梓するを命ず。未だ成らずして沒す。

終りに奧田士亨が跋あり。云く、

嗚呼此書最も晚出に系る。宴に忽にすべからず。苟も其門を得て入らんと欲するもの、關鍵に由らずして可ならんや。

此書蓋し享保十五年の著作に係る。故に士亨以て最も晚出とするなり。

天命或問は寶永三年の著作に係る。序跋なし。

復性辨は復性說を駁せる三篇の文章を輯めて一卷となせるものにして、卷末に平維章の跋あり。享保十五年の上木に係る。

るなり。

仁齋の歿後最も忠實に彼れが學術を繼承し、蘐園學派に對して隱然一敵國の勢を成すものを伊藤東涯となす。東涯は仁齋の長子なり。名は長胤、字は原藏、東涯は其號なり。盖し其居堀川の東涯にあり。因りて自ら號とす。又慥々齋と號す。諡して紹述先生といふ。東涯幼少にして家庭の教育を受け、長じて博覽强記、家學を主張するを以て任となし、蔚として一大家を成せり。

東涯嘗て紀伊公より五百石を以て召されたれども、辭して仕へず。仁齋と同じく終身民間にありて講學に從事せり。當時物徂徠の如きは、旗皷堂々門戶を張り、仁齋を打擊して以て己れが見地を立つるに急なり。東涯之れを知りて殆んど知らざるものゝ如く、冷々淡々、彼れが爲めに動搖せられざること、猶ほ岩石の狂瀾怒濤中に屹起するが如し。是れ本と自家の主義本領ありて、內に堅固なる信念を抱くにあらざるよりは能はざる所なり。若し東涯を以て仁齋に比せば、頗る其相違あるを知るべし。仁齋は識見超邁にして、自ら創業の才たり。東涯は識見迥に仁齋に及ばずして、博學の點に於ては確に仁齋を駕して上ぼれり。東涯は仁齋の學說を紹述すべき地位に居りて恰も之れに適せること、殆んど先天的に規畫せられたるものゝ如し。

東涯寛文十年(西曆一千六百七十年)四月廿八日に生まれ、元文元年(西曆一千七百三十六年)に卒す。享年六十有七。加藤氏を娶り、男子三人あり。其中二人は夭死し、獨り末子の善韶家學を繼承して起り、堀河の流派をして綿々として絕えざらしむ。

語孟字義は門人林景范（字は文進）が寶永二年を以て刊行する所に係る。卷末に「大學非ニ孔子之遺書一辨」及び「論ニ堯舜既沒邪說暴行又行一」の二篇を附載せり。仁齋の孫東所の古義堂遺書總目叙釋に云く、「此書有ニ紹述先生校本一。今收ニ于家一。以俟ニ他日之改刻一」と。又注して云く、「定本發揮及字義。共有ニ坊間贋本一」と。林景范の刻本を以て贋本となすに似たり。姑く疑を存す。

童子問は上卷五十九章、中卷七十七章、下卷五十三章より成り、凡そ百八十九章あり。林景范が跋に「至下平素所ニ講明一人倫日用之工夫上。則畢備ニ于此書一」と。眞に堀河派の敎科書といふべし。童子問と語孟字義とは仁齋が學說を知らんと欲するものには、最も缺くべからざる書なり。湯淺常山の文會雜記卷之一下此二書を論じて「一生の學問見ゆるなり」と云へり。洵に然り。此書の堀川派に於けるは、辨道、辨名の蘐園派に於けると異ならざるなり。香川修德が孟子古義の跋に云く、

去歲韓人來聘し、歸舟を備後鞆津に維ぐ。先生の次子長英、時に福山の記室たり。接伴の事に與る。書記成夢良なるものあり。長英に餽して曰く「久しく承る、尊考仁齋先生鬱として日東の儒宗たり。道德文章世の爲めに倚ばる。冀くは遺文を覽ることを賜はゞ、大に此行の希獲たらん」と。遂に童子問を請ひ得て珍重して歸る。

乃ち知る、童子問の蚤に海外に傳はることを。此書享保五年の刊行に係る。

仁齋日札は語錄躰の書にして凡そ七十四章より成る。其中名言佳句少しとせず。是れ本と未定稿なるを甘雨亭叢書中に收載せり。仁齋が學說を知らんと欲するもの、決して此書を度外視すべからざ

仁齋の名望日に高く、遠邇に達し、來たり學ぶもの愈々多く、其數凡そ三千餘人の多きに及べり。諸州の人國として至らざるなく、唯、飛彈、佐渡、壹岐、三州の人の門に及ばざるのみなりきといふ。門人の中最も著明なりしは、東涯、蘭嵎の外並河天民、中江岷山、北村篤所、小河立所等の諸氏なりき。仁齋寶永二年（西暦七百五年）痾を病み、三月十二日を以て家に卒す。享年七十有九。洛西小倉山二尊院に葬る。彼れ初め緒方氏を娶り、後瀨崎氏を娶り、五男三女あり。長胤、長英、長衡、長準、長堅、是れを其五男となす。

仁齋資性寛厚和緩、人其疾言遽色を見ず、城府を設けず、邊幅を修めず。未だ嘗て古怪迂僻矯激の行をなして、以て駭異を取らず、人少長となく、之れに接するに誠を以てし、厭怠の色なし。其大義の關する所に及んでは、之れを誘ふに萬鍾を以てすと雖も、奪ふべからざるなり。是を以て湯淺常山、物徂徠、太宰春臺等皆其德行に推服せり。仁齋の交遊せる所は井上養白、安東省菴、宇都宮遁菴等にして、古人に於ては最も宋の范文正公、程明道及び元の許魯齋の三人を景慕せり。仁齋の一生を瞥見するに、一世の師範を以て自ら任じ、卓として群儒の表に拔くの態度、整々堂々、眞に曠世の偉人と稱するに足る。

仁齋の著書は論語古義十卷、孟子古義七卷、大學定本一卷、中庸發揮一卷、語孟字義二卷、童子問三卷、古學先生文集六卷、古學先生詩集二卷、古學先生和歌集一卷、仁齋日札一卷等となす。今語孟字義、童子問及び仁齋日札の三部を收む。

於てか始めて門戸を開いて生徒を敎授し、其塾を古義堂と稱す。來たりて學ぶもの少しとせず。信ずるものは以て間世の偉人となし、疑ふものは以て陸王の餘說となし、毀譽褒貶、紛々として起ると雖も、彼れ恬として顧みず。專ら往を繼ぎ來を開くを以て自ら任ず。時に年三十七八。始めて論孟古義及び中庸發揮を草定す。古學の鼓吹是に於てか其端緒を開く。

延寶元年五月京師大火ありて、仁齋亦其災に遭ひ、百物蕩燼す。彼れ他物を顧みず、唯々古義一部を携へて逃れ、京極大恩寺に僑居す。是れより先き母膈噎を憂ふ。仁齋奉養至らざるなし。引いて三年に至る。時に肥後侯（細川越中守）祿千石を以て之れを招く。然れども侍養人なきを以て之れを辭す。是歲母遂に僑居に瞑す。瞑するに臨んで合掌禮をなして彼れに其孝養の厚きを謝せりと云ふ。明年九月父長勝亦卒す。僅に二年の間怙恃共に失ふ。仁齋乃ち喪に服すること前後通じて凡そ四年なりといふ。

延寶四年服除く。十月始めて論語を開講し、是れより每月三八日を定めて、論孟中庸の三書を講述し、反覆輪環終りて復た始まり、傍ら易、大學、近思錄等の書に及ぶ。此の如くにして敎授倦まざるもの四十餘年、講ずれば必ず直に主意を明かにし、間々己れが所見を述べて、務めて學者受用の地をなさんことを期し、末義の如きは之れを硏究せず。其聖賢の言を述ぶること恰も己れが言を述ぶるが如く、熟達至らずといふことなし。而して其聲調は自然其儘にして、些の裝飾を加へず。故に聽くもの反りて警發する所多し。

古來云此水。一夜作二平湖一。俗說尤難レ信。世傳詎亦迂。百川流不レ已。萬谷滿相扶。天下滔々者。應レ憐異敎趨。

又園城寺の絕頂に登り賦して云く。

山行六七里。往到二杳冥中一。船遠間々去。天長漠々空。嶺環郡落北。湖際寺門東。男子莫二空死一。請看神禹功。

時に彼れ又延平答問を讀み、反覆講究、紙爲めに爛敗するに至る。是れより心を伊洛の學に用ひ、專ら性理大全、朱子語類等の書を讀み、日夕硏磨、其精奧に至る。然るに俄にして羸疾に罹り、驚悸寧からざるもの、殆んど十年に及ぶ。且つ彼れが家本と商賈にして、親族亦道學の貴きを知らず。彼れが志を以て利を得るに迂なりとなして皆之れを沮んで曰く、「學問は是れ彼邦の事なり、此邦にありては固より無用に屬す、假令ひ之れを能くするも、售れ易からず、醫をなして生產をなさんには若かず」と。督促甚だ苛なり。仁齋從はず。是時に當りて家日に衰微して底止する所なからんとす。是を以て其志を沮むもの愈々止まず。然るに仁齋の志確乎として變ぜず。千辛萬苦を經て始めて其志の如くするを得たり。

仁齋始め宋儒性理の學を尊信せしが、後其孔孟の學に乖くに疑あり。參伍出入、沈吟年あり。遂に恍然として自得し、畧々所信を確定するを得たり。乃ち謂へらく、大學の書は孔氏の遺書にあらず、又明鏡止水、冲漠無朕、體用理氣等の說は皆佛老の緖餘にして、聖人の旨にあらざるなりと。是に

日本倫理彙編卷之五

文學博士　井上哲次郎
文學士　蟹江義丸　共編

古學派の部　中

序説

古學派は山鹿素行、伊藤仁齋、物徂徠の三氏によりて代表せらる。素行は武士道を以て秀で、仁齋は道德を以て勝れ、徂徠は文章を以て顯はれ、三人三樣の特色あり。仁齋姓は伊藤氏、名は維楨、字は源佐、仁齋と號し、又古義堂と號す。居る所の堂の前に海棠一株あるによりて又棠隱とも號す。私に謚して古學先生と稱す。京都の人なり。父名は長勝、材木を鬻ぐを以て業となし、長澤屋七右衛門と稱す。母は里村氏、男三人あり。仁齋は即ち其長男なり。仁齋寛永四年(西暦六百二十七年)七月二十日を以て堀河の宅に生まる。幼にして深沈競はず、尋常兒子に異なるものあり。十一歲にして初めて師に就いて大學を讀み、治國平天下の章に至りて曰く、「今の世亦此の如き事を知るものあらんや」と。十九歲の時父に從ひて琵琶湖に遊び、詩を賦す。云く、

日本倫理彙編卷之五目錄

古學派の部 中

伊藤仁齋

伊藤東涯

文學博士　井上哲次郎
文學士　蟹江義丸　共編

日本倫理彙編

古學派の部（中）

東京　育成會發兌